

【日記翻刻】 奥田八二日記（1984・86年）

坂井，智明
元福岡市職労執行委員

千種，幹子
元福岡県立図書館課長

城島，泰伸
元福岡県遠賀福祉事務所所長

藤岡，健太郎
九州大学大学文書館：教授

<https://doi.org/10.15017/4372245>

出版情報：奥田八二日記研究会会報．6，pp.1-347，2021-03-31．奥田八二日記研究会(九州大学大学文書館内)

バージョン：

権利関係：

【日記翻刻】

奥田八二日記（1984・86年）

翻刻 坂井 智明（1984年）

千種 幹子（1986年）

城島 泰伸（1986年）

校訂 藤岡健太郎

凡 例

1. 1986年日記の原文は縦書きであるが、横書きに直した。
2. 漢字の旧字体および異体字は固有名詞や漢詩の引用等を除き、常用漢字体または印刷標準字体に直した。また原文に「𠩺」と記されたものはすべて「經」とした。
3. 明らかな誤字・脱字については適宜修正した。疑問のあるものについては「ママ」を付した。判読できなかつたものは「^(不明)□」とした。
4. 踊り字のうち「くの字点」は文字に直して表記した。
5. 原文の振り仮名はそのままとした。
6. 原文では句点と読点が明確に判別できない書き方がなされているため、本翻刻においては文脈等から適宜句点・読点を判断した。
7. [] で記されたものは原文の記述である。
8. 日記本文記入欄以外に記入されたものは【欄外記入】とし、各日の末尾に掲載した。各巻末等に記載された記事については【「〇〇欄」への記載】とした。
9. 原文中に差別用語等がみられるが、歴史資料としての意義に鑑み、すべて原文のとおりとした。
10. 日記に貼付または挟み込まれている新聞記事等については、その記事名・掲載紙の情報を【 】で記し、文面については掲載しないこととした。
11. 翻刻は原則として日記全文を対象としたが、研究会の判断により省略した部分がある。
12. 【 】内は研究会による註記である。

1984年

新年にあたって

1月19、20日の頃、九州、東京など全国的に十何年ぶりといわれる大雪に見舞われて交通機関が止まった。私はハワイに出張していた。21日（土）の13時55分成田着予定のホノルル発の飛行機が成田から来て折返すことになっていたらしく、それが来ないのでホノルル発が8時間余もおくれてしまった。雪害という言葉があるが、雪のために大いに困る人が多いわけだ。とばない便のためホテルに一日余分多く滞在させられるなどそれである。雪をうらむわけにはいかない。雪は花と同じくめでる対象でもある。困りものでありながらその中に自分をおく以外にないのが雪である。虚子編新歳時記（三省堂）から気に入った句をいくつか拾ってみる。

大雪や婆々ひとり住藪の家	芭蕉
門の雪白とたらひのすがたかな	嵐雪
ながながと川一筋や雪の原	凡兆
かさなるや雪のある山只の山	加生
たたずめば猶ふるゆきの夜路かな	几董
いくたびも雪の深さを尋ねけり	子規
雪折も聞えて暗き夜なりけり	蕪村
雪晴の空に浅間の煙かな	虚子

全く豪雪にさからっていない句である。雪害とか雪によって受ける損害というけれども、たいてい人間が自分の勝手によって、雪にさからって事をなすために生ずるものではないか。雪にさからわないで生きてゆくことはできないものか。ハワイに行って常夏の国でいいですわねという、現地の人には肯定しつつも、やはり育った日本の四季は捨て難い、次に何がという期待がある、移りかわりが感じられるという。句は移りかわりの中に自分を置いて、気持を表現しようとする人間の謙虚さ、人生への見つめが感じられる。つねに対象と自分を細心に点検、観察、反省しようとの態度がうかがわれる。私は句をやらないが、句をたしなむ人、たしなむ心が尊いと思う。ゆとりがあったら、句をひねってみたい、墨絵を習ってみたいとどれほど思ったことか。大学時代の終りの頃2～3年間は研究室でとっていた日経新聞にのる週一回の短歌俳句を切り抜き、その中のいいのに印をつけ保存したこともあったが、みるみるうちに切抜きがたまってしまうほどに月日のたつのが早かった。それほど自己反省の時間がなかったともいえる。しかし、大雪は大雪でいいではないか。車は無理して走らず、雪に従う気持で運転し、できねばしないというくらいで生きてらどうかと思ったりした。

【「1月のスケジュール」欄への記載】

1月の終りに、大名マンションを引き払って輝国に戻る。12月末までに改築工事ができあがれば一彦ら子供達が来られたのに、一ヵ月おくれることになった。カネがかかった割には改良されたとはいえないが、ましになったろう。引越し作業には私はタッチせず皆さんにさせていただくことになる。その後の片付けが大変だろう。徐々に気永にやるしかない。そのほか、不意の訪問者、電話の応対など今後の問題が残りそうな気がする。知事公舎に入ったとしても問題は残らないとはいえないが、輝国の方が問題は多かるう。頭痛の種である。今でも藤江君がいてくれるのでかなり助けられている。彼も結婚し、世帯をもたねばならぬ身である。いつまでもというわけにはいかない。彼なりの道を今模索している。決ったら代わりを私自身探さねばならない(1月25日記)

1月1日(日)

初詣で宮崎宮、香椎宮、牧坂宅訪問

文句のつけようのない気分爽快天気快晴の元旦を迎えることができた。マンションでほとんど準備らしいこともなく迎えたという点で環境が正月らしくないため、正月気分は特になかった。シメカザリや三方にのせた鏡餅、着物などそれらしいものはない。わずかに小さな鏡餅を重ねて盆の上へのせ、キャビネットの一寸あいた場所に置き、若干の煮物など整えたにすぎぬ。新聞は例によってどっさり来た。88ページというが、読んでみようと思ったページは全くなかった。新聞マンが休まねばならぬし、月ぎめで料金を取っているので、何かを印刷して届けないと読者感覚が崩れるだろうから、年末夕刊の休刊、元旦、2日の夕朝刊の休刊など合わせて88ページとしたのであろうが、実際無駄なことではないだろうか。配達制だからこういうことになるのだが、配達を維持しながら毎月の料金を少しずつ休刊分だけ差引いた料金としたらどうなんだろう。ひとのことならさんざん批判するマスコミが自分のことになるとひとに迷惑をかけようが平気である。正月早々マスコミ批判になったが、思ったこと一くさり。

1月2日(月)

諸岡父子、川原、中島敏子氏ら来訪

お客さんが朝からあつてごったがえした中に、昨年の選挙のとき諸団体対策部を芳井伸明氏とともに担当してお布施事件に関係した諸岡秀輔氏が息子一家をつれてきていた。一度は合ってその節の心労をねぎらっておこうと思っていたのだが、訪ねてきてくれてよかった。この人は鶴崎県政時代から私も面識があったのだが、選挙中は積極的に選挙事務所にかかわって活動してくれた。あの時の印象と今日のそれとくらべると今日は大変若く見えた。今後は奥田後援会でやろうとの気構えをもっている。とことんやろうという気がらしい。ただお布施事件にかかわった事があまりにも知られているので、しばらく表立って活動

しにくかろう。今年はどう展開するか知れないが、人事がうまくいくようになったら、諸岡さんいろいろ適材を配置することができるだろう。島津氏が来ていたので、営林署（鳥取）にいる脇元が県に来てくれたらどうだろうときいてみた。林野庁の意見などきいてみたらうまくいくかも知れないですねということであった。何かそういう人事を自由に考えてみる、空想の楽しみができたのが今年の特徴であろう。

1月3日（火）

森祐行氏が昨年12月17日に萩の宮山荘でおこなわれた旧県民の会の忘年会の写真を送ってきた。思えば写真の整理が全く不十分である。あとからあとへとどんどん写真がくる。知事をしていると、それはそれはどんどん写真がたまる。ふつうの生活の2倍も3倍も被写体になるケースがあるのである。その意味では2倍も3倍も忙しいのではないか。今は写真の整理は藤江君にまかせてしまっている。近頃写真の裏には日付だけは入れておくことにしている。写真といえば昨年8月末に書写で小学校の同窓が集ってくれた時、岸川君が六年生の時の写真を焼増ししてもって来てくれた。あれは私の写った一番古いもので、実に珍しい。有難かった。ただ新聞や著書用に、昔のアルバムの一部をはぎ取って作ったら、復元して貼りつけることを怠るのでそれら一番よいものがかえって散逸してしまう。気をつけなければならないからである。萩の宮山荘に来たのは私夫妻、招集者中西、福留、八丁、菅原、湯口、徳山、小幡、棟安、藤江、森祐行、木村、斎藤、立川、遠藤、それに始めての女性某がいた。アルバムを自分で心ゆくままに作りかえてみる時間があったらと思う。今後もおそらくそういう時間はないのではないだろうか。いつも心のすみでひっかかっている事なんだが。

1月4日（水）

薬業新年祝賀会

県庁に行くとは年始のあいさつがはっきりなし。名詞に金色の文字がすりこんであるのも少くない。こちらからは一々名刺をあげなくてもよいと秘書室がいつてくれた。午前中庁議、記者会見、知事訓示とつづいたが、新年の抱負を披露する要があったものの、とり立てて指摘できることもない内容になってしまった。だが、人事の刷新、県民総立ち、エモーション、リーズン、アンドハートという言葉が一寸した話題を呼んだらしい。職員にとっては人事といえばピリッと緊張を呼ぶ言葉のようだ。記者会見のとき県民総立ちとはどういう中味をさすのかとの質問があり、エモーション云々はどういう意味か何故に英語なのかとの疑問が一般職員から出ているようだ。ある人には説明したが、わからないから注目をひいたのでそれだけでも効果があったという人がいたこともあって、一般には敢て説明しなかった。ただ県民総立ちについては、言うべくして説明はしにくいものだと思った。県行政で何か問題が片付くように思ってもらおうと困る。まず個人が、そして地域が、グループが、さらには各自治体がというふうに自立、自助の努めがあり重なってゆき、そこにさらに必要な事項につい

て県行政がのり出していく、そういう形になるしかないとの意味である。

1月5日(木)

福岡商工会議所年賀会

戸畑、西日本工業倶楽部年賀会

有馬直方市長 森山大野城市長

近見久留米市長 滝井田川市長

塚本甘木市長

青空に雲が浮ぶ。外の風は冷いに違いないが、窓越しにみると暖かそう。瑞雲というのは今日のようなのをいうのではないだろうか。今日も年始客が時間のあいまを縫うように続いた。今年甲子の年で十干十二支の首が揃った年である。今日の瑞雲はこの揃っためでたさを表徴しているようでもある。昨日は大坪、中川の二人がどちらも奥さん同伴で夜おそくまで大名にあいさつに来て話し込んで行ったという。奥さん同伴ならその旨前もって知らせてくれておればよかったのと思う反面、二人ともかなり泥酔していた模様で、その旨山ノ上ホテルに藤江君から電話があった。林県議らとマージャンをしていたところだった。二人が退出するまでは帰宅しない方がいいということのようだったので、夜もおそくなるし、森山君とホテルに泊ることにした。酒のみには酒のみの気持があるだろうが、当方その気になれず、くどくど自分の主張自慢ったらしいことをくりかえすので、聞きたくもない。年末にもこの二人が同じく酔ってやって来て家族閉口させられたので、こんどは私が帰宅しなかったわけ。酒なしに話すとみのりのあることも話せるのに、残念なことだ。まだ新年の気分が拭えない一日だった。福岡と北九州の二つの実業界の新年祝賀会に出席したが、財界人は私にまだ重すぎる。

1月6日(金)曇

新年祝賀会 労働4団体との懇談 学文の会新年あいさつ

今日は各界の新年会が目白押しで午後はきりきり舞いさせられた。そのしんがりに労働4団体との新年懇親会があった。労福協というのが正確だったろうか。県の労働部長らも出席してニューオータニで行われた。総勢10人ほど、県評の岩崎、同盟の岡本、中立の名古屋ら事務局長クラスの人しか面識がなかった。私は県議会におけると同様、県民党的に、4団体に対し県民として対応すること、従って共通の要求運動を提案すること、メーデーは統一してやれないかということ、このような懇談会を(同盟では福岡産労懇を提案しているが)年に2~3回はやろうということを発言しておいた。産労懇については、経営側がまだ私に警戒している向きもあって形式的には直ちに実現しないだろうが、非公式であればポチポチやれるのではないかと労働部長がいていた。みんな一致したことは、伊藤労働部長がいうように、福岡県は大県とほいうものの、そして労働県とほいうものの、労働問題県だとい

う方が当たっている、だから、労使同じテーブルについて、共通の問題だけでも解決できるように今後努力すべきだということであった。今後に期待されるが、私としてはとくに、メーデーを統一してくれることが一番だと思っている。

1月7日（土）曇

年賀会 博多織、造園業、管工事、軽印刷業

空井義観氏と会談（ガーデンパレス）

秋枝蕭子氏 初日の出無窮の地軸肅然と
同原児 元朝や白寿の佳日祝ぐの幸（数え99才）
中島敏子氏 ぎこちなき手つきにラットを飼育せし事ありき
暦に子の年迎ふ新らしき年を迎へてけさの空見あげぬ
一人生きてぞゆかむ実験のマウスの飼育浅かりき
日のよみがえりくる子年元旦 寿子
小林あや子氏 忌を修したる気のゆるみ隙間風
広沢太郎兵衛氏 バイカルの湖より鵬程幾千料ようこそ
来たぞ出水鶴群
身じろがず何かを見張る父の鶴
雛の給餌にせわし母鶴
おゝらかに初日昇りぬこの年も倣えとのごとあかあか燃ゆる 雲切子
黒田了一氏 六法に愛とロマンを求めたる
若き日の夢なお捨てかねつ
三村正恵氏 すがしきや乙女鐘つく初詣り
瑞気湧く山また山や初日出
原田 繁氏 「生きていることは素晴らし」遠き日南京戦の夢に思えり
徳田吉松 ようやくに一つ祝いし雑煮かな

【欄外記入】

賀状の中から

1月8日（日）曇

ライオンズ東尾投手受賞祝賀パーティ

「観自在とは、世間の多くの人々（衆生）から観られつつ、多くの人々を観、そして救う働きが自由自在であるということ指しており、それは根源的な叡知を体得した者の働きである」（岩波クラシックス、中村元、紀野一義訳註「般若心経、金剛般若経」P.19）つづいてこう書いてある。「是非憎愛すべてなげうてば、汝に許す生身の観自在たることを・・・」観自在は、特別な人格などではなく、すべての人々が具えている働きであり、我執をすてて多

くの人々の中に生きようと願い、足を踏み出すとき輝きあらわれて来る」と。
菩薩はボーディサットヴァの音訳、釈尊の前生における呼び名として……用いられたもの……すべての人間は仏たり得ると確信し、さとりを求めて努力する者をすべて菩薩と呼びならわすようになってからは、求道者一般を指す言葉になった、ともある(P.20)。何だか妙にこういうくだりが目につき印象に残る。仏道というものに関心が向くこの頃である。仏像の13面とか千手とか釈尊の顔とか何だか理解できそうに思える。時間が許せばこれら用語から入門し、いろいろ書物、百科事典など読んでみたいものだ。般若心経の空の思想もわからぬではないが、強調しすぎて現実から遊離してしまうような気もする。

1月9日(月)晴

十日エビス

出勤の車が千代町でいつものコースに入らず妙見の方へ大きく迂回した。十日恵比須で3日間、東公園の県庁への入口側が両側門前市になっていて通行止め。入ってすぐ右に恵比須神社があって、ノボリが2本立っている。亀山上皇像前の通路も両側恵比須まつりにちなんだ店で一ぱいである。雲が多いが晴れていて比較的に暖い天気。人出は少ないがもう一つ、明日がピークなのだろう。知事室に北九の建設業界の人達が年賀に来たが、景気は冷え切っているという。切々と公共事業の発注を訴えていた。過当競争で供給力が膨張してしまったことはいなめないはずだが、私がそれを指摘するわけにはいかない。他方今日は日農からの陳情もあった。こちらは飼料米への稲転の補助金要求であるが、これは熱意とはうらはらに、農家経済がとてなり立ちそうにない話。こんなのをどう扱ってよいか途方にくれる。もう一つ、ドイツ語の空井義観氏が土曜日に私にもちかけてきた問題だが、立花町の農協がミカン缶詰工場の倒産のあおりで7億円ぐらいの債権こげつきで農家に迷惑がかかってきそうだという。これ又手のつけようのない話。どこを向いても不景気の話ばかり、エビスさんも今年もニガ笑いではないだろうか。経済界は昨年秋以来景気の底離れ宣言をしたというのに。

1月10日(火)曇

大川新春家具展

知事ハワイ訪問で先方の州知事を招待の予定という新聞記事が出てあと一週間にせまった日程をふと思ひ浮べ、身辺整理準備がこれでよいだろうかと思ひ反省してみる。夏服で出かけ、東京に冬服を送っておいて帰国後直ちに東京で行動するとなると準備に手数がかかる。ひる東急ホテルで県下沿岸漁業組合の知事を囲む集會に出席したあと、帰庁し、十日恵比須神社に参拝した。公式ということでは困るということで、私事として、ひる休み時間を利用してのことであった。参拝客の中に顔を合わせて会釈する人が何人何組かあった。植木市もざっと見て帰った。思いのほか閑散に思えた。不景気のせいだろう。今日は北九の建設業、大

川の家具業両業界の陳情をうけ視察をおこなったのだが、どちらも不景気をかこっている。そして県政に大きく期待しているという。明かに過当競争であることがわかっている、それは客観であって政治の主観からは過当競争なるが故にということをおクビにも出せない。政治をめぐる主観と客観のちがいが、こういうところに出てくる。沿岸漁業組合の県政への要望についても同じことがいえる。県政を不況対策の主体にしようとするれば底知れぬ混乱に陥るだろう。ただそのことを知事が口にしない、文字に書かないことが必要なだけである。不況対策に白島着工をという要請はだまって受ける。

1月11日（水）晴

県政サロン RKB録画「成人おめでとう」

朝冷えていると思ったのに、正月以来最高の快晴で春を思わせる暖かさ。陳情団の来訪がたえない。当然で59年度予算編成期だからである。県もまた中央政府に陳情せねばならず、そのため私も明夕上京の予定である。大川の家具界にしろ、今日の遺族会にしろ、接触があればそれなりの愛着がおこる。こちらから接触を求めるケースもある。陳情政治には批判がある。しかし、政治が人間のすることであれば、選択の基準に愛着が一つの位置を占めることはやむをえないともいえよう。それを理くつだけで割切ろうとすれば、左翼運動家の純粹派のようになってしまう。事務側からいわせると、あまり愛着を明かにした陳情者への接触はあと様々に応用をきかせられなくなるので困るということになる。どちらにもとれるような返事しておくのが無難だからである。「よくわかりました」とさえいわない方がいい場合が多い。だったら何と非人間的なことかと思うのだが。陳情が主流を占めると、この非人間的対応が表に出る。限られた予算でせねばならないのだから、価値判断が同一順位にあれば愛着の強い方に傾くのは、あるいはやむを得ないことではないかと思う。

1月12日（木）曇

福岡都市圏・私学協会から59年度予算で陳情

今日も5ヵ所の新年集会に出だし、私学協会と福岡都市圏市町長らの陳情をうけた。役がらとはいえ大変なことだ。国鉄の九州総局長の来訪はローカル線廃止には協力してくれと釘をさされたし、貨物取扱駅的大幅縮減の宣告をうけもした。これまた大変なことである。新年会は五日以降毎日のごとくつき合ってきたが、こんなことをあまりつづけていると健康によくはないことは明らかである。食べたように思わぬうちに食べすぎているのではないか。今日も定期検診で浜の町病院に行ったとき、診療室廊下の隅に展示してある糖尿病食事例模型を改めてみたのだが、大そう簡素に見えた。知事的生活なんで要請されるままにやっていると、体をこわしてしまうおそれがある。秘書室で事前にぐっとカットしてあるそうだが、それでも、目一ぱい組んであることは確かである。松尾氏は年に2回ぐらいは人間ドックに入ってもらわなければならないといっている。糖尿病の観点からだけではなくて、オーバーホ

ールしてみる必要がある。近頃寝つきがよくない。それに、コロコロした固い便が出る。これも感じが悪い。肝臓とか尿蛋白がすでに指摘されている。どうにかして対応変革をしよう。

1月13日(金)晴

各省庁に陳情(白島、北九新空港、テクノ)

田中六助が12月総選挙のあとの内閣改造の折に自民党の新幹事長になっており、お祝いの言葉をのべておくべく、今日各省庁への陳情のついでに12時アポイントメントをとって会見することになった。見たことのある顔なんだが、今回は初会見だった。視力がひどく落ちているそうだが、今日は見たところ元気だった。彼の方は若干私を意識していたようで言葉の端々にそれが出た。自民と社会という対立構造の意識だったであろう。県民の立場には共通のものがあるから、それを追求する点では立場の差は乗り越えようという意味の発言で私は対応しておいた。頭はよく切れるようだが、体力がすでにかなり衰えているかにみえた。またモノの見方にどの程度広さがあるかはかりかねた。ともかく自民党内では今実力者らしく、白島についてはgoサインが出ているのと同じとか、新空港については調査費を間違いなく計上するようにするとか、思い切りのいい発言で対応してくれた。ふつう記者会見なら、なかなかそこまでいえないところなのに、ズバリ言い切った点、背後に憶せぬ実力を感じさせるものがあつた。現時点での福岡県の利点はここにある。

1月14日(土)晴

浜中副知事案

県議会の野党各派が副知事に浜中茂足自民県議を押しということが昨夜のRKB放送と今朝の読売新聞で報道され、今日の県庁内にセンセーションを起こしている。そこには問題がいくつかある。9月県議で知事公舎入居問題を拾収する時に、野党の押し候補を認めるということになっているという報道、社会党もそれはやむをえないといっているという報道、この二点は事実ではない。また、野党が自分達が押し候補を知事が無条件に議会に提案するだろうと解釈することは筋からみてもおかしいだろう。副知事を野党が決めるという気持は尋常ではない。この案を宣伝しているのは関和虎副議長だろうとの観測が一般だが、この戦術は、公舎問題が一応ケリがついたあと、新しく紛争の種をかき立てようとするものである。副知事浜中案では与党及びそのバックが承知するはずがない。私もこれを提案することはない。浜中が副知事になるとすれば彼自身が従来の態度をかえた人物になるか、県政が彼によって混乱させられるかどちらかである。それはどちらも望ましいことではない。

1月15日(日)雨

共通一次試験

昨日今日国公立大学共通一次試験が例年同様おこなわれた。受験者は約34万1329人で欠席者は1万9517人（当日欠席を含まず）だった。約36万人が受験を目ざしたわけ。最初から私立を目ざす若者もこれに近い数いるのではないだろうか。大学ごとにやってきたのを一せいにやるようになって6年目とか。実に大へんな国家行事になってしまったものだ。一々の大学でやれば何でもない、それだけの苦勞ですむが、共通でやると、出題や採点に独自の苦勞はないが、天候や正誤に特別の配慮が全国均等化のために必要になってくる。大学に在籍していた時に感じたのだが、教養部にコンピュータ端末機が正誤指令のために設置されているので、こんなことを全国的にやると機械屋さんが巨額の利益をあげるだろう。そのためにやっているようなものではないか。各大学が各個にやると難問奇問で受験生が迷惑するとか一期校二期校の差が固定化するとか共通一次に切りかえる口実はあったが弊害も別の格差固定の心配もでてきている。改革というものはいい加減なものだ。

1月16日（月）小雪

賀状の特徴

振替休日。一日大名に在宅。外は吹雪の時もあった。全国的に寒い。北海道では国鉄は止るところもあるとか。お年玉の当りをしらべてみた。例年の何倍もの賀状だが、率はよくない。ついでに賀状の再点検をして住所録を訂正するのに一日かかってしまった。大牟田の中原操子さんの賀状は次のとおり——恙なく新しい年をお迎えになられた事を心からお慶び申し上げます。昨年いちばん嬉しかったことは、奥田知事の誕生。一ばん悲しかった事は、知事が野党の暴言を黙って聞かなければならなかったこと。しかし、県議会では少数与党で苦しいかも知れませんが、百万人以上の県民が味方であることをお忘れなく。今年は奥田カラーで思う存分の仕事をやってもらいたいものです。昨年は選挙にふり回された感がなきにしもあらずですが、奥田知事にはあと一期はどうしてもやってもらいたいと、今からその土台造りに動いております。奥様も大変でしょうが、我々県民の為に、また女性の代表としてがんばってください——たくさん来ている賀状を代表するような気がするのでここに書き止めておく気になった。住所録にはこうした見知らぬ支持者の名が次々と追加されていった。

1月17日（火）晴

新年知事訓示の反響

林県議と八丁氏が朝のうち知事室に来た。白水先生の奥さんが亡くなって要請された弔辞の原稿を書きながら二人の話をきいた。1つは行革委メンバー候補として人事課があげてきた人物をチェックして原案を入れかえるという件。もう一つは、副知事候補に擬せられている浜中案は受け入れ難いので表面化しないよう林県議が全力をあげるという件であった。但しこうしたことで私が表面に出ることは避けねばならぬということである。ハワイに行

き、引きかえして東京で予算工作をして帰福したら24日だが、その頃までに25日と期限を切ったの人事臨時議会の開催見とおしが立つことになる。いやな挑戦状をつきつけられた形の人事案件だが、問題間のヤマ場がそこらにある。2月になると、4月人事についてかなりつっこんだ論議が必要になってくる。亀井体制のどこをどう修正していくかであるが、生ぬるくても極端でもいけないからむずかしい。年明けに各紙にのせた知事あいさつ、及びこれと似た内容の1月4日の知事訓示、これが県の職員の気持ちを締め直すのにかなり有効だったといううわさである。何もできない知事という評価から、何かしそうな知事へと印象が変わりはじめたというのである。

1月18日(水) 晴

(ハワイ時間は1月17日の分)

ハワイ訪問

ハワイははじめての旅。日本から新婚旅行者が多く一般の観光者もハワイハワイといっているのに、まだ行ったことがなく、しかも今回は公用で不可避だった。全くの私用で積極的に行きたいと思ったことがなかった。ハワイと二年前に亀井知事時代に姉妹協定を結んだ関係で、亀井知事らの最初の訪問が県費1億円も投じ、芸者交流をしたとの悪評が立ったこともあって、これまた公的な積極交流の気持があってもなかったのだが、交流自体は前向きに取り組むことに意義もあるから私も就任後、新規まきなおしの意味で取組んでいたのであった。総務渉外課長の一の宮氏が役柄積極的に取組んでおり、先遣、先発と二度にわたって地ならしの仕事をしてくれた。知事、県会議長に招待があり、両者は夫人同伴、他に県議(ハワイ議連)が同行した。私は暮の総選挙の影響で国家予算が編成ずれしたため、1週の予定を半分に切上げて帰国せざるをえず、その穴埋めに近藤室長が特別参加することになった。友好親善を促進し、スポーツ文化の交流を通じて国際平和理解を深めようとするのが目的。今回の訪問で、こんどは当方から返礼の招待をすることになる。

1月19日(木)

(ハワイ時間現地1月18日の分)

華やかな開会式

昨日空港で有吉州知事(George R. Ariyoshi)からカーネーションのレイを贈られた(私は赤、みゆきは白)。今日は州議会開会式にのぞみ知事公舎に立寄って又々同じく首が重くなるほどレイをいただいた。夕方ホテルに帰るまで、著名客として正式に待遇され、それだけでも心は休まらなかった。ホテルでは、ホテル経営者から昨日は盛花の、今日は菓物包みのさし入れがあった。州知事招待宴のあと州知事から、そしてひる間は訪問した市長からハワイ名産のボウルをいただいた。知事からアロハシャツの差入れもあった。昨日ホテルに付設してある店で私自から買ったアロハシャツを着て招宴に出た。日本側はみんなそれぞれ同

じ形式になっていた。議会で議員がアロハで出ている例もあった。常夏の国だからアロハが正式とされている。柄や色がカラフルで派出だから、満員になった傍聴席はじめ各議員の隣・後に設けられた家族席も異様にカラフルで、開会式のお祭さわぎにマッチしていた。こんなことはUSAの他州ではみられないことだとの説明である。上下両院とも議長、代表議員の演説はやっぱりほとんど理解できなかつたが、経済・労働失業・財政の問題が当面の州行政に課題を投げかけているらしいことは汲みとれたので、華やかな表面にも暗い影があることがわかった。

1月20日（金）

〔ハワイ現地1月19日の分〕

日系ハワイ人の一側面

議会両方ともわれわれ一行の一人一人を紹介歓迎してくれた。異例のことではなからうか。昨日の開会式といい、今日の歓待といいハワイ州の独自性であろう。有吉知事は福岡県豊前出身ということで亀井知事の姉妹関係締結の申入れに他をおもんばかって遠慮したほどときくが、一たん関係を結んだら積極的に反応を示してくれていると思う。この議会でのあいさつの前後に在ホノルルの日系移民の高齢者三人を訪問、表彰敬祝をさせてもらった。104、99、98という高齢者3人である。その二世というのが私たちより高齢、今や4世の時代になろうとしている。どなたも後世代の人がしっかりしているせいか、平和で豊かな生活を送っておられると見うけられた。皆さん日本語を使うし、もちろん英語もだろう。しかし4世になると日本語はほとんどできなくなり、家族の中でも中間者が通訳する必要がおこるらしい。真宗その他の仏教がかなり盛んで、寺も10をこすという。2世、3世にとっては、天皇や教育勅語、又は戦前の教育がなつかしいようだ。日教組流の平和教育論の反省が無用だったのであろう。天皇や日の丸は宗教的な信仰、懐古の的といってよい。だから知事が来るといえば大変よろこぶ。

1月21日（土）

（ハワイ現地20日の分）

日本では寒さの峠なのか大雪らしい。ハワイゆきの便が雪で欠航又は出発遅延で、こちらから東京に行く便が大幅におくれるという。今日は東京着午後一時頃の予定が、午後10時になる見込みということで、予定外の時間をハワイですごすことになった。（私と古澤氏と2人だけ）（他の一行は午前中にハワイ島に向けて出発した）民社党の近藤夫妻を朝食後見舞った。彼の方が風邪気味ということで一昨日はホテルにいたままだった。そのほか一行皆元気ようだ。昨日夕方ワイキキの浜辺を散歩してみた。砂のキメがこまかく美しい海岸が保たれていた。ホテルの窓からは朝早くから水浴の客がつかけているの見える。午後六時55分の成田ゆきというので、時間をゆっくりホノルル近辺の見物に使った。ここに来て

自由な時間がもっとほしかったが最後の日に、東京大雪のため、ダイヤモンドヘッド、パイナップル園、真珠湾など見物できてよかった。空港では有吉知事のおみやげが届けられ、県人会の人がレイをもって見送りに来てくれその心の通いに大変温いものを感じつつお別れした。当初予定の全日程が消化できないままハワイから引かえずのは、県人会の人達に何とも言い分け難い心苦しさ残った。

1月22日（日）

小人遠藤政夫 深谷喜一郎（RKB記者）

昨夜は2時近くにねて今朝は6時すぎに起きるという不正常さ。7時から東京事務所で打合わせて今日は県選出国會議員に対する陳情で朝、昼、夕の三つの食事パーティ、農水省、通産省、建設省陳情行動と多忙をきわめた。その中で、朝食会で遠藤参議が福岡県は知事の指導が悪く他県にくらべ陳情に見劣りがあると指摘されたこと、又このあとRKBテレビカメラインタビューで革新知事だと予算がとれないのではないかと、この忙しい時にハワイに行っていたとの批判をどう思うかと全く嫌な質問が出て、今日は一日中不愉快であった。遠藤とRKBは連携がとれていたらしく、RKBはあとで遠藤のコメントを求めている。やっつけてやったネと感想を交わしていたのであろう。出席の辻英雄が、白島に消極的といわれた知事はその後どうかと質問したが、これも嫌な質問ながら、釘をさす意味ととればそれほど腹立たしくはない。が総じて自民党の國會議員はRKB同様つまらん奴がいるもんだ。予算陳情に県の主要スタッフあげて上京して努力しているというのに、何とかして水をさそうとする。それほど亀井が敗れたのが残念で、それほど頭に長くこびりついているのだろうか。いい加減にしておけといたい。遠藤、これは実に小人のように見える。小人ほど自分を大きく見せたがる実例。

1月23日（月）

有明鉦火災は人災

1月18日の午後1時すぎ、新鋭鉦として期待されていた三井三池有明鉦で坑内火災が発生し、死者83、負傷者14という大量の犠牲者が発生した。会社側は内々に事を処理しようとしたらしく、警察、消防、県、市、町への連絡がかなり遅れたらしい。黒田大牟田市長は夕方テレビではじめて知ったとさえいっていた。三井といわず誰しもできれば内々のうちに片付けたいと思うだろう。何事によらずそうだろうが、限度をよくわきまえるべきだろう。もちろん外に知らせたとて、事故がうまく処理されるとはいえまい。今日の弔問で現地長谷川県議は初動ミスがあるのではないかといていたが、これはいえそうだ。坑内事情や事故経過については何も知らない私だが、火事は最初の5分間という諺があるとおりに、初動こそが最重点である。そのためには平素の防災訓練、心得がなされていなければならぬ。三井はそれをしてなかったのではないか。もちろん、保安に怠慢があり、手抜きがあり、

保安なくして生産なしという原則が、どこまで徹底していたか、保安と生産の境界線をどこに引いていたかも人間がやることで、その人間、さらには労使という人間関係にも問題がある。多様な要因の集積がこういう災害の様相を決定する。三井では二度あることが三度あるのだ。

1月24日（火）曇後晴

ハワイの先駆者たち

来年ハワイ移民の公式100年になるという。開拓者たちの苦勞は大変なものだったろう。その2世、3世は1世のなめた苦勞を順次忘れていく。仕方がないことだろう。はじめに行った人達がえた財産は時代がたつにつれて価値が高くなり、比較的的苦勞なくその子孫たちが受けついで今日に至っている。先輩達は苦勞しただけではなくて郷土日本に対して大変な愛着をもちつづけている。初期の開拓者たちがいかにふるさとの心を大切にしているかをこんどの旅行で十分に感じられた。宗教、とくに仏教も大切に継承されている。寺の数もかなりあるらしい。真宗がやはり多いという。移民が多くなるにつれて僧侶や教師が必要になり、求めに応じてこうした精神形成者が移民してきたのであろう。今は州知事をはじめ州議会に多くの議席をもつまでに至っている。が1977年のハワイ日本人移民史は最初の苦勞をこう書いている。「日本封建社会の既成観念を抱いたまま、祖国を後にしたかれらは、あらゆる生活条件と環境の異なった異国の地に定着し、背後に日本帝国主義の影響を受けながら、半奴隸的な境遇に埋もれて、酷使と重労働に耐え、想像もつかぬような忍苦に明け暮れたのである。また一方では待遇改善と、権利擁護と民族の体面保持のための種々の運動と闘争をつづけた。そうした積極的な努力の結果、かれらは最下層の境遇からはい上がり、事業と生活の両面で向上発展し、堅実な社会を建設していった」と。

1月25日（水）曇

人の悪口をいうな、人前でいうな

ひとの悪口をいうな、ひとを敵にまわすな、敵に追いやるな、——まるで仏様になったような人間が求められる。現実には、こちらが何の原因ももたず、仕掛けもしていないのに、仇敵のように挑んでくる人がいる。それでも相手を敵にまわすなという要望がある。今日も又RKBの話題がでた。遠藤政夫の話が出た。近藤室長の話によると西鉄の木本社長は奥田を敵視しているという。そういえば、福銀、九電その他地元の財界人はしぶしぶながらも私の面前にあらわれた。財界ドンの瓦林もそうだ。西日本新聞の福田その他とは食事を共にした。だが九経調の浜、西鉄の木本など知事になって以後顔も合わしていない。浜氏は前から知っての仲だから見当はつくが、木本氏はどんな顔の人か全く知らない。どうでもいいが向うが私と会うのを嫌っているらしい。何故か理解できない。私が敵視しなくても相手が敵視しているのかも知れない。県議会の自民党の中には篠田、藤田、高岡、横田その他ずらり敵

意に満ちたのがある。もちろん勝手だからこちらはそれをどう思うわけではないが、公衆の面前で敵意を丸出しにして対応してくるのはどうかと思う。東京事務所長の津田氏は、遠藤ってのはつまらん奴ですねという。知事になりたかったんですという人もいる。篠田もねらっているという人がある。

1月26日(木)晴

陳情されたり、陳情したり

東京からの帰りモノレールの中で高田町長龍氏と偶然席が隣りになった。彼の話によると多忙で全く私的な時間がとれないとか。ご同様なとつくづく感じた。月に2~3回は上京している。この一月のごときは4回も上京したという。国鉄の特急はやぶさで一晩寝台車利用で寝て行くのが一番たのしみだともいっていた。国鉄の寝台車はつい何年間か利用したことがない。のってみたいとすらいえる。それはそれとして、今日は浜松町まで車で送ってもらった。空港までは高速道路ですら渋滞しかえっていらいらするし、東京事務所の運転手も浜松町までの方が楽に違いない。今後なるべく浜松町モノレール利用の方法でいきたいものだ。板付ゆきJALの中では田中九大学長、山本義隆県議、三原朝雄代議士と上階の席で会った。ともかく上京組が多いのにびっくり。そういえば大和町、山川町の町長とも東京で会った。上京陳情が政治をつくっていく時代で、これを冷い目でみるゆとりはない。大変な旅費だろう。それでGNPもふくらむという寸法である。田中学長は共通一次試験の反省会、山本三原組は自民党大会、ということだから陳情ばかりではないが、ともかく陳情なしには動いていかない日本の政治の仕組にほとんど感心させられる。明日も有明鉦災害国会調査団の現地入りに対し、夜の5時から私は陳情に出かけなければならない。

1月27日(金)晴

輝国への引越し

今日はこれまでにないひえ込みで九州全域氷点下を記録したらしい。事務所と車の中が主たる活動の場であるため外気の冷たさはほとんど感じないですんでいる。昨日も今日も藤江君がみゆきと一しょに、輝国・大名の両方の整理と荷造り準備で献身的に働いている。夜、大坪君が来ての話題になったのだが、彼はよく働くということと、知事になったがための家族の犠牲の大きさである。ひとはそれを決して同情的に見ることはないだろう。だけど、ひと目とは違って犠牲は大きい。精神的に、肉体的に、物質的に、二重生活による負担が、この1月で緩和されることになるなら、まずは一安心である。ひと知れぬこの犠牲から大部分解放されることになる。右翼の襲撃の心配はなくなったのかどうか、大坪はもうないという。私はどうでもよい。それを判断の基準にしたくない。それを問題にしたらわからなくなるからである。輝国がよいとは今も思わない。改造して余地がぐんと少くなり、マンションと杉の木に影響されてうっとうしく、せせこましいので改築に費用をかけたのは決して賢

明な策ではなかったのだが、他に手段を選ぶために思考するゆとりはなかった。いい加減な手段だった。それでも大名との二重生活はもうやめないと、犠牲が大きい。それで1月を限りとして引越すわけ。ひとは何かと又いうだろうが、まかせよう。

1月28日（土）晴

大名マンション最後の夜

いよいよ大名マンション最終日 came。大へんお世話になったが、逆に大へん負担をかけられた、奇妙で変則的な一年ではあった。自民党が仕掛けた引きずりおろし騒動はお布施事件、公舎問題を中心に県議会中心に荒れつづきそれに右翼とマスコミが拡幅させた。中央政府もお布施事件ではかなり意識的に権力を動員し、県警が酒井本部長を陣頭にかなり跳梁した。やりすぎて右翼をおどらせ二度にわたる不祥事を国民の前に披露し、警備責任を負う破目におちた。酒井は異動して警察学校に転出したが、その後は出世するのだろうか。私が他府県に出向くたびに、その地の警備のやっかいになっているが、これも酒井のせいといわねばなるまい。国家規模の損失ではある。右翼が警察とマスコミにおどらされてやったとの見解は一度は私は取消したが、本心には今もってかわりはない。大名マンションにはこのような社会的潮流が秘められている。こういう潮流がもう全くなかった訳ではないが願わくば大名マンションとの別れと共にこうした潮流ともお別れしたいものだ。今日知事公舎に行ったが、ここには怨念がこもっている。知事亀井もまた怨念を残して去っただろう。

1月29日（日）

体調がよくない

近頃体調がよくない。老化が進んだのかも知れない。運動不足であることは明白。体重は52kg、一時48.5kgにまで落込んでいたので、その点悪くはないが、一番気になるのが熟睡できないことだ。たとえば11時に就寝するとすると、2時半頃に目がさめてトイレにゆく。そうするとそのあと熟睡できないで反転をくりかえして夜明けを迎える。ネルボンのをのんだらねつきはよいが、はじめの数時間だけしか熟睡できない。おそらく体力がなくなっているのではないか。運動不足だからという人がいるので、その説も当たっているかも知れない。熟睡できない明け方までの3~4時間は全く眠ってないかというところではなく、少しは眠っているのであろう。眠らなかつたよりはるかにましだから、こうして昼間たいへん眠いことが多い。車中はよくこっくりやっている。人と対話の間ですら眠っているのかとびっくりすることがある。ネルボンを連用すると悪いという説があるが、連用はなるべく避けるとしても常用する程になっている。1時、2時までねむれなくて起き出して服用することもある。なるべく早く、11時すぎには就床するように心がけているのだが…。輝国に移ったら少しは運動しよう。

1月30日(月)みぞれ

赤の字

毎日の朝刊をホテルでみていると余録のところで赤野の赤は赤貧の赤で「なんにもない」の意とあった。私は違うと思った。「不毛」の野と筆者は解注しているが、不毛というのはおかしいだろう。野にはいろいろの物があっても野、一色に塗りつぶされていても野であって、ここでは原野そのものの意ではないか。大学の時、学生に赤貧を貧そのもの、赤誠を誠そのものと説明した記憶がある。何にもないというと、ない方に意味が強められるおそれがあるから、まじり気のないという意味に解し、そのもの純度の高さ、むしろ他物のない意とする方がよいと思う。マッカなウソという時はウソばかりというべきである。「ない」のは真実が「ない」のであって、虚構は「ある」から「なんにもない」のではないと私は考える。字源を見ると赤野はなくて赤地がある。これは草木の生ぜざる地不毛の地とある。だが赤野は赤地ではないだろう。赤子は、うまれたままにしていつわりなき心(赤子之心)とある。赤子は色が赤いからそういうのであるが、うまれたままの気持には通ずるものがありそうである。赤野は不毛というよりは、やはり生えていて、野そのもの、人工的な田畑やタメ池やそういうものがなくて、自然のままに草も木もあり、虫も鳥も生きるものすべて生きる努力をしている野ではなかろうか。

1月31日(火)曇

健康保持に秘訣はあるか

庁内地階の理髪店で中島(?)という係の人が髪をつみながらいろいろ話かけてきた。この人は6ヵ月たった時西日本新聞の川上記者に知事の頭をつんだ印象を語った人である。終り方になって、身体が小さいのによく動きスタミナがあるがその秘訣はどこにあるのかという意味の質問をしてきた。私は別に何もないと答えるしかなかった。髪をつみに来る人、役付きの人、副知事などがそういう話題を出すらしい。誰もが直接にきかないだろうから、失礼ながら右代表できかせてほしいということであった。残念ながらひとに披露できる何ものもない。ゴルフ、ジョギング、ぶらさがり、ルームランナー、冷水摩擦、素振り、腕立て等々、ひとはあれこれやっているが、私はどれ一つ恒常的習慣的にやっていない。ひとからみるとエネルギッシュによく動いて休みなしとみえるようだし、自分でもそう見られるのは不思議ではない。風邪をひいたとか、腹痛、頭痛とかほとんどないといってよく時計の歯車のように動いているのが実態である。昨年選挙の時直方で、立会演説を前に発熱で午前就床したことがあるが、これは不思議異例に属する。大学時代に尿管結石で1週間入院したし、満洲815部隊(経理学校)の時に2日ほど大腸カタルで入院したし、中学校の何年生だったか(2年?)4~5日休んだし、小学校の頃これまた2年生の頃だったか2日休んだ。それに成人してからも2~3回就床休養した記憶はあるが、それくらいのところではないだろうか。今は1 昨年の秋から浜の町病院で糖尿病ということで定期的に検診投薬をう

けていることは事実。でも概してこつこつ毎日毎日動いてきたとあってよい。こんなのは早くポックリ死にますよといったら、そんなことはありませんよと散髪屋は笑っていた。大和町の町長がニンニクを食えとかいってくれたが、それがよいかわからない。何がいいかわかったものではない。誰か確言できるだろうか。松尾参事は私がそういうと、でも一日に一度汗を流すということだけは信ずるに値する健康法ではないかという。私はそれにさからわないことにしよう。たしかに、ここ10ヵ月ほど汗をかくほどの運動をしていない。脚力が弱っていることはほぼ確実である。歩いて、汗はかかなくとも脚力の衰えをまず防ぐ必要があると思うのだ。が、近頃は歩くこともあまりない。大名マンションに住んでいたらいよいよ運動、体操、すらできない。輝国にひきあげたのだから、これからは何かをしようと思う。ある人は大濠を走ってみたらという。知事たる限りとんでもないことだ。中央の政治家が箱根だの軽井沢だのに出かけて週末をすごす意味が、贅沢ということとはなれて理解できるようになった。私にも週末は二日市温泉にでも出かけたらかどうかとすすめてくれる人がある。そういうカネがあればほかにまだ健康保持の方法はあるだろう。

2月1日（水）晴

島野氏導入人事について

東京から都庁の島野氏がやってきて2~3日滞在し、今夜はパーソナルホテルVIPサロンで協会幹部立会いで私と会談した。彼を知事スタッフとして福岡に呼ぼうという趣旨である。これは昨年の夏山の上ホテルでも同様に面談したので二度目になる。近藤、松尾らの意見を一寸きいてみると大変警戒される人事構想である。おそらく県職員幹部の中で、すなおにこのことを受容する人はないのではないか。だのに、本人、大坪、中川らがすごく熱心、かつ強引とも思える口調でわれわれに実現方をせまってきた。立派な提案でもそれをどうすんなりと受け入れて実効あらしめるかが問題だのに、その配慮がほとんどない。八丁君はその点をひどく心配して発言していたが、大坪君は強引そのものであった。総合的に判断するに、この調子ではこの話はこわれそうに思える。岩崎氏も同じく推進派として動いているが、林県議がこれをどう受けとめたか早く知りたい。松本英一ラインから推そうといったようだが、県側がそれにどう反応するかである。私がイエスとかノーとかにかかっているとはいえ、そうかんたんにどちらかの判定を下せるものではない。部内の地ならしができないままに持ち込むことには危険を孕むので賛成しかねる。

2月2日（木）

嶋崎氏の思想について

今日は旧正月、中国はこの日を祝い合うという。われわれはこれに関係なく今日も忙しく動きまわった。甘木ゆきを中心とした今日の行動の中から……福岡盲学校を訪問、かなり大きな学校である。100人余の子供たちは目に欠陥があるとはいえ、こうした施設で対応して

もらって昔とくらべしあわせだろう。廊下に小学校コースの20人ばかりが集って私を歓迎してくれた。寒そうだったが寒さにたえてこそ成長するだろう。知事公舎に用地をとられたことを今は忘れかけているという。甘木の総合庁舎では知事室に茶を運んでいた上野さんという女性に出合った。ここにかわったの?といたら笑っていた。亀井時代からの秘書室の人だった。夜三光園で参議院地方行政委の人達と夕食した時、佐藤三吾氏が嶋崎議政策審議会議長は思想が変になってきていけません、といい、私に先輩として指導しなおしてくれといった。私は指導できるような間柄ではないといたら、そんなことはないだろうということであった。先日「もう一つの時計」の出版記念会を彼がかなり強引に福岡で開催した時、大坪や中川がその著の中味に反撥して祝賀会に出てこなかったが、社会党の中でも反撥があるということがわかった。しっかりやってくれればいいのに!

2月3日(金)晴

新しい電話番号

朝夕たいへん冷えこんでいる。車に乗り込む前のちょっとした時間だが、空気の冷たさがわかる。5時から10時まで庁議室で開かれた社会党県議との予算研究会は予期せざる日程であったが、思えば当然のことであった。このような研究会に至る前段の対応が必要だとみんな認め合ったことだった。八丁君が毎年問研が出版していた春闘パンフの今年分ができたといってもって来た。八丁、福留、衣笠の三人で執筆している。問研の重要財源なので、毎年作成してきたのだが、今年から私に代わって福留君が書いてくれた形である。今日から電話番号がかわって、表は以前の***-****でその裏が***-****である。今日夜10時半に帰宅したら警備の者が2人石段の下に待っていた。輝国に来てからの新しい警備である。下のマンションに別室を借りて休んでいるとかの話もある。近頃警備後続車がいなくなったが、依然警戒を解いていない。電話については自からの警戒なので、これは当然と思う。何時誰からどんな電話がかかってくるか知れないから、通報していない者には電話番号が知られない仕掛けがあるということはよいことだ。電話がないというわけにはいかないのに表番号はあるが、これは秘書室に通ずることになっている。まだまだ公式に警戒が必要であることは確かである。

【電話番号は*で記した】

2月4日(土)

身辺雑事

輝国の住み心地がようやく平常らしくなってきた。あるべきものが一応その位置にあるようになったからである。しかし物の中はまだまだ平常には程遠い。何がどこにあるのか探してもわからないのが少ない。一彦、啓二、直美の3人に電話がかわったという知らせを試みた。直美は元気で近々北海道にスキーに行き、その後沖縄にアルバイトにかなり長期に

行ってくるといっていた。一彦、啓二はカゼをひいていた。この厳寒でカゼをひく人は少ない。永井副知事は会議の間何回もハナをかんだりタンを出したり。私はさいわいカゼをひかないでやっている。それどころか、きりきり舞いである。秘書室ではびっしり予定表を作っているが、私が調子が悪いといったらどうなるのだろう。今日は節分だということで豆がテーブルの上におかれていた。好物だからどしどし食べた。豆類には目がない私である。割合に健康なのはこのあたりに理由があるかも知れないとひそかに思っている。周辺には1月末の雪がまだ残っている。玄関あたりがそのために片づかない上に汚いままである。予算案は大変窮屈ななかで財政当局がうまく組んでくれそうなので比較的安心しておれる。削れば削れる余地はあると確信している。

2月5日（日）

再び島野氏の話

3時頃協会の集会からの帰りということで中川君が立寄ってきた。広くなり明るくなったですね、でも花など作る楽しみの場所がこれでは狭いですね、引越しの時は手伝わなくてすみませんでしたという。座敷と書庫を片付けて正常化したかったが、とても及ばなかったもので、ここはゆっくり後日にまわそうと思う。本を読む気持が一寸湧かないのではないか。頭の中が散漫になっている（誰かが散文的になるでしょうといったが、その表現は適切ではない）。島野氏の件について彼は念をおそうと思って来訪したのだが、全体としてどうも押しつけがましい印象は拭えない。島野氏の手紙を私に見せたがパーソナル・ホテルで会った時も、この手紙も、島野氏自身の思いつめた様子がうかがえるのが奇妙である。どこかにくい違いがあるように思える。太田薫氏の推薦のようだが、事柄はかんたんではない。私は中川氏にいった。受入れ側に欲求（必要性）が乏しい、それに必要性を説得するにしても一般論でなく島野氏でなければならぬ理由はない。知事の権限内としても必要性と特定化を抜きにして権限をふりまわすわけにはいかない。そういうことをすると無用の摩擦をひきおこすことになる。いわば危険な話の飛込みである。

2月6日（月）

権力批判とはいうが……

自治研センターの「地方自治ふくおか」の新春号に読売の小野記者の「顧みて」県政批判がでている。4ヵ月ほど前に出た「地域懇ニュース」に西日本新聞の某の同様な文章と似て、私に対してとてもきびしい内容であった。新聞記者とのトラブルが背景にあったとは思えないが、トラブルがおきるほどにものを見る目が違うのは蔽うべくもない事実のようだ。両者に共通している点は政府権力や自民党県議のやり方に一点の非もないとして素通りしていることである。問題のほとんどはそこから発している。新聞社とのトラブルも、小野がいうように一部新聞の誤報というものではない。新聞というものが入れ代わり立ちかわり全

部誤報をものとしめないという怠慢性、横着さをもっている。RKBや朝日などは、意図的に私に非難をあげせ、事を構えてきている。小野は新聞は権力批判の立場というが、個人批判を事とし読者のコビをくすぐっている。権力と権力をもつもの個人とをすりかえた議論をやっている。権力に批判をすることを譲らないなら戦争などおこるまいが、迎合するに違いないのだ。権力批判といって個人批判をやり、体制への迎合をごまかしているのではないか。奥田批判とはいうが、私の権力行使を批判してはいないのである。

2月7日（火）

マスコミはウソをいう

私がマスコミ批判をしたとき、読売その他では記者にけしかけて知事に馬鹿にされるなど各社は記者を激励したと小野は書いている。新聞がそういう場合報道しなければ市民は知りたはしない。勝手にニュースにもならぬことを書くからトラブルがあることが表沙汰になる。私は意図的な記事だと思う。ニュースを面白おかしくデッチあげて私の片言双句を書き立てているにすぎない。「副知事シャツ論」にしても小野説その他多数の批判はあるが、私は決して負けないつもりでいる。テレビ社とくにRKBの対応も同じである。彼等は自分の意図するところを全大衆に、ねじまげてでも放映報道する自由をもっているが、ねじまげられて放映報道された側はたまったものではない。そういうことをしておいて、人権蹂躪だとは思っていないところに問題がある。「新聞は真意を伝えてない……」の問題にしても、メモ、テープをたんねんにたどったので誤りはない。言い方が悪いと小野はいうが、私が過去形でいったことをすべて現在形でたんねんに書けばやはりウソの報道である。前にこう思ったということを今そう思っているのかの如く書けば、絶対に、真意を伝えたことにはならない。

2月8日（水）

血液センター見学

須崎の血液センターを見学させてもらった。大へん手ぜまなので今筑紫野市に大きなのを建て替え中で、骨組みができ上がったところ。この建設につき、県の財政援助がある程度役立っている。知事はこのセンターの施工主たる日本赤十字社の県支部長の位置にあるので、センターにとっては、お客さんでもある。私は献血したことは3~4回あるだろうか。知事になって県庁で一度ある。しかし血液がその後どう処理されるかについて、又どう利用されているかについては殆んどといってよいほど知らなかった。しかし中に入って一目見ただけで、今ではおそろしく近代的な技術が応用されていることがわかり、ただびっくりするばかりであった。献血システムはもちろん、献血者数もこの数年、大へんな変化発達である。5年前54年2月に新センターが竣工し、新しい業務が開始されたという。51年頃からの進歩が著しいという。血液の処理が近代化するにつれ血液利用が高まり、それにつれて血液の

価格が高くなるはずである。57年度の県下の献血者 339,937 人で 10 年前 46 年の 210,207 人と比較すると格段にふえている。福岡県での献血者の男女別比率は女が 42.4%、これは全国平均 36.5%よりぐっと高いのが特徴である。

2月9日（木）晴

婦人会県庁見学ツアー

午後穂波町の婦人会の人達が知事室にやってきた。社会党の山根県議が案内者である。婦人が県庁を訪ねてくるのが少ない。女は時間がとれるからであろう。男はめったに来ない。県議は野党の場合もたくさんある。知事は女に評判がいいようだという人が多い。婦人について理解があるということになっている。今日もあいさつで彼女たちにいったのだが、そして又あちこちでいっていることだが、家庭に責任をもつのは女の方が著しい。そこで、女の気持、女の苦勞が県政にあらわれるようにするのがよい県政といえるのではないかと私はつねづねいっているので今日もこのことを強調したいと。みんなうなずいてくれた。が、穂波町ということもあってか、地域開発についてもかなり関心を寄せているらしい発言もとびだした。意外というわけではないが、仕事のない人が少なからずいて、企業立地によって何とか切り抜きたいとの願望はぐんと強い。学校や老人、幼児のことにも関心が強いはずだが、ライフサイクルの違いを反映してか、今日の来訪者は年配の人が多く、子育ては終わったかにみえる。バスで来たらしいが、こうして県庁に案内するのも議員としては一苦勞だろう。だが反面、こうした県庁ツアーの方が、ほかのことに腐心するよりコストがかからなくてよいとのことである。

2月10日（金）

無責任なのは誰か

知事公舎に知事が入らないのは無駄遣いの典型という。西日本新聞がそういう論陣をはっている。亀井も悪いが奥田も悪いというのである。そしてどっちがチョウチン持ちか知らぬが、これに呼応する形で例の投書魔、一匹狼の長谷川喜博（無職）がその旨の措置請求書〔福岡県知事に対する措置請求〕を2月8日に福岡県監査委員会に提出した。西日本がこの長谷川が好きだということは早くから知られ、彼の投書は好んでのせている。請求書にいわく、公舎条例は12月議会で「廢止されたものの」（この廢の字は誤字）「未だ知事部局による行政財産としての用途廢止の措置は取られないままの、いわば用途不特定の県有財産として放置されている」「県民の一人として奥田知事のその無責任な行政姿勢を不問に付するわけにはいかない」と、何かあれば引っかけてやろうとしている長谷川である（カネもうけに余念のないマンションの長谷川と同じ苗字）。総務部長にこの監査請求のことをきいてみたら、何をいおうとしているのかわからんね、受理して尋問してみましようかと冗談。放置しているとか無責任とか、そんな勝手な言い分が監査の対象になるのか。西日本新聞に公舎

問題が連載されている。昨日のそれに鈴木広教授の意見が全面的に紹介されているが、これも単なる評論というしかない。これこそ無責任意見。

2月11日(土)

不用意発言と責めるけれど

読売の小野が書いている。奥田は行政のズブの素人だと。しかもそれが欠点であるかのよう
に書いている。行政の専門家が知事になったらいいといわんばかりである。素人がそれなり
の失敗をしても、わからなくても、笑ってすませるぐらいの寛大さが無い。選挙なんだから
誰だって立候補する。行政の玄人が立候補すべきだと小野は考えているのだろうか。不用意
発言がどうのこうのという。野党が手ぐすねひいているから不用意発言となるのであって、
与党多数なら苦笑でもすませるのだ。小野は明らかに自民党の感覚で書いている。私が就
任間もない頃旧県庁舎を残したいといったことも不用意発言というし、公舎に入ることも
ありうるといったことも不用意発言だという。県庁舎の残りこわしがせずつむものなら、
そうすべきだと考えた。多数与党をもっていたらそのくらいのことはできたはずである。で
も小野はそういう希望をのべることにすら不用意発言という。公舎入居の可能性にしても同
じである。不入居を貫くのが公約に則していいにきまっても、そうばかりいっておれな
い事態がありうると思ってそういうことを取りあげて、批判している。自治研センターの
「地方自治ふくおか」(1月発行分)が小野にいわせている。

2月12日(日)

筑後路の麦

筑後地方は麦畑の連続だった。近年麦はひきあわないということで裏作としてほとんど作
らなくなっていた。近頃政府の保護政策も手伝って作る人がふえた。雪解けのあと、元気に頭
をもたげてきたという感じ。休田なくいつも人間の手が加えられつつある田を見ると、生き
生きとした感じがする。豊かな感じといってもよい。農業は割に合わないのが現実。過保護
であることは確かだが、それでも農村はあえいでいる。土地を処分する価値ある近郊農家は
別だが、農村は一般に賃金になる仕事がないなら、何を作ったら食っていけるかであえいで
いる。先日、大牟田の北部の干拓地(大和町)で地盤沈下の件で陳情があった。毎年かなり
な土地代金を年賦で支払い、その上反収が減り、地盤を上げる費用、排水の費用を負担しな
ければならないとなると、とてもやっていけないから何とかしてくれないかと、役員たちが
大挙して来県したのも、その心情はよくわかる。でも農業問題はかんたんに私には解けな
い。実際、過保護というほかないが、それでもやっていけない。工場誘致か出稼ぎか、すべ
て打つ手は打って民、官、が対応しているのであるが、それでもこれでよいということには
なっていない。しかし、農村、自然、食糧生産、生物の循環は守らねばならぬ原則である。
今日鬼木勝利氏の葬式に出席、帰りの筑後路の麦を見ての感想。

2月13日（月）

健康の心配

9日に浜の町病院で診断してもらったあと、心臓の調子がどうも気になる兆候がでてきた。鼓動ではなくて、ピクピクする感じ。しめつけられるような感じがする。かと思うと胃にも鈍痛らしい感じがする。どうも気になる。それに昨夜は、おそくなったわけではないのに、熟睡できずじまいだった。時計の打つ音が何回か聞きとれた。考えごとをして眠れないというのとは違う。何も考えないのに眠っていない。いつでも目がパッチリ開く。朝方2時間ぐらい眠ったようにも思う。8時になったので日程もあるので起き出した。日程の心配がなかったらあと一時間ぐらい床にいた方がよいのだろうが、未練を残しつつ起きたわけ。そうこう考えると、どうも健康に自信がなくなってきた。浜の町の藤原先生に心臓と胃のことを訴えてみようかとも思うが、あと1週間待てば、済生会病院で人間ドック入りの予約の時間が来るので、そちらに譲り、自重をしてみようと思っている。多くの人が風邪をひいたといっているのに、その点どうもない。が糖尿病からの余病の方がどうもあやしくなって来たわけ。周辺の人がみんな私の健康を心配してくれているのに、もしものことがあったら不孝この上もない。一層自重が必要である。

2月14日（火）晴

GNP比1%の枠とはいっても

9日に死去したアンドロポフ書記長の後任に、13日の中央委員会総会はチェルネンコ政治局員兼書記を選出した。72歳という高齢である。最高会議幹部会議長の座は当面空席のままという。若手から出なかったということはチェルネンコ選出で当面収拾するということ、ほんとうの後がまの選出が難航したということだろう。日本時間の今日午後6時（現地正午）赤の広場で葬儀があり、クレムリンの壁に埋葬される由。わが国会では国防費GNP1%枠をめぐる早くも国会は紛糾しはじめた。本来1%枠ということは何ごとをも意味せず、GNPが伸びれば伸び、停滞すれば伸びないというだけ。近頃のGNPは3~4%しか伸びないが、価格で5~6%伸びている。軍備など伸びなくても十分やっつけられるはずだし、必要なら1%などかたんに突破するものであろう。こんなことをいっている裏で官軍産複合体の腐敗がどんどん進んでいるはずで、1%問題よりもそちらに鋭い目を向ける方が大切なのではないか。兵器をめぐるアメリカとの取引にも腐敗疑惑はつきまとっているに違いない。社会党などが、そういう点にメスを入れることができないのが残念である。帳簿が合っていたらそれでよいということになっている。おかしいことだ。軍拡競争の論理の外にいることもまた必要だろう。

2月15日（水）

県産品の愛用

サンパレスで初の福岡ふるさとフェアがあった。知事選の時から県産品の愛用を公約の中に掲げていたが、そのあらわれの一つでもある。商工部長大坪氏が頭をひねって業界の人と協力して開催にこぎつけた。3F といおうと彼は強調している。福岡県は山あり川あり海あり沃土ありで食物原料に恵まれている。魚貝、野菜、果物、山菜など商品作物が豊富で、加工工業も発達している。漬物、酒、茶、麺類、醤油、味噌、酢、のりもとれる。柿の冷凍貯蔵も今日立派なのが見られた。2月3月まで生柿が置けたらという夢が実現する日は遠くない。干柿はもちろんである。今日の出品試食に出てないものも少なくなろう。今日は県産品の愛用が趣旨といっても食品ばかりである。工芸、工業品で地元の伝統的なものも多いわけだ。ともあれわれわれの祖先が営々と築いてきた商品化の努力、それでもってわれわれの血や骨ができてきたそういうものを、われわれが今一度見直そうということだが、それに止まらず、そこに産業労働の投下の場を見出し、後継者を見出していくことがひいては県勢の発展につながるということで、県が行政課題とする価値をそこに見る。誰しも二言目には企業誘致をいうが、その前に県産品の愛用による雇用確保を唱えたらどうかといたい。

【欄外記入】洗面所の温度計 朝 5°

就寝前 7.5°

2月16日(木)晴

経費が膨張する冠婚葬祭費

早目に、5時半帰宅したが、代理二つを消化してもらったのであった。一つは千代町の解放同盟の古い闘士井元麟之氏の葬式(4時から松源寺で)、もう一つは6時からグランドホテルで朝鮮総連の金正日誕生42年祝賀会であった。前者には近藤室長が代理参列、そしてみゆきも代理の意味で県評岩崎氏に連れられて参列した。井元氏は79歳だった。後者には松尾参事が参加し、私の知事の祝辞をよんでくれたはず。岩崎氏は両方に参加したという。婦人一日庁議の時だったか、ある女性から冠婚葬祭に要する経費(交際費)が大変に家計を圧迫していることを訴えられたことがある。だんだん年をとると交際の範囲も広くなり、これに輪をかけて派手になってきている。通常のサラリーマンでは対応に困るのが当たり前だろう。知事というポストにはその何倍かが要請される。知事交際費でなされている限り、知らぬ顔もしているが、どんなにか大変であるか想像を絶するだろう。行政的に何とかならないかという人があるが、何かができるわけではない。任意な団体が自発的に自粛をしていくしかないのではないか。個人個人は困り抜いていてどうすることもできないのである。今日は知事出席不相当ということで代理をたのんだのであるが、重なったのでふと以上のようなことを感じた。

2月17日(金)小雨

行革懇の発足

今日午後庁議室で県の行革懇の初会合があり、昨年夏からの懸案の「県独自の行革」が外向きにもいよいよスタートした。25人のメンバーだが大学関係者が5人おり、九大経済の逢坂教授が会長に福大の阿部教授が副会長に選ばれた。西南大の遠山、教養部の衣笠、北九大の白石氏らそれぞれに正論を吐いてくれるだろう。女性の上田恵子、湯口恵両氏も私の知る仲、ただこの人達がどういう意見をもっているかは未知数。あとできいたのだが、私が退席してのち、久山町長の小早川と県評の渡辺はかなりはげしくぶつかり合う発言をしたとのこと。さもありなんというところだが、この辺に今回の行革の両端の危惧がある。小早川は何でも切れ切れというふうに思い上がった点がある。渡辺は自治労の立場からそうさせてたまるかとの立場がある。もう一つフクニチの編集局の某氏は秋の知事公舎運用懇のメンバーでもあったので、その答申を知事が「守らなかった」とのうらみをもっているらしく、行革懇の答申を出しても知事は守らないのではないかというような皮肉めいた発言をしたという。答申は答申であって権威あるものにしてほしい。守る守らないは結果論として別次元の話であって最初から守らないことを予想するような発言は困ったものである。波らんの発足だったといえよう。

2月18日（土）晴

サラ金業界と県は癒着しているというが……

県、サラ金団体に補助金、苦情窓口は業界丸抱え、今年度人件費名目で807万円、OB6人天下り、登録申請手続き代行——西日本新聞はこのような見出しで今日のトップ記事で報道した。昨年11月サラ金二法が施行されたに伴い、県では両政令市と久留米飯塚両市に苦情受けの庶民金融センターを開設したが、そこにサラ金団体が同居し、センター職員6人は県庁OBの天下りだというのである。サラ金業者団体（庶民金融業協会）が法による登録申請を一括して扱うよう指導して自治体がこの登録事務の委託費その他所要経費の一部を補助しており、業界と自治体が癒着しているとの非難である。807万円は6人の人件費相当。この問題を県商工部にきいてみると、西日本とフクニチの地方紙だけが共同の記事を取り入れて報道したというのである。朝日、毎日、読売は商工部に問い合わせに来たのでよく説明したら、問題にするほどのものではないということになったらしい。業界に協会を作らせ、いかがわしい業者の流入を防ぎ、登録する者を協会に入らせ、入らない業者を取締り、入ってくる業者には利用者保護を徹底させる仕組みで、保護して監視するという行政のあり方の一つにあたるやり方である。硬派でなく軟派の管理方法といえる。マスコミ批判は硬派からのもの。

2月19日（日）

県民の県政への関心がにわかに高まった

県民意識調査の結果が新聞広告として全面発表された。県民が行政に期待する施策は1位

が消費生活対策で43%、これは前年(47年)の33.4%に対して大幅に増加している。2位は社会福祉の充実で26%、これも前年の18.2%にくらべかなりな増加である。第3位が青少年対策で22.3%、これも前年の19.7%に対し増加している。次に「行政への働きかけ」は今までとこれからの分けての反応をみると、代表が県関係機関に出向くというのが19.8%から23.8%にふえ、地元の議員に依頼も17.9%から24.5%にふえ、県市町村の窓口で相談というのが10.1%から19.8%にふえ、新聞、テレビなどに働きかけるが4.9%から17.2%にふえている。知事との対話集会などに出かけて話すのが1.2%から14.8%にふえているのも脅威。特に何もしないが34.4%から8.5%に激減しているのは特筆に値する。第三に情報公開については、53.3%が制度に賛成、反対が14.5%、関心がないが28.9%となっている。こうしてみると、県民の行政への関心は最近とみに強まってきたということが出来る。調査対象は県内の20歳以上の男女2000人(うち回答1663人)である。亀井知事時代から代が変わりして、県民はにわかに関心を高めるようになってきたといえることができる。

2月20日(月)晴

人間ドック入り

済生会病院の365号室に入って2日間の人間ドック。1ヵ月以上も前から秘書室と当病院の連絡で日程がきめられていた。私が済生会の会長ということで、とくべつていねいに扱ってくれる。もったいないような気がする。RKBがカメラをもってやって来たという看護の知らせに、たまたま居合わせて私の病歴などきいていた小川副院長はこれを退けてくれた。どこからかぎつけ、何の目的でカメラなどまわしてきたのか合点がいかない。中食は12時、夕食は午後4時というように、いかにも病院らしい。しかも夕食後は明日の検診にそなえて水一点ものむなという体制。午後早目に林県議が、そして夕方に古沢補佐が見舞券々やってきた。古沢氏は昨日の県民マラソン大会の私のスタート時のモノクロ写真一葉、毎日新聞(檜原氏)からということでもってきてくれた。秘書室一同ということでデンドロビウム2鉢連も飾ってくれた。林県議は副知事問題と一般人事問題を話題にした。野党から出された浜中推挙については3月8日に私の方から各党幹部に拒否の通告をする順序となるなどを含み、なお当面は流動的であるとの説明であった。副知事人事だけを切りはなして他の出納長、教育委員などだけでもという野党のいい分については、支持母体の声などからんで、不可分説を貫く構えをとるしかないといっていた。只この構えがどこまで通用するかについては野党の出方、当方の説得力いかにかかっているという。

2月21日(火)晴

久しぶりに本を読む

2日間のドック入りでどれほど自分の時間がとれるかと期待したが思いの外キリキリ舞いだった。暇をみて、テレビを見ないで読書にかけたが、問研パンフと、「懺悔の鉄」200ペ

一頁余り読んだだけ。パンフの方は正誤校正の積りで読んだのだが案外校正もれが少いのにおどろいた。博多柳町の芸者・娼婦から篠栗霊場の尼僧に転じた女の生涯をえがいた「懺悔の鋏」は久しぶりに読みおえた小説風伝記。小郡の横田豊次氏が筆者で、この本は筆者から知事室に届けられたもの。少々きれいごとすぎるようだが、素人が苦心して集めた資料をもとに脚色してかかれています面白かった。美文すぎてとは思いますが、われわれにはとてもまねられぬ描写が多い。もう一奮発して自然に書けていたらと思わぬでもなかった。歌を詠じたり句をひねったり紀行文を書いたり小説を綴ったりするにはそれなりの観察眼が平素からあって事物を鋭く見ていなければならない。近頃いつも思うのだが、芸術家や文筆家は偉いなあ、とても真似はできそうにない。実業家、政治家、学者など、もっと平凡な者でもつとまりそうに思う。横田さんはもう年だし、素人ではあるがよくも努力して書いていったものだと感じる。チャンスがあれば会ってみたいと手紙を出しておいた。

2月22日（水）小雨

高校授業料値上げ

県立高等学校の問題をめぐって福岡教育を考える会のメンバー30人近くが午後陳情に来て、庁議室で応対した。こんどの予算に計上してある月600円の授業料値上げ反対が主たる目標だが、他に私立高校への県費助成の増額（私立高校への公納金値上圧力緩和の意味）及び公立高校増設（クラス定員増及び学級増による収容増対策反対）を陳情の内容としていた。共産党がかかった連中じゃないかとうわさする職員がいたが、以前から公立高校増設運動を熱心にやってきた人達で共産党の筋が直接入っているとは思われない。地域懇にも関係したことが嘗てあった。子をもつ母親のすなおな意見を代弁しているように思う。ただ、彼等の願いが行政にどう反映されるについては様々な屈折がある。現実の固い障害は公私収容比率という歴史的なもの、政府の財政指導、県の財源又は財政制度がそれである。こうした伝統、権力、制度は時間、勢力の要素を加味せずにはなかなか動かない。知事がかわったからとて動かせるものではない。授業料の値上げ分はそっくりそのまま高等学校の運営費、施設改善費にまわすことにしているし、定時制、通信教育については値上げしないこととし、私立校への県費補助もできるだけ配慮している。これくらいはできるといっておいて、無理だが納得してくれと伝えておいた。陳情の中にはこのようなケースが少なくないのである。

2月23日（木）雨

自民党と手を携えてマスコミが

高校の授業料値上げは国の指示ですでに昨年からは実施している県が20余県に達しており、未達成の県は交付税算定の際に収入増ありと見込まれるので、それだけ損をさせられる仕組みであり、今年中に残りの県は奈良を除いて全部値上げに踏切るといふ。又県によっては

全学年一律に値上げする例も数県に及ぶが、当方は来年度入学者に初適用（学年進行）する。従って同じ値上げでも他県にさきがけ、他県より配慮しないでというのではないはず。それでもいわゆる革新団体は総じて反対だし、マスコミは好んでそれ「矛盾」といわんばかりにこの問題にふれたがる。マスコミというのはそういうものなんだが、それだから好きになれない。周辺の人達も私がこの値上げ問題に否定的、消極的であることを願っている。その願いが現実の行政に反映しない点、平素から私がその願いに組つつ逆のことをやっている点、それをマスコミはつつきたがる。また支持団体の中にはとくにその指導層はその矛盾をみて落胆する、マスコミはそれをよろこぶといった具合である。二月県議会を前に野党県議の思惑の端々が私の耳に伝わってくる。西日本新聞に59年度県予算案の批判めいた解説がでる。ブンヤたちは自民党の控室をまわって奥田批判の端々をきいてオームがえしに、さも真理であるかのように、第三者的であるかのように、それを書く。

2月24日（金）曇

小柳勇参院議員の活躍を祝す

小柳勇氏の出版記念参議25年在職祝賀会が6時からグランドホテルで開かれた。県下主要各界とくに労働界、社会党系の人が多かったが全国規模の参会であったこと間違いない。稀に見る盛大なものであった。国鉄労組門司をふり出しに労働界で戦後30年代はじめまで国労委員長や県評議長など主要ポストをすべて経験し、昭和33年の参院福岡地方区補選で当選以来今日までずっと参院に議席を占め、国会活動の重鎮ともなっている。明治45年生れというから私より8歳多い。まだ健康そのもののようにみえる。昨年の知事選のとき、門司、小倉地区の若干の実業界をこまめに案内推薦してまわってくれたのでとくに感謝したい。平素から積み上げた顔の広さがよくわかる。社会党議員は各級とも、こういうタイプ（組合依存脱却タイプ）の人が、退潮の中にあって息永くもちこたえているといえる。もちろん決して悪い意味ではなく、そのプラス面はこまかく分析して結果を一般化するように努力すべきであろうと思っている。小柳氏の場合とりわけ感心したのは25年間絵筆をもちつづけてきたということで、「国会の窓から」の第一篇にも20枚ほど選んでのせてある。明るくすなおな、かつせんさいな絵だなどと思ってみた。何でもそうだが、絵も対象の観察、その把握において人があらわれる（技は別として）その意味でこれらの絵は小柳氏自身である。

2月25日（土）

小早川と西日本新聞が提携して...

西日本新聞が奥田行革批判を久山町長小早川に語らせている。奥田行革の焦点がぼけている、県職員を減らすのか否かをはっきりさせないと何にもならないという論調である。じゃ久山町が明日からでも職員減を断行して見本を見せればいいだろう。パーキンソンの法則ではないが、行政ニーズの増大により、行政職員増の需要はものすごい。従来亀井時代の16

年間にかなりな手段を講じてきたはずである。でなくて、今あちこち合計して剩員があるというのであれば亀井の責任だったのではないだろうか。人員の減を目ざすのでなければ行革とはいえないと小早川はいう。独断もいゝ加減にしてくれといいたい。西日本新聞がこの変り者をほめてもち上げてきたいきさつがあるので、この田舎侍が独断を思い上って吹聴するのである。行革懇のオープニングのあいさつに、知事が職員減を前提とした諮問をしたと仮定したら、それこそ大騒ぎになること必定である。小早川はそれを知事がいわないから県の行革は何を意図しているかわからないといい、西日本新聞は何十万の県民にそれをわざわざ報道する。小早川を又もち上げて、偏見をさも第三者的に見せかけ、正論であるかのような文脈に綴りこんで……馬鹿くさいことこの上もない。他の新聞は見えないが、西日本新聞といゝ小早川といゝ、何と田舎臭い幼稚な存在であることよ。

2月26日（日）曇

忙中閑

日曜日が全部自分の時間になることは稀で、今日は書庫の方も少しは整理が進んだ。それでもまだまだきちんとなるまで程遠い話である。原田さん、伊藤さん相ついで近所の人に来訪、久しぶりである。原田さんは私と同じ年、背骨にできものができたとかで入院退院のくりかえしという。心臓にも機械が入っているとかいわれている。その点私の方がはるかによい。知人が生花師で、知事室に花を生けたいがよいかとの申入れがあった。知事を慰めたいとの意であるという。秘書室がどのように応待するか私には今わからない。伊藤さんはわが家の改増築工事の請求書をもってこられたが利潤を見込まないで750万円ばかりかかったとのこと。7坪ばかりふえたことになるだろうか。6坪かな？あまりこまかく考えてみたこともない。先だって彼の知人に扁額用の揮毫をしてあげたのが、さらにそれを見た人の所望があつて、お願いできるだろうかといわれたのでOKの返事をしておいた。洋間が広がったので揮毫には割に便利なスペースができた。数日前企画開発部長が中国にいつてきての土産に、中国の墨をもらったのだが、中国は本場の割には、この種の品物は日本のに劣るような気がする。筆墨の類がこうしてどっさりたまってきたので、どんどん書いて消耗していかねばならない。暇さえあれば書くことにしよう。

2月27日（月）晴

観自在

北海道知事に期待するという題で1500字の原稿を書いた。何にのせるのか知らないままだが、注文原稿である。こういう場合に思ったように書けない不自由はある、が少数与党ということで苦勞しているということを中心に書いた。その中で、苦勞のゆえに、般若心経の冒頭にいう「観自在」がわかるようになったような気がするということにもふれた。すべてを不偏不党の立場でみること、すべてから見られているということ、その承認と自覚ができた

ように思えるのである。もちろんまだまだ中途半端ではあろう。が10ヵ月前の就任当時とくらべると、全くちがっている。しかし、反面、自己がなくなったことは、やはり淋しい限りである。心身ともに自己を再生産する時間がほとんどなくなり、消耗する一方ではないかと思えるような多忙さでこれまた気がかりの限りである。以前、仏像のことを日記に書いたことがある。今でも知事は仏像のように振舞うことが要請されることを感ぜざるをえない。怒りも笑いも、アバタもエクボも面長もダンゴ鼻も許されないのが仏の面である。若くもなく、シワづらでもない仏の顔、それが知事に要請される政治的ツラである。多数与党の上にあぐらをかいていたのでは、こうまでは要請されないであろう。野党自民党やマスコミは阿修羅か餓鬼のようなものといえる。

2月28日(火)

高田源清と添田山本町長

自民党に呼応して昨年5月頃奥田知事辞任要求署名のトップに立っていた男、高田源清が今日、県の消費生活審に出席していた。新たに任命したわけではなく、亀井時代からの委嘱者だろうが、昨年そういう行動をしていてよくものうのうと今日出てきたものだ。また、今日の町村長会議に添田の山本町長が、以前から反奥田連合を作ることを提唱していた後をうけ、今日の会議のあと、残ってもらって連合を結成したらしい。30人ぐらいとのこと。この提唱の策動について志免の南里町長から反対されていたのに、強引に今日の結成にもっていったという。山本は秘書の女性をひっかけているというので、金田町の犬丸らが、勝手な動きをしたら暴露してやるといっていた男である。今後自治労を通じ犬丸らがどう動くか注目される所だ。山本は自民党幹事長田中六助をバックにもっているだけに一すじ縄ではどうにもならないだろうが、動きとしては少々早すぎて彼にとっては不利になるのではないだろうか。30人の町村長がついてきたというが、それでは大した力になるまい。産炭地問題をかかえ変な動きをしては為になるまいと思うし、多くの町長は日和見するに違いない。目つきの悪い、いかにも悪党といった男。福岡の財界でも、奥田支持が固定化してはいかんと危機感をもっているらしいが、これと連携しよう。

2月29日(水)

篠田栄太郎と高岡新

議会の代表質問がはじまった。一日二人答弁も2時間はかかる。聞いている時間も入れて4時間余、実にしんどい日々がこれからつづいていく。自民党の代表質問は下品そのもので、無視できるので精神的な圧力以外は答弁はかえってやさしい。カラ威張りが強く、自分達を高く知事を低く評価すればするほど逆効果があることをご存知ないようだ。議事録にも永久に残されるので面白い。篠田栄太郎が質問のピエロ、高岡新が野次のピエロであった。白石(社)はじゅんじゅんと発言してききごたえがあった。ただ、篠田みたいな質問は答える

必要はなくてもむやみに神経を刺戟するので精神衛生上よくない。どうも近頃そうした無形の刺戟が強いためか睡眠が浅くていけない。昨日今日睡眠薬をのんだ。議会というものは言べんの議でなく、人べんの儀でありながら、知事にとってそうなのであって県議にとっては無礼も無礼、横着も横着、いいたい放題したい放題の場であるわけだ。篠田のものいい方にしろ、高岡の野次にしろ、下品そのものだが、一方通行のそれである。馬鹿だのチョンだのまぬけだの、そうした類のことは何をいっても議員発言ならまかり通り、知事なら少数与党下、半分の失言も許されないのである。

MEMORANDUM

28日の私の日記の記事が29日の西日本新聞に右の切抜きのように報道された。山本に呼応して、荻田の尾形町長もはげしく動いているらしい。あまりいい結果にならないのではないだろうか。自治労はだまっていないはず。

【「知事選にらみ旗揚げ 県内保守系町村長懇が発足」(『西日本新聞』1984年2月29日)の切り抜き貼付】

3月1日(木)

観自在

今日は緑政連と公明が、昨日の篠田(自民)同様にはげしく自分だけが正しいかのごとく知事を攻め立てた。予算について公債を発行しないでおけといいつつ、もっと農業予算を組めだの、大濠公園の浄化は今をおいてないのになぜしないかだの、全体をみないで勝手な質問をどんどんやる。答弁を読むのに一寸つまると勉強が足りないといい、すらすら読むと官僚の書いたものを棒読みして心がこもっていないという。ゆっくりやると時間をかけすぎるといい、早いと何をいつているかわかりにくいという。自民、緑政、公明がこぞって知事攻撃をやる。きくところによれば、自民が議長をとり副議長は他が分けあうという約束があるらしく、公明が筋がとおらなくても自民に加担するのは、ひょっとして副議長のポストがまわってくるかも知れないという思惑のせいらしい。これほどに汚い。今日代表質問に立った緑政の山本にしても口が悪い。自民へのおべっかとしか思えない態度である。知事10ヵ月をへて今の心境はというような関係の薄い質問をしたので、般若心経の冒頭にある「観自在」の状況に少しでも早く一歩でも近づきたいといったが、ここで宗教の話を書いているんじゃないと自民(多分高岡)から野次がとんだ。記者達もどういう意味かわからんと原田広報室長を介して質問してきたので、勉強しろと突き返した。

3月2日(金)

補助金リストの調製

自民の三木清が一般質問の中で気負いすぎてへんなことをした。あとできいたのだが、西日

本新聞の熊谷がこの仕組みに関係していたのではないかという。三木は自民らしく、勉強なしの、あらん限りの悪口雑言で知事攻撃をする中で、人気取りをこめて、高校授業料の値上げなどしないでも、財源は補助金を削れば出るはず、補助金リストを出せといった。私は調製してあとで出すといったら、彼は怒り出し、質問を中断してしまい、時間がすぎて次の上島に質問がまわった時、知事席に歩み来り、俺に恥をかかせた覚えておけとの捨てせりふを吐いて去った。記者たちも、資料調整と感^マ違^イいしたというのだが、調整と調製の違いぐらいは語呂で区別してほしいのだが、それができない。三木は私が補助金リストを出さないと返事するだろうと予想したのに、出すといったのでびっくりしたらしい。補助金リストを出すと、亀井の姿が浮彫りにされてしまう。三木は言いすぎた訳だ。だが熊谷も三木も補助金が知事の県民とのパイプであることを知っており、これを断ちたい本心にはかわりない。返り血が亀井に浴びせられてもこれを切ろうとする底意には違いはない。私も補助金が無数にあって県民各層とのパイプであることはわかるし、疑問点が多いことを知っている。これを切るなら自民党に切らせるよう工夫しなければならないと思っている。

3月3日（土）

県民大衆の温かい目にこたえたい

午前中死亡者叙位叙勲伝達式、午後粕屋新光園創立30周年記念式典、午後県職労青年部第15回春闘勝利奥田県政推進駅伝競走が大濠公園であった。これらに出席してあいさつその他の役割を果たした。県農協の食糧輸入自由化阻止大会にも出席した。いずれにあっても知事が出席することに意味があるというだけではなくて、私の出席を大へんよろこんでくれたということが、私にとってうれしいことであった。新光園ではあいさつに立った人の中に、紛争のことに言及する人があったが、それを裏打ちするかのよう、ここの寮母たちは受付け、玄関先の見送りなどで私に対し温い、熱いまなざしを、笑顔をプレゼントしてくれた。大濠駅伝では、やいのやいのの大歓声があがった。1700人の参加というが私のあいさつに大拍手の波、一しょに写真にうつってくれとの注文が相ついたりした。叙勲伝達では93歳になる人が一緒に写真に入ってくれと特別注文、涙さえうかべてくれた。農民決起大会でも、私のあいさつをきく会衆の目はたしかによろこんでいてくれることが壇上から読みとれた。もちろん遠藤政夫など腹の底のわからん人にも保守層として同じ目で接したのかも知れないが、とにかく県民大衆は温くみている。

3月4日（日）

書譜の書法索引づくりの話

牧坂氏に電話をしたら午後やってくるという。先日中国書法大字典一冊を恵贈したときの約束をはたす目的をかねて呼んでみたわけ。私は以前孫過庭の書譜につき、一字一字何行目にあるかを全部しらべて記録したことがあるが彼はそれを貸してくれというので貸したの

だが、今日一段とよくそれを整理したのをもってきて今後どう作業したらよいか相談しようというのであった。ただ私のと彼のと原本が違うので、私のを雑然とした書庫から見つけ出さなければならないので、しばらく待ってくれと頼んでおいた。それにしても細目にわたる仕事を骨惜しみなくやる彼の根元にはびっくりしてしまう。大字典に出てこない字がたくさんあること、同じ意味の字なのに一寸違う綴りになっているのがあること、和而不同という言葉が書譜の中にあることなどあれこれ書道上の楽しい話を交わした。今久留主さんを同伴してきていて、夕食をはさんでマージャンをした。今回は今久留主さんの一人勝ちであった。久々の休みのようだったが楽しくすごした。朝中西忍氏から電話があって近況を交換した。ムチウチ症がなおならないまま家業は何かやっているとのことだった。

3月5日（月）

済生会にかわるという問題

済生会病院の方から私が浜の町にかかっていることについて、こちらにかわってくれとの問題が出され、今一寸ホットな問題になっている。私が済生会の会長としての位置にあるから、会長が他病院にかかるということはおかしいという理くつである。知事になって10ヵ月余り、浜の町病院をかえずにいたのだが、もうそろそろと済生会ではいい出している。浜の町の藤原主治医には、もう15年もお世話になっているのでなかなかいいにくいとは思うのだが、済生会の井上常務が先日藤原先生に会い、事情を説明して納得を求めたが、藤原氏は、済生会には専門医がいないのではないかと、又教養部の学医藤野氏の紹介で藤原氏が主治医になった経過があるが藤野氏は了解するだろうかという二点について疑問をはさんだという。済生会の小川副院長が主治医となるのではないかと思うが、小川氏は第三内科、藤原氏は第一内科ということで九大内部の専門のちがいという背後事情も感情的に作用しているかも知れない。いずれにせよ、この忙しい議会のさなかに、厄介な問題が生じたものだ。医者どうしのことなので、そちらで話をつけてくれればよいのだが、そういうわけにはいかないらしい。まさに「政治的」である。

3月6日（火）

自民党、この汚い利益集団

どんどん日がたつ。県議会は今日夕方一般質問が終り、ヤマ場がやっそこえられたというところ。知事室に戻ったところで、教育委員長田中氏が来室、欠員になっている教育委員の上程をこんどはぜひ頼むということだった。副知事出納長など三役人事の難航の巻きぞえをくらった恰好の教育委員人事だが、亀井が任命したものを任期切れ再任という線なので、それほど気の毒には思えない点がある。自民党はこの線を死守しようとしている。本人のよしあしということではなく、あの利益本位に凝り固まった自民党が推す所に問題がある。こんどの議会の次の山場はこれら三役人事にあるが、自民党は教委だけでも喰い逃げできたら

あとは知らぬという態度に出るに違いない。汚い党である。昨日、町村会館でだったか、添田の山本文夫町長が先頭に立って次期知事候補擁立の正式旗上げがあったという。遠藤政夫と連動していることは見えているし、この動きに自民党県議が連動していることも見えている。教育委員の補充が、そして三役人事についての県議会の動向がこれにからんでいる。自民党県議がこぞって知事に浴びせた人事問題の攻撃は放置、無責任という言葉だった。己れたちが立ちはだかって困難にしている三役人事なのに、責任を私に転嫁して悪口雑言を浴びせたのだ。

3月7日(水)

食事内容にもっと気をつけよう

県議会条例委が知事出席を強要してきたので、予定の確定申告に行く見せ場はなくなった。税務署は知事が申告に来る所をマスコミに見せて絵にして一つの宣伝にしたかったらしいのである。進藤市長が2200万円、私が1100万円級の収入だとのうわさ、ひとまかせだからよく知らないが、絵にならなかったわけ。今日はもう一つ済生会病院でさきの人間ドックの結果説明会があったのだが、これも秘書の者がついてみゆきが行ってくれた。糖尿について食事に強いコントロールが必要なこと、肝臓に若干の異常があるため食後の休憩をできるだけのさぬようにすること、膵臓に若干炎症あとがあるという程度であった。松尾参事が休んでいる。風邪らしいが、私に感染させてはいけないとの配慮もあるらしい。ともかくみんなが私に注目している。自分ではまだ自覚が足りないが、有難いのかどうか。観自在というのを議会答弁にも用いたが、森山君も近頃私との対話の中でさかんに使っている。有難くもないことだ。それにしても健康についてはもう少し自主自覚を強めないといけないようだ。食事が不規則になる生活環境にあるからなおさらである。

3月8日(木)

三木清県議の誤算

三木清自民県議の発言の取扱いをめぐる水面下の話合いが思うように進まず本会議を開いて2月予算を議決する予定が流れてしまった。彼はガンコに主張をつっぱね同僚のいい分にも耳を傾けず資料要求を撤回しないでがんばっているらしい。先日の知事答弁で彼が「恥をかかせた」と怒ったのは調整と調製の違いではなくて、資料提出要求を当然知事が拒否するだろうからそこで、情報公開を主張しているくせにと、詰め寄る作戦を立てていたのに、私が資料提出するといったので当てはずれになった、そのことを怒ったらしい。だから今補助金資料など調製して出すと自民はもちろん全議員それぞれ何らかの関係で不都合なので、提出要求を撤回するよう周囲がなだめているのにひとりメンツを立てるみたいに、ガンバッテいるらしいのである。まるでダダッコのようだと評され、あれが川筋のチンピラヤクザの姿という人もある。今自民党県議は開会中の県議会という絶好の奥田攻撃の機

会をどう利用するかの方途を真剣に模索しており、どんな手でも用いようとしている。三木がチャンピオンを買って出ているのだが、川筋だけではうまくいかないらしいのだ。長い目でみて県民がどう判断するか、県職員がどう思うか、小さくはない。

3月9日（金）

医師界の行政への期待

産業医大の土屋学長、県医師会長らと産業医について座談会を行うことになった。この席に昔加茂さんから紹介された産婦人科医長野氏も出席しているのにびっくり、あいさつを交わしたのだが、長野氏は県医師会の副会長とのこと。石田会長とは救急制度をめぐる何回か顔をあわせている。土屋学長とははじめてだが、よく話す人だ。産業医大は全国一つしかないが、産業医養成の特別内容のあるものであるにかかわらず、産業医の専門性が一般に認識されていないで一般医師が片手間で産業医制の中にとり入れられているため、産業医大そのものが一般の医学部、医大と同様にローカル大学になってしまい、大半が福岡県下の医者になってしまう傾向があるということを歎いていた。同じことは出席者の他の人からも出された懇親会の席での話題であった。医大が各県に一つずつ設置され、今や医師過剰時代になりつつあるので、医師界では危機感がただよいはじめている。そのことが背景にあって、医師界では検診制の徹底など行政への期待が大きいようだ。国民の健康の維持増進がそれで前進するならいいことではないかと思う。医師会もそういう行政に期待するらしく、国に先がけて産業医の充実、検診制の拡大を主張している。

3月10日（土）

眠れぬ日々

まだ外気は冷いが春が確実にやってきた。冷たさの中にもそれが感じられるこの頃である。知らぬ間に梅はもう満開近いし、中洲あたりの柳も黄ばんで来たし、桜とともに芽がふくらんでいる。昨日中洲仲柳での医師会との懇談の席には白魚のおどり食いが出た。春というのに、議会がらみの日程が身を拘束していて窮屈感を与えている。そのせいだろうか近頃眠れない日がつづく。医師が処方してくれた薬でも連用するのはよくないと思って、ゆうべも夜9時半すぎ就床したが十二時すぎても眠っていない。時計の打つ音が30分ごとに確実にきこえる。何事か思い煩うとか、思い詰めるとかということではないのに、頭の上の方に何か凝縮しているようでもある。頭痛ではないが、それに近いともいえる状況。むくっと起き出して薬を飲んで、こんどこそはと思ってねる。うつらうつらしたので眠ってはいたのではないだろうか。予定された通り7時半頃起きたが、気分爽快ではない。鉄壺鈴を振るのも一寸吐絶えたので気を持ち直してやり直すことにした。昨夜今朝復活したが、その前2日ほどやらなかった。今日は県庁の階段徒歩昇りも2日ぶりに復活した。運動不足を補うのによいのではないかということでこれも気を配っている項目。春というのに楽しみはない。

3月11日(日)

江嶋歌集“碌々”

先日江嶋寿雄先生から歌集“碌々”をいただいた。定年退職というものがこんなによいものとは思わなかったと、退職後の感想をきいたことがある。最近中沢貞治先生にいただいた手紙への返事を書き、又手紙が来たので電話で話していたら、同じ意味の感想がかえってきた。私も知事にならなかつたら今年定年になるのに、今は逆に毎日が忙がしすぎるというおいた。定年後悠々自適の味はよいにきまっている。張りが抜けなければよかろう。江嶋さんの歌集には“知命以後”(昭和34年7月以後)という副題がついている。その開巻のはじめの歌に

警官に押されつつデモの学生ら事なくて昂奮の時過ぎにけり
事起らば警官の前に立たむと教師われ心定めてデモに並びゆく
反対の意志抱きつつ安保改訂進むを見つつなす術なきを

など60年安保の昂奮が生々しくうたわれている。もうあれから25年近い月日が流れた。若い日もあったわけだ。世界は年々刻むように変わっていく。誰もその方向は知らないだろうが定めによって変わっていく。

3月12日(月)

何ともあわれで汚い自民党作戦

朝早く庭師が来て狭く汚くなった庭を再生する仕事を始めてくれた。夫妻協力の形である。西の方だけでもよくなるとしよう。今日も一日県議会予算委は総務部長いびりで空転したらしい。彼が自民党のターゲットになったらいい。亀井の腰巾着といわれた池ノ内氏だが近頃は奥田寄りになってけしからんというのが理由。必要に応じて忠実に動けばそういわれるのは当然ともいえる。それにしても目的のために筋も手段も選ばぬ多数自民党の横車が通用している。はじめは腹も立つがここまできると射手の三木清はあわれさえ感じさせる根性のさもしさである。先日の本会議で補助金要求をしたので私が調製して出すと池ノ内の紙片通りに答えたのに対し、出せないとの答弁が出るのを期待、それを待って出せないとは何かと畳み込んで議会を休憩混乱させ知事陳謝にもっていこうと謀らんでいたのに出すと答弁したので自分の筋書きが狂い、その後は、総務部長からの提出資料にいちゃもんをつけ出したのだが、補助金資料というものは到る処で提出不向きであることがわかり、自分でも引っこみがつかなくなったので、何とか納めたいと思い出し、面子をつぶさぬ方法として、資料を出せといった者よりも出すと答弁した知事が悪いということにして最初の所に戻り、知事発言取消しでケリをつけたいと申出ている。

3月13日(火)

小さい声での知事発言

中楯興氏がはじめて知事室に来たといった。パヨンの話がでて、波多野で中食を共にした。4時半頃「只今から本会議を開きます」の庁内放送があり、行ってみると途中やんやのせかせやうで一寸異様な雰囲気。議場に入ると議席は定数をこえてみんな席についていてがやがや、執行部も揃っている。秘書の手まわしが狂ったらしいのである。きいてみると五分ほど遅刻したことになる。着席すると直ちに議長から、知事から発言の申入れがあつているというので、予定の原稿を30秒ほどで読んで帰席。途中、声が小さい、何いつているかわからんと野次もとんだが、それきりで本会議は休会に落とされ、10分後に次の日程をきめて本日はこれで終了。私の遅刻について、自民席から知事が来んなら帰るぞという野次もとんでいたという。知事室から議場まで5分はかかる。今日は予告なしの「只今から」の放送だったのだが、秘書の方で議運の成りゆきについての観測に甘さがあつて、知事室にいた私への連絡がうまくいってなかったようだ。議員たちは3分5分遅れることが平気で開会5分遅延は当たり前みたいになっている。知事は遅れると不可という。こういう雰囲気の中で少しでも失点を少なくすべきだが、私は意識で抵抗して小さい声で発言したようだ。

3月14日（水）

三光園などにできるだけ行くまい

6時半から三光園で企画開発部招待の小宴があつた。明日黒木で大規模年金保養基地の起工式があるので年金福祉事業団長八木哲夫理事長らの出席のための来福を迎えてのものなのである。今日東京は又も大雪とのことで板付着がおくれたということで小宴は20分ほど遅れてはじまつた。私は30分余同席して引きあげた。すぐにと思ったが、一寸失礼すぎると思つてのぼした。出席することにすら抵抗があつたし、この小宴を準備した企画開発部には他の機会に小言をいっておこうと思つている。その理由は、企画開発部を責めるのではないが、今日の議会で江口が知事は三光園に何回行ったか、自分は調べている、この場で公表してもいいかと予算委員会で私を攻め立てたので、私は好きで行つているのではない、酒も決して好きではないと答弁しておいたのだが、この答弁の裏には、私に決意せしめるものがあった。以前にも三光園などあまり利用するなと秘書に言つた記憶があるが、できるだけこの種のものには今後近づくまい、目にももの見せてやるぞと思つたのである。松尾氏にそのことをいい、今日は早目に帰ると行つて車を待たせることにしたが、松尾氏は刺激的ないい方にならぬよう、次に予約があるのでというくらいにして引揚げたらどうかと私に忠言したのだった。

3月15日（木）雨

陳謝が多く「つまらん」とイメージダウン

2月補正予算が今日ようやく、関係条例とともに本会議で通過。例によって各党あいさつまわりをした。吉村裕子さんからの手紙で、いつも陳謝ばかりしているように新聞に書いてあ

ってかわいそうということが書いてあった。全くその通りで、自民党の作戦で、これによりイメージダウンをはかっていることは確かだし、それに乗る方も確かに下手だというしかない。ガマン、ガマンと人はいうが、そうばかりしておれない気持を察する人は少い。自民党もマスコミも私をより小さく、つまらなく、県民に見せかけようと懸命に努力しているように思える。それは県議が威張ってみせ、質問で私をこきおろしてみせることであり、私がそれに対抗すると、議事ストップを策し、収拾案として知事陳謝弁明を引き出すというやり方である。何回もこの手に乗る。周囲の人はそれを諫める。が、私はわかっているがそれを敢てする。人々は失言が多いという。私は失言とは思わないが、陳謝、弁明の形をとって幕引きとなるからそれを失言と呼んでいる。売り言葉に買言葉ということもあるが、あまりの悪口雑言には時には反撥をすることになる。与党の人達ははらはらしているが、時に失言、釈明があってもいいのではないかと自分では思っている。

3月16日(金)

社会主義協会福岡県支部の心配

今日は3時半に帰宅した。こんなことは滅多にない。安達氏が示し合わせて中川、高崎の二人を伴ってやって来た。高崎は甘木出身で最近郵政を辞職、協会専従になったという。渋柿をもって来てくれたり、馬肉を食わせたり、私に思い出の多い男で、協会活動のセンス、気力は群を抜いている。3人の来意は、中川が新に「奥田県政推進のために」という県政プロジェクト担当になったということで、方針を示し、県政について宣伝戦を改めて強めようというものであった。4月21日(土)は奥田県政出現一週年に当るので、県民の会主催の大規模な集会をやるという。こういう計画を含め、今後、県政全体について、庁内機構、情報公開、行政改革などの諸問題の方向づけ、各種団体のまとめ役、市町村レベルの総立ち運動の具体化などいろいろのことを考えているようだ。私にも不満足感が鬱積しているだろうということを理解した上で彼らには彼らなりの積りがあるわけである。一般の県民の中にも同様の空気が満ちているはずである。自民党多数がこういう情勢をつくり出しているわけである。反奥田町村長会の動きに機敏に反応した中川達である。これから、かなりやり出すだろうと期待している。今日は刷り物をもって来たが、長居せず引揚げた。

3月17日(土)

護岸工事で川は管理されていく

宗像街道を水巻まで、今日は葬儀(助信宅)で往復した。途中やや渋滞した。土木関係の車が多いのには驚かされる。大型車なのでこんなのが縦横にかけまわるとこちらは気分はあまりよくない。郡部は至るところ工事、とくに河川の護岸工事が目につく。河川は大小さまざまだが、両岸がコンクリートで固められていくようにみえる。何故こんなことをするのかよくわからない。何億円という予算が次々に投入されていくわけ。明治以来何年たつのか、

近年とみにこの種の工事が多く、自然が死んでいくように思える。ホテルがいなくなったことでもそれがわかる。今後どれほど予算を食うのか知らないが、中小河川みんなコンクリートで兩岸を固め、管理された河川になってしまうに違いない。洪水があるからそうするのか、洪水をなくするためにそうするのか私にはわからないが、洪水があってもいいのではないか。それがむしろ自然なのではないか。その自然を残すべきではないか。自然の変化に応じて、その対応で人間が生きてゆく手段を講じていいのではないか。結論のえられないことを考えつつ、今日は宗像街道を走ったのであった。

3月18日（日）曇

研究者的興味と行政者的責任

自民党の山崎拓代議士と午前中の博多織100年記念（あけぼのの祭典於スターレーン）と県商青連設立総会（於甘木商工会議所）との二ヵ所で顔を合わせた。彼はさっと来てしゃべってさっと帰り、おくれて来てしゃべってはさっと帰る有様。もの一ついわないまま、高くとまっているようにも思えるし、どうも政治家というものの生き様がもう一つ呑みこめない。あんなにくるくる廻って顔を売る必要があるのか不思議なくらい。花環だけ、電報だけという人もある。それをわざわざ紹介する方もどうかと思うが、習わしがそうなっているらしいし、立場をかえて知事の場合もそうした例が少なくないと反論されればそれまでである。政治の世界というもののいやな面である。広告料だと思えば電報の一つ、花環の一つは高いとはいえないだろう。それにしても心の通わぬ行為ではないか。あいさつをするにしても通り一ぺん、儀式としてみんながそれを受けとる、妙な社会心理ではある。ところで、夕食をしながら藤井文化課長はいいことをいった。歴史資料館の調査員たちが研究熱心なのは結構だが、医者が研究と臨床の双方に心懸けねばならぬように、調査員たちも学者的興味だけではなくて、行政的責任も考えてくれなくては困るという。九大の学者に史料を扱わせると、己れの研究上の興味からだけでそれを見て食いちらかす。行政はそれではいけないと。

3月19日（月）

福岡女子大の卒業式

体育館での卒業式は大変冷えこんだ。ちょうど一時間かかった福岡女子大の卒業式で、久々に袴姿の女子学生をみた。清楚な感じがしていいものだ。テレビ社のインタビューにもその旨答えた。80%はそれぞれに就職がきまっているという。来賓祝辞は私一人だった。三年生の送辞、卒業生の答辞はともによかったし、高橋学長の訓辞も大へんによかった。これから先どういう生活をするのか知らないが、若い新しい力が世に送り出されることは確かである。送辞にも答辞にも訓示にも女の道は出てこなかったのに、知事祝辞の原稿には婦人問題に言及した部分があった。私なりに原稿のない祝辞をのべようと思っていたが、松尾氏が今

日は原稿通りに読む方がよからうというのでその通りにしたが、現場を知らぬ者の祝辞といえるものであった。ここには女はなく、若人があったのである。そのことが原稿には忘れられていたし、それだけに古さがあるともいえた。私は原稿なしに、一般に新しい人生への門出を祝福する言葉を送ろうと思っていた。ともあれ今日は私ひとりが祝辞をのべ代議士や県議の祝電など政治のにおいがするのがなかつただけにすがすがしかった（県議会議長、文教委員長副委員長の名では祝電はあったが）のが印象的であった。

3月20日（火）

観峯宗家

六字齋観峯先生には、昨夜はじめて会い、七転八起の書をいただいて帰ったが、今日は30周年記念式で色紙と軸一幅をいただいた。ラッキーというか、昨日今日は観峯宗家の当り日といえる。大丸での観峯近作展で作品を見ただけで般若心経五体書範、細字名詩書範、字のくずし方要領の著書3冊を買って帰り、まっすぐな本来の字体にふれる形にもなった。記念式典でもらった色紙と軸は早速床の間に飾ってみた。床の間が生きてきたように思える。七転八起のダルマ絵は、後に軸物に仕上げようと思っている。一日に100枚ぐらい半切を書くことがあるらしい。どんどん書いて書き損じがないなら、大変な価値物の生産である。大丸でみたのは正価一幅20万円近い。一芸に通ずるとか芸は身を助けるというが、ここまできるとわれわれは全くの高額で手がとどかない。天才的なものを持ち、誰もがまねできぬ努力の積み重ねがあったであろう。凡人は凡人らしく生活すればよいのだが、非凡人のまねを少しでもしたいものだ。議会でつまらん質問に翻弄されていたのではとてもかなわない。昨日今日その意味では思わぬ別世界に遊ぶことができてよかった。

3月21日（水）

自民党の攻めに問題は残る

自民党一年議員と天神でモツ鍋をつつきながら歓談した。伊藤労働部長が私を誘ったのが吉村元秀氏が集めたグループらしい。伊藤氏が本音を出し合ってよいではないかというのである。自民党には自民党の建前があつて知事にいやな質問をしているのだが、知事がまともにつかかってくるから県議会が荒れることになるという。それは事実だろう。が彼等もそれを正攻法だとして攻めているが、案外、県民の批判があつてこれを気にしているらしい。だから、すれ違いの答弁でもいいのだといっているみたいに聞えた。自民党が攻めあぐんでいることは確かなうわさ。私にしてみれば、無理矢理に、攻めなければいけないから攻めているみたいにみえる。今日もまた予算委員会は財政課長を攻めて審議がストップしたらしい。無理な資料要求をしているらしい。こんなことをしていると、マスコミさえソッポ向く。そして自民党以外の会派もいい加減うんざりしている。否自民党の中にも批判がチラホラ出ているともいわれる。今日出席の武藤氏は、従来のしきたりを打破しようと主張して

いたが、きれいごとではなく、ルール無視、慣行無視の無政府状態を作り出しているといえるくらいである。どこかで行き詰るのではないだろうか。私は、もちろん、慎重に言葉を選ぼうと自分にいいきかせてはいる。

3月22日（木）

落款

落款とは落成の款識（かんし）である。款とは凹印、識とは凸印のことと辞書にいう。書いた人が名（凹印）と雅号（凸印）をおしたものの称というのである。平素今もっている印よりも大きいのと、小さいのを作っておきたいと思っていたので、牧坂氏が先日そのことに言及した時に発注する旨を申し出ていた。関防印についてはまた別に考えようといっておいたのだが、今日「自在」と「無礙」というのを電話で牧坂氏を通じて発注した。全紙や連落を書いた時は今では小さすぎるし、色紙の場合はもっと楽な、小さいのがあってもいいと思っていたのである。これから先、印をおすような書をどれだけ書くかわからないがまずはここまでは用意しておいてもよかろう。知事になって後色紙を何枚書いたことか。候補の時もである。色紙に押している雅号印が少々こわれているのに最近気づいたが、自然に欠けるものなのであろう。使っただけのことはある。何年かたつうちに更新していくのが自然というべきである。ついでに、落款はゆがんでない方がいいにきまっているがなかなかゆがまぬように真すぐに押せない。心をおちつけ、よく見とおしてすればよいのに、なかなかそれができずにそわそわした雰囲気を押してしまうのである。大量に書き大量に押すからそうなり勝ちである。満足に書けないのに、落款がゆがんでしまうとますます嫌になる。

3月23日（金）

書物が多すぎる 利用しない書物が

ここ数日少しずつ書庫に入り整理をはじめているが、とても短日数では形だけの整理すら覚束ない。はじめは身動きもできなかったが、雑誌エコノミストを縁側に出してすてることにしたためだんだん若干の身動きができるようになってきた。捨てるよい本もたくさんあるのだが、判断がつかかねていて又もや入れこんでしまうことになる。読みたい本が出てくる。近々使うだろうということで取り出して別の場所に移す本もある。いずれにせよ、今はバラバラに突込んだだけになったものを、同類は同類なりに、揃いのものは揃いものなりにまとめてみるのが整理の内容である。近々思い切って捨てるべきは捨てるように外に出さねばならないと思う。一冊一冊に思い出はあるが、それを何のために買ったのか一度も開いてみず役立ててないものがあまりにも多い。なぜそんなに無駄をしたのだろうか。当時は将来高くなるからと思って買ったのが正直いってあるわけだが、そんなことはしない方がよかった。岡崎三郎氏はほとんど本は買わなかったそうだ。本立て一つぐらいで最小限のものだけに止めていた。えらいと思う。日本人は図書館を利用する行動様式をあまりもたず、

自分のそばに将来利用するかも知れぬということだけで買い込む傾向がある。

3月24日(土)

健康のこと

松尾氏も糖尿ということで医者にかかっている。好きなタバコも酒も断ち、食物も節し、最近6~7kgもスリムになり、ズボンがぐすぐすするようになったとっている。そういう時は気力、覇気が衰える、マージャンしても負けてばかりだとボヤいている。近藤氏は、酒を断つくらいなら死んだ方が増しとっているくらいである。近頃松尾氏に元気がないのが気がかりで、そのせいだろう、私が日祭日に外出のスケジュールがある時でも付くのは松永とか森山とかで松尾ではない。糖尿はそれほど気にしないでもいいのではないかと思うがどうだろう。私も食事にはかなり注意しているつもりでいるが減量は止まり、もりかえし、最近**52kg**がコンスタントである。覇気はというと、大丈夫とはいえないにしても問題にするほどではないと思う。それでも何でもぐいぐいやろうという気持には衰えが感じられる。それよりも、そのせいか、近頃睡眠が問題である。眠るには力があるのか、ねつけない。頭のとっぺんあたりに何かもやもやが巣くっているようで、ねつけない。眠薬を連用している。弊害をおそれ、錠剤を1/4にしてのんでねる。そうするとねつきはよい。でも薬効が消えるのか4時、5時にトイレに起きたあと再び熟睡することがない。このへんの運転がうまくいくためにはあと一段と節制する必要があるのかも知れない。

3月25日(日)

花見の季節がきた

鶯が梅花の枝から枝へ渡りつつ蜜を吸っている姿をはじめてみた。人が一ぱいいる舞鶴公園なのに、数羽の鶯が群がって蜜を競って吸っている。立派な梅林ができていて、梅を見るのに太宰府宮までいなくてもこの市内で十分である。今年は10日以上咲き遅れているらしい。寒波、大雪があったからだろう。今日のような陽気だと、桜が一気に蕾をふくらませるだろう。4月のはじめに咲きはじめるというから、もうそこまできている。枝垂れ柳はもう双葉を出しているみたい。ウグイス色よりやや明るく濃い緑だ。山ノ上ホテルの裏にみゆきが土筆を取りに行ったら、立派なのが、頃合いで、たくさんとれたという。早速袴を取り除いてゆでてアク抜きしていた。塩原の中央公園に行く車の中で話題にしたのだが、明日からの一週間は県議会のヤマ場。27日までの予定が31日まで延長になって尚仕上るかどうか危ぶまれている。野党があれこれ引きのばしに腐心しているからであるが、この花見の季節に議会でもめないで、子供や孫をゆっくり花見に連れて行ってやったらどうだろう、子供達は春休みだというのに。議会議会とやらないで・・・それとも議員さん達、かなり出る日当が目あてではあるまいが……

3月26日（月）

企業誘致はお題目で中味不明

広報担当者（一係）の6人と夕方1時間半にわたって懇談した。その中でくどいようだが企業誘致と総立ち提唱について私見を開陳した。彼らがいる中で公明の吉永県議がグラフふくおかに亀井の時よりも奥田になってから知事の写真が多く出ていると指摘したとのこと。どんな心境でそういうのか知らぬが、県議が知事部局のすることをこまごま「ほじくり出す」ものではある。緑政連の坂口らが他用途利用米への補助金予算を組めとの動きをしている（予算修正策動）と新聞に報道されたが、これは西日本の希望的観測記事であつたらしく、今日は農政当局の九月補正で考えているとの答弁でおさまったという。そういうものだけに西日本があれかしと書いて書いたに違いない。こんな空気の中で広報室の者に私は企業誘致に疑問があると議会答弁したことは今でもかわりないと話した。企業誘致とは何なのかということ企画開発部長にはっきりと答えてくれとっておいたのに、誰もはっきり答えられない。私は企業倒産防止や県外脱出や地場産業の育成が基本的に大切であること、それらよりも住民福祉、消費者保護、医療、環境衛生などの方が重視さるべきで、二言目に企業誘致のお題目をとらえればよいというものではないと主張した。県議会が論議の場なら、いくらでも意見をいうが、野党には通らない、できない。

3月27日（火）

市長選候補の話

夜おそくなって中西次男氏がやってきた。酔っぱらっていたが招じ入れた。今まで二宮と飲んでいたという。福岡市長選について斎藤文男をかつぎ出したいということだった。進藤現市長が今日引退声明をするという。保守系では「あすの福岡市を考える会」（青年会議所が主体）が市教育委員長で弁護士である近江福雄（47才）を推薦することになったと昨日大々的に報道され、武田助役は先日不出馬の意思表示をしたから今のところ近江の名だけが出ているわけ。衆院で前回落選（昨年12月）した檜崎弥之助を推そうという中道派があるようだが、これがみのものかどうか。社会党に悪いから尻が重いのではないか。社会党、地区労（二宮ら）は檜崎ではなくて阿部真也（元市長の息子）にあたろうとしているが、今晚のテレビで阿部は要請があっても断わるつもりと行ったとか。近江のほかに中道から出馬する人があるのかどうか私にはわからない。中西の話では斎藤は色気がないことはないという。そうだろうか。斎藤は評論家だから最後まで引っぱって断わるのではないかという予感がしてならない。使命感があろうとは思われない。そうなると二宮らは無駄骨を折ることになる。斎藤が出るなら、市民レベルで押せば可能性はなくはない。共産党が社会党と共闘しようといっているから、ややこしくなってくるのだが……

3月28日(水)

美術の幻想界に没入したい

今日から4月15日まで市美術館で第15回日展が開かれる。西日本新聞社が主催の中心。1万人以上の応募者の中から選ばれた436点が展示されている。各年各地をまわっているようだが、福岡には一昨年来館している。日本画、洋画、彫刻、工芸美術、書の各部門に及ぶ。今日は走り見だったのに、工芸美術と書を見ることができなかった。日本画がこの頃油絵の手法を取り入れる傾向を強めたようだ。私はそれでも日本画の方が好きである。幻想の世界に引き入れてくれるからである。今日テープカットの時に、作品と、好きな作品の前に佇んで対話しよう、その作品が何をいいたがっているかをきいてみよう、その作品に自分の想いを語りかけてみようという意味のことを言ってみた。そうした作品との対話の姿は幻想への没入であると思う。絵でも彫刻でも工芸美術でもものはいわないだろうが、対話の相手になってくれる。入場料はそうした幻想の時間の代金と思えば高いものではない。ガサガサした時間、ドロドロした現実の人間関係に愛想をつかし、厭々したわが身であればそれだけに、このような美術展は心のオアシスを与えてくれる。ゆっくり見ていこうと思っていたのに、秘書室からの電話でできるだけ早く帰庁してほしいという。何と残酷なことであるか。そういう一刻も解放されないとは何と情ない位置であるか。

3月29日(木)

幼い頃の事を書いてみている

近頃ひまにまかせて別冊の日記帳に幼い頃の思い出をあれこれ綴っている。そういう意欲がなぜあるのか自分でも特別の理由は見出せない。こういう日記を書くのも同じで、毎日かなりな時間がかかっているのに、そして時には苦でもあるのに、さらに自分で読みかえしてどうということもないのに、ほとんど欠かすことなく書きつづけている。敢えていえば心のまとまりを求めているといってもよいのではないだろうか。時に読みかえず、そしてたいていそれを肯定する。文章がまずいという感想をもつ。それも仕方がない。さっと書いて行き推敲するわけではない。表現が前後する、表現の不適切さに気づく、それでも修正しないで書いてゆく。近頃書いている幼い頃に関する記録も全く同じである。時には記憶違いがないとはいえぬが、ほぼ間違いないところだろう。書けば書くほど未文明のそして貧しい生い立ちであったことがわかる。これを種に、もう一度書き直すと面白いものができるかと思ったり、いや、案外つまらないものでしかないと思ったり。それもそうだが、自分自身にまとまりができるような気がして、今後ともできるだけ書いていこうとは思っている。どこまで書いて止まるか、いやになるか、今はわからない。小学校の頃、刀出にいた頃だけは早く書いてしまいたい。

3月30日（金）・31日（土）

3月議会の総括

県議会は大詰めを迎えた。自民党が議会对策のイニシアティブを握っているとの自負をもち、奥田ゆさぶりを何が何でもやらねばならぬとの使命感にもえつつも、彼らには三つの問題があった。野党間の結束は必しもうまくいきそうにない、自民それ自体の内部結束も十分でない、攻撃のきめ手がない不勉強ということがそれである。もちろん、当方にも衝かれる隙があった。議会のこの最終段階では知事保留質問に問題を集中させ、知事から言質をとり、矛盾を見せつけ混乱をさせてできれば議会の流会にもちこんで予算条例の年度内成立を不可能にしてそれを知事の失点汚点にするとの作戦である。今回自民党はそれを十二分に駆使した。知事は徹底して「おしん」ですよ、と周囲の者が何回もいった。社会党筋からも要求された。自民党は知事を怒らせようと攻めてくる、それをまともに受けるなどという。ほんとうはなかなかむずかしいことである。そういう前提で今日午後七時半から保留質問が始まったのだが、条例特別委、つづいて予算特別委と執拗に攻め立てられた。両方が終わったのが31日の午前八時半、実に13時間の連続。同じ議員が90分もやる例があった。時間が迫っているので、予定者のうち辞退する人も出たし、周辺から質問者に非難も上がった。約束が違うとすごむ者も出た。とくに31日午前6時頃までとの了解が無視されたからである。徹夜になって眠る者、退席する者も少くない。一人対多数で疲労している知事を何とかせよという声が周囲からにわかに起こったのが朝の6時頃だったらしい。質問者はいい加減にしろとの声である。私自身それほどの疲れは覚えなかったが、顔色が悪くなっていたらしい。いずれにせよ、攻撃の焦点は教職員互助会の運営の不適切・役員配置の偏向の実態と補助金問題であった。また条例によらない懇話会等の設置にも向けられた。この二つは議員提案による決議と条例化という二つの形で本会議で決着がつけられた。もう一つは県立高校の授業料の値上げの否決であった。12月議会への上程を企図しながら見合わせ、なぜ今議会に提案したのかといういんねんづけであった。12月なら認めたのに今回なら認めないという。父兄に覚悟ができてないからだという理由である。値上げそのものには与党も反対なのでこの件は全党そろって否決にまわった。12月に見送ったのは、12月選挙で社会党筋から革新知事が評判の悪い公共料金値上げをするのでは選挙に勝てないから引っこめてくれとの強い要望があつてのことであつたが、選挙に利用したと自民からうらみを買っており、今回その仇討ちをされた形になったのである。もちろんこの裏事情は質問には出てこなかった。しかし、目的のためなら手段を選ばずという自民のこのやり口には失笑さえ役人の間にひろがった。質問及び本会議議員提案の説明理由の中で、自民党から「貧しい父兄の負担増」は避けねばならぬという、かつて聞いたこともない意見が開陳されたからである。この授業料値上げ否決ほど奇妙な全会派一致、執行部ひとり孤立という前例はなかったのではないだろうか。自民党は県民に点数かせぎをしたと思っている。知事の顔に泥を塗ってやったと思っている。しかし、自民党がこんなことを一度したからとて点数かせぎの印象

が県民にしみ込むかどうか、中央政府自民党との矛盾をどうするかが今後に残る。事が終わって、一部自民党の間で空しさが残ったとの声もきかれています。だが当方も肉を切られた思いがする。自民党は知事とその支持母体との間にクサビを打ち込むことを主要戦略としているので、今回は教職員互助会の補助金を正常化なき限りストップするとの決議をあげてきた。私も委員会答弁でそれに近いところまで追いつめられた。両教組は苦い顔でこの事態を迎えているし、今後知事も両教組も具体的に困難な課題を負わされたことになる。行革委の条例化は議会監視を強め、知事へのチェック強制力を委員会にももたせると自民党は考えているようだが、当方としてはその方がかえって委員会コントロール（又は委員会への影響力）が容易になるとの見方もできるので、別に痛いとは思わない。総じて自民党は攻めあぐねて空しさを感じ、野党内に結束要因が減って来たのが今回の特徴といえるのではないか。副知事を実現できなかったのも痛かったが、彼我の力関係と問題の成熟度、議会情勢からみてやむをえない結果であった。3月中に終り暫定予算の要がなくなったのが何よりであった。

4月1日（日）

新年度展望

明日から奥田県政第2年目ということになる。みんなが2年目を意識している。自民党は懸命に、その弱体化に努力した。どれほど結実したか知らないが彼等はそれなりに評価して次の手を打つであろう。イメージダウン、ダメージを与えたとと思っているに違いない。後援会を作ろうとしている森田則一氏及び社会党控室の嶋津氏に電話してみたら、どちらも2年目に向けて準備を考えているとの長い電話話になった。後援会はなかなかスタートしにくいのが実情と森田氏。知事側近固めにあと一歩努力すべきではないか、近藤室長は消極的であったので、彼が出納長に転出したからには次の手が打てるだろうと嶋津氏。まだまだ時間がかかるだろうと私は考えている。明日の新人事の評価を見定めてからゆっくりやりたい。6月議会では野党内にかなりな混乱が、結束の乱れがでてくるとは衆目の一致するところ。議会内役員ポストをめぐる取引きである。一年でたらいまわしをしないとおさまりがつかないのが実体だがそれでも神経をとんがらせている。みにくい汚いが多いからだ。その点こちらは高見の見物ができる。そしてできるだけ隙を見せないようにすれば議会乗り切りがより容易になる。議員の方から頭をさげてくるようにならないと政権安定とはいえない。

4月2日（月）

ブレーンによる討議

黒田荘で広報室長らと一しょに明日のマスコミインタビューの内容について検討する会をもった。森山らが計画したらしい。県議の白石、新しく参事として秘書室に来たばかりの権

島も来た。樺島は大かたの話が終った時分に、今日は送別会があるからといって中座した。八丁君も列席した、いわば県政ブレーンの広報対策会みたいになった。どこの社がどういう質問をする予定なので、どう答えるのがよいかという討議内容ではあったが、みんなあれこれ表現について対外的影響を心配し意見を出していた。一般的に、去年の就任の頃からずでにとりわけ新年を迎えるに当って、八丁君らがこういうことで対外発表の仕方、表現について論議してきたが、今後はもっとシステムティックにしていこうとの腹で、今回はその走りでもあった。馴れてしまえばその必要がないかも知れないし、今でも自分でしようと思えばやれないことではない。ひとの助力を必要とするほどのことではないともいえる。だが、討議を経たことであれば、その限りで認承されたことになるし、安心でもある。ブレーンの必要を誰しも説くので、今後ともこうした形でテーマを選んで討議してみることが大切だろう。人選をよく考えて。

4月3日（火）

マスコミ再々論

知事を1年やって、これからどうするかとか、面白いかという質問をマスコミその他からうける。知事のイニシアティブということも要求される。ひとは何とおせっかいなんだろう。そういうことを聞かないでほしいと内心思う。マスコミがなぜそれを求めるのか、大衆の興味がそこにあるとみて、売らんかなの作品を作り、その素材と見定めるからであろう。ある意味ではゴロツキ商売に相手するわけである。表向ききれいごとではあるがその程度でしかない。記者会見の中味はマスコミの仕組んだストーリーに組み込まれて「真意が伝わっていない」ものになることがいくらでもありうるわけだ。マスコミから泣かされた人も多い。人権を侵害されることもある。悲しみの場면을平気でパチパチ撮って大衆的に報道する。演説している前に立ちほだかって照明をあて聴衆に妨になるようなポーズで撮影する。そういう点は遠慮しないかという、競争の観点から、取材の自由を論拠に、抵抗する。ゴロツキの論法をふりまわす。今日の記者会見とくにRKBと毎日の合同会見の時に、それを感じた。マスコミを利用すべしと忠言する人が多い。しかし、その気になるためには、こちらがまずゴロツキ気分にならねばならぬ。

4月4日（水）

大物国会議員は会ってみるとわかる

今日一日東京で主として国会議員へのお礼まいりにあてた。衆参両院の県選出者をそれぞれ議員会館に訪ねたのである。25人ほどある該当者で半分以上は面接することができた。一口に政治家といってもピンからキリまであって、なるほどと感心させられる人もいれば、感心できない人もいることがわかる。大物になっている人、大物になりそうな人はそれとなくわかる。大物は懐中が広い。小物はすぐ自分をさらけ出してしまう。大物ほど頭が低く、

小物ほど自己顕示したがる。自分を私より大きく見せることを意識している人がある。こういう人は単に私に対してのみならず誰に対してもそういう態度をとるのではあるまいか。福岡県ほどの大県で、自民党議員の中から抜ん出た政治家があまり出ないのは、小粒の政治家、底の浅い、懐の狭い政治家が多いからだと思う。若い部類の人のうちで四区選出の自見氏は大物になりそうだ。国会議員も連続当選だと控室は物でゴった返しているが、返り咲きの人は何となく部屋が淋しい。新規蓄積のやり直しということのようだ。しかし、一期二期ブランクができると、時代の波に立ち遅れざるをえないようだ。こういう人はどうも大物にはなれないように思われる。

4月5日（木）

黒田了一氏と会う

元大阪府知事の黒田了一氏らと山ノ上ホテルで中食会をした。二期にわたる知事としての経験談をしてもらった。話させておくと次から次へと話題はつきない。純な人で、「政治家」には遂になり切れなかった人のようだ。潔癖すぎるといってもよいだろう。その意味で捨てなくてもよい票を捨てたような気がする。社会党が支持しなくなったのも水清ければ魚住まずということわざのごとしであろう。共産党は黒田氏に何回もたしなめながら支持者として最後まで残った。いかにも共産党らしい。黒田氏がもっと政治家として清濁併せのむの態度をとれば、あれほどの賢明な大衆好きのする人物であるから、3期は確実だったに違いない。大阪府民にとっても惜しまれてならない。それにしても、彼の潔癖さを許した側近も側近である。俗受けすることは彼にすすめるべきであったろう。冷い目でみて、なすがままにまかせたのかも知れない。私の場合、周辺は俗を重んじたし、そのようにすすめもした。潔癖でないどこかに黒い牙のつけ込む隙を与えるかも知れないので用心する必要がある。要は程々にすればよいのではないか。黒田氏は財界との接触の必要を強調していたがその通りであろう。今日夕方九電永倉会長と合うことになっていたので、その時に私の意見としてもその旨伝えておいた。

4月6日（金）

支持大衆の気持

午後六時半から大手門会館大ホールで福岡地区労の労働学校があり、特別講義として私の「若者への提言」が企画された。21世紀に責任をもつ若者は今から主体性ある人間として成長していくよう心懸けてほしいという意味のことを45分間講演した。あと45分間パネラー6人でこれを中心に意見を開陳した。久しぶりに知事たることを忘れ、大学教授にかえたような気分になった。500人は出席していただろう。私の顔を見に来た人も多かったと思う。期せずして拍手をしてくれた。特別の響きにそれがきこえた。秘書、警備、マスコミなど注意する条件もあったが、ほとんど気にせずに話すことができた。知事選のときに支持

してくれた人ばかりで、この種の人達は私の元気な顔が見たいという軽い気持で待ち望んでいる人から、対話したい、意見をのべたいという人までさまざまだが、質に取られたような知事存在に不満をいっていることだけは確かである。それを考えると、もっと遠慮せずに支持者の前に出ることを秘書には主張しなければならないと思う。警備の立場からはたしかに未だ危険を予測せざるをえないが、もう少し大胆に考えてもよいだろう。

4月7日（土）

入江英雄氏とあう

「しばこ」で上田幾彦、入江英雄の両氏と懐旧談の一時をすごした。九大への機動隊導入の頃のことである。入江さんはそのあとの学長選挙で当選。任期一年という約束で1年きりの学長として終わったが、こんな大事業をしたので勲一等にという本人の希望が強く勲一等をもらったという人。今年喜寿というのだが記憶をたどっても確かなようだ。足腰が不確か、この方は一寸早いと思う。ガンセンターの所長を最後に引退しているようだが姻戚筋にあたる武谷健二氏がなくなって以後はめっきり元気が衰えたと言上田はいう。一度知事選に革新系から推されあと一步のところを出馬宣言までいっていながら、周囲の圧力があつたためだろう公明党が推さないと見込みがないと言って断わるという劇的シーンがあつた。二人との話の中でガン検診のことに及んだが、ガン死をあえて抑える必要はないのではないかというような意見が出てきた。知事がいってはいけないようなことを一般の人なら平気でいえるところに妙がある。死ぬのは当たり前で死なないと困るとすらいふのである。こういう立場の違いからもののいい方が違ってくるのは当たり前とはいえ、面白いと思う。農産物輸入の自由化・枠拡大の対米交渉が大詰めに来ているが、農民の利益とは別に大経営及び農産物消費者の利益がある。どちらに肩をもつかである。

4月8日（日）

現場で働いている人達の意見を汲み上げよう

今日は平野宅の椿見と大島祥督氏の来訪と、仲好旅館での仲好会ということで又多忙な日曜日だった。それでも日曜らしかったといえる。平野さん宅の椿と備前焼のコレクション、感心したりタメ息ついたり。とことん趣味に徹する型は私にはなじめない。むしろ中途半端派に属する私だ。仲好グループは知事選の話をつねに2時間ナベをつついた。岩崎氏ができたての『逆転』をもってきて出席者（岩元、大屋、西井、私、衣笠、徳本ら）の署名をもらっていた。7000部刷っているという。1冊1000円、300部寄贈と鼻息が荒かった。自民党筋も熟読するのではなかろうかとの話だった。私の方からは奥田色を出すにはどうしたらよいか、何が奥田色かを考えてほしいと、昨日筑文懇で提起したのと同じ趣旨の問題提起をしておいた。非行問題に取組むだけでも立派なことで、総立ち態勢でそれをやれば奥田色といえるのではないかと岩崎がいていた。非行問題は日常的に扱っている地域の末端行

政マンとの対話をする必要があるとの彼の主張は早速に受け入れたいと思った。この種食は二ヵ月に一度ぐらいやらないといけないだろう。みんな心配しているし、大きな期待もっているからだ。

4月9日（月）

陳情

文化庁に国立九州博物館の建設について陳情に行った。長官・次官が対応してくれたが、従来と違って冷淡な対応だったのでびっくりした。東京事務所の津田所長にいわせると、もともと鈴木長官はそういう人だが、名古屋がオリンピックをソウルに取られたので科学博物館を誘致したいとしてにわかにはライバルとして浮上してきたようだ、とのこと。文化庁はそれに押されているというわけだ。陳情力が九州のそれよりも強力ということではないだろうか。九州に日本民族のルーツを語る博物館を作る価値があり、それが国の責務でもあるということは、識者なら誰しも納得しよう。文化庁だってそれは理解できるはずであるのに、名古屋を優先して念頭におくようになったとすれば、それは陳情力の差かも知れない。私は陳情というものはあまり好きではない。否定はしないが、そんなことをしなくてもなすべきことをすればいいではないかといわんばかりの考え方であった。が理屈はそうであってもそれが政治の場で政治というフィルターを通して現実がつみ上げられる限り陳情というものの現実的価値が自己貫徹するのである。福岡県の対中央の要求もこの際再考すべきもののようだ。

4月10日（火）

卑屈になる必要はあるか

右近で県議会の各派代表者と執行部側との懇親会があった。執行部側が議会側の協力に感謝の意を表明するという趣旨である。こちらからは副知事、出納長、総務部長、財政課長が参加し、秘書室長も加えられた。ほんとうのところ、こういうのは個別的なチャンスをとらえて別の形でやってすむことではないかと思うのだが、いつから慣習づけられたのだろうか。知事が一番下座で畳に頭をつけんばかりにおじぎして、協力への謝辞をのべることが考えられていたときいたが、私はそれをせず、自席からのべた。卑屈といえるまでに議会をもち上げるならわしができるようである。緑政の坂口、自民の高山の二人は、相かわらず思想を表面に出しての私への対応、敵意丸出しといった態度である。これはなおらないのではないかと思う。緑政の井上もこれに加わる。わが方から卑屈になる必要はないだろう。いつかわかるようになるに違いない。政治の世界の常とはいえ、やはりこんな連中とつき合わなければいけないかと思うと自分がかわいそうになってくる。坂口など、ひとにいわせると能力が足りない方だという。それほど尊敬もされていないらしい。高山にしてもそうなのだ。議員族の中にも頭が下がるような人も少くないのに。

4月11日（水）

堪忍柳

記者の要求でFBS、時事、西日本、共同で次々とインタビューに応じた1日だった。昨年の今日は大丸別荘に逃げていたのに朝日から早朝「当選」という朝刊記事をもって会見を求められたのだがあれから1年。どの社も一周年を意識してのインタビューだったが、私には特別その感慨は湧いてこなかった。だが思えば全く人生攪乱されっぱなしの1年であった。立候補から数えて1年と4ヵ月。4ヵ月は別として当選を予想したわけではないから、予期せぬ生涯の節目をなしたといえる。岡松県議が昨年の秋にもってきてくれた仙厓の堪忍柳複製が知事室の棚においてあったので、それを取り出して記者インタビューに利用した。「気に入らぬ風もあろうに柳哉」というのである。これは今議会答弁に用いた「観自在」とちがって記者にも比較的理解しやすかったようだ。柳のたとえにいう心境は柔軟自在でもあるが、「スタンスは変えない」という強情さもあらわしているということでもある。生まれ変るとしたら何になりたいかとの質問に、小説家か画家だといっておいた。学者とか政治家はもう結構といったら笑っていた。これは本心である。小説家や画家は人間、自然、人の心をえがくだけに、その人の心が研ぎすまされていると思うのである。

4月12日（木）

緑政連に友人を作ろう

林県議が工作して県南緑政連県議をわが方に引きつけるための懇親会を三光園で行った。山本、西原、古賀、大石、牛島、倉重の6人が来集。奥田県政に協力する、その代わり、次の選挙ではわが方も対抗馬を立てたりせず、逆に応援をしようという趣旨であった。林氏のいわく、どんなに努力しても18人の与党では、何ごともできない、相手方野党の中に切りこみクサビを打ち込んで敵を味方に引き入れるしかない、脱党させるとか、こちらに入党させるとかではなく、中立化させ又は一つ一つの問題について当方に賛成することはできる、と。そういう発想でもって彼は一番可能性の少ない自民党はおくとして、まとまりの弱い緑政連の工作をはじめた。頑固なのは見送り、可能性と柔軟性をもつ者に種々接近してみたらしい。緑政連の中では半ば公然となるほどに動いたらしい。母体だった元の農政連がどうだったか知らないが、ともかく林氏のこの考え方は当を得たものといえよう。自民党が「奥田おろし」だけに執着して議会運営を牛耳っていることに反対の人達、林氏の説得に応じた人達が上記六人である。林氏は彼らに誓約書を出したという。公明・民社の両派は理解がよいからあとでともいっている。いわゆる反自民の結集という路線である。

4月13日（金）

記者クラブとの懇親会

桜の花が散りはじめ、宴の盃の中に一ひら舞いおる。そのような時、一刻値千金ともいえ

る時、花見の客であちこち一ぱいである。福岡は西公園の桜が有名だったが、近頃舞鶴公園(城跡)や平和台を向うに見る堀端の、道路沿いの桜も一段と美しくなってきた。並木に銀杏が少くないが、これもかなり新芽をふくらませてきた。よくみればツツジも色づいてきた。すっかり春である。昨年は花のことなど考えるひまさえなかった。八幡の山つきの道を選挙カーを走らせながら、花見としゃれこんだ記憶がある。今日は記者クラブを招いて(?)西公園で夜桜を見るとしゃれ込んで宴席を張った。露天でゴザ、机を並べ、料理をもちこんでである。秘書室、広報室そして庶務部からも同席した。でも夜になると、一寸冷えこんだ。花見というよりは、やはり、ごちそうであり、酒であり、歓談であり、歌である。あるいはうさばらしである。記者という仕事も毎日がかなりつらい連続であるようだ。われわれからいわせると、よくもこういう職業を選んだと思う。そういえば、戦争が終って仕事なくて宮崎に行っていた頃、宮崎日日に入社しようかと思ったことがあったのを思い出すが、ぞつとする仕事だった訳だ。

4月14日(土)

奥田県政一周年批判者代表の意見

午前中の2時間、NHKの録画取りに長々つき合わされてうんざりした。やはり知事就任1周年という趣旨の取材で、5人のゲストをまず選び記者が予めインタビューして画にし、今日はそれを私が見ながら、一齧ずつ相手の主張を種に同じ記者の質問にコメントしていくというやり方である。“奥田おろし”の先鋒添田の山本町長は特有の目玉をぎよろぎよろさせて、例の狭い視野からいやみたらたらの発言をしていたので、いい加減にあしらっておいた。九経連の前田常務理事も経済人的偏見からかなり勝手なことをいっていた。白石県評議長は好意的発言だったが、県職ストに対する処分には反対すると筋を通しているのかえって好感がもてた。平松大分県知事はさすがに知事というものの立場をよく理解していて、6人のゲストの中では一番要領よくまとめてくれたと思う。山口信子氏は相かわらず“総立ち”というのがわからないむしろ反対だと、無理解の反対派という立場を出していた。県議会自民党と口車^{マカ}を合わせているようなもののいい方で、批判のための批判としか受けとれなかった。こういう側からの批判が徐々にかげをひそめるようにならないければいけないだろう。只、山本、前田、山口の諸氏はかなりトーンを抑えてはいた。

4月15日(日)

筑前琵琶定期演奏に思う

九電エネルギー館での筑前琵琶の定期演奏会は予め大きな期待をかけていたのだが、意外と調子が悪かったのか、失望させられた。じんとくる場面が、あるべきときになかった。語りが悪いとしかいいようがない。練習が足りないのか、訓練にきびしきがないのか、全部ではないので、オール出場というようなことになっていると、到達度の低い人も出演するこ

とになるので、そのためなのか、ともかく今日はかなり期待はずれがあった。同行の兄も同じ感想だった。「あれで筑前琵琶だといわれたらダメだよ」というのである。懇親会に入って帯谷瑛之介氏がひとり意気軒昂陽気にしゃべっていた。日本では外国文化に親しむのに昔からなれているのか、発祥国ですたれたものでも日本に来て、世々伝承され、発達し、独自の形で日本の風土にとけ込み保存される文化現象が少くないとのことである。琵琶を念頭においてそのことを強調すると同時に、われわれ今日琵琶保存に取り組まなければならない理由があるといっていた。兄は、頭山満とか戦艦大和とかどうも右翼がかったものがあるので気に入らぬともいっていた。私も、琵琶に平家物語はじめ戦記ものが多いのはよいとしても、今日の頭山満にしても戦艦大和にしても焦点がなく、右左の思想区別からではなく、そのテーマのどこが語りの山なのかがはっきりしないのは残念というほかはない。素人評だが、そう思った。

4月16日（月）

相かわらずのマスコミ批判

岩崎隆次郎氏が読売に連載した昨年の知事選勝利に関する記録を一冊にまとめた『逆転』という本を寄贈してくれた。みゆきにも。その読売は今日「奥田県政の1年」という6回のシリーズを終えた。やっぱり気に入らぬ勝手な記事で埋めている。「企業誘致は国がやること」というようなことを発言したことがないのに、それをデッチあげ、「変わったのは県政ではなく奥田知事自身である」と主張している。知事は誰になっても県政はかわらなく、かわるのは知事だとも読みとれる。かわりばえがしないのだということ、政治不信を県民にひろげようとしているかにみえる。わざわざこんなことを書く必要はないと思うのだが、それはわざわざしなくてもよいと思われる自民党県議会質問と同類ではないだろうか。別に褒める必要はないが、記者が勝手な表現で一方的な評価をしなくてもよいと思う。あったこと、特徴的であった事実を淡々と書けばよいと思う。誰しも記者をかばう発言をするが、私は記者はにくい存在だと思う。横着な振舞をして勝手な評価をして、面白おかしくでっち上げて記事を知らぬ人にだまし読ませ売るといふ、こんな商売はあらずもがなで、評価やデッチ上げを抜きにした情報報道は存在しえないものと残念でならない。商業マスコミを批判しないと、社会が邪道に迷い込むことになるにきまっている。

4月17日（火）

人事のむずかしさ

土曜日に内示した係長人事につき昨日主として安達、県職から大きな不満の表明があった。林県議がタッチしていたはずで万事うまくゆくものと思っていたのに、うまくいってなく逆効果ですらあった。私もだが林県議も総務部長すらもが、係長クラスのコマかい点について知る由もなかった。責められる者すべてが責任ある処理のできぬ者であった。人事課長も

かわったばかりでこれまた責任のとれる状況にはなかった。あれやこれやで安達がえがいた異動案は案外なところで逆効果さえもたらす結果となった。次の一般職の人事のところであつぐなうしか、今となつては修正の手段はないらしい。それにしても案づくりに努力した安達氏が最後のチェックをする点で、もう少し配慮が必要ではなかったのかと私はいいたいのである。人事は一種のイクサである。内部、外部ともにそのような認識、比重のおき方によって処理さるべきである。県ほどの大きな行政組織になると、昔の一国一城以上の人事配慮が必要であつて、一つのイクサだと考えねばならないであろう。今回のことは一応これで通すしかないが、次の段階では今回の経験を十分に生かした対応が必要であろう。一種の戦争と見なければならぬ。ということは人事課のみならず各主管課のポスト固めをやっていくことが先決ということだ。

4月18日（水）

“総立ち、論を対話で

苧田町で“ふるさと対話”があつて出かけた。行橋にまず行って、市長を表敬訪問。総合庁舎、保健所も立寄つた。みんなよろこんで迎えてくれ心なごやんだ。“ふるさと対話”で、原田広報室長司会者が私に苧田をどう受けとめたかの感想からいへというので、冒頭あいさつの中で、町勢の急速な発展、そのスピードが諸問題をおこしているというのが実感だといつた。上下水道、清掃、交通などがそれで非行問題もそうした領域の問題といへよう。対策がそれに追付かないのが実際だろう。対話の中で“総立ち”の立場から答弁した。非行問題を例にとると、人間が自然から、そして人間から取残されているように、子供が自然や教師、父母、兄弟から取残され疎外されている。そこに非行の芽がある。だから、非行から子供を守るには、教師、父母、兄弟が子供を抱きかえさなければいけない。子供を自然、社会的自然の中に置き直さねばならない。それは“県民総立ち”によってしかできないのではないか。行政だけに責任を負わせないで、総立ちで、みんなでそういう問題に取り組もうということである。くりかえしくりかえし、私はそういつた。成長が残した問題、多くはそうようにしてしか解決しえないのではないか。保健問題のうちガン対策も、みんなで検診をうけよう、うけない人はみんなですすめようという運動をおこそうということになる。

4月19日（木）

諸岡逮捕ではじまつた奥田おとし

あれから一年。昨年の今日諸岡氏が“お布施、買収ということ”で逮捕された。大きな隙があつて、自民党、二階堂、後藤田らが県警本部長酒井を指揮し、けんめいに攻めたつたのだ。権力が牙をむいて襲いかかつてきたわけだ。わが家は千客万来にわかにごつた返す始末となつた。マスコミがソレツと権力に加担して色めき立ち、あることないこと、書き立てた。酒井がこれに加勢した。あわよくば私に容疑を波及させて、知事の座をくつがえそうとの戦

略が中央で立てられたからである。だから目標は2つ。一つは知事が自から買収したとの想定、もう一つは出納、総括責任者がそれをなしたという想定である。普通なら発生した容疑、発覚したそれを追及するのに、こんど場合は力まかせに探しまわって、更に容疑をデッチ上げまでした。亀井側にも同様の、それ以上の容疑があるとうわさされているのに、そちらには手を染めさえしなかった。1つの目標は早目にはずれたが、第二の目標は執拗に追及された。そのやり方はすぎまじかった。寺の住職、県民の会、そして妻、兄が大変ひどい目にあわされた。そして決定的な決め手がえられないことが明らかになるや、遠藤政夫の指揮で県議会の自民党が道義責任で攻め落そうとした。

4月20日（金）

大濠公園内日本庭園の完成

大濠公園内に数年前から建設中だった日本庭園がこのほどほぼ完成し、5月8日に開園すること。今日正午案内されて園内を一巡みせてもらった。8億円という。立派そのもので近辺には例をみない豪華なものであった。茶室等も古風に作られ、利用者に喜ばれそう。ただ植木がもう少し年月がほしいのと、武道館がそこまで迫っていて、気分をこわす存在である。欲をいえばそれが山林であってほしかった。山水はよいが広い池にすぐ藻が生育し、これまた趣をこわすものとなっている。この藻を取ったり清掃するにはかなり経費がかかるだろう。オープンしても経費がかかってどうなることやら。独立の団体が名島運動公園、春日公園などあわせ統轄して運営する仕組みになっているようだが、維持が大変だろう。県費をつぎ込まねばならぬようになるに違いない。受益者負担ということで、入園利用者からは少しは使用料をいただくようにすべきではないかと思う。篠栗に社会教育センターが近々オープンするが、これもかなり豪華なものであろう。その意味で、亀井知事は箱物をどんどん作った人だ。それが県費の経常的膨張となつてはねかえってくることをどれほど計算に入れていたのかききたいところだ。ともかく、いい物を作ることはいいことなのだ。

4月21日（土）

両雄並び立たずか

今日は小倉の城の横にできた九州厚生年金会館の落成祝賀会に行き、玉串奉奠、祝辞あいさつ、鏡割りの三つの会での三つの役割を果たせられた。北九州には又とないようなデラックスマな設備である。日本で五つ目の、そして最後の年金会館だという。年金事業団が経営することになるが、採算がとれればと祈る。湯河原からは肥川氏が来賓として来ていて、久しぶりに面談した。亀井前知事も来ていた。すれ違ったので声をかけたが、無愛想な顔つきだった。こちらが何気なく振舞ったのでバツが悪かったのであろう。一物もっていたのかも知れない。玉屋の田中丸氏はパイプオルガン設置の募金運動の中心人物といわれるが、まだ五千万円余募金しないと目標に達しないという。北九州だけの財界では力に限界があるという

ことのように、福岡市の財界、県財界となると、運動に何だか行きにくさがあるんだそう。九経連に頼んでみたらどうかと、私は祝宴の席でいっておいたが、足を福岡に向けにくそうであった。100万都市ということでどちらも肘を張りあっているみたいである。亀井と谷、亀井と進藤という組み合わせもよくなかったときく。両雄並び立たずということであろうか。

4月22日(日)

右翼の妨害を考慮しての出発

明日は右翼が動員されて私の訪中妨害の行動に出るのではないかとの情報により、今日は旅行準備をととのえた上で所要の日程を消化することになったが、なかんずく、今夜は市内全日空ホテルに泊ることになった。輝国に右翼がおしかけてきてあの狭い道で万一出発しにくくなり警察との摩擦がおこったりすると訪中に泥をぬられることにもなりかねないからである。中国との交流については、つい先程中曽根首相も訪中したことでもあるし、全面的に何ら疑問の余地はないのに、右翼が反対を叫んで氣勢をあげる理由は解せない。共産国だからとの理由ではあるが、今時それを理由にする発想は国民に訴える力をもちえないであろう。一寸発想が古すぎる。私らが訪中しているうちにレーガン米大統領も訪中するらしいが、中国側も歓迎することである。右翼には右翼の論理はあるだろうが、大声で市内をねり歩き、(マイクのボリューム一ぱいで車を流す)ひとに強要するかのごとく、迷惑なことである。どこから資金がでていのか知らぬが、財界とも麻薬界、暴力団筋ともいわれる。帳面消しの行動ともうけとめられる。近頃県庁の周りを遊弋して叫んでいるのは「奥田を殺せ」であるが、殺してみても何がえられるのだろう。損をするだけだろう。

4月23日(月)

北京初日

板付空港では県関係の多くの見送りのあったが予定どおり右翼が車をつらねて奥田訪中反対を叫んで練りまわるとい見送りもうけた。早めに入場していたし、警備も十分だったので右翼は儀式的にデモしたにすぎなかった。訪中目的との関係もあって中国民航をチャーターしたのは結果的にもよかった。国際旅行総社が夜のレセプション和平門の全聚徳での北京ダック料理をごちそうしてくれた。その前に日本大使館を訪ねて今回の訪中目的を説明したが、大使は総領事館の方はすでに設置がきまっているが、むしろ定期航空路の方が困難が多い、もちろん開設は時間の問題だろうと発言した。今後とも旅行社、民航当局とは十分接触して早期開設に向けて努力する上で、中国チャーター便を使用した政治的意義は決して小さくはない。北京の印象は前回の時とかなり違っていた。空港は近代的な設備に脱皮しているし、市内のあの矢鱈な自動車の警笛がなくなっていた。警笛禁止という市長の布令が出されたとのことである。ホテルも1流でないにしてもよくなった感じだ。今回は目的

が目的であるだけに中国の政治や社会の理解については私自身何の進歩もない。99人の団員がそれなりの統一行動で中国側にどれほどよい印象を与えうるかが私の関心である。企画調整課長の古賀、秘書長の小西この二人が裏方として実によくやってくれているので助かる。

4月24日（火）

総領事館の福岡設置の知らせとふ

訪中のヤマが早くもきた。団幹部は要所要所数カ所を表敬訪問し、来訪の目的を概要伝え、協力を要請してまわった。中国側も一々ていねいに応接してくれ、とくに外交部では宮達非副部長から総領事館の福岡設置は中国としては胡耀邦総書記が言明したように決定済みで、あとは場所の問題だというきわめて明瞭な発言をうけて一同びっくりするやら安堵の胸をなでおろすやらであった。午後には早速日本へ電話がとんだらしく、こっちが爾後のあいさつの仕方を変える対応をすると同時に、日本から問い合わせがくるやらで夕方は古賀課長ら応待にどたばたして悲鳴をあげたことであった。日本では総領事館の福岡設置決定は大きなニュースだが、こちらではすでに場所の問題にまで進んでいたといえる。団員一同この決定の知らせで小踊りせんばかりに嬉んだ。人民大会堂での答礼レセプションでも喜色満堂というべくにぎわった。訪中団一行の誰もが私に「よかったですね」とねぎらいと祝福の言葉をくれた。団員には見物もさることながらやはり気がかりなことだったのに、こんなに早目に決定的な相手側の返答がもらえるなんて思ってもみなかったようだ。何回もの地ならし、先発者の打診の積み重ねの結果であることはいうまでもないが、みんなの祝福が知事の私にそういう形で返ってくる。

4月25日（水）

胡耀邦という人

八達嶺、定陵を見学し、人民大会堂の接見の間で胡耀邦共産党中央委総書記と会見した。訪中団一行全員が、一しょに記念撮影だけと思っていたのに同じ部屋で接見してくれたこと、30分の予定を1時間も時間をさいてくれたことに大変有難く満足の意を表わしていた。小柄で機敏、きさくという感じ。ジェスチャーも大きく、それでいて嫌味はない。私のあいさつ文の通訳の入る区切りで意見があればぼんぼん意見をさし挿んだ。そのため訪中団一同の緊張した気分をゆるめる効果を与えた。加えて私が挨拶を結んだ時「もうないか」と畳みかけ、私が原稿なしで青年の船や水産高校の練習船の上海寄港や研修生受入れなどについて話題をもち出したら、一々について友好前向きな発言で対応してくれた。さらに「こちらから言いたい」として、県内友好四都市が友好事業の実をあげているだろうかと問いかけてきた。何かその点で問題があるなら取り組まねばなるまいという意図なのである。北九と福岡の両市長から満足できる実績をあげている旨の発言があったが、胡耀邦氏はとくに

大連の自由化にふれ、外貨がより安心して導入しうるよう措置しているから、開発に乗り出してくれることが望ましいとのこと。とくに大連空港の整備、企業所得への課税の軽減、海浜開発の可能性などについて積極的な説明をなし一同に好感を与えた。

4月26日(木)

上海の印象

胡耀邦は顕著な位置にあるからというよりは、一時間の会見の間にタバコを5本も6本もたてつづけに吸うという点からも(もちろんきさくな点でも)ともかく印象に残る人だった。それだけでも訪中団にはいい土産ができたと思う。その北京に別れ上海にとぶ。北京にくらべここは土地が肥沃という感じ。街の人の流れはすごくぎっちりすべて押すな押すなの景況。湧いて出てきたという表現がよいかも知れない。いつ、どこからこれらの人々が出てきたのか、街を歩いて何をしているのか旅行者には見当がつかない。おのぼりさんも少ないというが、それだけではないだろう。失業という問題がないとすれば、上海には仕事がたくさんあるのではないか。戦禍もなく、建設のテンポも日本とくらべ遅いから、戦前の建物がまだそのままに残っている。その点一寸いたましい。だが感心するのは戦後であろう完全といえるほどに街並木プラタナスが植えられ、太く育っていることだ。新^々が出かかったところでたくましい。これが上海の街の特徴といえよう。夏には立派な木蔭を与えてくれるだろう。もう一つ、赤煉瓦の3~4階の建物が多く、道が不規則に曲っていることだ。また、北京ではこの頃車の警笛が禁止されているとのこと、前回とくらべ様が変わりしているのに、上海では未だ警笛のラッシュである。誰に対する警笛かわからないのに、……北京が官僚的とすれば上海は庶民的といえるだろう街頭風景。

4月27日(金)

中国の大都市問題の一片

黄浦江には大小船のゆききが大きい。水はドロ水色だがこうした水が都市の繁栄を支えているということはまぎれもない。近頃はジャンクが減ったというが、見たところ一隻もなかった。北京副市長(張百發氏)の話では、北京は年間雨量が600ミリしかなく、地下水の汲み上げも限度に来ているとのこと。ホテル建設が上海と同様に追付かないようだ。彼がいうには、ホテル建設の能力が足りないのではなく、建設しても電力が供給できず、オープンおあずけのホテルすらあるという。そういえば節電第一といわんばかりに、北京の街は夜のあかりが少い。発電施設が追付かないというのである。それは石炭をもちながら運搬できないからだそうだ。ガスも同様に供給力が追付かないが、それは運輸がネックで、そのためにホテルが建たないという。となると、輸送力がすべてのネックということになる。この広大な土地の一角にあまりにも人口が集中すると、地方にある石炭も水も大都市に供給する上で今は困難に遭遇しているといえるのである。将来解決できるものなのかどうか、天

津になると事情はもっと悪いらしい。日本は国が小さいので、輸送ネックもかなりかんたんに克服できたといえるだろう。実地について北京、天津、上海など大都市の街づくりを勉強してみるのも大事なことのように思える。

4月28日（土）

空港での記者会見

福岡空港には県関係の人達が大勢出迎えに来ていた。副知事、企画開発部長、広報室長、秘書室の面々、林県議その他、それよりも仰山なげなのはマスコミ連中である。私の行動すべてが絵にされる。でも、VIPルームでの記者会見は比較的にかんたんだった。こんどの訪中目的がほぼ実現できたというよろこびにすべての人達がひたっていたからであろう。こちらは当然のことをしたまでなのに、総領事館の設置決定といい、定期航空路の開設見とおしといい120%成功という評価である。われわれ訪中団のミヤゲばなしというよりは、すでに流されてしまったニュースだったので多くは聞かれなかったわけ。事前のニュースとしては福岡が立ちおけているとか、取組みが悪いとか批判ばかりが先行していたのでこういうことになったのだろうと思う。マスコミは今批判しようにもしようがないのである。仮に話がうまく運ばずに帰ってきたらどう書かれたかわからない。福岡の市長選に都留氏が候補として名のりしているのをどう思うかという事が聞かれるのではということだったが、その質問もなかった。総領事館を北九と福岡のどちらにする積りかときかれたが、それは今後早急に円満解決にもっていききたいということで突込んだ質問にはならなかった。政治的からみがあることをマスコミも知っているからである。

4月29日（日）

皇居

ふくおか会館からみる皇居はどの季節もいいが、新緑萌える現在このごろは格別である。桜が散ったばかりで花枝のぎっしりついた枝先にういういしい若葉がすくすく伸びている。淀川が競ってそれぞれの色の花をぐんぐん上に際立たせようとしている。藤は知らん顔で自分の房を伸ばし咲きほこる時を準備している。プラタナスは枝先に緑をつけたばかり。今日は天皇誕生日の祝賀会に私達夫妻も呼ばれ、生まれてはじめての皇居参入であった。いつも中は見えないその豪華なたたずまいをはじめてみる事ができた。華美でない、全く華麗さがない、それでいて豪華というしかない皇居である。どれが何の間で、全体がどうなっているのか仔細知らない。中庭の向うに見える庭園は大そう立派に見えるが、しげしげみる時間的ゆとりがなかった。近よってみる価値があるだろうに。何の予備知識もなしに行っただので、何が何やらここに書けないが、ともかく誇るに足る築造である。こういうのは国家的財産というべきもので、できうべくんば、より多くの人に向けた解放が望ましい。特定というか、少数の人にしか知られてないのでは意味がない。

4月30日（月）

福岡市長選候補都留氏の動き

都留出馬表明について、八丁、岩元の二人から電話があり、批判的。八丁は知事に無害なら静観しておいてもいいという。二宮が地区労の対応で苦慮するだろうし、岩崎が県評の対応で困惑するだろう。都留ははじめ神奈川方式でというようなきれいごとをいっていたのに、出馬表明の段階では社会党とは一線を画すときっぱりいい切った。自民党の全面的支持をとりつけることが至上命令だからそのためには社会党とも一線を、と行って神奈川方式論を訂正したわけ。それほど出馬したいのだともいえる。岩元氏は反対の線で都留説得をしたらしいが、都留は友人、教え子の誰とも相談せずに自分で決めたというので、電話では岩元氏は仕様がなくて怒っていた。そして、都留は健康上大変心配な種があるというのだが、それを岩元が指摘すると、都留は近江をおろして無投票でいきたいとすらい、近江との健康上の比較を市民がせずにはすむと踏んでいるらしいのである。周囲の者が反対の声をあびせているらしく、それを聞かないことにするため彼は近頃行方をくらましているといわれる。それほどまでして、とびついた候補指名だが、自民党の内部はまだしっくりまとまっていないう模様。まだ今後の曲折がありそうだ。

MEMORANDUM

訪中のとき名刺交換者

埜口阿文 東京の朝日中国文化学院 通訳

鹿毛隆郎 西日本新聞北京支局

鹿取泰衛 特命全権大使（中国駐在）

渡辺幸治 公使（北京大使館）

韓 克華 国家旅游局長

陶 永年 国際旅行社総社副総経理

趙 建国 // 北京分社総経理

張 聯華 // 総社総経理

楊 振亜 外交部亜洲司副司長

干 金英 中国芸苑経理

愛新覚夢毓嶠 君固 中国芸苑 日壇公園

楊 殿陸 対外友好協会上海市分会副会長

嚴 廷昌 上海市旅游局長

劉 振元 上海市副市長
王 其健 上海市人民政府外事協公室主任助理
魯 興 中国民航上海管理局副局長
范 玲娣 上海市工芸美術研究所絨綉工芸美術師
その他 張 世珠 人民政府（上海市）副秘書長
姫 鵬飛 全人代常務委員
宮 達非 外交部副部長
栄 鳳祥 対外経済貿易部
林 征 中国民航
孫 平化 中日友好協会
劉 晨 農牧漁業部副部長
張 百癸 北京市人民政府副主席
束 昭生 漁業協会上海分会
刑 仁先 国際旅行社北京分社

○北京における招宴のホスト

張 百癸 人民政府副主席
趙 建国 国際旅行社北京分社総経理
陶 永年 国際旅行社総社副総経理

○上海における招宴のホスト

劉 振元 上海市副市長
張 世珠 上海市副秘書長

日中友好の翼 団員参加費 23万円

企画主催 日中友好の翼実行委員会（委員長後藤保）

後援 県、四市、日中友好貿易促進福岡県議員連盟

福岡県日中友好協会

主催 西鉄旅行社

5月1日（火）

メーデーに思う

メーデーは今年も福岡、小倉両会場にメッセージのためかけつけた。昨年は「知事はやめるな、ガンバレ」の声に包まれに行ったようなものだったし、集った人達は多くはお布施事件
不当逮捕糾弾の抗議行動をするという緊張した雰囲気だったが、今年はまるで花やかその

ものといってよかった。全国的にもメーデーの雰囲気はかなり様変わりに近いものがあったという。単にカラフルないで立ちというだけではなく、かんたん化され、デモも少く、行事が多様化したという。趣きが変わるのもいいだろう。闘争そのものの表現から祭典化、祝賀化にかわり、レクレーション化への傾向を強めていく。しかし、核の脅威や医療危機、行政改革、失業、その他労働者の不安、不満の表現には事欠かないし、それが忘れられたのではメーデーにならない。展示即売会のような行事を加味したらどうだろうと車の中で話し合ったことだった。県職の小倉の人達が総合庁舎を訪れた私をつかまえて、歓迎激励の小集会をもってくれたのはうれしかった。知事は自分たちのものという熱望が伝わってきたからである。両会場ともメーデー参集大衆にはその気持が充満し、あいさつに立つ人達もこれに関した演説をしていた。

5月2日(水)

どんたく法被

ドンタクの赤い法被、股引など遠くから何気なく見たことはあるが、近くで、それも自分が着ることになるとは思っても見ないことであった。“これも一つの公務、と秘書はいう。法被には福岡県知事のシシューが右襟に大きく入れてあるから、もちろん特注ものである。赤色の下駄草履、足袋、実際これで動いてみると行動がしにくい。エボシのような帽子は何とこのだろうか。これも真赤。照れるがしようがない。着付けを手伝ってくれる藤本女史にも照れてしまう。着終わって秘書室の者見にこいとか写真をとれとかいう人がいるので私が秘書室まで行った。“よく似合う、とみんないう。“そうかいな、と半分照れてエレベーターで玄関へということになった。スポーツセンターでの前夜祭に行くと市長、助役その他、吉本会長などみんな同じ姿で、ドンタク気分充満のまっ只中に投入されてしまった。背中に挿してかつぐようにする“預りザサ、というのがある。ササ一本に紙の鯉のぼりと風船と、自動の宣伝短冊がついているのだが、この短冊は何を意味するのか。ぼつぼつ勉強することにするが、この衣裳しめて8万円。京都への特注だとのこと。原価購入というが、できれば県産品でありたいものだ。

5月3日(木)

松ばやし祝儀に参加して

去年はみゆきが辛うじて釈放されたが“お布施事件、でごった返し、私がどんたくに関心を示すどころのさわぎではなかった。今年は昨日前夜祭に出、今日また朝からどんたく式典に参加し、松ばやしの祝儀を県庁前で受けるということで“参加、の実をあげた。記者たちは、はじめての参加ですねという。又松ばやしに来た人達も握手を求めて“知事も一市民になってつかっさい、という。もちろん異存はないが、去年はその段でなかったことだけは確かだった。近藤室長が県庁玄関でご祝儀をうけた。今年もパレードには加わらなかったが、

警備の都合ということである。ただあとで思うには、パレード車が自衛隊の車なので、これに乗るとなると誰かが何とかいうかも知れないということでもある。今日明日どんたくで博多はにぎわう。今年は金印が発見されて200年記念と特記されてもいる。町人が武士に今日だけ無礼講を認められるとか、町人の暮しのよさ華やかさを無礼講の蔭で見せびらかすとかいうが、こんなのは徐々に年を重ねていくうちに講釈されるに至ったのではないだろうか。800年の歴史をもつ、今や日本一の祭りともいわれる。全市民の何%が関心をもつか知らないが、商店街の売らんかなの宣伝熱が、今日ここまでにぎやかにしてきたことも疑いない。

5月4日（金）

美濃部亮吉氏との夕食会

美濃部亮吉夫妻が私に面会を求めている秘書室がグランドホテルでの夕食会という対応をした。室長が加わり、岩崎隆次郎氏が県民の会として加わり、夫人に対応してみゆきも加わった。元東京都知事、現参議院議員であるから、この程度は是非必要だろう。去年は選挙の応援にもかけつけてくれた人である。話によれば二期でやめるという決意をしていたのに石原慎太郎というウルトラ右翼が出馬することになったのでこれに勝つには三期目もという約束違反を敢てせざるを得ない情勢になったという。知事に初当選したのは63歳だから私の今と同じではないか。奥田さんもまだまだ頑張っしてほしいということであった。議会と政府とへの対応が常に苦勞の種だったという懐古談が出た。夫人は口軽くよく話された。知事夫人というものが蔭で半公人として立ちまわらなくてはならないこと、知事の健康管理に最大の注意を払わなければならないこと、革新知事を全国民がどれだけ期待をもち注目しているかという背景を考えねばならないこと等々、私を慰勞し激励する意味で熱心によく話された。知事とくらべると参議員は楽ですよともいう。ともかく福岡の知事の上に革新知事、全国の革新知事という自覚が必要だということの慰勞激励の会になった。

5月5日（土）

母子愛育会のこころ

皇太子生誕記念事業としての御下賜金で母子愛育会ができたという。その50周年の記念大会が福岡で行われた、というか、笹川良一氏が主宰する全国吟剣詩舞振興会が全国各県ブロックまわりもちで大会を行い、その益金をこの愛育会に寄付することをかねてこの福祉法人が運営されているという形になっている。昨日は愛育会の講習会の同窓生の集いがあった、それに三笠宮妃が総裁として出席され、今日は吟剣詩舞道大会があって三笠宮妃が観覧されるという形をとった。主催は笹川良一氏が全国のサークル何百万人の中から選抜した選手を集めて技芸を披露するということになる。母子愛育の精神が保健婦、助産婦、看護婦などを通じて普及されることが奨励される要があるというシステム。このような精神はな

るほど立派だし、母と子のスキンシップが薄れがちな今日、それを強調することは必要だが、そのことが日教組攻撃になったり、ソ連非難になったりする。その指導者の右翼的短絡はいただけない。皇室に対する不必要な崇敬と左翼、部落解放運動などへの不必要な偏見がこうした世界に充満している。そしてそれが政治を動かそうとしているところに問題がありそうだ。

5月6日(日)

個性・忍・恕

どんたく連休も今日終るとさわぎがおさまって平素にかえる。近頃何のために生きているのかひょっと考えることがある。どうでもいいのに、どうしてひとはこうもあれやこれやと忙しいのかなと思う。自分だけで静かに生きることはできないのか。ひとを引きこんで、それも不必要に多くの人を引きこんで、そしてひとをけなしたり、ほめたり、よろこんだり怒ったりである。今日は高教組江口義一委員長の長男徹君の結婚式披露宴に出席。某氏のスピーチに、これほど同じでない人間が同じ屋根の下で暮らしていかねばならぬ云々のことが出た。夫妻は同穴というがやはり個性のぶつかり合いがあり、一番ぶつかり合う機会も多い。これをなめらかにまわしていくのは情念を措いてない。できるだけ自分を出さないでいく、それでも自分が出る。その出たところは許し合うことだろう。岩崎隆次郎の「逆転」出版祝賀会で私は、忍の一字ということがあるが、いつか堪忍袋の緒が切れることがある、これは恕によって救う以外にない、救えない時は忍が破れる、もちろん恕ばかりでは何ともならない、個性—忍—恕の三つがうまくかみ合わねばならない、今日一日こういうことを考えていた。夫婦がツーカーの仲になることが望ましい。他の人間関係も。

5月7日(月)

卑弥呼をあらわした博多人形

いつだったか観峰さん宅に招かれた時、そしてつい先日ドンタクの会合に行った時に会った博多人形師西頭哲三郎氏が3時頃知事室に来訪。次男だという西頭優司氏も来た。知事室に卑弥呼をかたどった特製博多人形があるが、これの作者。一度話しに来て下さいといっていたのを今日実現してくれ、大黒天の人形をみやげにくださった。小柄の実に平凡にみえる人だが、斯道の一方の指導者という。小島師の直弟子ということだ。卑弥呼について作家としての想像をたくましくした内容をあれこれ話してくれた。この人形ケースは高さ1メートル、横幅が2メートル、卑弥呼の背丈が70cm以上あるという。こんな大きな人形は平素作っていないし、他にも作らないので焼くのに特別の窯を用意したという。卑弥呼は3000人の侍女を従えていたといわれるから、体躯、容貌、表情のたくましさをあらわすのに大変骨折ったという。衣裳、髪、鉢巻なども特に工夫したし、又両手をひろげているポーズにも権力者を表象するよう努力したという。背景は亀井知事の注文で太陽をあらわし、それを油

絵で某氏がかいたので、衣裳など絵も油絵に合致する顔料を用いて調和を保ったという。日本民族の国家的統一のスタートあらわしているようだ。早良区に工場をもち次男が営業部長をしている。

5月8日（火）

文化と行政

日本庭園の開園式のあと RKB で県政サロンの録画取りをしたあと、十日に次回分の打合わせを広報室の職員とした中で、次は日本庭園で文化問題をやろうとのことであり、文化と行政のかかわりについて私見を披露した次第。それはおよそ次のような内容だった。文化は本来の人間の社会的自然な行為によって形成されるものであって行政と関係がなくてはならないものではない。しかし社会の発展につれて行政がこれにかかわる必要、要請が生じてきた。それは三つに分けて考えるのが便利であろう。第一は文化活動に要する経済負担がでない者でもそのニーズをもち、その充足のため行政が共通ニーズを選択的にではあるが充足する要がある。第二は、経済負担の欠如とは関係なく、住民の共通ニーズが協同で充足される事の効用が高い場合に行政ニーズとして文化施設が整備される要がある。第三は文化財保存のように、行政がタッチしないと個人的利害や欲求では社会的に損失が生じ顕彰されないような場合である。文化行政には啓蒙、教育、奨励が付随する必要があるが、受けとる住民の側ではあくまで強制となつてはならない。こういうことを私の方から提起し、それに沿えるような話題構成は録画取りでは困難かも知れないが、できるだけその考えがあちこちに出てくるように工夫してみようということになった。

5月9日（水）

杉本元知事の来訪

杉本勝次元福岡県知事が 11 時半に諸岡氏とともに、林室長にとまなわれて来室。もう 89 歳というのに、意外と元気な姿であるのにびっくりした。庁内に車椅子が用意してあったので、それで足を補えば、十分にわれわれに応待できる健康さである。彼は一度知事室を見たいという願望があり今日それがかなえられたのだが、知事の私に合つて彼なりに激励したいということのようだった。窓の外の亀山上皇像周辺の築山に今満開の淀川つつじを見てもらったり、板付空港や新幹線の位置もよくみてもらった。中食を特別会議室で共にしたが、庁議室を見たいとの希望もあったようだ。庁議室での中食はゆっくりだったし、それも殆んどたべてなく、自分の習慣だということで残りはもつて来た容器に詰めかえてもつて帰るといふ有様。戦後の飢餓時代をそのままに意識に残されている全くのつつましいクリスチャンである。社会黨員だったことがしばらくあったようだが社会党からももみくちやにされた後半期、右も左もないよと今日もそういう発言がきかれた。鶴崎知事同様大変苦労された。人事のことでは土屋副知事を副知事一人増の選任問題で解任という非常手段さえ

用いて退けた話も出た。土屋はそのあと知事に出馬。

5月10日(木)

日本庭園へのすすめ

日本庭園で県政サロン用RKB録画取りに応じ、時間のゆとりがあったので問研に電話したら八丁、東定、木下の3人が早速日本庭園の見学に来た。隣の美術館で中食を共にしての1時間余だったが、新緑に囲まれての楽しい一時だった。庭を散歩する人達も少なく、交わす笑顔のえしゃくもよいものだ。誰しも立派な庭園で福岡に一つ名所がふえたという。迎賓館の役割も荷ってくれる。ビルが林立する都市でのこの空間、毎日の仕事に追いまわされる生活の中の、ここですごせる時間的空間、それはまさに、今日のわれわれにとってのオアシスであろう。そのような時間がほしいし、ここまで足を運ぶ金銭的ゆとりがほしいし、そのような発想をする心のゆとりがほしい。この三つの「ほしい」が充たされることによって文化は育つ。逆にいえば文化のもとはこの三つの充足にあるのではないか。また、この三つを奪っていけば人間は限りなく野蛮になってゆくだろう。近頃は逢う人ごとに、日本庭園を知っていますか、一度行って見て下さいとすすめている。美術館と日本庭園は一对となってひとをよりよく満足させるだろう。八丁君たちも、これからできるだけここを使うようにしようという感動をもらしていた。いつも行く、できれば集りに使う、そういう所であってほしい。

5月11日(金)

第8期緑園会に初出席

昭和59年度(第6回)第8期緑園会東京部会というのが竹橋会館で6時から開かれ、この種のものに私として出席するのははじめてであった。4区隊(第2中隊)からの出席者は10人で伊賀定盛、移川文児、奥田八二、加藤正武、瀬川二郎、高木雄二郎、高田保治、別府清一郎、森川繁、横尾健一という顔ぶれ。鯖江で一しょだったのに片岡恭というのがいて、これも参加していた。出席名簿全員83人となっているが、そのほとんどは出席していただろう。あとは知らぬ者ばかりだ。1区隊の山中晋市というのがこの会の招集者、又同窓生文集を編集しているのが又1区隊の森博という人、どちらも知らぬ人である。よく見ると思い出すが、ひょっと会っても全くわからない。瀬川が内務班の食卓、ベッドの順列名簿を手書きしていたが若干違ったり脱落がある。でもよく当時が思い出せてよい。21人の名があるが、消息不明が1人、死亡が3人となっている。戦死はごくわずかということで、高草のごときは2年前に死んだという。他の区隊でも今年、昨年と、近々のうちに死んだ人も少くないようだ。40年ぶりの再会だった。別府が髪黒々として全く青年みたいな顔をそのまま再現しているのに驚いた。伊賀は兵庫五区の選挙のきびしさを歎いていた。

5月12日（土）

父子触れ合い冒険の旅

ホテルでの夜のつれづれなるままに、読んでいた日経新聞の夕刊に、父子触れ合い冒険の旅（尼崎の三菱電機労組支部企画）が目にとまった。労組員の平均年齢約36才、小学生などの子をもつ親が多く、「朝は早いし、夜も遅く、その上休日出勤もしょっちゅう、子供と遊ぶ機会もめったにない」ということで8月はじめにある連休制を利用して3泊4日、母親抜きブルートレーン借切りの旅行をするというのである。まず労組の発想の新鮮さに拍手を送りたい。経費もかかるまい。子供のためになることはもちろんだが父親のためにもなる。「父子の断絶解消」というほどに大きな効果は期待できないかも知れないが、断絶の継続の断絶という効果はある。時にそうやってみるとのことだ。スキンシップが必要なことがわかっていながら、誰しも遂々日常性に埋没し、安易に流れてしまう。父親が子供にふれることがどれほど渴望されているか、それがいかに効用があるかを知りながら誰しもなかなか名案を出しえない今の時節に、しかも労組が何をすべきかが問われている時に、こういう企画ができるということは、いかにもよいことだ。後追いつる例も多いのではないだろうか。機会があれば紹介奨励したいものである。われわれ子供の時は父子の触れ合いはありすぎた。父からはむしろ逃避したいほどだった。今の大工業労働者などはあまりにも多忙すぎる。もっと休暇をもち、自主的に子供と接触すべきだ。その教訓にもなる。

5月13日（日）

大阪福岡県人会の脱皮

大阪南港に碇泊中のフェリー船サンフラワー号上で開かれた今日の関西福岡県人会は家族連れの人達400人が参会してにぎわった。この船が苅田・大阪間を定期に就航しているということからも、福岡と結ぶ意義をもち、開放された船内で家族連れでレクレーションの時間をもち兼ねて県人会というのであるからこの企画は大変によかったと思う。東京、名古屋及びかつての大阪のそれは、少数者の集りにすぎずとても大衆的開放的といえるものではなかった。それをここまで変革し実行した幹部、福岡県事務所の努力は評価されてよいだろう。京都、東京、名古屋がここ一ヶ月ぐらいの間に今年度の県人会を予定しているようだが、大阪ほど開放的なものになるかどうかである。県人会は政治目的に利用されてはならないはずである。同県人であることを知り合うことによって何かの時に相互に連絡共栄をはかり、加えて福岡県という共通の郷里が懐古のよすがとなり、ニュースをかわし合い、時には望郷、帰郷の心はずませるといふことがあるなら、それでいい。近藤栄次郎氏が江崎さんのその方向への努力は高く買ってあげて下さいと前からいっていたが、岡崎工業の江崎氏（副会長）の苦心にはていねいにお礼をのべておいた。

5月14日(月)

奥田に名をなさしめるな!

ねる前になって、ひる間来室あったとき女子大の秋枝さんに電話した。弟さんが新京時代の緑園8期の同窓だったことが先日の東京での同窓会でわかっていたので、それも話題にしたかったからである。秋枝さんとそのことも話したあと、先方から昨年の副知事に高橋久子さんを起用しようとした時の裏話が出され残念だったとのことであった。彼女をめぐる保守系の女性がいる、「女性副知事の起用は奥田に名をなさしめるだけだから阻止しよう」との動きが出て話をごわさんになったというのである。そしてその方向で労働大臣も動き高橋さんに思い止まるよう説得した模様とのこと。高橋さん自身はかなりその気になっていたふしがあったということだ。私は直感した。それは遠藤政夫の手がまわったと。遠藤は奥田に名をなさしめるなといいつづけている自民党県連会長で労働事務次官までやり亀井の子分で労働省に今でもかなりな影響力を行使できる力があるというのである。遠藤が反奥田であること自体不思議ではないが、この男はいろんなところで小細工をする。それも全く意味のない反動的・非建設的な小細工である。この一年間、自民党県議やRKBの奥田攻撃の戦術はすべて遠藤から出ているといっても過言ではないが、実を結んだものは何もない。知事公舎入居強要攻撃の12月議会結着までの経過をみてもいかにも遠藤らしい作戦の結果であって、私からいわせれば逆効果というしかない。

5月15日(火)

中国からのお客さんを迎える

今日来福の中国側一行の名と肩書きは次のとおり

姫 鵬飛 国務委員、香港マカオ弁公室主任、
党中央顧問委員会常務委員
許 寒冰 上の夫人 外交学 副会長
楊 振亜 外交部アジア司副司長
李 培宜 姫氏秘書
武 大偉 国務院弁公庁外事組副処長
王 毅 外交部アジア司日本処々員
周 全成 警護官

同日本側随行者

佐渡島志郎 外務省アジア局中国課
飯田 典正 国際交流サービス協会
(通訳 日本側)
小寺 麗子 福岡県
永富 健史 北九州市

千葉由起子 福岡市

新三浦では、県、両市関係のほか、松本英一、加藤健（経済連合会副会頭）、岡野正実（北九商工会議所副会頭）、吉本弘次（福岡商工会議所会頭）、徳島喜太郎（徳水社長）、川添昭二（九大学生部長 学長代理）、それに安川寛（北九商工会議所会頭）

5月16日（水）

公明党県議との懇談

夕方呉服町の迎陽荘で公明党県議との懇親会があった。林県議が以前から希望していたことが実現したわけで、1人を除いてあと全員の出席だった。公明党の方からはとくにさきの2~3月県議会の運営について自民党のひきまわしに対する批判、運営の正常化に関する協力態度が強調された。公明党は良識派の集まりなのだとということで、疑いもなく、そうだと思う。今後ともこの線をふみはずすことはないから、安心してくれという。ある意味では知事のいう県民党とは公明党のことだともいう。私も以前学者として主張してきたことと、行政の長として一つの方針をさし示すこととの間には現実的ずれがあるのに、以前の主張を引き合いに出して議会で攻撃の種にするのは筋違いではないかということ、暗に自民党の攻撃のための攻撃に批判をこめて強調し、こういう政治の場では、話せばわかるはずと説明した。わかってくれたように思える。だったら今後、予算編成に際しては、公明党の要求大綱を早目に出してくれといったのだが、これは気持ちよく納得してくれた。与野党とか保革とかははじめから色分けを鮮明にし、判断の規準にしないようにということも提議しておいた。なごやかに意見交換が進んだ。

5月17日（木）

花田宗像市長候補への陣中見舞

ひるの一時、車をとばして宗像市長選花田新太郎事務所に陣中見舞に行く。花田氏は昨年の県議選で落選したが、惜しい人物を遊ばせておくわけにはいかないので、市長に立候補したわけだが、三人で争う。現職が強いだろうが、燃えれば勝つチャンスではあるという情勢。行く行かんで秘書では躊躇があったようだ。というのは県民党を名乗っている以上あとで問題がおこりはしないかとの懸念があるからである。知事が選挙応援に行くことについては今後のこともあるから、理くつとして整理しておく必要があるということになったが、今回は花田事務所からの強い要請で事務所への陣中見舞ということで、街頭を選挙カーで流すという要請はことわるとの線で妥協が成立したのである。選挙事務所には250人ばかりが集まり氣勢があがった。「奥田県政を守る」という主張がかなり得票に結びつくといわれる。私が行って少時間でも街頭を演説してまわれればもっといいことは陣営内の誰もが知っているが、今回はその点妥協してくれた。現職市長候補に黒いうわさがあるようだし、もう一人の候補は市議出身で3人のうち可能性が小さいらしい。選挙事務所での私の演説は

よかったらしい。

5月18日(金)

福岡市長候補(1)

福岡の市長選候補には早くから弁護士で元市教育委員長の近江福雄氏が、そして4月下旬には都留大治郎氏の立候補表明があって、今のところ社会党・総評ブロック系からの候補者は出せないままになっている。私は近江氏については全く知らない。都留氏についてはかなり知っている。まわりの者から市長候補について私に意見を求められたが、都留の名を出したことはない。九大の経済学部長もやった人だが、私が学生部長の時、いい加減な人だと思ったので市長候補としても勿論不適と思っていた。ところが彼自身知事候補になりたがっていたこともあってか、こんどの市長候補についても推すものがあれば、そして有力であれば志操は投げ捨ててでも応ずるたぐいの人で、今は自民党候補として決定され、社会党の推薦は拒否すると発言し、いわゆる革新陣営からは反撥をかっている。自民党の推挙をえるためには社会党のそれを拒否する必要があったようだ。ともあれ社会党総評ブロックでは都留に袖にされ候補さがしに苦慮しているのが実情である。中国に行く直前(4月22日)から何とか名案はないかというので私は阿部真也を推したが、彼は都留が相手なら出馬できないという深層がある。そこで数日前から私の示唆により同じ福大の石村善治にあたりはじめたわけである。

5月19日(土)

福岡市長候補(2)

阿部でなければ石村というのは5月はじめからの私の発想で、石村は福中、福高、東大法ということで都留とはぶつかることはないし、家が博多の菓子老舗、育ちが博多っ子ということから、これ以上の毛並みは今求めても他になかろう。但し5月15日に木梨氏にあたってもらったところによると、石村の返事は「否、だったらしい。しかし木梨は脈がなくなっているわけではないという。私は逃げられないように条件をととのえ包囲するしかないとの主張で、どうすれば石村を口説けるかが今の焦点である。石村は都留のように待ってましたといわんばかりOKとはいわない。が可能性はなくはない。そこで昨日、二宮と県庁で話合っ、私が会見を申込むことになり、そのことで東京から帰っての夜ではあるが、木梨氏に来てもらってそのことを話した。7時半東京から帰ったばかりの私を木梨氏が訪ねて来た。私が石村に会ってもいいといったら木梨氏はOKし、場所は他ではいけないといって木梨氏が石村を呼びに行った。警固の自宅に待機させていたらしい。9時前に2人で来訪した。単純率直に出馬要請の話をした。石村は反論なく木梨にまかせるといった。すなわち条件さえ整うなら出馬しようということだ。福大法学部長2期目をはじめたばかり。形を無理なくするため当初は拒否でいくことになった。

5月20日（日）

一つの江戸古地図

18日の夜弁慶橋清水という料亭で佐々木氏がもらってきた古地図、麴町永田町外桜田絵図（嘉永三戌年新刻景山致恭図之、麴町六丁目尾張屋清七板）をみると、今のふくおか会館は辛うじてこの地図の左端にはいる御用地にあたるということが知られる。料亭清水は赤坂御門の左にある紀伊殿屋敷一帯の一角にあたる。外堀に添って井伊掃部殿の屋敷、尾張殿屋敷がつづき、一帯が今は紀尾井というのだそうだ。それは四ツ谷御門につながっている。半蔵門前にある福岡事務所は特別によい位置にある。緑豊かで皇居が借景となって抜群に美しい。ここから日比谷御門まで外堀内がこの地図にあるがびっしり諸大名等役人町だったわけである。江戸八百八丁というがどうなっていたのか全く知らぬままだが、その一部をこの地図でみたわけ。それにしても皇居以外は全く面影を残さぬとは。浅草や増上寺など僅かに知っているにすぎないが、東京大空襲があつて焼野原になったとはいえ、昔の大建築物がほとんど残されてないのが残念でならない。資本主義の原理が街づくりにおいて、他要素一切をおしまくったのであろう。東京だけではない。福岡も、否全国的にそういえる。これが日本の特徴だとすれば誠に残念というほかはない。

5月21日（月）

福岡市長候補（3）

サンパレスでのコンサートの席上元九大教育学部・中村大学の原俊之氏が横にいて、都留大治郎が市長になったら、あなたに協力する面も出てくるでしょうと、もう決まってしまったかのようないい方をする一方、ただあなたから、酒をほどほどにひかえるよう忠告しておいてほしいとつけ加えアル中だから困ったもんですねといった。近江は「名もない」といわれるが都留は名があるというのが一般の見方だ。きくところによると、自民党内でも山崎派（玄洋会の流れ）が都留で走っていて、必ずしも党内の結束は固くない。太田誠一ほか、市議の中にも都留では快諾できぬ者が少なくなく、果たして熱心に選挙活動をするかどうかといわれている。江口県議、遠藤参議も活発に動くとは限らない。その意味で近江が割れ目をねらっていることは確かである。3億円も出せば保守統一のため立候補辞退ということもあるだろうが、値段をつり上げるためまだ頑張るだろうといわれつつその去就が注目されている。いわゆる革新側の動きだが、昨日今日二宮の動きが音沙汰ない。石村ではまともらないのかも知れない。岩元が「あれは共産党ですよ」といったことがあるが、この種の意見が台頭してきたのかも知れない。

5月22日（火）

赤字ローカル線（第二次）意見書提出をめぐって

国鉄の再建で赤字ローカル線廃止方針が実行段階に入っていて、今第二次指定をうけてい

るものについて関係知事の意見書提出がせまられている。昨年 11 月全国知事会議は意見書不提出との申合わせ縛りを解き、この 4 月九州知事会議も同様の態度を決定した。政治圧力と知事の立場がそうさせるのである。この段階になって産炭地問題をかかえる北海道と福岡が未提出として残されてしまったのだが、北海道も意見書提出に踏切り、福岡県もやむなしということになってきた。但し、上山田線について碓井町と山田市では議会が意見書提出に反対するとの決議をするに至って、県がこの事態をどう扱うかに苦慮するというのが現段階の実情である。今日は県の意見書原案につき、社会党白石県議と八丁氏が来訪、情勢上若干のクレームがついたわけ。原案の一部削除と、上山田線だけ別扱いにして更に若干日提出をおくらせるというのである。原課の交通対策課ではもうどんなにやっても仕方がないから、できるなら原案でいきたいという。知事はどうかというから両方で議論を深めてくれと行って別れた。意見書二分については運動論としては理解できるが事務レベルではやりにくいことだろう。いずれにせよ、ここまでくれば実質的な成果というよりは形をどうととのえるかである。

5 月 23 日 (水)

福岡市長候補 (4)

夜九時頃になって木梨氏が石村氏を伴って来訪。かんたんに言って健康上の理由で出馬を断念したいとのこと。白内障が心配と、若い時から肺病をしているので、頑丈にできてないともいう。私はそれについて何の反論もせず、二人も 10 分も話したら辞退した。あとで二宮氏から電話がかかった。木梨氏から今断りの電話があり、知事にも同じ趣旨のことを申伝えたところだというのである。健康上の理由のほか、萬盛堂の商売がやりにくくなるということも理由にあげていたが、この方は強調されなかった。だけど、私にはこちらの方にもかなりウエイトがかかっているのではないかと直感した。そしてこれは当然なことではある。しかし、いずれにしても克服できない障害ではないのではないか。二宮氏に電話で押すしかないといはった。二宮は地区労議長副議長らあちこちに手をうち、もう事は動きは始めているという。みんなよろこんで張り切ってやりはじめたという。どの辺まで事態が進んでいるのか知らないが、のりこえられない障害とは思えないので、石村・木梨その他がやむをえないと感ずるような保障を持ち込んで早急に障害の克服に取り組むことが必要と私は主張した。ここ数日に攻防の山場がこよう。健康上の理由は都留氏以上に理由薄弱といえるし、誰しも推される場合一度はもち出すものなのだ。

5 月 24 日 (木)

新北九州空港の建設について

新北九州空港の建設促進期成会が発足してから 6 年になるという。今日小倉の弥生会館でその理事会、総会が行われ、会長は知事、副会長は北九市長苅田町長ということで会の議長

は私がつとめた。現に予定地と目される苅田沖の浚渫土投棄場は空から見てもくっきりと沖合島の形が浮かび上るまでになっており、着工には時間がかかるにしても予定地としての位置決定を急ぐというのが当面の陳情目標になっている。国の空港整備プロジェクトとしては、羽田の沖合への拡張、成田の整備、関西新空港の建設という三事業に力を注ぎ他に力を入れるゆとりがなく、新北九州空港には手がまわらないのが実情といわれる。65年までに新北九州空港建設という第4次計画が予算難のため65年以降にずれ込むだろうとの観測が高まっている。地元では国道十号とこの空港が開発計画の骨格をなしているだけに、強い熱意が感じられる。その点これらプロジェクト実現のため現自民党幹事長田中六助の力を借りねばとの意向が強く、地元の熱意を伝えるための陳情の必要性が理事会で強調されたのは当然である。但し、この空港の経済的必要性がどの程度のものか検討してみる必要があろう。

5月25日（金）

新幹線筑豊駅設置の声ようやく出はじめる

昨夜ニューオータニで野村不動産の若林法雄氏と食事しながら懇談したが、席上、筑豊新幹線駅及び付近の開発計画についてのデッサンが示された。彼は前々から自分は住宅建設専門だからその観点からの関心しか寄せられないといていたが福岡支店の海野氏にはデッサンの仕事がまかされていたらしい。海野氏は直方の坂口県議、県の前企画開発部長長沼氏が依頼していたものだともいていたが、考える開発計画を念頭においていたらしい。これではまだ現地をめぐる経済可能性のデータが足りないからこのままというわけにはいかないと若林氏はいていた。いずれ本格的なデッサンのためには調査研究費を当方で計上せざるをえないのだが一つの見本、たたき台ができたことは確かである。これに関し本日当の坂口県議が来訪、国鉄下関工務局のデッサンの写しを見せ、彼は彼なりに花巻その他を調査し、現実的運動展開の手順などについて話題を投げかけてきた。超党派的な筑豊浮揚インパクトの有力手段をえる材料ができたわけで、坂口氏の話では62年までに完成させる必要もあるので、早速にも県、北九州市の財政可能性の検討をあわせ進めていかなければならない情勢になってきた。

5月26日（土）

首をかしげたくなる人物

昨日の臨時県議会で正副議長の改選があった。一年で交代するという默契があつてのことなのだが、議長にどれだけの特典があるのか知らないがそれに群がる者たちの醜態がありありわかる。当然に新聞の批判があるが、こたえない。樋口に代って岡本、関に代って大塚ということになったが、自民党が独占した。4回5回の当選歴がある人なのでそういう人のうちからのタライ回しのようだ。ただ、今回はどちらも人物はよさそうだ。ところが自民党

の幹事長の篠田栄太郎はどうだろう。【52字略】昨日の代表者会議で自民党を代表して来ていたが、正式に議題が予定どおりすんだ後、散会の直前になって、知事が宗像市長選に際し特定候補を応援したのは県民党だといってきた従来のスタンスをかえたのかと私に質問を投げかけた。第一、こういう事は議場でいうべきことであって、そのため私も答えなかったし、社会党の中村、民社党からも答弁に異をとらえたので樋口議長も、ここではやめようといっって散会にもち込んだ。非常識きわまる男だし、無礼でもある。自民党の中には立派な紳士もいるが、こういうのもいて、紳士があまり表に出ないのが残念である。

5月27日（日）

教養部報に原稿を書く

先日教養部の執行君が来訪し、部報原稿を依頼してきた。別便で依頼状も来ていた。今更私がとは思ったが残された義務かも知れないと思い引きうけてそれを今日書いてみた。いかにも内容の乏しいものになってしまった。実は別段書くことがないわけ、というよりは頭の中が散漫になっているのである。というよりは又、問題意識が別というか別世界の人間になってしまっているのである。毎日の中ではそうは感じないのに、ペンを取ってみるとそれが今日ばかりはよくわかった。原稿のはじめの方に、これに類することを書いておいた。なんで知事になったのか思いもよらぬ変化で、大学教授でいたらこの3月に定年退職で、その後今日も似たような質をもつことをしているに違いない。その方がよかったかも知れない。書齋にぎっしり詰めこんだ教授時代の書物は死蔵同然だが、捨てるにしのびずただもっている。他人にやるかというとやる気になれない。後に見ることもないだろうに、手放す気にならない。そういうことにもふれてみた。今「教育臨調」が政治日程にのぼっている。中曽根首相の思い付きみたいなことで片付けられたら、大学をふくめ教育がこわされてしまう危険性がある。改革という名の破壊が行われてはなるまい。このことにも付言してみた。

5月28日（月）

行革問題をどう展開していくか

行革をやる——どこもはやり、私は県独自の行革を主張。県議会自民党及び行政部内の委員の中には行革とは人員削減なりと称して奥田行革を牽制しようとの動きがあり、行革懇が条例による行革審となり、議会内にも「先生」方で行革特別委員会を作って牽制にムキになっている。こういう中で今日審議会の委員長逢坂教授らに私の気持ちを一応伝えておくための懇親会を黒田荘で開いた。行革の理念は行政の効率化ではあるが単なる減量ではない。県民の行政へのニーズは必然的に高まり、同時に内容が変化していく。他方では国の法律と財政の枠がある。その枠の中で将来に向かってこのようなニーズにこたえていくには人員、予算のシフトをニーズに対応するようシフトがえしていかなければならない。これが県独自の行革である。このことを逢坂教授たちに私の方から問題提起したのだが、教授たちの間では

その理念には賛成できるが、実際に答申を作るとなると、どこかの人員削減ということになるのではないだろうかとの意見が出てくるという。人員削減のない行革はないとはじめからきめてかかっている久山町の小早川町長や自民党の連中が、結論をそこにもっていこうとする。私はこれに釘をさしておこうと思って逢坂氏に訴えたかったのである。

5月29日（火）

福岡市長選候補（5）

今日の大手門会館での福岡労金第31回総会の中休みのとき、あいさつに来た私を捕えて二宮福岡地区労務局長が、石村福大教授の説得に私にもう一度労をわずらわしたいと申入れてきた。あのあと木梨、二宮、本人らの接触が何回かあったが、石村氏は奥田にはっきりお断りしているということで、二宮にあきらめてくれと行ってきかないらしい。木梨氏も石村氏の健康上の理由が医師の立場から本当なら、自分も石村を推しえないとっているらしい。結論をえるために福大病院に診察してもらうことになっているが、どうしたらいいだろうと二宮は私にいう。私は彼が断わるのは正道だ、しかし、それをはねかえして押しの一手に徹するのも君の正道ではないのかとっておいた。二宮は徳本正彦氏に石村説得をたのんでもいると聞いた。いずれにせよ、私が石村氏に会う必要があるなら会って説得に当るのもやぶさかではないとっておいた。いずれ問題は6月にずれ込むだろう。2日前檜崎弥之助氏が民社系から推されて出馬決意と新聞発表されている。都留自民党の中にも亀裂が生じているらしい。だんだん面白くなってきたわけだ。二宮はどうしても候補者を立てると新聞に言明している。

5月30日（水）

“青年の船、訪中団の帰港

今朝2週間の船旅をおえて福岡県青年の船が博多港に帰ってきた。永井滋輔副知事が団長で選択された青年男女330人が規律のとれた船内及び上陸訓練をつみ重ねたわけである。上海、無錫、廈門の三都市に上陸し中国の青年たちと交流したという。多感な青年時代のこうした一日一日が、彼等にとっていかに有意義だったか表現のしようもないだろう。何を学んだかは各人異なろう。どれだけ学んだかも異なろう。訓練の厳格さも相当なものようだが、そのよしあしもあるだろう。しかし、団体で旅行するという事は、ひとりでするよりも、はるかに大きい教訓を残すだろうし、“青年の船、”のような一つのシステムをなすと効果は倍増される。下船して最後に円陣スクラムを組んで歌をうたって別れる時、みんな泣いていた。二週間の短かったが多くを学んだ数々、交わした友情のシーンの数々を思い浮べていたに違いない。これらの青年が今後人々に与える影響ははかり知れず大きいだろう。一番に形にならぬが大きいのは平和への貢献である。私たちは大東亜共栄圏とかチャンコロとかいう言葉で教育されて中国大陸に侵略する軍隊の一員として戦争に加担した。もうそれ

は不可能になるだろう。それは確実にいえる。ただ、原子力戦争をどうくいとめるかという課題には異なる対応が必要だろう。

5月31日(木)

原田観峰揮毫会

夕方、天神にある原田観峰さんの日本習字教室での揮毫会に行くことができた。留学生数人を呼んで彼が揮毫し贈与するという仕組み。私にとってはこの教室は初訪問だった。規模の大きいのにびっくりさせられた。3ヵ月ほど前だったか大濠の観峰邸に呼ばれていった時につづいて2度目のびっくり。まだまだびっくりさせられるようなことにでくわすに相違ない。全国をまたに、世界をまたに、右手と筆一本で成しとげた彼の偉大な力は驚くほかはない。大言壮語に聞こえることを彼はいう。しかし、実力に裏付けられているのだから、大言壮語といえないだろう。私より10歳上というふうに聞いたが、元気そのものである。運筆の滑らかさ淀みのなさ、紙への乗せ方の無駄のなさ、筆跡の美しさ、変化に富む字体など揮毫に立ち会うだけで価値がある。悪銭をかせぐのではなく、浄財が集まるといった方がいいのではないか。巨万の財が彼の蒐集欲で集められているらしい。人間としてもだが、コレクションも大変な価値のようだ。留学生への善行はその一片にすぎないが、世界をまたにかけた蒐集物は将来まとめて一種の博物館になること間違いない。京都の本部や伊都の里にも行ってみたい。

MEMORANDUM

文章に誤りが少くないことについて

以前にはほとんどなかったのに、近頃は文章の綴りに誤りが多くていけない。例えば熟語を書く時に後の字を先に書きはじめたり、かなでも後の字が先になる。全く無意識にそうやって、書き損じはじめて後それに気づく。なぜかわからないが、そうなる。それから、平凡な漢字を忘れてる。しばらく頭に浮かばないか、誤字を書いて気づかかない。頭になかなか浮かばない時は、面倒だから字引きを引く。字引きがないとブランクにしておくか、かなにしてしまう。後の字を先に書くというのは「平凡」と書きたい時に凡の字を書いてしまうわけ。中学生の頃は漢文の時間があつたせいもあって常に漢字に注意し、多くの字を知っていたと思う。今はかなり多く忘れてる。このような日記を書く中でそうした誤りがいくつあろうかと思っている。又、日記は、毎日惰性で仕方なく書いていることが多いので文章が練れてない場合が多い。読み返すことがたまにあるが、決していい文章とは思えないことがしばしばある。あとで、そのことをたねに書き直すことがあれば、そしてひまがあれば、もっといいものができるに違いない。時間と気持のゆとりがなければ、いいものが書けるはずがない。その日何を書くか熟考せずに、ポツと思いついた事を書いていく。このようにして何年か同じことをしてきたわけ。読み返して何の役に立つだろうと思うし、今は、あの時

と違う考え方をしていると思うこともある。

【「6月のスケジュール」欄に「6.5環境週間」の切り抜き貼付】

6月1日（金）

知事を囲んで福岡女性会議

高木董子さんらが主唱して福岡女性会議が昨年5月にできたとか。そのグループの所望で今日6時半からYWCA3階の部屋で箱弁当の夕食をつつきながら知事を囲む集会が行われた。各区から代表を派遣したような形にして多数すぎないようにしたらしい。25人集まったうち10人がこもごも立って知事に要望意見をのべるといふ形になり、私が解答々弁することになった。みゆきも横にいた。各々が自分達で選んだ知事ということで、期待が大きい。元気な顔もたしかめたい、山ほどの要望があるというわけだ。非核宣言都市にもっていくにはどうしたらよいか知事に音頭をとってくれないかという要望がまっ先にとび出した。保育園、高校の問題が当然に出た。海や川の汚濁汚染のことも問題になった。知事の事務処理の立場よりは、音頭取りの立場への強い期待があるようだ。オールマイティであると思っただけにしても、知事が言えたいといふことへの期待があるのだろう。平素の生活や運動のなかで真剣に考えていることがポンポンとび出した。徳山さんら幹部級の人が予めぐっと締めていたようだが、放っておけば果てしなく発言があつたらう。

6月2日（土）

今津の大寿園をみる

土曜の午後は解放してほしいのに、二つあった。一つは日赤の藤井常務が前から所望していた今津病院の視察である。行くと、特別養護老人ホーム大寿園と隣接していて両方視察できた。知事は支部長なので支部長視察ということになる。両施設は連携してうまく経営されているという。看護婦ら職員も知事来訪ということではり切っていたし、老人ホームの入所者たちも大歓迎してくれた。ホーム職員48、入所者100ということだそうだが、それなら2人で1人に見てもらっていることになる。在宅だと仮に主婦がかかりつきりになるとすると、半分ですんでいることになる。その代わり、医師、看護婦らの人件費、ホームの施設費などかなり巨額に達するであろう。その点、社会の生産力が発達し、めぐまれた条件の中で養護されるわけである。県下には数万人の特養に値する老人がいるようだが、入所できない人がずいぶん多いだろうし、今後ますますその人口はふえてくる。片や政府は行革をگری押しして、土光は全国をかけめぐって「増税なき財政再建」の呪文を吹聴している。夜のテレビをチラリ見たところで社会党委員長の石橋氏が、ゼロシーリングの中で軍事費が突出し、福祉・教育が切り捨てられている云々といっていたが、全くその通り、憂うべき事情にある。

6月3日（日）

見とおしが立たぬ蔵書の整理

机辺は一応形がついているが、詰め込んだ書籍類がほとんど整頓されていない。とくに全集ものでバラバラになったままのものについて気がかりである。あちらにもこちらにも、二重、三重、積み上げ、押し込みの状況である。全集ものだけでも早く救出したいが、このスペースでは不可能に近い。先日観峰さんが洋書10万冊の整理寄付の話題を出していたが、これは大変なものだろう。玉石混淆だと彼はいうがまとめ買いをするとどうしてもそうなる。われわれまとめ買いをしなくても結果的にはそうなる。となると、そうなるのが当たり前というか、物事の常態というべきなのではないだろうか。その日その日に入用なもの、長期に不断に必要なものと、大きくは二つに分かれる。単行本と全集の違いもある。辞書はいつまでも、そしていつも必要だが、専門書はその時だけということになる。これはもちろん玉石の差ではないが、どうも我が蔵書にも玉石混淆あることは明らかである。玉石の石だからということ^マ捨てるに忍びないものがある。石だと判断を下す尺度がどこにあるかもわからない。ともあれ、わが蔵書はいつ整理がつくのか全く見とおしがつかない。部屋を使うたびに、ほんの一寸だけ模様が、現実性を帯びてかわっていくことだけは確かである。

6月4日（月）

三役会議を始めた

今日始めて開いた三役会議だが、大げさにきこえないようにするため、名称を単に打合せ会と呼ぶことにした。①60年度当初予算編成に向けて（その特徴を何に定め、国、国会議員に対する陳情方針）②行政改革の理念など、③国鉄問題（ローカル線では甘木線、上山田線への対応、新築豊駅建設）④旧県庁跡地、知事公舎処理、⑤国民体育大会準備⑥21世紀に向けての長期ビジョン作成 ⑦地元財界との接触⑧中国総領事館問題 ⑨商工部工業課改組（技術振興室新設）、⑩副知事新任 が私の方から現存する話題として掲げたものであった。どの問題も具体的結論はなかったが、それとなく話し合った。人事としては池ノ内総務部長の問題もあるが本人出席でもあり、これはとり上げなかった。林県議も加わる会である。第1、第3月曜の11時から庁議室で行いあと中食こんだんとするスタイルをとる。議題は特に定めず自由発言とするということにする。これまで三役といっても思い思いに歩調をそろえる努力をやってきたにすぎないので、今後は口に出してもっている問題を話し合ってみようというのだが、歩調が揃うかどうか、どこまで揃うかだ。まだ疑信が混在しているフシがある。でもこれからは形ができたのでその点助かる。

6月5日（火）

福岡市長候補（6）

4日頃までに何とかとっていた二宮だった。3日の日曜近くの主な者が集って話し合いお

おむね意見は一致したものの木梨がないので最後の押しがわからなかったらしい。昨夜も二宮の来訪を心待ちにしていたが来ない。今日電話してみたら木梨氏に今日会うという。夜になって木梨氏から電話があり、鹿児島に法要か何かで行っていたらしい。石村でいく事で自分は決意したという。二宮はもちろん、県議の林、参議の松本にも会ったらしい。林の話では解同、土建グループ、料理屋グループは松本が全部まとめるということになっているのでこれはかなりな力だということだった。木梨にそのことを伝えたい。木梨は林、松本に会って決意を改めたようだ。石村にその旨伝えたという。石村は特段の否定はしなかったが、頭を抱えこんで帰ったよと木梨がいう。萬盛堂は松本に遠からぬ関係があって、その方面から反対の声は出ないようにしているとの説は数日前に林から聞いていた。その通りらしい。木梨は香蘭社の深川、フチカミの渚上ら石村福中同窓生を近々集め、あの手この手で今後石村擁立行動をとる。石村は福大の手前があるからいくらでも辞退をつづけてくれてもいいと木梨から石村に言明した。私の^{ママ}そうすることで福大を巻込めとっておいたのであった。

6月6日（水）

福岡市長候補（7）

山ノ上ホテルで九州地方知事会議の前夜宴会が終って帰宅したら二宮氏が待っていた。石村氏からの木梨氏あての手紙のコピーを示し、デッドロックに乗り上げたと言ったと二宮はいう。木梨氏の昨夜の電話とは全く逆。二宮の話では木梨氏もやむをえないかもと全く弱音であるという。何ということだろう。石村氏は福大の事情をもっぱら書いている。学部長、大学拡充プランの最中、学生への愛情、等々、それに、外遊した者は三年間退職しないオブリゲーションを負うということもある。彼自身ライフワークを考えているともいう。「固く固く辞退する」という趣旨で貫かれている。二宮は木梨氏の弱腰にすぎる所がないという。私は「君が弱音をはいてはどうにもならん」とはげまして別れた。玄関ですれ違うように木梨氏が来訪。彼は福大にたよれる相談者がいないこと、西嶋有厚氏も賛成してくれないから諦めるしかないように思うという。私は押すしかないと言った。誰が押すのか名案はない、知事が最後のたのみだという。私は石村氏にもう一度会ってみる気になった。二宮は夜も眠れないと焦燥している。日程がすぐとれないのは残念だが、9日の夜、名古屋から帰ってから会うことを木梨氏に約束して帰ってもらった。

6月7日（木）

健康

なかなか眠らない状況がつづく。夜は11時までに就寝するといいがその頃を超すと、ねむりつかないので結局起き出して医者からもらった睡眠薬をのむ。それで眠る。悪影響がでてはいけないと思って丸薬半分にすることが多い。理由がよくわからない。神経の使い方によ

と思うが、それ以外に心配事があって床の中であれこれ考えるからではない。こんな状態はもう3~4ヵ月つづいている。体重は去年は48.5kgまで減ったが、近頃は53kgまで回復している。57kgもあった頃もあるが、今のが丁度よい。食事は少しとりすぎるかと思うが米・パンの類はできるだけ一人前より少く、残すように心懸けてきたが、近頃は心懸けなくても腹の方がきまっているように思える。ただ宴会が多いので、他の酒肴類が思わず摂りすぎるのではないかと反省することが多い。甘い物とくに菓子類はほとんど食べないでいる。従来からの随性が残っていて、自制心なしにはつき合いの気持も手伝って手が出ることもある。これまで肩こりなどかつて訴えたことはなかったが、近頃肩こりだろうかと思うことが時にある。しかし、すぐなおってしまう。一にも二にも健康と人はいふ。睡眠さえとれば幸い毎日健康である。

6月8日(金)

福岡市長候補(8)——都留辞退の日

東京事務所に朝食ゆっくりして森山に電話ののち、体協に陳情に行っていると、森山から佐々木に入電、都留が市長候補辞退と伝えられてきた。病気理由かと直感したが、田中幹事長との中食会の時、彼から胃の手術と発言があった。5時板付に着き、博多駅で夕刊を買いみると、各紙大きくトップ記事で第二外科(九大)で胃潰瘍手術のことが出ていた。明日夜林県議らと石村教授への出馬要請につき共同行動をとる連絡を東京から森山(庁内)に電話したのだが、この都留辞退が新しい条件として当然に考慮に入ってくる。森山からは石村氏土曜不在のため、今夜木梨と二人で私を訪ねることになっていると入電。帰福後やま祢で正副議長を囲む懇親会を終って帰宅。午後9時になって二人の来訪があった。私は単刀直入に、先日の木梨宛の手紙のことを念頭におきながら出馬のことを要請してみた。木梨氏は今日は弱音ではなく、俺にまかせろ一てんばりで説得した。私は条件があればいくらでも木梨氏に出してほしいこと、福大のことが一番気がかりだろうから表向き固辞し、木梨氏を通じての条件に納得できない限りいつでも否認してくれていいという意味で説得した。その代わり周囲がかつぎ出しに燃える状況を見守ってほしいともいった。石村氏は手紙にこだわらず率直に、時間をかけずわれわれの主張を認めてくれた。二宮に成果を電話した。

6月9日(土)

朝日新聞と都留を思い出して……

もう一年の前だが、朝日新聞の西牟田記者が私に目の前で朝日のおかげで奥田は亀井に勝った、朝日は亀井でないなら他の誰でもよかったので奥田を支持したわけではないと豪語した。そのずっと前私が立候補の決意をした頃、朝日の福岡総局長草壁はあいさつに行った私に、都留なら勝てそうだが奥田ではどうかと思うともいった。これも無礼な言い分だと私は今でも思っている。その都留が市長に立候補するというので朝日はよろこんでいたに違

いない。西日本も客員論説委員としての机を都留に与え、久山の小早川が好きで彼をほめちぎり、その小早川を都留が好きときているので、こんどの都留の市長候補辞退は朝日、草壁、西日本、小早川ら思うに“切齒扼腕、ということだろうと想像する。自民党とは別に、彼ら一連の都留派のくやしさが目に見えるようである。たしかに都留には朝日好みの面があった。朝日には都留好みの面があった。しかし、岩元や中楯、大屋、荒牧の連中にいわせると、あれは市長に不向き、アル中で当選しても二年はもつまい、経済の連中は立候補に反対しているのに振り切って立ったともらしていた。その都留が今年のこの頃、大名のわがマンションに来て、俺は奥田より偉いんだとか、俺は奥田のようなへまはしないと豪語していた。みゆきがそれをきいてカンカンに怒った記憶がよみがえる。

6月10日（日）

空缶拾い精神運動

日曜というのに、公式行事で海岸美化行動日として参加した。ただ、レクレーションと割り切ってしまう方がいいということにした。外に出て身体を動かすのも決して苦にならない。空缶拾いの県民行動は、空缶や弁当がらを捨てないという精神運動なのだとすることを強調しておいた。すぐ理解できることなのに、理解しない人が多い。一にも二にもモラルの問題なので、条例化すべきだとの声もあるがモラルの高揚を叫びつづけるのもよいだろう。物質文明が発達し、生産技術がどんどん自然を変えていくのだから、人間の心がそれに伴って変わっていかねばならないのに、それが遅れてしまう。モラル高揚の運動はその遅れをとりもどす動きである。自動販売機型のジュース類の缶製品が日本ほど氾濫している国はないといわれるし、ビニール系石油製品の包装革命の進展は大変なものだ。缶は再利用資源として回収し、ビニール系は焼却するしかないことはわかっているはずなのに、それらがどこにでも捨てられ、海岸に打ち上げられ、又は行楽客がリゾートゾーンをこれら物質で汚してまわる。人間変革が何よりも大事だが、生産企業の規制ができたらもっといいと思うのだが。

6月11日（月）

福岡市長候補（9）

自民党は新候補の見当がつかず、内部統一をはかる上で進藤市長の再出馬に切りかえて全力をあげているという。遠藤が都留に社会党と一線を画す発言を強要するという馬鹿げたことをしたため社党が離れ、都留の楽勝見込みが水泡に帰し、労多くなった都留は檜崎の出馬を誘い出す結果となって入院立候補辞退という大転換となったわけだが、進藤市長は80歳の高齢、しかも一たん引退を内外に表明してまわった後だけに、再出馬となればみっともないことこの上ない。林県議の話では、自民は大阪県人会に亀井の余光をたよりに政治献金の依頼に行ってことわられたという。公明党は都留相乗りを打出した手前これまた迷って

いる。民社は檜崎だが、ひょっとすると自民も檜崎に乗りかえるかも知れない。公明がこれに追従するとなると、こんどは檜崎有利の声が強くなって来る。2日前の西日本と読売に、社共地区労系が石村に的をしばったと報道されたが、誰が洩らしたのだろうか。二宮は社党に一寸いうとすぐブンヤに抜けるというのが二宮が洩らした可能性もある。なぜなら、二宮の指摘として、石村の長所推す理由を三点ほど箇条書きにしているからだ。石村勝利のためには社共労は後に引くべきだ。

6月12日(火)

福岡市長候補(10)

都留入院のあとをうけて、大方の予想に反して一たん引退を表明した進藤現市長が80歳の老躯に鞭うって自民一本化保守市政、否進藤市政継続のためという理由で、再出馬要請に応ずる決意表明となった。政治は一寸先が闇といい、残酷冷酷でもあるという。そのようなどんでん返しが演ぜられたわけだ。都留の病気ははじめからわかっていたが、保守が危機感を強めたのは都留では一本化できず、分裂敗北の可能性が濃厚になっていた。どうやらこの逆転劇の主演は永倉ではないかと推測されている。永倉が都留を呼び、出馬取消しをせまり、主治医に因果をふくめて入院出馬辞退をおしつけた。進藤には2年でいいから中継ぎ的に市長をつづけてほしい、2年後は統一地方選、知事選にぶっつけて市長選をやり直す、その方がカネもかからないし、奥田打倒の戦略にもかなうという計算ではないかというのである。保守の危機感は、このままでは奥田県政は来期もつづきそうということと分裂の二重うつしになっているのが実態。そこで都留をおろし、半分進藤市政という戦術を取って採用したようだ。遂に都留はピエロになったし、進藤市政継承をとらえた近江福雄はおり賃をかなり取って出馬断念となり、檜崎も半ピエロになった。

6月13日(水)

福岡市長候補(11)

石村氏が木梨氏のところにやって来て、進藤市長が再出馬にふみきったので自分はとてもやれない、これですっきり割り切れたという意味のことをいったので、自分もやむをえないと思うと昨夜木梨氏が電話で報告してきた。石村氏は二宮にもそういつているらしく、訪ねてくる新聞記者達にもそういつているらしく、接する人すべてが石村絶望という。進藤立候補の報は近江福雄陣営にも痛く影響を与え、近江支持群の中に半ば以上諦めムードが爆発的にひろがったらしい。強気の者もいないではないが、立派な事務所も作り走り出していたところだったので近江陣営では投下費用を回収するため、辞退料をできるだけ高くせねばひき合わぬとの計算もあろう。それに、一たん辞退したら、あと政治生命がなくなることは承知しているであろう。その点檜崎は、近江と同様に、進藤市政の継承を主張しただけに、そして、辞退料をとることはできないだろうし、政治生命もかかっているから引くに引

けない苦悶の中に突き落された形になっている。石村氏がダメならこの陣営は暗黒の振り出しに戻るしかない。進藤の立候補への変身はそれほどに問題が大きい。2年ほどしか健康がもつまいともいわれているので、自民党はあくまで継ぎ、それまでに統一成る？

6月14日（木）

戦争前夜ということ

夜中川君からの電話で、バグライ氏を大阪へ無事送り届けたということ。バグライ氏はわが協会の力量にかなり関心をもっているということでもあった。とくに彼が強調したのは、バグライ氏から見ると日ソ関係はすでに戦争前夜のごときであるのに、よく友好活動をしてくれたとよろこんでいた点である。奥田宅に夜訪問でき、今後の交流などについて話し合えたのはアットホームでよかったらしい。幹部間の交流をもっと深めようとのよい返事がもらえたという。東独、ハンガリ、ブルガリア、チェコなどにも関係をつけてやるといったらしい。日産自動車を見学できたことも印象的だったらしい。戦争前夜という表現は誇張でないかも知れない。われわれが案外のん気すぎるのであろう。アメリカのさしがねで外務省や自衛隊が反ソに敏感に立ちまわっているだけで国民はそれほどでもないはずである。一部には反ソでこり固ったのはいるが、だからといって国民を今戦争にかり立てる空気にはない。全く一部の者が原子力戦争の引き金を引いて国民を全部巻きぞえにすることが問題なのだが、国民がそういう分子を政治外交、軍事のキイを握る場において平気だというこの雰囲気の問題それ以上に問題なのである。今日の平和問題のポイントがそれである。

6月15日（金）

高教組・福教組大会への祝辞

9時から都久志会館・高教組大会でのあいさつは拍手での迎送感激してか声がうるんだ。伊川温泉センターでの嘉飯地区労幹部との中食会には伊藤労働部長、地元労働福祉事務局長も参加し、知事の顔みたいという程の集りだった。知事はなかなか現地に来ないという不平もまじっていたが、心からの歓迎。宮田保健所でも帰りに玄関で写真を一しょにとつてほしいと所望され、これまた大へんよろこんでくれた。直方総合庁舎の鞍手福祉事務所ケースワーカーとの対話は時間が足りなかったが、気持は十分に通じ合ってよかった。もう一度こういう第一線職員との対話があればいいと思った。市民会館での福教組大会には例によって右翼がおしかけたようだ。機動隊の警備もまだ残る5時すぎ私は入場した。それまで各所まわりをして時間稼ぎした形になった。組合員の大きな拍手で迎送された。あいさつの内容は朝の高教組大会とほぼ同じだった。私は管理者も教師も親も子供の澄み切った目を見、やわらかい手を握って教育荒廃という現状を見、考え直せと訴えた。管理主義に毒された教育荒廃打解には教員の団結も必要と訴えた。教師諸氏には一寸きびしいかなと思ったが、それくらいの方がよいだろうと思ったからである。学校現場はまだまだ管理主義が貫かれ厳し

いようだが、徐々に精神的にやわらいでいるようだ。

6月16日(土)

直美のこと

専修大学文学部長大島教授が知事室に来訪。育友会のこととは予告されていたが内容の見当がつかかねていた。会ってみると8月26日に開かれる福岡育友会に出席してくれということであった。昨年は何かあってみゆきも出席してないので、今年は、直美も4年卒業の年なので是非出席しておくべきだとは思っていた。私も出席すると返事をした。直美のことにふれ、あれは小心な子だから大胆な誤ちは犯さないだろうと思うと私がいったら、ほがらかないい子で、成績もよいですよとってくれた。わが子が褒められると悪い気持はしない。夜直美に電話した。母の日も、そして明日の父の日も、贈物をしてくれる気のかいようで、そのことも含めて彼女に今日のことを伝えたら、大島先生が私のことを知っているはずがないという。だが、来訪の目的があるなら誰かにきくとか下調べはしたであろう。ともかく褒めてもらったわけ。就職のことも東京でなら自信をもってあっせんしてあげると部長はいってくれた。直美は私が知事だということで、福岡で就職することを嫌がっている。夏から秋にかけていずれ決めなければならぬので夏休みにはよく相談したいと思う。後継者問題でもあるわけだ。直美から今日届いた父の日の贈物は缶入りピーナツだった。

6月17日(日)

県民の会、動きを再開

県民参加の開かれた県政第一回県民の集い、場所は博多駅東1丁目の博多スターレーン展示会々場。県産品即売10時から、県民の集いは午後1時から3時までという集会。——昨年の知事選以来お布施事件などでなりをひそめていた県民の会(清潔な県民本位の県政をつくる会)が、1年後の今日、やっとうこういう形で県民一般の前に顔を出した。今後にも時には何かをやる宣言、主催者代表あいさつは代表代行の内田一郎氏で、県民の会の正式代表はきまらぬままらしい。県民の会のアドレスは博多駅前2丁目東映ハイラーク***号 TEL***-****と事務所もはっきりしていて、山口一弘氏が事務局をあずかっているらしい。一口年千円の会費で入会申込書も配布されており、これから活動していく構えがやっとうととのったところといえそうだ。後援会の方は清進会と名乗り、天神に事務所を準備し、森田則一氏が事務を担当しているが、これは政治資金集めの団体として、県民の会とは別だ。しかし、この方はもっと形の整備がおくれている。必要性が強くないからどちらもスローモーションといえる。しかし、いざという時には動く準備だけはできたし、県民の会のこの集いも県産品愛用という知事の提唱に強く協賛の意を用いて努力してくれて、その点頼もしいことだ。

【部屋番号と電話番号は*で記した】

6月18日（月）

添田山本町長と会食

添田の山本文夫町長は反奥田の旗あげをし、金田町の職組の犬丸あたりがこれをぐんぐん攻めたてたといういきさつがある。今日は県産炭地振興促進協で彼が来福する機会をとらえ、秘書の方で奥田山本の対面懇親を試み、相互の誤解を狭めようとの配慮で博多弥生を利用。あとで短時間マージャンさえすることになった。飲みながら山本氏は犬丸のことを盛んに口走っていたが、女性問題をはじめいろいろ攻め立てられる問題をもっているらしいが、私同様戦中派で、一ぱしの豪傑ではある。政治の世界で泳ぐ術もよく心得ている模様である。私は英彦山の観光開発を進めてはどうかと発言。やる気を彼も見せていた。骨っぶしのある男だと思った。考えや思想はどうであれ、県と市町は協力し合わないとなんともできないとも彼はいう。なかなかいいことをいうと思った。いわば手打式みたいなことだったが、今日は一応の成功だろう。彼が今後反奥田の知事候補かつぎ出しの音頭をとるとらないは私も意に介しないでおきたい。夏に英彦山に来て勉強会でもしようという話が陪席の樺島、三坂の方から出て山本町長も協力を固く約束していた。今日みゆきが大牟田米ノ山病院に入院中の白井正先生を見舞に行ったがかなり衰弱と見たという。奥さんと二人きりで大変だろうと思う。

6月19日（火）

福岡市長候補（12）

一日中断続的にかなりな雨が降った。梅雨期だから降ってくれた方がいいから、いい感じというところ。みゆきが歯の治療を済生会病院で始め今日抜歯にかなり無理があったらしく、痛みを訴え元気がない。夜福岡市長候補のことで阿部、荒牧、二宮、山川の4人が来宅、7時から9時すぎまで意見交換した。当の本人阿部福大教授は石村かつぎ出し失敗のあとをうけて、話が元にもどった本命であることをよく知って、私がどう口説くかをききたいという気持ちがあった。阿部説が、4月末都留出馬表明で石村説にかわり、都留から進藤への変化により、阿部が再浮上したのである。阿部は都留に遠慮し、石村は進藤に遠慮するという学歴がある。阿部は修猷、石村は福中である。また阿部は九大経、石村は東大法。そういうことで、都留の出馬決定で阿部をあきらめ石村を口説いていたのに都留がやめて進藤再出馬になったので石村は出ないといい出し、阿部を口説くしかないということになった。候補としては進藤80歳、檜崎64歳、阿部52歳とくらべると阿部が有利。阿部は元市長の息子という毛並みのよさがあり、決意さえしてくれればいけると踏んでいる。荒牧氏に代弁者となってくれるよう私から頼んだ。

6月20日（水）

浜中茂足氏を慰労

知事側が県議の林、浜中を呼んで右近で一席もうけ慰労ということになった。的はもちろん自民党浜中氏が議員会長の席を退いたから慰労ということにしぼられていた。昨年度4回の県議会の運営をめぐっては野党代表としてお世話になった訳だ。よくやってくれたし、時には自民党からさえ知事の立場に傾きすぎとの批判が出る程だった。一気に奥田を追落そうとの戦略からすれば浜中の知事との接触の仕方は紳士すぎたといわれても仕方がない面もあっただろう。林県議が浜中の紳士ぶりを利用して穏当な物の運びの道を選ばせたのだからそうやって不思議でない浜中の立場だった。知事公舎入居問題がピークだったが自民党には暴走が多すぎ、知事を追込む策士はいなかった。田舎ざむらいみたいなのはたくさんいるが、政治を知っている者はいないといえる程だった。いても田舎ざむらいの背後にかすんでしまって、とり逃がしてしまったといえる。浜中氏の力をもってしても統制のきかぬ自民党になっていた。今まだ自民党は一致して一つの目標に戦術を揃えうる党とはいえない。その点激動期を処理した浜中氏は労多くして酬われなかったといえよう。

6月21日（木）

上山田線存続について最後の陳情

東京は雨福岡は晴れというこの空を今日は朝から夕方まで空の旅であわただしかった。赤字ローカル線の第二次廃止県内分3線、なかでも上山田線について除外されるよう陳情するためだった。運輸省の鉄道監督局が22日に廃止について大臣承認を発表するとして、その中味まで記者団にもらしてしまい、新聞に出てしまったので、県としてこのままでは形がつかないということで上京ということになった次第である。地元の有力者・三原朝雄（代議士）と鉄監局長に陳情したのだが、両者とも大変好意的に対応してくれた。が局長はもはやどうにもならないという。承認を一週間でも遅らせないかといったが、記者にせつつかれて原案を公表してしまったので待つわけにもいかないという。この局長稲築町の出身とか。それだけに好意をもちながら窮状どうにもならないと、ていねいにいっていた。だからわれわれ県からの上京団は空しく引揚げざるをえなかった。三原氏も局長運輸大臣両者に電話するなど親切に対応してくれたが、運輸省としては、一日のびればそれだけ無駄に陳情に対応せざるをえないので、一日も早く決着したいというのが真相のようだった。それが政権というもので事態はやむないところまで行っているのだった。

6月22日（金）

六月議会代表質問

自民党の中村忠和（久留米）、社会党の上島一義（小倉）、緑政連の伊豆善也（宗像）の三人が代表質問に立った。六月議会は大事なことはないといわれているものの、やはり時間一ぱい質問の矢が向けられる。誰がいったか忘れたが、知事にとっては議会、宴会、面会の3会が嫌なものというが、いい得て妙と思う。そのうち何といっても議会は嫌なもの。知事は

一面至上の権威者として扱われるかと思うと、一旦議場内では野党からバカのクソの、チョンのという罵言をあびせられ、それにじっと耐えしのんでいかななくてはならない。だから、知事の立場からいえば、この種罵言をはいた奴は議場外においても打ちとけるわけにはいかない。権威者の立場でそのように対応してやろうと思うわけ。今日の中村はその一人である。伊豆も半分はそうだが、これはまだ愛すべきところがある。中村は党を代表してのことだろうが、先だつての宗像市長選の時、花田新太郎の応援に私がかけたことをとりあげ、県民党といいながら、特定個人を応援するとは何事か、建前と本音が違うのではないか、建前もすてて本音を出したのか、信用できない。個人として、友人としてというが、知事には個人も友人もあってはいけなとまくし立てた。中村のこの野郎と思った。

6月23日（土）

ガンダーラ美術展に招かれて

パキスタン・ガンダーラ美術展を福岡市美術館で見た。国立国際美術館、福岡市美術館、国際交流基金、日本放送協会の4者主催（NHK教育テレビ放送開始25周年記念）という。

「およそ二千年の昔、シルクロードの要地ガンダーラ地方で、西方の造形美術と東方の仏教文化が出合い、相互に融け合って仏像は誕生したといわれます。……日本仏教美術の源流をさぐるという意味からも、また日本とパキスタンの古いつながりを知るという意味からも、きわめて意義深いものと信じます」とカタログ冒頭の4者あいさつの中にかいてある。これまで門外不出といわれてきたラホール博物館の釈迦苦行像が中でも圧巻であった。シッダールタ太子は悟達を求める多くの遍歴の後、最後に苦行に入る。6年間に及ぶ激しい断食苦行をなしたと仏典に伝えられているそのミイラに近い肉体が坐像体躯としてあらわされている。3～4世紀のものと推定されている。ギリシア彫刻と仏像がこれほど親近性のあるものだとはこれまで知らなかったが、今回の展示でよく知らされた。釈迦が生れたのは紀元前463（564?）年頃といわれる。29歳にして妻と長男を残して出家する。苦行、悟り（成道）、説法、入滅（涅槃）に至る。八十歳をこえる長寿、である。仏像はわれわれに無限のことを教えている。

6月24日（日）

ガンダーラ美術展に招かれて（2）

ガンダーラ美術展カタログの関係年表によると釈迦シッダールタが生れたのは566年頃（BC）。中国は春秋時代、552年（BC）に孔子が魯国で生まれるとある。日本は縄文時代である。BC300年頃から日本は弥生時代に入るといわれている。秦の始皇帝が中国を統一するのがBC221年で釈迦より300年ほど後のことである。ガンダーラ展に出品されている仏像類は2～5世紀だから釈迦のいた頃より600年も800年の後のことになる。もちろん1世紀頃の仏像も少くなかった。装身具（耳飾、頸飾、垂飾、ブローチ、指輪）は金、銀、銅

製で殊に1世紀頃といわれる金鎖の頸飾の精巧さは今日のものと見ちがえるほどであった。1~2世紀の金、銀、銅の貨幣も円形の精巧さはないものの、刻印されたレリーフ絵は精巧そのものである。日本文化が時間をかけて中国(又は朝鮮)を経て徐々に、これら西方文化が東漸してきた結果であることがよくわかる。千年以上の遅れをもっていたわけだ。何も知らなかったし、関心もなかった自分がはずかしい。百科辞典でもいいから引っぱり出して、これら関係の知識を今からでも少々とりいれておかないといけないだろう。釈迦がなぜ出家したのか、政治の問題としても、興味ある課題である。悟るとはどういうことか、それも知りたい。

6月25日(月)

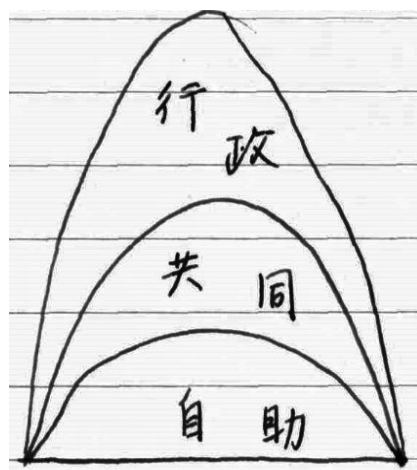
福岡市長選の候補(13)

県議会がすんで一息いれていた時、二宮が来訪。林県議も同席の上で、いろいろと努力したが阿部真也も結局はことわったので、県評の岩崎隆次郎しかないということである。野林弁護士も考えたが一寸したことで野林が冷淡になりこの線もつぶれた。野林では品が一寸不十分ともいわれるとか。岩崎にはいろいろ問題はあるが、これしか後はないという。但し、岩崎の場合共産党が承知しないので、ここをどう突破するかが一つのヤマになる。太田薫氏にも出てもらって中央の共産党を説得するしかないとのことだ。阿部は21日頃まで努力したが、楯岡学部長の意見でノーの返事。勝てる自信がないというのと、進藤現市長に対抗するわけにはいきにくいというのが拒否の理由らしい。こうなると、進藤の出馬が石村にも阿部にも否定の方向に作用したわけで、意味が大きい。二宮は阿部をとりまく雰囲気には早くから諦めに傾いたらしい。荒牧も説得しかねていたようだ。岩崎は労働組合幹部という一般受けのしない一面があるが、知事選の立役者という別の面でのプラス面がある。市民一般にこの両面がどう映るかだが、前回出馬したとき名も知れてなくて15万票、進藤が26万票とか。今回は檜崎が何万票とるかだが、今回は知事選の教訓経験があるし、進藤の老齢というハンディもあるので案外いけるかもと二宮はいう。

6月26日(火)

“総立ち、論(1)

昨年6月から使いはじめ(高教組大会あいさつ)、今年の新年あいさつで見解として発表し、2月議会の59年度予算編成の提案理由説明ではじめて討議にさらした“県民総立ち、論が自民党あたりから、明日の質問にも取り上げられるに至った。保守層はこの提案に危機感を持ち本能的に嫌い質問の中に入れてきた。婦人の翼団長の山口信子氏が“21世紀を考える……”会で反論して



きた。2月議会でも1~2の議員が茶化し半分に反撃ははじめ、今回また喰いついて来ている。本能的に嫌なのである。彼らの鋭い嗅覚は感嘆に値する。私にとっては30余年の学究生活からしぼり出したエッセンスだといってもよい。労働講座ではよく上のようなシェーマをえがいて社会保障の歴史的論理的発展を説明したものだ。“総立ち、は決して行政の衝にある者の責任回避でもなければ、行政の行詰りの表現でもない。社会的問題の自助的共同的解決の彼方に、そこからにじみ出たニーズとして行政課題として投げかける、そのシェーマ関係の再確認の運動的表現なのである。

6月27日（水）

総立ち論（2）

今日の一般質問でも総立ち論がとりあげられた。関心を呼ぶ美辞麗句にすぎぬ、総立ち実行計画やその予算を組んだのかとかどれほどの効果があがったのかとか、自民党からの質問は泥をなすようなものばかりの嫌がらせである。知事部局内でも理解しない者がまだ大半だろうと思う。土光臨調のいう自立自助は行政サービスの切り捨ての別の表現にすぎない。私のいう総立ち自立自助は行政の空洞化（行きすぎ過保護）を充填し、真に民主的行政にするためのものでしかない。土光のそれは上からの行政限界の線引き、私のそれは下からの行政新ニーズの出発点を意味する。土光が「真に救助に必要なものは行政で面倒をみるのはやぶさかではないが、……根本は自立自助だ……」といているが、その“真の必要、は政府によって線引きされる。私のそれは真の行政ニーズとして自立自助しうる人間のみが叫びうるニーズであって、必要は人民の声からにじみ出るものとされる。一方はファシズムに通じているが、私のは真の民主政治を人民が求めることを期待している。一方は大衆を沈黙させ、私のは大衆を総立ちさせる。

6月28日（木）

総立ち論（3）

県の機械金属組合連合会の総会が日本食堂ビル会議室であり、そのあいさつの中で、県の技術振興行政についてふれ、工業試験場にしろ、新設の商工部技術振興室にしろ、（産学官協同でよいが）とくに産業界からの強い要請、働きかけがあってはじめて官の方にも活性化があり、共通ニーズとして取組みも積極化するのだから、産の方から強く働きかけてほしいと私は強調しておいた。ともすれば県は何をしているか、後からついてくるだけで試験場など役に立たぬという声がきかれるが、むしろ産の方からのニーズが弱いからではないかということなのである。県民総立ちという観点からすれば、技術振興の課題にしても県民の方から積極的に役所利用、役所を働かせるというくらいの積極性がほしいということになる。今日の私のあいさつは50人足らずの業界幹部の集りにおいてであるが、大方はうなずいてくれていた。ローカル線廃止反対についても知事は何もしないと山田・碓井の市町長議長は食

ってかかるが、果たして現地住民に熱意があるのか疑わしい。現地が立ち上がり燃えてはじめて話になるのに、山田・碓井は知事を非難するばかりで自分の顔を住民にうまくつくろっているにすぎぬ。

6月29日(金)

副知事選任問題(1)

副知事選任案件は7月2日の代表者会議に議案として提出することになり、永井副知事が野党工作に奔走してくれた。しかし彼の報告では自民党幹部、緑政連は強い反対を崩さない模様。他の野党も従来からの付き合い上、自民に同調する可能性が多分にある。なぜに反対なのか。鍋山候補は亀井氏が選んだ土木部長で今は都市高速にいる温和な地元馬出の人間、九大土木部出身である。表面上の理由は、これまで一人ですましてきたのだから、一人でいいというに尽きる。極めて妙な論法である。こんなのは理由にならぬ理由だが裏では土木関係の副知事ができると、土木業界が奥田になびくようになり、次の選挙の地盤ができてしまうというのが最大の理由らしい。あくまで政権奪取に狙いを定めているのが自民党であることがよくわかる。篠田栄太郎自民議員会長は鍋山反対の線で党内、野党間を吹いてまわっているらしい。議長は副知事永井氏にこんな状況だからこんどは提出しない方がいいのではないかといったらしい。岡本議長自身も反対であること間違いない。こうした裏の考えを県民に明らかにしていく宣伝力がわが方になければならないのだが。玉砕はよいとしても。

6月30日(土)

副知事選任問題(2)

歯科医師会館落成祝賀会のあと同じニューオータニの一室を借りて、林県議と副知事問題で話合った。永井・林の間には野党工作をそれぞれやって感触判断が違う。これは前からのことだが、前者は悲観がち、後者は楽観ではないが、決意を固めて前進しかないとの見方である。林氏の意見によると、民社、公明は鍋山でも選任すべきだと賛成、緑政は県南の半分の賛成、伊豆と松山は説得できそう、関、坂口、井上は頑固という。永井氏はそれでも従来の野党連合のよしみで緑政連はもちろん、公明民社も自民に同調してしまうという。林氏は、自民も住吉連合は社会に同調していいといっているが、浜中が二重のうらみ(公舎入居不履行と副知事拒否)があつてすっかりこちらにつかない可能性がある、でも割れていることは事実でまだどう転ぶかわからないという。私が投票は起立でやるならひとの顔を見るから永井氏のいうように野党はまとまってしまうだろうという。緑政の中には無記名投票を要求する声もあつて、そうなるとわからなくなるともいう。いずれにせよ、7月2日には代表者会議で提案し、5日まで動きをみていて、うまくいきそうになかったら、提案撤回もありうる。それは9月議会という約束があればである。

7月1日（日）

福岡市長候補（14）

—社共統一候補というしるしがよいだろうか—

昨日今日の新聞（朝刊）には社会党が福岡市長候補に弁護士の野林豊治氏を推すことになったと報道されている。30日に正式に出馬要請をしたとある。小野、安恒、永田（市党本部事務局長）らがホテルに同氏を招いて要請、4日に正式返事を受ける段取らしい。小野県本部委員長、安恒党中央本部選対委員長は昨日事前にニューオータニに歯科医師会館落成祝賀会に顔見せしており、岩崎の方がいいんだがといていたのに、野林にはっきり決めたのはどうしてだろうか。二宮や永田の態度が野林の線で固かったからであろう。共産党は早速野林で異存なしとっている。文句なしの革新統一候補なのだが、そこには長短両面があると思う。地区労は文句なしに選挙資金を組織として出せるが、そのことが同時に市民一般の受ける感じからはマイナスになる。12年前だったか、私は藤吉氏が出る時に社共が表に出てはいけないといい、今日もなおその主張をもっているのだが、こんどは又社共が統一候補という名のもとに表に出てしまった形である。これはどう見てもまずいと思う。ふつう一般の市民は、自民という党をバックにした場合と、社共という党をバックにした場合とでは反応が違うのだ。

7月2日（月）

副知事選任問題（3）

今日代表者会議を開いてもらって副知事あと1人の選任を議会に正式提案しようとして議長と交渉しているが自民の幹事長篠田が中心となって副知事は選任させないと頑張り、代表者会議はとうとう開けなかった。遠藤あたりが指図し、高山、江口が支え、篠田が吹いてまわっているように見える。これまで1人でやってきたのにこの行革の折柄1人でやれとの主張だが、2人になると奥田体制が固まってしまうというのが本音であることは確か。緑政連も半分はこれに同調、自民党でも半分がこの固い姿勢を崩していない。表面上、提案したら否決するぞと吹いている篠田だが、否決するよう党内をまとめるには彼の論法と力量が問題ですんなり自民党はまとまりそうでない。だから提案するだけで幹事長としての篠田はその力量がとわれることになる。この試練が嫌なので提案するな、代表者会議は開くなという線で、執行部に反撥、議長にねじまいてまわっているのが今日の篠田のようだ。民社、公明は少数ながら提案可決の線に同調している。もっとも議決の時になると自民に同調せざるをえないかも知れないが……今日は提案するという事で押すの一途、これが明日に持越し。

7月3日（火）

自民党のgori押しで会期末荒れ模様の県会

議長は副知事選出人事案件提案の代表者会議を今日も招集しなかった。自民党のつき上げで迷っているという。自民党は提案させるなどというわけである。提案することすら反対だという。提案すれば内部をまとめるのが大変になることが予測されている。でも執行部から提案するというのに、それを拒否することを議会としてできるだろうか。およそ無茶だと思ふ。今日の全員特別委員会では知事保留質問が続々あがってきて、合計12人になったという。明日はこれで1日たっぷりかかる。会期は予定のスケジュールをすでに喰込み延長の必要がでてきている。副知事問題とかけ引きして、提案するなら否決するし、会期を延長して混乱に持込むぞという構えのようだ。逆に副知事の提案を見送るなら知事保留質問もかんたんにすませようという作戦のように見える。いずれにせよ、多数にものをいわせてしたい放題といえる。自民党のくやしきから出る浅ましき、野党として冷飯をくった味を知らぬぜいたくな足掻きともいえるが無法そのもの。次期知事選で奥田再選を絶対阻止との戦略で、一つでも有利になることはさせるな一つでも隙があれば突けという、副知事問題がそれ。

7月4日(水)

副知事問題と市長選(1)

自民党の危機感は異常とも思えるほど。そのため、当面の政略のポイントを奥田再選阻止におきつつもその上に直面している福岡市長選での進藤4選達成の2重構造にえがいている。内部不統一がそうさせているわけだ。遠藤が指揮し県議会内では篠田が奔走しているようだ。どちらもすぐれたまとめ役とはいえないので無理と齟齬が目立つ。江口なんぞは声が大きいで何の役にも立ってないのではないか。何が何でも市長選は負けられないというので80歳3期つとめて引退声明をした進藤が、一度正式に決めた都留を引きおろして4選のたたかいに引き出された。それでも危いとの直感がある。この危機感が副知事人事にはねかえり、奥田体制の安定化阻止なら提案否決の線でもう一步突込んで条例改正副知事一人制にまでもっていくという戦術も云々されていたにもかかわらず、昨日今日では、それも危機増幅とみたのか、副知事提案の手前で阻止しようとの戦術に傾いてきたようだ。今日の県議会の「空転」はまさにそのためで、代表者会議(副知事提案)知事保留質問が予定されていたのに、一般の期待を裏ぎり空転をつづけたわけである。九月議会に必ず提案ということなら譲るという社会党の線がようやく容れられて今回提案はなくなった。市長選を自民が優先させたわけ。

7月5日(木)

副知事問題と市長選(2)

つまり市長選では、副知事提案—否決という自民の術が進藤に不利に作用すること明かだし、さりとて否決しないで奥田体制安定化に寄与するわけにもいかない、だから提案させな

いに限る。だがそれでは大義名分も筋も通らない、社会党は押してくる。そこで9月提案ならがまんするしかないということになったのである。もちろん自民党は9月に可決することには賛成ではない。ただ、9月に押し延ばしたからにはその時にいやとはいえない。でも市長選での不一致をさらけ出すよりはましということである。社会党は市長選での自民の混乱に救いを出し、自民は社会党の副知事提案（9月）に救いを出した形となり、両者痛み分けて終わった。たった16人の社会党が、ここまで自民党を追い込んだについては林県議を先頭に全員が野党への楔の打込みに数ヶ月間全力投球し、それがどンドン効を奏したため、野党4党の結束は乱れ、自民党内部にすら亀裂が生じてきて、それが自民の危機感となつてあらわれたのである。それなしには今回の自民のドタバタはなかったであろう。篠田は大きなツラをしているが、43人の県議を、こうした状況下でまとめる力量はない。人物からしてそうなのだ。これからが尚面白くなる。

7月6日（金）

6月議会は急転終了した（5日）

特別委員会の知事保留質問になかなか入らなかったが、昨日は午後になってやっとそれが始まった。副知事人事提案を見送ることに決めたので、自民党をはじめ、保留質問で手ぐすねひいていた連中も一般に厭戦気分になつたらしい。会期1日延長必至論が退いてしまい、昨日の最終会期に万般すませてしまおうという空気が急浮上した。これには驚いた。そのため保留質問は自民の江口、橋詰の二人が延々やったほかはなるべく短くしようとし又質問取り下げの者も3人に及ぶなど、事態はスイスイと進み、時間延長下で午後8時にならぬうちに六月議会は終了した。質問などしなくてもすむような内容のものばかりだったが、面子もあり形もあるからやったのであろうが、話がきまれば面子も形もどこかへ吹っ飛んでしまうらしい。“奥田いじめ、はあとでもできる、それよりか進藤選挙で自民公明の連携に、県議会の都合によるヒビがはいらなければ、今度はそこだけに焦点をしばろう、それはできた、というのが自民の厭戦気分の根源にあつたと見ていいだろう。社会党側は副知事人事でもう一步突込んで自民公明の進藤選挙体制に亀裂を生じさせるという戦術を捨てることになった。得失はいろいろあろうが、もう少しのところで退くというの、場合によっては伶俐な戦術であろう。

7月7日（土）

七夕のこと

ささの葉さらさら、軒端にゆれて……子供達と七夕の歌を歌って午後の一ときを楽しくすごすことができた。もう4月頃から牧坂五郎氏がこの日を私に連絡し準備し、待ち構えていたのであった。白浜公民館での子供習字教室は彼が2クラスもっているらしく、今日はその合併の七夕習字会という。たなばたさんは芸ごと習字の上達を祈る対象と昔からい

われてきた。短冊に願いごとなど書いて笹に結びつける。子供の頃は8月7日ときまっていたが、里芋の葉にできる玉の露を早朝取っておき、それで墨をすり、短冊に書くのだが、なぜか書くのが億劫だった。そのほかはみな楽しく、ナス、キウリ、トモロコシ、栗の実、ホウズキなど初ものを台にそなえ、大きいのは西瓜、カボチャも横においた。夕方になるとこのうちでも柏餅ができ上がっていて、数軒、味見がてらに七夕笹飾りを見て歩いた。夜はかなりおそくまで子供ながらに楽しんだものだ。太陽暦ですると、夏休みでないから、子供にとっては明日が気がかりであろう。8月7日なら自由奔放遊べた。次の朝、一切の飾りものを川に流す。そして笹で一ぱいになったような所で泳ぎをしたものだ。赤い短冊を額に貼ると跡が赤くなった。もう涼しすぎる肌を感じが今も忘れられない。

7月8日(日)

奥田県政推進と社会党への期待

昨年の日記を読んでいると、代表質問が始まり高橋議員の発言への対応で冒頭から荒れ議会の空転がおこり、記者たちの敵愾心が異様なまでに高まっていた。それを思うと今年はずでに平和な夏に入っている。約束どおり夕方になって八丁、中川、竹村、大塚、白石ら協会系の幹部どころが来訪し、県政擁護推進の問題点をあげてあちこちの角度から論じ合った。社会党がしっかりしてくれないと困るということになるが、人事、職員のやる気、県施策、後援会、次期県議選対策等話題は次々に出た。後援会として暑中見舞さえ出さず姿勢ができてないことが問題になった。林県議が野党工作をしてきたのはよいとしても不純な資金繰りをしているらしいということ、又松岡功氏が議員個人として借金の泥沼に陥って、危険な状態にあり問題視すべきであるとか爆弾をかかえたようなものだとかが話題になり、助信の体質も要注意だとか、大町は教育委員会にべったりで個人プレーが多くていかんとかが話題にのぼった。いずれにせよ、社会党が大衆をバックに県政推進に責任をもちうる体制を早く作らねばならぬということが結論であった。竹村氏が次期書記長に擬せられているらしく、竹村の今後の責任は大きいぞということになった。

7月9日(月)

EXPO85 宣伝船に乗って

日曜日に解放されていて、月曜になるとぐっと元の拘束にもどってしまう。また一週間が始まるのかという気分になる。これで日曜まで公用がはいってくるとどういうことになるだろう。昨日は公用ではないが協会系の人達が5人来て、固い話をして帰った。やはり半ば公用といえる。気の休まりようが違うからである。さて、今日の話題2つ。早朝入港した新さくら丸のEXPO85サイエンスクルーズというのに出かけた。式が終って船内を案内されての感想だが、筑波の科学博に行ってみたいと思うかと問われたら、ノーと答えたくなる。科学の発達の誇示はいいとしても、一部の人間が科学をおもちゃにしているとの感じだし、人

間が科学に翻弄されているみたいにしかならない。カネ集めと企業の宣伝の会みたいにも思える。科学栄えて国亡ぶというようなことにならないことを望みたい。もっと人間が前面に出るようにできないものなのか。次、済生会病院の定期検診で、薬のせいからはじめて血糖値が100以下に出た。また血圧は70と114で低めだがコンスタント。食後横になること、少しずつ回数を分けて食うことの2つがなかなか守れない。でも休みなく働いているのだから……

7月10日（火）

姫高先輩山本氏とはじめて会う

岩田氏が連絡してくれて、明日の東京での仕事を一日早めに上京でゆとりを取り、今夕6時半から、ふくおか会館近くの割烹味館で姫高先輩山本省三氏（共栄商事）、例の岡庭氏と4人で夕食をしながら歓談することになった。兩人とも五回生で、福岡では岡田武彦教授が同期である。山本氏は東京白鷺会の世話をしている人である。河本敏夫氏も一しょという。その話や最高裁長官をしている寺田氏のこと話題になった。岩田がいうには、奥田は九州を地盤としているし、左翼だからなかなか口先だけでは理解をしてもらえないので、面とあって話してみても信頼を、とくに旧制高校同窓としての信頼を求めていく以外にないと思っていると。私はそれは当然だが、学者の立場と知事の立場の違い、代議士党人の立場とプレジデントとの違いを説いた。岡庭氏はよくわかるとってくれた。般若心経の観自在ということも私は説明した。河本氏には福岡で自民党が反奥田の決定的な動きをしないよう、押えてもらう積りだと、岡庭、山本両氏はいっていた。神戸市長の宮崎氏といつかゆっくり話し合ってみたらいいとか、民社党全国区の田淵氏と合わせようとかもいっていた。岩田はこうしているいろんな人を私に合わせようと努力してくれている。有難いことなのだが、彼はどこなくつかまえ所がない。

7月11日（水）

東京事務所のこの上ないよき界限

福岡県東京事務所の窓から見る皇居は半蔵門近くだが、いつみても立派。事務所との間に、大きな道路が走り、歩道をへだてて堀があり、土盛りの上に石垣があり、その向うにこんもり静まりかえる皇居の樹林がみえる。土盛りには何十年か古くなった思い思いの形の松がバラバラ立っていて何か考えているみたいだ。道路の両脇の並木はプラタナス、これもひと抱えもあろうかなり大樹ばかりである。手くびほどの太さのが大きくなったらしい。濠側の歩道はきまってマラソンに汗を流す人達がたえない。外国人も結構多い。真剣に練習しているらしい人がほとんどである。このすばらしい眺めは好きである。福岡県がここに東京事務所をもっているとはどういう経緯かは知らぬが先輩の事績に感謝したい。今後も手ばなすことがないよう祈りたい。今朝行った上野公園にしろ、この皇居にしろ、さすがは東京であ

り、世界にも誇るに足る財産である。国会、政府諸官庁にも近いので、仕事のことで上京して至便である。ふくおか会館以外に知事就任以来泊ったことはない。シングルの部屋も私には丁度いい。夜は全く静か。冷暖房がうまくコントロールされていて申分ない。

7月12日(木)

遠藤政夫の馬鹿さ加減底知れぬ

遠藤政夫が陳情団十数人の前で又又私に陳情の仕方が少いと冒頭文句をいって、ひんしゅくを買う一幕があった。自分に陳情しなければ恰も誰にも陳情してないかのように思うこの馬鹿さ加減。RKBがおればもっと珍妙になったと思うが、今日は彼だけの笑われで終わった。誰でも客は客らしく扱うもの。心の中でどう思っている形は形でおさめるものだろう。遠藤だけはそうではない。この遠藤のいい分を口写しにいうRKBがどうして今日いなかったのか知らぬ。一しょに来ていた岡松県議も、同伴の公明党市議が「何ですか遠藤さんのあのあいさつは」とあきれかえっていましたよと私に教えてくれた。あれで自民党県連会長だから自民党の程度の低さが判る。篠田栄太郎が県議の会長をしているのだからそれで程度が示されており、それ以上説明の要はないほどだ。一しょに来ていた三木清これは途中で抜け出し、鉱害問題の火消しにまわったと推測されている。「鶴崎は陳情できずに出張して来ても、時間をつぶすため温泉につかりに行きよったが、あなたもその類か」といったような意味のあいさつを会館遠藤事務所に入った私にあびせたのであった。

7月13日(金)

山笠の台乗り

4時半に一番山笠千代流れが県庁に表敬訪問するので県庁横の交差点こちら側から県庁玄関まで台乗りせよということになっていて、定刻になると4人の男達がやって来て知事更衣室で私に着替えさせた。全裸になって山笠衣裳に全部かえるのである。それぞれの正式名は今なお知らないが、足袋、脚絆、まわし、法被のたぐい、それに腰縄、手拭鉢巻、赤い包棒が加わる。まわしをぐいぐい締められると気持ちまできちんと締ってくる。ヒップの線がいぞと秘書の連中がやじる。エレベーターで一階へ、そしてエビス神社の向うの方で、二三人の男に押し上げられて台に乗る。オッショイ、オッショイはいわれるままにすればいいし、台の上も意外と安定性が感じられる。かついでいる男たちは順次交代するが見るからに重そうで力の限りのようだ。汗だくだくといってよいが見物人席から水をぶっかけずくずく、消火栓からホースで放水する者もいて、いずれにせよ水が最大のプレゼントである。県庁玄関には200人ぐらいが歓迎の列を作っている。知事が乗っているから見ようという者も多かったようだ。拍手、歓声、微顔が胸を打つ。乗った所まで返って降りる。程よい疲労が感じられた。

7月14日（土）

集団山見せに市長選候補が乗る

朝刊に昨日、市長選候補の進藤、檜崎の両氏も博多祇園山笠の集団山見せのかき山に台上がりしたことが報ぜられている。もう一人の予定候補野林氏は平素のとおり大濠公園でジョギングしたという。三人が同じコラムで大きく写真入りでの記事紹介。進藤氏は私と同じ千代流れ、檜崎氏は中洲流れである。山見せは顔見せだとの感想が一般。もちろん、檜崎がいうように、乗せられても「男の血が騒ぐ」というのが実感。集団山見せというのは、山笠の期間中、かき山が一回だけ那珂川を渡り、博多部から福岡部に入る行事で、今年で23回目。コースは呉服町交差点から天神市役所前まで約1.3キロ。午後3時半打上げ花火を合図に一番山笠千代流がスタート、5分おきに6基の各流れがつづく。新聞がこう解説する。まわしは締め込みという。尻の割れ目にぐっと締めこまれ、腹のふくらみをきびしく締めくくるのでおのずと軽い活動的な気分になる。脚絆もふくらはぎを10個ぐらいのこはぜで次々と締めつけ足許を軽い活動的な気分にする。これまで全く見物人でしかなかったのに、こうした姿になると急に役者にかわってしまい、祭りが他人ごとではなく自分のものになってくる。選挙とどうかかわるのだろう。

7月15日（日）

野林豊治氏の市長選出馬表明

昨日午後4時、社共系の市長候補野林豊治（51歳）が選挙母体「新しい福岡をつくる会」から推されて正式に出馬を表明した。進藤が保守、檜崎が中道、野林が革新と色分けされる。8月25日告示、9月9日投票である。野林の場合、去年の知事選の時のように、社共が組織政策協定を結んではいないらしい。両者が「つくる会」の会則、政策に合意したという形だといわれる。地区労、県評、学文関係者も加わって代表委員14人で「つくる会」が運営される。とはいうものの、私の感じではやはり社共が前に出すぎてきたきらいがあったように思えてならない。いわば当然だろうが、その当然な姿を市民の前にさらけ出してはいけないのだ。今後ともなるべくそうあってほしい。野林氏は記者会見で3つの信条、7つの公約をかかげた。3つの信条は①子供と年寄りを大切に、文化の香り高い市政とする②婦人の声と能力を市政に生かす③市民一人一人の声と憲法に基づく手づくりの市政を目ざすという。去年の知事選の教訓がよく生かされているように思う。地区労の努力がここまで実ってきたのだから、あとは市民をどう燃やすかである。

7月16日（月）

陳情を心待ちにする議員族

今週は県の幹部職員が大挙上京し、国会議員、各省に陳情活動を展開する。陳情と宴会が政治の細目を決定していくというのだから、これにおくれをとってはならないというわけで

各県とも同じようなことをしているらしく、議員会館はどことも人の出入りがひんばんで廊下などごったがえしている。いいことだとは決していえないが悪いというわけにもいかない。自民党は自分の作った政府の政策で国民が困るとなっても、各党員国会議員は押すな押すなの陳情をまるで他人ごとのように受けているように思える。遠藤政夫などその典型で、なぜ陳情に来ないか、大変なことになるというのに、といった口調で攻め立てる。自分の所属する自民党がやる政治なのに、そうならないように力を貸そうとは一口もいわず陳情に来い来いという。何か袖の下でも欲しそうに見える。もっと深切に応待してもよさそうなのに知事を叱りとばすようにものをいう。どう見てもまともな政治家とは思えない。自民党の議員でもこういう品物ばかりではないが、この種の下等なものもあるわけだ。明けても暮れても陳情に動きまわらねばならぬ。これが知事の役目というものだろうか。議員族が他面くさっている。

7月17日(火)

「増税なき財政再建」は各省とも批判的である

文部省、建設省、運輸省をまわって陳情につぐ陳情。そっけない者もいるし、ていねいに応待してくれる人もいる。みんなわかりすぎるほどよくわかっていて、財源を思うように転がせないという事情は同じで、そのためにそっけなかったり、ていねいに苦衷を表現してくれたり、同じ思いの違った表現であろう。そして土光の行革審については一様に不満をもっている。その点われわれと同じである。土光の方からは切れ切れというし、切れれば地方にシワ寄せされるか、国民の生活に影響が及ぶかである。今日もそのことで国会をデモ隊が取り巻き健保負担増大反対を唱えていた。われわれの陳情は公共事業費の増大に重点が向けられているのだが、土光臨調の方はそれも例外なく削減するといい、唯一例外は軍事費だけという的はずれなことを主張しているのである。軍事費こそ削減可能な領域であると思はう。社会資本が欧米先進国に比べ見劣りするのだから公共事業費は削減せず、軽負担でわが世の春を謳歌している企業増税すべきなのに、「増税なき財政再建」を土光は呪文のごとく唱えている。各省庁はこの土光の横暴体制をうらみに思っている。

7月18日(水)

知事への野党の攻め手

朝食会のとき古賀誠氏が、知事さんもだいぶん馴れられたでしょうといった。大きな問題がなかったので助かっとなりますという、右横席の岡本県議会議長が、知事さんを余りいじめるなという県民の声があつてね、それで得をしているんですよ、テレビうつりがいいのでその助けもあつたと説明した。びっくりするほど骨っぽいところがありますよ、知事は、と古賀氏がつけ加えた。そんな話から、昔の県議会の荒れようをよく話して聞かされていますので、辛抱ができます、今は誰もが紳士ですと私はいった。昨年の今頃の県議会の荒れ方は、

昔を思えばその比でないことは明らかだが、自民は何としても奥田を引き降ろそうとしていたことは確かで、あれ以上のことをできなかったところにこちらの強味があったようだ。新任の富永総務部長が岡本議長に新任あいさつの名刺交換に寄っていった時、議長は、苦勞が多いですよと釘さしていた。池ノ内氏はその点苦勞しながら上手にさばってきたようでそれだけの経歴があったからであろう。新顔の富永氏がどれだけさばきうるか。自民党は早くも一つの的にしているように思える。当方の馴れもあろうから、攻めの決め手をどこに求めるかである。

7月19日（木）

金沢の女たち

小松空港から金沢市内まで石川県さし向けのバスにのった。ガイドさんが加賀千代のことを説明していた。脈絡の詳細は居眠り半分でよくわからなかったが、「朝顔につるべ取られてもらい水」という有名な句で知られる人。あまり美人ではなかったのか、殿様から鬼瓦にたとえられたのに立腹もせず、「鬼瓦天守閣をも下に見る」と切りかえしたとか、そのような説明であったと思う。もう35年も前だったが、炭連労働学校でこれ又名は忘れたがある講師の話を傍聴していた時、「寝て見つ起きて見つカヤの広さかな」という句のことが出て、これも加賀千代のことだったのではなかったろうか。夫と早く死別し、少女時代の句心を余生に思う存分に発展させたといわれる。100万石の大藩、前田利家という傑物が礎石を築いた金沢で、まつる神社もホテルの近くにある。芸能の盛んなところとのこと。アトラクションは市民会館ホールで芸妓さん美ち奴の小唄加賀鳶と3妓組の素囃子の披露があった。小鼓や大鼓のことはよくわからないので、それほどに興味はつづらなかつた。いわゆる酒盛りの席で杯はかわしカラオケをにぎにぎしくやる夕食会よりはましだろう。人口40数万人、こういう中都市には何となく魅力を感じずる。大きくない方がどれだけよいか。

7月20日（金）

福岡からみた石川県

美しき川は流れたりそのほとりに我は住みぬ……犀星

その犀川が金沢の中を流れる。実際にみるとこれかと思うが石川県は道路がうまく整備され、金沢の街路樹は福岡のように何十万円もするのをにわかになに植えたのではなく、細いものでもていねいに植えてあり、つつましさが見えて感じがいい。その代わり広大な歴史ある兼六園をもつ。福岡の舞鶴公園の計画性の小さいたづまいは貧弱そのものといえる。産業産業、発展発展といいつづける知事、市長、県議会、市議会、そのバックにある横暴な自民党の支配がつづいているとそういうことになる。生活保護、失業対策でことを処理した政府にも責任はあろうが、暴力団や非行、覚醒剤の流行などにそれがはねかえって福岡県全体に暗い影を投じている。この点を指摘すると彼等はむきになって怒る。鉱害屋の存在も同じ風土

から出たものだ。貧しくてもいいから清く生きようとする過去は失われアブクガネに寄生する暴力団とその抗争。石川県の案内の人にそういう福岡のことを話すと、別世界のように理解が届かなかっただけらしい。水族館を作り、郷土伝統芸術芸能、美しい自然を売り物にしようと、こつこつやっていた過去を大切に土地柄を強く感じた石川の一日だった。

7月21日(土)

英彦山神宮宮司 高千穂有英氏

秘書室の者が知事が英彦山に行くついでに避暑がてらに行こうということで、添田町営の財蔵坊で自炊夕食をする予定だったが、町の婦人会の人達にお世話になって山菜の珍しいごちそうで大よろこび。私は色紙、扇子を用意していたのでお礼においできた。そして宿泊を買って出てくれた英彦山神宮々司高千穂有英氏には揮毫の額一面を寄贈した。景幽佳兮足静賞という2行ものである。前から英彦山に行くことがわかっていたので作っておいたものだが、青年の家にと行って揮毫したのにここの宮司に贈ることにしてしまった。財蔵坊には風呂も便所も水もないので宮司宅にという話になったらしい。警備のことは心配するなど宮司が快くひきうけてくれたらしい。大正13年生れというから私より4歳年少、すでに白髪。福岡県でも指導格の宮司らしく、この2月上旬太宰府天満宮で九州敬神婦人の会を催し、うちのみゆきが秘書室からたのまれて出席、あいさつ文を読んだのだが、その時私は知事夫人の横にいたんですといっていた。白石県議や中西績介代議士と懇意だし、親戚の筋にあるといっていた。酒の好きな人で、夜ふけまで飲みかつ話し合った。

7月22日(日)

遠藤政夫の野郎!

英彦山レクリエーションセンターの落成式、祝賀会が現地でおこなわれた。3面のテニスコートが冬場にはアイススケート場に変えて運営されるという。添田町長、亀井、遠藤(参議)の尽力でできたといわれる施設。山本町長の晴れの場といったところ。正午頃テープカット、くす玉を割っての使用開始。高校生のテニスが始まり、祝賀の宴があった。私は早目に帰途につくため、主要人物に帰る旨宴の中であいさつしてまわったが、遠藤のところに来た時彼は「知事はもう少しまじめにやってくれよ」と私にいった。私はそれには直接答えず次の行動にうつって間もなく公用車の中の人として現場から消えた。だが、車の中で「遠藤の奴何という無礼なことを」と無しように腹立たしく、今日一日が不愉快な日として経過した。「もう少しまじめに」とはどんな意味なのか、何か不まじめなことをしたのか、彼は何をいいたがっているのか、知事のどこを参議員として不満なのか、参議員はそういうことをいう権能をもっているのか。私は率直に不埒な奴だと思った。こういう奴には絶対負けないぞ、いつか仕返しをしてやる、あちこち言いふらしてやると誓ったのであった。

7月23日（月）

山田弾薬庫跡地をみる

知事選の時に入口まで行った経験はあるが、今日はその山田弾薬庫跡地を公式に視察。米軍が手ばなしてから永らくそのままになって、まるで原始林のよう。小倉北区に100万坪に達する国有地が荒れるにまかせてそのままになっている。例の3分割案がおよそ合意されているらしいが、平和利用を主張する地元に対し、自衛隊が継戦能力向上の名のもとに再び弾薬庫として使用することを強く希望しているらしい。知事としてどう対応するかと県議会で質問されていることもあって、現地を見てと答弁したので今日の視察となった次第。入るとすぐ大きな鳥が2羽とび立った。鷹だろうかといっている。鳶より大きい。小川のせせらぎ、蝶の舞う群、何とかして又と得がたいこの緑地を市民の宝として利用できないかと思った。このボタン戦争の予測される時代に、継戦能力の向上など、どう考えてみても正気とは思えない。戦争は始まったら終りではないだろうか。県議会で小倉現地の市民の希望どおり平和利用を望むと答弁したのがよかった。北九地評に寄って横佐古事務局長の話をきくと、弾薬庫だと原爆攻撃的の的にされ、市民にとっては許されないとのこと。

7月24日（火）

婦人総合センター構想への圧力

有職婦人の会（虹の会）の人達20人ばかりとステーションプラザの一室で夜の対話をした。県の婦人対策を知事にきく会である。県の婦人対策室の丸山室長が私の横でアドバイス役に、RKBの辻和子氏が全体をとりしきり、例の山口信子氏が司会して対話が進められた。ロの字に椅子テーブルが並んでいて、あちこちから発言があったが、話は婦人総合センターの構想に的がしぼられた。センターの理念、機能運営などについてである。女子大のことも話題に出て秋枝さんが説明した。開かれた女子大その婦人講座、新改築の図書館などを考えると、センターの構想とイメージがかなり重なってくる。内野梅子氏が音頭をとっている婦人会館は県婦人会、地域婦人会、消費者としての婦人団体だが、こちらは婦人問題の基本を扱おうとしているし、男女平等の立場からアプローチしようとしているので、この両者はイメージが重ならない。センター構想を問題にしはじめてから4年目になる。今年度はその具体化、建設のスケジュールを示さなければならぬところまで来ているようだ。位置については小郡説が有力のようだが宗像説も出ている。丸山氏がこうした婦人達の圧力をどうさばるか、私はしばらく見守っていよう。

7月25日（水）

都留大治郎氏を九大病院に見舞う

午後、かなり時間があいたので、企画部幹部をまじえて、中国総領事館設置問題を八月末九州青年の船で私が訪中するまでにふむべき手順について話合ったが、森山君が都留氏がわ

るいようだというので急遽見舞に行くことになった。九大病院外科。以前に石田医師会長が入院していて見舞に行ったところだ。奥さん、息子夫妻も来ていて彼は椅子にかけて息子と対話していた。きいてみると、どこも手術してないし、今は元気だという。福岡市長候補さわぎで入院して以来、もう50日ほど経っている。病気というよりは強制入院させられたみたいな説明である。退院は？ときくと、市長選がすむまでおらないといけないだろうなんていっていた。政治入院といおうか、ドアには面会おことわりとある。奥さんも大変気疲れしたといい、この部屋で共にいる方が気楽でよいとのことであった。自民党の連中が、選挙戦はしなくてすむというもんで出たのにとか、社会党の高松光俊氏が推薦云々を早まってもらってしまったからああいう混乱がおこったとかいっていた。酒は断ち、食べ、よく眠れるといっていた。行っているうちに夕食が運ばれてきたが、「病院の養老院化か、養老院の病院化か」を思い出した。

7月26日(木)

いか漁船北鮮に拿捕される

福岡市を漁業基地にもつ、いか釣漁船3隻が北鮮200カイリ経済水域内で操業していて拿捕・連行された旨僚船から無線連絡があった。〔第1報7月25日16時40分第21海漁丸より。本日午後第17海漁丸ほか2隻が北鮮に拿捕された模様〕〔第5報、7月26日9時00分第11幸進丸より。昨日3隻北朝鮮に拿捕され連行されたが、他の漁船は異常なし。拿捕された漁船からの連絡なし〕こちらの対応は国交がないため、赤十字にたよるほかないらしい。海がどの国にとっても大切な資源となってきた今日、200カイリ水域の主張を無視することはできなくなっているのに、覚悟の上で冒険的に200カイリ侵犯をおこなったのである。警備艇との勝負と考えてのことだろうか。今回は200カイリ相当奥深くまで侵犯し操業していたらしい。冒険だが、成功すれば豊漁ということになるようだ。北鮮だけが国交の外におかれているのだが、アメリカ追隨の外交の結果で、こうなった時は交渉のしようもない。国としては自業自得というしかない。こういうことが起らないような漁業でありたいし、起こったら外交ルートで早期に解決できる国交関係がなくてはならない。次長が上京したが他力本願ということしかないだろう。

7月27日(金)

矢部村と中津江村を結ぶ課題

午後車で矢部に行った。やはりずいぶん遠い。役場前で出迎えてくれ、玉露で一服ののち、隣の大分県鯛生金山跡を利用した坑内博物館を見学に行った。いつの頃だったろうか3年ほど前と思うが博物館建設促進九州会議の資格で芸工大の田辺教授らのすすめで旧金山跡に見学に行ったのが、今は立派な博物館になっている。ここ中津江の村長さんが熱心に運動されたからこそできたようなもので、企画は的中し予想外の見学者が毎日つめかけている

という。坑内だから夏は涼しく冬は暖い。石炭ヤマと違って崩落の危険もほとんどない。村長いわく、福岡県側の道路を一そう整備してほしいと。大分側は大型自動車でもかわせられるのに、福岡県側は大型が道路一ぱいに、しかもカーブのところで立往生した場合、二進も三進もいかんという状況である。彦山へ行った時も宮司が道路整備の必要を強調していたが、全く同じように考えられるであろう。大分県ができて福岡県ができない理由はない。夜八媛館で矢部の村長議長らも亦同じことを主張していた。正規の陳情とうけとってほしいといていた。

7月28日（土）

矢部の村おこし

昨日の矢部村長、村会議長、議員らの話では、村の人達が村に居付いてほしいということが主たる念願である。居付くためには、そこで不満少なく暮せるための収入が必要だが、農林業は零細で、とくに木材価格下落のため、収入源が少ない。平均年収150万円というところか。若い者は、このくらいの平均年収の地域には居付かない。県の事業として「水源の森」(基金)が数年前から実施され、これがこうした山村にとって、この上もなく有難いとのこと。自分の山でもこの基金で下刈間伐ができる。労賃収入にありつけるわけ。この基金は水資源を涵養し、あわせて山村の収入を補完するという機能をもつ。ほかに仕事はないのだろうか。私は村のこれら指導部に仕事を見つけてやる工夫をしてみてください、仕事が見つければ共同事業として県が少しでも援助できるだろうとっておいた。筑豊地域では失業者の吹きだまりのようで、新たな仕事を見つけようにも素材がないが、矢部のようなどころでは一村一品もよし、観光、レクリエーション場の造成もいいのではないかと。日向神ダムで釣やボート遊び、キャンプ場など準備できないだろうか。

7月29日（日）

暑中見舞状が返ってくる、その原因は何だろう

平和台でおこなわれる七大学陸上競技会の開会式に臨み、祝辞を述べた。大学からは部長が来ていただけ。毎年こういうふうには経過するのだろうか。九大の成績跡は最低をつづけている。若さの技術と力量のぶっつけ合いを行う限り暑さを忘れるだろう。しばらく競技を見て行こうかとも思ったが随行者のこともあるので開会式だけで帰宅した。どこにも行かないで暑中見舞状の整理にしばし時間を費した。県評から出してくれた暑中見舞状が多数「配達不能」ということで戻されている。差出しの時にアルバイトにあたった者が故意に書き違えている例がある。同じアドレスで6枚も別人にあてたものがあるから、これは故意というしかない。アドレスの登録の仕方が不十分な例もある。こまかい最後までを書かないでたとえば町名だけで出していると返ってしまう。郵便配達者が面倒がってこまかくしらべることをしてないでつきかえしてくることもあるのではないかと。今日までに、こうして返ってきた

のが350枚か400枚もある。あまりにも多すぎる。うちの方から出したのはあまり返っていない。住所変更があるのに通知のこないこともあろう。しかし郵便局に届出があれば回送してくれるはず。

7月30日(月)

身体の調子がよくない

今日は1日頭が散漫、口腔内はからから、そしてむやみに眠かった。金曜日に風邪のうたがいで済生会病院に行き風邪薬をもらって服用しているのが今日きいてきたのだろうか。その上歯が痛い。左上3本がぐらぐらになっている。自然に右側の義歯でかむようになっていく。歯槽膿漏というのであろう。犬歯から奥全部が動きかつかつ痛い。治療に行くかどうか迷っている。歯はともかく、風邪薬の作用と思われる点に関してはもう一点、全身に何だか力が抜けたように感ずると同時に頭が爽快に回転しないように思える。覇気というか気力というかが急速に低下し判断力が衰えたように感ずるわけ。それを薬のせいにしてしまっただろうか。年も年、そういう衰弱が自然ということなのか。もしそうだとすると大いに嫌なことで身体全体をこの際オーバーホールしてみる必要があるのではないか。夏の高校野球ロスオリンピックが新聞テレビで人々の耳目を集めている。重量上げなどみていると、今にも身体が押しつぶされるような思いがする。あんなに自己の限界に挑んでよいのだろうかとさえ思う。が、それをやってみようとする若さがうらやましい。

7月31日(火)

少年の船出航式の苦行

市立図書館での第16回福岡県少年の船の出航式に臨んだが、冷房なくむんむんした中で汗はかく、倒れる子供があるの状況。子供600人余、引率者などを加えると660人、見送りの父母を加えると1000人にふくらむ大集会となる。野外だとカンカン照りだからもっと状況は悪いだろうが、こういう体育館も同じくよくない。出航式とはいえ、固い行事が長すぎるのではないか。39班まで全班にわたっての「異常なし」の報告を敬礼まじりで取っていくと、10分もそれ以上もかかる。形、訓練の意図はよくわかるが、どういう状況でもというのでは硬直すぎるのではないか。子供たちにはまだ沖縄の海も緑も魚もわからない、ある意味では苦海ともいえる体育館内出航式であった。規律、訓練、友情、見聞などいろいろ目的があるだろうが、時と所によるということでありたい。青年の船は中国だった。この種別の行事はよろこばれ、経験者はやみつきの如くなる人もあるという。強烈な印象を残し、帰航式の時は感涙にむせぶ若者が多い。意味ある行事といえる。だから、不必要な苦行はもう少し工夫してやった方がいいのではないかと思うのである。

8月1日（水）

木村氏らは遠慮願いたい

先日から安田伊三男君の手引きのような形で木村欣嗣氏が執拗に私を北田正氏に引き合わせようとしている。秘書室長も介入してくれているが、北田氏がどんな人か木村氏が何を考えているのかよくわからず、私が深入りさせられ関係をもつことを秘書の方では強く警戒している。今日も大濠での花火大会があっているとき、安田が木村の命令によって私に面会を求めてきたらしい。絶対会って来て云々というようなすご味をきかせたやり口である。私は三光園にいてわざとマージャンでもしておそくなるということで安田との面会を避けた。昨日も似た経過になった。林県議もいて、会わない方がよいと強調する。藤江君も応対に困惑している。安田の方は使者のように主体性なく動いているようだが、縁つづきであるとはいえ、これでは困るのである。秘書室では安田を呼んでもっとこまかく状況をききたいとしている。何でも木村は、北田氏が宮崎でやっているような県民共済の組織を作る目的をもち、そのために知事の名を使おうと考えているようである。北田氏の県民共済なるものをよくしらべておく必要がある。

8月2日（木）

北九州市立自然史博物館をみる

全通福岡地区定期大会につきひびき荘にあいさつに行ったついでに自分の宿題にしていた北九市立の美術館と自然史博物館を視察することができた。谷市長は今五期目だが、そして保守系だが、このような文化施設建設運営に予算をつける眼識をそなえた立派な市長といえる。私は以前からこのことを指摘し、そこが亀井知事や進藤市長と違う点だといったことがある。進藤さんは立派な美術館を作ったので割引きして批判しているが、博物館にまでは及ばなかった点はかなりの開きがあるといえる。北九美術館が戸畑の鞆ヶ谷にあつて外から見るよりは中から外を見る景観のよさには驚いた。宮本館長が大いに気をよくしてていねいに案内説明してくれた。市民ギャラリー土曜講座などよい試みと思った。が、場所的に寄りつきにくさがあるのが気になった。博物館は山田弾薬庫跡から出た化石が建設の引金となったと伝えられる。大変意欲的な博物館運営がみられる。館長の鳥山、副館長の太田正道両氏が学識を傾けての師弟の協力作品ともいえる。八幡駅ビルに間借りしているものの、かなり充実しているし、今後の伸びの勢いも感じられる。力強い限りである。北九市、福岡県の誇りといえよう。首長の違いがこうもはっきりあらわれるとはと感慨ひとしお。

8月3日（金）

総立ち論と第三期革新と

県政担当の基本について何か意見をまとめたものをそろそろ考えようではないかという提案を問研に八丁君を訪ねて提案した。自治の原点みたいな問題である。今、“総立ち、”とい

う言葉でこれを表現しているが、まだまだ一般によくわかってもらっていない。社会党・総評ゾーンでもわかってきていないだろう。自立・自助の上に行政、とくに地方自治体への行政ニーズが出てくるという論点を明確に出していかなければならないということである。自立・自助の延長に協同処理のニーズがおこってきて、この協同処理の延長上で行政処理がおこってくる。ここに行政の場の自治と支配の交差点を見つけることができる。支配に対しては反撥があつて当然であるが、反撥だけでは支配の形態をかえるだけで、前進はない。民主主義が保障されているとすれば、その上に自立自助の延長が形態として加わってくる。今日の自治体はそのような複合した行政形態をとっている。自立・自助の延長の行政ニーズが形をとるほどその行政は民主的であるといえよう。革新県政、とくに第三期革新県政とは、そのような自覚の高まりの中で実現できるものということができる。

8月4日(土)

久留米地評の人達

久留米地評の代表ら石橋文化会館に集つて知事を囲む懇談会10時半から12時少し前まで、40人ほど集つたろう。この種の会談は知事就任以来北九や糸島、八女でやってきたが今後もっと他地区でもやらないといけないだろう。労組だけでなく、解同や議員、婦人代表も来ていた。久留米では、学者・文化人の強い要請で以前に懇談会をもつた事がある。とにかく、支持者達は知事に会つて話したがっているのである。地区労の人だけではない。だからあらゆるチャンスを作らなければならない。顔を見るだけでよい、元気な姿をたしかめるだけでよい、テレビやグラフだけでは自分の目で確かめないと気がすまない、そういう気持のようだ。こういう会合で向うのいうことは知事に直接関係ないことでもいいたい、教育委員会に属すること、国鉄合理化のことなど、ともかく日常の思いをいってみたいのであろう。当方もそれほど効果ある答えでないのに考えだけでも述べる。それで満足のようだ。知事就任以来1年4ヵ月、むしろ支持者の周辺むしろ「遠きより」接してきた。近頃だんだん「近き」にも接しているが、近い人は向うも遠慮してきたし、こちらも遠慮していた。そういう情勢がつづいたのである。

8月5日(日)

九州青年の船結団式

九州沖縄8県から今年度の日中友好九州青年の船参加者男女174人ずつ計348人である。各県44ないし43人ずつ他に団長1、副団長8、事務局長1、顧問2、職員28、随員1、報道、映画、添乗の班が2、3、6の計11、班長20、合計420という部隊である。団長は各年当番県知事で今回は福岡。副団長は各県とも次長クラス、福岡は民生部長の井上昭和氏。各県ごとの事前研修、そして今日の全員事前研修。団員も、お世話する事務当局は余計に、大変な骨折りがあつてはじめて青年の船という事業が成り立つことがわかる。受入れの中国

側も大変なことだろうと思う。ただ思うに、少しは大げさすぎるのではないかと。まるで軍隊式である。そうしないと秩序が保てないのかも知れない。それにしても事前訓練に力が入りすぎるのではないか。もちろん近頃企業が好んで従業員を富士山麓の特殊訓練施設に送り込み、その成果を高く買うという。それが大流行ともきく。この青年の船も、中国との友好もさることながら、青年の訓練に意義を見出す事業と考える向きがある。国立阿蘇青年の家というようなものも、国定の企業訓練所といえる。賛否の分れるところであろうが、藤江君は一笑に付して否定する。どう解釈するか！

8月6日（月）

筑豊の再生問題

県議会の産炭地特別委が問題の鉱害事業正常化決議を採択し、これをタネに西日本新聞が、問題を総括してどう見るか知事意見取材にやって来た。大っぴらにはいえないが生活保護にしる鉱害復旧にしる国からのアブクがねのように考えているやからが巢食っている。そこに寄生する、昔は労働者の弱みにつけ込んで、炭坑の経営者がそれら連中を利用して労せずもうかる途があった。それと似てこんどは生活保護費や鉱害復旧費という不労の収入に喰い入ってくる。筑豊の百年はそのような歴史だった。川筋気質の負の面といえよう。炭鉱がなくなってからも 20 年もたつのに、国の予算投入で生きていく体質がなおっていない。自治体も住民もそういう体質になっている。自立の根性が育っていない。政府もカネを出してその場のがれに終始してきたように思う。根本的な立直りを策したとは思えない。県もそうだったのではないか。企業誘致はきこえはよいが、これも依存主義の一つのあらわれではないのか。他から来てもらうのではなく、自分で生い立とうとなぜしないのか。記者に「総立ち」の必要性を言ったら中味はわかるが言葉の選択が悪いという。どんな言葉がいいかと問うとそれはわからんという。言葉の適否は別としても、筑豊全体に自分の足で立とうという気力が欲しい。

8月7日（火）

岡本議長の知事評

全日空ホテルで知事招宴があった。明日の九州開発推進会議に出席の九州各県主要代表が出席していた。私はホスト、右に岡本県議会議長、左に永井副知事が掛けていた。岡本氏が盛んに奥田評を右前隣の南九州議長らに声高に話題提供している。左後でピアノ演奏がされている。私は時折岡本氏の発言に口をはさんだ。岡本氏はうまくうけ流した。彼は大分高商、神戸商大を出て自民党の中でも老練の紳士である。知事も自民党に入らんですかとすらいった。今日来訪の恒松島根知事は自社両党の支持という。資本主義は支持するが自民党はいかんと恒松氏はいった。私は自民党は個人として心情よく理解できてほとんど異存はないが、党として振舞うときにいけないと思う。岡本氏にしても同じ。知事を何とかして引き

降ろそうと自民党は過去一年全力投球したが、成功しなかった。奥田が細く小さいもんだから、婦人層から知事をいじめるなどの批判が出て、これにはまいると彼はいう。それに近頃知事はボロを出さなくなった、だんだん支持者がふえている、このままでは次回の対抗馬が見つからない、こまめに県下をまわって着実に支持をふやしていると彼はいう。江口、高岡、その他県議会での攻撃はみんなかわされて失敗、逆に点をかせがれたと彼はいった。

8月8日(水)

教労研の懇親会に出る

森山君が突然に入れて来た日程で、日教組の教労研が600人ばかりの規模であって、夜平和樓で会食をしておるから知事としてあいさつをせよということになった。右近で議会各派代表に総務部長富永氏の新着任紹介をする懇談会のあと、20分ほど教組の連中に私なりのあいさつを行ったのだが、全国から来た教師たちが、熱烈な歓迎ぶりには嬉しいやらびっくりやらであった。みんな自腹切って教育労働運動のあり方を話し合おうという会で、協会系の教師、福岡では高教組の人達が自主的に組織しているものである。今夜は200人といわぬ多数がつめかけ、福岡での知事選の勝利が一つの成果として話し合われたに違いない。大きな関心が私に寄せられていた。私もリラックスした気持で20分間も長いあいさつをし、やいのやいのの拍手でよろこんでもらった。但し残念ながら、教育の現場は非行問題、臨教審設置、管理強化、教育内容の右傾化、定数不足などあまりにも問題が多く、知事がかかわったからといって何一つ改良されないのが残念ということであるから、課題が山積しているのであるが、みんな明るい気持で、それが何よりの救いである。

8月9日(木)

県職員の執務姿勢の活性化

太宰府国民年金保養センターでのサマー・インなる試み、知事を囲んで県の幹部理論家連中がいたいことを県政活性化をめぐって言ってみようという会である。知事がかわってから上意下達になれてきた職員達が方向模索でとまどい、活気がないのが実情らしい。自分でやる気をおこしてもらわねばならないのだが、やっぱり上役の顔を見たり与えられた仕事の範囲で難なく仕事をやっていけばよいという気分から抜け出していない。そんなわけで福岡県は他県にくらべ県庁に活気がないとの評判がある。知事のイニシアティブの不足とか、ブレーンがないというようなことが以前からいわれていたが、その批評が出る土壤がたしかにある。ブレーンとは何なのかを以前に問題にしたこともあるが、特別の組織を作ろうとはかつて考えたことはないし、今もそうは思わない。「総立ち」ということをいい出して少しはわかってくれている人もあるが、とまどいも確かにある。池の内総務部長が県を去るに当って、7月初め、どちらがいいとわからないとの前置きで亀井は上意下達命令至上だが奥田はその逆。そこに職員のとまどいと消極姿勢の遠因があるというのである。

8月10日（金）

夏休みがあればいい

ふつうの事業所なら一週間ぐらひは夏休みをとろうというケースがふえてきた。他面日本人はクーラーをつけて仕事をしようとの一般的傾向があつて夏休みどころではない。又公務員に対しては窓口はいつもあいていなければならないとの一般の期待が強く、夏休みどころか昼休みもままならない職場がある。消防職に休みがないのと同様である。ただ交替勤務の形態をうまくとり入れればよいはずである。ところで知事には休みがない。サマーインと称してこの3日間執務室を避けるのだが、スケジュールは一ぱい詰っている。形式も儀式もないから気の張りつめはなく、自由な発想を思いがままに発揮すればよいので、気苦労はない。しかし肉体上の自由はやはりない。執務から離れて執務全体を見直すこのような試みは年に2~3回あつた方がいいと思う。議会前のヒヤリング、答弁を予想した想定レクチャーは知識と答弁のコツを勉強するためのものだが、このサマーインは自から構想や疑問を勝手に出すことができる。ただ、時間が詰められているので疲れてしまう。スポーツや娯楽が適時織込まれているなら更によいだろう。

8月11日（土）

熱暑に思う

夏と冬は死人が多い。酷暑と厳寒が人間の限界にせまり、限界者が死に至る。もちろん、水死、登山事故、交通事故も暑さ寒さが加わつての増加となるだろう。だが気温が原因ということになると、人間は弱いとつくづく感じさせられる。人間だけでない。枯死した植物や干上つての魚類の死も枚挙にいとまがないであろう。家畜の死もあり、ニワトリの産卵も減つているといわれる。やはり生き物のうちでは人間が一番強いはずである。が、人間は社会というプラスマイナス両面のハンディがあつて、マイナスを背負つたのは他の動植物に劣る弱味をもっている。植物も動物も人間によって環境を変えられ、強くも弱くもなっている。山は青い、だが自動車道の灌木並木は雨が降らないため実に多くが枯死又はその寸前にある。水位が下つたのか、根の張りにくい環境におかれたためか、雨が降らないと、誰も撒水しないので枯死にいたる。莫大な損害だが、人夫を雇つて撒水するより安上がりと思うのであろう。ともかく生きとし生けるものあれこれあえぎあえぎの永らえを期待している。一雨ほしい。人間はこうも温度と湿度に弱いものかとつくづく感じた次第。

8月12日（日）

夏休みの子供たち

昨日孫たちは帰京したという。上が小五、下が小三。今日吉村夫妻が二人の子を伴つて来たが上が中三、下が小三。一方は男、他方は女の揃いだ。がどちらの組も下が負けてないで上に喰いついて十分にふざけ合っている。すくすく伸びる頃だ。小三の頃の己を思い出すと夏休

みは毎日中食がすむのを待ちかねて川に行ったものだ。一年生から三年生にかけてやっと泳げるようになる。一年のとき、夏休みがすんだら、一友人が水死したということだった。自分も水死の危険に一度出くわした。やっと泳げるようになって深みに飛び込み向う岸の浅瀬に泳ぎつくと思った筈なのに力尽きて足を川底につけようとして未だつかず、水を飲んでもがいた。そしてやっとのことで足が底につくところまで来て、助かった。無茶をしたもんだ。小学校の 1~2 年の頃だった。孫や吉村の子の動きを見ていると、こういう時代をふと思い出す。吉村には、将棋や碁並べをするようにとっておいたが、兄弟でやっているようだ。自分もよくそれをやった。オセロというようなものはなかったが、彼らは今日オセロをした。孫たちもしていた。小さい方がやっぱり負ける。

8 月 13 日 (月)

各々の豪邸に思う。

KBC の柴田、九電の川合、代議士の辻、この三家の初盆に公式参拝に行った。柴田氏は社長自身の、あとの 2 者は本人の母の初盆という。2 人共八六歳の母だったという。柴田家は西公園のマンション、川合家は長住、辻家は那珂川の田舎家屋だがそれぞれに豪邸。県議員のあれこれの家にも行ったがこれまた豪邸揃い。みんな住宅の質は高いと痛感することしきり。この面で日本人の生活水準に格差がついていること確実。ひるがえってわが家を思うと、こうした人達にくらべ、戦後 30 年余福岡に住みつづけておりながら、この面での努力が足りなかったように思う。ほとんど顧みないで、原稿書きや講演にかけめぐったりで、知恵を蓄財に向けなかったといてよい。今となってはどうしようもないし、今からの人もまたそうではないか。多くの人がそうではないか。東京にいても向坂、高橋両先生のことがある。誰しも幸運だったといえるかも知れないが知恵のまわし方がよかったように思う。教養部の穴山さんが国文学を専攻しつつ茶山に千坪の山地を買った例を思い出す。当初坪 100 円ほどだったろう。他人から借金かき集めて入手したその土地が今では億万の値を呼ぶだろう。経済学をやっている自分には、そういう知恵は働かなかったわけ。

8 月 14 日 (火)

お盆雑感

午後は時間があいたので牧坂氏に電話したら 4 時ごろやって来てマージャンを休み休み楽しんだが、美術館の市民ギャラリーで行われた今年の玄羊展への私の出品を持ってきてくれた。王維の渭城朝雨だった。自分のを見ると何だか欠点が目につくので嫌な感じだったので、保存するかどうか迷う。今日も午後は牧坂氏の来宅まで、揮毫したが暑くてシャツびっしょり汗をかいた。額から流れ落ちる程に汗が出て下着をかえた程であった。牧坂氏は和白の公民館での 7 月 7 日の子供七夕習字会の時の写真をもって来てくれた。私の添削風景も出ている。彼には遠矢君の葦の色紙を一枚贈呈した。今朝はつきの木、白水両家の初盆ま

いりをしたが、途中大牟田の松尾鶴林氏が篆刻出品物（九英社展）買上げ依頼してきて額を届けてきたのに対する代金を郵送しておいた。4万円ということだが、立派な表装でもあるので高いとは思えない。牧坂氏には、私が遠矢君と表裏分担して今年の暑中見舞をかねて贈り物として作った末広（扇子）を一本贈っておいた。同じく書をしている者としては贈りたくなかったのだが、彼のことだから止むなしと思った次第。これは500本、100万円規模のものだが、各方面に出してあと25本残っているのが現状。芸術家にはコストがかかる。

8月15日（水）

“戦没者を追悼し平和を祈念する日”

西日本新聞の夕刊は次のように報じている。

戦後39年 平和の誓いこそ

核不安高まる中 戦没者追悼式

遺族ら7300人参列

『310万人の尊い犠牲者を出した太平洋戦争が終わって39年、戦争体験の風化が進み、核に対する不安が高まる中で、終戦記念日の15日政府主催の全国戦没者追悼式が東京北の丸公園の日本武道館で天皇陛下をお迎えして行われた。このほか東京千鳥ヶ淵戦没者墓苑で護憲連合や社会党総評系の追悼式など全国各地で式典や集会が行われ戦争犠牲者の冥福を祈るとともに平和への誓いを新たにされた。一方で、中曽根内閣の閣僚らは靖国神社に大挙して参拝し“公式参拝”の色彩を一段と鮮明にした。

57年、この日が「戦没者を追悼し平和を祈念する日」と定められて以来3年目のことしの追悼式には6300人の遺族と政府各政党地方自治体経済団体関係者ら約1000人が参列した。遺族代表の82%は60歳以上・・・80歳以上は171人で4年連続減少した。逆に戦後生まれは69人』

福岡県の場合もこれと同様だろう。近くの護国神社でみたままつりがあっている。“平和の誓い”の解釈が問題。

8月16日（木）

県立社会教育総合センターを視察

篠栗に4月1日からオープンされた県立社会教育総合センター視察に行った。午後3時の暑い盛り驟雨があって後気持よいコンディションのグラウンドで県下各地から集った小学生達がボランティアの人達に指導され、それぞれのユニホームをつけ、これからソフトボール大会に入る寸前であった。乞われて各チームの子供達に囲まれ写真ポーズをとる。母親達もかなり参観にみえているようであった。田川の白石県議も役柄来所し現場にいた。所長次長らに迎えられ、次長案内でセンター内をかなり詳細に視察、汗だくだくになった。施設も大きく内容もととのっているし、裏山一帯が県有地として子供達に炊飯木工などの野外活

動用に利用できるのもよい。植物、昆虫などに接し、野鳥を観察できるのもよい。将来は広大なこの林地を利用して施設を追加していけば大変有用なものとなろう。子供だけでなく、青年も老人も利用できるのだから生涯教育のセンターとすることができる。次長らがいていたように、センター当局者はその利用グループの活動内容に容喙してはならない。彦山青年の家は容喙どころか規制がある。先日九州青年の家では所長が研修員に一々訓話を垂れていた。どうかと思う。

8月17日(金)

遠矢画伯のこと

5時からの遠矢政己氏の葦の風情個展に行ってレセプションの冒頭あいさつさせられた。昭和23年か24年頃、三井山野炭鉱の施設が炭連労働学校になっていて、ここでは常設的な1ヵ月(2ヵ月)の労働者教育が行われるという珍しい機関があった。その時の4期生か5期生の中にこの遠矢氏がいた。22歳かそこらの年齢だった。朝鮮の中等学校を卒業したとかで引揚者だろう。炭鉱にもぐり込み仕練夫といていた。すごく理解のいい人で、私らの講義は丸のみするほどにわかっていた。炭鉱に帰ってから共産党員として活動し、レッドパージによって田川炭鉱を去った。その後八幡で製鉄外郭の菓子業をしていたともきいた。が、何年も消息はなかった。絵を書くようになったのはその後数年にして私も知った。武蔵大の岡茂男氏も労働学校で同じく講師として働いたこともあって、遠矢氏は岡氏に深く私淑していたと思う。知事になる前にも遠矢氏には田中光夫氏、江口義雄氏らとの関係で個展には何回か出席した。彼はこの二人にも私淑している。三井鉱山にもスポンサーがあるようだが、画家たるもの財力あるスポンサーを必要とするのに、彼はその点不自由のようだ。

8月18日(土)

小雨で水に困る

農政部から水不足の県下状況について説明があった。全般的に日照りで米は豊作の見とおしだが、水系に恵まれない水田、畑地に問題がある。糸島、京築にその心配があり、ここしばらく雨の見込みがないとの天気予報らしい。台風10号が沖縄で被害を生んでいるようだが、それがおとなしい状況でやってきてくれればとの声がある。昔はこんな時水争いがあったが今日はなくなっているだろうと思ったが、今でもあるらしい。ビニールハウス内のトマトは、もう収穫がすんだのか知らぬが、宗像で全く枯死している例が車から見られた。このままでは野菜が高騰するのではないか。福岡県で水に心配がないのは筑後だけで、あとは水量をこえた人口が集りすぎている。福岡市民が期待できるダムには今45%ほどの水があって、今のところ飲用に心配ないとされている。福岡市の人口はあと20%はふえるだろうと予想されているが、そうなったら水が大変な問題になるに違いない。農村部でも今は簡易水道がかなり普及するようになっている。農薬が多く使用されていて、個人の井戸がだんだん

使用不能になっているらしい。井戸水が使える間はそれが利用できるように、できるだけ長い間、広い区域にわたって利用できるように期待したい。

8月19日（日）

公営プールのこと

田川市民プールでの27回県民体育大会夏季大会の試合を一寸観戦した。小学生か中学生か12歳前後の子供達の自由形予選だったが、全くの若鮎たちといった感じ。早い早い。とくに女子のピチピチしたしかもスピード豊かで美しいフォームにはしばし見とれた。温水プールの施設があるところは年中練習ができるので強くなりますよと役員がいい、田川にも早く温水プールをと滝井市長にうながす。維持費がととてもと市長の返事。使用料が今30円から100円という。大人100円だろうが、安いにこしたことはないが、これでは赤字になるだろう。市費のつぎ込みが必要だろう。こんな安い料金で使えるならいいし、もっと安く、タダなら尚いい。しかし経常経費ぐらい回収するのが今日の行政サービスのあり方としては常態常識。でも市長にいわせると、料金が高ければ入りが減って……さあ、結果はどうだろうという。温水プールにすると赤字が1億円になりそうだと滝井市長の話。飯塚には私営の温水プールがあって、今日も飯塚出身の選手が多いのはそのためらしい。私営でできるなら公営でできない筈はないと思うがどうだろう。田川の市民プールは広くて立派。市民サービスに十分役立っていると思うが、夏の2~3ヵ月でしかないなら惜しいことだ。

8月20日（月）

後援会のこと

近藤出納長が来て県民の会、清進会、国際交流会など奥田後援会を3~4個ならべて、それぞれに別途運営していくようなことをいっていた。彼が関係しているのは国際交流云々の方で、銀行など財界からまとまった資金集めをしたい団体だという。それは清進会には入会をすすめるににくい対象とのこと。清進会は広く一般に会員を募る後援会で森田則一氏が主宰していく。が、この方は遅々として運動がはかどってない模様。私の方にも音沙汰がない。県民の会は会費を決定し、さきの知事選以来支持母体として独自の運動を展開している。6月にやった一周年記念行事（スターレーン）がそれであり、当面の市長選にも動いているらしい。いつかこれらを知っている人達が集って状況なり方針をまとめて話してくれればよいと思うのだが、むしろ全く知らぬ顔をしている方がよいのかも知れない。森田氏のかかっている団体の動きがどうも鈍いと思っていたら、林県議や近藤出納長が手がけている団体と一体化しないが故であることが最近私にわかってきた。純粹にカネを集めて知事の政治資金を手もとにおいておきたいというのが後者で国際交流会の名を別途用いている。

8月21日(火)

遠藤氏が次期知事選に出たら……

夕刻のニューオータニで開かれた福岡県建設業協会の懇親会は業界と官公需発注側との顔合わせの会だった。国会議員の面々が壇上に並べられて紹介されたのを見ると建設関連予算削減するなどの業界の声を国会に届けようとする狙いがあったのであろう。この席に松本英一、遠藤政夫らが顔をみせたのはごく当たり前。選挙運動で昼夜わかたぬ奔走をしている進藤市長も乾杯音頭取りで花をもたせられた。宴席で私に近づいた遠藤氏がいった。あなたが県下をこまめにまわるので、次期知事選の対立候補を立てようとの声がどうも強まらないので弱っている。自分に立てという人があるが、あなた相手では私は殺される。知事は年中選挙運動しているのと同じ。現役が強いのはそれ……と、ぬけぬけとこういうのである。私は適当に応接しておいた。松本英一氏は林武彦の前で私にこういった。ここに来ている何百という連中のうちあなたに投票したのはこの二人だけでしたよ……と。暗に、今はこのうち大多数があなたに投票するだろうという意味であろうと思う。自民党でも辻英雄氏は先日那珂川町まで初盆に来てくれたと礼をいい、又遊びに来いという。稲富稔人氏も近く吉井に来るなら待っているという。

8月22日(水)

建設大臣への陳情

上京予定が入ってきてすき間がないほど多忙なこの頃である。秘書室が日程を組むのに苦勞しているようだが、彼も欲、こちらも欲ということで、結局はすき間なく引きずりまわされてしまう。今日は建設大臣の来福、こういう時は、それ！陳情ということになって県庁がぶんぶん振りまわされる。宏池会だそうで太田誠一にテコ入れに来たのだが、それが公的日程と組み合わされて彼も陳情対応で大童である。こちらも大童となる。中央とのつながりの一番太いパイプが建設関係だからなおさらである。田中角栄及びその派閥がこれで大儲けしたに違いないのだが、それがどうして宏池会に譲ったのであろうか。道路はいくら作っても足りない。いくらでも陳情合戦が展開される。今日の陳情もそこが重点。しかし、水野建設大臣は土地の先行取得さえうまく早めにやれば道路はなんぼでもできますという。この辺のことは県の役人も知っているはずだが、実際には大変むずかしい問題ときく。福岡市は外環状線を陳情のポイントにおいていた。国体関連では道路につき県市の要望は共通し、ダム公園についても同じであった。名島の運動公園については使っていないじゃないかと建設大臣は批判的であった。使いにくい位置にあるのだろう。

8月23日(木)

東京白鷺会の先輩たち

せっかく当選したんだから次期もということで万策を練るよう河本敏夫氏は「なだ万山茶

花荘、の中食会を開いて私を激励してくれた。同席の宮崎氏にその旨要請。宮崎神戸市長も私にいろいろアドバイスしてくれた。同窓生とは有難いものだ。岩田君がそれで奔走してくれたのだ。今日衆院議員会館で会った辻英雄氏も県で困ることとかあればいつでもいってくれと好意的な言葉をくれた。辻氏は河本派という。多くの人が私に同情を寄せてくれるようになったことは思いがけぬいい傾向である。宮崎氏は都市経営論で有名で、予算がないからといって弱気をおこさず仕事を積極的にやることだといっている。河本氏も臨調路線にははじめから批判的で、緊縮予算、マイナスシーリングでなく、積極財政で景気を浮揚させ、それによって税収を伸ばせば財政再建はできるはずと強調する。全面的とはいわぬまでもある程度当たっているのではないだろうか。いつか神戸に行って宮崎氏の都市経営論なるものをきいてみたいと思っている。その輪郭は市長室参事だったという高寄昇三氏の“地方自治の活力、”という本の中に示されているのでおもしろそうに思うのである。近頃見た本で珍しく気が合った。

8月24日（金）

市長選候補・野林氏への陣中見舞

昨夜もう10時半頃になって市長候補野林氏が拙宅に来訪。岩崎隆次郎氏が同伴だった。私は9時少し前に東京から帰ったばかりだったが既に秘書室からは林室長と森山の二人が来ていた。どう対応するかを野林陣営と秘書室の間でさんざん論議したあげく、候補に来てもらい、今日早目に、私的行動として私が野林事務所を訪問し、運動員一同を激励するという筋書きに落付いたようである。行くなら候補三人ともという私の案は野林事務所側の拒否するところとなった。私は嫌なことだといった。実に幼稚だともいった。野林陣営は私が他の二人の選挙事務所へ行くことを操を売るように解釈し、知事は自分たちが推したのだから他陣営に内通してもらったのでは陣営内の気分がおさまらないと岩崎らは説明する。こっちの気分がおさまらないことは気にならないらしい。ともあれ今朝は藤江君の車で8時から9時まで私的行動として野林事務所へ陣中見舞におもむいた。朝日が来ていて写真をと求めたが、幹部が拒否した。新聞はどうせ記事にする。その反応がどう出るかわからないが、今は出たところ勝負というほかはないだろう。林県議にいわせると、進藤陣営についている公明を逆なでするのではないかとの心配がある。

8月25日（土）

白井先生を見舞う

九州中部商工連合会総会に出席したついでに米の山病院に入院中の白井正先生の見舞に行った。救命室に入れられてもう二ヵ月になるという。このことをきいて一ヵ月ほど前にみゆきに見舞に行ってもらったが、思いのほか重篤の様子である。奥さんも強くない年齢、先生の方はもう84歳という。二人とも早く救急室を出たいとのことであったが、酸素吸入や点

滴をはずすことはできず、心電図が常時実情を記録した形で、食べ物は摂れず、便も不自由のようだ。見舞の花束など雰囲気にあわない。病院に入ったところで総婦長が出迎えてくれたので病室に行ってよいか確かめたが可ということだったので奥さんに案内されて入室したのだが、本人は私の来るのを大変よろこんでくれているとのことだった。その通り、先生は両手をさしのべて目に涙して私を迎えて下さった。長居してもいけないと思って10分余で立去ったが、大変別れを惜しまれた。奥さんは今ははりつめた気持だろうが、きつくたください。隣の平山さんが奥さんを送迎しているという。隣人の協力という美しい心なくしてできないことだ。子供がいても遠くに住んでいたのでは足しにはならない。それでよいのかどうか。私は重篤病でも入院したくないとさえ思ったのだが。難問難問。

8月26日(日)

稲富稜人氏を訪問

今日一日思いがけぬ浮羽の見学旅行で有意義だった。県下でもくらべようのない豊かな地域ではなかろうかと思う。筑後川と水縄山地(耳納連山)に抱かれた浮羽三町は立派なものだ。田主丸町長のはからいで片瀬温泉で今朝からの雨で増水した筑後川を眺めながら中食し、若の寿酒蔵関連の「祥酎」、紅乙女の工場、巨峰ワインの工場を見学したり、巨峰ブドウ狩りをしたりしてこの地田園の豊かさを満喫させてもらった。このあと吉井町の稲富稜人代議士を訪問した。先日某所でのレセプションで同席した時に予約しておいての訪問だった。昭和の初期農民が1反につき五合ずつ出し合って作ってくれたという家を今も大事と保存してそれに住んでいる。二階に大きな広間が作ってあり、昔は400人の農民がつめかけたことがあるという。農民運動の話語る彼はいつになく輝いていた。往年の闘士が今はどうなのか、よくわからぬところだが、私の訪問には大へん気をよくしてくれたと思う。同行した秘書が私に、どことなく気が合うのですねといった。その通りだと思う。昭和30年代のはじめ、まだ社会党が分裂してなかった時、稲富氏もメーデーに出て来ており、私が彼と腕を組んでデモ行進した思い出がある。私の二倍もあろうかといえる体格の持主、気はおだやかである。

8月27日(月)

県土の緑化熱意

磯矢昭三水産林務部長が来室。私の緑化構想について意見をのべた。まず、高校卒業生の記念植樹はやっており、問題はないが、県道の並木植樹には問題があるという。国体公園の植樹も問題はないという。ただどうもこのことを真剣に受け止めようという気持はみえなかった。国体が昭和65年に福岡で開かれる。これに向けて県土の緑化と環境美化は大きな課題となりうる。口実になる。それで予算は取りやすいのだ。学校の卒業時、成年時など記念植樹のチャンスである。北京できいた話だが一人10本植樹が相言葉になっているそうだ。

あくまで私はボランティアの植樹がいいと思う。それに県費を補助する方針なのだ。だが部長はこの方針に言を左右して取組もうとしないようだ。県道の並木化にしても、路肩にうえると樹影が生じ問題化するので駄目であろうという。もちろん、可能なところ、住民の承諾のあるところに限ってもよい。取り組んでみようとの姿勢がほしいのである。県民総立ちということで、水産林務部でなくとも各部関係でも緑化植樹は不可能ではあるまい。教育、民生、衛生、商工その他等々それぞれに植樹にとりくむことはできよう。私は一般に問うてみようと思う。

8月28日（火）

江頭県議との懇談

大坪商工部長のお膳立てで2月の県議会の質疑答弁のあと約束した江頭県議との懇談を今夕山ノ上ホテルでおこなった。いたずらに知事のあげ足取りに熱中する議会質問者が多い中で江頭氏はまじめな議論をひっさげて質問に立ち、当方感動したのであった。議会が一日終わったあと、いつか懇談の席を設けましょうと当時は別れた。大坪氏がそのことを心配してくれていた訳である。問題は、企業誘致その他、県の商工産業振興について、どうするのが本筋なのかと腹藏なく話し合ってみようということで、今日は大言壮語も含めて食事しながら話合った。公明党の諸君には奥田と話し合ってみろと彼はいつているのだとのこと。このことは、中間党派が政争というよりは行政の内味政策の方向について議会の場で議論しないと県民の信頼を失うことになりはしないかということに気づいてきたことを意味しているし、その意味で、反奥田の野党連合がすでに崩れたことを意味している。民社についても公明と同じことがいえる。自民党の中にもこのような良識派はいないではないが、遠藤の如きが指揮している限り望みはない。

8月29日（水）

活性化された執務

労働部長以下同部の課長らと40分ほど懇談した。初の試みであった。私は職員が積極的に仕事を作り出すこと、業務に活を入れることを求めた。のんびんだらりと、又マンネリズムで仕事をしてはいけない、そのためには、福岡県という自治体の労働行政はいかなるものでなければならないか、国のそれとどこで交差し関係し、どこが違うのかの哲学がなければならない、それを労働福祉課長が後日私に意見発表してほしいと注文した。又、来年度の労働部の予算要求のポイントは何なのかということもきいてみた。どうも主体的に前向きに業務に取り組んでいる様子がみえないのである。ひる間、中食を共にしつつ、九月補正予算案について八丁、林、近藤らと意見交換したが、財政課は、九月補正の目玉をどこにおくか、知事の施策のうちどこで補正で特徴づけするのかの討議がおこなわれているとは思えないとの私見をのべておいたが、これと同音である。仕事は毎日やっているが、何のために、何

に向って、何をしているかの自覚がない。職員の活性化ということを近頃強調しているのだが、誰も何のことか自覚していないように思える。無自覚に毎日何かやっていて、それで月給をもらえればいいのだろうか。

8月30日(木)

王豊玉さんと語る

明朝の九州青年の船の出航式に出席のため中国大使館から王豊玉参事官が来福。県側が宿舎の東急ホテルでレセプションタ餐会を催した。宋金銘書記官はもちろん王さんも日本語ができる。来日以来4ヵ月というのに、8割は理解できるようだ。食事をしながら王さんのいうには、県青年の船も、中国の沿岸だけではなく、長江を上ってゆく訪中の方法もありうるのではないかと提案したことは新味を感じさせるものがあった。重慶でも1万トン級の船が遡航できるということはもとより知らぬではなかったが、厦門、上海、天津、北京などのくりかえしでないコースはいくつもある。長江の兩岸の景色はいいし、名所旧蹟に富んでいる。重慶へは上海から往復するだけで10日かかるとのこと。上陸を考えるとその半分しか行けないだろう。ともかく彼の提案は検討に値する。王さんは小柄で若い。が、なかなかのインテリようだ。多分エリートコースに乗っていよう。日本の文化はどこにも中国との交流の跡が見られるのに、食の文化はそうでないのが不思議といい、中国は広いから、食だけでも山東、四川、広東というように大変違いがあるとも説明した。おしゃべりは延々つづいて1時間半はあっという間に過ぎてしまった。

8月31日(金)

青年の船出航式に思う

九州青年の船が真夏の陽ざし強烈な博多埠頭、乗込みの新につぼん丸を横に10時から1時間出航式を行った。来賓に来福の王さんに、こうした「規律、ある訪中団の行動がどういう印象を与えただろうか。君が代斉唱をどうきいたか。そういう思いをするのが間違いかどうか。13年目にあたるという九州青年の船、11回目という訪中、福岡県独自の同じ青年の船も7回目ではなからうか。それが一様に、ユニホーム、男女半々、軍隊式訓練をうけて訪中する。県独自の場合はもっときびしいらしい。今日も出航式で整列している団員の君が代斉唱のシーンをみて、私は日本陸軍をふと思い出した。民間の任意な訪中団、訪中者はいくらでもある。中国側にだらしなない印象を与えるのはまずいというだけで、官製旅行団、交流団はかくも軍隊式にかわるというのでは一寸奇異である。民間の訪中はだらしなないかどうか、必ずしもそうではないと思う。青年だから軍隊式に鍛えるべきだという意味であるとすれば、それもどうだろうか。体験入隊といって若者を自衛隊に入れて魂を鍛える企業、自衛隊上がりを好んで採用する企業がある。それと似たところもある。不思議。

9月1日（土）

廃止ローカル線対策が一つの山場に来た

交通事故ゼロの日街頭啓発に飯塚吉原町角に立ったあと、山田市役所前で待っている山本添田町長と要談。彼は私の車に乗込み余人を排し、滝井田川市長を添田線のバス転換に承諾させるべく知事から説得してくれと談じ込んできた。それは受けておいて、帰路、要請されて飯塚会館で滝井田川市長、梅崎香春町長と会談したらこの二人から同じく添田線バス転換問題の解決につき知事に要請したいとのことであった。滝井を説得してくれといわれたその日別の所でその滝井氏が同じ問題で会見を求めてきたので話は合致した。第一次整備ローカル線で廃止に決まろうとする添田線について、責任の中心にある山本町長は、反対の声を背にうけた滝井、梅崎の両氏の説得に困っているのが現段階らしい。そのバス転換には県道が利用され、その拡幅が必要で、最小限2億4千万円は必要と見られ、それを県が見てくれるなら田川でも住民説得ができるというのである。ローカル線対応については県の交通対策課はかなり消極的であるので、2億円余を出してもよいとの答はしないだろう。そこは私の方から事務当局を説得するしかない。ただ、それをすると、他の廃止対象線地元への対応に波及するに違いないが、それにどうこたえていくかである。しかし、議会筋の合意とりつけに失敗さえしなければ、必須だろう。

9月2日（日）

産炭地の再生は絶望のようにみえる

上山田線はどうすれば再生できるかについては誰も具体案をもちあわせない。地元は熱っぽく訴える。が、カネはないので県が何か案を出し解決せよという。ぶら下がり主義、依存主義から一歩も出ていない。これでは困るがどうにもならないのが地元の実態だろう。そんなら最初から知事は何もしないなどと責めるのではなくて、知事と一しょに考えようというべきだった。昨日、ようやくその気になってきたような雰囲気が見られた。添田線はバス転換ですむようだが上山田線の場合、具体案となるとあれこれ障碍がでてくるようだ。県の交通対策課ははじめから逃げの姿勢にみえる。亀井時代からそうだったようだ。上山田線だけではない。筑豊旧産炭地では生活保護、失業対策、鉱害復旧など、どれをみても泥沼のような展望のない状態がつづいている。自分で立ち上ろうとの意欲はどこからも湧いてこない。振替所得かそれを源泉とするあぶくがねでやっとなんか生きていく。亀井知事も安楽死しかないと考えたようだ。そうだろうか、それでよいのか、それしかないのかというのが私の率直な疑問である。企業誘致とってみても寄り付く企業はない。念仏のようにいっておれば政治責任がのがれられるように役人も議員も考えている。

9月3日（月）

今年2度目の北京

九州青年の船団長として訪中する際に、総領事館や定期航空路問題について新しいこの段階で一応の接点を確認しておく必要があり、これを知事という立場で団長という立場とは別に処理しようということで、団員とは別に今日、一足先に北京関係者と知事として訪問会談することになった。大阪空港経由で北京に着いたのがひる頃。北京空港がよくなっていることが改めて感じられた。空港と市内を結ぶ道路も両側並木その他思いのほか整然としている。アメリカと合併とかいわれる長城ホテルは立派にみえる。天安門付近は建国記念にそなえて化粧直しをしたとかで、すがすがしくなっている。日本からの3000人青年招待が9月末で、それに間にあわせるため何かと準備に忙しいようだ。市内あちこち工事ラッシュだが、記念祝賀に間にあいそうにない。4つの現代化のスローガンのもと、中国はたしかに近代的に変貌しつつある。無闇にならしていた警笛がなくなっただけでも一つ気持よくなったといえる。それでも人、人、人、自転車、自転車、自転車で道という道が人と自転車の波で埋まっている状況はかわりそうにない。どこから出て来てどこに行くのかわからない知らざる世界である。が静かに変わりつつあることは確かである。

9月4日(火)

総領事館問題の一つの区切り

9月のはじめ安倍外相が福岡市長選の応援に来て、総領事館設置は福岡市だと中国からいつてきており、決定しているといい切り、これも進藤氏の人徳というように結びつけて候補をほめ上げたことで、これを北京でたしかめるかどうか今回の訪中の一つの山となっていた。私どもはたしかめる必要なしと考えていた。今日の外交部訪問で劉部長代理は7月7日の公文交換原案の中に一切の必要事項についての中国側の態度は盛り込んであり、日本側からそれに対する答がきてないだけだといった。夕方の姫鵬飛氏との会談では福岡市北九州市のどちらかとはいわなかった。いずれにしろ、この段階で総領事館は福岡市であることは動かし難いようだ。どちらかにいつ決ったのかというようなことは客観的にはいい難いこと、かくの如しである。県としてはマスコミへの対応上、又両市への対応上、このような形で事柄が決定的になることはかえって都合のよいことである。知事がどこでどういったからこうなったというように、決定因とされるのは困るのである。北九州に対しても顔が向けやすいし、マスコミががたがたいわないですむ。安倍外相の発言もその意味ではよかった。

9月5日(水)

北京から上海へ

北京から上海へ。両方とも並木のすばらしい浴道が印象に残る。北京もあと20年もすればすがすがしい緑の都となるだろう。上海のプラタナスは、有名。これ一色といってよいほどである。しかし盛り場は人、人、人の雑沓。何の目的でこんなに人が多いのかときいてみる

と、無目的なそぞろ歩きだという。疲れて道ばたにうずくまって放心の状態では何かをながめている人も少くない。当然に何か事があると黒山のように寄ってくる。物見高いということである。北京にはズボン姿の女性、上海ではスカートの女性ということらしい。それほどに上海が近代的というか、先進的というか、北京とちがっているということである。でも近頃の北京も結構垢ぬけしてきている。どうもこの両市には昔から対抗意識的な比較がなされる。政治と商工業又は対外交流というような歴史的社会的バックの違いがあることはたしかで、それが違いを大きくしている。上海には天安門広場のような首都独特のたたずまいはない。それでも底知れぬ経済上の活力が感じられる。両市とも今槌音高い改造工事をいたるところで急いでいる。10年、20年後が待たれる。

9月6日（木）

“青年の船、船内研修

昨日は上海につくや否や、上海市人民政府など要所を訪問してあわただしく船内交流で青年の船は別れを惜しみつつ、天津に向けて出航した。黄浦江は大きく、いつまでもつづく兩岸をデッキでながめていた。今朝は8時朝食の時、船はまだ揚子江を出たばかりという。ゆったりとした船とはいえ、中国はけた違いに広大である。船内での青年たちの研修日程に私も組み込まれたが、研修箇所をそれぞれ見てまわるといふ仕事なら、大そう楽である。永田課長をはじめ職員、それに各班長らが420人をまとめるのに大そう苦勞している。選ばれて来ているはずなのに、中には仲間はずれのようなのがいる。上海市内自由行動中に交通事故をおこした者がいて、永田氏は頭に来るといっていた。中国については、まだ昔の“チャンコロ、意識をうけついで口まね手まねでそれをあらわす不用意者もいるという。研修となるとさすがに日頃地域青年のリーダーだけあって、今日日本の青年意識状況をよくつかんでの発言が多いと思った。三無主義状況などがきまって問題になった。ただ誰もその解決策は提言できないでいる。青年を行動に駆り立てるのが一番近道のように思うのだが、それはひねりまちがえると危険な道に迷いこむだろう。

9月7日（金）

青年たちは語らいを通して成長していく

船内の団員日課はふつう6時半起床、7時朝のつどい。これはデッキに集合、点呼、国旗、団旗の掲揚、この際君が代伴奏、副団長が朝のあいさつ、ラジオ体操。その後朝食が7時半。昨日は団長今日は船長の講話が9時から1時間余。このあとひるまでテーマ別研修。中食と休憩で1時間半。1時半からクラブ活動が5時まであり、5時から夕べのつどいで、国旗団旗の降下があり、注意や伝達事項をきく。その後5時半から夕食、7時半から班別研修、自主研修がつづき10時半点呼、11時消灯となる。テーマ別研修というのは団員から希望を募り集約し、希望に応じて討議班に分れ、船内のあれこれの部屋又はその片隅に群をな

して集って意見を出し合う。農業問題のグループは少なかったが討議内容は深刻にみえた。恋愛、結婚、家族、地域活動リーダーなどことも共通の意識でなごやかにおこなわれている。テーマそれ自体の中味がどう深まったか、どういう方向がでてきたかというよりは、こうした中で自分がいいたい事が発表でき、人の考えを知り、相互に感銘し、できれば他県、他郷の人と友達になっていくという青年の経験的過程が大切なのではないかと思う。平和についても鋭い感覚をもっている。

9月8日(土)

天津を訪ねて

天津に上陸しての1日だった。前に北京に行ったとき、天津は水や電力が不足して大変なところのようにきいたが、この大都市、それほど大変ではなさそうである。神戸市と姉妹関係を結んでいて宮崎市長もたびたび来訪したとか。とくに人工的な港湾の建設については世界的に著名な神戸港の建設に学んで、天津の港も今大きく発展しようとしているといわれる。石油、天然ガスも近くに生産点をもち、独自の、そして北京の外港としての、大都市の風格をそなえている。もっとくわしく見学できないのが残念だが、当方からラブ・コールすれば十分に交流面でこたえてくれそうである。できれば別に機会を作って訪問したい気持ちにさそわれた。経済特区であるため外資導入と独自の交流を強く望んでいることが、市の幹部との交流でわかった。団員とは同一行動をとれなかったが、われわれ幹部の一部はとくに天津絨毯を求めて工場見学し、師範大学を訪問した。この大学は天津の主要大学の一つであろう。高校教師の養成がおこなわれているという。交流に出てきた学生は大変に洗練されているとみえた。全寮制1968年創立とのこと。福岡県にどのくらい大学があるかときかれたので25と答えるとびっくりしていた。教育大との交流を望むということであった。

9月9日(日)

北京でのあわただしさ

起床が早かったし、ごちそうばかりたべているし、少々疲れ気味である。天津旅游局の趙耀氏が同乗して一路北京へ。3時間はかかった。団員たちは人民広場と八達嶺をぜひみせるというスケジュールで若干の無理をした。幹部の方は人民広場で団員と別れ、北京市青年連合会を表敬訪問し、9時半から11時すぎまで歓談した。青年連合とは何ぞやという説明があり、当方からも組織機能などにつき質問したが要領をえずじまだった。国の制度の一部だがボランティアでもないのので何をするのか全国的にどうなっているのか、どこでどんな役割をはたしているのかである。中食は全聚徳(北庁)で国際旅行社総社の招宴でペキンダックのごちそうである。そのあと、雍和宮に見物に行った。北京に先行したとき、ぜひ見ようにとのことだったので、予約していたもの。ラマ教の寺、乾隆帝の生誕の宮殿ともいう。ゆっくり見るひまもないので惜しかった。北京には見物の価値あるものがほんとうに多い

のに素通りばかりしているのだ。公務出張というものは、こういうふうにはかならない。人と会い、食べて交流ということばかりの連続である。明日もまた早い出発というので夜のうちに荷物を作った。

9月10日（月）

VIP扱いされて

成田空港に降り立って直感したのはずいぶんと厳重な警備と日航の深切な応待だった。これは福岡でも同じだった。オーバーだなと思うが、これを逆の面からみると当たり前なのかも知れない。北京でもきちんとした見送りを受けた。松尾係長が随行で私は出入国いずれについても税関は他人まかせでフリーパス。これはフィリッピン、ハワイのいずれとも同じくフリーパスの旅行で苦勞させられぬ身分だが、取り巻かれている気分の重みは感じないわけにはいかない。福岡では副知事、秘書室、その他大勢の出迎をうけたが、ある人は少し太ったといい、他の人は疲れがみえるという。どちらもほんとうのようだ。上海からの二、三日は、いずれも5時、5時半の起床がつづき、睡眠不足というしかない。たしかにVIP扱いは結構だが、反面こき使われつづきでもある。昨夜の招宴（於建国飯店）の時、中日友好協会の金蘇城、国際旅行総社の陶永年両氏が、私を革新知事として注目しているとの旨の発言をしたのが気になる。中国では身分は洗われ、かなり知られているようだ。その反面、胡耀邦総書記はじめ、国务院の姫鵬飛、友好協会の王震など要人が人民大会堂に引見してくれるなど、VIPの扱いをしてくれる。心しなければならぬ。

9月11日（火）

向坂先生が危篤とか

ひる間、毎日新聞の記者が来て、向坂逸郎先生が危篤なので、もしかの時に誰にコメントを求めたらいいか私にきいた。それなりに答えておいた。それよりも、当方、どんな形で見舞をせねばならぬと考えて、色々と思案した。東京事務所の所長か次長に私の代理で花束ぐらい託したらということで当たってみたが、先生の側近の者は誰も口を閉しているようだ。川口氏に私から電話してきくほかないということになり、東京事務所から電話したら丁度うまく連絡がついた。入院先もいえないし、病状も明らかにできない由。また見舞に自宅に行くにしても奥さんも付きっきりで、お手伝いさんもいず、うちは空っぽとか。私は見舞いをあきらめざるをえなかった。知事立候補以来夏と正月のあいさつはしたし、それに対し奥さんから鄭重な返事がきていた。岩崎氏が野林立候補について報告にうかがった時、鷲の宮のお宅は誰もいず、近所に訪ねてもわからなかったという。もう80と6～7歳ではないだろうか。大そう弱ってあるときいたが、それ以上は知らない。私が知事として多忙であることはよくご存知のようだががんばるよういわれたことがある。

9月12日(水)

全国知事会議

政府側主催の全国知事会議が今日午前10時から首相官邸と、午後は都道府県会館とでおこなわれた。後者には首相の出席はない。両方とも総務長官や大臣、ほか次官の代理に当る者などが出席している。首相は行政改革、財政改革、教育改革の3改革の必要性を訴える演説した。全国知事会々長鈴木都知事は行財政改革が地方の負担転嫁の形でおこなわれようとしていることに強く反撥するあいさつをした。代表質問的な形で発言した知事たちも同じトーンで反撥したが、その他は開発志向型の発言、さらには過疎解消志向型の発言が目についた。建設大臣、運輸大臣がこうした陳情的発言の矢表に立たされていた。厚生大臣は生活保護等措置費補助の一割削減の概算要求をしている関係で詰問された。首相や厚相はその点予算編成審議の中で、知事側の要望に配慮を加えるということでお茶をにごした発言で問題をかかわした。それはそれとして、各自がほとんど開発志向型の発言で満足しているかのようにみえたのが、何か知事として割り切れぬ印象を与えていた。大阪知事が教育のことに言及したのは異色の部で、開発が県政であるかのような知事会の雰囲気は何とかならぬものだろうか。

9月13日(木)

ゆとりのない日程

うのみとか素通りという言葉があるが、今日はそのように、何を味わうわけでもない、かみしめることでもなく、又見てたしかめることもなく、ただ東奔西走して表面上の責を果たしたに過ぎぬ一日だった。「知事さんに出てもらわんといかん」…そんな要望がつもりつもって目白おしの日程がつづく。今日に限らずそのような日が少くない。朝、九州青年の船の帰港式があるのだから、他の行事は前後カットしておいてくれればいいのに、30分刻みぐらいに、あれもこれもというはめ込み方で、団服と平服を二度車の中で着かえることになった。九州青年の船団長としては最後の別れぎわまで現場にいて見守るべきなのに、さっと次の場に消え去らねばならない。次の場は野党懇談会で、こんなのは自前のスケジュールだから30分おくらせても何のことないのに、移動できるギリギリの分刻みの日程にしている。結果として、どれもこれも中座してしまい、次の日程のためということわりをしてしまうことになる。知事になりたての頃は可能な最大限という気持はあったが、もう、そうはしなくてもいいという気持になる。それに朝が早いのは普通のサラリーマンなら甘受できるのに、この年になってという抵抗がつねに湧く。

9月14日(金)

島野房一氏人事について

島野さんのことで太田薫氏から福岡県採用がきまらないなら別の途を決める方向を求めざ

るをえないので決意を促す旨の速達が先日とどいており、森山を通じ林県議に方向を打診していたが、どうもいい方向が見出せないとのことで、私の方から太田氏にことわりの書簡を出してほしいとのことであったので、今日それを書いた。同時に、強くこの件の推進を要望していた中川君にも電話でその旨つけた。島野問題は知事になって直後から大坪氏を先頭に私に投げかけられていたもので、あれから1年以上たっているだろう。いつも気になってはいたが、こういう人事は右から左へという調子にはいかない。庁内には根強い拒否反応があってそこをどうにかと思ったが、そうかんたんには空気はかわらない。林県議も島野氏に会い、人材と見て採用の途が開けないものかと努力してくれたが、島野氏がこの4月には都職員を辞職したようで、問題解決の見とおしがますます暗くなった。野党多数の中で名分の明らかでない人事を押し通すことの危険性を周辺の人は一様に指摘する。立派な人とはわかって、これではなくてはならぬという証明ができない。それに島野氏の方が事を急ぎすぎ、決定をせまってくる。それでは駄目になる。

9月15日（土）

敬老の日に思う

長寿者がどんどん多くなる。65歳以上が今9.9%の人口比（1194万人）、4年前の9.1%から又ぐっとふえた。長寿を祝して今年も桧原の真鍋さん宅に出かけたのだが、長寿が一がいにめでたいとばかりいっておれないのは確か。介護を要する老人、とくに寝たきり老人がぐっとふえている。医者は生かすことを至上としているから、そのことに全力をつくすが、それが社会的にどうなのかということとはまるで関係なさそうだ。第14回高齢者大集会在東京都体育館で開かれた。これには総評、中立労連系のOB（全国高齢者退職者連絡協議会）や地域の老人クラブ（全国老後保障地域団体連絡会）などが参加し、年々盛会である。長寿そのことではなく、老後の生活をどうして平安に送るかという問題に取り組もうというのである。年金、家族同居、就業、医療など、生きるための「たたかい」がどうしても必要になってくる。このことを抜きにしては長寿は決してめでたくはない。ボケ老人がふえているというのに、介護をどうするかとなると、あまりにも暗い見とおししかない。老人の日はそうしたことをみんなで考える日、そのための行動の日でありたいものだ。

9月16日（日）

ライヤ君の両親が来福

啓二夫妻がライヤの両親をつれてやって来た。両親ははじめての訪日で15日着。何もかも日本については珍しかろう。啓二は今年正月帰福するとの意向だったが、改築中のため、断念することになり、改築後は今回がはじめての帰省である。考えてみれば改築前であれば両親の受入れはこちらが遠慮したくらいだったが、その点助かったわけだ。今日の日曜は、私がたまに在宅していたといえるほどで好都合であった。長崎県と大分県・熊本県の二コー

スをそれぞれ一泊で案内する案を藤江君がたててくれた。二組の夫婦とみゆき運転の藤江の六人が一しょにドライブできる車をさがしていたが、辻さんという県職の人が都合よくOKしてくれ、藤江君の車と交換して使わせてもらうことになり、今日からそれを借りてきていて、板付までの出迎え、午後の市内ドライブに十分利用できて便利させてもらった。言葉が通じないのが残念だし、ライヤ君は通訳の心得が足りないので、不自由はないにしても腹一ぱい対話できないもどかしさを覚えた。知事にならなければ今年の夏あたりにわが方からフィンランドを訪問するはずだったのに、前後が逆になった。今度は是非といってくるが、何時実現することやら。

9月17日（月）

新さくら丸弓場船長のこと

「九州青年の船の船長を10年連続務めた弓場通義」という記事が西日本新聞に出た。先だつての新さくら丸を指揮してくれた人である。上海から天津に向う途次船内講話に熱弁をふるって青年たちを感動させたのだが、もう常連ということのようだ。奈良県出身で現在家族は名古屋にいるとのこと。59歳、なかなか男っぷりがよく、海の男そのものである。戦争の体験もあり、いろいろの船に乗り、世界くまなく寄港しているようだ。その経歴40年、板子一枚下は地獄という生活の連続で、家族だんらんには恵まれず、生死の境、水と星空、自然のやさしさと怒りの中で、やすらぎとたたかいを味わってきた体験を青年の船団員に1時間20分倦むことなく話してきかせた。青年の船OBたちはその話はもちろん、何日かの生活の面倒をみてくれた船長ということで殊のほか親愛感をもって、こんども是非弓場さんの話をというようである。国会選挙に出たらという人もあるほどに人気がある。話の最後を、生きがいの根底としての平和に求めたところなどくによかったと思う。船旅などする人がほとんどなくなった今日、新さくら丸という超豪華船は青年の船のような用途しかなく、専らそれに生涯をかけているようである。頼もしい人だ。

9月18日（火）

副知事人事をどうするか

1年半も副知事1人が欠員のままで過ぎている。そのうち半年はやむをえないとしても、あと1年は野党の反撥と当方の対応のまずさが原因である。12月議会、2月議会、6月議会と3回チャンスをつかみえぬままに過ぎた。しかし一歩ずつ前進はあった。第一林県議を中心に6月議会では社会党は一人3人ぐらゐの野党工作をやってくれた。それは今日なおつづいているが、6月議会では9月には何とかしようという裏約束まで取りつけるまでに事態は進んだ。ただ、自民党内には副知事1人を作ってしまうと、奥田体制が安定してしまうということだけの理由で反撥する空気が強く残っている。もうそろそろ仕方がないという空気と半々といえるほど、高山、篠田など山崎派を中心になお強い奥田反対の抵抗組の影響があ

る。緑政連にもそれがあつて、関和虎、坂口勝弥、井上勝がそれ。それに一般的には高岡新ほか自民党の一年生議員は反対で勢いばむことに使命感をもつ連中が多く、この仕末は困難といわれる。今日「かわさき」で林県議らと対策を協議したが、副知事の永井氏その他部長らにも根まわしをたのむことになった。室長も動こうとしている。一年生議員対策が一寸むずかしいのではないか。ルール通りではいけないからだ。

9月19日（水）

自治労のスポーツ大会

自治労の職員バレーボール全国優勝大会があるので前夜祭レセプションがグランドホテルで開かれ、出席してあいさつした。知事紹介ということが地元自治労の一つの目玉といえるのかも知れない。「革新」知事をとったからとて、目にみえての組合側の利徳はあらわれないけれど、それだけ精神的に陽の効果はあるようだ。それはそれとして、この種優勝大会はソフトボールもやっており、前者は女子、後者は男子ということのようだ。詳細はきかなかつたが、全国から選抜されてこのようなイベントをするにはどこかでかなりな金銭負担がかかるようだが、小耳にはさんだだけでも自治労がこれに4000万円出しているとか。今日組合活動が沈滞気味といわれるときに、こうした催しは効果があろう。とりわけ近頃の労働組合は、古い指導者と若い組合員の間には意識のへだたりが大きいということを念頭において運動を進める必要にせまられているからである。理論のひとり歩きを戒め組合員の情緒を重んじた指導が問われている。自治労福岡県職はマラソン会をやってもいる。大濠一周である。これもその意味からよいことと思う。

9月20日（木）

商工会婦人部が期待される

郵便貯金会館で県商工会連合会婦人部の総会とレセプションがあつて出席し、総会ではあいさつだけでなく、踊り（アトラクション）につき合わされた。踊りなんて全く苦手なのに赤面の至りである。総会後のレセプションは全国からの役員も加わつてであつた。商工会は中小企業の商工業者の集りである。中小企業、農漁業といえれば婦人たちは自家経営の中での労働者である人が圧倒的に多かる。もちろん労働者一般の家庭でも婦人は単なる主婦ではなく、共働きあり、パート主婦も少くない。だとすれば、こうした働く婦人達はそれなりの立場からの主張があつてしかるべきで、そのための組織をもつべきであろう。そのことについて今日も言及した。商工会の婦人部は7千人の会員といわれるが、農協や労働組合とくらべ、組織力がまだ足りないのではないだろうか。商工会婦人部の人達は会員をふやさねばならぬとはいいいながら、労働という意識は乏しいようだ。農協婦人部の方がその点若干なりとも進んでいる。商工会の婦人部もこれからが活動を期待されるだろう。大坪商工部長が、あまりおだて上げすぎると、県の予算をつけなければならなくなりますよ、と半ばよろ

こびながら私にいった。

9月21日（金）

昨年の九月議会のはじめを思い出す

九月議会が始まり、今日、議案の提案理由説明を定刻におこなった。昨年は朝日新聞に乗せられて九月議会のはじめから新聞記事をめぐるさわぎがおこったのを思い出す。悪辣な記者、記事ただけにやり場のない憤激を覚えたものだ。自民党が待ってましたとばかり議会のかきまわしに出た。それ以降朝日新聞は私に近づかなくなって今日に及んでいる。向うも悪かったと思ったに違いない。今ではどの報道機関も、事あれかしと私に近づくことはない。むしろ何もなかったかのように、淡々としてものをいう。ただ朝日の記者が特別に私に話しかけてくることはその後絶えてない。数日前ソウルから広崎のはがきが来た。内容は特別のものではない。が RKB の記者として朝日新聞以上に奥田知事に問題を投げかけ事態をかきまわした男である。昨年の11月以降ソウルに派遣されているようだ。何故今頃に彼から何でもない便りが舞い込んできたのか理由はわからない。自民党県議べったりで情報意見を交換しながら活動している記者が少なかったのは確かである。県職員の中にも、幹部で、事あれば直ちに自民党に進言するのが今でもかなりあるときく。

9月22日（土）

ひめじ後援会一行の来福

奥田八二ひめじ後援会バスツアー一行が今日福岡に着いた。県庁に 7:30 到着というのに 6:30 に電話がありもう着いたという。早朝から、いわば大さわぎになった。九一が連絡係みたいだったが、世話係は田中孝市議と小林連秀の両人とされている。選挙のとき、同級生の寄せ書きをして応援にかけつけてきてくれた吉田繁太郎君がいたし、前田重男先生もいた。姫路市営バスで関係係員4人をふくめ一行は51人。8時頃からスケジュールに従い、キングで朝食、のち、歓迎と交歓のやりとりをし、知事室に来て写真を三班に分けて撮影した。議会棟はじめ知事室など森山君が案内役をつとめてくれた。市内では舞鶴城跡や日本庭園など、うまく説明してくれ一行を満足させえたらしい。朝食会は県民の会の米倉氏がバックしてくれ、私もみゆき藤江の二人も参加したのだった。一行は太宰府天満宮で中食をとり、高速道路を利用して八女を経て、柳川に入り、白秋記念館、川下り、そして柳川簡易保険保養センターに泊るという行程である。昨夜10時に姫路駅発、刀出を10時20分、山崎インターから山陽高速で車中泊という強行日程である。明日は大川、佐賀にまわって、午後10時姫路駅着とのこと。

9月23日（日）

秋分の日に思う

休みというのに、今日も明日も公式行事で出勤である。そうならないように努力していると秘書はいうが、あと一步勇断をもって行事出勤を整理してほしい。誰しも休日に行事を集中する。だったら平日に休む時間がとれるかというのと、それはほとんどできない。知事は年に10日も休めたらいい方だという人がいる。市長や町長も似たりよったりらしい。今日も直方で直轄地区労の人達と中食したとき、「健康法は？」ときかれ、別にないと答えた。それは時間がないということと、常に監視され護送されているみたいな身なので体操その他類似のことをしにくいということである。室内で、自宅で何かすればいいが、面白味のない運動はなかなか持続しにくい。かなり強靱な意思をもって自宅で運動をつづけることが必要だろう。ところで今日は秋分の日。凌ぎよい時候であることはもちろん、これからしばらく最良の日々がつづこうが、今日は一時むし暑かった。筑豊への途中、たんぼを両脇にみると、一せいに彼岸花が咲いているのに気づく。稲穂が波打つ光景も気持ちいい。こうした田園風景に出くわしたのが今日の第一の収穫である。車から降りて彼岸花を摘み取りたい気持ちに駆られたが……

9月24日（月）

フィンランドの客帰る

朝8時藤江君の車で啓二ら4人が帰った。新幹線で京都に寄り、できれば今日中に東京に帰着の予定という。ライヤの両親は言葉が通じない不便さはあったが、フランクで遠慮すぎもせず、扱いやすい夫妻だと思った。父親の方はみやげに買ってあげた男物博多織帯が、私には二度ちょうどまわるのに、彼には一度しかまわらぬほどに太り、見物歩きもやっと他に追従するというほどに小まわりできぬ体躯である。ずっとしゃべりつづけているようにみえる。発言内容はわからないが、政治の話が好きで、そうした話題を彼から進んでしていたらしい。藤江君運転の車の中でも彼は何かをいいつづけていたという。それほどに話好きなのである。ライヤが通訳するのに困惑していた。母親の方は終始にこにこ顔で人好きのするタイプであり、かつひかえ目にみえる。二人ともうちの台所にも憶せず出入りし、親しみが感じられた。日本は大きいと彼等は感想をもらす。都市の規模、企業活動、商品集積、人口雑踏などに関し、そのように感じたらしい。フィンランドの森と湖の自然的雄大さについては想像を絶するが、是非来いという。知事である間には行けそうにない。彼らには別府、雲仙、阿蘇、温泉はよかったらしい。

9月25日（火）

筆墨のチャンスが多くなった

近頃は揮毫要請を快く消化するせいか、依頼が実に多い。姫路後援会訪福バスツアー団に50枚、直方地区労に20枚というふうにここ4～5日だけでも大変な数。それでは決しておさまっていないで、積み残しがある。それに今日は県評から武漢訪中のみやげと称して条幅の

連をたのまれ、議会との関係もあって、今日しか書く時間がないということで、午後8時頃に帰宅してから早速揮毫にかかった。四面有山皆入畫、一年無日不看花(祝允明)を書いた。180cmの長いものだから墨もたくさんいる。藤江君が例によって墨すりをやってくれ、寝る前にやっと思きあげたほどである。それに最近はおちこちに手紙を書くとき、筆墨で書くようつとめている。これがまたかなりの数にのぼることになっている。墨字の手紙はとくによろこばれるから、それを念頭においてできるだけ多くの手紙を書くことにしている。ここ3日間で7~8通書いただろう。筆墨の手紙などはじめは面倒だと感じたが近頃はそうでもなくなり、だんだん面白くもなってきた。書きすぎかなとも思うが、とにかくやってみよう。何の抵抗もなくなる時がくるだろう。

9月26日(水)

議会工作の宴会

こんどの九月議会では副知事人事が焦点である。そのため従来は社会党が野党工作をしてきたが、執行部の動きがないのはおかしいと野党から注文がついた。そこで……というわけで、野党各会派を宴席にまねいて工作しようということになり、昨日は正副議長、今日は自民県議員団役員、緑政・公明・民社を後日というふうに、宴席をもつことになった。おかしなことではある。知事が頭を下げて多数野党に頼んでまわり、飲ませ食わせで何かをする。又時にできないかも知れない。議員族は偉そうに思っている。救い難い状況に自分がおかれていることに気づかないであろう。他の野党はまだまだが、自民党には低俗な議員が多く、そんなのほど威張りたがる。篠田栄太郎などその一人ではないだろうか。緑政連の関和虎も同類で、私に敵対することに使命感をもっているかに見える。明日から代表質問が始まる。橋詰和元が今回の自民代表質問者だが攻めに急で、どぎつい言葉を使って知事攻撃すれば内容はどうでもいいといった質問を用意しているのが現状である。何をいいたいのかわからない質問文だが本人はわかっている積りのようだ。たいがいにしてくれといいたい。まあ、おおらかに対応するが勝だろう。

9月27日(木)

深山喜一郎君のこと。

衣笠君からの連絡で深山喜一郎君が倒れたという。早良病院にかつぎ込んだとのことだ。25日だったか、そこで2日、脳手術のため北村教授(現医学部長)にたのんだという。動脈瘤を摘出することで大手術になる。教養部長2期つとめ、化学の立田氏に九月一日以降あとを譲ったばかりだった[学長選挙の候補にもなったが、田中健蔵氏が再選された]。深山は県出納長近藤栄次郎と陸軍幼年学校で生活を共にしたことがあるとのこと。近藤氏には深山のことを伝えておこう。法律とくに労働法なかでも公務員法が専攻分野で、九大が新制になったときの第一期、28年卒業組で私が第三分校にはじめて赴任にしたとき社会思想史の

試験は大変いい成績だったといていた。カンパネラの「太陽の都」をレポートに書いたとのこと。九大学生紛争のとき、とくに教養部の学生会館紛争の時は、大いに活躍し、そのあとイギリスに一年留学し、私がロンドンウェンブリーパーク駅近い彼の下宿のあとをそのままひきついで借りた関係がある。彼はその点私の先輩だと飲んで高言したものだ。脳手術の結果どうなるか、又後遺症のことも心配である。

9月28日（金）

引率者責任の過剰攻撃

民社の豊沢一男が代表質問で田中耕介教育委員長にかみついた。秋田県で行われた私立高野球大会に出場した県出身の高校生が試合後かくれてビールを飲み、ひとに迷惑をかけたということで生徒は出校停止や謹慎の処分を受けたのに、引率の教師は「注意」ですんでいるが、これはなまぬるい処分だというのである。なまぬるいから生徒が飲酒する、先生の責任であるのに、というのである。教委では豊沢の質問にやむなしと答えている。私の感じでは、豊沢の過剰介入とみる。処分の内容にまで一々文句をつけ、先生の処分が軽いから非行がおこると短絡する発想はためにする一方的な論法で、何か下心があるように思えてならない。処分至上主義というか、教師いじめでもあろう。県議というものはこのような横柄さがあちこちにある。自分を棚にあげてでも相手を攻める。引率者責任を問うという世の風潮がいま全盛である。新聞マスコミ、裁判所の判決がそれ。これは公務員攻撃にも通じている。父兄の甘えでもあり、その甘えが助長されている。豊沢もその片棒をかついでいる。傍聴席に支持者が来ていてスタンドプレーをやったのかも知れない。引率者の監督責任ですべてを片付けようとすると、引率者たるの希望はなくなろう。教育熱を冷却させることにも通ずる悪質な傾向でもある。

9月29日（土）

橋詰県議の自治意識のほど

代表質問を終わってみて、自民党の橋詰和元が一番つまらぬ質問者と思う。名からして昭和元年生まれだろうと思って県議会便覧をみたら案の定そうである。土建屋社長、当選一回、福岡高工卒、城南区の選出である。私が県独自の行革といているのにかみついて、中央の行革にしたがうべきだということで、三割自治といわれるから7割の部分については中央の指揮に従わざるをえないこともあるが、あと3割は福岡独自でやる、それは佐賀のまねでもなければ大分のまねでもない、と私が説明したら再質問に立って、3割とはどれとどれか具体的に示せといった。本を読めばわかると私が答えたら二の矢をつがなかつたが、西日本新聞では、本にからませてか、「やっぱり学者知事」と早麻清蔵県議がいったという。これも自民党である。いう方もいう方、書く新聞も新聞、「学者知事」はもちろんヤユ用語である。この連中、三割自治の概念を知らないし、自治の思想も当然にもたない。困った連中が県議

会の絶対多数なんだから、福岡県政がよくなるのに大きく障害をなしている。土建屋がいけないわけではない。が、三割自治とか自治についての思想がちゃんとあって、県議になってもらいたいのだ。

9月30日(日)

男子立志で郷里を捨てるのがよいだろうか

所望されて、少年易老……の揮毫をした。墨が余ったので男子立志……も書いてみた。この両方ともどうも説教がましいし、古くさい感じがする。前者は朱熹の偶成詩という。後は出典を忘れたが確か日本の近世のものだ。明治初期から大正・昭和初期にかけて海外進出をバックに考えると、さもありなんと思う。郷里を捨てて出て行く必要があったのであろう。むしろ郷里を愛し郷里に骨を埋めて満足できるようにした方がいいのではないか。しかし残念ながら、政治家にしろ、文学者にしろ、絵かきにしろ、やっぱり名をあげた人は郷里を捨てている。だからこういう漢詩が生まれたのであろう。白秋にしろ、牧水にしろ、葦平にしろ、その他歌手も学者も、政治家はもちろん、東京へ、東京へと靡いていった。東京で名をなさないで地方では名が出ない。そして地方では収入にならない。だから男子立志ということになり、それは東京を活動の拠点として、そこで全国に名を売り、活動して収入が得られるという仕組みになっている。その仕組みに抵抗しても所詮何にもならないようになっていく。だのに私には古い感じがする。

10月1日(月)

白井正先生のこと

白井正先生が昨日亡くなられたことが、赤旗記事に出ていて登庁して知り、教養部に連絡してみたら誰も知らず、今日密葬というので、みゆきに行ってもらった。選挙については大変お世話になった。柳川の県民の会のまとめをして下さり、不自由な足を杖でかばって公民館での大集会に来て下さったのであった。第三分校時代からずっと一しょに九大教養部に勤務したが、徳永先生(故)と共に社会科の長老であり、教養部全体の開設時の重石の役を担われた。組織化時代であると共に、学生運動もたえることなく、いつも問題解決の任にあたられたように思う。ものやわからかで自分の意見をすぐに出されなかった。人の中にあって協調的であった。とくに学生には温厚、理解のある方だった。憲法の講義をされていたが、学問論はあまりきいた事がない。平和と民主主義の筋は頑として一本通しておられたのは確かである。私より20年先輩で、平和運動に、そして原爆反対の運動にまっすぐに突入された。退官されて後20年余になるが原水禁運動の先頭に立っておられた。どちらかといえば共産党系、いや共産党員だったかも知れない。共産党系の原水協、学者グループの代表の一人といったらよいかも知れない。それはそれとして、白井先生の人柄には多くの人達が敬慕していたことは間違いない。

10月2日（火）

これからの県政課題

昨日今日 2日間の九月議会一般質問が終った。自民党にまだ意地悪な質問をする者がいるにせよ、一般に質問の空気がひどく建設的というのが今議会の特徴といってよかろう。ローカル線問題と来年度政府補助金一割カットはどうにも頭の痛い問題で将来に尾を引くだろう。ローカル線など政府国鉄が廃止するというなら、こちらで独自に対応しようにも地方予算の貧弱さでは対応できる問題ではない。車社会になり、国鉄がやる気をなくしているのに、生き残れないわけだ。政府の補助金カットは県下で203億円の影響が出てそのうち69億円が県、他が市町村の負担増になるといわれる。仕事をするなというならわかるが、負担転嫁でいこうというのだから、地方いじめというしかなく、福岡県は生活保護、失対など全国一のシワ寄せ部門をかかえている。これには議会の答弁のしようがない。自民党は奥田支持基盤が困る政策なら小気味よく受けとり、どうするんだ、それでよいのか、何とかせんとせまってくる。只今はその論戦の時機でないから平穩のようにみえるが、これからが大変だろう。県立病院の赤字もこれからの大問題。自民党は人べらし一辺倒で突いてくる。行革審の小早川久山町長がそのチャンピオンだ。

10月3日（水）

「学者知事」臭がぬけてないとの記事をめぐって

西日本新聞の南氏が来訪。先般の国際センターでの先端技術フェアは10万人からの入場者をえて大成功で、知事が来てくれて大変よかったと礼をのべてくれた。先端技術ばやりである。今議会でもかなりの議員から県の対応につき質問が出た。それにしても今日の総務部長のいうには、3割自治論が問題視されているとか。代表質問の冒頭自民党の橋詰昭元が県独自の行革とは何かと問い、中央がやることに従えと攻めてきたので、3割自治といわれるその3割については県独自の責任で行革をするのであって中央の指図でもなく他県のまねでもないと答弁したら再質問に立った橋詰が、どこが3割かといったので、それは今一々答えるひまがない、本をよめばわかると答えた。本をよめばわかるとはぶじょくではないかと聞き直りを策しているのが自民党。その知恵つけをして煽動しているのが江口利雄らしい。どれもこれも低級ではないか。くちびを切ったのが早麻清蔵のように新聞には出ている。何が何でも一もんちゃくしないとおさまらないというので西日本新聞が書いた「学者知事」評を利用して、やや冷えた頃になったのに、それをもち出して一発知事を、多数をたのんでやっつけようじゃないかということのようだ。

10月4日（木）

読売新聞のこと

予告もなかったが姫島の小学校の子供たちが知事室に訪れた。二人の女先生、3人の子供、

男2、女1、4年生という。どうして今時にと不思議に思ったがこれで4年全員という。社会見学に来たのだそうだ。全校生徒が17人で先生が7人とか。たしかその程度の数との説明だった。戸数は50戸余り、全部が漁業という。義務教育ということで、これは手厚い感じがするが、どうみればよいのだろうか。学級ゼロの学年もあり、複式クラスでやることもあるとか。きいていてこの世のものとはいえぬ感じであった。他方、ひるの時間に読売西部本社発刊20周年記念式典(ニューオータニ)に出席した。発足110年の読売新聞は今や887万部を発行。そのうち80万余を西部本社で出している。東京で500万、大阪で200万台、それに北海道支社が加わる。朝日新聞が官報のような性格をもつのに対し、読売は週刊誌的な性格をもっている。それにジャイアンツ球団と手を携えている。新聞が大衆化すればするほどこの連携で有利な地歩を築いていく。江戸時代に、読売かわら版というのがあったので、それをついだ形だったという。朝日を抜いた読売の基礎はまさに大衆的の一語につきるだろう。夜は、やま祢に副知事、市長、助役らと招待されFBSの安浪社長もあわせ、小林社長にごちそうになった。

10月5日(金)

知事発言取消し

自民党県議の知事発言狩りがピークに来た。何かひっかかってやろうというので三割自治……本をよめばわかる云々について、今日の条例、予算両委員会では冒頭私の答弁取消しで一日「空転」がようやく軌道にのった。新聞でも私の発言をゆがめて報道するのだから、自民党がゆがめて解釈するのはむしろ当たり前で、そういうきっかけになる発言をする方が悪いとの結論になる。まさに多い方、力の強い方が勝ということである。与党が多ければ自民党の「ごね、ぐらひは説明だけで氷解するのに、少数のゆえに、取消しにまで発展し、点数をかせがせることになる。文脈をたどればそういつてないことが明らかなのに、余分の解釈をつけてそういったということにしてしまう。今日、問題になった県立病院の「のんべんだらり……」県費依存発言にしても、私は決して職員がなまけて勤務しているといっていないのに、新聞がそういったと書き、大衆がそう受けとって、自民党がそれを背景に「職員がのんべんだらり勤務している」と知事がいうとは何事か、発言を取り消せとせまってくる。少数与党では突っぱねることができず、この部分の発言は取消すことになる。これでは審議の進行にならぬ。

10月6日(土)

身辺整理ができてない

書斎に入って机辺の整理をはじめたら揮毫関係だけでもいかに平素いい加減に突っ込んでいたかがわかる。書きつぶし、下書きの紙は惜しみの心が動いて、なるべく取っておいて使おうとするからたまる一方だ。それに、郵送されてくる雑誌、新聞の類が捨てきれずにたま

っている。県の資料、行事資料も捨てきれぬものが積んである。手紙類をどうすればいいだろうか。名刺もどんどんふえている。ほんとうは部屋がもう一つほしい。先日飛鳥田一雄氏が来て向坂文庫の話をしていったが、マルクス関係の本はそんなのに寄付してよいから、本を少くしていく方法もある。毎日が多忙なため、書齋が完全に私の身辺雑品の物置になっている。やむをえないのかも知れない。年末も近いので年賀状のことが気にかかる。住所録はふえるばかりで整理がついてない。県民の会その他からも出すので、ある人は暑中見舞が3通も来たといっている。誰かがやってくれればいいが、誰しも片手間と、その辺にある名簿を横にアルバイトにやらせるから大変な無駄がある。重複しないようにするには統一された事務局をもたねばならないのだ。それらを思うと気が重くなる。

10月7日（日）

安楽に死ねるならいい

深山の奥さんから私の見舞状に対する返礼の電話があった。岩元、都留、田中（光夫）の3人も夏には入院していたが、退院したとの連絡があった。元気に快癒したのならいいが、みんなすでに老境。岩元、田中は大手術、都留は手術できないまでに悪いという。白井正氏は4ヵ月もの入院後先日他界された。向坂先生も大そう悪いということで、毎日新聞が、私に若しかの時の用にコメント（400字）を書いておいてくれといってきた。身辺かくの如しであって、何時わが身かと思うと、それでも案外平気なもんだと感じ入る。人間というのは、他を見て我を反省するのだが、意外と楽天的にできている。危険がせまっても気に止めないし、あと2年、5年、10年とわかり切っても、さらには、あと1ヵ月、2ヵ月と迫っていても最後まで楽天的に死を深刻に考えないのではあるまいか。治癒すると思いついでいるに違いない。深山のように、急に意識が遠くなる人もある。私もそうになって、そのままあの世に行くといいと思う。そういう安楽な死に方で選択できるのであればそれを願いたい。年をとっても政争に身をやつしている人はうらやましい。田中六助氏がそうだという。

10月8日（月）

歯痛の治療

昨日一日、そして夜の床の中でも、右上奥歯（3本目）が痛かった。夜中にそのため目がさめる程だった。今日の朝、中食は十分に噛めなくて食物をのみ込む程だった。2時半に歯学部を訪ね村上先生から治療をうけた。なるべく抜歯は避けたかったのでその方向でみてきたが、ダメだろうか。それでももう一度痛みを止める努力をしようといって、痛み止めの処置をし、投薬してくれた。どれもこれもガタガタに動いているのだが3本目（一番奥は抜歯済み）がとくに痛みはじめたわけ。このまま痛みをおさえてなおるなら、抜歯は避けたいのはヤマヤマだ。若い時の歯の治療ではあまりにも安易に抜歯しすぎたのではないだろうか。

町医者は、抜いて義歯を入れて、それで利益があがるだろうからそうするのではないか。今日は健保の改正で10月以降費用の一割患者負担(健保本人の場合)制導入のために取られたが、それが60円。だから600円の治療費である。抜歯、義歯でどのくらいかかるだろう。600円は痛み止めのカプセルとウガイ薬(2本)をふくむのだから、安いと思う。重度身障者や母子家庭のことが県庁でこの一割助成として問題になっている。

10月9日(火)

自民山崎派の知事にあてた照準

奥田県政を何とかつぶしたいとの執念をもやしつづけているのが自民党県議の中に根強く残っている。昨年のスタート時ならともかく、今になってもそれが消えない。私の議会答弁のあげ足をとって陳謝にもっていくため特別委員会あたりで片言双句を問題にしてごねるのもその気持のあらわれだが、これは大問題に発展することを期待しても一寸無理であることがわかっているからそこまでの期待はないのではないかと思うが、ひょっとしたらの期待があるに違いない。今議会では橋詰、それに火をつけた江口、それから水戸。しかし副知事問題(教育委員長の任期満了にともなう補充問題も加えて)をたねにぎりぎりまで抵抗しようという分子が、あれこれ理由にならぬ理由をこねまわして解決を妨害している。高山、篠田、関あたりが今さかんに動いているらしい。自民党内でも遠藤、山崎という国会議員に密着しているのが、その点たちが悪い。近頃遠藤派はやや軟化したかにみえるが山崎派が執拗のようだ。何のうらみもないが、次期知事候補擁立のイニシアティブを取るねらいがある。候補をもち、来年の六月頃議会解散選挙、次いで知事選をと考えている。

10月10日(水)

身辺雑感

藤江君が尻にできものができて動かれぬほど痛いらしい。若いせいとかカゼをひいたり、時に故障をおこす。われわれ年輩の方がかえって強いようだが、そういう私の方も、近頃は歯科にかかっているし、糖尿でいつも薬に頼んだ生活である。毎日血糖を下げる薬を朝一錠のみ、ビタミンE剤、滋養剤など方々から頂いたものを服用している。考えてみると、知事職なんて激務というしかない。他から強要された日程で毎日動いている。故障だと主張すればそれなりの処理がなされるのだろうが、そうでないと秘書の方で目一ぱい組んだスケジュールの通りに動くしかない位置にある。とくに議会のことになると、議会の動向にあわせて、ふりまわされるように動くしかない。議会は、こちらからみていると、勝手気ままに動いているようにみえる。実に馬鹿らしいポストではあるが、一般には逆に、知事さんというと実に高貴にみえるらしい。一しょに写真に写ったりすると光栄だというし、色紙など書いてあげると大そうよろこんでくれる。今日も岩崎隆次郎が来て、何枚でもどンドン書いてあげてくれという。私はそれに甘んじようと思う。名田重喜氏から松茸を送ってきた。

10月11日（木）

島野氏のこと

さきの日曜日に岩崎大坪の2人が来宅して、東京の島野氏の件再考の余地はないかというので、もちろん考えてもいいが、近藤氏と林氏を介して再度あたってみたらどうかと提案したらそうしようといって帰った。今日近藤氏にそのことをいってみたら、あの件は島野氏が都を辞任してしまっているので、不可能に近いという。私もそのことを岩崎らに伝えておいたわけで、そうなれば岩崎が近藤に会ってみても仕方がないことになる。返事は同じなのである。都職員としているなら割愛という方法もあるが、一般者を採用するには採用試験が必要だし、特別に採用するには議会にかけざるをえないこともあるという。「どうして突然にやめてしまったのかな」と近藤はいっていた。いくら立派な人でも、こちらがいる人でないのに、立派だから採ってくれといわれても困るのだ。腹が痛いときに、このごちそうはおいしい逸品だから食べといわれるのに似ている。そういうことをもう少し考えてくれないと困る。太田薫氏が大そう重視している人物で太田氏の顔をつぶしたくないのだが方法、手順、時を考えてほしいのである。

10月12日（金）

篠田栄太郎の県議団指揮の力量が問われている

篠田栄太郎が自民県議会議長の立場と山崎拓派の筋から副知事問題で采配をふっている。今日終る予定の九月議会がこれという理由なしに、審議に遅れが生じ、3日間の会期延長を決めた。昨日、今日、委員会審議はマスコミを意識した手前、夕方5時すぎてから一寸形ばかりやって終わった。副知事問題で篠田が43人の自民議員をまとめる力量が問われているが、まとめようとして努力する形跡はなく、彼の独断にもと^づく当方へのあたりちらしだけが目立つ。野党各派はそれにかなり不満のようだし、自民内部でも篠田の威光は通りにくいようだ。この問題がどう結着するかは、数日先のことはあるが、篠田のやり方には多分に疑問が残る。戦争というものはむずかしい。当面劣勢でも勝ちの戦いはぐんぐん押し、敵をひるませ味方を鼓舞するような指揮が必要だが、よくないなら、折を見て三十八計逃げるに如かずということになる。篠田にそれがわかっているかどうか。彼には不利とみた時和議にもち込む術もなさそうで、突っ込む一てんばりなところがある。但し、今の情勢をどう読むかであるが、篠田の自民県議指揮には無理があるようだ。

10月13日（土）

県産品愛用の中から伝統の、人間と自然のかかわりの再発見ができるならなおよいだろう10時から太宰府天満宮の境内で県産品愛用強調週間（8～14日）の最後を飾る「ふるさとフェア」が開幕された。テープカット祝辞のために出席した。例によって例のごとき品々が陳列され参拝客に売るのがだが全県約260店、思うに、宣伝の方々、包装の方法など、流通

過程に工夫がいるのではないかというのが従来からの私の持論である。県がこの方面に肩入れしようというのも宣伝の援助をしようという意味をもっている。それから私が強調している県産品愛用のもう一つ他の側面がある。それは一つは雇用増だが、そのほかに、伝統のよさを認識し、そこに郷土愛をはぐくもうという点である。今日午後第11回合成洗剤追放全国集会が国際センターで開かれその時私のあいさつの中で県産品愛用にふれ、伝来の食品の中には、人間と自然との確かな融合があったはずということを見つけてほしいとの願いがあるといった。合成洗剤というような利便さにすぐとびつく、新製品にすぐとびつく、それもいいが警戒が必要。それと同時に先祖伝来のものの確かさを再認識する必要があるだろう。

10月14日(日)

品位の低い自民党県議

FBSの放送で自民党県議が知事の一寸した発言に揚足取りをして県議会を渋滞させ、県民不在の県議会の運営になっていることを非難する放送があったと、食食をしながらのみゆきの話。放送は、知事の発言取消しを会期ごとにせまり、知事の無能力さを県民に印象づけようとしているともいったとか。全くその通りである。FBSは近頃私の方を向いてくれるようになっている。読売小林社長と先日宴席を共にしてから(西部本社印刷20周年記念に際して)であろう。その時FBSの社長も同席だった。みゆきはいう。自民党が揚足取りするなら、知事も自民県議の聞くにたえない暴言について陳謝をせよとどうかと。それができるなら苦勞はいらない。議場では多数者議員はオールマイティで暴君さながら。どんな発言でも罷り通り、知事はどんな小さなことでも因縁づけされる。"眼つけ、にたけた彼等"である。議会の品位は下がる一方だが、彼等はカネだけがすべて。品位も知識も礼儀もあつたものではない。自民党政府のすることが問題となる時でも奥田が悪いとなる。亀井16年間の積悪についても同じである。

10月15日(月)

大詰めを迎えた県議会

県議会は再度延長された。夕方になってやっと両特別委の知事保留質問に入った。議員も飽きてきたのではないだろうか。質問者の数はぐっと減少し、条例の方は井上勝、高岡新の2人だけ。予算の方は江口、北原、武藤、古賀の4人で、いずれも質問内容も簡約化されたものであった。高岡、江口は相かわらずの口ぶり。しかし巻きつくようなこともなく、まずは疲れるようなことなく、答弁が終った。残るは明日一日で副知事人事がどう展開するか、これだけは一寸先が暗とでもいえそうな空気。こちら辛抱くらべでいくより仕方がなく、野党(自民党)もいい加減くたびれて来たように思える。篠田会長が自民党の大部隊をまとめきれないでいるため、浜中前会長が出てきたとかいわれる。奥田県政を安定させるなどの相

言葉で副知事人事をもつれさせていた自民党だが、所詮銚をおさめて形をつけるほか方途がないのではないかと観測されはじめた。たたかいたいなら又出なおして別問題で勝負するようにした方がいいと私も思う。勝負は一回限りのものではないから、今回の副知事問題へのこだわりはもう幕引きの潮時だろう。

10月16日（火）

劇的な人事結着

午後12時近くになり、県議会は人事問題をふくめ審議日程を遂に終了にこぎつけた。人事のピークはもちろん副知事問題だった。それに近藤をあて、出納長に生じた穴を秘書室長の林であて、秘書室長は後日にまわした。教育委員に田中氏を再選することについては嘉飯の自民の拒絶するところとなり、野見山を新任することでケリがつけられた。人目は近藤に向き、その後補充の林に向いた。鍋山には自民の内部の異論を無理におさえつけてしまうのは後日のためによくないということもあって当初予定していた鍋山をついに諦め次善の案として近藤出納長を振替えることで切り抜けることになった。自民は鍋山をおろさせたというだけで面子が立つをかかえている。こちらはその面子を無視して自民党内に強いて亀裂をもち込むことは避けねばならなかった。そのかわり、社会党及びそのブロック、さらには鍋山の線で合意をとりつけてきた自民内の人達、緑政連、公明、民社の面々を急遽裏切ることにならないかの危懼はあった。林幹事長の腹一つにまかされた。前週金曜にはその線もやむなしとなっていたが、一般にわかりかけたのが今日の4時。林室長は直前まで知らぬままで動いていた。

10月17日（水）

元気が出なかった大阪での企業誘致行動

眠い眠い一日だった。少々の寝不足が大変たたる。昨夜今津の鍋山邸に、林、山北両県議と同道し、副知事人事で大変めいわくかけたことをお詫びして帰宅したら二時近くになり、今日は八時出発だからかなり無理があった。新人事の発令をしてから大阪に行くことになるからだ。この遠出というスケジュールが早出を促すことになる。運の悪いスケジュールのめぐり合わせというしかないが、県議会の延長、深夜審議の余波がこのような無理を強いたことになる。今日は大阪での企業立地説明会と企業立地推進委員会の二つを福沢大阪事務所長の準備にしたがって消化した。よそに行ってその地の企業を引き抜く話みたいになるせいか、地元の人達にはよい気持を与えないのではないかと印象が残った。議会の疲れもあってか、同行の永井副知事も両手を腰にあてるようなシーンがしばしば見られ気の毒にさえみえた。午後八時前に大阪のスケジュールは全部終ったが、あと誰も元気なく、準備されたホテルの各自の部屋に引きこもって氣勢があがらなかった。私も早目に寝た。

10月18日(木)

県三役新人事の小さな余震

名古屋での用件をすませてとんで帰るように県庁に戻ったが、議会終幕の昂奮はまださめてないようだ。第一、秘書室長が空席のままなのと、林出納長の出現自体、本人も周辺の者も狼狽というほどの状態である。秘書室の面々は、近藤副知事林出納長の秘書との顔合わせの意味も含めて、後者の送別、両者の祝賀の会を夜、稚加栄で開いた。大相撲九州場所の優勝者に今回から知事杯を出すことになって、その関係で知事に今晚の御免祝に出席せよというので出た。先発隊としての諸事務を総括しているのが元清国関で、彼と握手してみたが、東京県人会で大潮関と握手した時と同様、当方の小さい手はまるで赤子の手みたいだったろうと思う。このご免祝をそこそこに稚加栄に顔を出し、ここもまたそこそこに、次は「かわさき」に行った。近藤、林の2人もここに移った。程なく社会党の林県議があらわれ、4人でこんどの新人事に関し、県議会をめぐる県下各方面にいつ、どう仁義をきるかの相談をした。とくに社会党、県評、共産党方面も大切ということだった。又秘書室長の後任についても考えうる候補が出された。

10月19日(金)

多忙、多忙

曇り空がつづいている。そしてかなり蒸暑い。毎日なぜこうも多忙なのだろうか。少しは私的な時間をくれないと馬鹿になってしまうだろう。夕方のニューオータニでの国連運動全国大会のレセプションで横にいたご婦人が老後は主人に静かにゆったりして暮してほしいと強調していた。世のため人のためとは立派な言葉かも知れないが、それはきれいごとだろう。命あってのものだねとか、体が資本だとかいうが、それは全部自分が基本ということなのである。真空恐怖という物理原則があるが、秘書室は防戦つとめているようだが、隙さえあれば3分5分とねらってスケジュールを組み入れてしまうようだ。うっかりするとトイレにもいけない。だがこれは自然の催促があるので、何とか充たしている。機械のように動くなりたいが、そうばかりではいけない。自分の判断がどうしても必要なことが多い。何のために生きているのかなと思うことがしばしばである。ひとの役に立っているといううぬぼれがあった方がましなのに、そう割り切れない。知事の仕事は面白かろう、面白いはずと人はいうし、面白いといえとさえいう人がある。そこまでいけないのだから愚痴をこぼすことになる。

10月20日(土)

社会党ブロックと県三役

県議会が終わったら、三役もはじめて揃ったことだし、その名列に関する認知のこともあり、将来県政を語る必要もあるというので社会党県評ブロック役員と県三役の顔合わせ会が午

後五時から「かわさき」でおこなわれた。みんなが自分の「奥田県政」の担い手だと思っ
ていてもその主観の相違が思わぬパイプの詰りを生ぜしめるもとになっている。ある時は
意識過剰、ある時は状態認識の違い、情報不足、ある時は方針力点のおき方の相違などさま
ざまな要因が集積されていよう。三役が揃わぬ過去18ヵ月では思惑はさまざまに異なるのが
当然ともいえたが、今やその大きな要因はなくなった。今後は情報不足の言い訳はできぬ。
では今後の情報交換意思疎通をどのように行うか、誰がイニシアティブをとるか、となると
必ずしも前途明るいとはいえない。むしろイニシアティブの不足という方が正しいかも知
れない。それに、それぞれが異った考え方をもっている以上、どこまでを意思統一の対象に
するかが必ずしも明白でない。同じく選挙を共に闘った共産党とそのブロックに対しては
こちら社会党ブロックでは依然異質反応が強い。執行部にしても同様であって、共産党系は
勢い「カヤの外」におかれたままになる。

10月21日（日）

ひまがあったら筆をもつ

秘書室の努力によって今日はどこへも行かぬ日曜となった。でも何か意義あることをしよ
うという意欲もわからない。ふつう通りに起き、身边に整理することがあればと思ったがこれ
という急ぎのものもないので、いつもやるように、筆をもち、中国書法大字典を参考にして
隸書を半紙にどんどん書いた。筆の使い方も知らず独習である。やっているうちに、自分の
ものになるのではないかという考えである。近頃ひとからの手紙、贈物に接した時には憶せ
ず毛筆で礼状を書くことにしている。だいぶん馴れたように思う。八女紙をいただいている
ので、それを使っている。なくなったら買うことになろう。何の苦もなく書くようになりた
い。草書体をもう少し知る必要が生ずる。馴れと気くばり苦心が積み重ねられて自分のもの
にならないといけない。手紙をもらった人から、たまに礼をいわれる。それが又はげみにな
る。今になってという気もしないわけではないが、おそすぎることはない。教授時代なら書
く相手に不足するだろうが、知事にとっては相手に不足しない。自分でも、割にすらすら書
けるようになったと思う。今後もこれをつづけたい。

10月22日（月）

社会党県議団との懇親会

かわさきで社党県議団と新執行部とのこんしん会をおこなった。八丁、島津がこれに加わっ
た。近くの人達ばかりなので逆にこの種機会が少なすぎるきらいがある。副知事、出納長、
秘書室長らいわばポストに就いて新顔ばかりである。永井副知事はドック入りで欠席。これ
からは第二期奥田体制の地固めに何も顧慮することなく邁進しなければならないという申
し合わせをしようという意味がある。みんな新人事は突然だったにかかわらず一応満足し
てくれているようだ。でもどこことなく不満がある。それは党の立場、労組の立場と知事の立

場の違いからくるものであろう。それが相互の理に到達する限りで文句はなくなるが、理くつが先走っている限り不満となって残る。今の社会党県議は総勢16人、鶴崎時代には32人だった。少数の勢力でよくやっている。不満が残るような路線をとりながらも、この16人が他党派に働きかけうるようにしているから、16人が40人ぐらいの同調者をもつことができるようになってきている。そのような他派への働きかけの熱意はかわなければならないだろう。この16人が25人ぐらいになってくれなければ不満が新たに発生する要因がより多く残るわけだ。この16人がなぜ残っているかの原因をよく調べる必要がある。

10月23日(火)

香港に来た第一の印象

ひるすぎ香港について夕方の香港・貿易セミナーまで少々時間があつたのでヒルトンホテルのわが部屋で迎えてくれた駐在員の松永君を相手にいろいろ説明をきいたが、6時から始まったセミナー(このホテルのIndian Roomでの)セミナーをきいて香港というところの理解の困難さをつくづく感じさせられた。報告者はジェトロの所長加藤哲朗、三井銀行香港分行副総経理の石橋正通さん(同渉外係長岩永良児さん)及びミキ・インターナショナル社長の光益昭郎さんの3人だったが、とくに理解し難ったのは金融、取引、決済の事情についてであった。国家がない自由人ばかりの経済取引だから中央銀行もなく信用カーテンばりというのだから、どこに信用関係の秩序を求めてよいかわからない。通用している紙幣も複数の銀行から出ているし、外貨交換レートもホテル銀行のそれぞれによって違う。各々が一寸先は闇みたいな気持でわれわれに接している。社会保障もなければ警察力もあてにできないといわれる。自分で自分を守るしかないし、その代わり、警戒心は抜群に高まる。平和な日本は他力をあてにしすぎて逞しさに欠ける人が多いようだ。

10月24日(水)

香港の将来性格について思う

1日中各公的な役所などまわりをして今日はかなり疲れた。が昨日のセミナーの印象が強烈に残っていて、香港とは何ぞやということを改めて考えさせられた。深夜もにぎわっている。犯罪には十分用心をしないといけない。買物はだまされないようにしなければいけない。それでいいのだろうかと思うが、やむをえないと誰しも認め合っている半国家、否国家機構が可能な限り後退している。国家は悪より出で社会は善より出ずと18世紀の英人ペインはいったそうだが、国家なくして社会の善なる部分、人間の善なる部分が前面に出てくることが理想とされるなら、そういう善が追求されているといってもよい。チープガバメントの思想と一脈通じていて、しかもそれが国家論、理想社会論を論ずる場合の生きた見本が香港にあるように思えてならない。香港は中国にとってなくてはならぬ存在だし、中国にとっても香港は失うわけにはいかない。共産中国に変えてしまうわけにはいかない。そうした

ことが、英中共同合意を実現させ、香港を来年中ばを期してその方向づけ確定の上で新時代に投入させようとしている。香港の政治的な位置は一時とくらべ「返還」による混乱の心配もなくなりかなり確実なものとなり、将来の発展対日緊密化が期待されそうだ。各所のあいさつでそういう側面を強調してみたのである。

10月25日（木）

香港街並み雑感

香港は530万を養う大都市。高層建築が所せましと立ち並ぶ。九割が南部中国人だとのこと。中国語と英語、とくに当然ながら英語が公用語のようだ。街路の商業地区ではとくに、中国語で書いた看板は特徴的である。それも繁華街では道路の上まで、看板をぐんと突き出している。日本の町のように歩道をわがもののように立看板で埋める商家はないようだが道の上空をわがものように奪うのもどうかと思う。近頃は日本人の進出が東南アジアでは目をひいているらしく、若干反撥に変じているようだ。香港でもデパートがあれこれあり、電器の広告もかなり目につく。車も日産トヨタの数はすごく多い。車のうしろにTOYOTAと大きな文字で表示するのは、ホノルルでも見かけたが、文字が大きすぎて広告を背負わせているようで、私の見たところ感じはよくない。ハワイでも中国でも宴会の終りなどで「万歳三唱」はやめた方がいいとのことであったが、これも一つは誇示、一つは軍国主義をあらわしているのではないかと思われ、遠慮すべきだとのことである。トヨタの宣伝など度がすぎていると思う。

10月26日（金）

自民の若手県議

こんどの香港旅行では財界の人達と接触はあったものの、よく誰彼の区別がつかねてはいない。それよりも自民党県議の三人、（薦野、高岡、藤田、はいずれも初当選ながら、代議士の秘書歴をもち、その点政界にはむしろ馴れた者ばかりであり）これらの人達から党内の新旧の派閥対抗事情をもち承ることができたし、彼らの気持が理解できてよかった。県の事務側も、一年生議員はよく勉強しますよとの声もあり、彼らは若く新しい意気にもえている。年配者何するものぞといわんばかりである。ただ県議会で知事にくってかかるのは職責上やむをえないとの意識があるし、私が前から想像していたとおり、中央部のさしがねによるらしい。中央とは即ち遠藤であり、田中六助あたりらしい。とことん奥田には対抗せよとの指示である。若い県議たちはその指示の拙劣さを感じとっている。遠藤は官僚的でよくわかってないとももらしていた。全く同感である。県連会長の座をいつまで占めるのか、遠藤の采配がつづく限り自民党は県内で評判をおとしていくだろうと思う。九月議会を見ても「副知事を作ったら奥田体制の強化につながるだけ」といった連中が遠藤の指示に忠実だったのである。

10月27日(土)

武漢市との関係のこと

朝のうち白石県評議長がやって来た。武漢雑技団の来福を機に、一行が帰国する時に一しょに武漢を訪問。12日間の旅を終えて帰福し、報告に来てくれたわけ。岩崎隆次郎氏にたのまれて私が、四面有山皆入畫一年無日不看花(明時代、祝枝山)の句を連幅にして書き、表装してもって行ったのを向うの呉官正市長が大変よろこんでくれたとのこと。その返しに市長の為書をした軸物の絵と蔵書印を白石氏に托してくれたのである。武漢市はつい最近、北京、天津、上海と同じく、特別の直轄市に指定されたらしい。その市長が福岡県との交流を熱望しているとのこと。同市は現在大分と姉妹関係を結んでいることもあり、福岡県が姉妹関係を結ぶにはこうした事情から難があるとはしながらも何とか関係をもちたがっていると白石氏はいふ。福岡県評は武漢総工会と1962年以来、一度は薄くなり中断されてはいたが最近年友好関係を再燃させている、という関係にある。白石氏のいう県・市の友好関係をどうして結ぶかということは研究してみないとわからないが聞き捨てるわけにはいかないだろう。

10月28日(日)

岸本雷峰先生の喜寿祝

志賀島のマラソン大会では昨年私も一周するマラソンに加わると約束しながら、今年は1kmほど(1/10)走ってかんべんしてもらった。練習抜きでは完走できるものではない。穂波の山本町長は参加して完走したらしい。岐阜県から88歳の人が参加していたが、元気そのものなのには驚かされた。今日は岸本雷峰先生の喜寿祝の日である。77歳まで生きるのも容易でないが、画廊けんざんで開かれている先生の個展を見てびっくりするように、一芸をもって77歳を迎えることができるとうらやましい限りである。書の場合、まさに円熟の域に達し、今後ますます作品ができるわけである。世のため人のためなどといって知事になり、きりきり舞いの毎日よりも書を身近に楽しむ方がどれだけよいかわからない。もちろんこうした一芸ののぼりつめたようなところに達すればの話ではある。とにかく凡人なら何をしようが似たりよったりで同じことというほかはない。88歳までマラソンをやるということは、この点どう解したらよいだろうか。理くつづけしないで走れるものは走ったらよいではないかというのが大切だろうと思う。ともかく健康が何より。

10月29日(月)

知事をやって面白いか

記者クラブの連中が年に2回の総会をやって、そのあとの席を知事招宴という形にして、「かわさき」で今日一夜にぎわった。秘書室、広報室、三役みんな出席した。ひどく酔うまでのんだ者、二次会、三次会とつきあう者、マージャンをする者など終りは様々であった。

席上、ある記者が私にいった。「知事もなれてきて面白くなったでしょう」と。私は否定した。記者は「面白くなくちゃうそですよ」と切り返す。私はそういうことはないと又否定した。「世のためひとのため」というのはウソだ作りごとだと思えない、みんな自分が大事なのではないか、知事なんて自分の時間がほとんどなくてなぜ面白いといえるかという、以前からの私の思っていることを吐き出した。記者は、そうではない、政治をやることに興味をもつ者がいて、知事をやっていると、だんだん興味がでてきてしかるべきだと思うという。そうだろうか。政治のために、時間がなくなり、私がなくなることに興味が湧くだろうか。依然として私にはそう思える。知事として少々の手腕を発揮できても何か満足できるだろうか。むしろ知事の職にあつてあれこれ修養させられ、人間がわかったという収穫は確かにある。

10月30日（火）

ひとにちやほやされて政治は面白いか

補助金10%カット反対の陳情で労働大蔵の両者をまわったあと、参院の遠藤事務所に行った。旧産炭地の市町長、議長ら同じ陳情行動をした人達がどっと集った。議員会館の部屋もこう陳情者が詰めかけると全く狭い。遠藤氏は園遊会に行っていたと称して、成金饅頭のような菊の紋章が入った菓子をみんなに賞味させた。陳情に来た面々に囲まれて遠藤氏もご満悦だったようだ。みんな支持者ばかりのようだから。そういう中で彼は「私が県民の皆さんのために働きお役に立つことになれば、それは不本意ながら奥田知事の名をあげてやることになる」といった。そういう発言を彼は度々私の前でやる。私は軽く受け流す。どうだっていいんだから。それは一つの解釈であつて、彼が奥田の役に立ちたくないならしなくてもいいし、足を引っばるようなことをあちこちでやっているのだから、わざわざ役に立っているというようなことを言わなくてもいいのではないかと思う。この人、根っこから政治が好きな人のようだ。が政治は一寸も上手だとは思えない。昨日の記者質問ではないが、この人にいわせると、参議院議員は面白くて仕様がないうというだろう。

10月31日（水）

議員族には議員族の立場がある

よく考えてみると、知事は面白いだろうとか、世の為ひとの為と思ひ込むとか、議員をやつて満足するとか、権力や地位を追い求めることがいいとか悪いとかについていろいろ書いたが、どうも各自が思い思いのことをやればそれでいいのではないかというのが結論である。権力を追求して面白い人、満足している人があつて、それをわれわれ他人がとかくいう必要はないだろう。国会議員に出て多選を重ねる人、落選しても又出馬する人、しかもそれには常人が思いもつかぬほど多額の資金が必要だし、場合によっては財産をくいつぶしても飽くことなくそれに執着する人がいる。何の利益があろうかと批判するのは、利益から

の尺度をあてた批判にすぎない。自分の時間がなくなると批判するのは自分の時間という尺度からの批判にすぎない。こうした批判が客観性をもっているという根拠はどこにもない。今日は補助金カット問題で陳情する日。国会議員、政府当局者に会う機会があって、そうした人々をつくづく見ていると、好きでやっているんだなどの印象をもった。決して自分の尺度でひとを評価してはならぬと思った。馬鹿馬鹿しく思う反面莊嚴にさえ見えてきた。【日記の最下段の欄外に印刷してある「孟子」の言葉「人の患（やまい）は人の師となるを好むにあり。」が自筆の○で囲んである】

11月1日（木）

柳川での白秋祭前夜祭に参加

64歳の誕生日だ。先日来庁した柳川市長と約束していて、誕生祝もかねて市の方でやっている白秋祭に行くことになった。没日が11月2日で、1日は前夜祭。両日もドンコ船をしつらえて豪華な川下りと花火の打上げがくりひろげられる。今日は100隻1000人余が参加しているとの説明だった。明日も規模はかわらないだろうという。40年余福岡に住んで実はこの川下りは初体験だった。市長があいさつの中で白秋あつての柳川だといったのが印象的。私が柳川の白秋ではなく、福岡県の白秋、日本の白秋である、来年の白秋生誕100年祭は日本的視野で取組もうとあいさつしたのがよかったとみんながいていた。100隻の船が勢ぞろいし、出発点の岸辺に組まれた演壇で夕日を浴びながらの祭行事の一幕だった。夕暮れだからこそいいが、日中では川の水が汚くなっているのがわかってよくないと市長はいう。船内で弁当、酒、小花火が配布され、船頭が長い竹竿で巧みに船列をととのえながら川をゆっくりと下る。夕闇がだんだん濃くなっていく。岸辺ではあちらもこちらも市民が小花火で歓迎する。最後には仕掛花火の大饗宴があった。

11月2日（金）

「水の構図」（詩歌北原白秋、写真田中善徳）

柳川の川下りではいくつかの橋の下をくぐり抜ける。その一つに城塞水門というのがある。城の防禦のために作られたもの。うなぎ供養碑にも出くわした。昭和42年に建設されたもので名物うなぎは年間80万余尾が処理されているという。前夜祭水上パレードの終点は沖端。近くに藩主の休息所御花があり、日本三景の一つ松島を模して作られたといわれる名苑松濤園がある。昭和53年8月に国の名勝として指定され、昨夜ここで市長、大屋宮川両教授及び私、みんな夫妻揃って市長招宴にあづかったが、私らはここの新館に泊り、今朝は水鳥が200羽といわぬ舞下りて水面で遊ぶ様をみながら朝食をとった。白秋生家（酒造り屋さん）も近くにあるようだが、それは見ずじまいだった。又のチャンスがあろう。白秋は昭和17年11月2日57歳で没した。彼の著作「水の構図」の復刻版を市長からいただいた。それには「遺書にも似た・・・はしがき」がある。「水郷柳河こそは、我が生れの里である。こ

の水の柳河こそは、我が詩歌の母体である。この水の構図、この地相にして、はじめて我が体は生じ我が風は成った。」という言葉から始まる文が大きく私を引きつける。しかし、柳河の人がすべて白秋にならず、その後白秋はでてこない。白秋はやっぱり白秋だった。

11月3日（土）

奥田知事が扱い易いと財界人がいいだした

西日本文化賞の贈呈式があつて後、関係者の午餐会がおこなわれた（国際ホール）。私はホスト側の中央、その両隣に右は福田西日本新聞、左は同青木専務が席を占めたが、青木専務が、知事の評価は近頃ぐっと定まってきましたよという。財界は当初きわめて強い拒否反応を示したが、最近では扱い易い人だ、正直な人だ、ざっくばらんな人だといっているという。又亀井氏は面と向つてはいいが腹の中では何を考えているかいつもわからない、思っていることをいっているのか否かわからない。その点奥田知事は思っていることしかいわないとの評判だとのことである。ほめてもらって嬉しくないことはない。近頃県議の野党各派とくに自民党の面々、そして財界の人達、西鉄や九電をふくめて、態度がかわってきたと感ずるし、中小企業の人達（指導層）もそれに似た感じを与える。県選出の国会議員も、県下市町の長達もである。林県議が近頃いっていたが、副知事人事を推進する上でかなり強い議員工作をやつたので奏功した。資金はもちろんいった。自民は面子があるから別だが、緑政の半分その他の与党化はそう困難とは思わないとのこと。北海道から来た松井安信が私の人格もそうさせていると指摘してくれた。

11月4日（日）

幼な時代の記録

今日は幼い頃の事を少しずつ書いている記録のつづきを「郷土史みねあい」をひきあいにしながら、少しだけ書き加えた。なかなか進まず、夏の長い間全く書かずにいたのを又自己鞭撻して書きはじめたものである。多忙なのに、毎日の日記を二つ書き、その上この幼な時代の思い出を書くのは容易ではない。毎日の日記も2日、3日とたまることはよくある。しかし、自己鞭撻で何とかページを余白にしないように埋めている。全くの即席の走り書きだから、文脈のよしあしは考えるひまもない。書いていることのよしあしの判断もない。ただ書くだけというのが実相である。何故そういうものを書くのか自分でも説明できない。書かないと何か自分にそむいたように思うのである。旅行の時もできるなら日記帳をもちあるく。もちあるくのに書けない時もある。秘書がいつも横にいと、一寸ひまができて書けないことがある。幼な時代の記録は自分がどれほど思い出せるのかの自己テストでもある。今日九州工大75周年記念式典で講話した夏衍氏は、在日中不必要に鍛錬されたようだが、それが薬になって今日あるといった。然り。

11月5日(月)

遠い存在になった知事

行政改革審議会の中間答申を今日午後3時15分から庁議室で受領した。逢坂会長から知事へ。マスコミはこれをかなり大きく報道した。審議会の方では答申後記者会見をしたが、具体的な施策については抽象的でしかないと評していた。4月以来の短い審議では具体的なことがいえないのは当然だろう。むしろ今後の1年の本答申に至るまでが大変だろう。県行革審の中にもいろいろの人がいて、意見の対立もあるようだが、自由にものがいえるのが取りえだろう。こちらの方から答申の筋道を示し、イエスマンぶりを発揮して足れりとするようでは困るし、第二臨調のように、財界の利益を守ることに徹するようでも困る。県の場合は財界の親玉は委員になってもらってないはずである。委員の中に西南大の遠山教授がいて、今晚の懇親会の席上、奥田さんが知事になって遠い存在になってしまったといった。誰しも私のまわりにいた人はそう思っているだろう。なぜ遠い存在なのか、何が遠い存在にさせているのか。もちろん私の個人的意思であろうはずがない。遠い存在にさせてしまう人間の組織が問題なんですと答えておいた。

11月6日(火)

住吉グループへの謝意

夜右近でいわゆる住吉グループといわれる人達との懇親会を開いた。昨年の末頃から、助信、林ラインでこれら自民党の川筋派ともいえる人達との接触をはかっていたようだが、奥田県政については反対しないという意見の持主である。12月県議会前から浜中茂足氏はとくに、公舎入居問題や副知事問題については浜中・林ラインでの決着にかなり骨折ってくれていた。もちろん、その思惑で県議会がまわせるとは限らなかったのも、手間ひまがかかったし、恰好のつかないことも多かった。が、今度の九月議会までに林氏を中心に緑政、民社、公明の諸会派工作については、かなり手数がかけられたし、そのための政治資金についても、これら川筋派の配慮を手厚くうけてきたらしい。今日はその御礼といえる会合である。もちろん彼等は自民党だから、知事選ともなれば、自民党の線で動くが、今の奥田県政については、他の派の場合のように、対決のための対決ではなくて、現体制の中でちゃんとやっていけばいいという意見である。だから、質問に立っても嫌がらせ発言はしないし、人事については執行部提案でいこうとの立場なのである。その意味で、長くつき合っていける人達といえる。なごやかな懇親会であった。

11月7日(水)

子ども劇場の要望について

県子ども劇場の指導者たち、又離島青年会議の人達の要望を昨日しっかりきかされた。前者は過ぐる知事選中にもきかされたこととほぼ同じであるが、後者は水産林務部で問題が時

に出てくるほか初の事情聴取であった。まっ正面からいいにくいことだが、この種の要求は農村のそれと同じで際限なく県の行政サービスの手をさしのべなければならない問題である。ある意味では、離島のハンディキャップをなくせよということになるので、行政干渉で経済ベースを無視して行うとすれば、あるいは「無駄」を平気でやることになり、大局的観点からは許されることではない。子供のこともについても要望は無限になろう。まず、市町村の現場でそれなりに努力をし、積み重ね、行き詰ってから県にもってくるようにというほかは仕様がな。慈悲深い君子のように要望されれば、よしよしということによって叶えてやっていくことは、とてもできることではない。さきの知事選のときも子ども劇場についてそう答えたのだが今回も同じ要望であり、同じように答えておいた。市町村をもっと攻めて下さい、市町村の要望として出して下さいと。

11月8日（木）

ロータリークラブ月例会での講話

昨日のひるグランドホテルでロータリークラブで初の講話をした。多川氏がすぐあとで樺島君に電話してきて、評判は大変よかったという。樺島もきいていてよかったという。そのほかあちこちから、風の便りがとび交い、私の話に感銘した人が少なかったというのである。財界には私が知事就任以来濃厚な疑心があった。革命、混乱、労組社会党中心の県政の強行など、など。それがいまだに払拭されずにいることは確かである。料理屋で出会う仲居さん芸妓さんたちの話では知事がかわったら東中洲は一ぺんに不景気になるとのことだったので亀井さんに投票した……一年たっても不景気になることはなかったので安心しましたというような話すらある。このような雰囲気がかだん薄れて、どうやら安心できるのではないかということになってきたらしい。当初から親しくものをいっていた多川副会頭が、例会で奥田の卓話をきいてみようではないかとの提案をして、今日の講話になったらしいのである。私は県民党論や大学時代の学生紛争への対応についての私の考えをのべてそののち、県政への姿勢、課題、抱負をかんとんにのべ講話を結んだ。

11月9日（金）

浜中県議を慰労

右近で浜中県議の慰労会をしようということになった。新副知事、出納長、秘書室長誕生という9月議会の結末に至る政治決着についても、浜中氏の果たした功績は大へん大きいということで、私、近藤、林の3人から記念品を贈りもした。のみながらの話題に、こんどの副知事人事のフィナーレ劇の裏話が林、浜中両県議の取引の中でいかに進められたか、懐古された。又昨年の9月議会で林県議が浜中にたのんで知事公舎入居勧告決議案を上程したとか、12月議会でなぜ、秘書公舎なら入るといい出し、自民党がこれを拒否、公舎条例そのものの廃止にまでつき進んだかというようなことも話題になった。浜中氏は知事が12月

議会で浜中・奥田の間の約束を守らないことになったうらみは今でも忘れられないとさかんにこぼしていた。両県議間の友情だけが忍従の結果を生んだと強調していた。12月に入って、私も林県議も入居やむなしと一度は考え、浜中氏にそのことをにおわしたが労働組合をはじめ一般支援者からの形にみえない猛反発があって、入居の線をひるがえし、秘書公舎に入居もありうるとした、このドタバタ劇の懐古もあった。9月議会における副知事問題最終かけ引きもこれに似たものだった。

11月10日(土)

九州寮歌祭のマンネリ化

今日グランドホテルでの第18回寮歌祭には、姫高の出番の頃合いを見はからって登壇時にまにあわせ、しばらくのつき合いで引きとらせていただいた。同時刻にあった三一会により多く付合う方がいいと思ったからである。青春を思い出し、自然に口ずさむ寮歌はいつもよい。いつも青春の血が湧いてくるからだろう。ばんから姿の再現もよい。しかし、寮歌祭のやり方は少しマンネリ化してきたように思う。みんなそれぞれ壇上にあがって合唱することのくりかえしである。チャンピオンにするとか、セレクトするとか、女性歌手を入れたアレンジを考えると、クイズを出すとか、工夫あり、爆笑やスリルやがあつていいのではないか。他校の合唱団にはふり向きもせず、各自勝手に旧交を温め、知り合いを求めて語り合うなど会場はかなり白けざわめいている。マンネリ化した証拠ではあるまいか。三一会の方は戦後初の上級職合格の県職員の親睦会。知事の抱負をのべてしっかり激励するがよいということで、すでに部長、次長クラスになっている彼らに改めた席で付合うことに今の意義を見たいと思ったのである。

11月11日(日)

巨人対オリオールズ戦で始球式に出る

読売新聞からたのまれていて今日は平和台球場での日米野球(巨人対オリオールズ)における始球式のピッチャー役を担わせられた。ゆうべからかなり降った雨が今日午前中残り、一時は試合中止かとさえ思われたが、新装のグランドではあるし、雨も小雨勝ちだったのでグランド整備に若干の時間はかかったものの、予定どおり試合は行われた。九大教養部で一寸ピッチングの練習はしたのに、本番には、満員の観客がどっと笑うほどゴロでしかキャッチャーに届かない弱々しい球になってしまった。もうちょっと高く投げることと、投球のフォームが全くなってなかった点が反省させられた。監督の王選手がサインボールをくれたし、色紙に主要選手のサインを集めてきてくれた。観客は、はじめ傘をさして見ていたが、五回すぎからは傘は無用になった。この雨はそれでも草木には大変いい雨だった。水不足があちこちでいわれる程だったからである。野球の方はアメリカ側が圧勝して七回表がすんだ頃観客も立ちはじめ、われわれもタダ見席(特別室)を与えられながら、その頃に平和台を辞

した。日米両選手団の体格の違いが感じられた。又向うの方がプロ意識旺盛と見えた。

11月12日（月）

風が吹く——奥田カラー

少し前、九大法学部の行政学をやっている近藤教授が知事室に来たとき、私に忠言するように、奥田カラーを出そうとあせらないで、今吹いている風に従って帆を張って走らず奥田丸であってほしいといったことがある。いいえて妙だと思った。「風」という言葉を使ったのが気に入った。「気にくわぬ風もあろうに柳かな」という仙崖の句を思い出す。風は吹くものと考えたと客観的なもので、その中に我をおく。けれども風は吹かすものと考えたと自己顕示が先に立つ。近藤君は自分を吹く風の中においた方がいい、その中で舵を取ればよいというのであった。マスコミは奥田カラーを要望する。それは県職員の中にも、支持者の中にもある要望でもある。しかし、「奥田色反対」の者も少ない。行政の継続性を私が強調した裏にはこの反奥田の風を念頭においたからという側面もある。ほんとうをいえば、労働運動にしる、社会運動その他文芸にしるどの分野にしる、一面では吹く風に身をゆだねるといふ一面と、風を自己流に吹かせるという一面がなければ、歴史は作られないだろう。

11月13日（火）

政治の合理性非合理性

今日の農政部長と知事との意見交換の中で、ある課長（原田氏）が特産品の奨励をしても産額はわずかなものと指摘した。しかし、これが農政の中に入ってくるのは政治なんだということ私を私は強調した。大分県で一村一品を大宣伝しているが、これも多分に精神運動的なものでありPRである。福岡県では一村一品はなじまない。しかし精神運動もPRも同じく必要である。この点がわかってもらいたい。又特産品奨励は弱者対策でもある。行政は強者は放置しても弱者には手をさしのべねばならぬ。経済合理主義の彼方の問題である。学校では成績の悪い者に、家庭では親不孝者に手がかかる。これと似ている。住民の福祉追求に同調すべきが県政であるが、経済合理主義の線による場合と、逆にそれを無視する場合と、行政には両面がある。住民に両面があるからに他ならない。政治としては住民に媚をうることもあるし、冷酷に当る場合もある。そこをうまく使いこなし、使い分けしなければなるまい。特産品の奨励を経済合理主義だけで割切らぬことが血も涙もある政治に通ずるであろう。そういうことをいろいろ考えさせられるこの頃である。今日の部長との意見交換もその点有意義だった。

11月14日（水）

社会主義協会の幹部来宅

夜八時頃になって協会の連中が約束どおりやってきた。岩崎隆次郎が一足先に来て島野間

題を話した。大坪、中川、安達、城島、このあとの2人は県職である。岩崎は、島野氏を福岡でどうかして面倒をみる、そのために資金もいる、後援会組織を強化する見込みも立ったので12月から島野氏に来てもらえると思う、但し、住むことは報酬の点からできないから何回か東京往復ということになろう、とのことであった。大坪、中川は糸島の集會に知事が来なかった点など県民感情、支持者感情の代弁めいたことを指摘しつつ、今後の対応を論じていたし、安達、城島は県の人事についてとくに指摘していた。みんなで不満を出していたのは知事となかなかうまく接触できない県の体質について、さらには、協会系の意見がなかなか知事に届かないという点についてであった。いわれる通りではあるが、知事は一つの既存の体制の中に組み込まれた面をもち、オールマイティではないということの理解がもう少しあってほしい。岩崎は一期目は仕方がないというが、二期目になると何でもできるのかというそうではないと私は思う。客観的状況というものを考えてくれないと困るわけだ。

11月15日(木)

当面する県政方針の枠組みを討議

年末を感ずるこの頃、社会党の政審から私に方針を提議したいとのことでやってきたので中食をはさんで庁議室でその場をもった。新年に向けて各所から年頭所感が要求されるし、その一貫性が求められている。60年度当初予算の編成方針も出していかねばならない。何が基本か、何が目玉か、昨年とどこが違うか等々が問題になった。社会党は県下4ブロックごとに奥田県政に所望する政策の討議に入っている。それにもこたえねばならない。あちらもこちらも当面する政治方針を要望しているので、これらに一貫した解答を出さねばならない。そういうことをひるをはさんで約2時間討論した。そしてだいたいの見とおしを得た。夕方早目に帰宅できそうだったので、問研に寄り、来年4月に著作を出版する計画なので、その内容につき、八丁君と話合った。それは年頭所感とも無関係ではなかったが、もっと広く、就任以来の総まくりでもあり、昭和60年という年の特徴づけにも関連していた。今日はそういう意味で県政プロジェクトの大枠を総ざらえしたような一日になった。しかも急ぎの必要ある作業でもあったのである。

11月16日(金)

九大法経創立60周年記念式典

ここ4~5日睡眠薬を使わないでねることとして努力してみたら、比較的の結果良好。これならば早目に就寝しさえすれば何とかかなりそうだ。体重は55kgでこれも少しオーバーではあるが順当。目が若干衰えなのかどうか問題ありの意識。かすむようである。ところで、今日は九大法経両学部の60周年記念式典があった(国際ホール)。卒業生であり教授であったという田中定氏、岡橋保氏、副田、馬場その他の顔がみえ、法学部では具島、その他の顔

がみえた。近々の人達はもちろんである。タイからパヨン夫妻も外国賓客として顔をみせ、中国の于、韓国の崔両教授らと座談会をやって昔を偲ぶ記録を残してくれたようだ。同じく60周年式をやった法学部では外国からの卒業生招待はしなかったようだ。大学などでこの種の行事をするには先立つ資金集めが大変だろう。私が一役買わされたのは、資金分担の意味をもっていただけ。それにしても60年の歴史は重味がある。昭和24年は新学部の分離独立だから今日までの35年間は発展の跡いちじるしいものがあるが、それに先立つ25年は戦時戦後の10年をはさんで激動の時代であったといわなくてはならない。だが傑物も出た。

11月17日（土）

パヨン・シュティクルのこと

九大経済学部60周年記念に3人の卒業外国人が招かれ、その一人にパヨンシュティクル氏がいた。今日山ノ上ホテルで知事招宴という形で洋式のパーティをしてこれら外国人を歓待した。パヨンは今でも私が答案の原稿を作ってやったことを語り草にしている。私の記憶では宮本教授の日本経済史についてそれがいえる。パヨンはそれを暗記した。その問題が出ても出なくてもそれを書くと言って暗記した。正確かどうか忘れたがパヨンはヤマが当たったといっている。パヨンは中楯氏ともかなり深い交友関係にあったらしい。遊ぶことは中楯さん、勉強は奥田さん、今日あるのは奥田さんのおかげと彼はいった。1979年9月定年で彼は日本を去った。駐日大使ということで、勲一等旭日章を受章し、私にその時の写真をくれたし、勲章の実物を見せてくれた。私とパヨンの出合いは陸上競技部の顧問教官であった武藤助教授（法制史担当）が同じ経済学部学生ということだったせい、私にパヨンの勉学上の面倒をみてくれと、指導費支弁で私に頼まれたことによる。もちろん私は親身になって彼の単位取得の面倒をみた。岩崎友四郎もたしか武藤さんから頼まれたろう。

11月18日（日）

西南大の学園祭

西南大の学園祭、ランキンチャペルで行われた「やりっぱなし、アレンジ博多文化」という話し合い催しに、頼まれて端役に数分間出場した。博多文化がアレンジされたものだとすることを多方面から考え論じてみるという発想は興味深いものを感じさせる。学園といえば近頃は夜店風のものが増えるが、それもあるにせよ、こうした発想は有益なものといえよう。例のとおり周りを震撼させるような高い電気楽器にはもちろん圧倒された。だが他はまじめで私も耳を傾けた。私の出番は県庁跡地をどう利用するかについて高校生アンケートを話題の種に、県の跡地利用方針を一寸説明するというくだりだった。跡地利用の仕方が博多文化におおいかかわってくるはずという点に焦点がぼられてくるのである。町人文化連盟の帯谷瑛之介さんらが主役で出席していた。5時頃チャペルを辞して帰途

についたが、その頃、もう出店された天幕はこわされかかっていた。夜店ではやらないらしい。九大なら夜の部がにぎわう仕掛けなんだが、西南では電気代節約のためか夜店はないという。

11月19日(月)

筑後に来て思う

久留米市の各界有力者に集ってもらって「ふるさと対話」を開く。みんなよく意見をのべてくれた。私にとっても県民の声を現地できくのは大変になる。選挙制度の日常的補足である。対話行政の一環として昨年来やってきた事だが、今年は誰彼かまわず招いていた昨年のやり方を変えて、日常の活動者指導者を名ざして呼ぶという形をとった。意見がばらばらにならないし、有力意見としてこちらもきき勝手が違う、即ち直接的に重視できる意見がきける。久留米は私の支持者が多いところであるが、近頃一段と親近感が強まりつつある。農協中央会の高嶋会長もこちらのようで、今日は知事も農家出身というので一度来て農家の実態に接してみないかという、発言をした。“柴刈り縄ないわらじを作り、親の手助け弟を世話し……”の二宮金次郎の歌を地でいくような生活をしてきた事を彼に話したことがあって、それを出してきたわけだ。藁草履を作ってみよということになると、どういう実演になるだろうか。できると思うがもう今はこまかいところで自信がない。が、今の世代の人達はその心をよみがえらせてほしいと思う。その気持でないと筑後は筑後として成っていかないのではないか。

11月20日(火)

書齋をみてはタメ息

何だか急に寒さが加わってきた。夜の仕事をテレビのいやな音響なしにするためには書齋にもストーブが欲しいということで電気ストーブを入れた。ゆっくり書齋をながめると、おどろくほど積み上げ雑然としていて途方に暮れるばかり。持込む物が毎日確実にふえていく。身動きもできない方向に動いている。蔵書を始末つけたいとは思うものの、急ぐことはない。他の理性が働く。絶対読まない、いらないとわかっているものがあるのに、未練が残る。どれもこれもわが体の一部のように思えるのである。揮毫するための物が加わるから事がよけい面倒になる。捨て惜しむからなおさらである。いなくなったら、あとに残った者はどうするだろう。一挙に処分してしまうだろう。それがいい、何も残さないのがいい、分け取りするのもいい、焼却するのもよい、どこかに寄付するのもよい。体の一部だと思っているのだから、そのように処理されて何ら悔いは残らない。目にとどくところにある日記を足許に積んでみた。十五冊ほどある。これで全部ではない。これだけは一カ所にまとめて一括処理してほしいとは思っている。深山君は三度手術して少しはいいらしい。

11月21日（水）

筑豊の蘇生に新しいきっかけをつかもう

午後1時半からの「筑豊はどうなる」シンポジウム（田川青少年文化ホール）に出席。知事あいさつをのべたが、500人は集ったこの集会、県評・社会党系の産炭地運動が行政側を巻込んだ試みとして好感がもてるものであった。他党の出席がなかったのは、それでも淋しい。この種運動が従来の要求運動から自己建設運動へと関心を向けてきたところに意味があるのだが、少々遅すぎたともいえる。今日のシンポがどういう集約をなしたかは、私には後日しかわからないが、自からの蘇生を発見したことは間違いない。私が県民総立ちの一環といていたことが、この集会でとりあげられるであろうことは確かだ。しかし言葉でそうはいっても具体的に何をするのかといえば容易ではない。私は前々から土地と人間がおれば何かができるし、人は自分で食っていくことができ、食っていかなければならない。そこを見つけてくれることが先決である。筑豊の浮揚、産炭地後遺症の復旧、企業誘致等々の名でどれだけ他力本願の年月を費してきたことか。もうそろそろ新しい転換の糸口を見出さねばならぬ。それが今日の集会だろう。

11月22日（木）

12月県議会を控えての諸問題

12月議会に先立つ執行部と県議会野党代表との協議懇談会がグランドホテルで開かれた。岡本議長、篠田自民党議員会長をはじめ、白水、橋詰、山中、坂口、松山、吉永、酒匂それに近藤の面々。知事が野党のそれとのつき合いを最後までやったのは今回がはじめてだ。国の補助金カット問題が公共事業費まで波及してきそうな雲行なので、野党も一様に危機感をもっていて、岡本議長は、こんどの12月県議会はうちわもめの段ではないので、予定通り会期中にすませ、知事は陳情活動のため上京してもらわねばならない、場合によっては、会期中委員会が開かれて本会議に差支えない頃合を見て上京してもらわねばならぬかも知れないなどと私にいうくらいの空気であった。12月議会には人事委勧告ベース・アップ問題、互助会補助金凍結解除問題、高校授業料値上問題、旧知事公舎問題など気になる案件はあるが、全体としてみた場合、従来にくらべ最もなめらかに経過するだろうと見込まれている。それよりか、次年度予算編成のネックになる高率補助率の10%カットにどう対応すべきかに議論が向くかも知れない。これにはすぐの答は出ない。赤字ローカル線対策も議論を呼ぼう。

11月23日（金）

心の豊かさについて

「物の豊かさから心の豊かさへ」ということが何かの白書らしいもの書かれてから、すでに数年といわぬだろう。どの政治文書にも安易にこれが使われる。この前の知事選挙の時も

亀井陣営はこれを大きな旗印にかかっていた。しかし、この言葉の具体的内容は、何もないか、あっても使う人によってまちまちであり、ある場合は矛盾することもある。だのに、多くの人は我が意を得たりとばかりにこれを使う。今日は休日、何もすることのない人はテレビにかじりついていよう。私はひまさえあれば書齋で何か自分のしたいことをしている。心の豊かさを求めるとは何だろう。物の豊かさに対し心の豊かさが取り残されたということだろうか。物の豊かさに対し反比例して心の豊かさが少くなり貧弱になったというのだろうか。物の豊かさが心を貧くしたという因果関係をさすのであろうか。この言葉を使う人は暗に、そのすべてをさしているのだろうと思う。であるのに、物の豊かさを否認する人はいないはずである。だったらどうすればいいのか。物の豊かさのあり方を、心の豊かさのあり方と同時に問われなければならないのではないか。だのに多くの人は物の豊かさのあり方を反問しないで心の方を問おうとしている。

11月24日(土)

松友会に出席して

九大教養部松友会がセントラルホテルで開かれこれに出席した。OBと現役者少数の入り混った懇親会だが事務官が意外とよく出席する。今日も現役の女子職員、大西、平木、高田、赤司などが出席していた。私は女に人気があるという人が多いが、それは、女の言動には陽気があり、気どりや理くつが少いからだ。そのような場合にのみ私は自分でいい反応をしているように思う。そうでない女にいい反応を示すはずはない。その点子供はいわゆる天真爛漫、それが私にはとてもいい。自分をよくしてくれるのでいい。考えこんだり、はにかんだり、決断の鈍い女がいいはずがない。女性と何の利害もなく話すとき、女のいい面がよく出る。それにいい反応をする。だから、女にもてると人はいうのだろうと思う。意気が合い、女の方も私をそう受けとるのではないか。教養部の上記女性のうち大西さんはもう次の三月で定年、他の女性たちもかなりな年配である。公務員は居心地がよいのか、誰も途中で退職しようとしな。同じ公務員でもとくに六本松は居心地がよいようだ。松友会は私が部長時代に組織したもので今はもうすっかり地についてきた。

11月25日(日)

平和台球場にプロ球団を呼び戻す話

三原元ライオンズ監督がなくなったのは何ヵ月前だったが、今日は平和台球場でその追悼紅白試合がライオンズOBによって行われ、益金はチャリティに向けられるという。関口、豊田、中西、大津、川崎、野口、西村、今久留主、基、竹之内等々の名と顔が久しぶりに浮かび眼前にあらわれた。数日前牧坂から電話があって始球式に出てくれという。幸い時間の都合があったので之に応じた。昨日野口氏が知事室に来て、打合せをしてくれた。始球式の前に一席あいさつしてくれということだったが、この時に、プロ球団が平和台にないの

は不自然だということを発言したら、記者達が来て、球団誘致の構想についてどう思うかということを引きかされた。全く海のものとも山のものともいえないが、何か道はないか、さぐってみたいと答えておいた。どちらにしても（既存球団を買いもどすにしても、どちらかのリーグに2球団新設するにしても）前途は全く厳しいようだ。それでも県民は待ち望んでいるに違いないから努力すべきだろう。福岡市だけではいけないから両政令都市の住民、財界が協力対象になる、とすれば知事の仕事である。

11月26日（月）

明るい県議会を望む

公明党との懇親会を6時から仲柳で開いたが、私がプロ球団の平和台誘致の構想をもち出したら次回で質問に立つという大内県議が、それを質問に出すといい出した。大相撲の優勝杯贈呈など今回はじめてで明るい話だ、このことも質問要旨に盛り込みたいという。自民までも、もはや対決の時期ではないと考えるようになったのが現状である。質問に立つ人はそのタネを探すのに苦労らしい。私が知事になった最初の県議会においては「知事の政治姿勢について」と題する質問が目白押しであった。しかも陰湿をきわめた。今日はそうではない。公明党の議員にも、パッと明るい話題を、県民がよろこびそうな話題を質問に出して下さいよと私はいっておいた。プロ球団の誘致などその典例であろうと思う。大相撲の知事杯授与のとき私が特別大声で賞状を読み上げ会場を湧かせ、今日もそれが人々の話題にもなる。お笑いぐさではあろうが、それも陰湿なことではない。みんなが知恵を出し合って県下に楽しい快活な話題が多ければ、それだけでも県政にプラスになると思う。今度の県議会でそのような傾向が芽ばえることを望んでいる。

11月27日（火）

県評の対県要求

県評幹部が来年度県予算編成に向けての要望書を携えていわゆる団交を申し込んできた。理念的抽象的なものから具体的なものまで数十項目にわたっている。例年なら各部ごとに団交のような形でやっていたのを今年は知事も加わって各部長まじえ、懇談するような形とし、庁議室を使ってやや儀式的だが意見交換のようなやり方に変えた。伊藤労働部長がそう努力したらしい。これならスマートになっている。労働団体からいえば、労働団体だけの要求ではなく、広く県民の立場に立った県政全般にわたるもの、行政の基本姿勢に関するものまではいっているというが、政府に対する要求まで入っている。それを県では何とかできないかということでもある。こうした要求づくりは大変だったであろう。が、これに一々こたえていくことはできない。要望の趣旨ポイントはよくわかった、その線で努力するという知事のあいさつで帰ってもらうことになるが、組合側としては事の成否は別として、こういう姿勢を組合員によく知ってもらって、自分たちが県や国に、又は市町に何を求めているかを

よく自覚してくれたらよいと思う。

11月28日(水)

行政ニーズ間のプライオリティを誰が決めていくか

陳情の季節でこちらも東京に行く。県庁にも毎日何組かの陳情がある。すべてに色よい返事はできない。陳情する方も実績が残っただけでよいという程度のものもある。足蹟を残すだけで意味があるわけだ。ところで今日は知事と土木部長との意見交換の日。机上にひろげられた地図には県下の予定道路工事箇所につき経費その他の因子がこまかく書きこんである。土木部長の説明や各課長企画部からの発言を黙ってきくしかなかった。意見がないのではなく、何ともいいようがないというのが実際だった。道路だけでも何千億円かの経費が見込まれる。河川、防災、ダムなどさらには公園下水などあげれば天文学的数字にすらなる。これを県民ニーズというのだろうか、との疑問がまずわく。また、それらと他の部局との間のニーズとの間にどのような判断でプライオリティを決めるのか、私はわからないと発言した。10年待っても、又は工事を続けても道路一本完成しないのだ。こま切れに工事が予定され、拾い上げられて実施にうつされる。箇所づけについても国との接渉のなかで少しずつきめられてゆく。誰がそれを決めるのか、国が決めたら、補助裏を県費支出ということになる。その間に陳情ということが挟まる。陳情も何番目のというプライオリティが重視される。

11月29日(木)

陳情するのも大がかりな背景がいる

陳情は点数かせぎみみたいな側面があつて、行ったか否か、知事が来たかどうか、そういう形がかなり重要なウエイトを占めている。かつて遠藤政夫が、奥田は陳情に来んなどといったことがあるが、そんなことはないのに、彼にとってはそう感ずるのであろう。しかし、今日の大蔵省の場合など、部屋のドアの外で撃退するような形で応待するとなると、こんなケースには「おみやげ」はつけなくてもよいことになる。そうでないと陳情にどれだけ「おみやげ」をつけているか知らぬが、気持を表わすためにつけるのが常識になっている。よかれあしかれ日本の政治風土の一面といえよう。特別の配慮を要するときは料亭に招じてかつ「おみやげ」をつける。外国はどうやっているか知らないが、表敬訪問では外国人もおおむね「おみやげ」をさし出すのは事実。昔からそういうならわしができてしまっているのではなからうか。そういうためもあつて今回の福岡県の大陳情には県職員が裏方さんとしても案内役、会計役、連絡役、設営役、おみやげ運び役などの仕事をするためにかなりの人数上京してきた。大変なんだなと思う。それを指揮する方も大きな気の使いようだ。

11月30日（金）

向坂先生のこと

午前中、川口武彦氏に電話した。めったにしないのだが、大坪君が田川の倉重氏と東京会館にやって来て、しておくよということだったからである。向坂先生がもう再起不能の状態だといっているのである。坂梨君と和気君ぐらいしか近くに寄せていないらしい。毎日の看病で奥さんが大変だろう。そのことの方が気になる。夜帰宅してから早速奥さんにはお見舞の手紙を書いたのだが、入院は新宿の女子医大とかいう。マスコミにもわからぬようにペンネームでの入院という。何の病気なのかわしくきくよしもないが、サル年で88歳ではなかろうか。特別にいえる病気でないようだが老衰といっても、まだまだと思う。奥さんもかなりの年に違いない。協会分裂が42年だから、あれから17年になる。一徹なところが長所でもあり短所でもあると思う。川口氏が協会の代表になったのも今年で、それまでしばらく先生の病気との関係で代表代行とかいう妙な肩書きを名のっていたが、今は代行の文字を取っただけだが、かわりに協会内部とくに理論集団のまとまりがよくないときく。向坂先生はそれが残念だろうが、再起不能なら以て瞑すべしだと思う。

MEMORANDUM

マスコミと警察が政治に踊るとき

（12月9日記）昨日フクニチに行って橋詰記者相手に、要請に応じた新年号用のインタビューを行った。これから年末にかけて各社のインタビューが続々要望されていると佐々木補佐がいう。私はなるべくことわってほしいといったら、それはできませんよと彼はいう。もちろんことわりえないならやむなく応じて、とくにテレビ、中でもRKBはいけないと私は彼に吹いておいた。これらマスコミは自分に都合のよいように、時にはウソを書く。RKBのごときは勝手な部分を放映して、あとで勝手な解釈をつけた解説をする。マスコミの暴力に泣かされた人は少ない。一般に人はマスコミは利用すべきだというのが、私は常に然りとはいえない。マスコミに利用されてどれだけ多くの人が泣いたか知れない。その苦痛は経験した人でなければわからない。経験した人は骨身にこたえ生涯忘れえぬものとなる。マスコミ利用論者はそういう被害体験がないからである。和代が姫路から来て2～3日滞在しているが、昨夜のごときは、昨年の例の「お布施事件」の体験ばなしで午前2時になるまで時間の経過を思わずすごした。酒井県警本部長がいかにか自民党亀井の落選を逆転当選にするために理不尽な捜索を指揮したか、多くの人がこれを知っているが、みゆき、和代の2人もその被害者の中にいた。もう警察は信用せんと彼らはいう。話はマスコミ論にも及んだ。みんな己れの利益のために踊るのだ。

12月1日（土）

日程が詰まりすぎている

時に、日曜があるだけで土曜日もおそくなつた日の翌日もぐんぐん引っぱり出してこき使う。知事とはそういう運命なんだろうか。特別職の勤務は不特定だというのが、こきつかわれる意味での不特定であって、自由に休めるというのとは全く逆だ。昨日のように出張でおそくなることがわかっているなら今日は午前中比較のおそい出勤というならよいが、今日もまたぎっしり詰められている。しかも土曜の午後も夜もである。健康だからいいようなものの、病弱ならとても対応できないし、健康を崩してしまうのではないか。そのくせ、運動は十分でない。万歩計は、昨日一昨日のように、出張で陳情予定がぎっしりあれば標準の7000歩にはなるが、今日は4000歩がやっと。これでも多い方で3000歩前後という日もないわけではない。主婦の家庭内行動は1万歩になるらしい。主婦が多く健康なのはそれだけ適度な運動をしているからであろうか。ともあれ早や12月になった。外気は12月らしく冷たさを増してきているが、あつという間にこの月も過ぎてしまいそうだ。年賀状が心配になるし、正月のすごし方も気になる。仕事のことはさておきだ。

12月2日(日)

小学校卒業式の時の写真

小学生6年卒業時の写真が私のもつ自分の写真で一番古い。それが刀出においたまま佐方に来てしまってなくなっていたのに、昨年姫路に行ったとき、書写ロープウェイのところまでしてくれた同窓会の折に岸川博君が焼増してもってきてくれ、大変有難いと思っていたら、それを岩崎隆次郎氏が知事選に関する記録を出版するに際し、読売新聞社に私のアルバム一冊を借せといつて持ち出し、それが行衛不明となり、その一冊の中に例の写真が入っていたという。藤江君がそういう。私は最吉田^{マツ}太郎君に手紙を出し、もし余部のその写真があったら手配たのむと書いてやったら早速、昨日それを送ってきてくれた。誰が保有していたのであろうか。実に鮮明に再現された写真である。50年以上も前のもので、自分の顔と先生一人か二人がわかる程度で、あと、同級生といえども皆無に近く判別できない。おそろしいことだ。近頃子供の頃の思い出を記録に綴っているが、記憶というものはあいまいなものだ。それでも正確でないとの前提で当らずとも遠からずで書いておくのはよいことだろう。

12月3日(月)

いかに死ぬか

何らかの話に死に方のことが問題になった。誰しも畳の上で死にたいとか家族に見守られてとかを常識的にいう。但し、長わづらいはしたくないともいう。私は飛行機の墜落とか大洋のまん中で海に落ちて死ぬとかが、思い切り、人知れず死にたいとかいった。他の人が、朝起きたら冷たくなっていたとか、入浴中に死んでいたとかがいいといった。今の病院はなかなか死なせない。植物人間のようになっている、いわゆる不治の病と断定できても死なせない。常に生きているだけの状態にしておく医術は大変発達している。畳の上で死ぬとい

ったようなものでなく、病院のベッドの上で、何日も何日も、看病する家族の方が疲れ切っている、死なせない。医の心というものの有難さを感じるところではなく、医師側が収入の道と心得て、そのための医術を駆使しているのでないかと疑いたくなるような生かし方さえやっている。十一月末に東京に行ったとき、向坂逸郎先生の入院について川口武彦氏に容態を電話できいた。彼は遠回しにしかいわなかったが、もう何ヵ月か知ら、恢復の見込みもなく入院中のようだ。奥さんが大変だろう。お見舞状を書いておいた。

12月4日（火）

歳末の到来に思う

年賀状の季節になった。今年はまだひとまかせだ。そのかわり原稿を書けとの注文がある。後援会など年賀状と暑中見舞だけが主たる仕事になってもいいくらいそのために時間をとられる。あちこちにアドレス書きをたのむと、同じところに何通もいくことが少ない。宛名カードが整理され一箇所でやってくれることが望ましい。それがなかなかできない。この点でも県会議員の方がすぐれている場合がある。ところで今頃は「喪中につき」というのが何枚か配達されてくる。だが、母がとか父が死亡したとか書いてあり、多くは80歳をこえている。ずいぶん長命な人が多いものだ。高齢化社会が急速にやってくる。その社会的準備が日本ではまだ未熟であるが、もう準備にとりかからなければいけないのではないか。今日は、日赤の藤井事務局長がやってきて、今津病院にふれ、ボケ老人対策の公的必要性を強調した。全くその通りだと思う。しかし、秩序立ててどうするかについて県は何の対策も立てていない。21世紀に向けてとはいうが、その辺のことも用意しなければならない。

12月5日（水）

教職員互助会問題で意見一致

2月県議の時、教職員互助会への県費補助金8億円余を野党の力で役員人事が不正常だとの理由で凍結されたままになっているのを、こんどの12月議会で何とか解決せねばならないとしながら、職員長と互助会側が話を詰めているが解決に至っていない。昨日職員長からその点報告があり、今日私が両教組委員長と山ノ上ホテルで会談した。両者の意見の違いはなかった。原則は組織の自主性を守るということで、他からの組織介入は許さない。問題の非労組員への差別事件があった点（特の図書券云々の一支部問題）については陳謝していい、もし理事長を教育長にしなければ補助金は出さないというならそれは返上してよい。その代わりに、地公法42条にいう福利厚生に関する業務は補助金を支出している県職、警察の職員と同等に、教育委員会みずから行うことを要求するということである。これらの条件で教育庁交渉において突っぱねるといふ。私もそれでいくしかない、とっておいた。意見が一致したことについて両教組はよろこんだ。すなおな一致だったのでよかった。年賀状がわりに両教組は私の書いた毛筆の賀状文を機関紙にのせてくれるということにもなった。

12月6日(木)

リーダーシップとは何だろうか、何が欲せられているだろうか

市長会幹事たちとの懇談会の席上、大川の新市長が、大分県知事の一村一品とか熊本県知事の日本一提唱のようなことを福岡県知事もやるべきだといったので私は、一村一品といえはよろしいかといったら、それではないのだが、とあとを濁した。山ノ上ホテルでの県民の会幹事たちとの宴席でも山口一弘氏が知事は、本来の知事らしく、指導性を発揮せよといった。この二人は同じことを求めているのではないかと思う。山口氏は先日の県評と知事との交渉(庁議室)で、知事の答弁が、県評幹部に向けられることを期待したのではなく、居並ぶ各部長に、県評の諸要請にそれぞれ答えるよう知事が指示することを期待したのに、あの場合、知事にはその姿勢がなかったと指摘した。多くの方がリーダーシップの発揮を期待していることは確かだ。山口の指摘では、本気で知事のために働こうと思っている部長は今のところ見当たらないと思うとのこと。そうかも知れない。しかし、右向け右では動いていないにしても県民総立ちその他についても、徐々に私の言い分が部長たちを動かし、発言に影響を与えていることは否めない傾向である。

12月7日(金)

亀井氏がいろいろの形で蘇生しようとしているかにみえる

今日12月議会、自民、社会、緑政のそれぞれ一人による代表質問を消化した。自民の吉塚氏は従前のパターンどおり亀井をほめることによって奥田をそしる話法をとった。頭にこないといえばウソになるが、本気で相手にすることもないと思って答弁書を読んだのだが、あとできいてみると、ひどく元気がなかったとのこと。気力が漲ることがなかったのではあるまいか。声が低すぎたり高すぎるということは、どこかに感情的なものの原因がひそんでいるのであろう。今日の声の低さは若干馬鹿にした要素があったためだろう。こういう比較論でひとを批判するには同じ裏返しの批判が成りたつのだが、私はあえてそれをしないことにしている。亀井氏は12月5日に勲一等瑞宝章叙位叙勲の祝賀会をやって県の現役職員、OB、政財界の人達を集め披露したという。瓦林、永倉、吉本、山下の4人が発起人である。今日のよき日を待ち、人生最高の栄誉と感じたご本人である。自民党県連では遠藤以下、次期知事候補の選考を急ぐ姿勢をとったと伝えられる。昨年「お布施、事件で酒井県警本部長が必死で亀井生きかえりを策したが果せず、今は勲一等で安らぎをえた亀井氏である。

12月8日(土)

多忙さに対する配慮がほしい

土曜日といっても今日もかなり多忙だった。明日は半分は休めるからそれでもがまんができる。多忙ということは精神的再生産ができないということだ。だまっていたらそういう使

い方をされるので知事は秘書にもっと自分を主張すべきだとの周辺の声がだんだん高まり、それが秘書にもきこえるほどになってきたらしい。秘書の方でもできるだけカットにつとめているのですがねといっているが、八方美人的に振舞いたいのが秘書の気持だろう。それらの総合として秘書は私に近い方から、切りやすいのか、切りすてていく。そうすると、近い者の不満がたまっていくことになる。むしろ遠くを切るべきだとの批判をあびる。どちらに味方したらいいか知らぬが、私としては近くを切られると痛みを感じず。遠きは、あってもなくてもわからないのだから、近くは切ってほしくない。ただどうも秘書の日程の組み方には役人くささを感じられ、温い血の通いがむしろ薄い。役人のかっこよさというのかも知れない。一しょけんめいやっているのだろうが、もう一つ温い血を感じられない。選挙という背景がないなら、それはどうでもいいのだが、選挙を意識すると、これではよくないだろう。

12月9日（日）

秘書室の人達には政治的観点が欠けている

ゆうべは2時就寝。おそくまでねていたが朝食すませぬうちに、衣笠・八丁の2人が約束どおりに来た。4月末には奥田県政をかえりみた出版物を出そうとの企画のうちの一つの対話のためだ。10時から2時半まで中食をはさんで録音をとりながらおこなった。話のあとで八丁君は平素の不満を善意ながらぶちあげた。今の秘書室は室長や樺島ら、わが陣営の企図の障碍にすらなっている、というのが意見の主眼であった。行政の立場からは善意であるかも知れないが、政治的な立場を無視しすぎるといふ主意である。だから、知事は政治キャビネットを彼等とは別に作れといふ。もう折返し点にきているのに、秘書の今の体制では政治家の奥田が死んでしまう、次の選挙をもう意識してかからねばならないという点ではかなりの人がその積りになりかけているのに、その意識が今の秘書室には稀薄だといふのである。そのような指摘は当たっていよう。彼等はあくまで役人でその限りで位置に忠実かも知れないが、政治的観点からは役に立たない。むしろ障碍物でしかない。八丁君のこの意見は当たっている、がストレートにもちだせぬ。

12月10日（月）

議会における初のプロ野球論議

代表質問二日目の第一陣公明党の大内氏の質問の最後の方にプロ球団の福岡誘致問題が出てこれが記者達に一ぺんに話題になり、帰ってみたら西日本新聞の夕刊にも早速記事として出ていた。先日仲柳で公明党県議と懇親会をした時、質問に出す約束ができていたものである。ただ私は大内氏の質問に十分満足のいく答をすることができなかった。大内氏もこれを気にしていたようだが、私にとっては不確定要素、個人プレー的色彩が強すぎる問題だったからである。各紙が一せいに取りあげるほどの話題性はあったものの明確にかつ公的に

見解をのべることは避けねばならないと思ったのである。ただ、誰がみても県民市民に楽しみ、又は夢をもたせ、青少年にヒーローを追わせることはよいことである。だが自民党のワル(高山たち)は、あれはできもせぬことを人気取りのためにいつているにすぎぬと水をさすことも忘れてはいない。このワルども数人を除くと、いいことだから大いにやれ、これを機にプロ野球をもう一度博多に呼び返す運動が盛り上がってくればとの期待があるようだし、新聞でみる限り、県民一般にも期待が寄せられることのようにだ。可能性があればやりがいのある課題なんだが。

12月11日(火)

プロ野球を福岡に呼び戻すための困難性

夕方6時20分から駅東のみやこホテルで西武ライオンズ東尾投手の200勝記念祝賀会が開かれた。田中丸氏がよびかけ人代表であいさつした。今久留主さんも来ていて花束を贈っていた。樽割りや乾杯の音頭取りにも私は指名された。昨日の私の議会答弁を東尾も会場の方々も知っていた。東尾いわく、困難性が高いですねと。一つにはどの球団も今は身売りする気はもってないし、2球団ふやすにしても選手が足りないように思う、それに、球団をペイさせるには平均1万人の入場者が必要ですし、又、中核的役割を果たす財界人がいなければならない、と。以上の東尾の指摘はパーティのはじまる前控室で彼が私に語ったことだが、それなりの真実性がある。では全く断念しなければならないのか、問題を一つ一つ解決していけるのか、その辺のことはこれからの検討課題だと思う。やる気のない自民党のワルどもものいう人気取りにすぎない、というのが正しいということになるかも知れない。広島カープが市民球団なら、こちらは県民球団ということにはできないか、赤字がでるのを誰が支えるのか等々問題は限りなくある。

12月12日(水)

知事にあれせよこれせよと保守もいう

一般質問で自民党から、白島備蓄基地着工はしたものの元請に対し、その下請が期待されたほどでなく、12%しかないのは知事が不熱心だからとの質問があった。同じ自民党からは、昨年私が県産品フェアの式典のとき、県産品は少しぐらい高値でも買っていただきたいと発言したことに不満が表明されたのを思い出す。高くても買えとは何ごとかということだったが、白島工事の下請は高くても知事の努力で発注させるよう個別企業を指導せよということらしい。地元三原則(地元企業への下請発注、地元資材の利用、地元雇用)に加え、できるだけ分割発注をとすることを、念をおして白島石油(株)に県が申入れをしていることを知りながら、12%は少なすぎる、知事は熱意がないという。何とでもいえという気になるし、知るか、何もせんぞという反撥を呼びそうな質問ではないか。そういうことを頭にめぐらしながら知事席にがんばる。生活保護受給者が問題にされバラマキ福祉とか依存主義

といわれるが、日本中保守革新を問わず、行政、権力への依存、たかり、が一般、体質化してしまっている。高度成長時代にできていったものだろうが、下請たかりの議員発言にでくわした今日。

12月13日（木）

知事にいや味たらたらしいことを任務とする遠藤参議

ゆうべは県地公労との徹夜交渉、今日は東京予算陳情とくたくただ。それに東京では遠藤という全く嫌な議員と会って「お願い」せねばならない役目をひきうけ、疲れた上に憂鬱な一日、ご^{アツ}気嫌の悪い一日であった。知事なんかしない方が幸福という気分がむらむら出てくるわけだ。自民の国会議員でも遠藤以外はいてねいに扱ってくれるのだから、遠藤は例外かも知れない。昨日は県下の自民党の国会議員と県議員が東京に集って次期知事候補選考の会議をし、近々指名にこぎつける模様と報道されていた。国の次官経験者クラスから物色しようとしているらしいが結構なことだ。なるべく自分達の利益のために動いてくれそうな人を選ぶがよい。遠藤は県連会長をしているのだから自分が名のり出ればいいのに、一度得た地位は手離したくないだろう、冒険もしたくないだろう。だからひとを探すのである。その人は失敗した場合の保障を、ポストを含めて考えねばならぬ。そういうことが論議されたのだろうと思う。みんな私に遠藤に陳情せよというし、行けば必ずいやみたらたらしい遠藤にはあきた。

12月14日（金）

財界との雪どけか

県経済同友会の忘年会が新三浦で開かれた。マスコミ経済記者も多数同席した。経済界の指導者の集りで、このような会に出席したのははじめてだし、向うも今度奥田知事をはじめて呼んだとっていた。逆にいえば去年は向うが遠慮したということだろう。先だって内外通信での講演にも出たが、ああいう形ではすでに接触はあったし、ライオンズクラブでこの秋卓話（中食会）もしたので、だんだん馴らされてきたといえることができる。経済界の意見をきかなければ行政の方向を見定め難いので今後ともよろしくという意味のあいさつをしたのだが、高齢化、情報化、ハイテク化、国際化、筑豊浮揚、福岡県勢浮揚など当面の重要課題に向けての意見をきかせてほしい旨あいさつしたのであった。西日本新聞の多田記者が、いい挨拶だったといい、今後経済界のこうした指導者と会うチャンスをこちらから作りましょうといった。財界と革新知事との雪どけのような現象がみえはじめたといってもいいだろう。こちらがこだわってなくても向うが遠慮し、模様ながめをしていたといえる。いずれにせよこれからの課題として大事に考えたいと思う。プロ野球誘致の話ものみながらであるが出てきた。

12月15日（土）

八丁君の県内人事批判

1時半に帰宅し、2時から八丁、衣笠、安達の3人が来て、来春出版を目ざして作成を急いでいる第一期奥田県政報告（1）なるもの原稿用座談会を行った。前の日曜につづいて今日が2度目、あと1回分は積み残した。座談会内容はそれとして、八丁君が近頃さかんに知事部局内部の人事について批評するようになった。昨年彼が非難していた永沼は企画部長を辞して県外に出た。今問題にされているのは秘書室の樺島、企画の古賀、財政の斎藤である。あとの2人はいずれも中央省の人事。今年春中央から来ていた人事課長は自治省にかえり、内部から浅井がこれに代わったのだが、古賀、斎藤のいずれもが奥田県政にとって有害であると彼は主張している。樺島については、森山の自由な働きを抑えているが故に、これまた有害になっているので、これは代えずとも、森山を自由に働けるように知事から樺島に釘をさしておいてくれというのである。たしかにそのきらいはある。ただ、外部から見てそうした批判が的を^てえているかどうかはにわかには言い難い。場合によっては来春にかなり大幅な人事の入れかえをした方がよいかも知れぬ。だが財政はすぐ動かしにくいだろう。

12月16日（日）

議員族のさもしさ汚なさ

県議会では今、委員会審議があっているが、自民党は、とくに立てるべき大波はないので、小波で少々ごねている。その戦略は、知事と支持団体、とくに労働団体との間の矛盾をつくこと、知事部局内部の攪乱をはかること、即ち職員の知事との離間をはかること、知事自身の言動の自由を束縛することにおかれている。それらが亀井時代からの遺産であり、恥部であるとしても、今の自民党にとっては奥田が困ればいいのであって自己矛盾も、論理矛盾もどうでもいい、力で、数で押しまくろうというのである。公害問題、互助会への補助金執行留保の問題、県立病院現業職給与問題、職員の賃上げ問題、行政改革（定員減）の問題、知事の身辺警備の問題、君が代日の丸の問題、高校の授業料値上げと教育条件整備の関連、等々あれこれとつつきまわしてきている。一面あわれにも思うが、どうせ政治動物のすることかと思えば観念もできる。それにしても汚い！ 人間のさもしい一面があまりにもまともに見えずぎる。今議会は審議の中断は本会議ではないし、委員会でも少ないときいている。前進があったともいえる。そして政策論も出てくるようになった。ただ、自民党は知事を追い込むことが第一であるため、党路線にもと^づくというような高レベルのものでなく、我田引水やおねだり、自民なりの親方日の丸式の論議、つまり低次元のものが目立つ。行政依存、支持地盤への利益誘導型が多いわけ。

12月17日（月）

県公明党大会での奥田批判

公明党の県大会があって奥田批判の質問が代議員から続出したとのこと。新聞報道、県勢衰退の責任は奥田にあり、リーダーシップがないから県政はまかせられないから早く次期候補を探そうという声が執行部にせまり、執行部は、もう少し状況の推移を見守りたいと答えたというのである。ひとの批判を一々気にしていたらこちらが疲れるから気にしないに限るが、公明党の性格が見えたような気がする。一口に言って信頼するに足りない人達の集まりのように思える。公明党だけではない。この頃思うのだが、一日としてひとの批判を耳にしない日はない。とやかくいう人が絶えたことはない。ひとの批判に対し耳を蓋することはないが、あまりききたくないものだ。善意にしる悪意にしる、きかされる者の立場からは気持はよくない。小郡の木村晃郎さんが、どうでもいいじゃないか、といったことがある。気にしない気にしない、知事がどうのこうの批判したり、期待することはないよと彼はいう。一つの意見だと思う。そういう県民も少ない。選挙の時に、候補者をよく見ていて自分で選べばよいと彼はいう。だが党という集合体は、いつもそれが気になるし、それを問題にする人種の集りである。公明党は何が立党精神だかよくわからない人の集りのように思える。限界党といえるのではないか。気にしないこと。

12月18日（火）

日記について新聞に書かれて思う

西日本新聞に私が毎日日記をつけていることが書かれていた。何とかの一徹というか書かないと気がすまなくなっているのが事実なのだが、書くのが一日おくれたり、時には2日分、3日分おくれることもある。旅行する時は荷物になると思えば、書きだめするしかないのもまとめ書きになる。教授時代は書くことがないことが多く苦慮したが、知事になってからは、たねに事欠かない。しかし、一ページ全部埋めるのに十分でない話題をつみ重ねるほかないこともあるし、一つ書いて十分すぎ、他を書く余地がなくなることもある。それよりも、あとで見もしないだろうになぜという疑問が時におこる。しかし時に見るので、その時は価値ありと認めうる。短い時間つまり、寝る前、朝の出勤前にあたふたと書くので文章はまことにまずいものが少ない。誤字、脱字、脈絡その他欠点だらけ、とくに、脈絡、文章のあやにはあとからの自己反省が少なくない。それに、全くの主観その時の主観だから、こんなことは書かない方がよかった、今はもう違う見方をしているのにとということもある。とくに個人に対する叙述にそれがある。しかし、その時そう思ったということが大事だから、と思うのでそれがやはり貴重である。ひとのことはとくにその一面だけと私のその時の接点なのだ。

12月19日(水)

自民党の県議会攪乱作戦はじまる

自民党が県議会運営をしたい放題にかきまわしている。中間政党はそれを見ている。あまりにもという度をこしたところまでこないと中間は動かない。21日ぎりぎりか、それを一寸こえたところまで、自民党はハネ、中間派があいそうをつかすということになってくるのではないだろうか。中間派というのは順風のときは是々非々とみえる態度できれいに見えるが、非が多数のときは完全に黙して決して是々非々でないことがわかる。今日は日程どおりにいけば12月県議会の審議が知事保留をふくめ議了するはずのところ、その目途さえたない状況で暮れた。何かハネ場を作りたい自民に、どこからもれたか「知事との対話」の昨年12月10日第1回分のカセットおこし原稿が入手され、その中の高校授業料値上げ論をめぐる私の説明分が、今回の提案理由と違う(今回正式提案した1、2年生同時値上案)という解釈をなし、これに喰いついて来て、広報室長が条例委員会とか予算委員会かでこっぴどくしぼられたらしい。知事出席を求むではなく、広報室をねらえということで室長をしぼり上げていることは明らかである。それは知事の県民との対話(行政)という姿勢を攻撃することに目標がありそうだ。遠藤政夫あたりの指令と思える。

12月20日(木)

山本作兵衛氏の死去

教職員互助会への補助金支出執行条件に、互助会役員から教員組合の影響を排除しない限り執行停止だということで今年の2月議会以来自民党が押しまくってきている。こんどの議会でもこれが一つの波瀾の目。もう一つは県立授業料(高校)の値上げで知事がいう理由にくいちがいがあるということで1、2年生の値上げ案にクレームをつけ、昨年の「知事との対話」での私の発言を速記録から掘り出して違いの説明を求め、昨日今日議会審議は進展をみていない状況である。なぜこうなるのか。一つには平穩に県議会が終ることは自民党の面子にかかわる、もう一つは知事とその支持団体、又は支持県民との関係の冷却化をはかること、大きくみるとこの二つの戦略が審議ストップの原因になっている。政略のためなら何でもやる手練手管を使うというのが政治の世界の常道であろうか。県会議員も年末多忙だろうに、ごくろうさんなことだといいたい。昨日夕刊に山本作兵衛さんが死去したと報じられていたので、今日の葬儀には生花と弔電を用意するよう指示しておいた。素人ながら炭鉞の絵をせっせと書いてきた人だ。県の宝といえよう。

12月21日(金)

三木清の「無駄、づかい強要

「知事との対話」の全資料を出せといいだしたのが三木清。これは知事が対外的に何をいつとるかわからないから、これを調べないことには審議をしても「無駄、と審議期間延長(今

日限りのを24日まで）という“無駄”にもっていく理由となった。県民との対話で知事が何をいったかを全部しらべないと審議に応じないという横暴がまかり通る。“対話の日”の問題箇所はすでに出ていて、他の対話の記録を出したからとてどうこうことはないはず。それに、議会の委員会も自民が多数だから多数の横暴がまかり通る。私ら、記録提出の要望が一方でありながら審議は進むと思うのだが、提出あるまで審議しても“無駄”という主張が多数のゆえにまかり通ってしまうのである。広報室は全部課に依頼して急ぎテープおこし、コピーをやりその経費は紙代だけでざっと25万円、職員の残業賃をふくめると莫大となり、議員の会期延長日当、泊、の費用をふくめると何百万円になるが、三木清の発言一つでそういうことになっていくということを県民は知らない。しかも、これについて知事の釈明を求めればそういうことをしなくてもすむということをしよとしない。一切の釈明説明は拒否し、三木の主観的解釈だけで押し通していく、この民主主義の幼稚さ。

12月22日（土）

田川福祉事務所の緊張

田川福祉事務所で生活保護受給者が保護を打切られたのを怒り事務所にやって来て係長を殴ったとかで、逮捕されるという事件があり、今日の新聞に大きく報道された。この男はこれまで毎月28万円の保護費を受け、土建業を営み12台の車を所有、小アパートも経営、フィリピンなど海外旅行を過去5年間に8回行っているという。保護受給は48年10月からでまる10年。11月に打切れ、申請してきたのが却下され怒ったという。家族9人。午前中に秘書室から電話があり、被害者の係長と所長の宛先が通報され、要請されたので、私は早速見舞、はげましの手紙を書いたわけ。生活保護受給者がマイカーをもっていることが新聞に書かれてからまだ月日があまりたっていないし、県下の福祉事務所長を集めて県の講堂で不正受給をきびしくチェックするよう私が訓示したのも1ヵ月余り前のように思える。田川福祉事務所管内はそうした例が多いし、今事務所あげてこうした問題に取り組んでいるときく。こうした問題をなくしていかないと、筑豊のもつ暗いイメージはなくなるし、それをなくしないと筑豊の再生はありえないと私は思う。亀井知事が残した一つの恥部、こんな恥部が今どんどん出てきている。

12月23日（日）

甘木線存廃の瀬戸際に立っている

甘木線廃止問題について昨日高崎新八氏に少々現地で前向きに動いてみないか、塚本市長ひとりやきもきやっているようだが周辺のもり上げについて市長に働きかけてみないか、県が何にもしないわけにはいかないのだということを、来宅してもらって話したのだが、夜彼からもう少しポイントの理解のためにききたいという電話があった。実は今日空港で日航バリ島チャーター初便就航式に行ったとき、佐野交通対策課長が来ていて、彼のいうに

は、知事が年明けて甘木線に乗って現地市民と会うのはいいが、県は何もしてやれないという態度を明確にきめてからにしないと、市民に合うと、いい顔をしないといけないので、それでは後始末に困るという意味のことを私に言った。そのことを高崎君に伝えたのだが、要は、佐野氏のいうところの甘木市長だけでは駄目なので関連する三輪、大刀洗、小郡などの市町関係者が燃えることが必要だといわれている。この県側の見方にどうこたえうるかにかかっているので、新年明けまでに高崎氏が動いてどう事態がかわってくるかである。なかなか困難なようだ。

12月24日(月)

県議会の「空転」とクリスマス・イヴ

クリスマス・イヴも近頃は様が変わりしてきたとか。10時半頃中洲を車で通ってみたが、人出が意外に少いと印象。早く帰宅してこの夜は家族と楽しもうということで、忘年会の日程がかなり回避され、二次会、三次会と飲み歩く人も少なくなったのではなかろうか。今夜だけでも早く帰ろうという気持を抱くのはよいことだ。今日も終日県議会は水面下の取引のため、公式日程は進まず、待ちの時間が過ぎていった。秘書室では女性たち3人ともおそくまで残って備えているが、クリスマス・ケーキを準備したのでということで、6時すぎだったか、秘書室の「台所」まで出向き、ごちそうになった。昨年はこの日議会在夜の8時頃に終わったということを彼女たちは記憶していた。誰しも早く帰りたいと思うのだが、そこは政治の非情さ、いわゆる「空転」しておそくまで引きとめられる人が少ない。私の帰宅は空しい気持で午後11時少し前。もちろんクリスマスのどうのではないが、少しの時間をさいて、みゆき、藤江の兩人に、おそくなった事情、予算陳情のための上京日程が狂ったことなど茶のみ話に出した。みゆきは莫大な県費の「空費」があっていることを指摘して憤慨。それは政治コストだと、こちらが慰めの発言する立場に立つ。知事警備の無駄づかい、公舎不入居の無駄づかいを指摘する野党は、今回の「空転」も知事の責任だという。

12月25日(火)

年末年始をやっと議会から解放された

どこまで延びるか果てしもない県議会だったが、今日午後要求されている対話の記録(資料)を全部提出し、知事から議長に予算陳情のため今日おそくとも最終便で上京する旨正式文書要請することで、事態を新展開させるしかないということになり、午後六時半から本会議を開き、会期を1月14日まで延長することをきめ、13日まで休会を宣して、ようやく年内打切りという幕引きになった。東京からも、知事が出てこないのは福岡県だけというような声が届き出し、自民党も、こうして議会がごたついたのも知事の責任と、自己の潔白さを言い張りつつ幕引きを認めたのである。まるで子供のけんかのように、相手が悪いといえば気がすむという自民党の幼稚さではあるが、多数党だから、いわせておくしかないだろう。

政治とはいえ、嫌われ役を辛抱強くよくやるものだと感心する。お互い年末で忙しかろうに、気の毒ではある。昔も今も政治とはこうも汚いものかと思つづく。今は、それでも毒を盛るとか切り合うとかなうだけましであろうと思うしか慰めようがない自分である。好きだからという人がいるが決して決して好きでやるわけではない。学問とか文学とか芸術とかもっときれいな世界が人間にはたくさんある。自民党のどこにきれいな世界があるのだろうか。

12月26日（水）

陳情について

昨夕県議会で歓呼の声に送られて予算陳情に上京。今日は万歩計が7千歩を刻むほどによく歩いて陳情した。意味あることと思えばその通りだが、夕食会の時社会党の細谷代議士がいうには、予算案の98%は8月段階で決まってしまうので、陳情というけれど、殆んど意味はないんだなということである。ところが他方、建設大臣が自民の自見代議士に、福岡県知事の陳情がないという意味のことをいったので、明日は日程を余分につけ加えてでも知事は建設大臣に顔を合わせてほしいと佐々木がいう。又今日の自民5役会では東北、北陸の両新幹線は着工と決まったが九州新幹線は工事々務所設置に止まるとの決定をしたので、明日は急ぎょ九州新幹線関係知事会（朝食会）をし大陳情しようということになってきた。九州新幹線がおくれをとったのは陳情に熱意が足りないからとかいわれているらしい。自民党系が陳情政治が好きふうに見える。遠藤政夫だって、奥田は陳情の仕方が少いと指摘したことがある。陳情がなくてもしなければならぬことが一ぱいあり、それが98%を占め陳情で取り込む分が2%なのかも知れない。いずれにせよ政治には情というものがあるのだから、そこに陳情の意味があるのであろう。それにしても今回も県庁の職員が大挙して陳情に従事した。巨額の経費を使って……

12月27日（木）

正月をどう迎えるか

帰福のJAL機の中でのアナウンスでお正月まであと4日という言葉をきいた。日記帳もいよいよ残り少いという感じ。午後6時半頃空港から同乗してきた森山君と、正月をどう迎えるかについて打合わせをしたが、秘書室が特別のことをしてくれなくてもいいというのが、みゆきの意見でもあり、私も賛成であった。こんどの正月はどんな人が、どのくらい来訪するか知らない、はじめての経験になろう、県の職員や経済界などから来る限り秘書にも責任があるのでと森山はいう。しかし狭いうちに一人でも多くなることは困るので、当方で客には適当に扱うから、来援はしなくてよいと結論した。屠蘇は準備したし、ごちそうは多目に作っておけばよかろう。あがり込んで話す客は少い方がいい。森山が示したスケジュール表によれば、29日まで、そして新年は4日からびっしり隙間もない程詰めてある。暇を

与えないのである。知的、心理的再生産が危くなるほどである。家にいる時間ぐらい多くしてくれないとそれはできない。秘書がつきまわっているのだから拘束されているに等しい。正月には孫たちも来るといふ。水入らずが一番いい。来客おことわりといたい宣言するわけにもいかないし、逃亡してしまうわけにもいかない。ふつうに、構えていようと思う。

12月28日（金）

県民の会会報出る

県民の会の代表幹事たちが、60年度の施策大綱の要求をひっさげて庁議室にきた。昨年はなかったことだが、選挙の時の8つの約束と2つの誓いを中心に、過去一年半余でそれがどれほど実現したか、今後にどのような問題を残しているかに分けて整理し、なかなかよくまとまったものになっていた。駅前2丁目の東映ハイラーク***号室に以前から山口氏を責任者として事務所を構えていたが、近頃やっとな動き出したという。私のアメリカン・フットボール運動着姿で撮影した新年あいさつ号の刷り物をはじめて発行していて、そこには会費1口千円の県民の会入会の案内があり、この会報は年2回発行すると書いてある。知事を取りかえてみてこの一年半余をふりかえっての県民の夢、願望と現実の着が錯綜してあらわされている。自民党の奥田いじめが頭にきている人も多いうだ。マスコミが面白半分にニュースにするから不必要に誇大化されて伝えられているようだ。それにしてもまだ夢と期待は決して小さくはないようだ。代表幹事たちがそれを一身に引きうけてくれている。ただ県民の会はまだ組織が脆弱であり寄り合い世帯的である。共産党との折れ合いが難しいといっていたが、工夫すれば乗り切れるはず。

【部屋番号は*で記した】

12月29日（土）

県議に対する歳暮まわり

昨日は筑後に、今日は筑豊と北九及び福岡にと、年末のあいさつまわりに行った。県議野党の幹部と松本英一、住吉徳光氏なのだが、悪いけれど知事が足を運ぶ政治的意味があると考えられるからである。それも自分で考案してというよりは、こうするのがよいという周囲の意見に従って、副知事と分担しながらである。今年一年間の県政への協力とお礼と来年もよろしくとのお願いまわりである。知事がこういうことをしなければならぬのかとふと思うけれども、やっておいた方がよいというからには、これまた仕事のうちというほかはない。昨年の筑後市の牛島県議の場合は本人はもちろんのこと、市長、助役、市議長、農協商工会の役員ら主たるメンバーを事務所に集めて忘年パーティをやる形で知事を迎えた人もあったが、他は玄関であいさつ程度でぐるぐるまわった。あまりていねいに迎えてくれると、こちらめいわくというか、他にスケジュールがあるので困惑するのだから、玄関であいさつの言葉を交わす程度なのが望ましいわけだ。神秘的に迎える人もあるし、中には留守で

会えない人もある。応待は大変違っている。今年は与党関係は副知事に分担してもらった。毎年こういうことをするのかと思うと、心理的には若干重荷だ。

12月30日（日）

奥田知事の人気上昇を抑える課題を真剣に模索する自民党

今年もとうとう暮れた。思い出せばいろいろのことがあったが、1月下旬にハワイに行ったことに関連して、有明炭鉱の火災と国会陳情のため急ぎ、旅程を切り捨てて帰国したのに、遠藤とRKBが歩調を合わせて私のハワイゆきを非難したこと、それに関連して自民党が奥田つぶしに執念をもやしたことが一番印象に残ることだろう。次は、中国に2度行ったこと。4月下旬の「友好の翼」と9月の「九州青年の船」とだが2度とも団長として行き、任務はかなり重かった。その中で福岡への中国総領事館設置が年内に決定をみたことも大きく評価でき強く印象に残る問題であった。こうしたことと関連して、自民党は奥田知事を攻めあぐねている。知事は実にこまめに県内をまわり県民と接触をはかり、その度ごとに人気上昇しており、このままでは次期選挙は奥田に取られてしまいそうだという危機感が大きく上昇して来たようである。只遠藤では作戦は下手だし、県議会議長の篠田も力量がない。財界反奥田の先頭に立っていた瓦林も健康がすぐれないのでこれに代わる人がすぐにでも必要なようだ。県民の会がようやく動き出したが反奥田勢力の動きにはかなわないという。

12月31日（月）

政治とまつりごと

イベント行政でいいという声が近頃処々できられる。ある意味ではそうかも知れない。昔から政治というのがそういう性格をもっていたのである。何か善政を施すというよりは、大衆によき印象を与えるイベントをもって大衆の目に耳に残り、よろこんでもらうことが先決というのである。その点逆なのが汚職その他のスキャンダルであろう。そういう意味で来年は何かやってみようではないかということを感じて模索している今日この頃である。昨年山笠に乗ったり、大相撲に知事杯を出したり、大衆の目にふれるものに顔を出すことの大切さが強調されている。去る11月1日の柳川での白秋祭に出席したのもよかったし、来年は白秋生誕百年というから、これにも力を入れなければなるまい。政治が祭事と不可分なのはそのことを意味すると思うが、そういう関連が知事をしていて2年たつてだんだんわかって来たというのが偽らざる新認識なのである。そういうことを巧まずにやれる人と巧みつつもやれない人との間に政治家としての手腕の違いがありそうに思える。

アドレス再変更通知先

すくらむ社、太田薫研究所

朝鮮新報社福岡支局、労働新聞九州支社

ローフレンズ・地域懇、生きる権利、交流の広場
カネミ油症事件弁護団、福岡民報社、中小企業情報センター
防犯ふくおか、こくろう調査

徳永崑久子、岩崎友四郎、船越英雄、原田八重

1986年

年頭所感

もう一冊の日記に同じく年頭所感なるものを書いているので、一面それに譲った方がよいのだが、他面で感じていることをここでは綴ってみたい。というのは知事職にいと公務があまりにも多く、私的な時間が極度に制限されることへの反省である。正直なところ、公務にすべてを捧げる積りは私にはない。やはり自分がかわいいのである。だから毎日が公務と私的生活との戦いといってよい。私的生活の中には適度な休養、娯楽、教養への時間が第一。それとともに家族的団欒が第二。第一を優先すれば第二が稀薄になる。つとめて第二も大切と心懸けるが、第一の場合にもその場その場でプライオリティがあって相互は排他的である。今までのところ教養の時間が最も少いように思う。こうした点で、今後とも時間の配分について一般と工夫をこらすのが今年のとつとめのように思う。すでに65歳。あといつまで生きれるのか全く自信があるわけではない。妙なことに気を配るようだが、死ということを考えて、平素から自分を悔なきまでに作っておかねばならぬと思っている。この年にならないとそういう思いは生じなかったものだ。日記というものはその日の即興詩で一つの反省だが、推敲なくどンドン書いていく。文章の選択はなく出たら目である。それでも何かの役に立ち記録の意味をもつ。ともかく書きつづけよう。一つの意地のようなものだ。健康がそれを可能にする。

一月要記

この一ヵ月、大変に多忙だった。知事として県下をずい分廻った。秘書室など、次の知事選を念頭において日程を組んだのであろう。新年宴会なるものに驚くほど多く出たし、新年あいさつ廻りの件数も去年より多かったと思う。しかも、すべて知事の方から頭を下げて廻るように仕組まれたものである。そのようなことが必要かどうか知らぬが、そうした方がいいというからそれに従っている。鶴崎、亀井の両知事はそんなことはしなかったのではないかと思う。ひとは、奥田知事はよく動くとか気さくに物をいうと評しているようだ。私もそう思う。別に尊大ぶる必要もなく育ちがそうだから不自然でもない。しかし見方によっては知事選を念頭にして卑屈すぎるといえないだろうか。ともあれよく人に顔を合わせた。それに、支援団体たる人達とも近頃はよく顔を合わせた。県評、自治労、地区労の諸君らだ。これらの人達は過去二年間むしろ周辺部に置去りにしていたきらいがあったので、今年はつとめて顔を合わせておかないといけないだろうということになってそれを意識的に日程に入れはじめたのである。でもその中で自治労は情勢がきびしいだけに地方課から締めつけられて、それを奥田のせいにしてしている向きがあるらしい。革新知事を実現しても役に立たぬとの反撥が出ているというのだ。私はそうした判断は若干甘いと思う。

むしろすべて筋を通すことが賢明なのであって、長い目でみてほしいのである。周辺の人とよくつき合うので、奥田を見直すという人がかなり増えているように思うが、間違いなからうか。

1月1日(水)

一ノ宮次長 コウ一家 来宅

藤江君に頼んでおいたらこの日記を買ってきてくれたので、これと一年間おつき合いすることになる。元日の新聞は一〇〇ページ前後どっさり来るが、読みたくなるページはない。一ヵ月料金先約の形だから(そして宅配制だから)止むなくページを消化するために印刷しているにすぎない。こんな形式を止める勇気のある社はないのかと思う。二〇〇円ばかり安くし、従業員をはっきり休ませればよいのだ。賀状がどんと来る。郵便受けに詰めこんであつたらしい。こちらは二〇〇〇枚か数えてもみないが、知事ということでどんと来る。一通り見るだけで三〜四時間はかかった。既知の人からのものが勿論最も多いが、念頭に浮んで来ない個人のもものが相当に多い。今年は当方で賀状は一枚も書いていない。県民の会、秘書室が書いてくれたのに委せてしまっている。賀状の交換の形になったかどうか全く自信はない。一方交通になったのも、相当数あると思うが、どうにも対応の仕様がなない。欠礼になった分はかんべんしていただくしかない。

1月2日(木)

前原町の諸岡さん信二君を連れて来訪

正月三日間は全く外に出ないのではないだろうか。今日は小雪がちらついているかと思うと陽がさして来たりもした。かなり寒そうだ。孫たちに昨年同様書初めの指導をしてのち、みずからも揮毫に時間をさいた。頼まれたものが五枚もたまっていた。軸物がそのうち四枚、一寸墨がうすかったようだ。昨夜の夢を初夢というが久美にどんなのかきいたら言えないと首を横に振った。私の場合、見たのか見なかったのか全く残影がない。一彦らは管崎宮に行った。参詣者はそう多くなかったという。寒いせいだろうか。昨夜のテレビでは元旦に明治神宮二一五万人、太宰府天満宮九五万人等々と報じていた。明治神宮は前年よりかなり多かったということだ。宮参りがどんな意味をもつのか知らないが、私の場合多分に気休めである。ひとがすることならしたらいい、しないとどうか忘れものをしたように思う。でも今年は今のところチャンスなしだ。どこか公用で行くときに、時間がとれれば車を寄せて参詣することにしてすませようとは思っている。

1月3日(金)

来訪 県評、協会の者 佐々木正躬

協会の連中が来るという予告はあったものの、二・三人が三時頃にときいていたのに、八

人もやってきた。ひる前十一時に。連絡が悪いと苦情をいっておいた。県評の政治部長をしていた山川氏のいうには、今年は秘書室だけで知事の日程を決めてもらっては困る、こちらもどしどし日程をあけてもらおうと思っていると、選挙がらみの考えが前面に出てきている。再選立候補声明は六月の参議院選のあとにしなければならないだろう、ともいう。首藤氏は名を出したものの、公明党はしぶい反応しかしていない。その調整に手間どるだろうともいう。当方は共産党をどう扱うかにまだ問題が残っている。山川氏は着物着用で、今日は知事に物申すために来たとはいったものの、そう苦情めいたことではなく、これから一年あちこちに知事に出てもらうということを言いたかった。秘書の佐々木君があいさつに来てこの話合いにまきこまれて、つき合っていた。彼らはかなり酒を飲んでいった。みんな次期知事選を意識している。今年はそういうことで、あちこちに引きまわされてゆっくりする時間がますますなくなってきたきそうだ。

1月4日（土）

年頭訓示

今日の年頭記者会見、職員への知事訓示は、今年の県政の基本方針をのべ、一応評判はよかったと思う。二〇世紀型福岡県から脱皮し、二一世紀のあるべき姿を意欲的に求めていくということを基底にすえての話。石炭、鉄そして頭脳を関西、関東に提供してきた福岡県から脱皮し、みずからの加工、組立型の生産を目ざす方向を指向する。それを技術立県という言葉で呼んでいいという意味である。今年昨年からの宿題である情報公開と行政改革が始動する。この中で県は確実に過去の姿から脱皮するだろう。昨年は生活保護の適正化、県営家賃滞納処理、公害屋の介入排除などに着手し、過去の体質からの脱皮をはかったが、今年もそれをつづけていく。昨年指摘された大濠公園池水の浄化も大きな課題であるし、高齢化対策を総合的に進めるモデル事業をみのらせたい。又、国際化には一般と腰を入れ、「国際平和年」らしく、県レベル、民際レベルの国際交流を促進、真の平和維持に貢献していきたい等々の所見をのべたのであった。

1月5日（日）

子ども会 カルタ大会

昨年につづき今年も篠栗の社会教育総合センターで県子連主催の新年カルタ大会があつてそれに臨席した。昨夜からの雪であいにく道が凍り、参加者は二〇〇以上の予定のところ九〇人に減っているとのこと、それでも形になった。広い体育館はよく暖房され、子ども達は喜々としてカルタ会を楽しんでくれた。われわれの子ども時代と少し違っていることに気づいたが、これをよく点検できないのが残念である。それと同じ文言ながら取札（絵）が、出版元によってか、異なるものであった。いろはカルタだから四八枚あるが。十枚ぐらい残してゲームセットになる。九チームの参加で同一チームの合計でトーナメント方式

で取札の多数を競うのである。カルタの意味を理解するのはやさしいのもあるし、難しいのもある。私も全部についてよく理解してないのがあれこれあるので、いつかの時を利用して内容の全解に努力したいと思う。子どもは小学生が中心だが、耳からまず入れ、中味の理解の要を自分で感じとり、日常の言葉の中に使えるようにだんだんなってもらいたい。又、こうした行事を通じて、他人との協調性等を身につけてほしいのである。又県子連もこれを毎年つづけてほしいものだ。

1月6日(月)

技術立県への意欲

今日は消防の出初式(福岡は平和台)に出るほか、あちこち新年のあいさつまわり。名刺交換会又は祝賀会に数多く列席した。が、ひるに福岡商工会議所の新年祝賀会では知事としての年頭所感を折り込んだあいさつをした。とくにそれは四日の記者会見のとき、技術立県を表に出したことと関連し、商工行政に改めて力点をおくべきことを強調したものであった。大石君は時間がかかりすぎたと批判していたが、あとでひとの口からきいたところでは感銘深いいいあいさつだったというのである。同じことはこの日記の一月四日のページに書いているのだが、今日も県の商工予算が他県にくらべ相対的に低位にあったことを反省し、九州又は福岡の経済の落ち込みを歎くだけでなく、みずからの力で蘇生する工夫をすべきであること、それに関して県もその手伝いをするに積極的な反省をするといっておいた。年明け早々に九大を中心とする理工系の教授に集ってもらい、技術立県への道をさぐることにしたい。産学官の協同というが、産学の協同を官(行政)が積極的に場の提供を通じて実を進めていきたいと思っている。

1月7日(火)

九歴田村館長の提言

九歴の田村館長が来訪。私見だがと前おきして、研究員を朝鮮、中国へ研修のため派遣する制度、また国際シンポジウムを開催することの必要を強調された。大へん有益な提案と思う。歴史研究は日進月歩のようだ。われわれのこれまで準備された資料だけではすでに十分でない時代になっていることは確実だ。研究者を韓国に派遣して学術交流を、又向うの研究者に来てもらってこちらで学術討論をとることが歴史研究に新しいページを開くことになることは否定すべくもない。問題は、その費用の捻出だ。県財政はこのままではその余地はない。財政課は来年の予算編成に苦慮している。税務当局の説明では法人二税を中心に今年度の歳入欠陥が七二億円に達するという。田村先生の提案をこういう状況のもとで実現するには、かなりの圧力が必要である。あるいはそれを容れるほどの声を集める必要がある。田村先生の意図は、私にそのイニシアティブをとるよにということであろう。私に一つの課題がふえたわけ。教育委員会の所管に属することであろうが、その方

面には、そうした知恵が働く人がいないのではないかと思う。質の向上が望まれる。

1月8日（水）

次期への積極的言動が必要といわれている。

新年祝賀の集会やらあいさつが次々とつづく。そうした中で、次期知事選への話題も少ない。大手門会館七階での中立労連の祝賀会では奥田再選へ向けてとの幹部のあいさつが声高かった。夕方の北九地評の旗びらきに於てもその声は一そう高かった。そこではあと一年にせまった市長選との連携もみんなに強く意識されていた。当然ともいえよう。小倉の新聞三社に賀詞に行った時もその話が出た。県の記者クラブも、私の発言から何とか次期選挙に関する匂いをかぎ出そうとしている。読売本社ではそれが直接的話題となった。すでに私の周辺ではそれを意識しない人はないといってよい。私は人にこの問題を語るとき、ずっと消極的な発言をつづけてきた。だが周囲の人の多くは、積極的に発言することを期待しているようだ。再びやる気があるということと言動にあらわすべきだいうのである。「政治的」角度からはそれが当然であろう。でないと、多くの人の期待感にこたえられないからである。さらに健康についてきかれた時は、お蔭様で大変元気だといえと秘書はいう。私は「何とかやっている」とか「自信はない」という。それがいけないと評されるのである。

1月9日（木）

韓国を訪問することになった県青年の船

今年の福岡県青年の船が中国のほか韓国にも行くことになり、韓国も快く受け入れてくれることになったので、そのお礼の気持ちをふくめ、在福総領事鄭氏を「てら岡」に招待して夕食を共にした。県側は近藤、一宮、井上、永田など。自民党県議の中に共産国中国に行くことを快く思わぬ者があり、一番近い韓国になぜ行かないのかとの発言があり、これをしりぞけてばかりはおれぬということで今年から県青年の船の韓国訪問が企画されることになったのである。韓国は今ソウル・オリンピックに向けて沸いているし、南北の話合い雰囲気もこれまでになくやわらいでいる。社会党内にも韓国との接触を排する者が少くなりつつある。しかし、国内にはなお南北の対立を意識的に問題にする向きは根強く残っている。板門店を境とする南北の対立模様が一つの観光宣伝の材料になっていることは確かだ。県青年の船も見学コースの中にそれが組み込まれている。韓国の歴史をわれわれは知らなすぎる。南北の別なく朝鮮を知らなすぎる。けれども、板門店を一方側からだけ見せられて隣国を知らされるのはかえって不幸というしかない。板門店がコースからはずされて韓国を理解するようになった方がいいのではないだろうか。

1月10日(金)

健康について おかげで元気でやっている。

満州八一五部隊時代の嘉根君の遺稿集(緋寒桜)が奥さん(弘子夫人)から送ってきている。私の方から賀状を出したらしい。はさんであった手紙によると、昨春七回忌に当たっていたと書いてある。京大、法曹生活、近大教授という経歴である。歌集には満州時代に関したものはないようだ。が既に亡きとの報に接するといささか感慨深いものがある。どういふことで亡くなったのだろうか。五十六歳没とある。今日山ノ上ホテルで国際化問題懇話会の夕食会があったが、席と盃をかわしながら、私が健康だということが話題になった。果たして私が健康かどうかいふべくもないが、私は辛抱だけはひとに負けないつもりといった。横にいた大塚副知事は健康は父母のおかげと強調していた。その通りではあろうが、やはりそれに加えて己れみずからの肉体を自分で管理する自覚も必要ではなかろうかといったら、横から誰かが奥さんのおかげでもありますよといった。すべてが真実であろう。先日新年のあいさつのなかで、さきにも書いたことだがあるところで、私が健康に自信はないのだが何とかやっているといったら、きいていた大石君があとで、そのようないい方はダメだ、「お蔭で元気でやっているといえ」との意見をのべた。もっともだ。

1月11日(土)

出版計画をどう進めるか

昨日あいさつまわりの途中時間がとれて問研にあいさつに行く機会があった。木下君が「県民ひとすじ」の出版につき、報告してくれた。一二〇〇〇部出版、著者用三〇〇〇、著者買取り二三〇ということ、源泉税一〇%(一七万五千五〇〇円)で印税一割の一萬一千七〇〇冊分の一七五万五千円、これから買取り分代金二九万九千円を差引くと、一二八万五〇〇円の印税になるはずという。まだ現金回収がかなりおこなわれているらしく、これらの数字が現実のものになる日はほど遠いらしいのである。今日、社会党県本に新年あいさつに行き、竹村書記長に、今年も夏までに、一冊の本を出版したいのでよろしくとっておいた。前と同じ方式ですかというから、メンバーをかえたいと思うとっておいた。社会党にあいさつなしに出したので、協力しなかったとかいう声が以前きこえてきたので、今回はその点注意したいと思っている。が、そうすればなかなか編集が進まないのではないかと心配する。問研が介入してくれないとうまくいかないのではないだろうか。

1月12日(日)

休日に思う

今日は昨日につづいて珍しい快晴だった。それでも外気はかなり冷たい。ふとんの日なたぼっこが一とおりにおこなわれていた。休日、おそ目の朝食。高野切の第二を終わり、第三に入った。私としては第二によくなれたような気がする。第三が書きよいという人が多い

が、どちらともいえない。佐々木氏から電話があつて、今日葬式ができたという。藤本さんという人。どこの課だったか頭に残っていない。あれもこれも関係はずい分と多いものだ。午後河野氏を呼んで又昨夜と同様にマージャンをして楽しんだ。きりがないので困る。それでも何かして遊ぶことを思えばそれで気がすむ。することが山ほどあるのに、今日はそのほか手紙三通、はがき五通書いたからまずは満足するしかないだろう。一日中書齋にいたらよいのだがと思いつつ、誘われればつい遊んでしまう。高野切は第三が終わると三回通り書くことになる。だんだん自分でみても少この腕は上っているのではないかと思えるようになった。だんだん自分でみても少この腕は上っているのではないかと思えるようになった。

1月13日（月）

愛国心と国防思想を強調した吉本氏の新年あいさつ

福岡の青年会議所の新年会は知事、市長、商工会議所会頭の三人に十分程度話しをさせるやり方で二〇〇人ばかりの会員に情勢の認識をしてもらう方法を取り入れていた。私と進藤さんはそれぞれ、県市の当面する情勢と行政方針の大要を話したが、吉本氏は政治経済よりは教育が大事だと前おきして、教育基本法にふれ、日教組の倫理綱領が子供達に社会主義の教育をするという偏向におちいっており、おかげで最近は組織率も減少傾向にあるというよこばしい状況だといひ、基本法に欠けているのは愛国心教育と国防の重要性をうたっていない点であるので、当面の臨教審がその点を是正すべく提言することを願うものである、諸君は教育基本法と日教組の倫理綱領をよく読み返してほしいと演説した。会場には笑いもおこったが、終って拍手もかなり高かった。さすが行政の任に当る者はこれほど明々白白の政治色ある演説はできないだろう。吉本氏はどういう積りで、こういう演説を新年冒頭に青年企業家にしたのであろうか。

1月14日（火）

技術立県発言に協力を求める

今日の庁議の終りに、私から今年には技術立県ということをあちこちで主張してまわっているが、これは単に商工部だけではなく、各部共通の課題として受けとめ、協力してほしいといったのだが、夜の赤保谷部長の送別会するとき、田中水産林務部長が、いいことをいってくれたと私に告げた。佐々木氏も私のこの発言はみんなによい印象を与えたといっていたので、これは評判がよかったらしい。又記者会見の席では、国鉄余剰人員の県への受け入れについて記者から質問があり、県行革の時期で大変きびしいが、国（自治省）、国鉄からも強い要望があつているので、無視できないが、県の人員採用計画はすでに固まっているので、今年度は困難な状況にあると答えたが夕刊にすでに記事として出ており、まずはあの答弁でよかったと評された。万事大変困難な問題が多い感じだが、先ずは無難な対応

といえそうだ。国は国鉄で生ずる余剰人員は生じた県で対応するよう求めているらしいが、それは無理な話である。過疎地で鉄道が廃止されているのに、吸収力は乏しいことはわかっている。

1月15日(水)

天皇在位六十年をどう祝賀すべきか。

昨日の三役会議で、さきの県議会で請願採択になった天皇在位六十年式典を県主催で行うことについて、来る二月議会で必ず問題になろうからどう扱うかが議題になった。総務部ではやるしかないといって原案を出して来たが近藤副知事が、こちらから積極的に扱わぬ方がよいと発言した。議会では、社、共、公の反対を押し切って採択した請願である。(公明は保留)。政府は何らかの式典を四月二十九日にやろうとしている。自治体(県レベル)で主催者として式典をするのは一県にとどまる。これが二月議会でもめる材料であることは確かだが、私はもめた方が県民のコンセンサスを得るのにいいと思っている。ところで、在位六十年は世界に類例のない慶事というけれど、単純にそうのみ考えてよいかどうかには疑問がある。同じ人がそのような座に六十年もいてその国が祝うべきことかどうか。こういう座はもっと短い年期の間に適宜交代があることの方がよいのではないか。今の天皇の指図で前の戦争をやめることになった英断をたたえるという人もいる。これ又変な論法だ。はじめからやらない方がよかった戦争ではなかったのか。

1月16日(木)

「夕焼け小焼け」

十二時四〇分のANAで上京した。初上京。機内誌翼の王国一月号にダークダックスの一人喜早哲の「日本人のこころ「夕焼け小焼け」」をよんで考えさせられた。作詩中村雨紅、作曲草川信。作詩は大正八年頃らしい。そして作曲は関東大震災の直前の大正十二年七月で楽譜は震災で紙型からすべて焼失したといわれる。雨紅さんは八王子市の人、草川さんは長野の人(武蔵音大校長たる福井直秋さんが長野師範付属小の先生をしていた時代の教え子)で福井氏が草川氏に作曲を依頼したとある。私は曾左小学校の一年生の時に川上先生からこの歌をおそわり、運動会の時に全クラス輪になって「お遊戯」でうたったのをはっきり記憶しているし、今でもこのお遊戯だけは、宙でできるような気がする。作詞作曲が誰なのか関心を寄せることも、以来たえてなかったが、宴席あたりで、とっさに一曲やれといわれて、子供の頃を思い出してこれを歌ったことが何回かある。それほどに子供心に強く焼きついた歌なのである。でも歌詞に一寸した問題があるように思える。「子供が帰ったあとからは、丸い大きなお月様、小鳥が夢をみる頃は、空にはキラキラ金の星」と、月と星があまりにもくっつきすぎている。でもいい歌であるに違いない。忘れ難い。

1月17日（金）

陳情政治について

政府各省や国会議員（県選出）に昨日今日かけあしで来年度政府予算案編成（県関係分内示）のお礼まいりをした。陳情・御礼の連続くりかえしである。これを陳情政治とはよくいったものだ。それは正しく政治の分野に属する。何回も顔を合わせていると情が移るといふのだ。頼みに来もしなかったとか、してやっても礼にも来なかったとか、よくきくのだが、陳情と礼まいりはその逆である。陳情経費の方が成果より高いということすら場合によってはあるかも知れない。それでも陳情は、他のいかなる時に役立つかわからないといわれている。陳情政治を非難する人があり、その筋はたしかに通っている。それでもその筋で割り切っていくことができないのが政治の世界なのである。何回も何回も主張しつづける。それがいつかの時に生きてくる。その機会は多いほど有効だろう。人は中央政府が保守であれば地方も同色がよいとよくいう。今の政府が保守だから、保守系の人は余計にそれをいう。でも、その理くつは多種多様な政治的要因の中では背景に退いてしまう。保守だから革新だからという区別は効果決定の要因の中では小さいものでしかない。陳情は心のふれ合い（熱意）という点で、よかれ悪しかれ、政治要因として大きい。

1月18日（土）

今、県民、青年に望むものは何か

大手門でパルフィの県代表たちとの懇談会が催され、私はかなりはっきり青年の自発的努力を強調した。二十一世紀を展望して、彼らの奮起を求め甘えは許されないといっておいた。二十世紀の福岡県は今終ろうとしている。日本の近代化と戦時戦後の日本を支えた福岡県はもうなくなっている。その後遺症の始末にどれだけ手厚くしても何の建設もできなくなっている。福岡県はそういう位置におかれているし、同様に福岡県の青年もそれを自覚しなければならないだろう。運動のスタイルも安保・三池のたたかいをすでに過去のものとしている。婦問研の人達に今日あいさつした点でもあるが、ひとをはじめから保守革新に分けた運動スタイルから脱皮し、ある人を仲間に引き入れるためにとるべきノーハウ、ハウツウを工夫して運動をしなければいけないのではないかとのことである。逞しい青年、挑戦に立つ青年こそが今求められている。パルフィの青年たちにそうしたことを訴えたのである。でも、彼らの話をきいていると、まだまだ依存主義から十分に脱却していない。知事は——行政は——どうしてくれるのかということ、ともかくも言いたいらしい。根気よく、今、私は、訴えつづけようと思う。

1月19日（日）

生徒や父兄がよろこぶ農業高校を練成していきたい

午後那の津荘で社会主義協会福岡県支部の新年集会有って私と中西績介氏とが特別参加

した。私が三〇分ほど無題で演説した。国労や高教組の同志達は運動のあり方の転換を余儀なくされている。その自覚はあるようだが名案が浮かばないでいるようだ。私は高教組について、とくに糸島、田川両農林高校を子供や父兄によろこんでもらえる高校に練成していくよう教員が団結して何かを考え出すべきだということを提案した。特殊な工夫をすることによって、高校がよろこばれるようにせねばならぬとなると。一ひねりも二ひねりも必要だろうが、それはやってできぬはずがない。高教組出身の協会役員もかなりいるわけだから、何かのきっかけをつかんでやってほしい。そのために私が現場に出向くことができるならば、その労は惜しむまいとっておいた。すぐにできることではないが、今後一年二年とかければできるはずだ。一人も卒業生が企業に就職できぬらしいが、その突破口も徐々に開いていけるはずである。今年の一つの目標にしたいものだ。

1月20日(月)

参院地方区社党は小柳に代って渡辺氏がきまった。衆院三区社党は細谷氏にきまった。世界画報社が東京でインタビューし、こんどは福岡の各地を撮影してまわるということで来福、私が大濠をバックとする被写体にもなった。今日は久々の快晴。気温も低くなくて、満点の撮影びよりであった。鳩や海鳥も近くにやってきて餌を与えながらの撮影でほんとうによかった。六〇〇円ほどの画報だが、ダイナミック福岡という見出しで特集してくれるというので、出来上ったら三〇〇冊ほど県民の会が買うとの話も出ている。今日は夜の新年会で社会党県議団が県民の会、地公労、県評あたりを招待してくれて、八仙閣でにぎわった。社会党の決めで、小柳氏をおろし代りに渡辺四郎氏を今年の参院選に立候補させるという。議員七〇歳定年という取り決めをしたらしい。細谷(三区)は例外という努力をして、それが結実したともいわれている。自治省通の細谷氏である。自治側からも私に、社会党の代議士七〇歳定年につき、細谷氏だけは例外的に扱ってもらえるようにならぬものかとの声がかかっていたので、細谷氏の再出馬の可能性がでてきたということによるこぼしいことだ。今年の参院選地方区では小柳勇氏がおろされて、代りに自治労県本委員長渡辺四郎氏が立つことにきまったらしい。彼も今後その方向で動くだろう。

1月21日(火)

中国総領事館の用地決定に、県市が苦悩している。福岡市は北九州市と誘致につき綱引きしただけあって、用地提供にはそれなりの責任があり、県としても、市が用地候補はないという現状でも、おいそれとその肩代わりを引きうけるわけにはいかない。北九州市に言いわけできない。かといって、福岡市が用地提供に窮しているというのに、これを見て見ぬふりはできないし、中国側に対する義理もはたせない。誘致するまでは用地の提供はすると約束しておきながら、今となって土地はないという福岡市の態度こそがむしろ破廉恥といわねばならない。ここ十日ほどこのことで話は沸騰している。県も苦慮し、今日の三

役会で問題にし話合ってみたが名案はない。中国側は百道の県有地（研修所敷地）を所望しているが、当方にはその代替地がほしい。教育事務所用としても同じく代替地を求めざるをえない。それを市に求めるが、市はそれを冷淡に受けとめて事態の前進がここ旬日みられないでいる。県としては誘致問題のいきさつから、市側に責任をとってもらおうよう再度求めることになった。近々中国大使が来福するが、それまでに事が決まる必要がある。

1月22日（水）

「奥様はソ連人」

県南視察等の日程で、明日に備え、原鶴の泰泉閣に泊る。町長はこの宿の経営者。一席もうけてくれて前夜祭になった。町長、助役、議長副議長が同席。町長は亀井前知事の有力支持者だったと自称し、この宿をつづけるには、町長をやめねばならぬ程の矛盾をもっているらしい。知事選の時に奥田の嫁はソ連人だとのデマを信じていたらしい程の実力者である。「奥田の次男の嫁はソ連の隣西側のフィンランド人」ということで根も葉もないデマではなく、「」内の言葉を好きなように省略するとそういうことにもなると私は説明しておいた。思いの外きさくだという話にもなったので、飲みながら生い立ちなど話して、飾り気などもともとないのだということを手説しておいた。林町長には保守なら保守でいいではないか。知事と町長の、人間と人間のつき合いをしましょうともいっておいた。彼は私に火葬場の看板書きをついでに頼むといって原稿を受取って別れた。保守とか革新とか忘れねばならぬ時は忘れ、人間としての付き合いが必要ならそうしようじゃないかと私はいう。参議院の遠藤政夫は合うたびに敵意をこめた言葉を一言私にいうが、これは人間として下の下に属するのではないだろうか。それにしても「奥様がソ連人」とは省略大。

1月23日（木）

行政腐敗

西日本新聞二十二日の夕刊に、熊谷宝珠山村長逮捕の記事の下に、「県下の汚職事件、月間摘発は史上最高、三件逮捕者十人」と見出しがある。内訳は石炭鉱害事業団（四人）、香春町老人ホーム望岳園、同町公共事業で三人、宝珠山林道事件で三人である。昨年暮れには山田市長選があったのだが、ここでは市長、議長、その前に柳川の市長が収賄で逮捕され、いずれも失職に至っている。以上みても一年足らずで五件も自治体首長にかかわる収賄事件があがっている。県警は、奥田県政下ということもあってか、近頃この種事件の捜索に力を入れているようだ。先日の県幹部研修会でも私は綱紀肅正というか、清潔な県政の推進というか、職員の不信行為をいましめる点を指摘したのであるが、どうしてこのように腐敗事象が多いのか残念でならない。今日の政治構造の中に事件が入り込む素地があることは否めない。補助金づけといわれる行政の仕組み及び、業界の過当競争不況もこれを助長していると思う。それにしてもそうした中で本来の首長の使命自覚の不足が最後の

鍵ではないだろうか。職員への訓示の必要があるように思える。

1月24日（金）

選挙の生臭い話

住吉県議父子を三光園に招いての懇親会が午後六時から行われ、私は七時から（中国大使歓迎会に出たあと）出席した。選挙の話があちこちに出たが、来年の一月にある北九市長選に谷伍平氏は出馬しないということが決まったという事だった。谷さんはもう、古い政治家で、彼の感覚では北九州市の地盤沈下は救いようがないということ。八幡地区でも製鉄所労使、民社党からも支持を失っているし、自民党は候補者をさがしあぐんでいると、住吉徳光氏がいていた。知事候補首藤氏についても、自民党はばらばらで、真剣に推す人はいないだろう、奥田人気上昇しているのでみんな困っているともいていた。県側から近藤、林の両三役が出ていたし、社会党の林氏も出ていて、住吉氏はこれらの人物がうまく立ちまわっているの、自民党は奥田を攻めあぐんでいると、彼らを讃賞してた。どういうことになるのか知らないが、奥田さんは再選、三選は狙えるともいていた。私が鶴崎や亀井とくらべ官僚臭なく庶民的なところがもてるし、県民党を名のっているの、攻めようがないのだともいていた。多くの人の奥田評はこういうところ集っているともいう。こういうことが話題になることを予定しての今日の懇親会だったのであろう。

1月25日（土）

具島兼三郎先生の傘寿祝賀

具島兼三郎先生の傘寿祝賀会が県民の会レベルで大手門会館で行われた。講演会がその前にあって氏は八〇年の生涯について反ファシズムの観点での講演を二時間にわたって行った。元気そのもの。大会場でもマイク不要の彼の声量である。私はその終わり方にかけて「友人代表」という名目であいさつしたが、とてもこの声量、話術にはかなわない、望むらくは八〇歳まで生きて具島氏と同じ方向で活動したいという意味のあいさつをした。大学時代には遠くからみていた具島先生だったが、彼は定年後長崎大の学長になり以来私も時に接するようになった。むしろ学長をひかれた後は接触がさらに回数ふえ、三年前の知事選をめぐってはいよいよ密になり、県民の会代表として大活躍をしていただくことになった。選挙直後のいわゆる「お布施事件」で責任云々の問題が出たが、しばらくして県民の会代表の位置を去られた。でもこの絆は絶ち難く、盆暮にはあいさつはかかせられぬ人である。夜は八時すぎには就寝、朝は四時頃から起きて学問的仕事に打込まれるときく。少し若い小林栄三郎さんは今は亡く、一寸上の田中定さんはかなりふけこんである。具島さんは文字どおりカクシャクだ。

1月26日（日）

健康と関連しての多忙とやる気

日曜だが、四つのことで外出しなければならなかった。あちこちに顔を出しておくようにとの趣旨ではあろうが、八時半に帰宅し、明日にそなえて揮毫せねばならぬとあっては、全く自分の時間のない日曜になってしまう。何だか不満が半分残って割り切れぬ。サンパレスのアマ無線の場合も、宇美町の場合も、私は大変歓迎されたように思う。その分よろこびではあるがやっぱり不満が残る。一月はとくに大変ですと秘書はいうが、過度であると思う。それに近頃はどうしてか睡眠が十分でない。安定剤を使っているのに、眠ったという感じがしない。ひる間は眠いばかりである。どこか体調が崩れているのではないだろうか。ひとは私に健康の秘訣はときく。健康でないというわけにもいかないのに、特別の策を講じているわけでもなく、気力ですよと、答にならぬ返答をする。昨日の具島先生傘寿祝賀会の時に、居合わせた池田数好先生を加え三人でその話題が交わされたが、池田先生は精神力が健康のかなりなファクターであることを強調されていた。「やるぞ」という気構えのようなものが支えかとも思う。はて、ほんとうだろうか。多忙もその一因かもしれないし。

1月27日（月）

今後の産業開拓

三階講堂で「ふくおか二一世紀」シンポの基調講演をきいた。松下電器の技術顧問唐津一氏の話である。私は今年はじめ技術立県といていたが、この話は私の意を強めるものであった。日本人は応用のうまい民族だと彼はいう。アイディアに富むのであろう。今や日本は世界の10%経済に成長したが、技術応用が実に巧みな日本人がそうさせたのだというのである。資源は豊かでないとはいえ、それを巧みに利用し、世界経済をリードしている。新素材など、日本人得意の分野だそう。ニューセラミックス、バイオ関係もその中に入る。福岡県は、石炭と鉄の時代が過ぎ、傾きかけているが、知恵を働かせれば必ず伸びる素地をもっている。八幡の鉄をふくめ、下請会社も、将来を見込みうる。又福岡は酒どころでもあるので、バイオ分野で余地があるはずだということだ。私の考えでは九大をはじめ技術系大学の集積は大きい。これを産業に応用させる。大企業である必要はない。むしろ中小企業の方が小まわりがきく。残るは根性、「やる気」だと彼は主張した。全く同感である。

1月28日（火）

県産品 紅乙女

午後北九州に出発する前に、「紅乙女」社長林田春野さんが知事室にやって来た。まだ若いのかと聞いていたら明治という。私より十歳上である。女性社長の実態はよく知らないが、

活動的な人であることは間違いない。知事になって後、その年かその翌年か田主丸の醸造元に訪ねたことがある。巨峰ワインも製造している。こちらはまだ試作の由。ひとにきくとワインとしては甘味が強いから品は落ちるとのことだが、挑戦している点が美しい。焼酎紅乙女は、東京でも近頃名が知られるに至った。今日の彼女の話では砂糖を使って甘味を加えるのもあるが、自分のところでは、それをしないで通しているという。今日持って来てくれた一本は、容器が青緑の焼物になっていたが、この容器にも工夫しているのだとのこと。この容器で焼酎の味がよくなることを願っているのだといい、焼物の土、焼き方など試作しているらしい。県産品の一代表とあってよいが、こういう努力が私にとっては尊いことと思える。今日行橋地区労で「知事と語る会」があり、講話するチャンスがあったが、福岡県の北海道などといっているのはダメで、何かに挑戦してほしいといっておいたが、紅乙女のことも念頭にあったわけだ。

1月29日（水）

県立農業高校を立派にしたい。

赤村での対話集会の時、右手窓際にいてヒゲをたくわえた青年から、教育問題の重要性についての所見をきかれた。その答として私は、教育問題についてなるべく発言はひかえたいが、農業高校（県立）に入試に際し定員割れが生じているなど問題であることにかんがみ、親も生徒も行きたくない。行かせたくないなんて、学校教育自身に問題があるのではないかと思うので、田川や糸島の農高を仮に選んで、その学校をよくすることに力を注ぎたいと考えを披露した。今日、大学では従来人気の少なかった農学部への志願者が急増に転じている傾向があるが、農業高校も人気を回復させる余地があるはずと考えたのである。先日高教組の加地書記長にも同じ意見をのべ、農業高校を視察してもよいと伝えていたわけだ。このような私の発言が少しずつ周辺に伝えられると、いつかそれが一般的に問題として取り上げられるようになるに違いないと思う。その日のために、今はこの程度だが、次のチャンスには、もっと大きな問題提起として表面化したいと思っている。親も生徒も農業高校にもっと関心を寄せるようにしたいのである。教師集団がやる気を出すことが先決だろう。

1月30日（木）

長たる者平素から綱紀、交通事故、健康等々の訓示の要

一月には地方行政連絡会議を含め、県職員にあいさつをする機会がかなり多かった。私はその都度、綱紀、交通事故、健康の三点を強調することになっている。地方公務員の醜聞が多く新聞沙汰になっているこの頃である。綱紀の問題は何回強調してもしすぎることはない。九大の部長をしているとき、火の用心をつねに言っていた。これを言っているのに火事が起きたら起した者が悪いといえるが、長たる者が平素いっていないと、注意不十分と

いわれるにきまっている。火事は、近頃ほとんど鉄筋だからそれほどにないにしても、他の三つは今もって長たる者の部下統率の重要綱目であるに違いない。健康はややもすれば怠り勝ちだが、これに注意するのは上役の任務の一つであるといつてよい。交通事故は役所の迷惑のみならず、わが身を窮地に陥れる災厄であるからくれぐれも用心してほしい。綱紀のうちに入るかどうか、安易に保証人になったり、まがい商法にひっかかったりするケースも少なくなく、それで身を亡すことがある。これまた要注意である。

1月31日（金）

飯塚市の殷賑に思う

九工大の、飯塚に建設がきまった新学部（情報工学部）の建設予定現地を見に行った。そのあと筑豊ハイツで行われている飯塚地方行政連絡会議に出席した。その間の沿道のにぎにぎしいこと、又何とはなくほこりっぽいのが感じられた。にぎにぎしいのは、自動車関連業、パチンコ等娯楽関連業、そして、料飲業等サービス業などなどの、広告、看板、のぼり旗、ネオンのひしめき合う状況である。ヒラヒラ、ピカピカ、チラチラ、そしてカラフルな文字。表向き殷賑といえはいえるが、何だか気味悪い。ひとのポケットをねらうマネキンの匂いの方が強い。九工大がこういう環境に来ていいのかどうか私にはわからない。産炭地の跡にこの種のもので立地するしかなかったといえはいえるが、何ともどうかと思う。教授も学生も、どことなく嫌になるかも知れない。これが新しい心配になってきた。どうも私には石炭なきあとの筑豊の健康ならざる生きざまが気になって仕方がない。九工大の情報工学部が進出してきてこうした空気をかえることになるかどうか。思い過ぎでないことを心配する。生産業がもっと育ってほしいし、それらを混えた活気であってほしい。筑豊のこのような賑い方は背後にむしろ問題があるように思える。オートレースは今どうなっているのか知ら。

2月1日（土）

岩崎隆次郎と八丁和生の対立

森山君の話では、この六月の参院選に小柳をおろして渡辺四郎を立てたいきさつの中で、県社会党及び社会主義協会（太田派）が分裂状況になっている。衆議院三区で細谷をどうするかも同じくもめているらしい。協会では岩崎の方に中川や山川がつき、八丁、高崎と対立が深刻になっている。この両者の対立は以前からのあったのだが、森山の話では、今は危機的だとのこと。八丁の主張は小柳が七〇歳をすぎ、党の方針どおりに立候補させないとなると、次の知事選で、小柳票を失うことになるということのようだ。小柳氏が独自のやり方で固有の票をもっていることは公認のことあり、渡辺がそれを譲りうけることはないとの主張は当をえていよう。社会党の方針は原則論であって、例外があってもいいというのが八丁のいい分らしい。ここで私見をはさむ必要はないが、原則か例外かで争うの

ではなくて、互譲とか大局的見地に立つことが大切ではないだろうか。何が互譲で何が大局的見地か私にはよくわからないが、八丁、岩崎の間のように、さきに対立ありで、そのことを前提にして一方がいうのには他方が反対というのでは、いかにも幼稚な結論ではないだろうか。この二人は「敢えて」平素から感情的に他に対し名ざしで非難するまでに至っている。残念なことで、引退以外に解決の道はないようだ。

2月2日（日）

三無主義の克服

今日は日曜だったが、朝から山ノ上ホテルで社会党県議幹部に対する六十一年度予算案編成状況の説明会があった。この予算案は大事だということで慎重を要するという点でチェックを受けるのはよいが、財源がないのでなかなか特徴が出せないのも、意見は沈みがちであった。午後私は一寸抜け出て国際センターで開かれた社青同系の若者の集り「みえますか二十一世紀」集会に出てあいさつをした。全国から八〇〇〇人も集まったわけ。若いことはよいことだと思う。二十一世紀が平和のうちに迎えられなければならない。二十一世紀を担って立つ彼らが集っている。私は、この飽食の時代に無感動、無関心、無責任の「三無主義」を克服すべくみんなで工夫し、自覚し活動してほしいと訴えた。この三つの無をどう克服するかが今求められているといっても過言ではない。この集会は若人の今日のとるべき方向を見定める集りであるはずだが、核の廃絶以外に多くの人達は目標を他に見定めえないでいるのではないだろうかと思える。三無に加えて無目的、無定見を加えてもよいかも知れない。だが他方では私たち年輩者が及びもつかぬ創造力をそなえているといってもよい。こうした団体活動の中からその力を育ててほしいのだ。

2月3日（月）

医は仁術だろう。

国際ホールで県医師会の第八回新春懇談会があった。医療制度の見直しが進む今日、医業界は医師過剰、医業経営の困難など危機感がひしひしと感じられ、誰もがあいさつの中でそれを訴えていた。ある意味ではこれまでがよすぎたのかも知れないし、今日でもうまく行っている医業者はずい分と多い。これからが医師過剰、機械貧乏、経営不如意がますます強まるだろう。そうした中で公的医療のあり方がとわれる時代がやってくる、というよりは真の医療はいかにあるべきかが問われる時代になろう。封建時代がどうだったのか知らない。その前の時代、否、人類の歴史の中で医療行為がどう扱われ位置づけされていたのか論ずる力は私にはない。医は仁術とか看護精神というのが、いつの時代にも問われたのではないだろうか。そういう意味では「医業の危機」ということになるのがかえっていいことかも知れない。医者が、カネで女を自由に行っているという例が最近一つマスコミに取上げられた。北九州病院グループ事件もある。それらが警察沙汰になることは一つの警

鐘といえよう。

2月4日（火）

新年度当初予算編成の苦悩

知事査定分について財政担当と三役との間で、一日びったり意見の調整会議がつづき、又その間に各種団体の陳情がはさまった。又夜おそくから社会党県議幹部との同問題についての意見交換を行った。財源がないだけに今回の予算編成はとくに苦しい。財政当局、三役、県議、陳情側それぞれに立場が異っているわけであり、各部長レベルではそれらすべてとの関係で又異った要求を持ち出してくる。そうしたものの渦が私の周辺をとり巻き、決断をせまってくるわけだ。どうにも動かしようのないもの、巨額のもの、要求の根拠や詰めが不確実なもの、特殊な圧力を背後から受けたもの、知事選がらみで、政治色の濃厚なもの等々いろいろ様々である。特別の紐がはっきりするもの、見え隠れするもの、その他等々、合計が法律上、行政ルール上、政治上、巻きつき合い絡み合っていて、何とすべきか表現を知らない。中央政府の行財政の方針はこの際、大きな与件であるが、そのこと自体は問題にしようがない。他の府県の事情も似たりよったりだが、それが今の我が予算案の問題点の弁解にはならない。だから外向けに言訳が立つようにつくろうほかはなくなってくるのである。

2月5日（水）

失対労働者のうちの引退者引退料一五〇万円の上積み処理について

来年度で失対労働者七〇歳以上の者の整理が行われることになり、その対象者が県に五、五〇〇人あるという。一五〇万円の引退料が保障され、その四分の一を県残り四分の一を市町村がもつ、半分は国がもつ、という措置が約束される。今日の査定で県負担分が二〇億円余と決まった。政府は六五歳以上は失業者扱いをしないこととし、まず七〇歳以上を、次いで毎年一歳ずつ低めていって五年間で六五歳以下にしてしまう方針である。市町村では四分の一の負担をもてないとの主張があり、このうち幾らかでも県が負担してほしいといっている。今日は査定後早速添田の山本町長から超過負担頼むとの電話があった。市町村では四分の一に二〇万円ほど上積みする約束をさせられているところがあるときいているが、この個別上積み分をいくらかでも県がかぶってくれとの要求でもある。つまり、一人一五〇万円という政府決定分に現地では上積みを強要され、その尻を県に求めてきているのである。添田町長は前から要求していたのに今日の知事査定ではそれがついてないと電話でいう。だけれども、形式上、今日の査定ではとてもつけられるものではない。

2月6日（木）

離合集散の世界

次期知事選がらみであれこれの情報が耳に入る。今年の参院選で社党福岡が小柳をおろして渡辺を立てることにしたこともこれにからんでいる。今日の森山の話では小柳派がまきかえしにかかっているとのこと。いよいよ社会党福岡の内部はぎくしゃくしてきたといえる。一方、林県議の話では、知事選につき、首藤を押し立てることにつき、浜中ら住吉グループは消極的で、早麻、篠田らが積極的に動くのではないかと、そうなると、公明民社が追従するはずがないというのである。浜中は奥田と一応の脈が通ずるので、正面切って対立候補の線で動ききらんといっているらしい。首藤氏は近頃体調をこわして休んでいるともいわれ、正月祝賀のあれこれの席に顔を出していないらしい。ともかくこの種のことがあれこれささやかれるこの頃である。社党県議の中では中杉が年末に脱党して議会内部に種々波紋を投じているが、これは知事選がらみからみてもそう大きな問題ではないようだ。中杉は社会党控室から出て一人一党の部屋を作り、部落解放の別派を公然と名乗っているという。何とかと称する派名の看板をかかげているが、ソウうつ病のソウの時期だともいわれている。ともあれややこしい政治の世界ではある。

【「受信」欄】

柳淑子さん 福岡高農改革について電話連絡

2月7日(金)

学官の連携の道を探ってみる。

「かわさき」での夜の会は八〇〇〇円の会費をとる「知事をはげます」意味の懇親会になったが、はじめ清山氏と私の打合わせでは大学と県行政の連携をはかるための地ならしの集りとなっていたはずなのに、清山氏が田中学長に人選を依頼したので、学長は大学の公的な集りになってはいけないと思って知事との私的な会にしてしまったような人選をしたということである。来集したのは、学長、事務局長(舟橋)、青木(工)、林(農)、中村(医)、大屋、深町(経)、鈴木(文)ら現役組のほか、清山、西川、上田のOB組、それに県側からは私と池田企画開発部長、大塚商工部長、噌西技術振興課長の四人であった。学園紛争時代の古い「戦友」たちがほとんど、それに九大組ということで、話は紛争の思い出や、技術立県のことなどが主だった。私はあいさつの中で、福岡県が今後二十一世紀に発展する道は、二十世紀に果たした石炭と鉄の時代との訣別であり、技術立県、学官の協同しかないと思うということであった。それはそれでよいのだが、組織づくりとしては、九大のほかの大学にも働きかけ、技術振興懇話会のようなものを作って、公的な性格をもたせてワーキンググループ的役割を求めるほかないだろうということになった。一つクッションが必要のようだ。

2月8日(土)

馬と乗手

青山道夫先生のことを評して、あの人は馬がないのに馬に乗っているかのように思い込んでいた人だという。昨日「かわさき」での清山グループの懇親会の時の九大の某教授の弁である。高教組の大塚氏（今は県評）がいうには、賢い馬は乗手が知らなくても、ちゃんと乗せてみせる、と。賢い馬は荷車の主が酔っぱらって道を意識しなくなってしまうとしても、ちゃんと行く先に到達させるともいう。知事選の話で、候補が乗手で、その参謀が馬だとのたとえにこの話がもち出されているのである。前の知事選の時は、事務局を取りしきった岩崎がえらかったという話にもなる。面白いたとえだと思うのである。もちろんそればかりではないだろうが、馬と乗手の関係の一側面であろう。馬は乗手が馬鹿なときは、落馬させてしまうこともあるし、乗手がちゃんとした者であれば、その手綱さばきが誤っていてもそれに盲従することなく、適正に乗手を運ぶであろう。だから結局は両方とも賢くなければいけないし、他方に誤りがあっても一方がちゃんとリードするという関係が必要ということではあるまいか。

2月9日（日）

首藤氏次期知事選に出馬決意表明

新聞報道で、昨日の自民党福岡県連大会の席上、首藤堯氏（前公営企業金融公庫総裁、元自治事務次官、元福岡県副知事）が、あいさつに立ち「友党との協力が可能なら、たくましい県勢を再建するための努力をしてみたい」と次期知事選出馬の決意を表明したとある。党本部の佐藤信二全国組織委員長は「北海道は奪還困難だが、福岡は可能だ」との見解を表明したとある。首藤氏は記者会見で、友党との足並みの揃いを前提としつつも「私はすでに決意した」とのべ、二月下旬に福岡に居を構え、三月から県下各地をまわるという。昨秋以来活動をはじめべきところ、年末に風邪をこじらせ、二月下旬には全快の予定とのことである。首藤氏はもちろん、自民党勢のいわんとするところは、「県勢浮揚」を最大課題とし、そのために、中央との太いパイプ、企業誘致を積極的に訴えていくという点にある。そうしかいいようがないだろうが、自主的努力ではなくて、他力本願でというこれまでどうりの発想で、県民の中のそうした惰性に乗っかろうとしたところにミソがある。

2月10日（月）

印税のこと

「県政ひとすじ」について一五〇万余の印税が入ったが、税金、所得税市民税の増徴などでほとんど消え去るといっている。社問研に謝礼のいくらかでもするとしてもほとんど残らない。本作りに協力した人達への謝礼もしなくてはならないが、それも十分にはできないし、今後こそなえて残本を買おうとしても、手出しが必要のようだ。税の申告期になっているが、原稿づくりに費したコストはどうなるのかというと、秘書の方で税務署と連絡をした結果ではコストは見ない（控除の対象にならない）といっているとか。全く筋の通

らない話だと思う。領収書があればというそうだが、それは一々とっておく性格のものではない。そういうことで問研との間で若干の往復があったらしいが、私が知事でないなら税務署に行って相談するのだが、秘書にはその気はなく、納税のキャンペーンに知事を使って形式上の申告をさせようとして、あれこれ書類を作り、印税は残りませんねというだけで、経費控除については、特別の配慮はしようとはしない。それにしてもこの種の収入についての徴税は酷といえよう。原稿を作るのに費用がかかると見ないとは腹立たしい限りではないか。

2月11日(火)

揮毫のこと

一昨日は色紙、今日は条幅と休む時間でまとまった時間がとれる限り筆をもつ。ひとから頼まれたり、頼まれてやったりで、結局は揮毫注文がどんどんたまっていくのである。今日現在で宿題の条幅は半切で六枚ある。藤江君が墨をすってくれるから助かる。自分ですると三〇～四〇分はゆうにかかってしまう。なかなか濃くならないのでいららすることさえある。みゆきが揮毫依頼の多いのにびっくりし、秘書室に、もっとコントロールしてもらわねばと私にいう。でも私は、どの程度コントロールすればよいか判断しかねる。書いてもらう人によっては「家宝にする」という人さえある。まさかと思うが、そう思う人は少ないらしい。先日、赤村に対話のため行ったとき、村長が「知事閣下」という言葉を使ったとあって近々しい人からびっくりされたことがある。が冗談まじりにいう人を加えて、村長同様に大真面目にいう人も少ないようだ。尤もかなり古い年輩の人だが……。それにしても「家宝」的に思う人が新しい時代の人の中にもかなりあることは事実である。私はそう嫌でもないから時間が許す限り頼まれればことわることなく書いてあげようと思っている。

2月12日(水)

職員食堂での中食

今日の与党懇のとき、中村県議が、私の職員食堂での中食を話題にした。一昨日同所で彼と顔を合わせたので、彼の感想をのべたのである。食堂に行くとき秘書をつけておけとか、椅子のもっと多く空いている所に行ったらどうかとか……。大石氏がまだ自分の膳を運んで来てない時のことだろう。私がひとりで食堂に行くかのようにみえたのである。ひとりどころか警察がいつも二人ついて来ている。ただ私自身が膳を運ぶ姿がどうも気がかりらしい。大石秘書は以前私に運ばせず、食べ終わったあとも私の分も下げていた時期があった。その前の松尾、佐々木の両氏は私があげさげするのを干渉しなかった。あるとき大石氏との話で、ひとが見ているから私が運ぶということにしたのである。それはひとによってやはり奇異に見えるようである。知事さんは、こんな所で食べるんですかとか、知事さんが

隣にかけて食べてくれるのは光栄ですとか、庁外からの利用者で、いつもテレビなどでしか見ないのに、今日はこんなま近くで見れるなんて、と言う人もいる。一般の人の見る目はこのようである。職員食堂利用のこと、膳のあげさげのこと、雑沓の中で食べること等々、よい解釈、奇異な解釈、いろいろあるようだが私は好きなようにする。

2月13日（木）

新聞全面利用での北野の盛華園を材料にした県民の会の広告

県民の会がグリーン21を出し、又今日の西日本新聞の夕刊には全面広告で「北野の大地に夢を育てる男達。これなんだよ」をのせた。前者は若干部分議会内で物議をかもしているようだが、この夕刊には文句はつけられないだろう。左上に私の半像が写真ででていて「進取の気風と熱い行動力。彼らに会って感動しました」と語っているように書いてある。三井郡北野町のミツバの水耕栽培をしている五人の男の盛華園が大きく写真入りで取りあげられている。これ、県民総立ち、県産品愛用さらには「がんばるけん、ふくおかけん」というようなスローガンをふんだんに使った知事の政策宣伝になっている。広告主は「けんみんの会」（清潔な県民本位の県政をつくる会）としてある。実は夕方仕事が終わった頃秘書室の方から私が見せられ、帰宅してからゆっくり見ておいてくれといわれたので、再確認した次第。山口氏がこの企画を立て、年に何回か連続して同様のものを出していくといわれている。この正月明けに取材に行ってきたということでミツバを届けてきてくれたのだが、それがこんな広告になるとは驚きである。

2月14日（金）

県職員のヨーロッパ研修

県職員のヨーロッパ研修だが今年度は十一月に十人（うち二人女性）で十五日間ということだ。今日その報告会が、レポート集を前にして行なわれた。イギリス、フランス、デンマーク、スペイン、西ドイツなどをまわってくるのだからほんとうにかけ足旅行。それでも半数以上が海外はじめてというから感動の連続だったようだ。各人がテーマをもち、社会福祉、環境衛生、自治制度などをしらべてくる。あらかじめ勉強しておいてレポートを出し選抜されて研修団に加わる。旅行社の仲介でホテルや先方の案内者を世話してもらう。ヨーロッパは既に古い国々ばかりのようだし、逆に日本は新^{ママ}々の後追い国である。社会保障など行きづまり、税金は高く、失業者があふれているといわれる。しかしそのたまたまいは落付いていて底固く美しい。百聞一見にしかずという通り、それらを自分の目でたしかめてきたようだ。山も川も美しい。自然への愛情も日本以上きちんとしていることを確めたようだ。でも僅か二週間ばかりでは、後髪ひかれる思いで帰国しなければならなかっただろう。全く瞥見ということにすぎない。しかし、これがきっかけになって新しい感覚が養われればそれでよいのだ。

2月15日(土)

頭の切りかえ

浮羽町での対話「浮羽町の明日を考える会」の青年たちとの西光寺での夕食会の時に、ある青年が、私に杯をもってきて、知事が革新でないならいいと思うんだが……ということもすることも革新とは思えないからという。もちろん私を支持する気持からであるが、他面で本根は別のところにあるのではとの疑いがあるようだ。右側にいた大石県議が相槌を打って知事は大いに過去との矛盾になやんでいるように思うといった。私はその青年に県民党ということの説明したが、わかったわからなかった確認できるまでには至らなかった。もっと理解しようとしていないのが大石県議のように見えた。あとで大石秘書は、田舎の若い者は宣伝に弱いですねという。革新と一度いわれたらそれを思い込むし、革新はこういうもんだと思い込むといつまでもそれにこだわるという意味であった。だから私が思うに、知事に考えをかえることを望む前に自分の頭を柔軟にする方が先ではないかということなのである。マチの人とか田舎の人とかは別として、相手の考え方のかわるのを求めるのではなくて、自分の、相手に対する見方をかえることの方が大事ではないかと思うわけ。

2月16日(日)

大濠公園一周走る

青少年育成県民会議の大濠一周などマラソン大会である。開会式でのあいさつ、第一組のスターターの役は昨年同様にいいとしても、又一しょに走るかどうか迷った。が、カメラが入っているなど、第二組(小学二年生)と今年も走ることになってしまった。最初百メートルほどは足も軽いが、あとは全く重い。昨年は中ほどからしばらく歩いた。今年は伴走する子供たちが、私を歩かせなかった。彼らは練習の意味で、後番にそなえて私と共に走っている子供たちである。ジョギング程度の走りをつづけた。昨年は十四分、今年は十二分だったという。ふつうは七分、早い人は六分台だろうから、子供たちの半分のスピードでしかない。汗がどんどん出たし、あとに疲れが残るのではないかと思いつつ、午後の時間をすごしたが、平常にかえったみたいに思う。あとでどうにかなったとか、走っているうちに何か事故がおこったら笑いものになると思って今年も走るまいと思ったのに、こういうことで走るようになった次第である。平素肉体を使う運動をしていたらもっとちがうのと思うのに、全く、運動らしい運動をしていないので、今日は事の前にほんとうは心配だったのだ。いつまでつづくか、来年はどうだろうと考えてみる。

【欄外記入】

今久留主淳氏お通夜まいり

2月17日(月)

野党の攻め口 行革・予算

中食をはさみながら三役会をしたし、夜は共産党県委員会と懇親会をした。こんなとき、きまって俎上にのぼるのが二月議会での野党の攻め口についてどう対応するかである。行革について攻めているのが、職員定数の五%削減をめぐってである。削減の年度別計画を示せとか、実質削減は少いではないかとか、五%でなくて六%にすべきだとか、そんなのは根拠はどちらにもないわけで水かけ合いになる話である。自民党あたりは行革に関連して、議会、教育委員会、県警本部が人件費節約にどう努力しているかは全く問題にしようとしていないが、それらは聖域なのかどうか。又、六一年度予算案では財政調整基金がほとんど取り崩されることになるが、これが大問題になること必定である。しかし、だからといってどうせよというのかというとは答はない。不急、不要の予算はどの項目かというとその指摘はできないであろう。これでは来年度以降どうなるのかとの将来展望を求め難いというであろうが、どの府県・自治体も似たような事情にあるその責任は政府にあるということ指摘する者はいない。攻撃のための攻撃をしかけてくるのがこんどの二月議会である。

2月18日（火）

汚職事件にどう対応したらよいか

行橋土木事務所長が収^て贈事件で書類送検されたと朝刊に出た。田川土木にいた頃河川工事の検査をめぐり工事のミス指摘しつつ、目こぼししてやった謝礼として五万円の商品券を受けとったということである。目こぼし謝礼といえどもないことである。が彼はそのほか贈り物の山の中にいるということ。十数年間同じ田川地区に勤務していたことなどが報道され、こうした状況も追及の対象になっている。検察の追及というよりは、そうした雰囲気と人事停滞についての責任の一端は県当局にあるという言い方である。これが又二月議会で問題になるかも知れない。土木関係はもちろんだが、この種の贈収やりとりは他の分野でも、他の地域でも、大小の差こそあれ、ほとんど日常化しているのが現状ではなかろうか。学校の先生でも亦小規模ながらあるようだ。田川地区では土木分野（公共事業）が収入の大宗をなす不況地域であるため、よけいにその傾向が強い。知事が厳格な態度をとらないからそうなるとの声もある。私も機会あるごとに綱紀問題にふれて警告しているのだが、こうした雰囲気と知事の警告がどう関係するのかわからない。イタチごっこでもいいからやらないと知事のイメージダウンになるという一般的ないい方がある。具体的な予防は容易でない。

2月19日（水）

衆参選挙を前に県内社党陣営ゆらぐ

昨日の午後六時、六月参院選に出馬予定の渡辺四郎（自治労県本委員長）をはげます集いが、庁内食堂で開かれた。すでに市内目抜通りに彼の選挙ポスターとみなされるビラが貼られている。渡辺陣営は完全に始動態勢に入っている。小柳勇氏はまだ再出馬の意向をす

ててはいないようであるが、これでは社会党陣営内の亀裂は明らかである。夕方大坪君が来ての話では、国労福岡は小柳を推さないと決めてるし、県評も渡辺でいくといているので、小柳はもう無理ではないかとのことである。国労はその代わり三区で細谷治嘉氏に代ってその息子を出馬させることに賛成しているという。細谷の方では親子の推薦争いになっていて、親爺の方も引退するとはっていない。こうなると、社会党陣営内亀裂は複雑になっていくばかり。七〇歳「定年」を決めたからといっても、一区では河野正は例外みたいに対抗馬の声が全く出ていない。ますます複雑、怪奇になってくる。参は参、衆は衆で別問題とはいえ、今日の新聞あたりでも参衆同時の可能性が強まっていると伝えている。こうした内紛に対する心配は、来年の統一選挙への悪影響を問題にするからである。しかし、事態は、そう心配せずそれなりに全力をつくせば好転するだろう。

2月20日（木）

六十五年使った肉体

十八日から二泊の人間ドック（済生会病院）は今日十二時に退院となった。相かわらず腸にガスが多いが、盲腸手術のあとに何か癒着があつて、それに若干原因するのではないか。食後は右腹を下にしてしばらくでも休むのがよいとのこと。又、胆嚢が少々悪い。肝臓は以前とくらべよくなっている。糖尿は依然要注意の症状である。脳、心臓、肺、胃は異常ないといえるとのこと。他のデータについてわかり次第知らせようという説明があつた。歯、眼は除外、皮膚科の先生に足腰にあかい斑点が出ることを訴えたら、塗布薬を処方してくれただけで、別に何もいわれなかった。午後登庁して若干仕事をしたが、二日間のベッド生活のせいかフラフラした気持であり、むしうに眠かった。山川先生が六十五年も使っていると、どこか問題が出てくるのが当然で、私の場合はまだましな方だという。そういえば人間の肉体なんてずい分丈夫にできているもんだと感心したりする。夜、牧坂氏が今久留主母子（娘と息子）をつれて先日の葬儀のお礼に見えた。彼の死は六十七歳、まだまだ早かったと話し合ったのである。

2月21日（金）

俳句を自習したい

江口竹亭さんから毎号の句誌「万燈」を送ってくる。時々開いてみるが、じっくり見ることにはならない。が何となく気がひかれる。今日のは三月号。マントウと読むのだそうだ。開巻はじめの近詠、

降る雪やきのふ剪定すみし庭

老吾れに良き年なりし日記果つ

の最初の二句が目をついた。もちろん昨年暮れの情景である。全くの同感。すらすら出てくるものだと感心する。私はひまがあれば句をひねる修練をしたいと思ったことが何回

となくあったことを思うにつけ、句誌、句集などみると一寸ひかれる。先日の人間ドックの時も歳時記をしのばせてもって行ったが、他のことに時間を奪われ、開かずじまいであった。もちろん、ひまがあればやる、なければしないなんて料見では決してものにならない。昨日今久留主母子が来訪したとき、母子で牧坂氏のゆく尚文堂に習字に行こうと思うとの話が出て、私は、字が上手になるならんよりは、心の持ち方としていいことですねといったのだが、これは自分に言ってきかせることでもあったのである。

【「発信」欄】

竹亭さんに手紙かく

2月22日（土）

首藤氏の辞退

自民党がかつぎ出して動き出したかにみえた住宅金融公庫総裁であった首藤堯氏が鼻出血を理由に次期福岡知事選立候補を辞退したとのニュースが県庁周辺を駆けめぐった。福岡県副知事、自治次官もし、官僚から出すのに執念をもやす自民党にとっては立派な駒であったのに、そして本人もやる気をもやしていたのに、さらには二月二十七日か、お国入りして花々しくぶち上げる手はずがととのっていたのに、その矢先に辞退というのだから保守陣営にとっては突如たる衝撃であったようだ。県庁マンの中にも、再び陽にあたる番が来ることをひそかに願っている人が少なくなっただろうから、これまた、うつぶつたるものに水がさされたことになる。昨年福岡市長選をめぐって都留大治郎のような芝居をしくんだ自民党のことであるから、今回も、自民内部にそういう仕掛けを、お国入り直前にやった者がいたのではないかと疑いたいのであるが、それはないだろうと否定する人もある。しかし、私は政治の世界には、仕掛人がいなかったとはいえないような気がしてならない。次には文部省の高石、本四架橋の高橋、それに参地方区の遠藤政夫などがひかえているというから首藤を消しにかかる動きがゼロというわけにはいかないからである。

2月23日（日）

小倉で私的な時間を費した一日だった。

私的な行動が先んじたので今日は県職専従の植田君が車とともに、小倉に行くのに加勢してくれた。ついたのは森山。新幹線で行くつもりでいても、車でないといけないと秘書室では主張するのでやむをえなかった。小倉の西蓮寺で梅本家の伊之吉夫妻二十五周忌（実際は二十三年）法要があってみゆき同伴で出席した。終って足立山麓の妙見山荘で森数夫妻と懇談したが、この和風レストラン眺望がすごくよくて、気分の洗濯になった。北九州とくに門司方面はここのように景色がいいところが少くない。もっと宣伝されないといけないのではないか。この店、私らの帰りに広島伝統工芸のペン皿、銅蟲を一箇くれた。私が知事であることを知っていたのようだ。帰ってから夜、色紙を書くついでがあったので、こ

の妙見山荘にも一枚書いておいた。森数君は相かわらず元気そのもので愉快地語り合うことができた。小倉の聾学校に勤めているが、生徒がだんだん少なくなっていくとのことだった。身障者の教育の態容がだんだん変わりつつあるようで、将来は統合もやむをえないのではなかろうかといっていた。いい一日だった。

2月24日（月）

県立歯科大学の問題

歯科医師会長堀尾氏と専務理事を招いて仲柳でこんだんした。近藤副知事と佃衛生部長が出席してくれたが、この会はむしろ先方からの申出によるものであった。話の内容は歯科大の問題に入り、堀尾氏は歯科医の過剰時代の到来を念頭に、県下に歯科大学が三つもあっては相互に困るのだという問題の提起をした。九大も歯科の学生定員を減ずる方向にあるとのこと。全国的視野に立っても志願者の定員割れすら生ずる大学がでそうだという。又、アメリカでは四つの歯大が姿を消したとか。私が県立歯大は歯科医師会経営にならないだろうかと堀尾氏に問いかけたことがあって、彼は私の問いかけを気にして、一度話合ってみたいと考えていたに違いない。しかし一つの大学をそうかんたんに経営変革できるものではない。教授陣をはじめ職員、学生等々人間がそこに組織されて生きたものだからである。けれども、今日のように地方財政の逼迫した時期に県が歯科大を抱えていく理由はまことに乏しいわけである。しかし、以前の拡大発展時代なら受け皿もなくなかったが、今となっては医師会とか同窓会とかその他の団体が受け皿となるのは困難だという話になっていった。今後の重要課題であろう。

2月25日（火）

フィリピンにおけるマルコス政権崩壊

二月七日におこなわれた比島大統領選挙以来ゆれつづけていた政治情勢は、今日がいよいよ最終又はピークに達したようだ。マルコス大統領は二〇年間政権の座にあり、あらゆる方途をつくしてそれを守ってきたようだが、選挙だけは不可避だったらしく、さきに殺されたアキノ氏の夫人に対抗馬として追いつめられ、どうやら開票不正をやったらしい。政府発表に時間がかかりすぎ議会在マルコス当選を議決するなど一寸異状な政情がつづいていたが、アキノ夫人派が不服従運動を決定して起ち、民衆がそれにつづいた。流血事件が若干あったが、軍隊はあまり動かず、情勢の変化を見ながら中立化し、アキノ側に立ちはじめた。逆にマルコスの威令は日に日に衰え、従わぬ者が次々にふえ、議会も官僚も寝返りはじめ、今日は両派別々に大統領就任式を行うという異例の事態に発展、群集がマルコスの居城に雪崩れこむというところまで発展していった。軍や警察は群衆を敵とせずむしろ任務放棄すらした。公式の選挙の開票を権力で蓋したマルコスだが、最初から無理であることをどうして悟らなかったのだろうか。どうして政権にしがみついていく気になった

のであろうか。

2月26日（水）

佐方の家庭の乱れ

佐方は大変なさわぎになっているという。禎子は子連れて別居するに至り、おばあちゃんは足を折り和子のもとに身を寄せていたが、その和子が糖尿病をこじらせ、目に病が併発、これまた入院するほかなくなっているとか。倭も一人なら章も一人になってしまうという状況。おばあちゃんを福岡に引き取ってくれないかとのことのようにだが、みゆきは消極的、おばあちゃんも福岡に行きたくないといっている。見舞にぐらい行ってやれと私はいうのだが、これ又みゆきは消極的。さわらぬ神に云々というような姿勢である。小倉の梅本にしる似たような結末になって、初治兄弟は死後ついてない同志のようになっている。何か因縁めいて考えるが、どこかの狂いが伝わってきている感じだ。章はお人よしで難関に耐えるだけの心の強さがありそうに見えない。そうかといって、私がここでどうしようもない。人は私が強運だという。先日首藤氏が次期知事選出馬断念を表明した時、新聞は、奥田は強運と書いた。理学部の梶原教授は勝利も同然という電報を県庁によこした。家に打電するよりは、秘書室でも見るようにとの気持で県庁に打電したとか。それにしても佐方の状況は心配するほかない。私としてはしばらく見ているほかない。県議会で多忙すぎる。

2月27日（木）

二月議会代表質問の第一日。テレビ中継

本会議の代表質問に NHK のテレビが今日明日実況ナマ放送をするというのでみんなの気の使いよう。髪、エリ剃り、ネクタイ等々。そして声。顔をあげてうつりをよくするともいう。うるさいこと限りなしだ。弁士の方もそれを意識したかも知れぬ。自民の中島はいつになく攻撃的。亀井が貯えたカネを使いこんでしまっって今後の財政をどうやって運営するのかと、予想どおりの質問である。財政調整基金の取り崩しは全国的傾向であるというとすごいヤジで緑政の大石は目の前に席をもっているが、お前ではもうだめだろうというヤジがきこえよがしにいつている。行橋土木所長の汚職にふれ奥田になって「清潔」のスローガンとは裏腹に汚職があるがどう責任をとるのか、給与カットでもせぬのかと中島がいい、前列の同じ自民の高岡がお布施事件の責任もある云々とヤジをとばしていた。首藤が辞退せずに活動をはじめていたら今日のヤジはもっととひどかっただろう。これらヤジはテレビには出なかったようだ。誰某が眠りかけていたとか、自民の席に空白が多かったとか、途中で定数を割っていたとか、テレビどこふく風との態度が議員席には満ちていた。

2月28日(金)

攻撃に事欠かず

ゆうべ答弁資料がわが家に届いたのは十時半に近かった。代表質問ということで各党の意見をありったけ集めたような質問が次々とつづくので項目も多くして長い長い。質問しなくてもと思われるようなのがならぶ。又今回は私の最後の予算案というので、過去三年を総まくりしようとの各党の考えがにじみ出ている。野党はそれなりに存在を明らかにしようとして意識ぶっていて、知事攻撃をせねばと思っている。自民と公明がそうした使命感にもえていたようだ。知事は何をしたのか。どこに特徴があるのか。県民党というけれどウソだろう。予算で財源を使い果たしてしまっただけから先どうなるのか。県民総立ちで何ができるか。県産品愛用といっても何の効果もない。交通事故防止というのが事故はどんどんふえているし、非行防止といっても非行は断然多いといった調子である。又、そんなことだけで効果が目に見えないのは掛声に終わっている証拠だともいう。あれもしろ、これもしろといっておいて他面予算割れすることを攻撃する。清潔をモットーとするといつつ汚職が続いている。県民の前に反省の色がない云々……

3月1日(土)

参院選に向けて渡辺氏スタートダッシュ

今日から春というべきだが、いささか風も冷い。そうした中で県職労が大濠一周駅伝マラソンを挙行。今年も出てあいさつ、スターターの役もした。渡辺四郎自治労県本委員長もあいさつに立った。次期参院選まで、あと一〇〇日ほどということで、渡辺候補を激ます声援が一きわ高かった。あれこれの会合でもスタートダッシュしているという情勢ができている。小柳氏が引退するとの声はまだきけないようだが、大勢はもう社会党としては渡辺氏一本でいくほかないらしい。私へのはげましも強いが、次期立候補はもう既定のことになっているというのがあちこちから聞く声で、今日も夕方広沢太郎兵衛さんが来訪したのでしばらく話したが、彼もまたそのことを当然のように話題にするのである。「次期は知事公舎に入居しますか」といった調子である。肯定も否定もできない。広沢さんには、入居しないことになるでしょうというような返事をしたが、それは肯定である。そうきこえないようにと思っても話がそうになってしまう。自民党の首藤候補が走りかけて辞退してしまったので一寸楽になりましたねともいう。そういう話題のもちかけに冷淡に答えるわけにもいかないし……

3月2日(日)

環境の問題

広沢さんのすすめだろう松山から「伯方の塩」(日本自然塩普及会)の新聞が毎号送られてくる。もう三～四年になると思う。今日そこに送付の御礼状を出しておいた。自然食品が

珍重がられる時代で昨日も広沢さんは無農薬伊予柑をもってきて下さった。今朝安東毅氏との連絡では、大濠公園池の浄化工法には問題があるという。底泥をコンクリート固めしようというのが今の県の方針になっている。それではいかんというのである。何でも木建屋の利益につながるだけという理由もあげられている。博多湾の埋立て反対それに美和台の住人の訴えによると、産業廃棄物処理業者の環境破壊もある。ずっと前、博多湾の野鳥を守る会の人達の話を書いたことがある。鳥が来なくなる、それは人間にとっても危険な自然環境になっている証拠なのである。家庭の排水にも環境破壊要因がある。県もこういう問題には一半の責任があるはずだが、何をどうしていいか今の私にはよくわからない。研究して対策を総合的に立てなくてはなるまい。

3月3日（月）

いやな思いの知事攻撃が内外から何件も

抗議の手紙、ハガキがわが家にいくつかきた。今日のは行橋土木の所長の汚職問題をつつき、知事の人事がなっていないからだ、人事刷新を断行せよといった内容のもの。先日東区高美台の廃棄物処理場の煙害で困っているといい、前から訴えているのに「革新知事でありながら一寸も改善しないのは何故か」といった内容のものである。同じ趣旨のが二度ハガキで届けられ、二度目は名住所も明らかにしていたが最初の一県民よりというだけ。今日の手紙は住所も名も全く書いてない。これらは黒のボールペンを使っているという共通点があり、字はきちんとした丁寧な字で、全部筆跡は同一人のように思えるのである。保守陣営のどこからかの指示で同一人物があれこれの手を使って書いているように思える。近々、これらの筆跡を改めてみようと思う。あまり感じのよくない仕草である。作戦的だ。今日の一般質問の中で二人が、次期知事選に出馬の意思ありやと質問した。自民吉村元秀と緑政古賀政夫である。吉村はいやなことをまくし立てながら学者知事はもうやめよという意味のことを主張した。

【『広報わかみや』No.71の表紙コピー挿入】

3月4日（火）

国鉄余剰人員の受入れ

一般質問の第二日。民社の近藤義隆氏が国鉄の余剰人員の県への受入れについて、二五〇人を考えているとこたえたことが、予想通り早速夕刊に大きく報道された。県行革で五%の人員減が予定されているのに、県が国鉄からの退職者二五〇人を抱えるという問題はかなりしんどい話なのである。それに、九州管内で生ずる一万一千人の国鉄余剰人員は、国鉄の分割民営化が前提であって、国鉄の労働組合のうち、動労、鉄労はそれを前提に事を運ぼうとしているのに対し、国労は、まだ法律改正もできてない段階で自分たちの賛成してない問題に対し、次の準備を急ぐなんてけしからんという姿勢でもある。県評ももちろん

国労側に立つてものを考え、社会党もそう考えている。民社は動労、鉄労の側で考えている。こうした状況のもとで、私の口からなかなか余剰人員を受け入れるとか、ましてやその数などいえる状況ではないはずであった。が、県議会で質問が出たとき、他の自治体でも次々に受入れ数が発表されているのに、黙って知らぬ顔もできぬだろうということで、県議会の最初の質問者には、はっきり数までいってしまうしかないとの判断に立たざるをえず、それが国鉄出身の近藤氏だったのだ。

3月5日(水)

西日本新聞労組結成四〇周年祝賀会に出席して思う

西日本新聞労組が昭和二十年十二月一日に結成されたということで、今日同社会館国際ホールで四〇周年祝賀会があった。祝辞の中で私は、四〇年と一口にいうけれど歴史の刻みは決して小さくないということを表明した。イギリス労働運動史をかえりみても一八三〇年を基準として、一七九〇年は、一八七〇年は、一九一〇年は、一九五〇年は、というふうに考えてみると、各四〇年というものが、いかに大きな変化であったかがわかるのである。われわれは、ややもすると一口に四〇年と行って、あれこれの変遷の回想の中に埋没してしまうであろうが、それは単なる事件の連続でなく、運動に、前後くっきり違う節目ができていくことがわかるであろう。われわれはその違いを積極的に自覚しなければならない。このようにものを考える人は少いだろうと思う。そういう意味のあいさつをしたつもりだったが、うまく表現できたとは思えなかった。人生にとっても六五歳の自分は二五歳だった自分と、いわばまるっきり違うといっても過言ではないであろう。歴史というものの偉大さに驚く。この四〇年間の日本の社会の変化についても同様のことがいえるだろう。

3月6日(木)

筑声会の人達

筑声会の人達が来訪した。咽喉の声の出る部分を摘出してしまっていて、声を出すのに精一ぱいの努力をしている人達である。その中に、県職労の役員であり県評に出ていて私の知事選の時に選挙事務所をとりしきって活動していた米倉氏がいた。県下に組織された人達が八〇人ほどいるとのこと。それから推して全国では二五〇〇人はいるのであろう。この組織は外国の同種の人達と連携を取りあっているという。ガンのための摘喉したらしい、九大、久留米大、ガンセンター、福大の関係者に県からほんの僅かだが、助成金を出しているの、その御礼にということであった。誰をうらむこともできないだろうし、声が出にくいとて誰が手伝ってやることもできない。自分ですべてしないでは生きていけない。すべてが自己との闘いのように思える。米倉さんがどういう職業に就いているかはきかなかったが、無職なのかも知れない。多くの人は職をもち、自分で食っているらしい。ガン

でも死なずにすむようにする医術の力はたいしたものだが、その結果、生きるのに苦闘せねばならぬのも宿命とはいえないへんなことだろう。ご健闘を祈らざるをえなかった。

3月7日（金）

中杉芳夫氏の議員生命は終わったようだ

中杉芳夫氏が解新という一人一派を作り、保留質問しか無制限な時間がとれないとの理由で、逆に「保留」であれば無限の時間がとれるということで、教育委員長、知事に対し、延々と同和問題をめぐるふてぶてしい横着きわまる質問をつづけた。議会の品位もないし、自己規制もなく、議会という唯一の衣のもとで毒ついて毒ついてわめき散らした。いくら何でも選挙民を馬鹿にしているし、教育委員長や知事をバカ扱いにした質問をやったものだ。部落問題の基本とあって、さきに同対審答申の前文を朗読させ、今日は、兔を一羽二羽と数えるのを知っているか、糾弾とは何ぞや、神社には鳥井が一つあるのにお稲荷には赤い鳥井がいくつもあるのは何故か知っているか、次の知事選に出馬するのかどうかとか、タカ狩りのタカを知っているかとかの質問を発し、「答えよ知事」といった調子でせまる。大学教授していてそれくらい知らないのかとののしる。自民党が毒気にあてられて知事保留質問を遠慮した形にすらみえた。同和一般というよりは、自分の会派だけからみでの個人的視野からの同和問題のとり上げでもあった。これでは次期県議選で住民の票を集められないのではなかろうか。住民が馬鹿にされている。

3月8日（土）

小学校時代にかえって

曾左小の時の前田先生と吉田、黒川の二人がやって来た。心配していた天気だったが、ここ連続一週間美事な快晴つづきで、お客さんにとっても、いい状況だった。それにしても思うのは、私は昭和十年以来五〇年余曾左村をはなれている。友がそこからやって来る。他からはやって来ない。兄弟妹は今なお濃い交際をしてくれている。しかし、その後戦争をはさんで社会は激動した。その中でさみしい思いをするのは母校がないことだ。刀出は今は曾左校区ではない。だからそこは私を先輩として扱ってくれない。龍野では中学と女学校の合併により、昨年も訪ねた（赤とんぼ荘での同窓会の折）ときも今の龍野高校はわれわれを同窓としては扱っていない。姫路の旧制高校にしても同じである。今は女子短大に変容している。そう考えると、小、中、高、全部にわたって私は根なし草になってしまっているわけだ。前田先生は曾左校への赴任三日後に、お前の兄（七二）を追っかけて殴ったということを今日カニ道楽での夕食の時の思い出に語ってくれた。何でも七二が新任早々の先生をひやかすような言動をしたからであった。今日、非行問題がやかましく取沙汰されている中で、なつかしいわれわれの非行少年時代を根なし草として想起している。

3月9日(日)

地縁などゼロといえる

前田先生、黒川、吉田の三人は観光バスで太宰府コースをまわり、四時半わが家に来た。昨日は母校がなくなっているということを書いたので、今日は母校がどうなっているのかということを知りたい。曾左小は今は書写中になって全面的に建てかえられ、忠魂碑など別の所に移され、吉田君のいわく、昔通りにあるのは桜の木だけだと。戦後人口がどんどんふえた元の曾左村地区、余部村地区である。校区は色がぬりかえられてしまったという。私は思った。こうして、来てくれるのは小学校の友達だけ。そして気にしてくれるのは加えて刀出のときの兄弟だけである。佐方だってなじみが薄いせいに関心がない。それに、福岡でもこの輝国は向う三軒両隣のほかに、かえって私が知事であることに迷惑がり、敵視さえしている。ふつうの常識ならそういうことはないだろう。河本敏夫氏など地縁で、学歴でばっちり西播をおさえているとのこと。私の場合、学歴はもちろん、現在の地縁などゼロに等しい。そう考えると、この二人が「迷惑かけに来たなあ」というが、迷惑料など、その懐しさにくらべると安いものであるとっておいた。

3月10日(月)

「ぶらさがり主義」は困る

失対事業からの引退措置につき、電報戦術でわが家に自労からの要求がつけつけられている。政府のやることに県が見舞金を引退者及び市町村に上積みせよというのである。ある意味では当然の要求ともいえるが、何年も何年も失対勤続というのでは、根本の趣旨がおかしく解されているといえないだろうか。「ぶらさがり主義」は高度成長期に自民党が育ててきた社会問題解決策から出た風潮であって、失対のこの問題も、こうした風潮の一部をなしている。前に県は上積みをしたのだから今回もすべきだという。盆正月の見舞金も年々行われ、ふくれ上っている。他県の方が上積みや見舞金は多いようだが、福岡県はその数が桁はずれに大きいので、他県並みというわけにはいかない。生活保護鉅害復旧についても同様の「ぶらさがり」が根強い。筑豊をかかえる福岡県の特徴といえるであろう。保険金ねらいの策謀も筑豊には独特のものがあるといわれている。要するに、タダで取れるものなら何でも取ろうというのである。自民党の石炭政策が、後遺症をこのような形で残して来たのである。これは市町村当局にも同様に根づいている。こうした風潮からの脱出は、しかし、言うべくしてなかなか困難なことのようだ。

3月11日(火)

人事の季節になった [集群議而為耳目 任老臣而為腹心]

社会党の林幹事長が来室して四月の人事異動について二、三例示して意見をのべていた。林出納長が一昨日だったか私にいていたのと同様の内容だった。近藤副知事も同様の意

見のようだ。部長、次長、室長クラスの異動が誰しも気がかりなわけだ。そして秘書室についてもである。人事で事は半ば決するといわれる。しかし、長たるものが仔細に状況を知っているはずはない。ひとの意見をきき、ひとの判断を参考に、腹をきめるしかない。職員組合にもそれなりの意見はあるが、これに耳を傾けすぎるとやりそこねる。自民党は自民党なりに、人事に裏面から強く要望をもってくる。他党も似たりよつたりのことをしている。それぞれ議員はそれなりの紐をつけてくるようだ。一番注文をしないのは動かされる職員自体であろう。ただ職員は個々に違うものの、ひとの顔色を真剣に見て言動している。首藤氏が知事選に立候補しないと決めた前後で職員の顔色が違うと見る人は少ない。敏感なのだ。今の県庁内に奥田知事のもとでは頭のあげようがないと思っている人が何人もいるといわれている。首藤氏の動きでそれが職員の動揺となってあらわれたというから不思議なほどだ。わが方の人事がそれ相応にできるならいいのに。

3月12日（水）

重篤の七二兄を思う

姫路の九一に連絡したら七二兄は九分どおり絶望だという。劇症肝炎とのこと。意識はない。三月六日から入院しているが、入院当初から頭がもうへんになっていたという。去年の暮に胃の全摘をしたのだから、身体はもうぐたぐたになっているのであろう。肝臓はもう死んでしまっているという。県議会があることだから私が見舞に行くわけにはいかないから、「みゆきを代わりにやる」と九一には話しておいた。二歳上だが、あと二年で自分がそういうことになる想定すると一寸妙な気がする。「はかなきもの」との感慨がわく。とくにそれを強く感ずるのは、七二兄と私が同じような環境で育ったということ。私の中で彼から強烈な影響を受けたという点にある。彼がなかったら私は今の私でなかっただろう。仮定は禁物だが、どうなっていたかわからないといってよい。そういうことを思いながら、次の土曜日に小郡に「対話」のために出かける予定で、その折、明願寺に寄りたいて広報室の者に伝えた。この寺は、選挙の時に私も行ったことがあるが、「お布施事件」の時に彼が一時身をひそめていた寺で、恩が残っているのである。兄嫁が亡くなったあと、彼はとくに仏心づいていたので、とくに関係があるといえる。「お布施事件」の発端の一因に、彼が寺に参ることへの積極性が寄与したといえなくはないと思う。

3月13日（木）

花ざかり

曇って久しぶりに雨を見た。もうすっかり春といってよい。見えかくれの程度だが梅花はどことも満開のようだ。卒業式、結婚式があちこちである。今日は昨年同様県立看護学校の卒業式と九大外国人留学生の卒業者を送る交歓会に出席した。学校卒業ということはこれからが第二の人生への門出であり、試練の前に立つことであるが、若いだけにみんな希

望にあふれている。又みんな有能だろう。うらやましい限りだ。近頃の女子卒業生は長袖とか袴とか和服での出席に力を入れる。多くは自分の所有でなくて貸衣裳にたよるのだが、何ヵ月も前から予約しておかないと、その場になっては間にあわないという話である。結婚式の衣裳ももちろんだが、そうした和装が日本人にはよく似合うという人が少ない。近頃の女性はすらりと背も高い人が多いのでこれはとくに美しい。二〇歳から二二歳がこのあたりの群なので、美しいまっさかりといってよい。この時期に、こうした服装に意を注ぎ、希望、笑を温めてみるということは人生にとって有意義なことだ。仕事やつれ世帯やつれが間もなくやってくるのだから、短い花の命を十分に咲かせてくれるのはよいことだ。

3月14日(金)

七二兄の死

今朝八時五九分七二兄が遂に死亡した。九時二分の新幹線でみゆきが見舞に出発したが、喪服を用意して出たので形はついた。三月六日の再入院というから一週間ばかり脳死の状態だったのではないか。今日の医術はこういうことができるようになってるし、どんな庶民でも、医療保障のおかげでこうして永らえることができるのだ。九一の話では、入院の日にすでに言動が異状になっていたという。ガンだからやっぱり苦しんだに違いない。病は気からというが、そう思うと今日私も、下腹がどうも異状ありと思えるのである。こういうことをあまり考え込むとよくないだろうから、早く平常心にかえりたい。服喪という言葉があるが、近親者はそうした気分にしばらくとらわれるのであろう。外見もそうした方がよいのであろう。七二兄とは一番近々しい同胞関係にあっただけに悲しみは一入である。和代が生れて以来母は病身、私が小学校五～六年でなかったか、七二兄は入院不在の母代わりで泣く和代を夜中に背負ってねむらせるため前の藪の横の坂道を歩んだ。彼も泣いた。私も後を追いつつ泣いた。兄は責任を感じずるのに、私は責任を感じないですむ立場だった。苦労ばかりして一番苦しかった時代の家を高等科の彼が支えていたのを懐想できる。

3月15日(土)

「飽食の時代」の教育

小郡で「親子で映画を見る会」の若い婦人達との対話に出たが、近頃の塾の話、暴走族の話が出た。学校は子供をしつける所、塾は勉強させる所というような位置づけがなされるほどの時代という。子供に偏差値競争のための塾がよい、教育費の投下、これで非行化に拍車がかかる。教育ママ、アルバイトママがふえ、子供とのスキンシップがますます薄くなる。子供を有名校に行かせることに文句なしに重点がおかれる。有名校―一流企業―安定生活、これが競争の的であるなら、人格個性の養成はどこかにふっとんでしまう。他方、

落ちこぼれは非行、暴力、暴走族になる。暴走族への入口は車の入手だが、親は子に車を買わされる、それも脅迫的にである。非行よりも暴力よりも、暴走の方がまだしもまだと思うほどの圧力を子から感ずるらしい。そうでなくとも、子はどこからかオートバイを持って帰るらしい。出所をきくと誰某から借りたといい、その誰某は他の誰某から借りたものというらしい。そして、詰るところ盗品ということもよくあることだという。「飽食の時代」の教育問題がここに象徴的にあらわされている。私自身、もうそういう時代の子をもたないと思うと、豈はからんや孫たちが、その年齢に近づいているのである。

3月16日（日）

福岡県と七二兄（葬儀を終えて） 七二兄の法名 淳心院積護念

福岡のどの新聞にも七二兄の死と葬儀予告が十行ほどで出ていた。古沢氏が姫路までコピーしてもらって来てくれた。自宅での葬儀のため、参列者がはみ出して狭かった。県から大塚副知事、登島室長も来てくれ、七～八本の生花はすべて福岡からのもので、電報の量も福岡からが圧倒的に多く、一見福岡県版の葬式のようになっていた。私が知事であることが一つの特徴をなしているし、彼が前回の知事選の時に果たした役割への懐古もあったようだ。芳井氏も参列してくれた。これは「お布施事件」の共犯者になっている。朝日新聞はその福岡版で、兄の「お布施事件」につき二〇万円積まされての略式起訴にもふれた訃報をのせていた。昨日は県評の岩崎、秘書室の森山が見舞に来ている。そうしたことで今日の葬式は福岡に重みのかかったものになっていたことは否めない。兄にとってはさきの知事選は老後の一つの生きがいイベントであったかも知れない。今日の式中のナレーションはそれにもふれていたし、もう一つ、彼が旅行好きであちこち旅あるいたことにもふれていた。小郡の明願寺を親しく訪問したのも選挙というよりは旅好きのあらわれだったのかも知れない。死ぬまでにもう一度この寺に行きたかったのではなかったか。

3月17日（月）

完璧主義

佐々木君が次々に問題をほじくり出しては原課の説明を私の前でさせる。もういいといたいのが彼の気持からは念には念を入れるにしかずということなのであろう。私は、こんなのは「完璧主義」というのではないかと思う。細心なのはよいが、それは程度によりけりだろうと思う。今日も仕事が五時に終るだろうと思っていたら七時前までになってしまった。念を入れるのはよいが、ながなが引きまわされるのめかなわない。帰りに今日送って来た森山にきくと、森山も彼は完璧主義だといっていた。森山自身、ひとから抜けているとか、大失策をすとかいわれるので、佐々木と反対のことがありうるので、よけい完璧主義が気になるのかも知れない。この二人は搦きまぜるとよいのかも知れない。佐々木の場合、完璧主義はよいとしても、それは他に押しつけてはならないのではないか私は思う。

ひと迷惑ということがあるからだ。森山が抜けているといわれるときも、それがひと迷惑になるとこれまた同様に問題なのである。小心もおおまんもそれぞれ欠点を見せないようにしなければならないだろう。ともかく人と人は扱いにくいものではある。自分では気がつかないであろうが、自分が相手にどのような印象を与えるかは、よく考えておくべきことであろう。

3月18日(火)

「かな」を書く

昨日、高野切の三種につき昨夏以来五回目を書きおえたばかりであったところ、今日午後西日本新聞の取材某氏が、私の「かな書き」練習の事情についていろいろきいていった。「かな」はむづかしいですねとっておいた。日記を二冊つけて毛筆をもつのが近頃の私の余暇の使い方だが、そのことについてあれこれきかれた。筆をにぎるようになってもう十年近くなるのではないか。その動機は掛軸や額の字がよめないことが多く、読めるためには書かねばならない、そう思っていたところへ牧坂五郎氏が尚文堂での岸本教室に来ないかと誘ってくれたので毎週月曜日夜のその教室に行くようになり、そうしているうちに「かな」も書けないではと思ひ、「かな」文字を高野切を手本に独習するようになった。岸本先生にもみてもらう期間は若干あったが、そのうちに知事選に出て先生からみてもらうことがなくなった。その後とくに昨年夏から思い立って、ひとは第三種がよいというが、私は少々意地もあってか、一種、二種、三種とも、それなりに習う必要があると思ひ、折釘ながら書き進むことになった。今日の後には六回目に入るかどうか判断しかねるが、もっとも必要と思ひている。

3月19日(水)

女子大卒業式でのべた祝辞のあらまし。『 』のとおり

福岡女子大の卒業式に出席。ここでも晴着で花ざかり。もちろん、二十二歳前後の花ざかりである。めでたい。うれしい。父兄も来ている。やっとな安心だろう。しかし、いわばまだまだこれからである。自分を顧みても世の中がどっち向いているか皆目わからないで放り出されるわけだ。『九割が就職であるが、今後は正念場。いわゆる世の荒波に漕ぎ出ることになるわけだ。これまでの四年間の成長とくらべ、これからの四年間という同じ期間を想定してみると、後者の方が人生にとって変化がはげしく重大な時期ともいえるだろう。これまでのように甘えは許されなくなる。自分に対しても社会に対しても責任を取らねばならなくなってくる。その代わり思う存分に実力が発揮できる。予想もしなかった人が、努力いかんではぐんぐん伸びる、実力の世界なのである。男女雇用機会均等法がこの四月から発効する。女も実力が伴わずしては平等を主張することはできない。福岡女子大は県下みわたしても多くの著名な活動家を排出している。今日卒業の一六一人が後続する

ことを期待する。』以上のようなあいさつを祝辞の内容とした。

3月20日（水）

フィリピン マルコス政権の崩壊して一ヵ月 アメリカ、日本はマルコスを支持していたのに

フィリピンのマルコス政権への日本からの援助が中に立つ巨大商社により、マルコスの私財と化し、アメリカや日本の支配政権へのマルコス献金となっていたことがアメリカの議会で明るみに出された。後の祭りといえはいえる。ここでマルコス政権の崩壊の大ざっぱな経過を改めて記録しておこう

1. 二月七日 フィリピン大統領選挙 二月八日に終るべき開票結果集計大幅に遅れ、十一日国会の公式集計作業に入る。中央選管の機能停止か。
2. 二月十四日 マルコス当選と発表 この間アメリカの態度傾く。アメリカはスピック、クラーク両基地保全に執着した模様
3. 二月二十四日 エンリレ国防相、ラモス国軍参謀総長代行反乱・決起、アキノ女史を大統領とする臨時政府樹立を宣言。
4. 二月二十五日 マルコス・アキノ別々に大統領就任式挙行。この夜マルコスはマラカニアン宮殿脱出
5. 二月二十六日 アキノ女史新内閣の顔ぶれ発表
この動きを決定づけたのは反マルコス国民の蜂起であったという。

3月21日（金）

筑豊青少年交響楽団とのふれ合い

伊藤光さんという人が、三井田川炭鉱時代、昭和三年以来、オーケストラを組織し、以来若干の中断はあるにせよ、今日まで、つづいてこの分野での活動をしておられる姿に接しえて、びっくりさせられた。元は三井田川のお抱えのような面があったようだが、三〇年代の末、炭鉱閉山後はすべて自前でやっておられる。六〇人ほどのメンバーで構成され会費は月千円というから、会場である自宅の維持だけでも大変であろう。県で少しでも援助できないかと問題提起されたが、それは困難であるにしても、間接的にでも何か援助してあげたいと思う。今日は、筑豊青少年交響楽団と名称をつけているが、小学校の一年生をはじめ、多くの子供たちが、自前の楽器を持参しての「戴冠式」の演奏をきかせてくれた。青少年の健全育成が問題の今日、このグループには親子の会員が何組かあるときいてさらにびっくりさせられた。又、炭鉱閉山後、私が「恥部」といった面が少なからず目立つ田川地区で、このような文化の芽が温存され、もえている姿をみると、すてたものではないとの印象を強くさせられた。白石県議が案内設定してくれた出会いではあるが、心強いものを感じさせられた。直方、飯塚、そして大牟田にも同じような文化が独自に動いている

のはきいている。これらを掘りおこしていきたいものである。

3月22日(土)

岡垣町のふれ合い農園

遠賀町での町民の森植樹祭に行ったついでに花田守氏を訪ねようとの思いを、今日は実現した。波津の海岸にある八幡屋で、ここの主人小役丸さん、三井ハイテックの労組委員長田中氏の二人を加え、四人で中食をしながら懇談をしようという仕組みになっていた。花田氏のはからいである。もう一年も前のことだと思うが、花田氏が仲介してくれて小役丸氏が大きなハマグリをたくさん私に贈ってくれ、話がそれに及んで、この蛤は波津海岸の沖合で漁師が特別のやり方で採るのだそうである。今日のごちそうは海の幸一ぱいで、花田氏には大変お世話になる結果となった。田中氏はこの付近の住民で、この際、より近づきになっておいた方がよいとの花田氏のはからいであった。「住民」ということで、花田氏は特別の話題を提供して大変興味があった。彼は今、労金の理事長退職後、老人クラブに入っているのだが、クラブの人が、彼に入会をすすめるにあたって、「世話をしてもらうために入るのか、世話するために入るのか」、「あなたは住民になっているのかいないのか」というようなことを、浴場で裸の問答をし、それに全く反論できなくて、今は入会し、お世話をし、一住民になりきっているとのこと。又老人クラブはゲートボールだけではなく、「ふれ合い農園」を休耕田を利用し、子供たちと一しょにわいわいやっているとのこと。ここでも躍動する県民の姿が教えられた。

3月23日(日)

万燈より

江口竹亭さんから毎月句誌万燈を送呈してくれている。なるべく一寸でも目を通しておいたらと思うようになった。でも句の中に出てくる言葉には独特のものが少なく、その道では立派な作なのかも知れないが、私のレベルでは理解し難いものがたくさんある。それに字余りが少ない。句は調子も大切だろうから、私には字余りは好ましくない。句誌は、内容が当然に二、三ヵ月季節的におくれたものが記載されることになるので、この点読んでいてズレを念頭に、懐古的な気分で味わうことになる。四月号では、

除夜の鐘鳴り重なれる旅枕	福岡	松尾るり
心まであたたかさうに毛皮着て	〃	藤崎美恵子
真っ先に捧ぐお雑煮亡き夫に	〃	田隅遊佳
著ぶくれることに外聞なき夜道	田川	平尾みつ子
初詣鈴の音程に進まざる	飯塚	稲見佳子
屋台店出れば北風待つており	福岡	福井清風
口数を控へ受験子送り出す	〃	西村元子

等々である。一般投稿だがどうも女性が多く目につく。なぜだろう。

3月24日（月）

自民党の知事選戦略の一端を見る

反対しても、どうせ通過させざるをえない、行革（定数条例）と情報公開条例であったが、自民党県議団は意地でも難ぐせをつけて先送りし、点数かせぎをしようとしてこの二つが十二月議会で議了せず特別委員会にさし戻して今議会に宿題を残した。今日は水戸栄樹が、知事質問（行財政特別委）で、一人、私に質問ということで、最初の質問の矢が「なぜ延び延びになったか知事の理解の程をきく」というのであった。要するに五年間に定数五%削減という原案に対し、名目五%でなく実質五%（現在より五%少い実数）とせよという点と、年次ごとの削減数を示せという大盛りの要求をつきつけ、更に、初年^{マブ}たる今年は知事の最後の任期の一年だから、あとの知事に少しでも楽なようにして、問題をなるべく先送りするなというのが、自民党の主張であった。これは明らかに次期知事選挙を意識した党略から出た引きのばしと誇大要求で、これにより、知事と職員組合の間仲をできるだけ冷却させようとの意図に出づるものでしかない。水戸がその役を買って出たわけだが、願わくば県職労がこの作戦に乗らないでほしいものだ。「知事いじめ」「県職労いじめ」で自民は得点をかせごうとやっきになってきて、今日、そのピークだったわけ。

3月25日（火）

自民党は面子にかけて議事の混乱をはかっている

今日も議会のなりゆき待ちで大半がすぎ、六時から知事保留の全員特別委員会が開始されたが審議を進めるといよりは、しょっぱなから審議ストップにもっていく作戦の方が優先した空気があり、一番手江口利雄が、保留質問の中味に入る前段のところで「知事これ知っとるか、あれ知っとるか」等々の質問をあびせるので「知らない」と答えると「お前にはわかるまい、勉強しなおして答えなさい」といった調子で審議ストップ。再開されても、又同様のやり方で審議ストップとなったのが午後九時。こちらは痛痒を感じぬいやがらせで三時間が空費された。これ又例により大石県議が江口側に立ってやじっていた。このクソなまいきな男と思うばかりである。議会が進まないのは自民党が抵抗のタネさがしに苦慮しつつ、今日は教育庁が自民党と連携し、ハワイ州とのスポーツ交流予算及び英語の外人教師を県単でつけよという二点で予算修正への動きが出てきたため、これを阻止する努力やらで、時間がかかっていた。同じ執行部側にいながら友野教育長が、予算査定で要求が認められなかったのも、自民党に後押しを頼むという卑劣な言動をしたことは想像に難くない。修正案をこのような問題で出させると後に尾を引く。それでもやりたいのが自民党と教育庁といえる。

【挿入文書】

61.6.23.

事態はまだ進行中です。私はみずから結論を急ぐことは~~ありません~~ないと思っています。私は生涯を正義と人道に捧げ、その一つの道として大学教授を選んで30数年、その延長に知事にあえて打って出たわけで、志は終始不変です。

しかし、政争によってそれを決したくはありません。今回は行きつくところまでいけば信を県民のみなさんに問うて潔しとすべきでしょう。

部下を大事にするのが昔から長たる者の第一の心得です。今の私もそれです。

考えが違えば県民の皆さんの審判を最後の手段として選ぶしかありません。

3月26日(水)

自民党と教育長友野の連携

自民党が教育関係の、スポーツ団生徒のハワイ派遣と英語教師設置の件で予算案修正の動きをみせているとのことである。しかも教育関係だけでなく、復活要求で認められなかった項目全部につき修正しようとの構えがあるともきく。こうなると、知事の提案権無視になり不信任に発展しかねないといわれる。そもそもこの問題の引金となったのは友野教育長の委員会での質問に答えた発言らしい。スポーツチームのハワイ派遣の予算要求をしたのに、知事が認めなかったので涙をのんで引下ったのだと弁解したらしい。これが知事部局の部長であれば、その部長は左遷に値するとの声が出ているほどである。友野は自民に取り入って自分の要求を掘りおこそうとしたように思われる。この種の言動をする職員が他にもいるようだが、友野は議会という公式の場で誰にもわかるようにいつている。見えないところでどういふことを言っているかわからないが、かなり「密通」しているように思える。選挙になると、対立候補の側に立って露骨に動くだろうと思える。この辺でもまた少数与党の悲哀を味わうことになる。教育長は、ほんとうは取りかえておくべきだったが、友野への仕返しは別の形でするほかはないだろう。

3月27日(木)

「桜の木にでも日の丸を」ということで空転の県議会

県議会が空転して、しんどい目にあった一日だった。自民板橋が知事保留の今日の第一矢だったのが、出して来たのが君が代・日の丸の問題で、私が答弁中「国旗掲揚台のごとき……」「桜の木にくくりつけても……」と発言した点が、審議ストップのポイントに取られてしまった。板橋は先日の小郡での「対話」の際、ある母親が、教師の「君が代、反対で子供がとまどっているとの発言があり、又私が中曽根首相が靖国公式参拝をしてこれを強制するようなことでは問題だと発言したことなどを指摘しつつ、昨年九月議会で県関係庁舎で国旗の常時掲揚を決議しているのに、県は掲揚台を作っていないではないか、残り四

三施設には直ちに全部作れと迫って、上記私の発言となり審議がストップした次第であった。私の真意は、このカネのない時に「掲揚台のごとくに」かねを一度に使わなくても、掲揚の気持があるならば旗竿を桜の木に結びつけてもできるのではないかといいたかったに過ぎない。ところが「ごとき」というと、軽蔑した意味になるとか。桜の木では神聖な国旗の侮蔑になるから、その態度が問題だというのである。これは又又陳謝という不本意な形で幕引となったが、ひと、ひやかして陳謝の大安売といい、自民党は、もう陳謝ではすまされんと息まいている。ではどうするか、議論を深めて欲しいのが私の願いだ。

3月28日（金）

今県議会最終段階での問題点

こんどの県議会の最終段階で、事を荒立てようとしている自民党にとって攻撃の材料になるのは、教育長が出すことに手を貸した問題すなわちハワイへのスポーツ交流選手派遣費、英会話実習教師手当費、及び天皇在位六〇年記念事業、失業対策事業引退給付金、君が代・日の丸問題、この五点であった。どの項目もそれほど重大なものではない。予算額からいえば失対では、すんなり解決するには十億円かかるので、大きいのが、他は精神論であったり、二千万円ほどで済む話である。自民党にとっては、君が代、日の丸を知事に公認のものといわせることで大きな効果が上がると思っていたかも知れないが、効果の程はあやしいものだ。私が答弁の中で、認めるといったことに対し、大町県議は泣ながらに残念といったときく。でも、そういうふうには涙する人は多くはないだろう。私は、これで知事はこういう問題にこだわりをもってないということを知民の多くに知ってもらうことができよかったですさえ思っている。天皇六〇年の祝賀式典についても、これで何か試験されるような問題でもないだろう。左翼陣営の中に暴力的に阻止しようと構える分子がいたり、解放同盟が反対するということになるかも知れないが、事が常識的に運ばれている印象を与える方がよいだろう。

3月29日（土）

また徹夜のドタバタ劇

とうとう徹夜のドタバタ劇を経て当初予算は無事でき上がり、四月から新しいスタートの県政がうまれる。情報公開、行政改革、が新県政の二本柱になるわけだ。それにしても、いつものパターンたるドタバタ劇はどうだろう。自民党は何かダメージになるような失点を与えてやろうとの思惑からやっているのだが、作戦はあまり上手だとは思えない。攻撃が急で、攻撃だけが先行しているかの感がある。「責任野党」という妙な言葉があるとは、自民の誰かが質問の中で発したところだが、賛成にしる反対にしる、決議をつきつけてくるにしる、責任が生ずること間違いない。その自覚があつてのこともあるが、なくてやっていることも少くない。攻撃でダメージを与えようとしてやっていることが、世間の非難

を買う結果になることも少くない。一日延びて五〇〇万円の経費が嵩んでいくという県議会。徹夜になるともっとかかる。二十五日までと予定されたのが二十九日の今日まで延びた。二〜三千万円使ったの事だ。何が利益、効果として残ったのか。一睡もとれず、疲れだけが残ったその実感には何か空虚さすら伴う。知事保留質問というやり方を再検討してほしい。この時とばかり、罵詈雑言を知事に浴びせ、みずからも無形の返り血を浴びている。時間の無駄づかいをやっている。下品な議会運営なのだ。

3月30日(日)

「革新」系の立遅れ

仲好会で久しぶりに世評をあれこれ書くことができた。県議会についても皆さんは関心をもってよく見ている。話題のうち、徳本君がいていたのが印象に残った。それは日本の現在の革新系がどれもこれも時代おくれで企業や保守系の方がはるかに時代にマッチした諸問題への対応をしているという指摘である。西日本新聞労組の四〇周年祝賀会の際、私は運動史の四〇年のへだたりをイギリスを念頭にうかべながらかえりみて祝辞の一節にしたのを思い出していた。基本は違わないかも知れないが、同じスタイルの運動はくりかえしてはならないということがいえるだろう。三〇年前、二〇年前でもそれがいえる。四〇年といえば、もっとそれがいえる。時代の変化に敏感で、それへの対応に臆病であってはならない、ということになると、今、社会党はもちろん、県評も問研も時代の変化への対応に遅れが目立っている。よくいわれるように、「革新」の方が「保守色」が強いともいえる。否、それは墨守といってもよいかも知れない。代議士、県議の領域でも組合幹部にしても、革新といわれた部分に人の高齢化が著しい。そこにも、態度の惰性があらわれてる。落目だからかも知れない。それが落目を作っているのかも知れない。

3月31日(月)

〔民主自治県政元年〕 情報公開により、新しい県政の元年が始まる

情報公開条例が通過したので、これまで長い間条例作成に協力してくれた九大など教授たちに謝礼の意を込めて、はかた会館で懇親会を開いた。大屋、八丁、近藤、手島、斎藤、川上、石村、それに社会党県議の林、長谷川、白石、執行部からは近藤、千綿らが参加した。「開かれた県政」が、いよいよ本格化するし、新長期計画の第一年が始まる。そのため、六十一年度は県政の革新元年というに値するということをあいさつの中でのべた。情報公開が実施にうつされるのは九月からではあるが、条例は実施にスタートしたわけである。公約から三年かかったわけだ。一つの事柄にこのように時間がかかる。たしか全国で六番目で早い方に属する情報公開をどれだけ利用する者がいるかということもさることながら、ガラス張りの県政にするというところにこそ意義がある。「知る権利」の保障といってもよい。自民党はこれを何とか妨害しようと努力し、早すぎるのではないかと、準備が足りない

のではないか、個人情報^の公開が折り込まべきではないか等々、足をひっぱる努力をしたが、大義名分^がなかったため、結局賛成せざるをえなかったわけだ。尤も十二月議会議会からこの三月まで三ヶ月遅らせることには成功したが、同じことでしかなかった。公開にはわれわれもそれだけの苦勞がある。

4月1日（火）

新潟県元年

いよいよ六十一年度に入る。財源は底をついている。その中で情報公開条令は九月実施のスタートに立つ。行政改革が進み、県庁内は移転などごった返しているが、すべては二十一世紀への変化にそなえての始動である。県では新長期計画も作定の最終段階に入り、二十一世紀を見とおした県づくりをデッサンしている。十五年先を見るものであるが、もうそこまできているのが二十一世紀である。十五年過去と等距離にある二十一世紀である。それはもう確実性の高い展望を可能にしている。幸い行革も実施に入った。各階で部屋がえなど、今日もごった返している。これも二十一世紀を見とおしての処置である。県民情報課や生活文化課、その他新しい組織もできた。これまでの石炭と鉄の代表する素材型、そして親会社と子会社にタテにのみつながってきた産業構造にはもう依存できないことがはっきりしてきた。技術立県ということを目立たせてきた県政の推進にいま一その重点をおかなくてはならない。筑豊に代表されるような振替所得に依存してきた産業・生活のあり方には別れを告げなければならない。「県民総立ち」で新潟県を作る元年が来たのである。

4月2日（水）

「県政ひとすじ」続版の計画

海棠、三色すみれ、それぞれに春をつけ、桜前線も新潟をすぎ、東京まで上っていったと報道されている。甘夏柑は今年はたくさんなっていて、そろそろ食べ頃になり、試食してみた。今年は粒が小さい。肥料が足りないのではないだろうか。外に出て作業することが全くなくなったので、関心もないが、季節は確実に移っている。先日、森山君や八丁君にきいたら、今年の著書は組織に割当てするような販売方法をとらず、売れゆきにまかせるやり方をしようということになった。組織上無理がくるようだから、というのである。それなら三～五千部にとどまるだろう。又「県政ひとすじ」は精算後の在庫が一二〇〇ほどあるので、それは当方に送ってもらって贈呈用にできるだけ使っていただくのではないかとということ、その扱いは秘書室でということになった。続版については、四月下旬から五月中旬頃に多くの対談を行い、テープにとり、それを東定君におこしてもらおうという形で原稿を進め、十月頃に出版できるようになればよいのではないかとということになった。八丁君の市販一本主義は県評や社会党と折れ合いが悪いことからの発想もあるようだ。私もとくに無理しようとは思わない。

4月3日(木)

筑豊 旧産炭地の復興に名案はないか

直方市で直鞍地区労青年たちの第一〇回ヤングフェスティバルがあって、これにかけつけた。元は炭鉱、そして最近まで国鉄に働く人達で活気のある直方ではあったが、今はそれがなく、これという特徴のない町になって田川とともに影が薄くなってしまった。青年たちが地域おこしの気分を結集する一つの試みである。今日、企画部の地域振興課長らが、産炭地復興の大綱案をもって私に説明したが、旧炭鉱地域の復興には、今はハードからソフトへという潮流が決定的となっており、大綱もそれを反映した考え方で作ってみたという。昨年の春に筑豊の町長たちが集団で来庁し、陳情したので、六〇年中に復興大綱を作ると約束していたのだが、三ヵ月ほどおくらせているわけである。筑豊各地で若者たちが自立への姿勢を示しはじめているが、今日の直鞍でもそれがみえる。だがしかし、青年たちは燃えよといってもどうすれば燃えることになるのかわからない。やはり産業や文化の場が必要なのだ。これに名案がない。地域のイメージチェンジがまず必要である。それが両々相俟たねばならない。みんなその周辺をめぐるのいい知恵にあぐねはてている。

4月4日(金)

管理主義教育がひろがっているようだ

早良高校の新開校第一回生入学式に参列した。厳粛のうちにおこなわれたのはいいとしても、少々準備がよすぎはしないか。とくに感じたのはもう校歌ができていて、新入生がそれを斉唱したことに関してである。校歌はそのようにして、新入生にとっても、ほんの一寸前に発令された教師にとってもすでに与えられている。歌詞はもちろん環境と無関係であるとはいえないが、作詩は初代校長が校訓のようなつもりで作ったものである。曲は教育大の、音楽の専門家安永武一郎学長の作であるから一応文句はないようなものの、作詩、斉唱練習が入学式にできてしまっているというのは一寸異様に思える。これが福岡県教委の体質というべきものであろうか。これから伝統、校風が徐々に形成されるものであり、その中から校歌が自然に生まれてくるのであればよいと思うのだがどうだろうか。校長の独創独演といえるものにすぎない。次の校長や集ってくる教師たちが参加する余地はない。その他誰もが参加する余地なく校歌としての位置を占めてしまう。それが入学日に新入生が斉唱するのだから押しつけがひどくはないか。管理主義教育が見える。

4月5日(土)

太宰府高校の場合

昨日の早良に対し、今日は太宰府高校の開校式があった。どちらも似た式の運びであったが、太宰府の方は、校歌はまだできていなかった。校長から校歌募集の発表が行われた点が、やわらかな印象を与えた。生徒もふくめ、第六校区の一般の人々も応募してよいとい

うことであった。早良のように校長が作詞し、すでに生徒がうたえるように練習して開校式に臨むということに異常を覚えるとの声が今日どこからとなくきこえてきた。ただ、太宰府では制服がネクタイつきになっていて一見恰好よさそうだが、夏場になると生徒が窮屈がるのではないか。その点少々心配が残る。半袖にするとの説明はあった。上着は着ないのだろうが、大学生の場合を想像すると、制服のきまりが守りにくいようになってるように思える。又布製の手提カバンも制度的にきめてあるようだが、生徒が一ぱい詰まったカバンをさげて十分も二十分も歩くかどうか、これまた苦痛が強いられるように思えてならない。芸術コースがあるということは一つの変化で、楽しみを感じず。英語コースもうまく運営すれば、面白い高校に作り上げていくことができそうだ。先生の紹介もあったが、みんな若々しく気合がこもっているように思えた。が、総じて昨日同様、管理主義の支配が心配される。

4月6日（日）

子ども劇場まつり

子ども劇場の話は前からきいていたが、福岡では発足二十周年になるという。発祥の地福岡では四四団体四万人の会員、全国では四六〇団体四三万人の会員があるといわれる。近頃の家庭機能、地域機能の変形崩壊の状況の中で、この子ども劇場運動はその修復に、手づくりの各手段を用い、親と親、親と子、子と子とのスキンシップを求めようとの運動である。その二〇年記念「まつり」が昨日今日春日公園で行われ、九州、全国からも参加を得て、今日のは約一万人集会になった。幸い桜花らんまんの晴天で、子どももさることながら母親たちの方がはしゃいでいるかに見えた。素人の手づくり劇だが、これを考え、装置づくりに汗を流し、親もこどももそのことにまきこまれていて、そこに意義が見出されているように思える。テレビ、電気器具など相手の子ども、遊び場をもたぬ子どもにとっては、一つの自然な人間環境が作られて「非行」への傾斜がそれだけ防がれる。ただし、そのためにも場としての共同の広場が要求され、それを叶えさせるには自治体の干渉が必要である。今日はそれが欠乏している。商業主義、経済主義への傾斜が強すぎて自治体の目がそちらに向いていないことが痛感させられるのである。

4月7日（月）

政府主催の天皇在位六〇年式典への知事出席で賛否両論

四月二十九日に天皇在位六〇年祝賀式典が政府主催のもと国技館で行われる。これに案内状が来ているのだが、知事が出席するか否かが注目されており、論議を呼んでいる。県評、社会党（県議を含む）では、解放同盟のこともあって知事は出席すべきでないといい、近藤副知事など県の主要幹部は出席してもらわないと六月議会は又又混乱するし、次期知事選挙に不利な逆宣伝に利用されるだけという。社会党内部にも、あっさり出席したらいい

という意見があり、これに組する者はかなり多い。県評内では、主要単産内に、反撥が大きいらしい。奥田知事になって得たものは何一つない上に、精神的な支えすら売ってしまうのかということらしい。次期選挙には動いてほしい人達が寝ることになってしまうのではないかともいう。一般世論は、読売の調査では七割が記念式典に賛成し、前回五〇年の時に参加しなかった神奈川の長洲知事も今回はすんなり参加という記事になっている。だから福岡も出席した方が選挙に有利と近藤副知事は強く主張する。要するに評価が逆になっているのである。自治省では、早く態度を決定してほしいとの催促をしているらしい〔四月八日の三役会では林県議幹事長の発言もあって欠席することに決定した〕

4月8日(火)

RKBの与田の暴力的取材来襲 (宮内康之専務の収賄事件にからんで)

ゆうべはRKBの与田記者がカメラマンを連れてわが家を夜打ち。就寝したばかりの私はしばしねむれなかった。時に十二時前後。藤江君が対応して追い返したが、与田は酒を食らひ、大声で藤江君にからみついてはなれず、近所の人達も外に出て来て、そのうるさをなじっていた。十一時頃近藤、ついで大塚副知事から県道路公社の専務理事の五〇〇万円収賄事件が発覚、警察の捜査、逮捕に至っているとのことで、電話連絡があったばかりで、与田の用件はわかっていたが、この深夜に報道取材の自由があるとはいえ、その濫用ぶりはRKBの体質をそのままにあらわしたものと見える。今日は記者会見もあったし、県政サロンでRKBにも行った。与田は朝会うからなと捨セリフを残して帰ったというが、果たして八時二〇分県庁玄関に待ちかまえていてエレベーター内までカメラと一しょに追いかけて来もした。警察詰めの男というが、RKBはひどい奴を何人も飼っている。三好広崎も同類。収賄は清潔を売りものにしてしている奥田県政の看板がニセであることを実証するといいたいわけだ。がよくきいてみると、この公社専務は亀井時代から公社に巣っている悪という。排除しなかったのが落度だ。

4月9日(水)

「県政ひとすじ」の続篇の構想について

「県政ひとすじ」の続篇を今秋出版しようというので、午後問研で大方の構想について話し合う。県庁から安達、それに八丁、衣笠、こんどは無理な売り込みをしないで純商業ペースにし、ページ数も二〇〇ぐらいに、したがって価格も一〇〇〇円程度で読みやすいものにすべきだということになった。当然私の名にするが、中味については周辺の者が手伝ってくれるので有難い。八丁君が奥田県政らしい点、地方自治の本質追求ができるのはどの点なのかという問題を出してきた。もちろん結構なポイントだが、はたしてそれを突き出していいかどうか疑問が残る。第一大衆レベルで理解しにくいのではないか。第二に、保守陣営からは反撥が出るのではないかと思う。私は地方自治の自治たるゆえんは是非強

調したいが、それが商品として適当かどうかを考えねばならないだろうし、わかりにくいものにしてしまっただけでは効果がないだろう。ただ、八丁君が、昨年から今年にかけて知事が新たに感じた点は何なのかという点を出そうといい出したのは出すに値すると思う。新長期計画での福岡県の位置づけや技術立県の指摘はぜひ大いに述べておきたいところである。県民党、総立ちは再論する必要があるだろう。

4月10日（木）

改めて「地方自治」及び中二階的な「県政」のあり方について正しく考えてもらうために新年度から監と名称づけられたスタッフ制で五人が新任された。三人が企画調整課長のもとに、二人が県民生活課長のもとに。この人達を招いて中食会をカレーライスでおこなった。自由な発想で活躍してくれとっておいた。大学の教授職みたいな扱いをしていいと思う。各部各課にまたがる考え方をしてほしい。とくに今日私が注文したのは、地方自治ということこれまでと角度をかえて考え直してほしいということだった。県民総立ちということが、ちがって受けとられている向きもある。県費節約行政の手抜きというふうに受けとられると本意に反するし、ボランティア活動についても同様である。とくに地方自治については、住民自治という視点が重要ではないか。行政の立場はルールに従って、とくに県では中央の意思を住民におしつけていく態度が大きな役割を占めている。県庁マンがこれに満足していたのではいけない。そういう側面もなくてはならないだろうが、それだけでは役人でしかない。県庁マンは住民の代弁者であり、住民の組織者でもなければいけない。こういった観点から今回新任の監の位置にいる人はこれまでの行政の見直しに積極的であってほしいのだ。

4月11日（金）

立花町のたたずまい

立花町での「ふるさと対話」の日。夜の六時半から八時半の二時間。町民の諸要請にすんなりこたえられずに困った。これに先立って一時間半ほど堤町長の案内で町内主要箇所を視察した。町のまん中の飛形山での鶯の音が印象的だった。それもそうだが、これら町全体のたたずまいが自立的ですがすがしい感じがした。営農努力ひたむきとの印象である。人口が一万五千ほど。もとの四村の合併による町であるが、清流があちこちにあり、山も多いが、誰もが熱心に営農に精魂を傾けている姿が美しいと思った。キウイフルーツ、筍、ナス、など特産品をもっている。矢部川河川敷の運動公園もいい。堤町長が温い心で接してくれ、これまたいい印象を残した。四〇年以上も前、宮崎に沿岸防備隊として動員された時、久留米の連隊で部隊編成の一時をすごしたが、主計見習士官として働いていた私は、立花町になっている光友村の農業倉庫に部隊給食の米を受領に来たのを思い出す。光友村がどちらを向いているか全くわからないままだったが、それが今の立花町のセンターにな

っているということだ。感慨も大きい。

4月12日(土)

福岡の保守政財界の固さをときほぐす必要あり

奥田県政の三年をふりかえって、という題で九大の法経関係の教授達に集まってもらって黒田荘の一室で討論、懇親の夕食の会が開かれた。非公式のもので、秘書室にそれだけの負担をさせるには無理だったかも知れないが、佐々木君がうまくやってくれたようだ。山ノ上ホテルあたりを使う心算もあったが費用は極力おさえたかったので、華美にみえぬ黒田荘にしたが、結構それが気分的によかったと思う。樺島が庁内からみでの立場で三年間の展望報告を行ったのだが、よくまとまっていたのではないかと思う。ただ大屋氏が指摘したように、九州知事会や福岡財界、両政令市との協調は、向うが態度をかえることが必要だということだ。こちらも協調につとめているのに、向うがいつまでも構えた恰好になっている。九州の財界、政界は、保守は保守でもいいが、もっとスマートにならないといけない。関西などから見ると田舎っぺい。いつまでも「革新知事」に構えていては、自からが遅れをとるばかりではないかというのである。今後、財界その他保守層に接するとき、私もそのことを、これまで以上に念頭におこうと思う。中には例外もあるので、そうした人脈をたぐっていくと、比較的容易かも知れない。選挙が近いので改めて固くなっているのだ。

4月13日(日)

咲盛りに思う

今年は桜の花がずいぶん長く咲いているように思う。もうかなり散って若芽が出ていることは事実だが、まだ花見に値する。今日は門司に行ったが、本願寺鎮西別院の桜はまだまだ見ごたえのあるものであった。尤も福岡とくらべると北九州は少しは遅いであろう。門司の山手はあちこち桜が咲いて北九州の風情を盛り上げている。北九州の街はどこともさびれが感じられるが、風光には古今なく、とりあげてよい箇所が少ない。人々の心が落付いて、このような風光を静かに鑑賞してくれるとよいと思う。わが家では今年どうしてか木蓮の花が一つもついていないし、海棠は株から五本出ている主枝のうち三本までが枯れ、二本には花が咲き乱れている。これは理由のわからぬ奇妙な現象だ。枯れた三本も、蕾だけは一ぱいつけるまでに至っているのに、しおれてしまっているのだ。ボケも今は花の盛り。しかしうちの庭は今は私の目にはめったに止まらないし、私が手がけることも全くない他人になってしまっている。藤の花房が、五センチぐらいに伸びてきているのが窓から見える。隣の後藤さん宅の桜は今年も豪華に咲いた。花が散り、葉が落ちることを嫌がらず、近所の人達で花見したらいいと思う。

4月14日（月）

土木汚職拡大しそう

今日の新聞には道路公社の汚職事件が県の上級幹部にも及ぶこと必至と報道されている。記者達が県警から得た情報のようだ。警察では人を動員して公務員汚職に一層力を注いでいるという。知事選に的をしぼって奥田県政の足許をゆさぶろうとしているとさえいわれている。中央に又後藤田ありともいう。土木関係の受注について、特定の事業者が特定の影響力をもっていることにも問題があるとも書いている。近藤副知事、清水土木部次長、社会党の林県議の名を出す人もいる。松本組のことを考えているふしもある。ゴルフの接待という形が多いのではないかと思う。すべてこのあたりの因果関係は想像に難くないが、具体的なイメージは湧かない。かなり大きな確率で大型汚職事件に発展するという人もある。景気が悪ければ悪いだけに、公共事業に集る業者と采配をふる立場の公務員との間になまぐさい話がおこる傾向が強くなるわけ。具体的展開はこれからだが、不安材料だ。

4月15日（火）

浜正雄氏逝く

四月九日に浜正雄氏が死去、今日福岡斎場で九経連葬がおこなわれた。八十一歳という。九大法文学部の一回生だろう。満鉄ののち、二十四年に九経調づくりをし、後に九経連の設立に奔走した人で、これらの要素が何重にも写る人である。県関係でも多くの審議会など重要な委員会に名をつらねてきた。戦後は特定企業人ではなかったが、経済界の裏方的な仕事を精力的にやってきた特異な位置を占めたといえよう。ひとは彼の柔和さも高く評価する。安川第五郎、瓦林潔らを表に立てて九州の経済界ににらみをきかして四〇年間大きな影響を及ぼしてきた。巨星墜つといってもよいかも知れない。政治的には筋金入りの保守だったと思う。その意味で、亀井と争った私に対しては冷い存在であった。健在なら知事の座を保守に奪還するために奔走したであろうが、私が知事になってこの三年、そのための動きをするには健康に無理があったであろう。私も知事になって何度か対面する機会があったが、温かい感触をうけることはなかった。安川は既になく、瓦林も健康にすぐれず、あとは財界は永倉のリードで動くしかないが、永倉は、時代がわりするような感じがする。福岡の保守も政治家だけでは統一が困難だろう。

4月16日（水）

物騒な世相 3万人動員 数十億円

東京に来ると警視庁が警戒を厳重にしていることが専らの話題である。この月の二十四日から三日間「サミット」東京会議があり、二十九日は天皇在位六〇年記念式典がある。極左の中核系の爆発物による妨害が、いつどこでおこるかかわからない情勢にあるから、これら行事が乱されないよう事前に備えているようだ。事前に事をおこすべく計画されている

かも知れない。つい先日も皇居及び横田基地近くで無人自動車を利用しての爆発物打込み事件があったし、成田空港、国鉄、その他ゲリラ的な動きが数えられる。警視庁がこのように動いてどれほどの費用がかかるか知らないが、かなり高いものについているだろう。他方数日前から地中海でアメリカ軍のリビア攻撃、リビアの地中海域米軍基地への攻撃、それに触発されて OPEC の対米非難声明、ソ連の米ソ外相会談の中止断念声明など、物騒な話題が近頃世界の人々の神経をとんがらせている。カダフィ大佐の指導でリビアのゲリラがアメリカ攻撃をしているために報復行動としてアメリカがリビアを爆撃、イギリスのサッチャー首相は対米援護の意見を発表したという。やっぱり原爆の大規模な使用が米ソのいずれかの引金により、人類文明を危殆に陥れる時が到来するのかも知れない。

4月17日(木)

わざわざ嫌なことをいう人がいる。

東京の四月花のこの頃は大変美しい。さくらもだいたい散っているが、まだ見るに値する。一時半沙理みゆきの初詣でに明治神宮に行く機会をえたが、咲く花の蕾や新芽の緑がぐつと注意をひいた。東京はいつみてもこうした美しさに満ちていて世界のどこにも劣らないのではないかと思う。三時から第二議員会館会議室で開かれた産炭地振興協議会の県選出国會議員への石炭政策陳情のあと、ひげ際に参院の遠藤政夫の私にいわく「敵艦見えなくなって一息だね。首藤ならあなたに勝てると思っていたのだが」と。私は「すぐ強いのが見えるようになりますよ。今は霧がかかっているが」と返しておいた。首藤氏はもう見込みないのかとの間に、彼いわく「ない、医者がダメとやった。鼻の出血で無理という」とのことであった。わざわざこういう席で、私にそういうことをいわなくてもいいのにと考えた。東京事務所ですんでいたら秘書室佐々木から道路公社汚職のひがりについて今日はトップ会議で対策を練ったこと、明日は早目に私に帰ってもらって記者会見してもらおうかと思うと電話でいうので、これ又わざわざ東京にいる者にそういう仕事の前ぶれをしなくてもよいのにと考えた。

4月18日(金)

三歳児までといわぬ若い時の鍛錬こそ

昨夜は沙理みゆきとの対面だったが、一ヶ月の赤ん坊、ほとんどねむってばかりでろくに目を開けず、表情がないままに終わった。この子にとって六五年の差のある私がどんな存在であることに将来なるのか考えてみると、全く無縁かも知れないのにとすら思ってみたくなった。一彦や啓二にとって、私の父母はもちろん生存してなかったからではあるが、頭に浮ぶ存在ではないのだが、これとあまりかわらないのではないだろうか。そんなことを考えていると、人間も動物とひどく違いはないのではないかとさえ思ってみたりするし、それが少しも不思議でなさそうだ。誰しも子を大切に育て、孫をかわいいと思う。しかし、

子や孫から、親や祖父をみると、逆にみるのとはまるで違うだろう。啓二は、この子をきびしく育てたいといっていたが、これ又なかなかできることではない。私は、三つ子の魂百までという言葉どおり、三歳頃までに親が十分に気をつけて育てなさいよと啓二にいておいた。ひとは私がタフだという。肉体的にも精神的にもタフだという。果たしてそうなのかわからないが、そうだとすれば、幼少の時に、そのように鍛えられていたのであろう。私は全くわからない。自覚は、農業の手伝いを刀出でも佐方でも辛抱強くやったからかも知れないということだけ。

4月19日（土）

在位六〇年式典挙行発言が問題になれば、それだけ自民党がよろこぶ
水巻町では商工会館の落成式に集った三原代議士、浜中、住吉両県議など、自民党の連中が、私の在位六〇年式典挙行発言で一本とられたというかと思えば、車中で森山君が、共産党、県評などで、この発言が知事選にひび割れの影響を与えているという話をして相反する空気の形成に、私自体当惑してしまう状況があった。糸島地区労の前原隣保館の対話集会では知事選出馬の意向を明かにしてはどうかとの質問が出て、私は、出よと正式にいわれてないので返答は困ると答えて会場に笑をさそう一幕があった。共産党と県評傘下組合の中には在位六〇年式典は絶対反対の声が強く、事務局長の岩崎氏は、これを收拾するためには式典反対の署名運動をおこそうとの意見があると秘書室に伝えてきたという。車の中での諸岡氏のいうには、左翼小児病的なことをいうなどのこと。私はこういうことは、平気で見守っていてほしいのである。それに、どうして問題視するのだろうかと思う。問題視すればするほどマスコミはよろこんで話題にする。それが自民党をいかに勇気づけるかは明らかである。署名運動でもしようものならそれこそ笑いものになるかも知れない。私の方から言うのはおかしいが、起ってしまったことは、どう納めるかがむしろ問題ではないのか。

4月20日（日）

「外野席」が揺れているというけれど。

県の北から南まで車でかけめぐって疲れた。それに昨日から県評の岩崎が電話してきて天皇在位六〇年と道路公社汚職問題で「応援席」が大へんざわめいているが、県の執行部の対応が悪いから知事のリーダーシップで何とかしろということだったので少々頭にきていて、車中ずっと憂鬱であった。尤も在位六〇年の県主催での式典挙行については、「綸言汗の如し」であることは彼も十分承知していて、これは運動の中で消化せざるをえないが、汚職の方は一步前へ出て、発注の中味を最後まで点検する制度を導入するとか、知事を含む減俸など処分のことを考えとかして、県民への清潔感を失わせないようにすべきだとの要請で、近々「応援団」の幹部会を開くから出てきてほしいということであった。気持

は私もわからぬではないが、中のことについて「外野」からこのように直接指図がくるとあまり気持はおだやかではない。私をはずした県幹部への非公式の注文だといいが、彼のいい分は県幹部にいても仕様ががないので、知事がリーダーシップによって幹部に命令する形でやるべきだと思うので注文するのだというのである。この辺のやり方は更に一考を要すると思う。

4月21日(月)

雑感 ひとりになれる時間が欲しい

今日は休みというのでしばらくぶりに身边を若干整理することができた。みゆきも寝室の整理をしていたが、四〇年近くも前の洋服の上衣を出してきて記憶があるかときかれ、忘れていたのがわかった。また、モーニングコート上下があることに今頃気がつく有様。知事になって何回、貸衣裳屋にお世話になったか知れないのに、実はタンスのどこかにねむっていたのである。古い話も新しくなるように、古い物も取り出して役立てることができ。そのためには身边整理をする時間が必要であることに改めて気付くし、時間があれば身边整理にあてるべきであることが改めてわかったわけだ。その場限りの、その日、その日に追われていることは悲しいことだ。日記は書いているが、そそくさと、短い時間で、書きなぐっている。文脈も気にしないで書いている。それはそれでよいとしても、古い日記を取り出して読み返してみるほどのゆとりが欲しい。何十年前の思い出を綴っているもう一冊の日記については近頃久しく書き進めていないので気になっているところだ。(幾歳月のこと)とにかくひとりになれる時間があればどれほど満足できるだろうか。

4月22日(火)

警察の政治的妥協か

道路公団の汚職問題はもう拡大しないのではないかと観測が流れはじめた。宮内専務の五〇〇万円事件は仕方がないようだが、古賀総務部長の五〇万円事件は本人がかんたんに吐いたものの、その下の大蔵課長の証言では、事件にするには困難なような内容らしい。しかし、警察としては逮捕した以上事件にせざるをえないと、無理をしてでも、古賀を送検する道を求めているのが実態のようで、記者たちもこの無理を知っているようだ。警察は古賀をおどして余罪はわかっているのだから五〇万円は事件だといえといっているとのうわさである。古賀はどこかうしろめたいものをもっていて、五〇万円は事件だといわれてもよいと観念しているらしいのだ。警察も政治的に出たこの事件づくりに、この辺で妥協を求めているようである。これがうそかほんとうか。そのくらいのウソはやってのけるほどの警察である。県では宮内事件は重大視し、総務部長を長とする検討会議を発足させ、二度とこのようなことが起らぬよう、外郭団体に監視の目を光らせる対策を五月末を目途に見出そうとしている。宮内は亀井時代からの札つきのあやしい男で、岡垣の方に御殿の

ような家を新営している。これが一掃しえただけでも収穫なのだ。

4月23日（水）

「知事の自己処分を」との意見について

天皇在位六〇周年式典挙行（県主催）の発表につき佐々木秘書が県評岩崎氏と連絡し、了解を求める仕事で精出しているのだが、今日は上京中彼との電話で、ひどく叱られたという。中味は道路公社汚職問題で、昨日の記者会見の中で、知事が「自己処分を含め厳粛に対処する」と積極的に発言すべきだとの岩崎の意見（島野氏の意見でもある）を汲み入れた発言をしなかったというので、「もう勝手にせい」と電話口で怒鳴ったそうだ。当方にしてみれば、知事の自己処分を記者会見で、質問もないのに、かつ、この段階で言うには適切でないとの判断があればこそ、言わなかったまでである。岩崎島野の両氏は、私的形式でその旨縷々書いた文章をわざわざ拙宅に届け、現今の県民感情に対応するには記者会見で知事が積極的に陳謝の意を表明するのが最適との意見をまとめていて、私はこれを佐々木君にも見せたのだが、二人ともこの意見には消極論だったわけだ。このことは近藤副知事も承知で、あえて私はいわなかった。岩崎らのいうようにすると、まだ、汚職発生の可能性あるのに、知事の自己処分がつづくような事態を作り出すことにならぬとも限らない。最終的なことは避けたいのだ。

4月24日（木）

新採者研修会での講話

四月一日につづいて今日は二回目の新採職員研修会での知事講話のチャンスがあった。三〇分の持ち時間を四〇分近くも話してしまった。女性の新採者がかなり見受けられた。近年女子も学校を卒業するとほとんど例外なく「就職」する。この四月から男女雇用機会均等法が施行されることになったので、あとは実力だけがものをいうことになればいい。ところで今日の講話の内容は、今後原稿用紙に書き置いて、次の出版の稿の一部としたいと思ったので、近々のうちに私の宿題としておき、完稿することとした。はじめに県職員となった事（初級で二〇倍の競争率）に祝意を表明し、かつ今後の精進こそが生涯を決定していくと決意をうながした後、次に県の当面する課題をかいつまんでのべ、第三段階で、公務員としての職務遂行上の心構えといったものを述べている。こうした骨子は佐々木君が作ったものであろうが、なかなかよくまとまっていると思う。あとは私の言葉に直していけば、かなりよいものになるのではないかと思っている。各方面の会に出席して祝辞、挨拶の類が多いが、原課で原稿を書いてくれると大変助かる。その通りにいうか、自分で加減するかは別としても、モトがあると気が楽になる。それだけ仕事はかきもうが。

4月25日（金）

徴税努力について

財務事務所々長会議を庁議室で開き、六〇年度県税収入未済が累計百二〇億円にのぼる事態につき、その原因など話し合ってみた。又、夕刻は、まいづる苑で懇親会を開いた。所長たちは知事がこんなにしてくれるなんて、とって大層よろこんでくれた。税収の伸びがはかばかしくない上に、徴収率が落ち込んでいる点が憂慮されるが、原因をあげれば、経済活動の跛行性（東京一点集中）「重厚長大」の不振、円高、そして倒産等々いろいろ考えられるが、徴税、納税の意識にも問題がないとはいえない。徴税側では職員の志気昂揚の点で、管理監督者の職員掌握、人事異動、給与のインセンティブ性などがあり、納税者の意識低下、啓発不足などがあげられた。これら一々について、直ちに回答を出すのは困難であるが、こうして問題点を考えてみようという試みだけでも、そこに光をあててくれたということで、所長たちは今日の試みを大変よろこんでくれた。さきには福祉事務所々長会議をもち、生活保護支給の適正化につき特段の努力を要請し、昨年だけで三三〇〇世帯の適正化に成功。四〇億円の国費節減につながったといわれる。こうした一寸した努力が見えないながらも大きく実を結んでいくということで、県政上カウントされることはうれしいことだ。

4月26日（土）

「観自在」を用いての民主県政の説明

八丁君たちが午後來訪。次期知事出版について録音をとりながら論じ合ってみることになった。彼の企画では五月上旬まであと二回同様のことをやって出版物の大約を作り上げておいたらということになっている。今日の冒頭で大学教授から知事への転身の中で、「観自在」の心境というものをどう説明するか、読者にとっては興味ある問題だから、よく話しあってみようということになった。政治、権力のトップ、それと民主主義というものの一つの実験が行われてきたのだと彼らはいう。私にも、政治学的に、これは興味あるテーマではないかと思われる。政治の幻想性ということ、又、昔から政治と宗教とが結びつき、儀礼の形をとって表面に出ているが、背後では政治は経済的支配と不可分であるという。そしてそれが、民主主義という形を通しつつ、とくに「革新」という形で表に出てきた場合にどうなるのかということをおさえておくことは、第三期革新と称している立場から重要なことではなかろうかということで今日の話は進められていった。こういうことを論じて果して大衆的な関心を呼ぶかどうか疑問が残らぬではないが、一応は論じておく必要はたしかにあるだろう。

4月27日（日）

田中健蔵氏の次期知事候補説について

小雨を心配しつつ大牟田、八女、久留米の三市をかけ抜けるように廻った。支援団体の大衆集会といったもので、いろいろ名称は用いながら次期知事選への出馬に向けて頑張れという内容のものである。帰宅したら、理学部の梶原壤二氏から手紙が来ていて、先日西日本新聞に自民党が現九大学長田中健蔵氏を推している、早ければ五月中にも出馬表明になるかも知れぬとの報道に対し、梶原氏はくみし易い相手だから心配するなという意味のことを書いている。私も早速氏に電話しておいた。田中氏の出馬が決まるにはまだ若干の曲折はあろうが、公明党が推す方向をもっている点と、彼が国大協の幹部にあって「行政手腕あり」と自民党が評価するようだ。梶原氏は現在、国大協で来年の大学入試について、二校受験のチャンスを与えるための改革案をつくりつつある中で、田中氏が中曽根の思いつきを忠実に実現しようと努力しているが、一部を除き、その改革案は不評だから、田中氏は来年三月末までに（入学生決定経過の中で）多くの国民から不評をかうに違いないというのである。いずれにせよ、私は彼のことを気にすることは全くない。

4月28日（月）

晴久に案内されての佐方見舞。西脇刀出のコース

晴久、和代、芳男、清それに章の五人が相生駅に下車する私ら夫妻を出迎えてくれたが、清が気分が悪いといい出して芳男が別行動で連れて帰り、われわれ残りは半田病院におばあちゃんと和子を見舞った。二人とも元気な様子だが、二人の入院で章も倭も生活に不自由を感じている。章は嫁が別れているので困っており、おばあちゃんの入院も、入院加療中の和子が面倒をみている。豊の大部屋で、二人が床を並べての入院生活。和子は糖尿病、おばあちゃんは骨折老衰ということらしい。晴久の運転で、和代、みゆき、森山、私の五人が大陣原、龍野経由で西脇に行った。途中夕食をとということで龍野の赤とんぼ荘に行ったが食堂はないということだったので、すぐ近くにあった宿称庵というのに入って山菜弁当を食べた。もう暗くなってあたりはよく見えなかったが、龍野のこの辺はいいところだ。西脇は棟安、きぬえさんが四月に亡くなって葬式に来てなかったので、この際立寄ってお悔みを申上げた次第。永く来てないし、西脇の道順など、私にはわからなかった。刀出に着いて、わいわい話込んで夜ふけの二時に就寝する有様。晴久のうちのお座敷に森山、私、みゆきが枕を並べてねた。昨日正一、ゆたの十三年、七年の法事をすませた所だった。私は不参になっている。明日は七二兄の法事で広に行く。

4月29日（火）

中曽根の皇室利用政治と皇室の反撥

熱海かどこかで、新幹線攻撃のゲリラにより通信線が被害し、各列車とも大幅な遅延となり、われわれの上京は一〇〇分の延着となった。天皇在位六〇年式典が武道館で行われたが、これに対する警戒が厳重で、そのハネ返りが新幹線ゲリラになったといってもよい。

五月は、四、五、六の三日間東京でサミットがある。警備はこれに引きつがれるが、ゲリラは多発傾向になりそうな気がする。中曽根政治がその影をゲリラとして落すことになるかも知れない。皇室を自分の栄誉のために利用しているようにも巷間いわれている中曽根である。天皇在位六〇年式典にしても十一月即位だからそれまで待ってもよいのに、天皇誕生日にやっている。自分の政権が確実な時に、さらにはこれを利用して三選への地固めをするために、今日の式典をやったのだとの説が流れているわけだ。他方、週刊誌などでは、皇太子の訪韓、訪中の延期説、天皇の終戦直前期の皇太子への手紙の公開など、天皇家の反中曽根、中曽根の戦争への歩みの危険性に対する危惧が、こうした皇室平和主義流説となってあらわれているという解説がでている。

4月30日(水)

チェルノブイリ原発事故で一つのエポックが

ソ連キエフ北方チェルノブイリ原子力発電所で二十六日夜、炉心溶融の大事故が発生したとの報道が新聞のトップ記事を埋めつくし、政府主催の天皇在位六十年記念式典がかすんで書かれていた。昨日中曽根首相がいいところを見せようと、国技館に五千人を集めてやったものだが、テレビでは彼の万歳三唱の音頭取りが大うつつしに出ていて満足だっただろう。東京はこのこともあって、四日から三日間の東京サミットと連続する状況に対し、超嚴重警備態勢の中におかれている。サミットではソ連の原発事故と、アメリカとリビアの対決と、この二つの対応策が当然に大きな課題として急浮上し、日本のドル過剰(大幅黒字)に対するサミット諸国からの攻めは比較的影を薄められるのではないかとの観測が流れている。ソ連の原発事故は現地で二千人から三千人が死亡したと伝えられ、「死の灰」で北欧諸国を中心に恐怖に陥れられている。日本もアメリカも対応には協力するとの姿勢を表明しているが、ソ連からの情報量はきわめて少く、それが各国をいら立たせている。いずれにせよ、原発問題は今後国内外をとわず大きな政治課題となるエポックに立ったといえよう。

5月1日(木)

政治的雰囲気のメーデー会場にただよい

知事になって四回目のメーデーあいさつである。福岡、北九州の両会場を新幹線を利用して移動するというパターンになる。久留米会場からも出席要請があっているが、困難で実現しない。今年は政治の季節ともいえるべく参院選がすぐ目前にひかえ、衆院選も「同時選」になるかのような流れが生じている。来年すぐに北九州市長選があり、次いで四月の統一地方選が控えていて年末には政治的に騒然たる状況になる。マスコミもそれを意識して私の言動などこまかに観察分析しようとの構えをとりつづけている。こんな雰囲気が今回のメーデーには濃厚にあらわれていた。加えてソ連のチェルノブイリ原子力発電所の炉心溶

融事件が、反核心理を一挙に刺激し、メーデーにもそれがあらわれている。今日は午後本降りの雨になり、放射能の雨が運ばれてきはしないかとの心配もあったが、それなしとの報道である。秘書室から、西日本新聞社発行の政経特報が示され、それには「知事再選戦略の思惑走る」との見出しで、私の十一月天皇在位六十年記念行事の県主催実行発言をセンセーショナルに解説しているが、穿ちすぎというほかはない。書きたがるものなんだ。

5月2日（金）

「まつり」を評価する

博多どんたく港まつりは八〇〇年の起源にさかのぼることができ、戦後いち早く復活、市民のまつりとなって二十五年になるという。今年は二五〇万人の人出が予想され、全国一、二を争う有名な大市民祭といえるものにまでなった。商工会議所が中心で、商業主義を基本とすることはいうまでもないが、近頃は一般市民も、又市外からも浮かれ踊り歌うグループとして任意に参加する者がでてきたという。市内主要広場が二七箇所その舞台となっている。神様のいない市民主体の無礼講が認められる。この種の市民のまつりは久留米や甘木でも私は最近経験したし、飯塚の青年たちの、まつりボタ山、嘉穂のリンゴまつり、小石原の陶芸まつり、浮羽の耳納の市など人出を目あての「まつり」が近頃どんどんふえてきたようにみえる。まつりといってもどんたくや久留米まつりは商業主義といっても他所の商業そのもの「市」とは違う内容ではある。いずれにせよ、このようなイベントで人が集り、よろこび、休暇気分を味わうことはその地域を中心に一つの活気のさそい水の役割を果たすのでよいことだ。今日のどんたく前夜祭に向けて婦人たちが仮装で踊る、その練習に二〇日かかったという。いいことだ。

5月3日（土）

共産党の硬直性

佐々木、安達、八丁の三人を相手に次期出版の対談を知事室で行い、途中どんたく松ばやしに対応するという夕刻の時間の使い方、昨日、今日のんびりした日程であった。出版物の内容に関する骨格は八丁君が作っていて、今日の三回目の語り合いで最後まで終わった。テープをおこし、それを統一ある原稿に仕上げ、それを私が手入れするという前回のやり方では手間がかかりすぎると思うので、私ができる限りテープを参考にしつつ書きおろすということで合意した。三〇〇枚ほどのものである。それに、私の「あいさつ」類及び私自身の書きおろしを加えて五〇〇枚ほどになる予定であるが、私自身の今後の執筆は三五〇枚にはなろう。これを二ヵ月ほどでしてしまわねばならぬから、余暇を十分に利用しなければならぬ重大事である。今日都久志会館で行われた県評主催の県民集会で、あいさつに立った共産党の松倉副委員長が、県主催の天皇在位六〇年式典について批判発言をしたが、これは政治と行政の間の取りさばきについてわかっていない硬直発言だということ

が話題になった。八丁君たちは実際に今の県政をなまのまの姿で思考の材料にする政治学がほしいと強く感じていたようだ。

5月4日（日）

三役夫妻の懇親会

両副知事、出納長と知事、それぞれ夫妻連れで山ノ上ホテルで一夜、語り合った。野野共がすぐ夫人のことを忘れて仕事の話に走る悪いくせがいまだになおらないことが実証されたが、いわばそれ以外に共通の話題がないからであろうか。奥さん達はきいているだけという時間が多かった。それでも五時半から九時すぎまで長時間にわたって雑談に花が咲き雑事の情報交換にも多少の時間はとれたであろうし、お互い顔見知りになるということだけでもこの種の懇親会の意味は十分にあったといえる。旦那どもが平素帰宅がおそく、夕食など不規則で、私生活犠牲に立って公務にあたっている共通性があるから、いくらか不平を吐き出し合うチャンスがあってもいいわけだ。それ以上何ということはない。秘書の森山がまだ馴れないためか、あれこれ失策を重ねていることについて私たちの方から話題の一つにしたが、近藤副知事がよく叱っておくと返事してきた。具体例をあげずにそれとなく言うておくよう私がいったら、彼は具体例をあげていわないと彼にはこたえないとさえいっていた。秘書研修というのがあってもいいのではないかとさえ私には思われる。秘書の仕事はむづかしいのだ。

5月5日（月）

河野さんのこと。

河野さんと呼んで午後のマージャンとあとの酒を楽しんだ。人生楽しみが大切であり、飲みながらあれこれ語った。今年は心理学の佐久間氏が退官したという。だんだん世代が進んでいくので、われわれがいかに古くなったかがわかる。社会の執行、小島の順番にもなっているということだ。近頃藤江君もみゆきもマージャンをしたがる。私に時間があるとみると、河野さんに電話する。彼はたいてい在宅していて、つねに OK でやってくる。奥さんがあきれているだろうという、じゃまものがいなくなるとよろこんでいますよと平気のようだ。しかし回数が重なるとこちらが気がひける。昭和二年生れというから六〇になる。頭も白く、かつ薄くなっているが、まだまだ元気で、マージャンのなかで切らすことなくタバコを吸う。時に灰皿に置いた吸殻が刺激の強い煙をあげて私が襲われることがあるので、私の方から消すこともある。彼は賭マージャンであることを気にしている。少しぐらいならいいがレートが高すぎるのではないかと、が気がかりである。私はひんぱんにやっているなら平均化し、同じメンバーなら結構いいわけが立つのではないかと意見を出している。彼は自分ならいいが、他の人の場合はよくないよという。内々だということ、遊び賃として考えるならそれでよいと思う。賭博の罪というのはどうなんだろう。

5月6日（火）

東京サミットの成果

一昨、昨の両日、東京サミットがおこなわれ、日程を終えたようだ。東京宣言のほかテロ対策と原発事故についての共同声明を作ったとのこと。リビアとソ連を目標に西側の結束を誓約したものである。中曽根首相がホストとしてのいいところを見せようとした割には、成果はもう一つよくなかったのではないか。元来このサミットは敵を意識して味方の結束を誓い合うという政治的傾向を強めるものになりつつあるため、相手をおどす役割を果たせばよいのであろう。英国サッチャー首相のいうように、これでリビアもテロ支援できなくなったということか。先進国首脳が、国際テロがおこれば、アメリカがやったように、元凶国に軍事攻撃を加えること OK との合意をしたのだから、今回のサミットは米英にとって収穫大きく、他には懸念が残っただけと行ってよい。ソ連の原発事故についても情報提供義務を一方的に宣言してもソ連を敵にまわしておいて何かの効果があるだろうか。ソ連が無視すれば、それきりということになりはしないか。死の灰は大気を浮遊し、西欧、北米といわず降ってくるだろう。「平和的」という考えがこのサミットに欠落している以上、首脳たちの遊びに終る。警備コストは高くつくのに。

5月7日（水）

体調異変

昨夜から右肩がひどく痛み出した。何なんだろう。寝返りも苦痛だし消灯など腕を上げ紐を引くのも痛い。医者にもてもらうのは、もう少し様子をみてからにするが一寸心配だ。それに近頃安定剤を用いているのに寝苦しい。毎日睡眠不足を感じる。だからどことなくだるい感じで張った気持ちになれない。さらに、痛風かリウマチか、両手の全指の関節に軽い痛みをおぼえる。これは以前からのことでなかなか解決の見込みがありそうにない。これらは一括して改めてみてもらうしかなかろう。済生会福岡病院での人間ドックは内蔵、血液関係なので、検査が行き届いてないようだ。しかし前回検査ではリウマチ反応がプラスだと小川先生の指摘があった。いずれにせよ、日常生活に直接影響するところまで至ってないが、日常生活のスタイルが動に欠けるように思うので、この点改良せねばなるまい。今日は県庁の階段を五階までエレベーター、あとを歩いて昇った。昨日の八階までは久しぶりだったが、急に動を取り入れない方がよいとのことで五階からにしたのだが、そうでもして肉体をもっと動かすように心懸けないといけないと思う。

5月8日（木）

荒れにまかせた裏庭

天気もよく久しぶりに早く帰宅できた。藤江君もみゆきも裏庭に出ていた。雑草は伸びる。藤花は終り蔓が伸び放題になっている。それらの処理だ。甘夏柑の花が咲き出したが、今

回は昨年ほどに花がつかないようだ。梅の枝も伸びっぱなし、しだれ梅に四～五〇梅実がなっている。利用できるほどになるだろうか。南側の藤棚はスペースからして無理がある作りと思われる。鉢物に撒水してみた。もう蚊が出ている。ハッサクはどうも勢いがなく開花結実の期待にこたえてくれないが、その横の温州ミカンはどっさり小さい木に花をむららせている。これまで二～三箇結実した木だが案外成長がおそい。以前は毎日のように庭に出て世話をした。菊作りをはじめた年などそれにすべてを投じたといっている程活気ある庭であったが、今はそういう時間がとれず雑然として活気がない。それでも自然はなるようになっていく。小さな植木鉢が雑然と雑草をつけたまま積み重ねられているが、これも亦自然といえよ。自民党が中央で、役員たちが集まり、保守中道連合の次期知事候補として田中健蔵を擁立することに決めたとか。県道路公社の幹部汚職がどうか意識的な行動・報道がつづくこの頃である。

5月9日(金)

太極拳について思う

嶋津、篠原の二人が上海市からの太極拳代表団を知事室に案内してきた。一寸だけ実技もみせてくれた。向うでは武術であるとのこと。スポーツとも解され、長寿の秘法がこめられているという。太極とは何かと私はきいてみた。天地の根源みたいな説明だったが、帰って字典を引いてみると、⊖天地未分の時、⊖万物の因りて生ずる根元、すなわち太極から両儀が生ずるとある。腹に重心を置き、両手、両足が分れて動く技を演ずるのはこのことを意味するようだ。上海でとくに盛んなように印象づけられたが、朝の公園などで人々が集ってやっている姿が浮んでくる。やっている人はすぐ汗ばむほど筋肉に力が入っているらしい。スポーツとみれば、場所や服装にカネがかからないので、それだけでも取りえがある。両手は同じ方向をとらず動きが全く同じ速さで角ばらずなめらかに動かないといけならしい。知事もやってみてはどうかといわれたが、賛否どちらとも返事できなかった。面白味というのが、何かにつけ必要と思うのであるが、その点どうであろうか。ラジオ体操など太極的発想はないが体を動かす点ではよい運動だとは思う。鉄壘鈴運動もやってみてはみたが、面白さがもう一つというのでつづかなかった。何でも自己修養のつもりならやれないことはなからうとは思ふ。

5月10日(土)

九大創立七五周年開学祭 岩田嘉人君の死をきく

九大の開学七五周年記念日。懇親会だけに顔を出すのに行ったら、行事進行におくれが大きく、池田元学長の講演をかなりきかされた。懇親会の方ではカメラマンが来て、私と田中学長に不断に注目し、パチパチやっていた。自民と中道の推薦で次期知事選出馬と目されている田中氏と現知事がどう出会い、対話するかを画がいてみたかったのである。レセ

プシオンには高石文部省初中局長もきていて、これ又知事候補に名が出た事のある人物、注目の一人だったろう。私はあいさつで、五〇周年記念講堂から四分の一世紀がすぎたのだからその間が大変だったということ、九大と県の協力関係はぜひ必要と力説しておいた。技術立県のこと、国立博物館誘致のこともありと事例をあげての話をしたのが、高石局長は博物館についてはいささか冷たい反応しか示さなかった。よく意味がわかっていなかったのかも知れない。午前中の市民会館での戦没者遺族大会の時会長の遠藤氏が岩田嘉人氏の病死を知らせてくれてびっくりした。二、三週間前のことだというのが、当方は知らなかった。岩田氏の病気のことはちらちらきいていて気にはなっていたが、情報が足らず、又当方の積極性もなかった。早速対応はせねばなるまい。

5月11日（日）

宮田町には石炭後遺症的「風」は吹いていない

今日は広報の「ふるさと対話」事業として行った宮田町だったが、先方の受入れはまるで町あげての祭りさわぎのごとくであった。石炭問題が過去一〇〇年間この町の流れを独占していたが、炭鉱がなくなり、人口が半減したあとは、町の再出発が求められ、今では、町民の各派各種の再生への試みが勢いよく芽ばえてきたといえるようだ。婦人、老人、子供、青年のあれこれのグループが実に活発に動きはじめている。町中央公民館に着いてボーイスカウト、ガールスカウトにレイをかけられ歓迎されたのにはじまり、最後は婦人たちの町音頭おどりと、音楽グループとのこんだんに終り、中学の校長、教頭とも言葉を交わすことができた。ともかく「総立ち」そのものであった。これは私にかなり強い感動を与えた。私はさきに「筑豊の精神的風土」といって物議をかもしたことがある。「流れ」、「風」というのは本質的基本的なものというよりは、そういうものが支配的な位置をしめているという意味にとったらよいと思う。であればこの「風」又は「流れ」は変えることができるに違いない。その意味で、今日の宮田町あげての「ふるさとフェア」、対話集会には炭鉱後遺症的な陳情要請は全くなく、底からの本来的な明るいものが感じられた。

5月12日（月）

内需拡大の建設省方針が明かにされた「一日建設省」（会議）

宮崎県出身の江藤建設大臣が各局長を従えて福岡国際ホールで「一日建設省」なるものを開催した。この種の試みは省としてもはじめてだという。彼は思いきった新方針すなわち内需拡大のための上半期に予算の八〇%前倒し発注と、その後の建設国債の発行の可能性を大衆の前に明らかにした。ドルの値下がり、保有ドル過剰、サミットでの内需拡大要請などの情勢はいつかはこの方向を打出さざるをえないぎりぎりのところまできていたといえるであろう。が大臣のあっさりした自信ある人柄も、この雰囲気合致していたように受け取れた。今日の一日建設省は経済界からも多く詰めかけていたが、大臣のこの話をきい

ただでホッとしたのではないだろうか。とくに九州一円は官公需に依存するところ大なるものがあり、経済界は冷えきっている。むしろ日本の後進地にすらなっている。だから朗報だったろう。各自治体は官公需維持のために財布の底をはたいているのだが、建設省の予算拡大方針はわれわれ自治体に新しい負担を強いることになりはしないかと心配される。自治体持ち出し分をどうまかなうか。地方債という手が残ってないということだろうか。

5月13日(火)

死の恐怖 島田広子著「リューマチを生きる」

気温が急上昇で半袖シャツだけでいられるようになって来た。夜になってかなり雨が降り出した。奄美では梅雨入り宣言とか。雨は今のうちに降ってくれたがよい。うんと水がめにたまっていないと夏に心配が多いからだ。夕方県議の吉村剛太郎氏母堂の弔問をした。75歳ガンと僅か一ヶ月の闘病だったとか。帰りに車の中で、まだ若いとか、否もうそれくらいでもという話になった。近頃寝つきが悪い日がつづいている。ひる間ねむいくせに夜になると、とくに床に就くとねむけがどこかにすっとなでしまう感じである。それでもいつかは眠ってはいる。十分眠れたと思わないだけ。途中便所に起きるのが一番癪だ。人間は死ぬときつらいだろうかという話になり、私はつらくはないのではないかと、眠りにおちるようなもので、知らぬうちにそうなっているのではないかと。いよいよ死ぬ時になって遺言を認める人もいるが、それでも死の恐怖はないのではないかと。楽観的といえはいえるだろう。あと五年、二年ということであっても、恐怖感にとらわれることはないのではないかと。近頃車の中でリューマチの本を読んでいる。

5月14日(水)

在位六〇年式をめぐって県民の会からのクレーム

午後三時求めに応じて県民の会幹部たちと知事室隣の応接室で会見談話した。出された問題点は一つ。中味は天皇在位六〇年記念式典の県主催発表であり、クレームは県民の会に相談なしにということであった。内田茂雄氏、花田新太郎氏らである。花田氏が鶴崎県政など例示しつつ、知事がだんだん遠い存在となり、支持者から離反していった同じコースを奥田県政もたどりつつあるように思うと、同席した近藤副知事に詰め寄った。この式典県主催の発表は支持者の気持を逆なでするものであり、いくら議会対策上とはいえ、野党と対決する場があってこそ支持県民の納得がえられるのではないかと。だが、問題はそうかんたんではないだろう。なる程、支持団体との連携は反省点として今後改善せねばならぬが、式典主催と議会運営との双方の配慮につき判断が違うようだ。予算案が流れてもいいからふんばるべきだというためには式典否定が重要で、それだけの価値ありと判断できるかどうかである。支持者一般を表面に出してきているが、あるいは団体幹部の面

子の問題という側面が大きいのではないか。その辺判断材料に違いがある。六月、九月と議会中の苦悩を経てなすべきで、知事が積極的に決断すべきでないという言い分にも情勢判断に違いがあるようだ。こん談の席を設けることを約して別れた。

5月15日（木）

汚職への対応

一時半から七〇三号室で部長など三〇〇人ほど集めて汚職防止の趣旨での特別監督者研修会が行われた。加藤弁護士を講師に招いて講演をきくのだが、知事が前段二五分間講話するという形式である。汚職には不断の誘惑があるがこれに打勝つ職員のモラルと、これを監視する組織機構の存在がなくてはならぬであろう。県の情報公開制度がこれに少しでも有効に作用するならいいと思うし、職員の総監視があるといい。私の講話はこのことを強調したものになった。職員個人のモラルはいうまでもないが、不断の誘惑に負けないモラルは周辺から強要されるシステムがなくてはなるまい。それにしても今回の道路公社の汚職はかなり大規模で、県としても防止検討会を準備すると同時に今回のような特別研修会をせねばならぬことになった。来る十九日の臨時県議会でも、単なる議会内人事の議会であるのに、汚職に対する知事の特別陳謝発言が仕組まれねばならない。不心得者のために、県政の信用が失墜するばかりか、こうした余分の努力が強要されるのである。警察経費その他は知らぬことにしても、いわば余計なことではある。こんなことは今後まっぴらというしかない。

5月16日（金）

東公園が名所になりつつある。

沖縄から五組の母子たちが来訪。県からも交換で行っている模様。小学一年から三年までの子で、母の日にちなんだ作文、図画のコンクールに入選した人たち母子が引率の先生方に連れられて、主催の毎日新聞の職員も同行していたようだ。知事室からは空港の発着、新幹線在来線の往来がよく見渡されるので、私はこんなとき何はさておいても子供たちに、こうした動く風景を子供たちに見てもらって楽しんでもらうことにしている。飛行機の発着状況は知事室の窓からは見るに値する。新幹線も面白い。子供たちにとっては、新幹線の走る全貌をみるのは珍しいことのように思える。東公園のたたずまい、とくに日連、亀山上皇の銅像を見おろすのもいいが、公園の緑の中で人々が遊んでいる姿をみるのもよい。とくに、学校の生徒達が集団でバトンガール練習をしている統制ある運動をみるのもよい。今はもう亀山上皇像の周りのツツジは咲き終わっているが、年々成長していく木々の緑のたくましさには、近頃目をみはるものを覚える。あと五～六年もたつと立派なうっそうたる緑地帯への成長が楽しめるであろうと思うと、一つの財産として自慢できるに至ると思う。

5月17日(土)

海岸への過剰投資を感ずる

今日は全くの快晴で東京往復の空の旅を楽しむことができた。富士はいつ見てもよいものだ。あたりに雲のない日でも富士だけは中腹から下に雲を寄せ集めている時が多い。もちろん一般に曇の日でも頭だけは雲の上に出している。見あきるように思うのだが、やっぱり見てしまう。今時の富士は五合目までは雪をたくわえている。国東半島の山谷が地図でみるようにくっきり全貌を見せるのも興味がある。それもそうだが、海岸のどことも港の設備が人工的によくととのった所が多く、日本政府が他のインフラよりも漁港あたりに資金を多く投入している姿が感取できる。同様に大都市の埋立地の多いこと、に驚きを覚える。ほとんどといってよいほど、人工海岸、幾何学的な海岸になっている。それほどまでに海岸を人工的にしなくてはならなかったのだろうか。なぜもっと国家資金を他のインフラに投下しなかったのだろうか。海岸をそうまでする必要性というか、政治力には驚異すら感ずる。船舶や漁業を軽視するわけではないが、かなりな過剰を覚えるし、街並み美観などの軽視が悔しまれてならない。政治家、行政マンの感覚のせいだろう。

5月18日(日)

赤旗まつり

午後はやく舞鶴公園での「赤旗」まつりに参加した。共産党のタスキをかけた議員たちは顔を売るのにいい機会であろうが、一般参加者は、正規の議事次第がすんだあとは歌やら踊りやらではしゃいでいた。共産党支持者もふつうの人間でむずかしい理屈は抜きにして楽しむべきときは楽しむとみていい。会場には大型宣伝カーが乗入れられていて、よくみると新品の高級車だ。三千万円余の品物ということである。きいてみると、共産党はこんどの参議院選挙では比例代表に諫山氏を立て、地方区に有馬さんを立てているので、福岡県は重点運動地域にしているからだそうだ。共産党ががんばるのはいいが、県政周辺をみる限り、まだまだ柔軟性を出してほしいものだ。前田中委員長よりは今の堀井委員長の方が柔軟性はあるが、どうも取り巻きの人達に固いの一てんばりの人がいるようだ。党员以外から票をもらわないとどうにもならない議会制を認める以上、票あつめの方策を表面に出した方がいいと思う。原理原則は一般の人がわからない雲の上で十分やったらいいのである。今日の「赤旗まつり」はよかった。

5月19日(月)

又、又ただら議会

雨がかなりはげしく降りつづいた。例によって予定の県議会は、臨時会で人事(議長、副議長ら一年交代のため)を決めるのが主目的ながら五時間もおくれて、午後四時、代表者会議がやっと開かれるというのろのろぶりで、本会議が始まったのは六時四五分。当方は

もちろん釘付けで、雨ふりの外をながめることが多かった。議長は田中久也→篠田栄太郎、副議長は石橋進から酒匂大和氏へ、もちろん野党のタライまわし。議長は自民が独占、副議長は自民及び他の二会派が順番ということが筋になってきた模様。人事はあれこれのおもわくがあつてなかなか決めにくいようだが、なぜ前日までに万事下相談を終っておかないのだろうか。日当かせぎが目的のように、時間延長を平気でやるきたなさである。あまり権威がとおらぬ者が議長になるためか議会秩序がめっちゃめっちゃになっている。それに加えて中杉芳夫氏が新解という一人会派を作って今日も百条委を作れという動議を出して事を大きくしようとのオマケがあつて「空転」状況がつづいたようだ。こんなのを「議会制民主々義」というのだそうだ。

5月20日（火）

水防訓練にちなんで、一日一人のペースの県下の交通事故死

春日の陸上自衛隊基地から久留米までヘリコプターで、今年度水防訓練（県と久留米市共催）に参加した。心配していた天候も平穏で空から見る筑後平野は麦秋近しで、うす黄色の縞模様の緑が展開して美しかった。十分あまりで現地小森野岸边に着いたヘリの威力をつくづく感じさせられた。水防訓練も近代的な機動力の示威ではあつたが、文明が災害の「文明」を呼ぶとの感なきにしも非ずである。人命救助活動に訓練の力点があるのだが、それはいいとしても、最近の報告によると県下の交通事故は新記録であつた昨年をさらに上廻った死者を出しているとのこと。一日平均一人が死ぬというようなことになるなら、戦争はおろか、これこそ大変な災害で、われわれは水防もさることながら、交通事故の防止に一そう力を注がねばならないのではないかと思う。昨秋は県として交通事故非常事態宣言を出したと思うが、今年は又それをすべきかどうか、かっこうがつかないように思える。事故の原因者の半分以上が二〇歳代の若者だとさく。命知らずといつていいがこれらドライバーの教育は急務である。暴走族退治もやれないものであろうか。人の命の大事さを交通問題につき何よりも強調したい。

5月21日（水）

岩田嘉人氏のこと（上）

福岡発の最終便で上京した。一足先に上京し、藤沢市片瀬山の故岩田嘉人宅を弔問した佐々木君から、くわしい事後報告をきいた。十時半頃から十一時すぎに及んだ。あいにくの雨で、私の代役をしてくれた佐々木君も大そう苦勞の旅だったらしい。実際的にも気持の上からも、私が、この際弔問することは無理だったので佐々木君に代役をたのんだのであつた。彼は十分に代役をはたしてくれた。小一時間も岩田君の奥さんと話してきたとのことであるが、彼がきいたところによると、私が知事職を消化する上で大へん困苦をなめているとの前提に立ち、岩田は何とか私を助けてやれないかと努力もし、気にもしていらし

い。最後には恒松島根県知事にも手紙を出して、奥田を援助するよう懇望したようだ。岩田がなくなったことを知らぬ恒松知事から、奥田に会うことも諾との返書が最近届いたという。福岡の遠藤参議、姫高の関係者とくに河本敏夫氏、岡庭氏に仲をもってくれたり、浅尾に会えといたり、野村不動産、共同計画社に紹介したり、いろいろ骨を折ってくれた岩田ではあった。肝臓の手術を十年ほど前にし、ガンで四月二十九日午後六時に死去したという。

5月22日(木)

岩田嘉人氏のこと(下)

岩田嘉人氏は姫高で同クラスの人だが、私のすぐうしろの席だったかと思う。山岳部員として活動していた。石見益田出身ときくが、育ちは東京らしい。情報量の多少で私とは大き^びがあり、つねに圧倒されっぱなしであった。彼は京大経済に進み、私は九大経済に。私が東大経の試験に失敗し、あと選べるのは医科大がいいということで、長崎を希望していたとき、姫路の下宿で、クラスメートがもうバラバラになってしまった頃の三月下旬、彼は私に長崎をやめて九大法文に行くようすすめた。私は九大には経済はないと思い込んでいたし、彼に啓発され奨励されて九大経を決めたといういきさつがある。私が、養父のすすめる岡山医大をふり切って長崎医大に進んでいたら、原子爆弾を受けて死んでいたかも知れない。その意味では岩田はターニングストーンだったわけだ。奇しき因縁というべきであろう。そんな因縁の岩田が、戦後職場を転々したことを折にふれ私はきいたし、訪ねたりもした。だが彼の家族のことは知らないままである。生涯に四つも五つも職をかえた彼とくらべると、私は知事になって二度目といえる。岩田は他人の世話は大変進んでるのに腰が落付かなかったようだ。その意味では職場で信用が薄かったのかも知れない。軽すぎるといってよいかも知れない。一寸かわった人だった。

5月23日(金)

健康に自信が薄れる

どうしてか近頃睡眠がよくとれない。安定剤にたよってようやく眠りにおちるのであるが、小用で起きてしまって睡眠時間が短い。ひるまは激務なので疲れてしまう。車の中では時にねむっている。会議の時も緊張のない時はついついコックリやってしまうことがある。だから就寝後はうまく休めるかと思うのに、なかなかねつかないのである。何か考えごとをしているかというとなんか否である。顔面のあちこちが痒くなったりして手をやってまぎらわせる時間のすごし方である。安定剤は医師の処方によるが丸薬を半分にして服用している。一箇でもいいといわれるが、くせになったり、たまったりしてはいけないと思って半分している。それでも(半分にした分だけでも)くせになり、体内にたまっているのではなかろうかと心配する。十分な暇がとれて何日か入院してねむりたいただけねむり、ね

れないならねれなくても仕事に差支えないような状態になってみたら、回復するのではないかと思う。どこということない健康状態ながら、何となく覇気に乏しく疲れたような毎日である。それなりに動いている。頭がさえないかという、そうとは思えないが、さえているともいえない。一日のうち余った時間を休めばよいのだが、余しておく気がないので何かをやっている。

5月24日（土）

近藤副知事の事情聴取。

朝のうちに佐々木氏からの連絡で近藤副知事が取調べをうけることになったとの連絡があり、今日一日これで追いまわされる羽目となった。林県議、松本組の平井副社長の三人が取調べられているという。奥村組からワイロをもらい、天神地下駐車場請負落札に便宜をはかったという話。それにそのルートで奥田知事の政治資金をかせごうとしている、という絵である。落札の仕組みの中に松本組が大きな力を及ぼしているとみている。選挙前の自民党の指図で動く警察の策謀ではないかという推測がひろまっている。夕刊にはかなり大きく扱われている。奥村組の方からの供述によるらしい。久留米で華香園での商工会議所婦人会のチャリティパーティに出席のあと、RKBと毎日にコメントを求められ、八時頃福岡に着いたが、帰宅できる状況にないとのことで城山ホテルに泊ることになったが、社会党や県評の幹部も来て取調べが終るのを待ちながら対応を協議した。近藤、林、平井の三人は夜九時ごろまでには、それぞれ別に解放されたいが、記者たちの目をさけるためかわれわれも事後の状況をきくに至らなかった。今日は思わぬことで、帰宅できぬ不自由な身となった。

5月25日（日）

奥田県政の屋台骨をゆさぶる事件

近藤氏の事情聴取は今日もつづいた。新聞は奥田県政の屋台骨がゆらいできたことを報道した。近藤、林の二人がその両輪となってまわしてきたのだからということだ。しかも、清潔を売りものにしてきたし、道路公社の宮内などは亀井時代であるにしても近藤は奥田時代になって秘書室長、出納長、副知事と、とんとん調子で重用されるようになった人物だけに、奥田の分身とみるべき人物で、そこに大事件がおきたからである。報道は全国版であるから、全国から注視されている。事態はこのようで、否定すべくもない。林氏はすでに五〇万円を奥村組から受取ったと証言しているらしい。近藤氏の疑惑は八〇〇万円を次期知事選にあてるため奥村組ほかベンチャー三社に落札額の一・五%相当として要求したと奥村組側が証言しているためだ。記者たちは今日終日拙宅のまわりに張り込んで私を捕え、どう思っているかの心境をただしたがっているのだが、私は一切面会しなかった。各社ごとに会うのではなく、明日特別に記者会見の場を設定するということにした。今日、

須崎公園での渡辺四郎参院候補をはげます大衆集会で、松本英一比例代表区参院候補は、特捜当局は奥田県政つぶし、松本組つぶしをねらっている事件だと演説したという。

5月26日（月）

報道暴力を思う

昨日もそうだが、今日もだった。報道記者たちは拙宅におしかけて私に面会を執拗に求める。藤江君は居留守を使ってでも面会をことわっている。電話をかけてきても同様である。今日の記者会見の際に、「公人ではないか」との非難があったが、玄関口でも同じことをいう。思うに、そういう非難があてはまるかどうかだ。藤江君は応対の中で、「公人である前に私人だ」といい返していたが、両者の引っぱり合いになっているが、実際が判定を下すしかあるまい。一般には記者会見の場を特別にでも設定している。これは事件の場合は私的時間や都合をさいてでも公人だからこそやるべきだとは思いますが、夜もおそくなって執拗に玄関のチャイムを鳴らし、「居ない」といっているのに、「公人じゃないか」というのは勝手すぎはしないか。報道一般でも、その理由は一〇〇%立つまいに、一社の記者がそういう時刻に執拗にそれを主張するのは理由に欠けるといわざるをえない。その理くつに屈すると、無限界になってしまう。玄関前の石段に何時間も張っているのも、監視がましく、個人の自由を奪うに等しい。一般にはアポイントメントをとるとというのがひとに会うときのエチケットなのに、記者たちはその逆を行って平然としている。報道暴力とでもいいたい。

5月27日（火）

筋書きを予め作って行動する警察。マスコミ、野党

能楽堂の落成式前の時間十五分ばかり三日間取調べをうけた近藤副知事から経過報告その他心境をきくことができた。夜は夜で林県議から四日間の取調べにつきはじめて連絡の電話があった。能楽堂では記者がうるさくまきついてきた。昨日記者会見したばかりなのに、彼等は警察のリークをほとんど常に真実であるかのように書き放送する。警察も報道も、自分たちでストーリーを先の先まで作っておいて、それにあうように取調べたり質問したりする。今日の県議会総務委員会での野党の副知事出席要求の質問攻めもまた同じ調子である。近藤らが白であれ、黒であれ、県民をさわがせた道義的責任はどうするのか、知事は副知事の処分をどうするつもりなのか、副知事は自分でどう責任をとるのか等々の攻めがそれである。事実がはっきりすれば厳正に対応すると答えているのに、そういう答えでは納得できないと反撥する。私は事実を予見することも出来なければ取調べる立場にもない。なのに、将来の仮定（彼等がえがくストーリー）に対して具体的な対応を要求してくる。私は間違ったらどうするかを思い答えは出せないでいるのに、彼等は答を求める。自分の筋書きにのせて納得できる答弁を早めに求めるのである。次期知事選はこれで勝てる

と興奮している。

5月28日（水）

留学生サービスの必要性

九大記念講堂で留学生との交歓懇談会があってあいさつに行った。昨年三六〇人だった外国籍学生が今年は四〇〇人になっている。県全体で昨年五六〇人だったから今年は六〇〇人以上になっているわけだ。十五年さきには八倍になるだろうと見込まれるから、県全体で四、五〇〇人、九大では三、〇〇〇人をこえるという単純計算になる。国際化時代といわれる時、われわれはその対応を今からあれこれ思案しておかなければならないだろう。一番に宿所、次に言葉、三番に案内、インフォメーション手段、こうした彼等の生活環境への配慮であろう。学生だから学問上の指導配慮は当然であろうが、生活環境への配慮が足りないと、従来の謬ち、すなわち、かえって敵意をいだかせてしまうことになる危険性がある。公営住宅の開放、見学案内、ホームステイの日常化、アルバイト探し、医療制度の恩恵など考えねばならぬ点が少くない。県では今の国際交流課だけで対応しきれないのではないだろうか。交流課を拡充するか、種々分野にそれぞれの対応を考えさせるかだろう。さし当り、公営住宅の開放、ホームステイ、各所見学については取り組みをはじめてしかるべきであろう。ロンドンに一年留学したときは、そうした点で実によくしてくれたと思う。妙なところで経験というものがよみがえってくるものだ。

5月29日（木）

比喩禁物の世界

私の発言には、時に比喩が出される。一般社会ではむしろ機智として受けとられ笑ってもらえることが多いが、県庁では行政議会のいずれをとわず、かえって怒る場合が多い。比喩はここでは禁物である。「日の丸桜の木」にしても「味噌汁の豆腐」にしてもそうなのだ。後者については今回の近藤副知事問題をめぐり、臨時部長会で「知事が部下のすることを一々チェックし、知っているわけがない。朝の味噌汁の中の豆腐をどこから買ってきたか知らないようなもの」と私がいうと、某部長がそれは不適切発言だ、といったことに始まり、誰からか記者に漏らされ、西日本新聞に紹介されたわけ。この事件を味噌汁のように軽く考えているとか、副知事を女房と取違えているとかの非難がふきまわった。比喩は論理の類似をいうので、わかりやすい近道と、思うのだが、非難する人は同一性、類似性と解するようだ。「清水の舞台から飛び降りる」という場合、論理の共通性を言うのだと思う。県議会は攻撃のための攻撃だから、どこかねらっていて噛みつく。しかも多数野党であれば横車だろうが何だろうが構わないから、当方もさもありなんと思うが、与党の者や秘書室の者がそういうようにいうとか、部長が記者に早速いうというような事態なのだから、うっかり比喩が使えない世界ではある。雀、トビ、鷺の比喩についても思い出す。

5月30日(金)

野党の副知事罷免要求にきちんと対応する。

夕方知事室に中村室長、佐々木参事がやってきて副知事罷免要求を野党側が考えているということをもぐって少々論議した。私が、近藤副知事とは心中してもよいという意味のことをいったら二人はうなづいた。六月二日の夜、社会党の竹村、県評の岩崎が拙宅に来て、こうした問題について相談をもちかけるのではないかと思うと中村がいうので、私は同感だといっておいた。ここで野党には攻めたいだけ攻させよう、私はひくべきはひくが、一定の限度をこえたら必ず強く反撥するだけの覚悟はきめていると表明しておいた。野党は七月の定例会まで待たず、臨時会を要求し、そこで一気に知事を追詰めたいとしているようだ。私はむしろそれを歓迎する。今、警察は一定額以上の県工事について悉皆資料を求めている、県は一応これに応ずる構えだが、私はこれにはむしろ反撥する。なぜなら悉皆資料要求は不当だし、それをされると次々に長い時間をかけて奥田県政灰色又は黒の証明をすべく、ネタを記者にリークし、次期知事選まで小出しに灰色ニュースを出していくに相違ない。だったら野党の近々の副知事罷免要求をもぐって、こちらから一気に勝負すべく、(県民に信をとるべく)打って出た方がいい。後藤田官房長官はどう計算しているのだろうか。

5月31日(土)

傷ものと半端もの

大阪キタの繁華街の某店で夕食会をした。室長、森山、中尾、それに大阪事務所長、次長という顔ぶれ。大阪事務所では隣の佐賀県事務所のファックスを使わせてもらって福岡地元の新報はほぼ見ているということだが、近藤副知事のことなど、実感をもってはわからないのが当然で、こういう顔ぶれに限っての話ということで、話題が尽きなかった。そうした話題の中で、有田焼の話が、そのテーブル上に出た灰皿を例にしながらしゃべった中で、中尾君が傷ものと半端ものの区別がはじめてわかったとの感想をもらしたのが印象的であった。彼は混同して考えていたという。私は、軍隊の主計の生活を回想しながら、主計を一年していたら倉が建つということがいわれていたが、罪の意識なくとも、そうならざるをえない境遇に立たされるメカニズムを例をあげながら語った。メシたき、タバコの配給、それに米のはかりこみ・はかり出しのことなど例に出すと、みんな感心してきいていた。農家で斗棒を使うとき、まわしながら引くとか、はかり棒を使う時の棒の水平加減をどうするかとか、榊に米を注ぐとき高所からなるべく注ぎ込まないようにするか、色々の例を出して人間社会の裏と規則(正義)の連関加減について話したのであった。

六月要記

社会党が労働組合の政府への代表議会代表であるといわれて久しい。イギリスの労働党も

スタートはそうであった。いわば労働組合運動の一つ面であった。それは消費者代表、市民代表等々他のグループを代表するものではないし、あるべき姿としての全代表でも、もちろんない。その状況が、今なおつづいているし、福岡においてもそのままといえる。農漁民を代表するような組織になっていない。農民はどんな悪条件をおしつけられようと、自分達の代表は自民党だと思込まされている。鉢巻しめて米価要求、自由化反対要求をするが政府はその反対のことをやっている。それでも政府自民党が自分達の代表だと思っている。自民党の代議士はそうした要求大会に出席する時、要求は政府に十分つたと約束するが、その政府を自民党が作っている。こういう状況でも社会党は農民代表として行動できないでいるし、組織的につながっていない。選挙となると、農協の諸組織は一せいに自民党マシンとして働く。県知事からみると、社会党議員は与党議員だが、県社会党はどうも横並びになっているようだ。議会の内と外、党は外にあって、県評などと並んでいるかのようだ。これも党が労組代表然としているためだろうと思う。今回の道路公社事件においても、あれこれの知事への注文を、社会党は、県評と一しょに知事にもってくる。しかもそれが、社党県議の意見とくい違っている。後者は又別に知事に処方箋をもってくる。社会党は、どこで何をしているのかといたくなる。そうした面ではむしろ自民党の方が進んでいる。否政権担当の歴史の中でそのように鍛錬されたというべきかも知れない。社会党に、早く労組の政治代表としての姿から脱皮してほしいと念じてから久しい。が一向に拍車がかからない。労働組合の運動が一般的に停滞すると同じように社会党の勢力も停滞していくのが目に見えている。

6月1日（日）

公的生活に未練はない

昨日の食事の席で傷もの等々の話をした中で、当然、知事職に恋々としているつもりはないということも、私の心境としていっておいた。もちろん選挙した人の立場からはこれは禁句であろう。前にも書いたことがあるが、知事なんて、みんなから近づき難く、対対で話すなどおそれ多いと一方でいわれながら、他方議会などではボロクソにいわれ陳謝を強いられる。平素の自分の時間は十二時間あるなしで、あとは公に奉ずる日程である。限られた生涯をそういう束縛された状態に悔が残らないのがおかしい。収入も十二時間奉公ではそう高給とはいえず、県議の方が手取りは多いのではないかと思われる。どの点から見ても未練が残るものは何もない。明日は社会党、県評から竹村、岩崎の両氏が来て、野党がこんどの道路公社問題で知事責任を追及するなら対決しないかといいいに来宅する予定ときいているが、その心準備は当然できている。明日は衆院召集、即日解散で、衆参同日選挙が七月六日といわれており、県の野党はその選挙まで待たず、臨時県議会を開いて知事追及の構えを見せている。対決した方がすっきりしていると思う。

6月2日(月)

与党、支持母体がもつ疎外感が、この際強くあらわれてきた。

夜、社会党県本部の竹村書記長、県評の岩崎事務局長、山川政治部長の三人が来宅し、道路公社事件で、近藤副知事、林県議の二人が活動できなくなった今、S氏を起用してはどうかとの提言をうけた。これまでこの二人が両腕となって県政をきりまわしてきたが、その条件は今一変し、知事は「裸の王様」同然になってしまったわけだから。側近に頼れる人物を配すること。そして、社会党や県評など運動体と従来以上に密なる関係を保ちつつやってほしいというのである。知事は野党の近藤罷免要求に応じないで、そうなったら対決することも辞すべきでないということだけと想っていたのだが、だからS氏起用など、運動体が疎外されていたような従来のやり方を改めよというのであった。近藤副知事が嫌っていたことをやれということでもあるわけだ。知事の指導性が今こそ必要になったという。三人はやはり疎外感をもっていただけで、この際それを改善するよう要請してきたのである。ただ、S氏を入れてきた場合、近藤氏がそのままいるかどうか、さらにその周辺におだやかならぬ波が立ち、それによるプラス・マイナスがどうなるか、さらに検討してみなければならぬだろう。野党からも与党からも挟まれた形である。

6月3日(火)

政局はあわただしく動きはじめている

S氏を知事周辺におくよう、昨日岩崎、竹村、山川から要請があった件につき中村室長に話してみたが、中村室長もその得失を直感的にマイナスに評価して反応した。知事周辺に混乱、いや気が増大しては何にもならないと彼はいう。それで私からは、中村室長が適当な人を加えて、先方にその旨をいねいに説明する場を設けて対応することになった。まだ流動的で今日も野党三派の代表者会議で六月中に臨時議会の招集を要求するとの動きがでている。近藤副知事をめぐる疑惑の解明と三役の引責を要求するらしい。他方、昨日は衆院の解散があり、七月六日に「ダブル選挙」が行われることが決まり、政治環境の激動の時期になってきた。それだけに、この臨時県議会の意義も、各党の利害のからみで複雑であるといえよう。臨時議会開催の要求については、当方としても自然体で、冷静に受けとめ、要求するように対応していく考えであって、この旨、今日の記者会見でも答えておいた。汚職問題をこれ以上議会がつついて何がでてくるのか。県民に対し、黒の印象を少しでも濃く浮び出させたいとの欲求、少しでも日当など稼ぎたいとの欲求がそうさせるなら、さもしい限りだということになるろう。

6月4日(水)

「ガス抜き」は必要

県民の会から山口・大塚の二人が来庁し、中食を共にしながら当面の道路公社汚職問題を

めぐる県の状況、私の考えなど話したらまずは安心してくれた。情報不足でいら立ちを覚えていたようだ。情報が適切に入る仕組みになってないからである。社会主義協会の大坪、衣笠、八丁らソ連東欧を二週間ばかり旅行して今日帰福するとのことであるが、彼らもこの二週間ばかりについて今は情報がなかったことになる。情報不足が不満や誤解のもとになる。又、庁内と庁外の立場の違いが溝を自然に作っている。その溝も情報さえ通じておれば埋まる。情報不足、連絡不足に加えて運動体は運動の論理で、行政体は行政の論理で、判断し、発言する。その間にかなり大きな違いが生ずる。生ずるだけでよいのであれば、それですむが、所詮どこかで通じてないといけないと相互に考えている。そこに大きな不満ができる原因がある。「ガス抜きが必要ではないか」という合言葉がある。それはこうした不満を一堂に会して理解し合えるよう意見を出し合うことである。運動体が要望書や決議を携えて知事に面会を求めてくることがあるが、これは彼らなりの「ガス抜き」で、抜いたことにはなっていないようだ。

6月5日（木）

沖縄にやって来て

那覇空港に降り立つと、空気がムツとした。もう沖縄では梅雨明けになるのかとの時期らしい。九州、関西などようやく梅雨入りといわれる。那覇も人口三〇万をかぞえ、どんどん近代化が進んでいる。アメリカ占領統治から復帰以来一四年、政府の肩入れも大きく、ずいぶん社会的変貌をとげたのである。ヒョウタンヤシ、梯梧、南洋杉など南国ならではの並木はすばらしいと思った。それでも裏道に入ると、濫開発のかけが見られる。離島が多く、医介補の制度がまだ残り、医師不足は深刻らしい。水、教員など自治体にかなり負担をかけているとの話もきかされた。梯梧は県花でその赤い花は今は散ったあとのことであつた。ふつうの人は海、空の青さ、パインアップル、洋酒、精肉などのおみやげを、そして少し気のきいた人なら戦跡、米軍基地など、また来年に迫った四二回国体（海邦国体）での日の丸、君が代論議について思いを馳せるであろうが、われわれ自治体関係者は、水や学校、産業廃棄物、そして県立病院などが気になる。沖縄は政府によって特別の扱いを受けているとはいえ、まだまだ数えきれぬほどの問題をかかえているようだ。電力もたいへんらしい。「九州は一つ」とはいえ、沖縄は東京を向いていないとやってゆけないのである。九州地方知事会にはやむなく加入し負担を甘受しているが、とても「九州は一つ」の話ではないことがここに来てわかるような気がする。

6月6日（金）

工事内容の資料提出についての無差別要請にどう対応するか

夜衣笠君に電話した。ソ連、東欧二十数日の旅行から一昨日帰ったばかりでダブル選挙になったことは向うで知ったが、県政の道路社汚職の揺れについては初耳でびっくり、今日

協会系の集まりがあつて意見交換したばかりだということであつた。私も今日は那覇での九州地方知事会から帰り、すぐ四五回国体準備会に出たあと、三役会で、野党の臨時県議会にどう対応するかを話し合ったばかりで、事態は今後議会をめぐってどう転ぶか、捜査当局がダブル選挙後どう構えてくるかほとんど判断がつかないでいる等々の状況を加えて衣笠君には報告しておいた。話題に挿んだのは、捜査当局から、すべての工事について資料を出せとってきている件についてである。今日の三役会で総務部長は指定要求機関(五九年四月から六十一年四月一日まで二年間)の工事リストを作成してきていたが、私は「無差別資料要求」に応ずることの可否について疑念が残ると主張したら、大塚副知事や富永総務部長は、一定の金額以上、そして資料内容も予定価格などいれてないので、この程度選択しているのだから提出もやむをえないのではないかとの態度だった。私の疑念に問題が残らぬではないとして、しばらく模様ながめとしたのが今日の結論だった。

6月7日(土)

早い勝負は望むところだが。

衣笠、八丁が東欧ソ連旅行から帰国しはじめて来訪した。高崎も同行だった。彼らは今回の近藤副知事問題につき、帰国早々にあれこれニュースをきいて論じ合つたらしい。彼らというには、これほど明白な政治的策謀はない。知事はもう退却は許されない。勝負は早い方がいい。このままで夏、秋、冬と経過すると知事はのたれ死にするだけではないかと。私も同感である。勝負をかけるとすれば九月議会あたりが潮時かも知れない。みなさんにその気持があるかどうかということが一つの要素となると思うと私はいった。今夜早速に近藤副知事と呼んで腹のうちを伝えようといつて別れた。夜九時になって山ノ上ホテルで中村室長をまじえて彼と話したが、彼らは、野党側が、臨時、六月、九月の三つの議会を通じて勝負に出てこないのではないかと観測している。その面もたしかにある。だったらなかなか当方から勝負は求めにくくなるわけだ。そうなると、当方はよい雰囲気を作りながら常に攻勢に出るしかないだろうし、警察は中央の指揮に従って県政にダークイメージを与えるような材料を長期にわたってリークしつづけるだろう。それに対しこちらがどうもちこたえられるかである。野党は田中健蔵をかついでいるようだが、最後は遠藤になる可能性が濃厚である。いずれにせよ、事件はすごく政治色を強めてきている。

6月8日(日)

三年間の林県議の努力が無にならぬように、がんばるしかない

昨日の約束で、夕方七時頃八丁氏、次いで林県議が来宅した。林氏は取調べの四日間の模様をかなりくわしく話すと同時に、公共事業をめぐる業界の内部のやり取りについても、一般論としてわれわれに知られない世界としてくわしく説明した。私は六日夕方の三役会議の時に警察が要求している土木建築工事の一括資料提出につき、無差別性をもつゆえに、

私がストップをかけたことを話題に出した。林県議はそれはその通り当然のストップだが、なぜそれを社会党の他の県議がいわず、知事にいわせたのか、と問題点を示した。知事がいうと警察の反応がよくないのだということだ。それにしてもあの資料を出したら向うの作戦に乗って、県政への攻撃を永びかせる材料にされるし、関係県職員の知事への信頼がなくなってしまう。提出しないで頑張ること。知りたいなら、いくらでも業界の新聞で出ているからといえはわかることだといえるからともいっていた。林氏は社会党県議団の幹事長は辞任するといっている。面子がなくなっているから、他の人にやってもらうしかないとのこと。いずれにせよ、他の県議では代替性に欠けるのが実情。今日の話は、三年間の努力が水泡にならぬよう、奥田県政のたれ死にならぬよう頑張るしかないということであった。

6月9日（月）

一〇〇条委ができてさわやかに迎える

代表者会議があり、十六日に臨時会を開くことを通告した。ここで冒頭知事発言のチャンスをと要請したが、このあとの議運で、知事発言なしと決め、更に、この臨時会で決める特別委員会に一〇〇条委の権限を付与すると決定したとのことである。つまり、どんどん攻め上る野党の姿が見えてきたわけだ。どこまで攻めてくるかは後日のことであるが、私は自然体で臨むしかないとはじめから思っている。ただ困るのは、これが野党の攻めだけに、勝手な運営をして極力醜聞をさらけ出そうとしていることだ。野党が返り血をあびるならとは思いますが、そうはさせじと、勝手な、悪運営を試みたら、こちらはどうしようもない。救いは誰もが多少の傷をもっているということだ。傷のないのがあばれまわるということになる。そうすると、あれもこれも傷口を見せるということになる。どこで自制できるかということだ。知事を攻めるための委員会が、むしろ互いの攻め合いになって収拾がつかなくなるかも知れぬ。いずれにせよ、私は自然体しかないから、動揺することは何もない。ごくさわやかな気持ちで、この議会の動きを見ていることができる。今日の公判の場で、道路公社の古賀総務部長被告が供述の認否を保留したとのこと。

【欄外記入】

花菖蒲抱きて城跡日が暮るる 葦水

6月10日（火）

お茶の道 “The Way of Tea”

六時から電気ホールで裏千家淡交会の第十四回茶道文化講演会があつて出席あいさつに立った。鵬雲齋家元夫妻の講話が主体である。氏から先日いただいた「一盃のお茶から」の七五ページから次の箇所を引用しつつ、あいさつを行った。……「今日外国ではお茶は異国の単なる興味の対象としての異質文化ではなく、外国人が自からのからだを通じて体験

できるほどに、お茶を自分のものとしているといえます。難しく、近寄りがたいと思われていた日本のお茶を、単なる型の理解にとどまらず、実相ある形として、外国のそれぞれの人の心の中に入りこんでいるということです」……茶道はわが国固有の風土の中で生れ、育てられた伝統文化であることは誰も強調するが、それは今、外国に輸出され、そこにひろがり花を咲かせはじめているということをお話してみたのである。「実相ある形」というのはわかるようで難解であろう。生活の中に現実のものとしてあるものが一つ型に結晶させられたとでもいおうか。単に形式化された美ではなく、現実の中にある美を取り出して定式化したものとして各人が心の中に位置づける。それを動作所作にあらわしてみる。それが茶道というものであろうか。だから万国に共有しうるものとなるというべきだろう。

6月11日（水）

原稿が進まぬ気分的なもの

どんどん日がたつ。再度の出版に備えての原稿書きが進まない。汚職問題を投げつけられて書く気がしないわけ。時間があるなら高野切の筆をとってしまう。だが、汚職事件が全くの政治的産物であることがはっきりするにつれ、原稿は早く書かねばと思うことしきり。先日は八丁君がそのことにふれ、十一月には出版したいということ、それなら八月には印刷に入っていなければといった。七月中に稿を終わらねばならない。議会で七月の主要部分をとられるなら、あと一ヵ月足らずの時間しかない勘定になる。いよいよ追いつめられている形である。夜はゆっくりしたいので、時間がとれないことがしばしばだ。泣きごとをいっておれる場でないから、明日から引きしめなおして、とにもかくにも書き進めることにしよう。今日は社共系県民の会の人達と那の津荘で汚職問題をめぐる意見交換をした。内田茂雄氏も来てくれた。みんなの意見はほとんどくい違っていない。県議会解散・知事選も辞さないということにも異論をはさむ者はいない。われわれは決して劣位にあるわけではない。福岡子ども劇場二〇周年祝賀会に来た人達も疑ってはいなかった。

6月12日（木）

隣の伊藤さんが土地の話で来訪

原稿を書きはじめたが、筆が進まない。何枚か書いて又書き直すといった状況。軌道に乗るまでの苦しみが一寸つづきそうだ。夜、隣の伊藤さんがやって来た。うちの隣の借家を売るからということが主内容。大野城市に自分のを新築し近々そこへ移転、そのあとに今の借家の人を入れるので空き家になるという。四〇坪ちょっとで、坪二十八万円程度だろうともちかけている。一二〇〇万円ほどになる。この話は値段を除いて二ヵ月前からきいてはいた。自分も欲しいのは当然だが、値段その他からして、今入手するのはどうだろうか。まずはそれだけ支払うに値するかどうか。自分の将来を考えて、その釣合いが問題である。それにこの場所に永住するのかなのか、将来に対する展望をまだ立ててみ

たことがない。マンションが建ってから環境はよくなかったという一面もある。日照がとくに問題である。売り払って、他に移転し、展望も日照もよい所に住変えた方がよいのではないかとも思う。知事になってから特に感ずるのは、この付近の人のもつ反感である。町内会長その他がよく思っていない。そういうところに住んで心地よいはずがない。

6月13日（金）

模索する日本農業の将来

農業団体の米価値上げ要求へのもり上がりが始まるシーズンになり、今年も農協会館で中央会主催の「福岡の食と農を守る」総決起大会が行われ、出席してあいさつをのべた。公明党以外の各党から、とくに自民党、農政連の政治家たちが来賓席に顔を並べていた。空気は自民党支持であるが、人々は政府と自民党との関係が別々にある。政府への怒りはあっても自民党さん頼むといい、自民党は政府がけしからんという。政治とはこういうものかと不思議に思うのである。今年はダブル選挙がいま始動したばかり。そして自由化圧力もあって、米価値上げ要求はとくに強くなく、農業の生きる道を示せとか、米の消費拡大策に積極的に取り組めという声が表面に出ている。みんな白に赤抜きスローガンの入った手拭ではちまきをしている。来賓もそうする。場内は熱気にみちている。それでいて、何となく目標というか解決策を見定めえない空しいものが流れているように思えてならない。来賓席の先生方も会場の雰囲気にはさからわぬようにするにはどうしたらいいかというような消極的な気分である。農業、農家は模索中というところか。

6月14日（土）

ターゲットにされた革新県政

午後三時から黒田荘で行った学文界友人たちの懇親会は当面の県政が話題であったが、「革新県政」に対する中央の攻撃戦略が、県警を先鋒として、お布施事件の第二ラウンドの様相をもって展開されているのではないかという見方では異論をはさむ人はいなかった。国家権力という大きな力が県を手玉にとっている。首尾よく目的を果たすかどうかであるが、われわれは、たたかいが長期化することを覚悟せねばならぬと私は強調しておいた。警察は二の矢、三の矢を放ち、的中するかどうかは別として矢を放つことに意義を見出すであろうし、その材料は、今日の公共事業請負業界の構造からすれば、どの県にもあることだが、福岡県では、業界の秩序が「革新」になってから変化しつつある。そこに材料がより多く存在するわけだ。奥村組は、福岡での公的地歩の後退の見返りをどこかで別途確保し、中央の筋から変化しつつある福岡県下業界の秩序からでる問題点の指摘の役割を負わされたとみるしかない。こうした「革新つぶし」に対しわれわれはどうするか。県民の会の立場から大塚君は、県民にこれを理解させる大きな任務が生じた、と頭を抱えていた。彼は必ずやってみるといい切った。

6月15日(日)

警察ファッショへの途がみえる。

昨日黒田荘に集った友人達は、今回の県警の出方が異常であるという点でみんな同意見だった。今日スターレーンで開かれた小柳勇氏をねぎらう集会に来ていた松本英一氏も博多署内の担当課が二とか一とか、違うのがおかしいといていた。その意味はよく理解できなかったのだが、中央からも取調官が派遣されていたり、ゴロツキ扱い専門のような、およそ民主々義的でない取調べが平気でできる奴が、近藤副知事を取調べたらしい。「いわなきや知事を呼び出す」といったり、足で椅子を蹴ったり、胸を突くようなジェスチャーをしたりしたらしい。これが任意、参考人に対する態度かとみんないっている。それに四日間も、長時間にわたってやっている。しかも秘密裡にではなくて、署内で、かつ、逐一マスコミにリークして、マスコミのリードをはかっている。マスコミの方も、がらの悪い事件を扱っている社会部系の記者が、偏見や予断を県警と手を携えて、新聞に書き立てるといふやり方だ。奥村組の小林がその片棒をかついで、警察の筋書きどおりにしゃべり、これがマスコミにリークされる。副知事の社会的地位は逆用され、ふみつけられている。八丁君は警察ファッショの途といった。

6月16日(月)

古賀自殺の引金は県議会の特別委設置であったろう。自殺は保守救済の古賀の最後の賜ものだろう

起訴中の道路公社総務部長古賀哲郎が昨夜冷水トンネル工事々務所車庫で首吊り自殺したことが、今日の臨時県会をさわぎ立てた。古賀は数通の遺書を車のボンネットの上においていたというが、その中に事実解明の手掛りとなるものがあるかも知れぬが、名宛人が公表してくれないと何ともいえぬ。が、何が彼をそうさせたかについては、彼が県庁関係者の江口利夫後援会長をしているという事実などから推して、今日の県議会でこの事件調査特別委設置が一〇〇条委として決まると、調査の中で、県警がターゲットにしていない人達が、(林県議、近藤副知事以外の者まで) 続々容疑者として発掘されることになるから、生きて調査の対象者になることを断つほかなかったのではなかろうか。冷水トンネル関係だけでも、天神地下駐車場の何倍かの贈収賄問題をかかえ、他の工事にもまだ問題があつて、古賀がその焦点に立ちドロを吐く結果となれば県政界の混乱が拡大し、反奥田勢の狙う逆の結果になるおそれが多分にあるから、自殺が、従来自分に一番忠実を示すことになると考えたのではないだろうか。又はドロを吐くことが死に値する別の恐怖を身近に感じさせると思ったのだろう。今日の臨時県会は、特別委設置の当初の趣旨を逆転し、古賀自殺を逆にとって近副知事解任要求決議という芝居をやって幕となった。

6月17日（火）

近藤副知事の解任攻撃の自己矛盾

とうとう徹夜一日延長になった今日の県臨時会。巨費を浪費して臨時会開催趣旨とは逆の、汚職調査特別委非設置を議決してしまった。特別委設置を野党三派の野合で目的としつつ、それへの途をたぐっているうちに、これを設置すると自分たちの足許に火がつくことがだんだんわかってきて、中杉提案という形にした設置決議を葬り去って幕とした。足許に火がつく位のことははじめからわかっていたのに、奥田攻撃の近道と錯覚した自民党一年坊主の近視眼的要求に押されて臨時県会を要求、特別委を設置しようとコブシを振り上げたのであった。今日早朝の県会の幕はあまりにも自民党の誤算を明らかに露呈した。しかも、古賀の自殺の引金が自分たちの策動した特別委一〇〇条権限付与問題にあったのに、これをさか手にとり、部下が自殺までしたのだから理事長近藤副知事を解任せよとの決議案決定になったのだが、これを追求していくと次の議会で知事不信任案上程までつき進んでいって議会解散になるが、それは避けたいとの思惑と自己矛盾を残してしまったのである。七月の県会の成り行きでは解散、県議選というドタバタまでいかないと幕にならないかも知れない。

6月18日（水）

県職員に動揺を感ずる。

ダブル選挙の参院分が今日スタート。県政の方は少々ひまができそうだ。しかし、副知事解任決議の通過により、身辺にわかには緊迫したとひとはいう。そのせいもあってか、県職員の間には身のふり方について動揺がおこっているかのような空気が私の肌を感じられる。今日の午後、六月議会議案説明の三役会において何となくピンときた。役人は役人なりにこういうことには敏感なのが当然であろう。タマがあたりぬように首をすぼめるような姿勢になる人が少ないわけだ。関ヶ原の戦などはとくにそうだったろうと思う。やる気、積極性をなくし、単純事務屋になってしまうのである。北九州では谷市長の引退がきまり、後継候補はきまったものの、勝負未知数とあっては職員の積極性が乏しくなっているようだ。県にもこの空気が感じられるのは気のせいであろうか。近藤氏について、白黒の判断がそれほどはっきりしてないのかも知れぬ。西日本の中野氏が、「黒だよ」といっているらしい。尤も西日本新聞は全体として記事の扱いが「黒」の予断に立っているようだ。福岡財界の意向に合わせているのであろう。その記事が県職員の動揺の一助になっているともいえるだろう。

6月19日（木）

カネミ油症患者への対応はないか

国会選挙の期間、県政は比較的ひまができる。でも今日のカネミ油症患者の陳情には正直

なところどう対応するか困惑した。裁判所という所は、政権に関係ある問題になると、大衆に冷酷だと思う。この問題が然り。三池炭鉱の二度の大事故についても同じである。被害者が大量に現存し、生活困窮に陥っているのに、それへの対策責任については、不可抗力とか予見できずとって、責任の所在をかくすのである。カネミ事件ではカネミ倉庫だけに責任があるとするが、三〇億円に達する損害賠償に任ずるとすればカネミは資力もないし倒産する。一〇〇人余の失業者もでる。だから患者たちは、もう一つ上の鐘化、さらには国の対応を求めているのだが裁判所は否の判決である。だからカネミ倉庫に不可能をしてもよいとの判決で、現に呻吟している患者がどうされるかには無頓着である。そうかといって国が別途この患者に対応するかということそれはしない。結局陳情を受けて県が何かすべきであるとはわかりつつ、県財政にはそんなゆとりがあろう筈はない。県としては、国の何らかの対応を強く要請するしか途はない。患者を見殺すという途はないからだ。

6月20日(金)

車中の読書

通勤途中など車の中で一寸でも読書してみようと思う。先日は秋枝原児さん(満一〇〇歳)の「句縁曼荼羅」を読ませてもらった。そのこともあって、秋枝蕭子さん宅に氏を病床見舞に行った。すでに両眼失明とのことであつたが、とにかくたいへんよろこんでいただいた。(六月十二日)ある意味では重体の病床らしい。それでも辞世の句など作っているとのことである。頭は明晰らしい。何組かの句会を主宰しておられたらしいが、この年まで、自分の好きなことで、同好の士を指導されているとはうらやましい限りだ。私も句をひねるような身分になってみたい。そわそわしていて、とても心境そうならないし、師事する時間もない現状である。尤も時間がなくても心懸けさえあれば作句は可能であろう。しかしその心懸けが前もって養成されていなければならなかったのである。車の中で句集句誌を読むのは、ほんの一寸の時間で、どこで切れてもかまわないので、一つの楽しみである。今日は趣をかえて、松原泰道の「一期一会」を読みはじめた。禅もまた味がある。茶と通じている。句とも通じている。外界に気をくばる要のない車中はわが天下である。

6月21日(土)

人生哀楽

人生半哀楽天地有順逆

在山泉水清出山泉水濁

玄羊展の十五回目が今市の美術館で開かれており、私は右の文を半切に書いて出品していた。両行とも杜甫のものだが、二つをくっつけてみても連って味わいのある言葉である。何回か書いてもうまくいったとは思えなかったが牧坂氏からも是非出品するよういわれていて、五月末になって思い切って出品にこぎつけた。丁度、県道路公社の汚職問題がにぎ

やかに報道されていた時でもあり、何かその当時の気分をいいあらわしているようにも感じられた。哀楽、順逆、清濁、いずれもドラマであって善悪でもって判断さるべきものではない。哀あるが故に楽あり、順も逆も立場によってそうみえるものであろう。水の清濁また当然であると同時に、水は不変であるといわなくてはならない。達磨大師のことばに不立文字というものがあるという。それはそうだが、杜甫のこれのように、文字が組み合わされて、実にこころにくいまでに真実が表わされるのも事実だ。

【「記念講演 日本の国際化と日本人の労働」（掲載紙不明）の記事切り抜き挿入】

6月22日（日）

書に徹しえたら

昨日岸本先生にきいたら、今でも週に五回は習字教室に出ているとのことである。生業とはいえ、ゆったりと休めないであろう。否、休むことなく自分の好きな道を老いてからも歩みつづけることができることは、むしろうらやましいほどである。高齢化社会の到来で、誰もが求めるのは、休むことなく仕事ができることである。第一の条件はもちろん健康である。岸本先生は一寸健康すぐれずといわれていたのに、この頃は健康そのものだ。玄羊会も五つほど教室があって、どことも少しずつ人数がへっているようである。惜しいことだ。それでも弟子がつづく限り、天職としてつづけていってもらいたい。昨日は各教室から懇親会に来てもらっていて楽しい一タだった。先生は名が九三、私が八二で数字表現で、先生の方が一つずつ多い。それに、九電グループの中だったと思うが、雅号を葦舟、葦泉とする人がいた。私が葦水だからこの三人は葦を共通とするわけだ。知事というような仕事は「世のため人のため」のようにいわねば外聞は通らないが、こうした書道の中に、「書は人なり」に徹して、わが身を大事にすることの方が、人生意義深いのではないかと思うのである。

6月23日（月）

食欲な要求

六月定例会の招集のための代表者会議で自民党の中村忠和が口火を切り、副知事解任要求の臨時会議決のその後の処理はどうなっているかと私に質問し、緑政山本、公明吉永が追従発言をした。予想はしていたものの、この問題は私から仕掛けて発言すべき場、機会でもないと思っていたのだが、向うから仕掛けてきたので、今は検討中と逃げておいた。来るべき本会議でこういう質問はすべきである。攻めさえすればよいと思っているようだ。あせりが見えるし、タダで成果をあげようとの食欲が見える。近藤はこの事件で潔白とっているし、現在の部下古賀が自殺したからとて、近藤に責を負わせる理由はない。当時の上司は別人である。今日自殺の古賀の兄、嫁、弟、長男の四人が知事室にことわり挨拶に来た。兄という人がいうには、「百条委設置を気にしていました」と。殺したのは県議

会であることはこれで明らかだ。自殺の翌日私はこの日記に、古賀を追いつめた百条委設置問題にふれた文を書いたが、正にその見方が^{ママ}中しているわけだ。古賀は近藤を救うために自殺したと自民党は吹聴したいようだが、正に逆。自民の陣営を救うには古賀は自殺以外になかったのだ。あくまで貪欲な自民党。

6月24日(火)

部下を守る長の責任

出発する直前に、メモ用紙に走り書きで次のように書いた。

事態はまだ進行中です。私はみずから結論を急ぐことはないと思っています。私は生涯を正義と人道に捧げ、その一つとして大学教授を選んで三〇数年、その延長に知事にあえて打って出たわけで、志は終始不変です。しかし政争によってそれを決したくはありません。今回は行きつくところまでいけば、信を県民の皆さんに問うて潔しとすべきでしょう。部下を大事にするのが昔から長たる者の第一の心得です。今の私もそれです。

考えが違うなら県民の皆さんの審判を最後の手段として選ぶしかありません。

今日の定例記者会見では、この心境で、「受身でいく。今の条件下で結論を出して、もしまちがっていたら大変です。私の方から何かきまったことは積極的にいうつもりはありません」と質問に答えた。夕刊にそれが載った。記者達は解釈に若干迷ったようだし、秘書の佐々木君は禅問答みたいでしたよと評した。しかし安達君や原田室長は、知事の態度は前回の記者会見、昨日の代表者会議の発言、今日の記者会見すべて一貫していると見る記者が多い、といった。

6月25日(水)

二つの大きな選択の前に立つ

知事不信任による知事選への足音がだんだんきこえるようになってきた。昨日も秘書に、それへの可能性の選択肢と対応についてよくしらべておくようにと指示しておいた。さし当り六月三十日の六月議会開会が問題で、与野党間、及び野党内部の、冒頭知事説明への思惑のかけひきからもめ出すであろう。自民党は知事にものをいわせないままに、この開会の日をつつ走り、問題を七月十日の代表質問にもち込もうとするようだし、三十日冒頭に近藤副知事解任はどうしたかと、攻め立ててくることも考えられる。ただ、もめつづけるとは考えられない。野党側も選挙で忙しいのである。でも何がおこるかわからないのが今の県議会である。冒頭の緊急質問、不信任という線もなくはないが、これは自己暴走とでもいえるものだ。私は何ごとがおころうと、何の心配もない。最後は勝負するしかないがプロセスは淡々としたものである。ただ勝負は状況を有利に展開しつつ結束が最大になるようにしつつ、収局するようにしなければならない。不信任—失職の途と、不信任—解散の途とが大きな選択になるだろう。不信任を避けるような野党ではあるまいと思う。

それでは筋が通らないからだ。

6月26日（木）

社会党内のごたごた。

昨日八丁君がうちに來ての話に、社会党系の内部がすっきり一本になってないのが心配とのこと。渡辺四郎が県評議長にという筋書きが崩れたのは教組の白石が議長席を固守したため、余波が渡辺を参院に出し、そのための小柳引きおろしということに連動し、これが社会党に、とくに竹村にいろいろな負担を強い、彼のやる気をなくしているということだ。それは全体として党内に不一致をあちこちまきおこしている。又もう一つの要素は、道路公社汚職事件への党声明の中で、林県議を名指しで非難したことだ。これは共産党への配慮もあってのことか、どこからの発想か知らないが、社会党県議の苦心への配慮を抜きにしたものとして、助信県議が離党するといひ出しているほか、多くの県議に党不信をかもし出したという。奥田県政の円満な運営のため種々努力していることへの無配慮への怒りという。党の外では、県評をめぐり、岩崎事務局長への批判も根強いものがあり、岩崎体制はもうもたないだろうともいわれている。他方県内の社会主義協会も中川がもう半年以上病気と称して引こもったままで、高崎が主として取りしきっているが、芳井の影を薄くしたあと行動力が目に見えて落ちている。組合では国労に全く勢いがなくなった。

6月27日（金）

健康の自信ゆらぐ

昨日起床時に感じた左首の異常。その頭痛への連動状況が今日もつづいていて、すすめてよって済生会病院に行った。小川先生は、これまでそういう経験がなかったのが不思議なくらいだし、しばらくは治らないかも知れぬといって軽い薬を処方してくれたに止った。それにしても左頭にピリピリ痛みを覚えるのが何とはなく不気味である。日常的な言動には直接さしさわりはないが、何だか急に自信がなくなったみたいで、自分がより小さく弱く感じられる。血管（動脈）の搏ち方がわかるようで、脳溢血にでもなるのではないかとひそかに心配してみる。近頃又、相手の指先関節が痛む。手をもんで血行促進をはかる動作もしているが、一こうにきき目が無いようだ。老人性リウマチということかも知れない。二日前、満一〇〇歳を迎えたばかりの秋枝原児さんが死亡。今日は近藤副知事が葬儀に行ってくれた。両眼失明という状況がつづいたそうだが、ごく最近まで作句活動はつづけたらしい。今日小川先生の話では亀井前知事はガンで先が長くないのに、娘婿太田誠一の選挙運動のため病院から抜け出して活動しているという。活動できるならいいとするしかないだろう。

6月28日(土)

団地のサークルは代がわりをつづけるだろうか

奈多団地の若奥さん達との対話のつどいに出席した。幼児に本を読んでやる会なのだが、発想や影響効果は問題ないとしても、この運動と将来に向けてどう継続させていくかに最大の問題があると思う。昔の村ならある種の共同体的強制があるが、移転も地域参加も自由とされ、個人が勝手にふるまうことのできる市民社会では「強制」ができない。人々を次世代にかけて引きつけていくオーガナイザー的発想と牽引力が要求される。「子ども劇場」の場合も同じであろう。今日のは地域福祉振興基金からの助成金が出ていて、矢野常務も出席しアドバイスをしてくれてよかったが、その助成も三年で終りといわれる。昔の村だと、他の共同体的利害が強く結びつけていた。今は行政が補助金で縛ることができるか否か。それ以外だと指導者のオルグ力に依存するしかない。鯉田、宮の陣などの例も出されていたが、まだきめ手はないように思われる。うたかたの如く出来ては消え、消えては出来るというのがこの種のサークルの宿命で、社会の動向が存続の鍵をにぎっているといえればそれまでだが、何かいい発想がないものだろうか。今日から左くびに湿疹ができてきて頭痛は続く。

6月29日(日)

無理な遊びをしてしまった休日

書をしたり、ねっころがったり、今日は一日休みで、いい日だった。が、ねっころがって瞑想しても、それがひる寝になるのでない、楽しみは半減してしまう。ねむれないわけだ。瞑想は時に来し方、生涯、行末に及ぶこともあるが、長つづきのストーリーにはならない。ねっころがるなど、平素はないのに、今日は左首の湿疹と頭痛のため、横になるのがよいとの判断からなのだが、一向に効果があろうとは思えない。瞑想がよくないからである。そうかといって、起き立って、せねばならぬ原稿にという意欲が湧くわけでもない。高野切も何枚か書き進んで今日はもう飽きたといえる。条幅や色紙への意欲も湧かない。夕方になって、森祐行氏に連絡してみて、可能ならマージャンしようと思って藤江君を誘ってみた。そしてそれが実現し、七時頃から十二時すぎまで、病身のくせに遊びにからだを使うことになってしまった。また、夕刻になって若干吐気のような状況もでてきたので、夕食は抜きにして遊んだのであった。何とまあ乱暴なことをしたものだ。でも、思うようにして果てるならそれもいいではないかとの自己慰めがある。

6月30日(月)

自民党の横車

県議会の開会日。例によって定刻になってから、ぼつぼつ議員が出てきて、ではどうするかの相談をはじめるとのだから、今日も本会議開会は十六時五分になった。二〇分ほどで

終る内容である。知事の議案説明の中に、先日から問題になっている道路公社汚職について知事弁明が入っていることについて、自民党が異議をとらえたわけ。代表者会議のときは、何もそれについていわぬのはどうしてかと異例の文句をつけた自民党が、こんどは、それをいうのはまかりならんという。A といえば B、B といえば A といっていちゃもんをつけることに意義があると思っているらしい。物事の自然な流れにさかっているわけで、その一つ一つが、彼等にとって失点につながっていることに気がつかないらしい。今日のこのクレームも、正常さを失っているわけで、マイナス点である。緑民は一たんは自民のこの提案に反対したらしいが、議会日程を早く軌道にのせるため、やむなしとしたらしい。私もやむなしと判断して、弁明部分の削除には応諾した。十日からの代表質問、一般質問で一気にかたをつけようと思ったのであろうが、もっともっとその先を読んでほしいのである。岩元和秋氏から知事室に電話あり、田中健蔵氏は非難をうけ初めたとのこと。

七月要記

私には入院の記憶が過去一度しかない。厳密に言えば二度か。満洲の八一五部隊（経理学校）にいた時、急性大腸カタルをわずらい一日入院して治った。次は多分昭和二五年の春だったか。九大第二外科に一週間入院した。あとでわかったのだが、この時の一週間の入院は、盲腸炎手術だった。右下腹が七転八倒の痛さで病院にかけ込んだのであるが、耳たぶから血を取って盲腸炎と診断され、手術。ところが一週間たたぬ中に再び同じ箇所が激痛、医師は頭をかしげた。そこでこの激痛は尿管結石と診断された。二度の腹切りはできないようで、間もなくそのまま退院した。その後程経て、排尿中に、石様のものが陰茎から便器に飛び出して音すらきこえ、それ以後今日まで、この種激痛はない。当時箱崎の坂本久雄さんのうちに間借りしていたが、やや軽いにしても同種の激痛を二、三回経験していたのであった。尿管結石の痛みが何回か重なっていたのである。医師は誤りを知っていて、私に、どうせ盲腸は摘出しておいて無駄ではないから、と弁明してはいた。それ以来、部長職の激務のあと、九大の別府温研に三、四日泊り込んで人間ドック、そして知事になって二度人間ドックというように、病室体験はあるものの、本物の病気で入院は今回実に三十数年ぶりということが出来る。六十余年使いまくって来た生身だから、今回は大修理というほかはあるまい。たまっていた治療ともいえる。

7月1日（火）

帯状疱疹で入院二日目

昨夜から済生会病院に入院。体調悪し。腹と頭。

見舞客、住吉、浜中両県議、山地進日本航空社長 佃衛生部長 林出納長、土屋病院長
ロバート、コウ君、古賀佳代さん、秘書室女性三人（藤本、丸本、マ）

花束や果物が美しく病室に並んだ。

所要来室 森山、佐々木、みゆき、藤江、

広報室 平田、——明日の古賀町における対話のつどいについてのレクのため。

藤本君が新聞のコピーと政経時報のコピーをもってきてくれた。県政の情報がのっている。林出納長が道路公団理事長の人選がほぼ固まったという。入院のついでに、ドックの時に行く検診もということで心電図、レントゲンなど若干おこなった。二時頃の治療ブロックというのは表現の仕様もないほど苦痛を伴った。頭痛はほとんどなおらないまま点滴二回
主治医 花田先生 ブロックは外部からの宮原先生

八時半頃就寝

7月2日(水)

入院三日目

頭のガンガン痛みを一寸数えるようにしてみると、脈搏との関連での来襲は二つめ、三つめ、四つめ、七つめ十二め、というふうに、しかもそれが間隔が長かったり、短かかったり、実に不規則であることがわかった。なぜなんだろう。古賀町役場での対話の集いに四時間ほど外出したが、その影響はとくになかったように思う。考えてみると、昭和二五年の春九大第二外科に入院して以来今日まで三十六年、人間ドックで入院以外、病気のための入院はなかった。この貧弱な身体が、入院なしにこんなに長もちしたのが不思議なほどだ。それにしても前回は尿管結石、今回は帯状疱疹といずれも激痛の病気であるとは不思議だ。

今日の見舞客は、共産党の山岡安広、近藤副知事同秘書。

果物、花などの差入れのみの人は井上陽一太常務、林県議、福銀の葉山、渡辺、の各氏。

みゆき、藤江はひる間早く来て、足りないものをもって来てくれた。今日はアメリカの独立記念日祝賀会で、領事館にはみゆきが出席してくれた。今日明日が痛みの山か。

7月3日(木)

入院第四日目

見舞来訪者 大町多喜子県議、大穂節子、堀江八重子、……タズ草

県庁幹部 富永、浅井、(総務) 池田、樺島(企画)

県評関係 山口、松田、金納、岩崎、岩田、^マ^マ衣笠

大町さんグループの一人がタズ草というのをもってきて、その葉をもんで汁を塗れば疱疹がなおるということで実験してみせてくれた。医師に相談しながら使いましょうとっておいた。この病気に経験のある人はかなりあるらしい。かき善のママも見舞に来てくれ、体験を話して行った。かき善は一ヵ月余りに閉鎖し、その折にこの病気にかかって困ったとのことであった。谷伍平北九市長もこの病気で三ヵ月も入院していたということで、

二人の助役と共に見舞金を托し、くれぐれも大事にということであった。右記のほか、林県議、岩崎県評事務局長らが見舞に来てくれた。選挙事務所に立寄る途中だったのである。外はダブル選挙の騒然たる状況が想像される。選挙カーのいそがしげに過ぎゆく音がよくきこえる。何かいっていることの内容はわからない。候補者の名だけはよくわかる。名だけ叫んですぎるのが得策のように思える。いっている中味はさっぱりわからないのだから。

7月4日（金）

近藤副知事辞任に迫られるか

今日あたり疱疹はピークに来たのではないかということだが、多くの人の話では治るのに二～三週間はかかるという。中村秘書室長も日程を組むのに苦慮しているようだ。六日が選挙の投票日。これにはこの病院から投票所に行くしかないだろう。そして十日からの本会議はこの病院からということになるかも知れない。いずれにせよ、あと十日余り知事の、公式日程は議会対応以外には組めないということのようだ。佐々木参事が来て、今日は夕方から問研で議会のなり行きを種々想定しながら、知事としてどう対応できるか（法的に）、するのがよいか、につき、法学者を二、三人まじえて討議してみるということだ。昨日県評の松田氏の言うには、不信任、解散という線はないだろうと。佐々木君もその意見だが、振り上げた拳をどうおろすかについて、野党自民党、警察側は、近藤副知事の解任で手を打とうとするだろうとの意見が急に擡頭してきていて、近藤氏も数日中にその妥協案に靡くかも知れぬという声がある。しかし、そうなると、私自身の立場はなくなるわけで、その選択に近々せまられるかも知れない。支援者側が納得する線であることが一番大切であることはいうまでもない。

7月5日（土）

十日以降の県議会で知事不信任ということになるまいとの見とおし——その難題

六月十七日臨時県議会の副知事解任決議案に対する知事の態度表明がせまられているが、私は回答を引きのばしている。三十日にそのことにふれようとしたが、議会側が拒否した。これはいずれ十日からの本会議で真正面からぶつからざるをえない最大課題である。私は拒否しようと思っている。拒否すれば、そのまますまないことは明らかである。不信任案を出してくるかどうかの分れ目に来る。議会内も、野党間では必ずしも一致しないこと明らかである。党派によりまちまちだろう。出してくれば可決となるにきまっている。それに対し、当方がどう出るかであるが、十日間対応せずに失職を待つ。それが一つ、待たないで議会を解散する。その方が得だとの野党議員もいる。自民の一期生にそれが多い。出直し議会で構成は若干かわっても、知事不信任を可決するかも知れない。知事はそれで失職する。知事選になる。その結果をどう見るかが、又一个の選択肢になる。こういう

ふうにもいろいろのケースがあるが、不信任案をはじめに対抗的に出してくることはないのではないかとこの見方も有力である。つまり県議選はいまやりたくないというのだ。資金問題もあろう。カケをしたくもなかろう。それに、これにつづくであろう知事選に、今は、候補をもたないのである。ダーティイメージを作りつづける戦略が最高ということだ。

7月6日(日)

副知事の辞意をめぐって

朝十一時頃近藤氏が来て、「一身上の都合により」辞任したいと辞表をもって来た。彼は六月十七日の解任決議のあと始末はこれしかないし、ダブル選挙も今日済むので、この時期を除けばあと適時がないという。もし、三〇日の提案理由説明文の冒頭部分を削除していなければ、それが生きていて、解任はノーといつてしまっているから、新たな問題になっていたであろう。あの部分がないので、今はイエースといっても、別におかしくはなくなっている。しかし、流れからいうと、OKといえない。私はつとめて慰留するほかはない。支持団体の誰にきいても、断乎近藤を守るべきだというし、彼の三年余の協力からしても、部下を大事にするという原則からみてもそれが正しいわけだ。それに、奥村組から八〇〇万円収賄したという濡れ衣でしかない。古賀が首を吊ったのも近藤のためというよりは、むしろ逆に、一〇〇条委ができると自民系の者まで灰色に巻きこんでしまうので、それを苦にして首を吊ったに違いない。近藤氏は古賀の死についても、責を感じるといつているが、外聞はともあれ、それは余分のことであろう。ともかく、彼の辞任は野党と県警の振り上げた拳のおろし場を作る以外に何の意味ももたない。政治的妥協という配慮は別として。

7月7日(月)

副知事の辞意をめぐって(二)

ダブル選挙の開票で自民党が大勝した。終日そのニュースが病室に流れていた。片や朝刊には各紙近藤氏の辞任のことがかなり大きく報道され、知事の対応について、コメントが求められた。すぐには答えられない潔白を信じているとの内容で広報室長に対応してもらった。野党はこのコメントに強く刺戟されるだろう。だのに、私は十日までに解答を出すつもりはないし、十日からの本会議に出席できるかどうか検討してもできそうにないことがわかってきたので、問題は重大化しそうだ。午前中私の要請もあって林県議が来室してくれ話してみたが、近藤辞任は議会内の大方の妥協点でもあるようだ。野党も警察も振り上げた拳をおろす条件とみているらしい。私は、問題はそれですまないで次に進むだろうといったが、林氏は、進まないとはいえないといった。それならそれはOKというわけにはいかないと思う。いずれにしろ、社党県議団として、この点どう考えるのか、林氏に問いかけておいた。OKできないのではないかとこの私の気持を前提に考えてくれという

ことなのである。妥協すべき点と、それ以上許さぬという点をはっきり区別しなければならない。私は部下を大事にせねばならぬということもいっておいた。しっぽ切りが、それで終わら^るような情勢でもないのだ。みんなの意見をすみやかにまとめた^いのが今の心情である。

7月8日（火）

一面、他面、全体 すべて正しく、正しくない

十日の本会議開会をひかえて近藤解任問題をめぐって議会内外の動きがあわただしい。これをくわしく書きたいところだが、その気力が及ばない。右手も何だかあやしくペンは確かな運びとならない。「鈴虫が大きくなったろうな」、「うんもう一センチにはなっている」「二～三ミリだったのに」「びっくりするだろう」、見る由もない虫についての対話。入院してから九日になる。最初の見舞客の花束はもう捨てた。次々にもらって枕許に花瓶が六箇並んでいる。今日秋枝さんがドライフラワーをもって来て下さった。切花の命が短いので工夫してみたとのこと。テレビで三角柱とかいう月下美人と同じような花が福岡市植物園で昨夜咲いたとか。珍しいという。数時間の開花。胡蝶ランをもって来てくれたのが済生会の井上常務。この命は相当なもの。瞬間、今、今日、今年、……平均三年という衆議院議員、六年の参議。心血を注ぎ、ウソでもいい。好言をはき、財産を投げうって死闘する候補。選挙に向けて知事のイメージダウンに狂気のごとくうごめく県議、同調する警察。太陽からみるとすべて地球上のどうでもよい出来ごと。古墳の壁画もセザンヌの美女もそうかわりはない。万葉の秀歌は今のわれわれの心と少しも違わない。痛む胸部を抱えながらこんなことを考えた。

7月9日（水）

副知事解任知事決意表明時期をめぐって

明日の本会議開会を前に、今日一日近藤解任をめぐる攻防が議会内外でくりひろげられ、この病室も一日中それで話が行き来した。早朝大塚副知事が議会对応のためということで来室した時は、明日十時頃までには私の態度を明らかにする腹で今日の代表者会議に臨むよう頼んでおいた。一時頃になって、運動側の竹村、八丁、白石（健）山川、岩崎の五人が来て、県政推進会議をした結論として、近藤慰留運動をはじめるから解任決定はそのままにして決めないでほしいという。病院側の証明で二十一日までは知事の議会出席は無理ということが代表者会議でも認められた。ところが四時半になって岡松、助信、林の三社党県議が来室し、前記五人を含む人達と論議の上、近藤慰留運動はするとしても、慰留は事実上困難であるから、知事の決意を永びかさないようにすることで一致したと申入れて来た。そして十七日頃には解任決意表明をしてはどうかとの線が出て三人は引上げた。六時半頃室長が来ての報告では、明十日十一時からの代表質問開始以前に決意表明をせまっ

てくるだろうとのことであった。それぞれが尤もであり、寝て考えることにした。

【欄外記入】

藤江、みゆき 泊らず

7月10日(木)

おだやかな体調ですぎた

七月が流れるようにすぎていく。この大雨で梅雨明けになるだろう。東京の子たちから電話があったという。私の病気でびっくりしたらしい。直美は八月のボンに帰省するらしいが、友達を又連れてくるという。まだまるで子供みたいだ。ライヤは十八日かに祖国に赤ん坊をつれて帰るらしい。四ヵ月で大きくなっており、先方の親たちはよろこぶだろう。啓二がついていけばいいのに旅費の工面がつかないようだ。ライヤは生計を立てるのに主役を演じており多忙のようだ。少しでも忙しい方がよいだろうが、子育てに一並み以上の苦勞がいるだろう。大学なら今日で授業が終り二ヵ月の休みに入る。県では今日から本会議。知事抜きで標的のない質問になっているが、退院してきたら、やるぞといっているらしい。二十二日以降が荒れることになろう。参院選のしこりで、県会内では自民、公明のなれ合いにきしみがでてしているらしい。本来の姿に戻るならいいが、党利党略でどうなることやら。下旬の知事攻撃質問への答弁いかんでは、自民は不信任案もと新聞は書いているが、当方は受けて立つし、自公の関係いかんでは不成立になりうる。いやらしい質問攻めであろうが、このたびは気が楽だ。大塚副知事が、他はうまくさばいてくれているようだ。職員も一般的には、動揺していないときく。

7月11日(金)

警察への怒り

代表質問の二日目。社会党の山根氏が予定していた県警本部長への、道路公社汚職事情聴取に関する質問がとりやめになったとか。社会党も警察がこわいのか。

正面は正義の味方というが、

「革新つぶし」といわれる面も、たしかにもっている。

他県では沙汰なく流れることが、本県ではとりわけ波が立つ。

この道はいつか来た道

Ⓢのヴェールの下で、何をしてもいいらしい。

正義の味方の面をつけて、おそろしい

権力、暴力、金力、物欲がおどり狂う

正義も、良心も、弱者も、貧乏人も。

それに、ふみにじられる。警察はそれに全技巧とあらゆる力を貸す。

抵抗する者は少く、弱く、声も小さく、

思ってもひるむ。さわらぬがいい。ひょっとしたら自分も
巻き込まれたらあほらしい。
これでいいのか。

7月12日（土）

带状疱疹への多くの人の理解

タズ草を携えて、先日大町県議と大穂、堀江の二婦人が見舞いに来られ、大町、大穂の二人が二度、さらに堀江さんが今日二度目である。堀江さんは煎じ薬も水筒に入れてもってこられ、タズ草は若葉ではいけないから、先日の二度目の大町さん達のはすててくださいということである。医師の魚住先生は、ここの副院長にレントゲン照射でいい所があるとか。そのほかに、済生会病院ではだめだから転医したらとか、あれこれの忠言が耳に入ってくる。タズ草とか煎じ薬ならさからう必要もないが、レントゲンや転医の話には応ずるわけにはいかないのが自然であろう。でも、いろんな人が、身の経験からいろいろ意見を寄せてくれるのは有難いことだ。漢法^{マツ}とか薬草の話には人類の長い歴史的経験からの指示があつて信ずるに値するものも多いに違いない。香港の某所で調整させるから、必要ならと行ってきてくれた人もあるが、こんなには即答しかねた。総じて、多くの人が自身、又は身寄りの人のこの病気体験をもっていて理解と助言をしてくれるので、大へん嬉しく思っている。県議会中であるが、議員の中にそういう人がいて、それがプラスに作用しているむきもあるという。おおむね、大へん痛むということと、期間は三週間から一ヵ月かかるということ、根治しないとあとに生涯残るということ、早期治療なら治るということと一致している。

7月13日（日）

夢の世界

昨日も今日も深夜に胸腹部、頭部の痛みがひどく目がさめた。昨日は座薬注入をお願いしたが、今日は辛抱した。夢と現が何回も反転しあいながら明けた。そして痛みをおして起き出て部屋の中を片付け、ヒゲそりもし、痛みはおさえつけたようだ。私は夢の世界もあっていいと思う。こわい夢もあるが、今日の夢などほのぼのとしている。現実のごとき非現実である。これあつてこそ、痛みも忘れる。痛みどころか、自分の年齢も仕事も家庭も忘れる。起き出でて、自分が病人であったこと、知事であったことに気づく。それと夢とくらべると、その中での自分の方がはるかに好ましい。天国もかくあるやにさえ思う。自殺する人は、そういうことを望むし、そこへ到着するのも知れぬとさえ思ってみたくなる。痛いとき、今の夢がよかった、と思うと同時に、一そう死んで元の夢の世界に戻れないだろうかとさえ思ったりした。辛抱せずに座薬注入をお願いすればいいといってくれる。が、座薬に救いを求めるよりは夢の世界に帰りたいと思う方が勝つというのもウソではな

い。夢はそれほどよいものだ。現実の意識あるときに、そうした夢が計画的にみられるようにできるなら、どんなにいいものだろう。現実にあくせくする現し身は六十五歳のこの辺でいいとさえ思う。

7月14日(月)

みんなが熱心、=感謝

コウ君がもうこれで三度目の病室への見舞で、キウイやモンキーバナナは通じにいいといってもってきてくれた。「私にできることがあれば、いって下さい。何でも」と彼はいう。前は私の右肩をもみほぐしてくれた。これだけ真心が通っている人は少い。女性会議の徳山、青木、高木、福田の四人も、元秘書室勤務の加賀、野田の二人の女性のカミナリ坊やのヌイグルミも、心がこもっていた。みんな心配してくれていることが、よくわかる。政治的な面でも八丁君は何回もこの病室を訪ねてはベストと思う方針を口走っていく。議会をめぐる難局を何としても切り抜けねばならないとみんながんばってくれている。田中健蔵氏の名はもう消えたという人が少くない。自民公明の間が総選挙後ギクシャクするようになった(参院福岡地方区で公明桑名落選の結果)のも大きな要素だ。だから八丁君は基本的にもう遠慮はいらんというが、出納長や社党議員筋はそれでも県議会の平穏な推移をひたすら祈るとの態度を崩していない。その辺に若干の意見の違いがあつて結論に差が生ずる。九月からは勝負に出てよいという声は強い。みんなの思いがそうであれば、何の遠慮もない。女性会議の人達のはげましも心強かった。今日で十五日の入院、三週目にはいる。最後の週になればと願う。体調は決して悪いとは思えない。予定の二十二日を待っている。

7月15日(火)

県の歴史へのガイドブック

することもない時間に、先日大石君がもってきてくれた県観光連盟のガイドブック「歴史の宝庫、福岡県の旅」を読んでいる。ノロノロと。著者は宮原忠臣氏(ペンネーム岬茫洋)とある。二〇〇ページ足らずのハンディなもの。こまめによくしらべて書かれ、いわば県の先史を現地ごとに案内してくれている。だが、誤植がいくらかあるし、地図(挿入)がよくない。これでは価値がさがるだろう。再版のときは改めた方がよいと思う。九州とくに福岡県域が、日本史上、とくに重要な位置をしめていたことは万人の認めるところであろうが、このガイドブックがそれをかなりていねいにのべてくれている。平家が九州に落ちゆく理由や、尊氏が九州から攻上る理由も、わかる。大宰府政庁や元寇なども認識を改めてくれる材料である。又、昔は大陸との交流往来が、われわれが想像するよりはるかにひんぱんに、冒険的に行われていたことがわかってくる。「文明のクロスロード」九州・福岡というのが実感としてつかめるように思える。ガイドブックとしては、やや歴史に偏

った感があるが、成功していると思う。高校や中学校に備えてくれるとよい。子供の時から県史への目ざめがあるようにしたいものだ。そのため、写真は立派なので、地図は何か改めねばならぬであろう。

7月16日（水）

高橋正雄先生の来室

午後一番客は東京の高橋正雄先生。私より一九歳年長というから八五歳である。今でも仙台の東北学院に週一回の講義に行っておられるとか。元気そのもので、中食にとってあげたサンドウィッチをペロリ。足許は進藤市長（八三歳）より確かである。でも腰にコレット、それに耳が遠くなって近くで大きな声での対話が必要とか。点滴中の私の枕許で四〇分ばかり話込まれた。荒畑寒村さんの生誕一〇〇年。それに関連して九〇歳をこえた有沢広己氏の話（もう車椅子でないと動けない）。そして昨年の向坂逸郎先生の一周忌の話などなど。話題はさすが、一時代前のもので、近頃の若者には何のことかわからないし、どうでもいいことであろう。別世界から珍客が来たとおもわせる状況であったろう。当方は、野党が不信案を出そうとやっているとか否とか現時点でのなまぐさい問題をかかえているのに、全くもって闖入者といえるものであったし、久しぶりに昔の楽しかった時代に引きもどされた思いであった。彼いわく、向坂氏の一周忌のとき、呼ばれ乞われて一言発言のチャンスがあったので、両氏が決して犬猿の仲ではなかったのだといい、満場の人を安堵させたという。又その場に田中定氏が来ていたとか。そして「田中さんはわけのわからんあいさつをしたよ。モーロクしているネ」と高橋先生の弁。

7月17日（木）

職をかけた引責問題に軽々にふれるわけにはいかないのではないか

近藤副知事解任要求決議案をにらみながら、彼の辞職願をどう処理するかにつき今日は最終決断をするという日程を立てていたもので、病室は一日中そのことで出入者ひっきりなし。彼の辞意の固いことはわかっていつつも、最終的慰留を行った。やはり固く、大方の予想に沿って辞表を受取ることにした。彼は記者会見で、一連の事件の流れ、とくに事情聴取をうけて県民に不信感を与えたこと。死者まで出したことの「責任をとって」この際辞意を翻えさないことにしていた。明十八日に辞令交付を行い、記者発表する段取りだが、その際「知事コメント」を渡すことにしたその文案の中に、「私自身の責任については具体的には（今後）検討する・・・」とのくだりがあったので、私はこの部分を取除くよう求めた。佐々木氏はこのことで各方面連絡に奔走してくれたが、その部分の挿入を求めたのは助信、林両県議、大塚副知事、林出納長らであった。佐々木、森山もその意向のようであった。私は、この際自己責任ということ記者コメントでふれる必要のないことを強く主張、その線でおさめてもらった。ここまできたら、引くわけにはいかないし、引いて

も効果がありそうないからだ。

7月18日(金)

進藤市長の健康宣言の意味

昨日の進藤市長の記者会見における健康宣言は、私には引退表明予想とは逆と思われ意表をついたものであったのに、ひとのいうには、裏があり、知事選を予想して、市長選をそれに重ねていくための政治発表だとのこと。八十二歳の高齢市長が大へんな芝居を演ずるものだ。させる者があるとすると、骨まで利用する餓鬼ともいうべきか。自民党は今、県議会の解散を賭してでも知事を追い落とす(不信任—解散の線)かどうかの選択にせまられている。今日その一段階としての近藤副知事の辞任にまでこぎつけたところだが、七月末まで知事は県議会に顔を出さないのはいいこととして、盆明けに臨時県議会の招集、知事責任追及をした場合、解散覚悟でなくてはならないが、そこまでやるには、公明党を抱き込まねばならぬ大きな関門があるが、これをこえたら県議選をしていい、その次は知事選だ。この時進藤市長が辞任を申出で福岡市長選を同時にできるようにする。その方が票を自民にもってくるには得策である。——こういう筋書きで、今は健康と市長にいわせたとの話。誰がみてもよぼよぼで、健康とはいえないのに政治がそういわせているのだとの観測が行われているのである。

7月19日(土)

警察の悪業が立証される日を待とう。本部長 酒井、木村の罰当り

昨夕の近藤氏に対する職員の見送りは二千五〇〇人近い人出で本庁ロビーが埋まり、「近藤がんばれ」の横幕をかかげる青年、花束を手渡す女子職員らで盛大そのもの。大塚副知事も、私の無念の気持を、みんなを代表してはなむけの言葉の中に挿入してくれた。野党議員は誰も送っていなかったという。他方、この道路公社問題で二〇〇人余を動員し捜査本部を作っていた県警は、近藤、林両者から立件に至る材料をえられぬまま、「灰色結快」ということで、今後の動員態勢を解くことになったという。又、県警木村本部長と捜査担当の第二課長は八月一日づけで転任するとうわさである。馬鹿をみたのは近藤だし、腹立たしいのは私である。県警はひと迷惑であっても何をしてもいいとの風潮がこのように一般化しているとすればおそろしい国家というしかないし、三年前の「お布施事件」を指揮した酒井といい、今回の木村といい、そのつらにくい姿は忘れえぬ存在となってしまったわけだ。出世を願ってこそ、このような恥を恥とせぬ警察の行動があるとすれば、これこそ糾弾に値するだろう。小林の証言を一方的な材料として近藤、林の人権じゅうりんに等しい事情聴取を行い、「奥田県政黒汚れ」の印象を県民に与えた悪業は、昨夕の近藤氏見送りの県職員、そして又今後展開されるであろう選挙を通じて県民により裁かれるに違いない。それが立証される日を私は待っていよう。

7月20日（日）

警察は汚職を洗うようなかっこうをして「奥田つぶし」をやってきた。それができないとなると汚職を洗うことも止めてしまう。

県民の会側は警察の政治性についてあまり表に出さないで今回の問題に取り組もうとしている。それでは事の本元にせまりえないのではないだろうか。土木汚職の全容を明らかにせよとのせまり方はまちがいでないが、不可能ではないだろうか。捜査権は警察がにぎっており、それが政治的だからである。土木汚職は警察の活動の舞台ではあっても活動の目的ではない。目的は「奥田候補つぶし」である。林県議や近藤副知事追及の様をきいていても、「奥田つぶし」だけをねらっていて、聴取の仕方も、対象も、その線上にないものは、警察も意識的に除外している。とくに、江口県議その他の名が出ていたが、それは「奥田つぶし」につながらないから、江口追及がないことによって明らかである。そして、他にも聴取は行ったとしても、対象者、彼らのストーリーはマスコミにリークされることはない。「奥田つぶし」のストーリーに乗るものは、積極的に人権じゅうりんをあえてしても、リークする。印象上県民にどう影響するかすら計算済みである。「お布施事件」における「知事夫妻でお寺参り」という記事が毎日新聞、西日本新聞に出され、（朝日を広瀬記者が拙宅に裏をとりに来て記事にならなかった）、毎日総局がわれわれの抗議に対し、警察発表と弁解しつつ、両社とも警察発表としての記事にせず、県民に真実かのような印象を与えたことを思い出す。

7月21日（月）

禅問答の好例

ひる間きげんよく読書に時間をさくことができ、芳賀幸四郎氏の茶掛「一行物」を大きく読み進めることができた。昨日からの引つづく成果である。そうした中で、メモ紙に書き残したものをピックアップすると、

赤洒々　　せきしゃしゃ

放下着　　ほうげじゃく

下敷清風　あさいのせいふう

青山元不動　白雲自去来

心随萬境転　こころまんぎょうにしたがいてんず。

雲収洞中明　くもおさまってどうちゅうあきらかなり。

がある。解説を読みながら、今の自分の心境にぴったりくるものを拾ってみた。もちろん禅と茶で、あれこれ立派なもの、禅問答としてうなずきうるものばかりであるが、これらがとくによかった。県議会で、「知事の心境は？」と問われそうだが、これらの中から選んではいかかと思う。前に書いてあげた条幅ものに「落花随流水」というのがあったが、これまた右のに相通じた禅問答の一例だと思っている。

7月22日(火)

騒々しい俗世間

「一行物」を読了し、NHK取材班の「大黄河」巻二をよみはじめた。この二、三日は読書気分も出たわけだ。「一行物」では禅問答や茶掛について若干の興味をわかされた。精神の統一、没入、みきわめの心がないと、なかなか禅の境地には入れない。この部屋では落葉、虫のすだき、雨などの、静寂の中の「音」などきこえるはずもないし、空、雲、山、川、花、虫、鳥、月などあったものではない。朝から電気動力のうなり声、工事騒音、車の音、そして病院内放送、夜もしじまを破るピーポー、さらには暴走族らしい車の走る爆発音、ひるまは日によって右翼の車の流すスピーカーを聞かされる。これらをすべて禅の心でつかみ取るのが至当なのかも知れないが、何と人間は音を出すことが好きなんだろう。今日はプロ野球のオールスター第三戦が広島球場で行われており、テレビを入れていたが、途中、五回のと、光、音のアトラクションが入った。いやが上にもごたごたが好きなこの世の中ではある。県議会も、県民のためならスムーズに運んでもいいのに、天皇在位六〇年式を県主催か共催かなどでごたごたもめているようだ。禅の心とこれらをどう統一すればいいのだろう。

7月23日(水)

地域間交流のすすめ

明日十一時に町村会館で大島・小石原の両村が姉妹協定の調印式をするという。知事祝辞とともに祝賀色紙を準備することになった。筆墨などは藤本女史が準備して来室。ひる食後の久しぶりの揮毫となった。二倍色紙に対になるようにと思い、昨日まで読んでいた「一行物」茶掛の事例から次のように選んだ。もちろん禅問答である。

一雨潤千山

一滴如大海

どちらをどちらの村にということはいえない。大島が山を選び小石原が海を選ぶもよし、その逆でもよい。ともあれ、両村にそれぞれ持帰ってもらう為額入りとした。ここ数ヵ月私は地域提携について推賞する考えを懐いていたので、両村のそれは、早速の実践例ということになる。こうした協定、交流が都市と農村、都市と都市、又それらの中にある団体と団体との間で今後進められることを大いに期待しているし、両村のそれが先鞭役を果してくれるならと願っている。その旨、明日の知事あいさつの中にも入れて述べるようにしておいた。

7月24日(木)

あわただしい病室

大島、小石原両村長がお礼といって来室。二倍大色紙についてきくと、やはり山は山、海

は海の村が受取ったということであった。ともかくよろこんでくれた。ところで今日は、先日岡田先生がさし入れてくれたNHK取材班の手記、「大黄河」Ⅱを読み進めたが、中国の悠久さ、広大さ、住民の偉大さにつくづく感慨をおぼえた。日本、福岡県、福岡天神、この病室と思いきらべてみて、何とせせこましいことだろうとさえ思える。県議会で、高岡氏が、大塚副知事に、なんで職務代行をはじめからおこななかったのとかいさがっているようだが、こんなせせこましいことは黄河とくらべ、ものの数ではないように思えてならない。大きく胸をはって、高い所、遠い所をみるように心がけたいものだ。ともあれ今日は予定期日どおり「六月県議会」は終わった由。まずはいいことであった。福岡貯金局の全通婦人部の四人が千羽鶴を作って見舞に来てくれたが、私は今回の警察、汚職捜査というよりは汚職を種にした知事の足ひっぱりで事を糊塗した点、三年前のお布施事件と同じことだと説明したのだが、はじめてわかってくれた。そういう点はもっと早く県民に知らせてほしいと感想をもらして退出してくれた。

7月25日（金）

一時外泊してみての雑感

今日の病院も千客万来といえる状況ながら、痛みが消えたので爽快に接することができた。久しぶりの帰宅外泊を試みた。ガウン姿で外に気を払った。帰ってみても一カ月のブランクは、山積みされた郵便物以外はほとんど変化はなかった。暑中見舞もあれこれ来ているし郵便物への対応がこれからの暫時の仕事になりそうだ。それにしても原稿書きが、公社汚職問題と入院で全く頓挫しているのが気がかりである。病気のあと仕末には八月上旬かかるだろうし、下旬には議会对応にふりまわされそうだ。原稿については想を改めるしかないように思える。キンカンの花が咲いている。甘夏柑はピンポン玉ぐらいになり、今年も少くはないようだ。鬼ゆりの花が玄関に乱雑に花瓶に投入されている。これも毎年のわが家の作物である。鈴虫は注文に応じて三籠分さし上げられるように用意してある。目にみえて元気に動きまわっている。今年は六箱も分けたことになる。いよいよ八月がくる。平素の生活に早く戻りたい。

7月26日（土）

知事の政治責任について

中村室長、佐々木参事が来室し、退院に伴う各方面への謝意。その後の構えについて話して行った。佐々木氏が、野党の出方について、知事のとるべき態度について、メモにまとめていたが、問題は知事の「政治的道義的責任」の追及に対し、予想される臨時議会でどう答弁するかに絞られるといってもよかった。私との間であれこれ論議をしたが、行政官の考えることと、政治的にそれがどうかということに尽きるような気がする。自民党県議は六月議会の知事欠席のためできなかったこの「追及」をこんどこそ「徹底的」にやると

いっていると彼はいう。「徹底的」とは何かと私は問うてみた。彼は、自民党の言葉だと逃げたが、話しているうちに、知事の減俸などを意味し、それが終着点のような考えの如くである。彼はあくまで仮定的に、自民党の立場からすれば、といういい方であったし、それが県民感情に合うとの意見のようでもあった。しかし私は、自民党と県民の立場から弁ずる彼の考え方にはにわかに賛成しかねるものがあつた。この点県民の会あたりと今後詰めよう。

7月27日(日)

俳句を読む

「万燈」八月号をみていて、夜病室で筆あそびの中で半紙に次の九句を書いてみた。

除夜の鐘き、煩惱の髪を剃る
春眠のあとのこの世の短かり
夕桜駐車頻繁入れ替り
対岸の人々親し野に遊ぶ
そら耳と言われても遠ほととぎす
雲水もいたゝき涼し奥の院
健康な余生生まれ夏遍路
右だけの夏手袋に遍路杖
汗ばみて言い足りしとも足りぬとも

これらは私にとってわかり易いものだけを手みじかに取り出したにすぎない。近頃の句はどれも一読して解し難いが多い。やたらと難解な文字や句調がでてくる。時に子供の句がでてくるが、子供のものはわかり易い。その方がいいのではないだろうか。どうも傾向には追従できない。

7月28日(月)

ひとの病気について知らん顔をしていたのではないだろうか

約一カ月の入院だったが過ぎてみれば、あっという間に、というくらいである。带状疱疹という言葉が、私の入退院のニュースで県下ひろく人々の耳に入り、ポピュラーになってしまった。こんないい治療法があるとの申入れが何件かあつたし、見舞客の中には私も私もとその経験を語る人が少くなかった。姫路の妹和代もなつたということだ。県議の中にも、又教養部の旧い仲間である岡田先生、西原先生もつい先ほどこの病気にかかったという。痛いでしょうと皆いう。それもそうだし、個人差はあろうが同情しあうことのできる人が少ないのには驚いた。が、反省すべきは見舞には来てもらいながら、こちらが知らぬ顔をしていたケースがずい分多いということである。「ひとのふり見てわがふり……」というのではなく、ひとのふりすらみてなかつたということ。私自身が平素健康だったとい

うこともあるかも知れないが、病気という誰でもかかり、それに苦しむことにあまり関心が向いてなかったという反省が、ひしひしと湧いてくる。でも、それが健康の証拠なんかも知れない。一面有難いことだが、それを当り前と思わずに、ひとの病気についても、もっと気を配るべきなのだ。

7月29日（火）

何もしなくてよい一日

田中外科の別荘に行く予定が葬式のため、一日のびた。村上水軍のことを書いた本の著者県議の村谷さんの母堂の葬式があすあるとの連絡があって、みゆきに私の代理でいってくれということになり、では一日延期しようというわけ。それで何もしない一日となった。色紙の予約消化と先日大野城に引越した隣の伊藤さんから頼まれていた門札を指揮した。それで、宿題は何もなくなった。さらに姫路の妹が送ってくれたそうめんを前崎さん、江口竹亭さん、光円寺さんの三箇所にする準備もしたので、宿題はこれでゼロ。何もすることのない一日というものはいいものだ。書斎が片付けばと思う。伊藤さんが隣の土地家屋を買わないかというので、40坪ほどの土地を広くすることができればと思ってはみたが、そんなことにカネを注ぐよりも、片付ければ我家も結構広いのに、と考え、買うのはあきらめた。広ければ広だけ、その苦労も多くなる。今のスペースで満足することがいいのだと自からを慰めてみる。物は持つよりは手放すことをも喜びとすべきではないだろうかと思ってみるのである。

7月30日（水）

貧しさをこえて

今日は田中外科の二丈浜の別荘に来た。二泊の予定である。何とはなしに時間をすごすが目的だが磯釣りをしている人を見ても、何とはなしに時間をすごしているのではなからうかと思っで見ている。別荘の庭に雑草が生えていたので、一坪ほど草むしりをしたが、それは三年以上もの久しぶりであった。立っているひまがあるなら草抜きをする。否、わが家への出入の一寸のついで草抜きをする。これは打越の祖父や伯父の生き方でもあったのが思い出され、側にいた藤本君にその話をきかせた。草抜きができる境遇とほいものだ。車社会で交通事故が頻発している今の瞬間を思うと、何故ひとは車社会に好んで足をふみ入れるのか、不思議ですらある。貧しいとは、物質的な貧しさをいうが、それと同時に精神的な貧しさをもういとは先日入院中に読んだ禅の本に書いてあったことだが、それが思い出される。この別荘に来ていると、そして釣りを楽しむ人を見ていると、その瞬間だけを切ったことではあるが、貧しくはないと思うのである。ここから帰ったら又貧しい浮世の中にとびこまねばならぬ。時間と立場がそうありたくないわけだ。

7月31日(木)

よろこびも悲しみも

「仙厓百話」の包み表紙と第五十九話に「これくうてお茶まいれ」というのがある。包み表紙は○の賛になっている。禅にいう「喫茶去」とでもいえるのであろう。五十九話で著者の石村善右さんはこう書いている。「凡そわれわれのこの現実世界では、個々のものが互に対立し限定しあって存在している。自分は自分、他人は他人。或いは社会的に、階級意識や国家間の問題もそれである。又物理的に宇宙のあらゆる現象もそうであろう。しかし対立しながらも互に存在しているという事実の根底には、見方をかえれば互いに持ちつもたれつ存在しているという自他を越えた或いは自他を包含した大きな存在の世界が浮びあがってこないだろうか……自他の対立を越えた「円やかな一の世界……一円相の世界……」と。○をそのように解したというのはここで特異な解釈だろう。マンジュウであり円満であり世界であり対立と統一のすべてをさしているわけだ。ただ、このように悟ってみても、現実には現実で、対立と統一の中にどう自己を対処していくかの判断にはさまざまなものがあり、迷いも誤りも、よろこびも悲しみも渦巻くのである。

八月要記

八月は帯状疱疹一ヵ月入院による体力気力減退からの回復過程とならなければならない。一ヵ月入院していて病室ばかりにいと、筋肉を使うことが極度に少なくなるので体力が衰え、比例して気力も衰える。それに治療行為によって体力の消耗もかなりあっただろう。退院後も左首すじに若干ひりひりするものを感じずるが、これは誰しもやむをえないものようだ。ひとの話によると、心配しなくていい。ひとによってはこの後遺症がかなり長びく場合もあるという。ところで私のこの入院によって、済生会福岡病院には帯状疱疹の治療希望がふえたという。病院としては、知事入院の記事によってお客さんがふえたわけだ。福岡病院の方がいいですよという人もいたが、そんな宣伝力よりも知事入院の記事の方が有力であるらしい。それともう一つ、私と同じ病気経験者が私の周辺に実に多いということに気がついた。逆にいえば、他人の病気に対しいかに自分が無頓着だったかということだ。恐ろしいほど多くの近い人から事後的にその話をきく。きくたびに、私は気がつきませんでしたすみませんということにしている。何だひとりよがりみたいだったじゃないかということなのである。踏まれてみないとその痛さはわからないということだろう。隙の多いのが人間の常である。その意味で今回の入院もいい経験になったといえよう。ともかく早く体力挽回することが先決だ。

8月1日(金)

別荘をもつこと

田中外科の別荘に分れをつける。別荘というものを考えてみるのだが、こんなのがあれば

よいことはいうまでもないけれど、コストがかかるだろうことも確かだ。それにある意味では隠れ家の役割も果してほしいとなると、ひとにわからない方がいい。そのためには固定的なものもつべきでないかも知れない。あちこちに別荘を知っていて、それを借りまわるというのも一法である。コスト問題もその方が有利といえる。他の方法としては、共同所有のいくつかの例に参加するのもよい。しかしこれだと行き先がしぼられてしまって隠れ家としては向かないであろう。もう一つの条件は比較的に近いのいいということだ。やはり本拠地から遠いと、不便である。安易な気持で行けるし、何かの時に連絡が早くとれる方がいい。そうした意味で今回の田中別荘はいい条件を備えていた。帰りに病院にいさつに行くと、又おいで下さいとの返事だった。南向きの海岸べりで借景も絶好である。過疎地には離農する人もあり、空き家があちこちにあるといわれる。古い家で、ひっそり居れるのも悪くないだろう。一考を要する問題である。

8月2日（土）

「地域懇」の活性化を願う試み

白石、八丁、大塚ら県政プロジェクトのメンバー六人について、夜には木梨、古味、徳本、佐久間、門田見ら地域懇の幹事ら六人が来訪した。地域懇ニュースもあと四号で一〇〇号に達するのだが、八年余にわたって事務局を支えてきた木梨氏が、事務局づかれ（労力と会計の不如意）して、やめたいというのが、今日の来訪の趣意である。赤字をつづけても意味がない。関心を寄せてくれる人が限られている上、その数も減ってくる。その上、関心をもつ特定の人がひとりよがりの発言をして周囲の者からひんしゆくをかうこともでてきていて、運営がスムーズでないという。その苦労は誠によくわかるが、やはり運営のまずさ、発想の硬直さに帰因する所が大きいのではないかというのが、大方の意見になった。月一回は無理とか、デパート方式より専門店方式が今は有利だとか、とり上げるテーマは工夫すれば無数に見つかるのに工夫が足りないとか、いろいろ指摘されるポイントがでた。そこで今日の結論は一〇〇回まで何とか今のままでやってみたらどうかということ。それまでのうち一回は、はじめからの関わりの強い私が、知事という肩書きをひっさげて一度話題提供者となって例会に出てみようということになった。「起死回生」なるかとみんなで笑って別れた。

8月3日（日）

気力の充実を期す

真夏のかんかん照りがここ数日つづいている。外出しない身なので、体力が衰えていることが自覚的にわかる。歩いて歩いてというべきところが逆なのである。左頸の疱疹跡がまだひりひりしている。完全治癒とまではいい難い。錠剤を多種類処方してもらっているせいか、近頃便通は快調である。どことなく力がない。何日も毛染めしていないので、頭髪

の白さが目立ち、一そう年寄りくさくなった。染めない方がいいのでは、と妻がいう。一そのこと、白くしてしまおうかと思っている。今日の新聞では、昨日の自民党県連幹事会で次期知事選候補に九大学長田中健蔵氏を推すことを決定し、近々本人に接触かつ公明、民社両党に共闘を申入れる旨の報道があった。田中氏は髪も黒々しており若々しいから有望だろう。「個人的理由」という否定的要因もふっとんでしまいそうだ。もちろん彼の身边がOKするかどうかは疑問。夜おそくなって森数君から電話があり、はげましてくれたが、高教組の協会系の分子が、一〇〇条委設置十万人署名に取り組むべく張り切っているということだ。体力が十分でないながらも、気だけでもしっかりしないと、森数ら支持者に申し訳なく思うのである。

8月4日（月）

夏は暑ければ暑いように休みをとりたい

一ヵ月ぶりの登庁である。でもすべてが旧のままでかわらない。職員たちが会う人ごとに、退院したかという目であいさつをする。目だけのあいさつも多い。歩みはゆっくりだが何なく足もとが不確かである。議会に二度往復、職員食堂に一往復と歩いてみてそう感ずる。明日から万歩計をまた付けてみよう。日本人は勤勉だからとか、公務員だからという理由をつけて、冷房をしながらみんなよく働いている。今日も部長たちに、できるだけ職員に休みをとらせてやってくれとっておいた。暑い時は暑いように暮せばいいのではないか。昔は八月はじめに農家の三番草も終って「八月大名」といって、農家の人達はひる寝をしたし、そうした休みの中で次の仕事の段取も考えたのである。ヨーロッパではバカンスといつて夏は長い休暇に入る。日本の労働慣行にはそれがない。ないからいいというのではなくて、できるだけそれに近づく努力をすべきであろう。長期入院したからいうのではないが、みんなできるだけ休みを取る努力をすべきであろう。親子のスキンシップもこの際平素の不足を補うつもりで、追求してみてもはどうだろう。せめてわが職場でそうしたムードが出るのが望ましい。

8月5日（火）

“軽佻警戒宣言、が必要なのではないか

ドル安、円高がまだまだ止みそうにない。一年前ならドルは二四〇円もしたのに、今では一五五円という。一八〇円どまりといわれていたのに一六〇円を切ってしまった。石炭も、食糧も国内産が危機的だ。第八次石炭答申、及び米価答申で大きわざが起きている。輸出品も電機、機械軒並みに苦境に立っている。人事院勧告は春闘結果とのにらみで今年も二・四%は出そうだという。闘いのない春闘だが、この円高不況のなかで、よくも取ったものだ。石炭も米も値下げ以外に売れようがないというこの時節、他のものも同様である。賃金だけが上るといってもいいこの時節、一寸不思議ともいえる。賃上げ無用というので

はない。労働者の生活構造が急激に高まり変化して、その中にみんなが巻きこまれてる。贅沢競争すらしているし、無意識の中に贅沢にならされているのが実態だろう。正に暖衣飽食の時代で、そのくせみんなが苦しんでいる。若い者は車、車、車、まんが、ワープロである。モラルも識字もどうでもいい。オートバイの交通事故死がふえている。猛スピード、酒酔い運転、自分はもちろん家族や他人の不幸への連動など考えてもみないようだ。交通事故死多発警戒宣言を発令することにしたが、一般化した宣言であつてもよい。

8月6日（水）

短篇ものを集めることの意義もある

昨日は高教組の大会あいさつ内容を原稿に直す仕事三〇〇〇字、今日は教養部森山教授追悼文集原稿二〇〇〇字、と、計五〇〇〇字の原稿を書いた。久しぶりのこの種の仕事である。切れ切れの仕事だから比較的容易に筆が進む。この種のをあれこれ合わせて次期出版に備えるのも一法だと思うのである。まとまった一つの体系を編もうとすると骨が折れるし、読者への訴えも理屈めくだろう。それよりは短編でも臨場感あるものの方が訴える力があると思うのである。私自身が書いたもの、私の名において事務官が書いたもの等いろいろ臨場感に富んだものがある。それらは多岐にわたるし、それを通して県民に訴える方がいいように思う。先日からそう思うようになったので、それらをひとつにも集めてもらおうし、自分でも集めることに努めようと思う。これから短期間にこうした仕事に取り組んでみよう。昨日の高教組大会のスピーチなど、県民一般に対しても十分訴える力はあるように思う。平素気づかないが、その分布は広報室が一番よく知っているはずである。もちろん、これから執筆して一つの系統的な論調になるものも必要だろうが、この方は八月中に一つはものにしたいと思っている。その意味で八月も忙しい。

8月7日（木）

新長期計画第一次実施プランの策定作業の意義づけについて

新長期計画の実施プラン作成プロジェクト委員の辞令交付を行い、知事訓示というのがあって話したのだが、原稿なしで思わず十五分ばかり演説する結果となった。私のごときから見ると、三十数人の委員たちはみんな若い。課長補佐や係長クラスの者が多くて頼もしい。四〇歳半ばの充実した者ばかりのようだ。時代（世代）が違うということと、同時に、長期計画が福岡県を新しい時代にマッチするように作りかえていくエネルギーはこの人達にこそふさわしいとの実感が湧いてきたのである。福岡県はつい先日まで過去の遺産（石炭と鉄）にたよった生きざまになれてきたし、又はその斜陽化の後遺症対策に神経をすりへらしてきていたが、今やそういう生きざまは許されなくなった時代だということを強く再認識しなければならぬであろう。新長期計画「福岡県 21 世紀へのプラン」はそうした考を基本にすえて新しい時代の潮流に適應しようとしている。実行プランは中期第一次プ

ランとなるが、第一次が、二次、三次の基本路線をもきめてしまうことをよく自覚した上で、一次実行プランが策定されなくてはならない。そうした意味の話をしたのであった。

8月8日(金)

裏庭のたたずまい。

立秋だということは一番暑いということか。急速に涼しさがでてくるということでもある。庭に出て夕方撒水するという珍しい作業をやってみたが、すべてが日照で焼けている。裏の藪の緑にそよぐ風が、中でもなごみをそえてくれている。今年も甘夏柑はかなりなっているが、どの植木も鉢物も水をほしがっている。どれほど水をやれば満足してくれるのか、どこまでも水を吸いとってしまいそうだ。先日、十年前の日記をみていたら、私が教養部長で河野氏が評議員をしていた頃、彼のうちから八朔の枝をもらってきて接穂したとの記事が出ていたが、うち一本だけ接枝に成功したのに、それがいまだに開花実のらないし、大きくもならないのだが、何故なのか一向にわからない。わが家の猫はもう一五年にもなり、猫なりに老いてきたと思うのだが、近頃は、部屋におくと、度々汚物を吐くので、その失敗をさせないために外に出しっぱなしにし、餌だけを与えているのだが、炊事場の窓辺をうろつき、室内の臭いを嗅ぎとると、餌をくれろという合図になき声を連発する。満腹すると涼しい場所を選んでひとり静かに存在する。十年一日の如しというところだ。

8月9日(土)

上り新幹線の中

新幹線を利用して姫路へ行った。今回の旅行の目的は七二兄の初盆におまいりすること、東京で政府予算陳情のし残した私の責務を補うこと、それに、企業立地ビデオ取りに私の対花村氏談話の録画をすることの三つが主だった。列車の中で感じたことを書くと、車窓からみて一時は褐色になっていた山陽線沿いの山が緑をとりかえしているということだ。松喰虫にやられて絶望かと思われた山々に、褐色の枯れ松の姿があまり見うけられない。強い回復力があることに感心した。福岡でも海岸線で問題になっているが、どこまでか進んで回復するのも知れない。上り列車は空席も多いかと予想していたのに満席なのに驚いた。当然に夏休みなので子供連れの移動が上り下りともに多いのであろう。列車内アナウンス、子供のさわぐ声、それに赤ん坊を泣かせるのが気になって仕方がない。子供のさわぎは先ずは致し方ないとしてもあとはどうにかならないか。車内アナウンスも、案内というよりは、どうでもいいことを、くどくどいっているに過ぎない。車内のどこかに掲書きしておけばわかることではないのか。その分だけ、耳の邪魔が少なくなるのに。

8月10日(日)

江崎と遠藤

浅沼組の江崎さんが話したいことがあるということだったので、今日は七二兄の初盆も形だけにとどめ、新大阪駅近くのレストランで中食をとりながらしばらくの懇話の時間を設けた。江崎さんは私に厚意をもってくれているが、自民党系で、大阪における亀井後援会的役割を果たしてきた人であろう。彼がいうには、まず、遠藤氏はああいう男だが、それなりに理解してほしい。山崎拓とは仲はよくない。福岡県の自民党は山崎ではまともでないだろう。九電の永倉会長が今田中健蔵氏を次期知事候補に決定すべく尽力し、山崎がこれに乗っていて、一応成功するかに見えるが、自民党がまとまるわけではない。田中氏は女性問題もあり、首藤、高橋という駒とくらべるとずっと条件が劣る。その点田中に決まると奥田にかえて有利ではないかと思う。——ざっとこういうことであった。遠藤は昨年の関西福岡県人会での発言で物議をかもし、あとすぐに江崎氏が私にいてねいに、ことわりに来たことがある。それでも江崎氏らを通じて選挙資金集めを今でもたのんでいるらしい。私は遠藤には一物も二物もあるが、江崎氏がそれなりにみてくれというのだから、その点は評価しておこう。

8月11日（月）

九一と真知のこと

九日の夜、小嶋芳男氏は還暦の祝いだったらしい。そこへ私が行ったことになる。刀出からは晴久は来たが、九一は来なかった。加茂三郎氏が来て久しぶりの対面となった。氏は八五歳になるという。矍鑠そのものであった。直美と西尾君の縁結びについて和代が発言したら、大変乗り気を示していた。九一が来なかったのは、真知子の縁談のことでいらいらが募っているせいだという。彼は真知に老後を託したいのに、真知の相手が全くそれを承服しないらしく、縁談は破裂寸前らしい。真知は九一が育ての親であることを知っているし、老後を見ることに異存はないようだが、相手がそれを承知しない。二人は分れたくないようでもある。要するに板ばさみで困惑しており、九一はあからさまに相手の男を、そして真知をも罵倒するのだそうだ。彼は彼としての頑迷さを崩さないでいる。家庭内波瀾万丈というところらしい。私はそばにいた晴久に、お前も一人前なんだから事が丸くおさまるように、勇気をもって九一にも真知にも進言すべきだよということをいっておいた。九一はとても頑固で主張を表にストレートに出さないでほしいのだ。

8月12日（火）

暑中見舞状あれこれ

暑中見舞がどんどん来る。当方から出したものの中に返送されるのもかなりある。宛名書きに問題があるためだ。近頃は、こちらから出したから返って来た返信なのか、全く新規なのかわからないのが多い。県民の会から手分けしてどんどん出しているのだから、今日来た暑中見舞状が返信なのか否かの区別はつかない。知らぬ人があまりにも多いわけだ。夏も

はじめの頃、まだ当方から出してないのに来たものについては、返信も書いていたのだが、今日など知らぬ人から来ていても返信を書くには気が遠く重い。それに知らぬ人に返信を書いたとすれば、そちらから先に来たのだという場合すらあるからである。このような混乱があることを思うと、もうご無礼してしまうしかない。でも何だか気になって重くなるし妙な感じになる。それに、アドレス帳をどう整理すればいいのか、全く迷ってしまう。新しく書き込んだとすれば、それが、県民の会で手分けして書いた人の住所録と重複して以後どうなるかが不安である。ともあれ、この種のことは何もしないのが一番よさそうだ。

8月13日(水)

夏のねむれぬ明け方と九州の初盆

暑い夜をねむるにはクーラーがいる。これをはぶくと開放するかどうかだが、深夜はそれができない。ねむれぬままに夜明を迎える。四時半から五時には新聞配達バイクがしじまを破る。しばらくすると小鳥がかわいい囀りをきかせてくれるが、これも束の間、こんどは蟬しぐれだ。こいつはかわいいとは思えない。一日中声をからしてやっている。他のかわいい虫の音がきこえなくはないが、蟬はうるさい。油蟬、ひぐらし、違ったメロデーだが単純で、かえってうるさい。夏はこうして寝不足がつづく。今日午後は知事としての初盆まいり。関西と違って九州は華やかに提灯の競演となる。有名人のうちには有名人の名が並ぶ。提灯を出す方も費用がかかるが、もらった方もおかえしの気を使う必要があって大変だ。実用面から判断すると立派な提灯も役立つ期間が少く、処分してしまわないと邪魔にすらなる。提灯には供えた人の名が出る。その名を見ると、その人の過去がわかるくらいだ。浜正雄氏のところに行ったら、財界の永倉や政界の山崎拓がせり出しているあまり感じがよくなかった。上杉佐一郎宅は豪華の代表、小林栄三郎氏宅は質素だった。

8月14日(木)

プロ野球のテレビ解説

この数日、仏式の慣習が支配してあちこち休みとする者が多い。夏の暑さもその一因だろう。何か口実があるなら、この暑さの中なので、できるだけ休んだ方がいい。それにしても甲子園の高校野球、各地のプロ野球はどれもこれも満員ではないか。盆の帰省客はスタンドにいないと思うが、夏の夜はスタンドで血を沸かすのがいいのかも知れない。野球の解説が専門的になりすぎて、技術論講釈がまかり通っている。玄人ならいいかも知れないが、素人には高度すぎて面白さが少くなっている。素人が見ていることを意識してテレビ解説はもう少しレベルを下げ興味本位にした方がいいのではないか。ピッチャーのフォームがどうの球筋がどうのビデオスローモーション分解の説明は、もういい加減にといいたい。かくいう私は、すでにもう過去の人になっていて、現代っ子はそのような解説を好むのかも知れない。時代おくれを気にしないはずだが、そうまでいわれるとなると若干気に

なる。年を考えるといけないと時にひとにいわれるが、やはりそれは避け難い。古いなど感じたり、年が気になったり、フケかたを表わす顔髪が気になったりである。気持だけはいつまでも若いとよくいわれるが、自分もそうなのだ。

8月15日（金）

戦没者追悼式と靖国への参拝

今日は旧盆、というよりは敗戦記念日で、中央では全国戦没者慰霊祭追悼式、が東京北の丸公園日本武道館で天皇参加のもとに行われた。各県とも県レベルのを行い、県では大濠の武道館で行われた。県の場合戦死八万八千人（戦没者）、空襲などでの一般戦災者三万人の慰霊である。中央での追悼式に県から五〇〇人が参加。中央のは参加者六七〇〇人と発表されている。県のは一二〇〇人の参加であった。靖国の公式参拝は首相は行わず、文相ら閣僚は十二人が靖国参拝を行った。首相は韓国、中国からの批判をかわすため、他の閣僚はデモンストレーション的に参拝した。問題はA級戦犯の合祀にあるが、藤尾文相は「東京裁判の決定は認めない」と強気の発言をしている。今年は原爆被爆者遺族も初参加といわれるが、なぜ靖国に戦犯が合祀されるのか、理解に苦しむし、なぜ神社のそれが国家護持であるのかも理解できない。それを押し通し、藤尾のようなことをいう閣僚が参拝するところに「すなおに」こうした行事を肯定できないゆえんがある。今日の日本の繁栄は戦争犠牲者のおかげだという追悼文の脈絡もうなずけないものがある。戦争肯定にならない考え方が定着せねばならぬのに、それが風化しつつあるのが怖い。

8月16日（土）

田中健蔵出馬の動きと、福岡市長選が知事選に重なってくる問題について

県政懇談会では、六月議会以降の県政界の動きをたしかめ合うような流れになった。田中健蔵氏への出馬要請は今日山崎拓、永倉三郎らが保守の体制かためをし、明日以降公明民社らに、さらにあたっていく模様。資金については九電（永倉）が用意するだろうことは間違いない。首藤氏が億単位のカネの用意を要求されて絶ったとのうわさだが、田中氏は永倉のOKで安心しておれるようだ。遠藤は山崎永倉のこの動きには賛同していないらしい。当然に大田もこれに同調しないようだ。今日の誰もの意見は田中が現学長という身でありながらなぜこんな話に乗っているのか心理の程がわからぬとのことであった。もち上げられてよほどうれしい男だろうというのだ。西日本の福田会長も二一世紀委員会とかを作って田中をもち上げ、そんな空気に有頂天になっているのが田中で、学内にその愚を直言する人はいないのかという声もあった。しかし九大内では今は臆病な人ばかりでねということだ。とくに医学部では出る釘は損という人ばかり。田中問題はとにかく、私は、自民党が市長選を知事選に重ねてこうとしているに違いないが、その対応はどのようなかと切り出したら、気づかぬ人が多く、対応も全くないのが実情であった。

8月17日(日)

生活改善グループの婦人

八女西部農業改良普及所で、立花町から大川市まで一帯の生活改善グループの婦人達二六人と「知事との対話」を行った。農業労働のチャンピオンであり、やる気のもち主ばかりで大へん気持のいい対話になった。とりわけて何かをテーマにしたわけではないが、よく働き、よく考え、よく発言する人達であった。農業対応に男は案外無関心という声が出たが、こういう場合、普及所の存在意義のあることを改めて感じさせられた。又農家の高齢者問題については、これからますます大変になる問題だと思った。農林事務所長は筑豊と筑後は農業者の気質が違うといていた。筑豊にはもたれかかり主義があるのだ。しかし筑後でもこのままだと、もたれかかり主義が頭をもたげるかも知れないとのことである。今日の話題では後継者問題が大きかったが、参加者の多くは働き者だけあってそれほど心配していないかの如くであった。嫁をもらうにしても養子を迎えるにしても、その気になるしかないという。農業を進んで希望し、結婚して今こうしてやっているという人もいた。ただ気持をおこさせるためには農村の生活環境が、このましいものにならねばならぬという。文化、住生活、服装、休暇余暇などの都市との格差縮小が求められているわけだ。

8月18日(月)

夏の夜の鈴虫

登庁して知事室から空港の方に目をやることが多い。近頃は多く彼方が霞んでみえる日々である。湿気が多いのであろう。だのに、大地には雨がほしい。カンカン照るから生き物はみんな水を求めている。馬の背を降り分けるという夏の雨。昨日も筑後市で降る雨が久留米で何のこともない。わずか一〇分たらずの間である。小さな川はほとんど水がない。上流をダムでせき止められているからである。これでは井戸水もかかれてしまうだろう。人間は伶俐のようでその裏があることを案外知らない。川水をせき止めていいのかという疑問がしばしばおこる。地下水系もかわるだろう。八月も下旬近いが、夜はコオロギが鳴き始める。時計のように正確な変化だと思う。かご分けしてあげた鈴虫であるが、秘書室の藤本さんは鳴きはじめましたよという。でもうちのはまだである。早いのがあちらにいったのであろう。近頃二籠の鈴虫のどちらもが餌のナスビやけずりぶしをどんどん食べて大きくなっている。近々鳴き始めるに違いない。それにしても何回かひとに分けてあげたのに、まだまだ二籠に「人口過剰」の状況でうようよするほどにいる。

8月19日(火)

若宮町での「ふるさと対話」に出席して

今日の「ふるさと対話」は「村おこし」が課題で、場所は若宮町、スコーレ若宮。終ってダシモノとしての司書太鼓と脇田口説踊りがとくによかった。スコーレ若宮の裏庭はよか

った。若宮町は清水寺からながめると東北に出口をもつ盆地。果物の栽培に適するようである。昔から筑豊の一角にありながら、炭坑がなかったところ。史蹟、文化遺物の多いところで竹原古墳や岩佐又兵衛の三六歌仙絵を蔵していた。若宮八幡が代表的である。「ふるさと対話」を村おこしテーマにしぼってやったことにも意義がある。たくさんのグループが、それぞれにがんばって村おこしに努力している。筑豊の各地にもあるが、ここは周辺と過去に汚れが少ないので立ちあがり早い。婦人会活動をどう思うかという質問があったが、村おこしは人おこしなので、つぶれそうな婦人会なら別の角度から人おこしを考えたらいいのではないかと私は答えた。各グループがそれぞれ別の角度から取り組んでいるのは、人それぞれに目ざめの角度が違うからであろう。眠っている人をおこすつもりであればこの角度から人々をどれかに参加させる。これが村おこしにつながるのではないか。大事なのはそのためのオーガナイザーの発掘だろう。

8月20日（水）

雨が欲しい

道濡れてみて夕立のありしこと 汀子

パラパラ降るかと見えて降りおしみ、といえる今日の午後であった。降りそうで降らない。遠慮無用というのに降り惜しんでいる。並木の根元に植えられた低いグリーンベルトをなすツツジが次々に枯れてゆく。惜しいけれど水をやるすべもないらしい。ということであれば、こういう位置につつじを植えること自体がはじめから無理だった訳だ。植木の専門家ならわかっていたはずではないか。どこかに誤りがある。もっとひどくいえばデタラメだ。高価な代償が無駄に払われたと思うと腹が立つ。毎年このような思いをさせられるのだから次からは方法をかえるべきだろう。道ばたの芝生もよれよれになっている。石段についた苔はカラカラになっている。がこんなのは一雨降れば蘇生する。しかしつつじはもうだめになる。いい方法が見つからないなら研究が足りないのではないか。ともかく一雨ほしい。万物がよみがえるに違いない。稲はぐんぐん伸びているようだ。水の利便はいいから干魃にまではあとしばらくあるらしい。全国的に水不足になりそうだ。

8月21日（木）

県立病院の赤字のこと 豪雨あり

サマー・インの最初のテーマは、県立病院の赤字問題についてであった。累積赤字は六四億円といわれるが、他県同様の一般会計からの繰入れがあれば赤字にならずに済むという話も出た。が内部努力によって昨年あたり赤字を三億円ばかり少なくすることができた。なぜかときくと、職員の自発性がでてきたためでしょうと衛生部長はいう。要はやる気ということだ。問題はなぜこれまでそれがなかったかである。逆になぜこの頃その気がおこって来たかである。知事の姿勢に違いがでてきたことを職員は知っているとも部長はいう。

今医療職給与表（三）の改訂について組合側とホットな話し合いを進めているが、恐らく解決するのではないかと彼はいう。組合が昭和三二年以来頑固に反対しつづけてきた問題だといわれる。（三）でなく、行政職表の適用の方が有利だから、全国でわが県だけ特異な状況にあるとのこと。そのほか、清掃、洗濯その他民間委託をすれば赤字はもっと減るのだが、これも組合の抵抗で解決されないらしい。私はエモーション、リーズン、パッションの例を出して、エモーションで職員に辛抱強くあたれとっておいた。部長も全国並みの常識ある状況にと強く望んでいる。解決の曙光はみえた。

8月22日（金）

天拝山に登る

サマー・インの二日目。午前中は天拝山散策という日程であった。秘書室の藤本、丸本両女史もこれに参加した。往復約二時間。病み上がりのせい、やや疲れを感じた。標高二五八メートル、県立自然公園なのだ。万歩計は久しぶりに一万歩をこえた。山元にある武蔵寺も散歩するのにいいたまたまであった。殊に何百年かたつ藤は見事である。天拝山への登山道はほんとうによく整備されている。桜の並木、かえでがよく、春、秋いずれもよかろうと思う。しかし、夏の今も、日光に当たることがないほど緑のトンネルを歩くようになっていて、心配した陽焼けは全く考えずにすんだ。できれば、両脇の木々に木の名を書いた案内がほしいが、所々にしかない。フィトンチッドあふれる森林浴をすることができた。近頃、県で森林浴百選をおこなったが、もちろんそれには入っている。往復のうち一〇組ほどの散策者に出会ったが、シーズンにはもっと多いらしい。福岡あたりの人ももっと気易く、こういうところに来ればいいのにとと思う。老人も子供も容易に山歩きが楽しめるのだ。国民年金センターの管理人の方が車で迎送してくれた。

8月23日（土）

高齢者対策について。

午前中は高齢化社会に県としてどう対応するかというテーマで、県民生活局や労働部衛生部などからの関係課に来てもらって討論しあった。高齢化が進展する速度よりもその対応におくれがあるのではないかとというのが心配であったから、このテーマについては今回のサマーインに私の方から特注したのであった。丹念に資料整理をしていてくれたので状況がよくわかったが、国の対応は部分的で、市町村のそれは全くまちまち、県の対応は思い付きというくらいのところだろうか。それでも県としていろいろのことをやっているし、地域は地域であれこれ対応しているし、自発的な運動もずいぶん多いものであることがよくわかった。丁度、今後、教育会館で高教組の退職教師の会の集いがあり、二時半からこれに出席あいさつをしたが、サマーインでの討議を頭にかべながら話すことができて都合がよかった。健康に老いること、老いて生き甲斐をもちつづけること、自分の経験、知

識、能力を生かして社会に参加することに積極自発的になる必要があることなどについて話し、高教組の退職者には多くの地域の高齢者の先頭に立ってもらいたい願望があることなどで結びとした。あとでの乾杯歓談は時にはみんな私を激励してくれた。感動

8月24日（日）

岡茂男氏のこと

全電通が全国大会を福岡で開く。それで武蔵大学長をしていた岡茂男氏が顧問格で福岡に来た。ニューオータニに泊るといふ。早速福岡市美術館でのマネ展に招待し、あとで日本庭園に案内した。彼は平素親交のある「次郎寿し」の中村さんを伴っていた。息子の赫男さんで、市議をしていた次郎さんは今は亡いという。もう古い話で三十七、八年も昔からの思い出が次々に湧いて出る。今は彼も武蔵を定年退職し、いまだ方々で活躍しているが、頭にほとんど髪がない。私と同年齢だから、私もひとが見ると同じように見えるだろう。お互いに老いたものだ。タバコをどンドンすうから元気ようだ。夜は次郎寿しにお邪魔して食べながらいぶん語り合った。中村さんも笑顔でいつまでもわれわれの相手をしてくれた。みゆきが側において、岡さんも福岡で職が得られず東京に行かれたが、その方が今はよかったように思うといったら、彼は否定しなかった。東京で結構楽しく忙しくやっているし、位置も安定しているからだ。いつまでも学者くさいなとも感じた。その点一寸惜しいとも思う。理屈が先立つように見えるのである。

8月25日（月）

国鉄が醜体をさらけ出している

昨日は国鉄香椎駅に、国鉄問題を考える東部市民の会の「筑豊ローカル線一六〇円区間の旅」という催しの出発式があつて出席あいさつをし、今日は国労家族会代表の「人材活用センター」に関する陳情をうけた。現時点での国鉄問題の一つの真実が生き生きと語られていると思う。以前から国鉄経営、国鉄労使問題の不正常さが気になっていたが、今、それが臭気芬々たる状況でわれわれの目の前に醜体を投げだしているのである。国鉄は東大閥で固められた官僚企業である。みずからを反省することはなく、政治家に利用されるにまかせた大世帯でもある。国営なら赤字だが、民営ならやれるという論法がとおっている。甘木鉄道はその一例だが、では国営のままなぜ甘木鉄道のようにできないのか、それが不思議でならない。分割民営が既定のコースのようにいわれているが、分割民営のつもりでなぜもっと前からやれなかったのか。東大閥官僚と国鉄労組のもつ体質とが奇妙に悪い方へ相乗効果を発揮した結果、こうなつたろうと思われる。それを今、国労退治、ローカル線切捨という形で処理しようとしているが、東大閥官僚が居坐つたのでは問題は片付くまい。

8月26日（火）

蒸暑い長い午後

午睡せる耳にしみ入る蟬の声

午前中に公用がすんで帰宅後中食をとったが、どうも元気がないとひとからいわれるとおり、食後はぼんやりして眠くなった。午睡してみようかと思ってソファの上に横になること二時間ばかり、全く熟睡までいかなかった。何せ裏のマンションの庭で少年たちがボール遊びを長々とやって耳ざわり極まることであった。又それがようやく去ると、蟬の音が耳から腹までしみとおるよういきこえてきた。午後四時、起き出たままだった揮毫依頼の消化にかかった。体調がもう一つしっかりしていないからであろうか、書く字にも力がないように思える。これではならじとふんばるが、気分だけが先立って腕がついてこない。不満足なできであっても、その時の出来ということで仕上げにしていって。何枚も書いたのだが、一呼吸おいて、日を経て、見直してからとは思いつつ、根気を失い、夜おそくまでかかって印を押して仕上げってしまった。台風一三号が沖縄まで来て中国方面に行ったのだが、パンツ一枚になっても汗が出るほど。クーラーの涼しさよりもと思ってガマンした。

8月27日（水）

市長選を知事選に重ねてくる作戦について

二、三日前自民党福岡市の方で、次期市長選に桑原敬一助役を推すことを決め、市長進藤一馬氏もこれを了承し、進藤氏は、いつ辞任するかについては一任してくれということまで話がついたとか。こういうことが報道されていた。福岡市長選を知事選に重ねていこうという自民党の戦略がこのように着々と順を追って進められているとき、社会党側でこれにどう対応しているか、今夜の県議団との九月補正予算案検討会の時、私の方から話題を出したが、何の対応もないとのこと。むしろ福岡市議団は桑原に相乗りするときえ予め決めているようだ。市長選がこのように知事選に重ねられてきたときに知事選がどう影響されるか、そのためにどう手を打つかということはとくに検討されねばならぬ当面の重要テーマであるにかかわらず、社会党という集団は、何らなすべき頭も組織ももっていないといえる。私は今日時間があれば竹村書記長と合ってこのことだけでも警告しておきたいと思って手配したが彼は留守。この問題はさきの九大学者グループの席でも新たにみえた進藤陣営の動きとして提出しておいたのだが、誰も問題化しようとしていない。鈍感というか、ひとごとというか、行きあたりばったりというか……。

8月28日（木）

国鉄分割民営移行後の九州会社は黒字になるとのこと

雲走り大枝ゆれる蒸暑い一日だった。台風が朝鮮へそれたという。雨はほんの少ししか降

らなかった。国労門司地本大会及び石炭政策反対県民総決起大会に出席したが、どちらも現政府の政策下でさんざん虐待されている部門のことで、正直なところ激励のポーズをとりながら空しいもの感じられた。石田委員長の報告の中で何千人かの組合員が減り、今なお減りつつあるとのくだりがあったが、単に減るのではなく、はげしい毎日の組織攻撃の中で打ち落されつつあるといってもいい状況である。この一年国労の組織は孤立し、攻撃され雪崩をなして減少しつつある。余剰人員対策の名のもと人材活用センターに配属され飼い殺し同然となる国労組合活動家とその家族はあわれである。官公庁や民間に転職あつせんがあつても、その試験をうけるに際し、組織差別をうける。今日の西日本新聞トップ記事では、分割民営後の「九州会社」ははじめから黒字になるという。今は大赤字なのにどうしてこうも違うのか。ローカル線を切り（ナショナルミニマム公共交通の使命を捨て）値上げし、労働者の首と賃金を切るがゆえに黒字になるということらしい。これではもう交通弱者もふんだり蹴ったり。あとがこわい。

8月29日（金）

一条での記者クラブ懇親会に、近藤前副知事も招かれ、送別の意を表された。クラブ送別会でもあった。一ヵ月たった今日も、彼は元気そのもの。ゴルフのつき合いなど結構気がまぐれて多忙のようだ。周辺の者が彼に気をつけていて、何か参加してもらってはどうか、その途をさがしたらとっている。考えてやりたいが、まだ余熱があつて、そうかんたんにはいかないのではないかと私は考える。すぐ役立ってもらふ途もあるだろうが、それはかえって彼の将来に邪魔になるかも知れない。自民党の浜中氏らも九月議会がすんだらとってくれているようだ。頃としてはそれがいいだろう。知事選にそなえてのことを考えている人もあるようだが、むしろ危い途かも知れない。彼なりのいい途が他にあると私は思っている。今日の記者クラブの雰囲気をもてすんなりと彼を受容している。それはやはり疑いを残してというよりは気の毒なことをしたものだという気持の方が強いからであろう。幹事記者がいていたように、彼の県庁舎最後の時の職員たちの送別の熱気は未だ鮮烈に人々の心にしみこんでいるようだ。

8月30日（土）

秋風が吹きはじめ

涼しさや沼面を走る風見えて　　汀子

台風一三号が去って急に涼しさが出てきた。心なしか公園の桜葉も黄味が増してきた。これから実りの秋である。筑後平野を走るともう稲穂があちこちに見える。今のところ今年は平年並み以上の出来らしい。嵐が来ないことを祈る。昨日から左腹が痛むので済生会救急部に診察をこうた。とくべつ原因らしきものはわからぬとか。一兩日様子を見ることにしたが、どうもわが体軀も秋風ふく頃になったように思えてならない。社会党委員長選に

立候補の土井たか子さんが知事室に来訪された時、こんど落選した四区の後藤茂氏のことを話題に出したら、選挙中は急性膵臓炎で入院したのが敗北につながったとのことだったので、もしかして自分もと思って済生会に走りこんだのだが、原因不明といえば、安心したような不安のような。ともかく、ひとは顔色が悪いという。近頃髪を染めるのをやめたので、頭が白くなったので、それも顔色にひびいているのかも知れない。黒い方がいいですよと近い人はいうが、それだと迷うことになる。しばらく白をふやしてみようかと思っているのに。社会党も秋風に吹かれはじめたといえる。何か打つ手はないのか。

8月31日(日)

パソコンを買う

ベスト電器からパソコン一式を買った。NEC、PC、9801UVという。約四五万円という。原価でくれた由。何のことかさっぱりわからないが、まずは近頃はやりの機械に臆病であってはいけないというだけのこと。みゆきは相当買いしぶりの態度を見せたが、理くつをいけばきりが無い。今日日曜日夕方もって来てくれたが、本体の調子が悪く、しばらく別個のものを使ってみることで話がついた。もう年だから機械の一々の部分、とくにキーの所在箇所がなかなか頭に入るまい。なれるまで根気強くたたいてみるしかないだろうが、第一そんな時間があるかないかだ。今日も午後はまるまるつぶされてしまった。半ば公務の日程が日曜日といえどもどしどし入ってくる。キーをおぼえるひまさえありそうにない。それなのに、パソコンを買うとは一寸我ながらおどろくが、老躯に鞭うつしかないだろう。「何に使う？」というが、目的があつてのことではないというしかない。ワープロ機能を生かすようになるだけでもいい。一年後にどこまで進歩しているかが見ものだ。藤江、啓二、ライヤが、やはり若いだけあつて興味深げに見入っていた。高いオモチャだ。

9月1日(月)

シワ寄せ

今日午後～夕方の三役会議の長かったこと。驚きである。二時間をこえた。こまかいせんさくというか、親切というか、役所というところはカネ食い虫だと思う。県立病院の赤字問題のことこまかいせんさくはいいが、医療職給与表(三)のことなど、三〇年間の懸案しきたりとはいへ、なぜ今になって問題が表に出てくるのかということ、保守の革新一びり(知事と職員組合との離間策)としかいいようがない。下請化の促進にしてもそうだ。給食、清掃、ボイラー管理などにわたる問題は亀井時代のお荷物といっても過言ではない。逆にいうと、亀井時代にはあれこれ問題の積み残しがあったわけだ。荻田南港バイパス二号地問題にしても高度成長時代のカネ食い仕事が今になって大きな荷物となって来たわけである。何十億いや何百億という荷物である。企業誘致のための施策が企業誘致によって尻拭いせざるをえないようになってきている。妙なめぐり合わせである。円高不況のシワ

寄せといってもよいが、亀井時代の調子に乗りすぎた施策のシワ寄せでもある。因果なこと。

9月2日（火）

松本清張氏に会う

博物館建設運動に関連して、松本清張氏に一度会っておこうとの話が前から出ており、東京事務所にたのんで今回上京の折にやっとそれが実現した。四時半頃羽田に降りた時はかなりの雨。迎えの車でそのまま高井戸の自宅を訪ねた。迎えの次長、同行の佐々木、森山も同行だった。立派な応接室に案内された。ヨロイ、カブト、銅鏡、唐三彩、太政官布告のキリシタン禁令などの飾りも目にとまった。早速もって来たミュージアム九州全二〇冊を開いて、大和朝以前の日本民族を扱う国立大規模近代的博物館建設運動の意図、文部省側の現時点での対応状況などについてのべ、彼の意見をきくと同時に、援助方も要請した。ほとんど異論は示されず、博物館の予定位置、構想などについて尋ねられ、雑誌に及んで日本人は祖先は大陸から渡来したものであるとか、文物の渡来は人の渡来を示すことが忘れられているとか、縄文の日本人と古墳の日本人は全く同じでないとか、彼の積極的意見の開陳があり、珍敷塚古墳がトルコの古墳に酷似していることなど写真実例でもって示された。私は竹原古墳の例も出した。名残り惜しげなお別れになって七時に辞した。

9月3日（水）

東京都迎賓館庭園美術館こども絵本展

来るたびに思うのだが東京というところはさすが世界的大都市だと思う。緑地も豊かにある。昔の大物の所有物だったろう。維新の変革のとき、どうなったのかが知りたいものだ。東京都迎賓館も朝香宮のものだったというが、朝香の宮がどうして所有者になったのだろうか。ともあれここで夜の懇親会があったのだが、知事の多くは欠席していて盛り上がりもう一つであった。建物の横隣に庭園美術館があり開宴前に入ってみたら、日本の昔の子どもの本が展示してあり、おとぎ話や双六を見ることができた。語り伝えられた子どもの幻想の世界が物語としてこまかく描いてあるのには驚きを覚えた。今の子どもにはもっと多くの幻想の世界は供給されているだろうが、昔も親たちがカーぱいそうしたもののようだ。しかし力のある人だけで貧乏人には縁のないことであっただろう。全国知事会よりも有意義だった。七時半頃にふくおか会館に帰投して休むことにしたが、森山の話では、私が道路公社問題をめぐって自己処分するといったと RKB が放送したとのこと。同じことが嶋津一みゆき一私に電話問合わせがあった。私は虚構と否定しておいた。

9月4日（木）

東京ディズニーランドを見る

三年前の知事選の頃から福岡県にもディズニーランドをとという思いが去来していた。しかし、本場ものはもちろん東京のも一度も見たことはなかったので、空想もいいところであった。東京のは、成田空港への途中で、シンデレラの城が一寸見える程度だった。昨年だったか福岡で姫高文乙同期生会があって私も招かれ出席したが、その時来た帝都高速の総裁菌村が、紹介するからディズニーランドは一度見学しておくといいいってくれたので、秘書室で日程を組むときに入れておくよういっておいたのだが、時間がかかるので中々実現しなかったのが、こんど全国知事会で上京したそのチャンスがえられた次第であった。十時からということで、九時半すぎに門のところに着くと、予想に反して、菌村氏自身も迎えに来てくれた。今は総裁でなく顧問というのだそうだが、ディズニーランドの役も何かの形でかんでいたらしい。その点確かめてはいない。牧坂氏が昨年来たといっていた。カンカン照りの今日、夏帽子をかぶって迎えてくれた菌村氏の姿が印象的である。中は予想外に広く、近代技術を駆使した施設がつづき、アメリカ化された姿には驚きの連続であった。中食もごちそうになったが、この席で私は「心の生産」への意欲のあることを知ってもらった積りだ。

9月5日(金)

身障者のためのボランティア活動

水巻町の障害者ボランティアグループとの対話のつどいに行った。点字、朗読、手話などでグループができていく。小倉あたりにもっと盛んなグループ活動があるようだが、水巻でも若い女性がよくやっている。全県に同種のグループがわれわれに見えない形で存在するのだそうだ。熱意には頭がさがる。身障者に、「してやっている」との印象を与えてはいけないのだと彼らはいふ。私は、健常者の仲間にならぬように自然に居れるような雰囲気を作り上げていくことが大事ではないだろうかと思う。交差点で音楽による盲人用信号があったり、エレベーターで盲人用点字板があったり、声の案内があったりするのをよく見かけるが、健常者がこれらを使う身障者を導いてやるような社会体制ができるのが先決ではないかと思う。盲人用ばかりのこういう施設を作るよりも、健常者に盲人その他を自然に仲間に入れてやるような社会づくりをすることの方が大切なのではないだろうか。そうすれば、そうした社会では身障者への思いやりある予算が行政体に強く要請されるようになるに違いない。それにしても身障者が社会参加すべく、配慮されることが多くなったのは時代の勢いともいえる傾向であろう。

9月6日(土)

全国勤労協での講演

午後四時から一時間もちパレスで全国勤労協の総会があつての私の講演であつた。勤労協の歴史は短かくはないが、この時点で加入総員四〇万人であるときいてびっくりした。

十一県にまたがったものようだ。労働組合をタテとすれば勤労協はヨコの組織と説明される。労働者の地域的共通利害が中心だが時に農工商人も加入してる。加入も団体加盟もあるようだ。もちろん個人加入が主体らしいが組織するのに骨が折れるだろう。私の演題は「地域づくりと県民総立ち」であったが、一時間かけてうまくわかってもらえたかどうか自分ではすっかりしない後味であった。テーマをそれ自体として自覚しておらず用意がなかったからともいえるが、勤労協というような組織には話しは難しい。人間は社会生活を営む上で多面的な欲求をそれぞれの手段を通して満たしているが、労働者の場合、人間関係が一番疎外されている存在であること、そのゆえに、あらゆる面での欲求充足を、労働組合ではできないことを工夫して組織化に努力するよう説いたが、最後に、リーズン、パッション、エモーションという組織原理三要素のうち忘れ勝ちなエモーションについて集約語として強調して話を結んだのであった。

9月7日（日）

臨時県議会開催の線は消えた

臨時県議会は開かず

自民県議団総会で決定 若手には反撥も

昨日の西日本新聞は五日の自民県議団総会について21面トップにこのような見出しで報道した。「自民党が狙っていた臨時県議会開催—知事不信任決議案提出—解散—県議選という一連の政治日程は事実上、消えたことになる」と書いている。大体が無理な日程展開を、ひとりよがりな吹聴していたのが、そうできなくなったにすぎない。若手は解散—県議選ラインが新顔の立候補にひまを与えず自分達に有利になるからそれを主張していたのだが、うまく事が運ぶものではないということがわかったであろう。他方、知事候補については、高山久生総務会長が、田中九大学長に、二十日をめどに出馬要請したいと報告し、了解を求めている。いずれにせよ、九月定例会は田中擁立があるかないかによってかなり様相が違ってくるとみられている。民社・公明が田中に相乗りするかどうか動揺の余地が多分にある。私の周辺では田中が出ると比較的闘いやすい相手だということのか専ら。およそ田中でいくようだといわれるが、私には田中氏の心境は不可解である。

9月8日（月）

植物園に行く

啓二夫妻がしばらく滞在しているので、孫の沙理に相手になる時間が近頃多い。四・五日前から寝返りができ、今日は二本目の下前歯がでてきたところ。生後あと少しで六ヵ月になる。体重は七キログラム、まだ何もできないし、周囲の人の顔も判別できないようだ。淋しくなると泣くばかりなので、相手になって泣きやませることになる。午後早くフリータイムができたので、帰宅後植物園に行ってみた。折悪しく休園日であったが、園長が快

く案内してくれたのでベビーカーをひきながら園内を一周した。いつもながら温室内の花がいい。ハイビスカス、ブーゲンビリア、胡蝶蘭、それからサボテンいろいろ。これには目をみはる。帰りに山ノ上ホテルに立寄って啓二夫妻にビフテキをごちそうしてやった。午後四時ごろ、中食してなかったということで、満足したようだった。沙理をしぼらく抱えての山道は汗だくだくになった。健康に自信をなくしたので、少しでも運動をと思って歩くことにつとめているし、今日も植物園の散歩を選んだわけである。足も心臓もふたしかに思えてならない昨今である。

9月9日(火)

女の役割は大きい

今年の「救急の日のつどい」は直方市中央公民館で行われた。五日の八幡西区市民センターでのガン制圧大会もそうだが、こうした場合に女性の参加が多い。動員され易いということもあるが、他面関心が高いのであろう。今日は又嘉徳町の食生活改善推進員たちとの「対話のつどい」に出かけたのだが、事の由来からしてこれも女性ばかりであった。「みんなの健康を自分たちで」ということで食事に配慮しようと、表面全くどうでもいような運動だが、関心を寄せてみると重要なことだというのである。ガン、救急、食生活、この三題をここ数日つづいて関心を呼び込む運動に参加して女性の役割に私も関心をもった次第である。こういう場合、参加女性の目が輝いている。直方の集会で私がまっさきにあいさつに立ってそれを感じ取った。その印象は今も消えない。君は女の集会ばかりに参加するとひとにいわれそうだが、女の集会が近頃多いものだ。今日フルーツの里(嘉徳町宮小路)では梨やリンゴ作りの若男の集団に出会った。これは別の意味での逞しさを感じさせられた。両方がなければいけないなとは思ふ。

9月10日(水)

公明党のどっちつかずの態度 亀井さんの病気

田中健蔵氏が知事候補になる見込みがなくなったとか、まだ望みがあるとかが新聞にのりし、私の周辺でも話題になった。それから中村室長が亀井光前知事を福大病院に、私に代わって見舞に行ってきたことをめぐっても話題になった。田中氏については、公明党が歩み寄りをしないという。公明党はむしろ推す側にまわっていたのになかなか今になってOKと叫ぶのは創価学会員一般の強い反撥があるのと、妥協のためのカネを釣り上げようとしているのではないかと憶測されている。「結局は田中にいくのでは？」とすら公明党を評する人もいる。山崎拓は絶対田中でまとめて見せるといって上京したそうだが、中央では話がついている自公の仲に自信があるのだろう。永倉も田中も政治音痴だから結局は顔をつぶすなどの義理も動いているらしい。私らはこれでは燃える選挙にならないだろうと思う。他方亀井さんについては昨日面会禁が解けたそうで、その点、もう永くないとの声

が強まっている。奥さんの面会謝絶のがんばりも、この辺でということになったのではなからうかというのだ。前知事だから世間の面会見舞圧力が大きい。私は六月末にもういかんとの説をきいていたのである。

9月11日（木）

余命をどう使うか

パソコンを備えつけてからもう十日は過ぎた。しかし私自身こう多忙では、キーボードに指をおくこともなく日がたっていく。藤江君が朝に夕に機械の前に坐ってキーをたたき、テキストを読んで又キーをたたき、画面をにらんでいる。若いし、かなり馴れたようだ。啓二も時に坐ってゲームに興じている。今日は郵便貯金会館で老人福祉大会。日本の高齢化が積もっていて、今年も平均余命が高まったと新聞は報じている。男七四、女八〇ということだ。百歳以上の人が全国で一八五〇人。昨年よりも一一〇人ふえたという。うち八割は女性。女が長生きする理由は均整ある生活のためだろうと思う。平均で考えると私もまだあと十年ぐらいあるといえるが、あと十年をどう生きるかとよく考えてみたい。まずは病気しないことだが、今の生活では無理が積もっていてこれはあとに残るんじゃないかと思う。もう一つは有意義に時間を過ごすことだ。さきほどのパソコンに馴れるということに時間を使うのがいいかがまずは問題だが、それよりは根本的に、知事というような自由時間の少ない生活についてである。少くともやりはじめたら二度はせねばとひとはいう。それも正当だが、自己犠牲であることにまちがいない。パソコンとはわけがちがう。

9月12日（金）

車の音、虫の音

東京に行ってトンボ帰り。ぎっしり日程に車は渋滞。人、人、人、車、車、車、看板、看板、看板、人と荷物。人と荷物の間を縫うようにして階段を昇降する。帰路はおくれることを心配してモノレールを利用したが、国鉄も同じく満席。どうしてこんなに人、物、車が多いのだろうか。つくづくそう思う。少しぐらいいは休むべきだし休みたい。人のいない所、物のない所、車のない所にいてみたい。それに、音、音、とりわけ車、オートバイの音。人々は忙がしすぎるのではないか。働き過ぎ、動きすぎるのではないか。考えていると厭世気分にする。こんなに騒然としなくても人生は人生なのである。ゆっくりしたらどうか。さすがに夜半になるとわが家はこうしたことから絶縁される。鈴虫しぐれを浴びるだけ。でも、よく耳をすませると、鈴虫のほかに四～五種類の虫が鳴いている。擬声音をどう書いていいかわからない。それぞれがちがう。録音しておきたいくらいだが、そこまでの熱意はない。鈴虫は二籠に分けているが、どちらも「人口過剰」。ねしずまった頃はそれだけが音と思うとかえってやかましい。部屋をうつしてきいている。秋の夜は、そんな感じで世の中をかみしめなおしてみた。

9月13日（土）

陣営内部の衝突

夜七時から二時間先日の「八二会」と称する会が拙宅で開かれた。県政のポイントをいくつか出しあって意見をすり合わせておこうという会である。RKBが先日流した知事自己処分という虚報の陰謀性とそれに対する当方の態度、亀井前知事の危篤のこと、社会党系の内部齟齬、北九市長選準備の弱体さ等々いくつか問題が出された。竹村俊夫、花田新太郎、岩崎県評事務局長、林・助信両県議、どれも相互にうまくいってない。竹村書記長、花田選対部長に統率力がなくなっており、岩崎・林の仲は悪い。林・助信は道路公社汚職事件以来、白けて役割を果たさなくなっている。今日来た高崎、八丁、大塚、島津（衣笠、安達は欠席）らは岩崎、林ともうまくいっていない。岩崎が抱えている島野につき、私が、県の仕事ももちパレスの労働資料室での労働運動史編集嘱託の件については、いい顔をしなかった。島野は捨てるべき人物であるというのだ。こういうふうには主要人物が互にいがみ合っていることは決してよい結果を生まない。内部矛盾の域にとどまってくれることを希望するのだが。

9月14日（日）

中退者がふえる高校

いま高校生の中退者がふえている。九州全体で年間一万人近く、福岡県内では県立全日制で一、三九五人、率にして一・三%、私立では二、五〇一人、率にして三・四%、昨年比前者が六八人増、後者が一六〇人増である。学校はやめるが、大学には行きたいとして「大検コース」がふえているというから、高校の現場が子どもたちにとって面白くないのだ。親の願いで、すべり止めに受けた学校に行ったとか、大学受験本位の教育をするからついていけないとか、学校生活、学業への適格性を欠き、又は進路の不適応が目立つようだ。県下県立全日制の学校種別の中退率は農業五・六%、工業二・八%、普通科は〇・八%となっている。農業科を減らして普通科を併設するなどの対応も必要だろうが、高校教育の中味の全面的検討が必要なように思われる。昨日、八丁君らが来た時、連れの高教組の大塚君が、今稲築高校では職場に反校長ムードが頂点に達しており、教師たちはやけくそになっているといていた。校長が学校を支配しよう和我をはっているらしい。県下全域に、これに類する状況があるとさく。これでは教育のゆがみは正せないだろう。

9月15日（月）

老人調査の結果について

総務庁の老人生活意識調査結果の一部が新聞に発表された。日本、タイ、アメリカ、デンマーク、イタリアの五ヵ国比較ででているが、幸福感では日本が四九%で他国より抜群に多い（調査は六〇歳以上が対象）。子や孫と共居したいというのも日本が多い。年金に対する

依存感は日本は低いが前回調査の六五%から七七%に、日本でも急な高まりをみせている。社会参加についてはアメリカが高く、日伊が低い。週に四～五回は近隣者と話すとする人が他国では五〇%をこえるのに、日本では二八%。話すことがほとんどないとする人が日本では三二%と最高になっている。趣味は一人当たり平均日本では三・三、欧米では五だという。以上で日本の老人の様子が大概に特徴づけられているようだ。日本人は「働き蜂」で老後を迎え、趣味少く、家庭にこもり勝ちで僅かに家族団欒でまぎらわす傾向が強い。生活費も年金よりは貯金でまかなう傾向が強い。物質的に豊かだし、家族の中で満足できるといったところであろう。社会参加が少いのだが、多くなるだろう。七〇歳まで働きたいとする特徴があるというが、これも一種の趣味を補う社会参加と見るべきだろうか。

9月16日（火）

知事選をめぐる二つの動き

知事選に関連した話。県選出自民党国会議員団では、田中健蔵氏を党単独でも十九日を目途に推薦することを決めたと新聞は報道した。これは公明民社が田中氏に疑問をはさむ一連の理由に、自民でさえ一本にまとまっていないという印象をもっており、この印象を打消すため単独でもとの強気の姿勢を見せる必要があるということ。十九日というのは九大の学長選により次期学長の名が決まる区切り期であるということと、早く決めないと選挙運動の期間がないとの理由もあつてのことらしい。但し、田中氏が反応を決めるにはなお曲折があろうし、公明民社がすんなり自民に相乗りするようになるためにも曲折があろう。他方、当方の問題であるが、運動体の内部がなかなか立ち上がりにくい状況がつづいている。社会党の決議文の第七項（林県議非難条項）を出すについて県評の岩崎がその方向で役割を果たしており、これに対し、林県議がかなり根深い怨念を抱いているということが根っこにあって、県評も社会党も同党県議団もすっきり立ち上がる姿勢をとるに至らないというのである。私としては、社会党系のこの種の問題なら時間がたてば氷解するのではないかと考えている。

9月17日（水）

隣地購入について

福銀の県庁内支店、六本松支店から役員が来てくれて、隣の宅地を伊藤さんから買取る資金手当について相談に乗ってくれた。約一千万円を借る話だが、銀行としては一つのいい話であるようだ。金利は六・四%ほどといい、五年間毎月払いで月一九万五千円余という元利定額払いのシステムについてほぼ同意をえた。坪二八万円ほどにつくが、いい買物だという。彼らのいうには、土地つづきの場合は二～三割高くても買うがいいとのこと。逆算すると二三万余にあたる。不動産仲介業者も同じく、隣接地だからいい買物といっていた。五年間で一七〇万円ほどの利子になる。五年後に元利合計を坪になおすと三三万円にはな

る。ざっと以上の計算だが、買取り後は書庫その他の物置、時には不時の来客談話の場にも利用できる。費用を計算すると贅沢な生活ということになるが、あと僅かな人生時間を考えると、そのくらいの贅沢はもういいだろう。再度イギリスなどへ旅行することも考えたが、毎日にゆとりがある方がまずはいいことであろう。十月から月に約二〇万円払っていくことになるので、その点覚悟してかからねばならぬ。

9月18日(木)

十五夜を一瞬味わう

信用保証協会の永井氏が私の快気祝と近藤氏の送別会をかねて「かわさき」で一ぱいやろうということで、議会在終って九時近くにかけつけた。彼らはすでに予定どおりマージャンをやっていた。かわさきの三階の広間には縁側に、小机をおき、その上にイモ、マンジュウをのせ、それにススキの花を生けた花瓶がのって今日の十五夜に備えてあった。なかなかいい風情、心くばりには感謝の気持がわいた。だがあいにく今日は深い雲が月をさえぎり、全く見えなかった。蒸しイモはおいしくいただいた。九時半頃から私もマージャンに加わって二卓で楽しむことしばらく、引きあげようということで外に出てみると、薄雲を分けて下界に臨む十五夜の月をながめることができた。その気で見ると満月もさすがにいいものである。そわそわしてなかったら句の一つもひねってみるのにとする。ようやく午前様にならないで帰りついたら、うちの中はみんな寝ていた。今日一日議会の模様ながめで待たされ、イヤな思いで過ごしてきたのに、ほんの一瞬でも月をながめたこと、ススキを生けてしつらえた「かわさき」の心づくしにめぐまれたのは心なごむ思いができてよかった。

9月19日(金)

高橋良平氏の次期九大学長への選出をめぐる

夜工学部の森氏から電話があり、九大学長選挙で理学部の高橋良平氏が当選したことをめぐって解説ばなしがあった。経済学部の大屋祐雪氏が対抗していてこれを応援していたのに、運動の力及ばず負けたということである。大屋が田中健蔵氏に知事選への出馬は断念するよといったら、田中氏が否出るといったそうで、そのはね返りが高橋選出という結果になったようだといふ。彼によれば、田中は大屋に敵意をもち、学長及び医学部出身という力を及ぼして医学部の票を高橋に集中させたいといふのである。田中が病院長中村元臣医学部長山元寅男に影響力を及ぼし、この二人が医学部と病院の票を高橋にもっていったとのことである。ただ、今夕ニューオータニであった土屋呂武氏の藍綬褒章祝賀会の時、中村氏と話すチャンスがあったので、彼からきいたところによると、今日田中氏が自民に呼ばれて知事選出馬要請をうけるのだが、自民はドロ船ですよ、みじめな結果にならんように、又学長任期途中でそういう話が確定的になるのは見苦しいと自分が田

中氏にいったのだとのこと。森氏の話とは一寸くいちがっている。何がほんとうなのか。

9月20日（土）

鞍手町葬とキワニス集会

鞍手の前町長の町葬。雨の中、これは何人も何人も弔辞を読むという超弩級。筑豊らしいというか、体育館を囲んでしまうほど花が立ててある。十数人が弔辞を読んだらう。一般献花が終るまで二時間半、特別献花も一人ずつ行って帰って席についてから次の人が行くというやり方で一人二分はかかったらうか。葬式に出て疲れといや気を感じさせるようなもので、いなか臭さは目をおおうばかりであった。おそらく弔辞や特別献花は立候補が多くてことわりきれないいなか臭さなのだ。夜になって都ホテルでのキワニスインターナショナル日本地区年次集会に出席したが、これははじめての出会いであった。ライオンズクラブのようなものといってよいだらうか。政治色、宗教色一切抜きという奉仕団体のようだ。具体的にどういうことをしているのか知らない。九大応用力学研究所々長栖原教授が福岡地区グループのリーダーだ。We build というスローガンがかかげてあり、物より心という。私は人間、家庭、社会の再建が今問題になっているということを指摘してのあいさつを行った。趣旨は一致すると思ったからだが、きいてくれたようだ。こちらはアメリカ臭い。

9月21日（日）

知事としての日常的積極性が注文される

午後樺島君が訪ねてくることになっていて、一時からみゆきも留守のわが家で二時間ばかり話し合ったが、彼のいたかったことは、知事のイニシャティブというか、意思表示をはっきりしてくれということにつきるだらう。遠慮し勝ちであるようだが、もっとずけずけ言った方が部下も意図がよくわかって仕事がしやすいということなのだ。言われるとおろ、私は直接ひっぱっていくという型ではない。遠慮というのではなくて、ひとをアゴで使うに等しいような、それに近いようなことをできない人間なのだ。意見がないわけではないが、誰も主体性をもってそれぞれにやっているだらうと思ってしまうのである。樺島がいたいのは、自分もやる気もあるので仕事の注文をしてほしい、あればやり甲斐もあるということのようだ。森山君が誰々を知事室に呼んで話されたらいいですよとよく言うが、これもはっきり指示を出せということのようだ。そういうことなので、今日はあれこれと樺島君には仕事上の注文をつけておいた。私にはもう少し積極的な態度がある方がいいというのが一般の評のようだ。

9月22日（月）

年功序列昇進コース

人間はどこでも比較競争の心理が働いているようだ。同窓の誰がどうだの、同期の誰が今はどうだのと話がよく出る。そしてあれは早すぎとか遅れているとか、うまいことやっていると、学校時代には考えられなかったことだとかが話の種になる。とくに官界では比較しやすいせいでもあろうが、そうした意識が強い。昨日の樺島の話でも、今日の自治省次官との懇親会の場でもその種の話が出てきた。大学では比較的それが少ない。日本ではそれほど年功型社会の秩序が整然と見えるように現実にできているのであろう。この比較競争はそれ自体悪いことではなかろうが、競争から外れた者にはかんたんな諦めの気持ちを湧かせてしまうに違いない。それでやる気をなくする、となれば、それが欠点となってくる。年功昇進の線以外からでも入れる秩序なしの状況も、あるいはよいかも知れない。外国ではむしろこの方への期待の方が、可能性としては大きいようだ。日本の官界で、とくにあれはまだ次官コースにあるとか、外れたとか、誰しもわかるようだ。会社でも社長コースにいるとかいないとかが話題になるといわれる。大きな力だ。

9月23日(火)

地域おこし九州知事サミット

RKBの企画で九州村大バーゲンが行われているスポーツセンター内部にしつらえられたスタジオで、平松大分知事と私、その他は各県ごとに、現場を結ぶ形で、地域おこし九州知事サミットが行われた。三時から五時まで、二時間の長い時間放映された。各県知事はよくしゃべるとの印象があり、むしろ私は引込み思案的に見えたのではないだろうか。私の横にいた平松知事は一村一品の主唱者というふれ込みであるが、今日もよくしゃべっていた。熊本の細川氏は平松氏との折合いが悪く参加しなかったということだった。細川氏の「日本一」が引き下がった恰好である。コーディネーターの竹内宏氏は長期信用金庫の役員であり、経済評論家であるだけに、事柄全体をよく見て、うまく司会の役を果たしていた。今日の様子をみても九州は一つという実態はなかった。鹿児島からは新幹線早期実現、大分・長崎は高速道路を強調していたが、各県知事バラバラという印象をうけた。私は県境をこえ、協調していくことが何よりも必要だと思うのだが、まだ、「俺が」とシャッキリ出たがる傾向が強すぎるように思える。

9月24日(水)

出版が選挙違反になるとの騒ぎについて

知事の一般向けリポートともいべき本を出そうという話について、それは公選法違反になるという指摘を樺島氏がしたらしく、それを重々しく佐々木氏が私に報告。八丁氏にもいったらしく、彼からも問題提起があり、今日、選管の係を呼んで彼らの前でこのことをただした。よくきいてみると、影武者におびえる如く事柄を作り拡大してそういつているにすぎないことがわかった。が、なぜ彼らが連鎖反動的にこういうことを問題にし、私の

ところまでもってきて騒ぐのか私には解せない。世の中には著作出版物を選挙宣伝に利用する人はあるにはある。だからといって違法の線をこえた宣伝を私たちがするとは限らないのではないか。そうしないように注意しさえすればよい。であれば佐々木氏が神秘に私に「違法のおそれ」を報告することもないのではないか。考えてみるにどうもこの出版の仕事に面倒くささを感じているのではないかとさえ思える。出版が選挙に関係しないとはいえないだろうが、直接でなく間接であればよいのではないか。ともかく今回試みる出版が重々しく感ずるようになったことは確かだ。

9月25日（木）

芳野筑穂町長の自殺

代表質問が始まった。たしかに舌鋒は鋭く、汚職の責任追及、県勢県財政の沈滞不如意に対する無能呼ばわりは口をきわめているが、大言壮語するだけで鳴動鼠一匹ということにもっていかなければ、と腹をきめているので、今日の自民、緑政二派の質問は胸にささるものがなかった。それよりも夕刊で、筑穂町長が自殺したということ、それも町有地払下げ問題にからむ汚職容疑である。県政のあちこちにこうダーティ事件があることについてのショックは大きい。新聞には町長芳野が容疑事実を認めたと書いているが、この発表が警察からだけのものであるとすれば疑うに足ると私は思う。近藤事件にみられるように、警察は自己弁護のウソを時にいう。死人に口なしということがわかると、犯人が時々やるように警察も死人になすりつけてのウソをいう。芳野町長が果してどういうことをしたのか。それは迷に包まれ、警察は「いい子」として後世に残ってしまう。私はこういう取調べが後日情報公開制下におかれることを希望する。芳野を殺したのは警察かも知れないからだ。いずれ自民党は県議会でこのことを逆手にとって利用してくるであろう。

9月26日（金）

亀井光氏の死去

亀井さんが死んだ。今朝の〇時三分、七七歳。ガンのため三月には手術をすすめられたが、ことわり七月六日のダブル選挙では女婿太田誠一氏のため奔走したという。私が済生会に入院していた時、小川副院長は亀井氏はもうダメなんだとはきいていた。八月五日に福大病院に入院、二十日一たん退院したが二九日再入院、今日に至ったのである。巨星おつと表現していいかどうか。四期十六年の間に県政に一時期を画した人といえる。マスコミは保守王国を築いたとか、雄県福岡を築いたというが、権力主義であり、なすことが常に強引そのものであるといえよう。正義の人であるとはいえない。そのため多くの後遺症が今にして噴出している。自民党内にすら、亀裂が生じたし、県職員は抑えられて陰性化、汚職体質が定着化している。鉦害、土木、生活保護その他いたるところに汚いものが一ぱい残されている。それは彼の仕残した仕事というよりは、彼の体質の反映とみるべきである

う。職員組織との間にも給与その他様々な後遺症が残り、これらすべてが、今議会がほじくり出して私の仕事にさせられている。光の伴う影というべきだろう。

9月27日(土)

アメリカ人の知的水準は低いとの中曽根首相発言

月星化成、全国一般、たばこ産業三つの労組大会に出席してあいさつした。久留米、直方、福岡ととびまわったわけ。どことも今年はじめに知事としての出席あいさつであった。春以来、この種のものではできるだけ顔を出そうということである。三会場では共通に、労働運動ばなれしつつある近頃の若い世代のことにふれ、これが藤尾発言、中曽根発言の右翼バネと同様の傾向であるから、組合運動が改めて重視されるべきことを強調した話をあいさつの中でのべた。若い者の組合ばなれと同じく、今日の日本人は藤尾、中曽根の発言に不感症になり、外国から非難されてはじめて気付くほどに、平和問題や差別問題に無関心さを示すに至っている。藤尾の戦争・侵略肯定論で中曽根は韓国に行って陳謝し藤尾文相を罷免したばかりなのに、こんどは中曽根みずからアメリカ人の少数民族を含む全体の知的水準は低いといつてのけたのだ。アメリカの議会は今日中曽根の陳謝メッセージを一応は受けとったものの、この問題は尾を引きそうだ。その中曽根首相に田中健蔵が接見し、福岡知事選出馬応援のお墨付をえたのだから、田中も相当なものといえる。ここ数日の出来事だが、要注意なことばかり。

9月28日(日)

中曽根発言の波紋

新聞は又多くのスペースをさいて中曽根発言を論評している。傾向としては中曽根首相を責めるよりは、それを中曽根個人の発言というよりは日本人の多くの者の感覚の代表的発言だから反省すべきは国民だという論調である。なぜなら首相を選んだのは国民だからというのである。この論調には巧妙なスリカエがあって、そうでないわれわれこそ大きな迷惑である。国民全部といわないで中曽根支持者といつてほしかったのである。首相がそのような発言したのであれば首相をとりかえてもいいという人が少数であるところに問題があるのではないか。西日本新聞の社説はこのことにふれ、外交を政治家だけにまかせる時代はすぎた、国民外交こそが大切と、一見肯定できそうな論点を出しているが、国民外交で逃げうる問題ではない。厳然と政府外交があり、その責任者の発言が今回問題になっているのである。政府が国民を平素からもっと前面に出していたならば、中曽根発言の反応ももう少し違っていたかも知れない。いずれにせよ、ダブル選挙で三〇九議席をとった結果の思い上がりから出た本音であって、政治家としては末期の症状というべき事件であろう。

9月29日（月）

今日一日

県議会の一般質問が始ったが、存外に平穩に進んだ。選挙も近まったので、悪い印象を残すまいとしているとの見方があるが、そうだろうか。まだ明日も明後日もたってみないとわからないが、この三日間平穩ではある。ところが今日「県民の会」内田一郎、高木董子さんらが、県道路公社汚職に関し、うやむやに終らせることなく、百条委を設置して真相糾明すべきだとの署名（約五六万人分）をもって県議会に陳情に来たのだが、これが折角平穩な県議会に新たな波紋を投ずることにならないとはいえないと心配する向きもある。今日は九大評議会が田中学長の辞任を認め、それが明日の閣議で認められ、田中氏が選挙運動を開始するスタートの日でもある。知事候補を得た自民党が議会のどこかで跳ねだすきっかけとなるかも知れない。アメリカ領事館の二人の新領事の着任披露宴がアメリカンセンターであったので田中学長も来るだろうから握手を交わそうかと思ったのだが、七時二〇分に私が退去する時刻までには彼の顔はみえなかった。田中氏も思い切りのよい選択をしたものだ。十一月六日の任期満了まで一ヵ月余が待てないというのである。とても常識の範囲ではない。

9月30日（火）

息苦しい状況の中で九月も暮れていく

全くきりきり舞いのこの頃だ。それにやはり寝が浅くてひる間は眠い日がつづいている。年のせいだろうと思うが、忙しいせいでもあろう。議会のあいまを縫うようにして日程が入ってくるし、出版の予定のため、原稿を書く必要もあって気はあせるばかりである。二五〇枚ほど原稿は書いたが、私の書くべきものがあと一〇〇枚はあろう。議会は十月十三日までつづく。上旬に原稿を仕上げる心づもりでかかっていたが、きれいに揃うには十月一ぱいかかるに違いない。年内出版ができないと公職選挙法との関連云々という痛くない腹までさぐられる。原稿も、何でもないので、いざペンを執ると躓きと迷いが生ずる。事務屋さん達に書いてもらった参考資料はあるが、こればかりに依存することはできない。たくさんあるが、簡約しないと、とても思ったような原稿になりそうにない。心はあせるばかり。議会の悪い時に出くわしたものだ。ところで今議会はこれまでのところ平穩に進んでいる。このままではすまないだろうとは思いますが、自民党も戦意を取り戻してあげられさないとはいえない。社会党側（党、県議団、県評ら）もぜんぜんまとまりがなく、これも心配の種である。議会工作力がないのだ。

10月1日（水）

田中健蔵氏は迷いつつ出馬表明をしたという

田中健蔵氏が学長を途中で辞任することは昨日の閣議で承認され、今日三時に自民党の役

員の後見のもと次期知事選に出馬する決意表明を行った。それで県政記者たちは私に会見を求め所見をきいた。私は自然体で臨む今は出馬かどうかいえる段階ではないといっておいた。夜グランドホテルで中国革命三七周年記念パーティがあるので出席したら、田中氏も来ており握手をして若干言葉を交わした。私は思い切られましたねといったら、彼は状況上やむをえませんでしたといった。マスコミはそのシーンをカメラにおさめていた。明日の新聞にはこれらのことが報道されよう。このパーティに出る直前、時事通信の記者の話を歩きながらきいたが、一つは、田中氏が三時の決意表明の最後の瞬間まで迷っていたということ、二つは三時の場では自民党の連中をふくめ白けムードであったということだ。パーティでの田中氏本人のやむをえなかったという言葉とそれが一致する。となると、田中氏の出馬表明までに至る一連の行動は、別人がシナリオを書いて引っぱりまわしたということにもなる。永倉三郎と山崎拓の二人が確実にその名を列している。もしそうなら田中氏は意志の弱い人だということになる。単なる政治音痴にとどまらない。

10月2日(木)

百条委設置要求請願で二日間の議会「空転」

議会が今日も「空転」したので、午後は退屈な時間がつづき、椅子にかけて半分居眠りする時間が少なかった。百条委設置の請願をどう扱うかが決まらなかったからだが、イエス、ノーのどちらにも行けない苦悩のあらわれである。六月の臨時議会で一度は否決した経過がある。それを設置するための臨時議会招集であったのに、県警の強い裏工作もあったときくが、設置することなく近藤副知事解任要求決議にすりかえられたのであった。こんどは五六万人の署名による住民請願であるが、今回も裏で県警が設置してくれるなど強く要望しているらしい。捜査継続中と議会答弁しているので、百条委が設置されると県警が苦境に立つ筋になっている。事件の真相なんて「ない」のにやっていることがバレるから困るのだ。自民党もそれは困ると考えている。明日は請願不採決という結論が出そうだが、そうなると請願主体「県民の会」への反響は大きなものがあるだろう。自民党は、この請願は選挙運動と理解しているが、その理解はともかく、住民請願の形をとった五六万人署名を却下することになる。その反響やいかに、ということでこの問題が二日間議会を「空転」させたのだが、反響がどうあれ、当面はノーというしかないようだ。

10月3日(金)

深夜の本会議で百条委設置の請願否決

議会とハワイ州知事一行との交流行事がどううまくさばけるかと心配していたが、まずは今日一日を順当に乗り切ることができた。議会での州知事のスピーチもうまくいったし、グランドホテルでの友好交流レセプションも県主催で多数の客を一般からも集めてうまくいった。県議たちも多数参加していた。議員たちは飲酒禁止令がでていたといっ

セッションが終る八時半頃には再び県庁に帰り、本日十二時まで時間延長が行われていたので議会の動きは旧にもどった。私もレセプション後は帰庁して待機した。十一時二十分すぎて本会議が始まり、一〇〇条委設置請願が委員会に付託することなく直接本会議で採択という流れになった。本会議では社公共が賛成したが他が坐ったままだったので少数で採択せずとの結論になった。県民の会の幹部は傍聴席にいたが、直ちに記者会見し、五六万署名の否決に対し抗議する声明を發した。この抗議が今後にかされるかどうか、無視されればなしになるかどうかは、県民の会の運動いかんによるだろう。

10月4日（土）

黒木町の「かんめなし」会

今夕黒木町の「かんめなし」会の青年たちを主体として、地域おこしシンポジウムがあった。広報室の「ふるさと対話」事業の一つで、グリーンピア八女（年金保養基地）の七月オープンを契機として、これとの連動で黒木町の発展をどう進めるかというのがこのシンポジウムの目的であった。会場の体育館には七時頃四〇〇人の町民がつめかけ、シンポジウムを熱心にきき入った。「かんめなし」というのは方言で、「おかまいなし」「無礼講」というような意味らしい。黒木という町は八女郡でも豊かなところで、一般論としては気力がもう一つ足りないように思えるが、「かんめなし」会のように、若い農業者たちが立ち上がろうとしている。私は地域づくり百選を編集したいとの意欲をこの頃職員に伝えているのだが、亀井時代と違い、この数年は各地にこうした自立欲に燃えたグループ運動が県下でもあちこちに出来ている。こうした運動が地域を、産業、文化、環境の面で立派にしつつある。青少年問題、老人問題などがそうした中で解決の途を見出しつつあることは新しい傾向として注目することができる。

10月5日（日）

グリーンピア八女に行く

グリーンピア八女にはじめて泊った。七月半ばにオープンして以来、めずらしいから一度でも行ってみようという人もあってか、来客は思いの外多いようだ。先日指宿のに行ったが、これとくらべるとケバケバしさがなく、むしろ落付いてはいる。まだあれもこれもと予算がほしいようだ。この頃のことだから堅実にやってもらわないと困るので、予算のこともさることながら、ひとをひきつけるアイデアがいいかがむしろ問題だろう。地元との共存という点にも注意をしてほしい。アイデアの点では野外施設、子供の遊び場が足りないようだ。地元との関係では黒木町長が気をつかってあれこれ考えてくれているようだが、イベントの連動がほしい。昨日訴えられたのは、黒木町へのアクセス道路が悪いようだ。これは徐々に解決していくほかはない。オープン後十万人の利用者があるという。泊り客がもう少し多いといいのにといていた。まだ若いので、将来の楽しみと不

安が錯綜している。指宿とくらべて規模も小さいので、経営は小まわりがきいてかえってよかろう。

10月6日（月）

再び、筑豊の精神的風土について

朝十時半すぎ帰宅してみると、記者がかけまわっている。間もなく大任町長が殺されたということだ。あとできくと町長崎野正規氏は町長室に入り込んだ右翼日本皇民党奥田英年なるものにピストル弾五発を乱射され、胸を撃たれ、病院にかつぎ込んだが絶命したという。奥田は前から甥が町設置のゴミ箱のフタに手を詰めて怪我したのを理由に町に賠償を要求していたという。町はフタにゴムをはったりしたが、賠償には応じなかったのであろう。これ以上こまかいことはわからないが、このような因縁づけで、役所あたりからカネをゆするといのが筑豊では少なくないようだ。応ずる方も応ずる方だが、要求する方にむしろ問題がある。暴力をもってこれに臨むという事、私はこれを「精神的風土」といって筑豊の青年会議所の諸君から非難されたことがある。少数の住民にしろ、他の地域よりもこうした空気が強いことは確かだ。賠償を要求するひまがあるし、アブクガネのようなものについて聡くよく反応する。しかも手段をえらばない。田中六助は大政治家というがこういうアブクガネを用意したのではなかったか。

10月7日（火）

殺された崎野町長宅に弔問に行つて

昨日町長室で射殺された崎野大任町長の弔問に行った。筑豊一帯は鉱害復旧で豪邸が多いことはほぼ承知していたが、この町長宅は、はじめて見てびっくり。まるで小型のお城である。これが鉱害復旧かどうかは知らないが、邸内に池をめぐらし、門の楼閣構えなど、亀井氏が営造した知事公舎（白銀御殿）どころのさわぎではない。その二～三倍はしているだろう。崎野氏がどういう経歴の人かは知らないが、一寸異様である。県会議員のうちはどれも豪華だと思ったが、とてもその比ではない。筑豊の石炭後遺症が云々されるが、その面影はこうしたところには見られない。表の部分と蔭の部分にはかくも懸隔が大きいものなのかと驚くほかはない。生活保護、失対、同和部落、この問題解決なくして筑豊問題の解決はない、と今日も滝井田川市長が文化会館で開かれた県下市長会の席上、地元市長として演説していたが、車で筑豊を駆け抜ける限り、豪邸に次ぐ豪邸で一片の歎きの種もない。失業者、生活保護者はどこにどうしているのか、それがなぜこうした豪邸と共存するのか、するはずなのか、どうもよくわからない。筑豊は物も自然も住む人の心も全部洗い直される必要があるようだ。

10月8日（水）

アブクガネに蝟集する暴力

白昼にピストルもって町長室に入り、問答無用で、胸に銃口をつけて乱射して殺人という大任町の事件。ふつうの常識では考えられない。第一、殺して何かが解決するかで、本人の気が狂っているとしか考えようがない。この凶器を入手する努力には並々ならぬものがあるが筑豊では脅すために入手する動機があったことは推察できる。が実弾が数発こめであったのだから、町長室に行く時は脅しではなく殺意があったのだろう。殺された町長は四二歳、殺した奥田は三七歳という。われわれより一世代若い。戦後育ちではある。筑豊にはアブク金があればこれ多いのでその分取合いをするのに暴力がだんだん常習のようになってきていて、今回の事件もその一つの表われであることに間違いない。暴力追放にいろいろ工夫が必要だが、そしてそれは講じなくてはならないが、アブク金をなくすることも大事なことだと思う。筑豊には過剰な土建業者が多く、犯人奥田もそのうちにいるようだ。鉦害復旧という名の中央からのアブクガネが彼等の活動源になっている。

10月9日（木）

社会党勢力内のもつれも解けたようだ

助信県議が知事室に来て、もとのサヤにおさまったからとあいさつ。彼は県道路公社汚職問題にからみ、社会党県本部が声明書の中で林県議を名ざして非難したことを機に社会党を脱党すると届書まで出し、県議団の中での役職も一切果たさないと開き直っていたのだが、その後約三ヵ月、近々党内で手打式がおこなわれ、声明書撤回のこともあったので、^{ツマ}気嫌を取り直したというところである。同じことは林県議にもいえる。近頃、これまで通り党内活動をするようになったといっていた。問題は議会工作など与党の者として活動するのに費用がいる。その費用は「政治献金」から出ているケースが多い。そういう献金を受取るのは不可と声明書がいったから、二人は、では何もしないでよいならそれでいこうと開き直ったわけ。彼らの言い分には、県評あたりが費用の準備をしてそういうならわかるが、それを全くしないで、非難する側の先鋒にたっているじゃないかというにある。つのつき合いの相手は県評であり岩崎事務局長であり、声明書を出した責任者社会党書記長竹村にある。いずれにせよ、一昨、昨日あたりの会合でこうしたもつれが解けたようだ。

10月10日（金）

国労の事実上の分裂

テレビを見ていると今日はどことも運動会その他スポーツでにぎわっているみたいだ。われわれにはそれだけの条件がなくなっていて、体育はひとごとになっている。高齢化問題の原稿を書いたが、他人ごとではない。同じくテレビは国労の臨時大会で国労が事実上分裂したと報じた。分割民営化路線に妥協して組織を建て直そうとした執行部の方針案が否

決され、新執行部が選出されたが、地方では妥協案路線で進もうというところが多いということだ。新執行部の分割反対路線は筋を通してはいるがはたして組織維持という現実問題に当面して妥当かどうか分からない。いずれにせよ、国鉄の分割民営政策はまず組合をずたずたに分割していつている。さきに動労は国労と袂を分けて新国労に寄り国労の闘争力は半減したし、国労の脱退者はどんどんふえて最近では五〇%を割るに至った。そして、ここに来て国労の事実上の分裂である。わが国でも有力左派組合であった国労が歴史から姿を消すことになる。われわれが従来やってきた社会主義協会、社会問題研究所の運動にも大きな打撃となること間違いない。

10月11日(土)

次回知事選の動向を探る

夜、衣笠、岩崎、高崎、安達、八丁の諸氏が来宅して次期知事選につき話合った。労働組合は依然選挙戦の主力であることには間違いないが、その時代は過ぎ去りつつある。他方、社会党、共産党という側からみてもいつもの参議院地方区でおよそつかめるように八〇万票ほどしかない。自民党はこれに対して九〇万から一〇〇万票の集票力がある。ならばあとその上に中間票浮動票をどれほど上積みすることができるかで勝負がきまってくる。前回の知事選は豪華知事公舎批判と自民の内紛で自民側の集票力が及ばなかった。今回は依然自民の内紛は残っているものの、知事公舎のような心情に訴える要素はない。労働組合や社会党のアピール力は漸減しているから見なければならぬので、どこにアピールの原点を求めるかが、次回のポイントとなる。ETと称した似顔絵、こんどは変えてみませんかというアピール語が前回には非常によくうけたようだが、次回もそうした点での工夫が是非必要であろう。社共や労働組合の路線論争風のもの選挙というイベントにおいては大衆をひきつけるに及ぶものではないことに注意したい。

10月12日(日)

屑の山の中にいる

書斎の机を南側窓よりから西側窓よりに移した。背後にかなりスペースができた。本はかなり隣の家に移した。片付いたわけではないが、少しは形がよくなった。戦後四〇年、少くとも三〇年間買い集めた本、中には梱包をそのままにしているものもある。開いてみたこともない本がたくさんある。何千冊あるのか知らない。読みもしないもの、役に立ちそうにないもの、捨てたらスペースが広がって助かるに違いないものが相当にある。その他、新聞雑誌類もずい分とある。紙屑に等しいものがたくさんある。でも今はそれを判別する暇も気分もない。とにかく今は何でも保存するしかない。恐らく自分が死んでしまったら、すっかり別の価値基準で処分されるに違いないのに、今はそれらガラクタを混えた「物」が私の身近にあってかなりのスペースを占領している。身についたホコリ、アカ、という

しかないものかも知れない。自分には深い思い出があっても時代の変遷がその価値をなきものにしてしまっている例もある。あれもこれもなつかしいし惜しいが、あれもこれも無価値になっていて捨てたいのに捨てられない。何と表現していいかわからない。今自分はそんな屑の山の中にいる。

10月13日（月）

進藤市長の引退は確定的のようだ。良識の勝利といえる。

進藤市長の体の具合はかなり悪いらしく東京まで行っての長期治療でも経過はよくないらしい。腰がどうなっているのか悪いらしく歩行に全く無理があるようだ。本人はやめたいといっているのに、永倉三郎が四月の知事選まで事態を引きのばしたくて、やめないように踏んばっている。一般市民は無茶なことをさせるなというのだが永倉にはそれがわからない。市長代理（代行）でも置いて四月まで頑張れというのが永倉のいい分。知事選と重ね合わせて知事選を有利にもっていきたいとの一念からそういっている。吉本も永倉の尻馬に乗っている。九経連会長、福岡商工会議所会頭の二頭立てで進藤氏を引きずりまわそうとしているわけだ。しかし昨日あたり市長は、はっきりできるだけ早く引退したい旨与党各派に了解をとりつけたらしい。十一月辞任十二月選挙という線がほぼ確定的になりそうだ。そうすると、永倉の面子もないわけだが、そういうことが気になる永倉ではない。われわれからみても市長は早く後継者を作ってあげて楽にしてあげたい。市民感情はここにある。永倉は、政治的事情と称してこの感情を無視する主張を永くつづけていたのである。

10月14日（火）

今議会の焦点

今議会は知事不信任案とか責任追及という自民党側の課題をもつ議会であったが、中島県議がそのことにふれただけで、こちらがかわして、それであとがつづかなかった。六月議会で私が入院欠席していなかったらどう展開したかわからぬ県道路公社汚職問題なのであった。今議会では再発防止にどう対応するか知事の決意を問うという程度だった。そのかわり百条委設置で事情究明という五六万の署名は野党多数で否決したのだが、それに至るさまざまな裏交渉が二日間「空転」を生んだ。結局議会独自の百十条委設置ということで、経費四〇〇万円をまる取りされることでこの問題はけりがつきそうだ。自民党側にもスネに傷をもつような議員がいたので、警察の捜査をとことん洗い直すようなことはできなかったのである。私は警察の捜査の仕方そのものを洗い直してみることが必要ではないかと思う。それに今回の議会では昇短の運用（三短）の問題があばかれた。亀井時代の職組との裏取引が十年間もつづいて、今、違法だとい出し、例の長谷川喜博氏が行政訴訟をおこすといきまいて、これには県側も江口議員と話し合い一歩さがって一応パス。

10月15日(水)

「九月議会」やっと終る

県議会が「空転」している間を利用し、又今日午後のあき時間を利用して八丁君の書いた原稿「三年半をふりかえって」の部分を書き直した。その意味では眠らぬままに夜が明けた。六時頃議会が終って十時すぎまで知事休憩室で仮眠したが安定剤をのめなかったためか眠ってはいなかった。議員も徹夜すると一万数千円の手当がつくせいかそれをしたがるが、それならさもしい限りだ。待機している県職員、バタバタ働いている議会事務局の職員は、これも手当がどれほど出るか知らないが、こちらは利益というよりは「しんどい」話だ。議員諸公はどうして手順よく事が運ぶようにしないのだろうか。別にもつれなければならぬ議案内容ではない。しかし総じて議長が全くつまらん篠田栄太郎、これはまとめ役というよりは一方的な旗をふってかきまわし役のような男である。まあ、誰が議長になっても今の自民党は党あって党なきが如きもので一人一党同然。これが多数派なんだから始末が悪い。待たされ眠れもせず疲れるだけ。それが向うの作戦かも知れないと思いたくなる。でも案どおり可決されたのだから一面有難い。

10月16日(木)

選挙への風がだんだん感じられるようになってきた

自治労県職結成四〇周年記念式のあとの祝賀会に出席した。三時半から国際ホールで行われた。三池労組と同じほど古い。一〇年が保守、二〇年が革新、三〇年が保守、四〇年が革新という知事時代だったということであった。私には次期出馬はいわなくてもいいが、自分たちが要請していくということで席でもその空気が一ぱいであった。昨日曙の九月議会終了後だったが、一日あけると、にわかには選挙づいて来たように感じられる。今後の諸日程も多くはその線で組まれるようだ。それだけに毎日毎日が多忙をきわめる。今日は八丁、安達の二人をパーソナルホテルに招いて中食しつつ、次期出版への最終打合わせを行い、今日出版社「ぎょうせい」に原稿を渡すことになった。十二月二十五日頃までに出来上るとの約束である。まだ写真が十分でそろっていないようだ。私の書く原稿も三千字ばかり残っている。が骨格は出揃ったわけ。今後は原稿の心配なしに動けると思うとやれやれだ。昨日はかなり眠ったはずなのに、今日まで徹夜の影響が残っていて、体の調子はあまりよくない。進藤市長に中牟田さんタイ国王章受章祝賀会の時に久しぶりに会ったのだが、腰の痛みのほかは全く元気だった。

10月17日(金)

自公民での田中健蔵氏推薦確実となる

公明党県本部は今日、知事選で田中健蔵氏を推すことを決め、政策を合意されれば推薦となる模様。民社党もほぼこの線でいくというから、自、公、民一本化ができたわけ。知事

選はかなり全貌が明らかになって浮き上がってきたといえる。他方、社共についてであるが、近々政策協定を結ぶという。もちろん、部落問題について両者が折れ合うはずはないが、この点がぼかされるだろう。共産党はこの協定を金屏風にしようとするし、社会党はこの協定を表に出してくれるなどの声。これがうまくいくかどうか微妙。昨日、自治労県職四〇周年記念祝賀会の際、私は高、塩塚両県議に、県民党の立場を出すためには、社共協定を表に出さぬ方がいいということを堀井委員長に伝えておいてくれるようたのんでおいたのだが、堀井氏からどう返事がくるかである。県評の岩崎氏は実質的に協定ができないと選挙資金の捻出が困難になるとはいつていたが、表面に出すなということについては賛成していた。今日、海王で学文の会があり、私が県政報告をしたあと懇談になったが、席上、法学部の徳本氏は、田中健蔵はこわいですよ、といつていた。財界が一致するからと理由をあげていた。

10月18日（土）

古いもの、田舎ものへの回帰はよいのだが、今の人の気に入るかどうか

太宰府天満宮で三年目の「ふるさとフェア」が二日間の予定で開かれた。「県産品の愛用」とか「地域おこし」が近頃の合言葉になっているので、商工会連合会としてもいいことをやってくれ、出品者には元気がでてくると思うのだが。心配なのは、その場限りで終りはせぬかということである。ふるさとの味という趣向も悪くないが、どうも近代の感覚に合わず長もちしないのではないかということだ。天満宮に来る人を利用してのイベントなので、それなりの客もあるだろうが、やはり問題は日常性継続性である。それともう一つ今日は伊都の里、福岡歴史の町を訪ねることができた。メキシコ古代文明展がオープンし、エジプト大使その他関係者が多く来てくれた。福岡歴史の町を見学したが、昔の農家、商家が復元されているし、文彫、楽焼、和傘、博多人形、博多独楽、津屋崎人形、久留米絣等々、見せていただくのはよいが、日常的にどれだけ客が寄るだろうか。コストを回収することができるだろうか。関係者に挫折感があらわれはしないだろうか心配である。行政の方でこれに関連する文化的施設を近くに作るなり、特別のイベントを企画するなりしてあげたいものだと思った。

10月19日（日）

書斎の整理が進む

快晴で風強く秋深まるの感じだが、今日の大濠公園湖畔には人出が多かった。みんな秋を楽しんでいる。今日のような日に子供連れで大濠を散歩するなど、いい発想だと思う。湖畔から見る舞鶴城多聞櫓は格別にいいが、その他の緑も柳はもちろん何もかもいい。市美術館は仙厓展をやっている。隣の日本庭園も今日の利用客は多いようだ。急に長袖シャツ、チョッキ、それにうちの中で坐ってもコタツが必要な時節になって来た。鈴虫もほとんど

鳴き止んだ。ほんの少ししか生き残っていないらしい。書齋を少し広く使うために雑誌類や全集ものをどんどん隣に運び去るが、なかなか整理がつかない。全集物で若干は端数不揃いがみられるが、運んでいるうちにバラバラになって他の書群に迷い込んでいるものも少くないようだ。それにしてもこうした書類は今後どうすればよいのであろうか。途方に暮れてしまう。端本になると価値が減ってしまうし、又、今時古書でもあるまいという時代でもある。苦勞して移しかえたり整理しなおすに値するかどうか迷う。とくに雑誌類には場所をとるだけだから捨てた方がいいものが多いだろう。時代がかわったというしかない。

10月20日(月)

地方課の町村への強権的介入指導

自治労県本の主催で町村(職労)行財政懇談会が夕方からグランドホテルで開かれ町村のかかえる問題が郡単位代表から縷々のべられた。が中でも「革新」というイメージを農村部でどう変えていくかに苦勞している様子がうかがえた。又県の地方課が上から強権的に指導し、議会がこれに悪乗りしてせつかくの労使協定すらくつがえされるケースが多いことに不満が出された。これは先日の、同じ自治労県本の都市協の時と全く同じ苦情であった。革新知事ならその配下の地方課を何とか物わかりのよいように指導してくれというのである。自治労系の集会のあるたびに同種の話題がでてくるのだが、正直いって私は未だ地方課長らと話し合ったことがない。賃金が高めに決まること等について地方課が介入しているらしい。県本の方では、知事が革新というので、とくに福岡県で介入がひどいのではないかと説明していた。又町から給与持ちで県への出向があるが、これも「奉公」の強要だからやめてほしいという。実際にきいてみないとわからないが、知事がこれをやめさせるものかどうか。地方自治をさかさまにしたような事態には私も同意しかねるのだが、かえる力があるかどうか。

10月21日(火)

九州国立博物館建設の見とおしについて

上京して事あるたびに九州に博物館を国立でという陳情をする。今日も文部次官(高石)にその話をもち出した。前文化庁長官の三浦朱門さんは積極的に動いてくれたようだが、高石氏はやや冷やかだった。近頃は文部省の考えもやや前向きになったようだが、やり方を第三セクター方式でという発言に改まってきた。三浦長官の末期にもそういう言葉がでてきた。今日の高石発言では、九州らしい特徴をもって、大陸との関係、大陸文化そのものを積極的に打ち出したらどうかという。少しは光明がでてきたように思える。一千万円の調査費が毎年取ってあるようで、今年は第三セクター方式なるものの内容を考えるカネとして使いたいとの意向もあるやにうかがえる。六年も前から福岡財界、西日本新聞がカネをもち寄り知恵も出し合って「ミュージアム九州」(誌)を発行しながら国博運動をつづ

けているのだが、少しは光明がさして来てうれしいことだ。さて、これから案を考えると、カネをどこからひねり出すかは大変だろう。三〇〇億円ぐらいは用意せねばならないのではないか。県においても教育委員会文化課だけにまかせずに、企画部門で積極的に対応すべきであろう。

10月22日（水）

ブラザー工業と美術館

名古屋国際ホールでの立地推進委員会のあと、向川原常務の案内でブラザー工業の見学ということになった。ミシン製作所なんだが、今日ではミシンは出荷額の二六%でしかないとのこと。タイプライターなど事務機の製作に主力がうつっている。両工場を見学したが、ロボットが導入され、人影がまばら。ミシンにもICが組込まれわれわれ古い頭の持主では別世界に来たように感じられた。先端技術がふんだんに応用されているのだ。お土産として住所索引印刷のできるワープロ（製品）一式をいただいた。ミシンが、かんたんな絵や文字まで縫うようになっている。しかもそれが家庭用ということだが、ここまで機械化して、果たして家庭用といえるかどうか疑問がわく。というのは、そのようなことは家庭に必要ではないのではないかと思うからだ。もちろん電動式なのである。人間はどこまで機械に追まられるのだろうか。そういうものにカネを使ってとびつく傾向はおそろしいようにすら思う。これに対し、次に市立博物館に比叡山と天台の美術を見に行ったが、七世紀からはじまる仏教文化（仏像、仏画、山伏らの法具）をみて、これまた人間の作ったものであると考えると、ミシンとくらべ距りが大きすぎ、世界の違いに妙な感じに打たれた午後であった。

10月23日（木）

長洲神奈川県知事

大塚副知事と二人で来福した長洲神奈川県知事を三光園に招いて夕食懇談した。ごちそうはフグ刺しで上等で福岡の味を賞味してもらえたと思う。人口七五〇万人に及ぶ日本一の県知事だし、知事が他県に出張するようなケースはまれである。知事会というような公式の場合とはともかく、他の用件で他県を訪問するようなことはめったにない。私も知事になって直後神奈川に行ったことがあり、又同じく学者出身ということで島根の恒松知事を水害見舞で行ったことがある。それだけである。多忙だからそれだけでもよく時間がとれたと思う。長洲知事の場合、よく時間がとれましたねというと、西日本新聞がどうしてもとってきかないので無理をしたという。彼は酒に強く、スポーツは柔道、テニスをはじめあれもこれもこなすという万能、器用な人である。私より一つ年配で六十七歳。五十五歳の時に知事になり三期目の終りかたである。神田の生れ、江戸っ子という。商業学校、横浜高商、一ツ橋というかわった学歴の持ち主。母校の今の横浜国大で経済学教授をして

いて知事に担がれた偉才の一人である。

10月24日(金)

林県議を励ます社会党福岡支部の会合

もうこの頃は選挙戦同様の多忙さで夜はほとんど休む時間が少なくなってしまうし、休日もない。可能な限りで公用と織りませた日程が組まれている。健康が第一といわれる通り、スケジュールはハードである。今日の夜の最後は社会党の福岡支部での林県議を励ます会(東急ホテル)であった。県道路公社事件以来、林、助信両県議が動かなくなっていたが、あれこれのご気嫌なおしを経て、今日はいよいよ最終的な手打ち、部内の潔白あかしの会でもあった。誰が誰やらよくわからないが、市議候補も出席していたし、西鉄労組員や東区の応援者もたくさん来ていた。又この会は奥田知事の再選を支える林県議を励ます会という名で開かれていたこともあって、私への声援も強く感じられた。民社党も田中候補を支持することを決めたというので近頃はマスコミも田中候補に関する報道が多いので、奥田側も何かニュースになるようなことをやらないかとマスコミが期待しているらしいが、私は急ぐことは全くないと思っている。今日見た「財界九州」は表紙に田中の顔を大写しにのせている。が、わが方でささやかれている限りでは、そうおそるに足らんとこの空気が強い。社会党が固まってくれるのが先決で、今日何とか形がついたといえる。

10月25日(土)

九州知事サミット

西日本フォーラムの第二日目。九州知事サミットと称して「九州は一つ」の思いをこめて七県知事が三〇〇人の聴衆を前に各々意見発表する会であった。司会は西日本新聞の滝口凡夫氏、西日本新聞社の力で全知事を福岡に集めえたのは新聞社にとって成功といえた。ただ、どこまで「九州は一つ」の実が伴う意見が出たかは疑問というほかはない。新聞社も意識的に、知事も意識的に、我田引水をする、させるの会になるから、例によって鹿児島、熊本、大分の知事がシャシャリ出るにすぎなかったと私は思う。吹聴という言葉どおり、吹く者勝ちみたいになってしまうし、新聞社もそれを派出に記事にする。こうした県に新聞を売り込むために、努力する。最後は共同声明の発表にはなるが、その実効は疑わしい。「九州は一つ」というが知事たちの頭の中は決して一つではないし、競争と協調というが、具体的な協調意見は交通と観光ぐらいで他はない。九州全体の地盤がここまで沈下してきたというのに、どれほどか一致団結してやろうという気にはなっていない。福岡県が雄県としてリーダーシップを發揮せよとの意見は聞くがとてもできる雰囲気ではない。熊本の細川知事がいうように、当面は競争にあけくれた方がいいのではないだろうか。

10月26日（日）

天皇在位六〇年祝賀式

今日一時から国際センターで天皇在位六〇年祝賀式典があったが、昨日の九州知事サミットと共に、九月議会後の山場がこえたということになるだろうか。今日の式典には七～八千人の集りで、主催者側としては一応形がとれたといえよう。この式典には右翼の車が周辺を例のマイク車で遊弋し、それだけに左翼の方も反対して県に対して中止の要請があったりしていた。私にいわせると、ヤレという方もいう方。反対をいう方もいう方で、どういふこともないではないかということだ。ヤレという方に県議会の多数が乗っかかってきたからやるようになっただけで、賛成、反対入りまじっている中でやってみたところで、それほどめでたい訳ではない。反対があるからやらせるんだという程のものである。多数で押しきってやらせるところに今日の世相の危険性がある。天皇や国王のない国も世界にはたくさんある。又六〇年の在位は最高記録というが、いつまでもやらせるのか、気の毒だとは思わんかという意見もある。四〇年余前の戦争についても天皇との関係で批判と反批判とが半ばしている。今日のはそういうことを超えて単純に六〇年という長期の節目まで来たことへの祝賀でしかない。それ以上でもなく以下でもないのに、以上か以下かどちらかに寄せた評価を他人におしつけようとするところに問題があるといいたい。

10月27日（月）

芳賀幸四郎「一行物」

芳賀幸四郎の、禅語の茶掛一行物、は七月の入院中に秘書室の藤本さんがもって来てくれて読んだのであるが、先日小倉の淡交会で千宗室さんにこの本を読んだことを告げたら、それには続があり、続の続もあるということであった。続のことは藤本さんから見せてもらって知っていたが、その次もあるとは驚きであった。この本を一寸読んで、芳賀さんがどういう人であるかはよく知らないが、この方面で大へんくわしい人であることだけは判るし、物事は一つに限って掘り下げても無限に汲みつくせぬものだということもわかった。禅問答という言葉がある。わかったようでわからないのがこの言葉だが、「一行物」を読むと、禅問答そのものであると思うのである。一という文字一つでも、万物の出発であり帰着であるという。すべてでもあるという。わかった人にしかわからない。ある意味ではそれぞれ勝手に解釈してよいが、どこかで不思議にも共通性があることは確かである。弁証法とは別の世界であるが、又それと共通をもっている。この「一行物」はいつも机辺においていて、時間があれば一寸だけでも読みかえしてみたいと思っている。

10月28日（火）

解放同盟の問題で社共がガタガタ

当方の知事選体制の中で社共間に、かなりぎくしゃくが入っているようだ。今日だったか、

松本英一氏の息子龍氏の結婚式があったのに、知事に案内状が来てないといいつつ秘書の方で適当な対応をしていた。解放同盟と社会党が急にうまくいなくなっているともきく。それは社会党が共産党と知事選で提携しようとする事に対する同盟側からの反撥らしいのである。同盟の共産党に対する反撥は大へんなものだ。県評にとっては社共が反撥し合うなら知事選に動きがとれなくなるといわれる。県評内に社共が同居しているからである。田中健蔵陣営はすでにそれなりに動き出しているのに、当方は又もこういうことで足をひっぱり合って動きかねているといわれる。要は解放問題がもつれの目である。社共があまり早く動き出すと私の方では現職との兼ね合いで一寸困ると思っていたのだが、別の要因でかえって動きがとれなくなっているようだ。そしてかえって私に仲をもってくれないかなどとさえいう向きがでてきている。解放問題ぐらいでと思っはならないようだ。それほどこの問題は影響力は大きい。市議(長)選など福岡では社共ははっきり袂を分っている。共産党も共産党で、この問題になると妥協しようとしな

10月29日(水)

苅田の女たちの集り

昨日今日のスケジュールはまるで知事選に入ったのと同然であった。元来が苅田で自治労県本部定期大会にあいさつに出る目的で行ったのに尾鰭がついて、この地のいろんな団体に集ってもらって顔を出すことになった。まず昨日の夜は苅田町女たちの会という集会、何も革新系というわけではない。創価学会の人など平凡なふつうの女たちの集りというが、実際は自治労のメンバーが核になっているように思えた。この人達のいうには、田中健蔵氏について、あれは何ですか、同じ九大から立つなんて、まともな人間のすることではない、奥田知事ががんばってくれというようないい方である。この人達が今の沖町長当選の一つの原動力になったというのであるが、町長選の時にできて三〇〇人の集りにふくれ上がったといわれている。近頃は以前とは逆に、選挙となると女が強く主導権をもつように思える。女にさからうなら当選の見込みがなくなるともいわれている。今日は自治労県本大会、ここでも私のあいさつあと、当地の女性代議員が立って、私に再選出馬を要請する演説をぶった。新聞記者も来ているのに、何と答えていいか困るのだが、かなり前向きに答え、要請を受けて立つような発言をせざるをえなくなっていた。

10月30日(木)

県下金属工業の下請的性格はまことに根強い

総評全国金属系の経営者七人が一条に集って意見をのべ合い、夕食を共にした知事との懇談が今夕開かれた。五時から八時頃までゆっくり時間をとって行われた。北九州、直方、福岡の人達であったが、一様に円高不振を訴えるのが特徴であった。中には知事に仕事ももらってきくとさえいう人もいた。私の方からは中小企業の下請体質からの脱皮、独

立への意気込みを訴えたのであったが、その空気は希薄にみえた。又私は中国など大陸への市場さがしをも訴えたが、その見込みもあるようにはみえなかった。過去も今も親会社への納品ひとすじで将来もそれが一番安全という気持が強かった。私はいささか気負って彼らを勇気づけたらと思ってこの会に出席したのであるが、期待外れというほかなかった。注文をうけて納品する立場で、自から完成品を作って売り出そうというタイプの人一人だけしかなかった。福岡県の金属工業がこういうふうだから不況に弱く今日県経済の落込みがひどいのである。こうした体質からの脱皮が当面の重要課題だと思うのに、そうはいかない。しかしこれを見捨てることなく辛抱強く自立を訴えなければならぬと思う。

10月31日（金）

陳情要望がつづく

県への要望というのがどこからも止めもなくつづく。庁内でも陳情、庁外に出ても要望書という形で、毎日が陳情漬けといってよい。苅田に行った時は県道の拡幅工事進捗を強く訴えられたが、地元での用地買収がなかなか進まないのだ。今日は大牟田市のコミュニティーマート建設の補助金、子供劇場運動への補助金、遠賀老人クラブからは遠賀病院の老人専門科の設置、ひびき荘での女の集いでは学級減への対応等々というように、延々とつづく県民の要望である。無理なものがあるが当然なものもある。すぐできそうなものあればとてもダメなものもある。県に要望するのではなく自分たちで解決してくれといたいものもある。総じて依存主義的なことが多い。昨日の中小製造業主の場合もそうだが、自分で境地を開拓しようとする気概が稀薄である。尤も知事に会って話そうという時にそうなるのであって、平素は自分で処理せざるをえないからやっているというのだろうと思う。地域をまわっていると、こうした依存主義とはまるで逆の自立主義に出くわして私の方から感動することもしばしばある。知事としてはできるだけ自立主義をすすめていかないといけないと心にきめている。

十一月要記

しばらく元気がないといわれるほどに七月入院の影響は残っていたが、近頃はとくに自覚上問題になるような身体上の故障はないし、人目にも元気になったといわれるようになっている。今月から満六六歳だ。それだけに、やはり「年」を感じずることは確かで、避け難いことなのだ。相かわらず多忙な毎日で、とくべつ健康法はとっていないし、とれもしない。一時やろうとしていたゴルフも、四月上旬の道路公社汚職のことがあって、春になったら出てみようと思っていた矢先に、霧囲気の上でグリーンに出られなくなったし、七月入院のこともあって、ゴルフはすでに久しく遠ざかっている。他方選挙のことも何となく気になってきて、周囲の情勢からいっても、その段ではなくなっている。健康気になる一点は安定剤を毎日のんでしか眠れないことだ。医師からもらったものを半錠にしている

が、やっぱりこれが便りになっている。第二点は毎夜のごとく途中で小便に起きることだ。年なんだろう。これら総じて毎日が睡眠不足気味に感ずる。一時、大そう気になっていた両指関節の痛みは今はそれほどにはなくなっている。右の小指と左の中指がひどく、おさえると痛みは残っているが平素は気にならない。七月入院後しばらく白毛染めはしてなかったが、県民の会はじめ、周辺が強く要望するので、再び染めることにした。少しでも若く見える必要があるというのだ。どうでもいいのにとするもの、ひとの言うことはきかねばなるまい。

11月1日（土）

護憲大会に出て思う（憲法四〇年目を迎えて）

久山町に日本山妙法寺の仏舎利塔が完成し、明日落成式があるという。今日はその前夜祭というレセプションが都ホテルで開かれた。アジア諸国の大使夫妻が七カ国から来訪出席された。私は木梨さんの紹介でこの仏舎利塔の建設途次現地に見に行ったことがある。五年も前のことだったろう。新井前勇師とその時に会った記憶があるし、この派では藤井日達上人が有名で、私も一しょに平和行進したことがある。ポンポンうちわ太鼓をたたいて、護憲平和の運動の先頭に立つ人であった。三日は戦後日本国憲法制定四〇周年にあたる。今日はサンパレスに全国から護憲連合の福岡大会があつて社党系の人がたくさん集ったが、社会党の新委員長土井たか子氏、黒川総評議長も顔を出していた。昨日小倉に行った時も、「ひびき」で機密保護法反対の集会があつたが、この護憲大会でも、その辺に危機感がただよっているようにみえた。仏舎利塔に世界平和の願いをこめるのもいい、護憲大会を開くのもいい、非核宣言の要求（県に対し）をするのもいいのであるが、私は情報公開条例のことを引き合いに出して、日常活動の中に民主主義を守る行動をおこすことも必要だということを訴えておいた。中曽根内閣が「戦後政治の総決算」をいっている。着々実行しているからなおさらである。

11月2日（日）

耳納の市

浮羽の青年会議所の人達が走りまわって三町合同による「耳納の市」を企画し、昨年にひきつづき二度目の挑戦で、今日、明日吉井町文化会館付近一帯で盛大に「市」が開かれる。地域おこし、ふるさとづくり、村づくり、が今日あちこちで唱えられ実行されているが、この耳納の市は、ずば抜けて大きい。浮羽はほとんど、果物、野菜が豊かだし、民芸品（例、吉井こけし）もあれこれ、立派なものが少くない。くわしく聞いてないが、カップを題材にした焼物、彫刻、画などが今日も多く出品されていて面白いと思った。他町の人達がどれほど来てくれたか知らないが、こうした「市」を契機に物流が盛んになるだけでもよい。又、こういう催しを行うことによって、それに精を出すこと自体、やる気を起こさせるイ

ンパクトを与えることになるのではないだろうか。出店具合をみてまわったが、中には平凡きわまるものも少くない。でも出店するためにあれこれ気を使って立派なものを出そうとの努力のあともみられる。休みだから、子供たちも押しかけ思い思いにほがらかに行動しているが、家族揃ってこういうところに出かけることもよいことだ。子どもには一つのシーンが強く後まで印象に残るであろう。

11月3日（月）

ひまわり号を見送る。

五時半に起きて、新幹線で小倉に行った。身障者の列車の旅体験を企画する実行委員会があって、今回は新幹線で広島に行き、平和公園に行く組と宮島見物をする組にわかれて、夜帰ってくるという。これまでは別府などへの旅であったが、今回はじめて新幹線を使うという。七〇〇人余の人達だが、身障者はうち三分の一程度で、あとは家族、ボランティアの人達世話人であるという。委員の人達の話では、こうした企画は一年がかりだという。空缶集めをして資金集めをすることもある。こんな話をきくと大変だなと思う。身障にもいろいろあるので同じにはいえないが、一人につきいつも一人以上の付添いが必要な人も少くないわけだ。人間誰しも平等で、どこかにとりえがあるのだから、そのとりえを生かすようにする必要がある。身障者については近い人がそれだけのことをしてやらないといけな、と口ではいえても実行するとなると並大抵ではなかろう。こうした身障者が昔は人目につかないようにされていたが、今日では人目につくことをむしろ願っている。八時二四分発のひまわり号が無事、ひろしまへの旅を終え、身障者に多くの思い出を残してくれることを祈りつつ、ホームでお別れして帰福した。

11月4日（火）

福教祖幹部との懇親会

夕方福教祖の執行部幹部、各支部長と知事と語る会が那の津荘で開かれた。知事選も近まったということで、組合の側も動きを見せはじめたといえる。福教祖といえば協会の分裂以後は疎遠になり勝ちで、前回知事選の時も、私にとって気持はやや冷やかであったし、知事になってからも教育部門では野党攻撃がはげしく、押しまわれ勝ちで組合員にとっては互助会補助金問題や昇給短縮問題などよい結果は一つもなかったといってよい。教育会館立退き問題も而りである。しかし今日の組合幹部たちは、そうしたマイナス面には恬淡で、全くこだわらぬ態度で私に接してくれた。快くといえた。グループごとに、又個人ごとに写真をとるべくポーズを何回も何回もとってさわいだ。次期知事選もがんばるといふ。そして出馬表明を一日も早くとさえ要請してきた。今は元向坂協会であれわれに対抗心の強かった梶村氏が委員長だが、彼はそぶりすら見せず、友好的そのものであった。知事がかわって職場の空気が少しは明るくなったようだし、新規学卒者の組合加入率が低く、

幹部も組合の姿勢を柔軟にせねばならぬと方針転換をはかっているように見えた。

11月5日（水）

ふくおか会館界限

東京はいつ来ても皇居周辺の美しさが目につく。霞ヶ関界限のビルや舗道のたたずまいが立派なことも手伝っている。この辺りは世界の大都市の中でも東京の個性、日本らしさを誇るに足る町並みとあってよいだろう。この辺の並木はイチョウかプラタナスで年数もかなり経ち、堂々としている。皇居周辺の松もいい。誰が決めていくのか、こうした街並みづくりには敬意を表したい。半蔵門前のふくおか会館、東京事務所は上京のたびに立ち寄るところだが、こうした界限の中に位置しているのでいつ来ても心がなごむ。応接室からながめる皇居、お堀、イギリス大使館はいい。お堀のまわりを長距離練習か健康保持のためか、ランニングに余念ない人が次から次へと絶えることがないが、これも又心休まる光景である。月に平均二回ほど上京してこの応接室から外をながめることになるだろうが、プラタナス、大使館のイチョウの葉の芽から落葉までの四季のうつりかわり、風と葉と雨をゆっくり見るときが楽しい。東京は晴れた日が多く、窓からみる皇居のスカイラインは美事というほかない。用事のない時、外がながめうる恵まれた立場をしみじみ味わってみる。

11月6日（木）

円高不況に思う

大阪での工場適地説明会と企業立地推進委員会に出席のため大阪入りして感じたのは、東京とちがって円高不況の影響がここの人達の発言の随所に出てくることだ。福岡への企業進出など今は考えられぬという空気がありありである。やはり「東京一極集中」が今日の日本の特徴のようにみえる。欧米でも国内でも内需拡大の声が強い。一時あった輸入拡大（自由化）や保護貿易論がとってかわられたかのようだが、私見では後者が当然のように思える。日本が内需を拡大したからとて輸出ドライブ輸入手びかえがそうかわるわけでもあるまいと思う。それよりも一千億ドルに近いドルをどうはかせるか、出超の勢いをどう止めるかである。外国への投資や日本人の外国旅行も一助となるだろうが、かつてイギリスがそして又アメリカがやっていたように対外援助をふやすがよい。それもだが何よりも日本は生産性が高いのに労働者が働きすぎなのだ。ワークシェアリングということがヨーロッパで論議されているように、もっと少く働き多くの人に働かすべきだろう。東京や大阪でも近頃は浮浪者がふえたといわれている。税をとって福祉切り捨てをやめるのも一つの方法だろう。

11月7日（金）

知事選と解同基本法方針をめぐる問題

田中健蔵氏が土居町の元三井銀行支店跡に選挙事務所を設け、近々事務所開きをする運びという。又新九大学長の高橋、九工大学長の井上をメンバーとした政策づくりの会を発足させたと報じられている。なんで現職の学長が動いているのか理由不可解とわれわれは思うが、彼らは平然とこれをやってのけている。ところでこれに対する側は同和問題をめぐる共産党系と社会党系が、ゆっくり、もめつづけていて腰があがらない。解同は基本法制定運動に懸命になっているのに、全解連は自民党の方針（非制定、地対法期限切れよし）との近似性を持ち、解同を怒らせている。社会党は解同の方針でよいとしているが、では知事はどうなると、今日も解同の高田、羽音両幹部が知事を訪ねて意見をただすとの場がもたれた。社会党の竹村も同席して、知事は解同の方向で動く、この方向は九月県議会の意見書も採択があるのでこの方向に従うということで、両者は納得して帰った。共産党系の印刷物に知事に奥田と書き、そのすぐ隣に基本法制定反対の記事がでていたので、これが問題なんだと解同幹部はいうのである。知事選ともなれば、こうした次元の問題は通りこしてくれればいいのに、もつれもつれて事態がなかなか進まぬようだ。

11月8日（土）

九州寮歌祭

第二〇回九州寮歌祭（グランドホテル）で私に祝辞の場を与えてくれて有難かった。私は次のようなことをいった。戦後四〇年余り、その半分を寮歌祭で回顧してきた。旧制高校が新制へと移行して四〇年近い年が流れたが移行期には旧制高校制度をなぜなくしたのかずいぶん議論があった。これを九大教養部三〇年史の中でふれておいたが、一面からみて惜しい変革であったと思う。四〇年近い新制の歴史からみると、今は一番新しい旧制の卒業生が定年を迎える時代ともなっている。いわばこうした寮歌祭に集ってくる人はもうすぐ全部定年後の第三の人生を歩んでいる人ばかりになってしまう。われわれは若き時代、情熱をもやした時代を回顧しつつ、残り火がもえつきるまで与えられた第三の人生を有意義に過ごしていかなければならない。そうした気持ちをこめて今宵は各校の寮歌各人のシンボルたりうる寮歌をカーバイ歌い次いでいこうではないか——でも実際歌ってみると所々記憶違いがあるし、あとで疲れもする。もう決して若くはない。むつかしい言葉を並べてよくも絶叫してまわったものだと思う。

11月9日（日）

渋柿むき

ひる間協会の高崎氏が、渋柿を二〇キロほどもって来てくれたので、夜おそくなってではあるが、干柿用に皮むきをした。そういえば彼は以前ももって来てくれた。今回は少々

熟しすぎてむきにくかったが、三人でしたので一時間余りで作業は終わった。この種の仕事はあった方がいい。藤江君は手なれてきた。誰も幼い頃から皮むきなどの作業はしておくべきなのだが、近頃は子供にさせない。子供もそのことには無頓着だ。柿があっても木に昇って取ろうともしない。田舎の方に車をとばしても、遂に取られないままに、秋の風物詩の一齣をなしている場合が少くない。干柿は皮をむいて一ヵ月ほどで一番おいしい頃となり、年を越しにくい。専門の人にまかせておくしかない。それで、十二月中に食べてしまうことになる。渋を取る他の方法もあるが、柿により干柿に向くのは干柿にする方がよい。昨年をもってきてくれなかったので催促することもないので、干柿はしないままに過ぎたのであった。今日から二十日ほど待てばおいしいのができるだろう。楽しみだ。ひとに申込んで柿を取りに行くのも一方法とは思いますが、今は、もし落ちたら、いい笑いものになるだけだと思って積極的にひとに申出ないわけだ。十年も前だったか、吉木の名田氏のうちに行き木に昇ったのが思い出される。

11月10日(月)

十二月補正予算案をめぐって

もう十二月補正予算を審議する時になっている。日がたつのが早い。こんどの補正は公務員給与の引上げと、景気対策としての政府の追加予算による公共事業関係が主なものだが、政治的要素をもつものとして、来年度の高校授業料の値上げ条例を出すかどうかの一つの焦点になってきた。今日は結論がえられなかった。それと、県庁跡地対策として何か手をうたねばならないのではないか、施設を作るとした場合、第三セクターとするかどうかなどその方式について研究する経費を計上しておくべきではないかなどで議論が出た。この二つはどちらも来る知事選をにらんだテーマの中に上ってくるに違いないということで、当方としても意識的に取り上げねばならぬのに、財政課サイドではその配慮が足りないとの指摘が、今晚の山ノ上ホテルでの社会党との懇談の席上話題となった。財政当局は、行政の筋としては一年おくれの授業値上げという筋は通させてほしいというが、党の方では減票にこそなれ何のこともない三億円程度の減収は見送れという。跡地構想は選挙争点になること必定だというのである。

11月11日(火)

応援団側の激励集会

知事になって以来、対話事業を七十数回やって来たが、応援団部分を対象にしたものはほとんどなかった。又、福岡、北九州の両政令都市地区では二、三の例外しかなかった。実はそれらはやりにくいからであった。応援団対象だと、すぐ要求型、直進型の問題提起になる。非核宣言をやれとか、国鉄民営分割に反対せよとか、「県民党」、野党絶対多数という状況を考えないものがどんどんとび出すし、政令都市では市長が知事に親近感をもち

歓迎せぬという事情がある。ただ、問題別の対話では、政令都市の人は少ない。今日の第四回婦人の翼団員との対話では三分の一以上が福岡、北九州からの人であった。当然といえば当然だが、近頃知事選という意識があつてか、地公労、地区労に出向くことが多くなった。今日の若松地区労の諸君との対話はプライベートタイムとしての行動だが、だから対話事業ではないが、政令都市での応援団への顔出しである。こういう場合はもう激励集会で要求貫徹集会型ではなくなっているのだから、気分は楽である。若松は前回知事選でも奥田票がかなり上廻った地区だと自慢していた。地区労がしっかりしているところなのである。

11月12日（水）

久留米市の二つの顔

夜遅くなってからだが筑文懇に出席した。以前もそうだったが、久留米の文化人、活動家の集いは司会がまずいのか、だらだらした会の運びとの印象をうけた。平素の不平不満の出し合いの会みたいで、それを知事が長時間きいていて感想やら答弁をすることになるのだが、正直なところ、こんな集会に長時間つき合わされるのはかなわんという感じである。誰かが直言してなおした方がいいと思う。不馴れということもあろう。この種の集会が数少いのであろう。その意味では久留米はおくれているのだろう。でもその前の会場、ハイネスホテルでの内野秀美氏の画集刊行回顧展記念パーティは垢抜けしていた。というか、さすが文化都市久留米だと思わせるものがあり、久留米だから芸術は育つとさえ思わせた。この二つをつき合わせると久留米がわかるようにも思える。近見市長は内野パーティでは長い祝辞をのべたが堂々たるものがあつた。西日本新聞の青木社長、森山久留米総局長も顔がみられた。鳥越県議の案内で私は入場したのだが、自民党の県議が来てなかったところをみるとこの会は私を受入れる会のように思えた。飛入りだったので面くらつたが。

11月13日（木）

九州地方知事会と九経連の意見交換の場

九州地方知事会も春秋二回ずつ、今回で四〇年八〇回目という。佐賀県が当番で嬉野の和多屋が会場。昨年につづいて秋は九経連幹部との意見交換を前夜祭的におこなう。今日の午後がそれにあてられた。少しはメリットがなければならぬとは思ふが、実際であろうとは思われない。話が抽象の段階でぐるぐるまわっているからだろう。知事会側が具体案を事務段階でよく練りそれを知事会で決め、決ったものを九経連に提起して協力を求めるというような積極さがあるべきだろう。知事会側に何の具体案の煮詰めもされていないし、何ももたないままに、九経連幹部と対面している。九経連の方でも具体案を準備しているわけでもない。日米青年交流の話が出たが、これなどほんの一片にすぎない。基本方針を決め、その実現のための年次具体的行動方針を提起し、それを両方で審議するのでなけ

ればならない。同行の樺島氏にきいてみたら、知事会の事務局を担当する鹿児島県側にそういう事務を消化する意欲と能力に欠けるということであった。これでは知事会と九経連の意見交換も実りはないといわなければならない。なすべきことはいくらでもあるのに、勿体ないことだ。

11月14日（金）

特養老人ホームを視察して

全国知事会事務側から当面の税制改革の話をきいたが、迷路だなという感じだった。もっとわかりいいことをしないかといいたい。知事会がすんで嬉野から大川の永寿園に、そして大野城市の悠生園に、二つの特別養護老人ホームの視察というハードスケジュール。前者では古賀県議が、後者では力丸民生部長が立会人的役割を果たしてくれた。痴呆性老人について、家族が困る、その家族の代りを老人ホームがしてやる、専門家としてみられる、そういう必要がどんどん今ふえているのだ。専門の側として決して容易ではない。赤ん坊以上に手がかかる。何ともいい知れぬ感想だ。長寿もいいが、生きること自体、介護する側も「たたかい」である。それが、世間ではかくれて見えない。その子供たち（といっても五〇歳をこえた人が多かろう）が知らん顔をしておれるということは、何とも有難い世の中だ。でも、できればそういう「たたかい」の中に私は入りたくない。入らないためにはどうしたらいいのだろうか。健康に十分に気をつけることはいうまでもないが、命ながらえて痴呆性にならないとの保証はどこにもない。悠生園長の話では、あの人が高校の先生あがり、あの人が電々公社の局長あがりなどとの説明だった。ガックリ、先が暗くなったようだ。

11月15日（土）

戸畑地区市民の会

夜、戸畑区民の会（北九市民の会の地区組織）の人達との懇親会が戸畑駅ビル二階でおこなわれた。社、共、労、文化人の集りで、来年二月上旬の北九市長選では松本候補を推そうとしている側の勢力で、市長選で勝利し、その力で知事選も、を合言葉にしている。中味は教員組合や全通、国労、新婦人の会などの人が多いように思えた。つい最近、若松で同種の会があったのだが、戸畑の場合、独立の選挙事務所をすでに準備したという点で一步先んじているようだ。今日の九工大情報工学部開学祝賀会の時、山田市の公明党市議と名乗る人が、創価学会員など末端の人達は中央と違い、自民党に相乗りして田中支持にはならないから、奥田知事がんばれといってくれたが、このことを夜の区民の会の時にテーブルごとの対話で伝えたら、参議院選の恨みを学会員は忘れていませんよ、それが末端の実態といって賛同してくれる人がいた。この会合でもあちこちのグループが私を交えてのカメラポーズを強く希望し、楽しい雰囲気を出してくれた。私はあいさつで、開かれた県

政（情報公開と対話）と長期計画の^{マア}作定を三年半の成果として報告しておいた。

11月16日（日）

二つの個展をみる

今日は二つの個展をみた。平野さんのツバキ写真展を大丸デパートで、そして木村さんの版画展を山本文房堂で。こういうことをする人は凝り性だと思う。凝って凝ってである。一つのことに打ち込んで倦まない。自分の信念を深く追求していくとだんだん人並みからはずれていく。それは宿命だろう。それでも飽きない。一般の人はこういう人を遠くからながめるようになる。奇異でもあり、崇敬の的でもある。木村さんなどは常人からは奇異に見られるに違いない。中国や東南アジアに何回も足を運び古墳の壁画のようなものから版画を通じて現代に思いを再現しようとしているのかなと思う。地域懇にははじめから顔を出していた人だが、最近はどうなんだろう。小郡に居を構えて悠々自適のようだ。平野さんは輝国の谷墓地の上の方に住んでいるからいわば隣人である。庭一ぱいにツバキを植えている。何百種かあるのだろう。そのうち八〇種ばかりを写真にして展示しているのが今日の個展。実物を見るよりは写真でみる方がツバキのよさが出るといえるほどに今日の写真はよかった。音楽を好まれる。通である。温厚でこちらは常人である。

11月17日（月）

相反する二つの真実

今日の那の津荘での高教組支部役員たちとの懇談会、引きつづく夕食会の席上、大牟田支部の某氏が四月の「吉野のつどい」の例を引きながら、頑固な保守系の人も、このつどいに参加するに至ったことを話していた。県民の会や社会党のする集いには参加しないといっていた保守系指導者も、住民ぐるみの動きになることが確実になった段階で、自分にもできることがあるなら手伝おうというようになってきたというのである。私は、どんな頑固に見える人でも変えることができるのだという意味の合槌をうった。今日の前段の懇談会の折に、教育委員の人選を誤ったがために教育の現場は以前にもまして困っているという話がきかれたが、この教育委員も接し方いかんによっては変わらないとはいえないのではないか。組合も相手を変えるほどの運動の仕方を追求する必要はないだろうかと私はつけ加えておいた。もちろん逆に、物事のなりゆきいかんは人が決めるということもいえるので、教育委員の選び方いかんが高校教育に大きな影響を与えることも事実である。この相反する真実を両方とも十分に翫味してかかることが大切であろう。

11月18日（火）

門司の冷え込みを肌で感じた

夕方門司で国鉄九州総局長に要請訪問をしたあと、区民の会の案内で新門司の某全金の職

場を訪ね、往復一時間を要したのであったが、円高不況も手伝って北九州とくに門司の冷え込みのひどさをつくづく感じたのであった。なぜか、平素は美しいはずの門司の山々の紅葉も晩秋という以上に色あせてみえた。沿道はごみごみしているし、建物も古び、いたみ、つぶれたり、閉されていたりして活気がほとんどない。時間が余ってしはらく港の岸壁に立ったが港湾にほとんど動きがない。対岸の下関側は高層ビルも見え、港に動きが何となく感じられる。なぜこうも違うのであろうか不思議である。新聞は九州全体の不況落込みを報じているが、求人倍率で九州各県は〇・三レベルなのに福岡県は〇・二六と低く、門司に来ての話では〇・一オーダーでしかなく北九州市内でも門司がとくに失業率が高いということであった。対岸の山口県の求人倍率は日本全体のそれとほとんどかわらず〇・六オーダーなのである。一寸ため息が出そうである。永倉三郎九経連会長は革新知事では経済浮揚はないと近頃いつている。田中健蔵なら浮揚すると敢ていいたいらしい。二〇年市長をした谷市長のもとで北九州はこの有様。永倉は「因縁づけ」屋なのである。

11月19日(水)

知事選への下準備がどんどん進んでいる。

来年の知事選挙をひかえ、だんだん周囲があわただしくなって来た。今日の新聞には社共協定ができたと報じられ、田中健蔵氏と一騎打になってきたという。彼の事務所はもう毎日皓々とあかりがついている。私に対してはあちこちから出馬要請の決議文があげられて情勢の急を告げている。今日大手門会館で県評主婦の会役員会が開かれたが、これも同じ。昨日の大手門大ホールでの高齢者大集会所もさながら決起大会みたいであった。四年前の今日、玄海町の「ひびき」で開かれた高教組の教研集会に全体会講師として出席した私が、多くのマスコミ記者の中で事実上の出馬表明をしたみたいになったのを思い出す。この時分、東京から啓二が帰福し、みゆきと一しょに、周囲からかつぎ出されようとしているのをくいとめる努力をしていたのだが、気持はわかるにしても、当時は私も客観事情の動きの中で、ずるずる引き込まれていたものであった。今回は、マスコミも既定の事実のように報ずるし、主観的にもまた、仕方がないとして心に抵抗感はない。みゆきも、対話はしないが、暗黙のうちにこの動きを認めているようだ。九大祭がはじまっているらしい教養部の様子だ。

11月20日(木)

直方青年会議所との意見交換

直方の青年会議所の役員三人が来訪。直方の将来をどうえがいていいか知事の意見を求むというのである。材料としては新幹線の新駅設置やレジャーランド展開、有木工業団地の利用促進などであって、意見はくいちがわなかった。国鉄の直方駅構内の利用にも話は及んだ。ただどの問題にも具体的展望は何もなかった。思いが同じというにとどまる。こう

して彼等が来訪してきた裏には、次の直方市長選で、現市長に対抗して坂口県議が改めて立候補するらしく、青年会議所としては現有馬市長でなく坂口県議の方を推そうとしているという。そして坂口氏が知事の意向をきいてみたらよいということらしい。このような政治的背景があるのだが、来る者拒まずで私は対応した。新幹線駅やレジャーランドについては私と坂口県議は前々から意見を交わしていたので彼等とも意見はよく合う。ただ、先立つもの、資金がないわけだ。カネをどこから調達するかの見とおしを誰がどこから得てくるかである。二つの百万都市のまんなか位置するという地の利をいかす工夫をすることが大事ではないかということを私は強調しておいた。

11月21日（金）

定期検診

済生会病院で定期検診をうけた。血圧が上下とも少々上っていたが、これはその前に少々演説したせいだろうか。血糖の方も一五〇ぐらいで意外に低かった。どこか異状を感じることはないかといわれたので、依然、夜中にトイレに起き、その後の睡眠が思わしくない状態がつづいていること、それから歯が全体として悪い、とくに上の左右小臼歯あたりが全体として治療を要するだろうこと、又、両手指の関節の痛みは近頃それほど感じなくなっているという点を報告したのであった。これは小川副院長の専門外に属することだが、彼は歯の治療は早くしておくようにと注意してくれた。嚙み不足が胃に悪影響を及ぼすことがあるとのこと。トイレに起きて後十分にねむれないなら尿瓶を用意しておいて、途中で起きて冷えこみのないようにするがよいとのことであったが、今のところまだ尿瓶をもち込む気にはならない。起床まで二～三時間うとうとしてよく眠れないようだが、やはり休んではいるのであろう。もう年だから、そのような状態はとくに不自然ではないとのことであった。糖尿の自己管理はますます慎重に思っている。

11月22日（土）

休みをかく使う

今日は一日まるまる休みにしてくれた。それは明日、明後日の連休はつぶれるから代休ということのようだ。休みの時は従来もそうだったが今日も早速たまっている揮毫依頼にこたえる仕事にとりかかった。天気がよくて外に出るのもいいのだが、その意欲はない。甘夏柑が黄色味がかって来た。温州ミカンも木は小さいが今年は去年の二倍の十四、五箇はなったが、今は収穫してしまっている。キンカンも少し色づいて来た。陽あたりがよくないので庭の木々の育ちによくないだろう。マンションができてから十一月～二月は蔭になってしまうのだ。午後半分ほど過ぎた頃呼んでいた森祐行氏がやって来て家族マージャンをした。何回も同じことをやっているのだがこれがわれわれ三人の唯一の共通の気晴らしになっている。私がいけない時は二人はテレビを見ているらしいが、私はほとんど見ない。

共通の余暇となるとマージャンでもするかということになってしまう。今日は森氏だが、他の日は教養部の河野氏を呼ぶことが多い。指先の運動になるというが、果たしてそうか。楽しければいいのではないだろうか。むしろ疲れる程に時間を費すことになってしまう。

11月23日(日)

八女伝統工芸館の落成

八女の伝統工芸館の落成式があり、テープカットも行って中に入ってみた。立派なものできた。第一次地方線で廃止になった矢部線福島駅の跡地に立派な、このような観光施設ができるとは思ってもよらぬところである。黒木の年金保養基地グリーンピア八女と連携して客を引くことができる。八女郡は昔から一つのととのった産業文化の伝統のあるところで、手すき和紙、仏壇、提灯、石灯籠は有名だが、そのほか、木彫、陶芸などいろいろな土産品が揃うところである。久留米緋もあるようだし、仏壇師のこまかいノミのさばき実演を見ると、やはり伝統として残さねばならないと思う。提灯など、どうして作るのだろうかと思っていたのだが、製作過程を見るときはと合点がいく。先人の工夫の結晶がこの殿堂に集まると思うとすばらしいことではないだろうか。獅子面を彫っている場面もみたが、ノミの種類が多いことに驚かされる。手工業は道具を極度に発達させるというが、その通りだなと思った。誰しもこの工芸館の今後の運営について心配している。みんなの力で支えてやらなければいけない。

11月24日(月)

渇水のこと

昨日今日小雨が降った。降り足りない程しか降っていない。中部近畿の地方は少雨で水に困っているようだ。福岡も決して多くはないが先ずは危機以前である。全国的に夏以降雨が少いようだ。平年の七割ほどといわれている。来月の五日に天皇御進講の予定だが、予告のテーマに水対策と緑の保護という県政課題を選んだのだが、今となっては、適切だったと思っている。五三年の福岡都市圏の大渇水の教訓として節水思想が普及したといわれているが、実際、一割は節水していると聞いている。ただし、人口が一割ふえたとすれば水不足は単純に考えてかわらないといえる。節水思想というが節水生活構造を工夫する必要があるだろう。外食産業、水洗便所の普及だけ考えても水は日増しに多量使うようになっている。地下水をもっと利用するようにできないものだろうか。昔は各自が水脈をうまく見つけて井戸を掘り自分の使う水は自分で汲み上げていたのだから、そのような発想にもどれぬものだろうか。もちろん市街地でできることではない。地下水自体が汚染されているから駄目ということだろうが汚染を断つしかないのではないか。

11月25日（火）

県民の会との朝食会

県民の会の幹部と都ホテルで朝食会を行い、先方から知事選に関して、去る二十一日に拡大幹事会で意思統一があったことが告げられ、私の方からは、県民の会に対し、これまで以上の幅広い層の結集に向けて今後努力してほしいと注文をつけておいた。直後の記者会見で、私はこのことを、自公民でなければ残りは社共だとか、保守中道のほかは革新というふうに単純に割切らないで考えていきたい。問題はもっと幅広い県民層の支持なのだということである。このことは今日出席していた共産党の代表たちも理解してくれていたと思える。くりかえして、いたるところでこのことを強調していきたいと思う。田中陣営は自公民だ保守中道だと強調しているが、われわれはこれよりはるかに幅が広いのだということをつづけるのである。そのことによって、相手との対立点をできるだけボカしていくべきなのだ。相手は強いて対立点があるかのごとく持ち出してくる。こちらは肩すかしをつづけていく。今日の朝食会ではこの大道が理解されたのではないかと思った。出馬要請がいつあるか、出馬表明にいつ踏み切るかがこれからのポイントになりそうだ。十一月末近くに要請があるとみてよいだろう。

11月26日（水）

年賀状を考える時節

年賀状の時節になった。先日私の字で書いていた県民の会分原稿ができてきてサンプル三つのうち一つを選んだ。十万枚刷るとかいていたが書く方も大変であろう。先日野党懇の時、自民党のある県議が二万五千枚書くといっていた。これにくらべると知事分十万枚なんか少いともいえる。四〇円だから県議の分は一〇〇万円、書き賃をいれると、どうみても一二〇万円はかかるだろう。県議はぼやいていた。葬式、結婚式、何とかの落成式等々、入学式もだろう。一寸包んでも月にそれが五つも七つもということになると、県議も大変な出費だろう。私のがどうなるのか考えたこともないので、人まかせとはいえ、やっぱり楽させてもらっているわけだ。県議だと、選挙用のピラを作るカネもいる。正月をこすだけでも並々ならぬ苦勞がある。だから私は選挙を自分でする気にはならない。あそこにもここにも顔を出し、祝電を打ち笑顔をふりまき、世話をしやり……どこがよいのであろうか。それでも好きでやめられない人もいるわけだ。うま味も結構あるのだろう。好き好きということなのであろう。

11月27日（木）

感情に訴へることに集中すること。

県民の会の山口氏と年賀状の打合わせのついでに庁議室で中食を共にしたが、その時私は彼に、宣伝物は理くつに走らず、感情に訴えるようなものにしてほしいという注文をして

おいた。夜、奉丁で西鉄労組役員と懇親会の時の話題にもなったのだが、選挙カーのマイクの声だの手を振る人にどうこたえるだの、そんな話ばかりが出た。そして又、天神の四辻をどのようにうまく利用するか作戦だの、すべてが選挙民に与える感情のよしあしにしばられていた。沸かす演出をするためにはやっている方が一致して沸いていなければならない。だから要はその陣営にいかにか強い一体感があるかということにもなるだろうと思われる。今回の場合、国労が大きなマイナス要因になろう。組織はなきに等しくなってきた。しかし、西鉄労組が前回と違うように感じられる。そうしたプラスマイナスを組織労働者の面で見ると、マイナスが残るのではないだろうか。それだけに平素から耕してきた無数の、平凡な県民の支えの掘りおこしが必要である。そのためには感情に訴えることに集中した発想が必要だろう。

11月28日（金）

出馬要請相次ぐ

県評又は県民の会の要請だと思うが近頃あちこちの県単位の労働組合から次期知事選への再出馬の要請があっている。地公労三組合のほか、中立労連、西鉄、そして今日は全通がそれである。北九では小倉、若松、戸畑、門司の地区労がその集会をすませた。県民の会では十二月三日に団体として正式に出馬要請の儀式を行うという評判が伝わって来ている。うちにも個人的な書状が届いたり、又数日前には全福郵労が八二人の署名を添えた再出馬要請書を送って来た。もう一般に選挙に入ったかのような雰囲気である。それらに出会うたびに、こちらもだんだんそのような気になっていくのが自覚される。それでも、まだこえなければならない山場がいくつかある。慎重に対応しなければなるまい。一つは県民の会の要請とこれにつづくマスコミ会見であり、二つは十二月議会である。篠田栄太郎（議長）が、県議会で野党の方からの質問の中でとり上げ「再出馬はやめたらどうか。リーダーシップがないんだから」と切り出したいと洩らしているそうだ。私にとってはそういう非難めいた質問はかえって得点に結びつきそうだから歓迎したいのである。バツリやっけてマスコミが面白おかしく取り上げるような答弁をしたいものだ。

11月29日（土）

機密保護法の策謀

飯塚で筑豊の女たちの集いがあった。儀式ののち、弁護士の中島通子という人が、反戦講演をする。五〇〇人は会場文化センターに集っていたと思う。一時半から始まって、あいさつをした私には花束も贈られた。どのような活動家がいるこうした人を集めたのか私にはわからない。実行委員会方式である。中島さんとあらかじめ小対話があったが、彼女は勝共連合が策した機密保護法でんまつを話すといっていた。福岡県議会でも推進議決がされているんですという。私は知らなかった。勝共連合が全国的に策して、各種地方議会

を動かし、数多くの決議をたたかい取って中央政府自民党を動かすまでに至り、長い間棚ざらしにされ、このほどおかしいということで、朝日新聞が書き立てて事の裏面が暴露されたものだ。機密保護法などなくても現行法で十分に対応できるということが明らかにされている。政府も法案をひっ込めるのに苦慮しているようだ。元来韓国系の勝共連合であるこの団体に日本の多くの自治体保守系議員がふりまわされているということ自体に問題がある。

11月30日（日）

仏像展をみて

筑豊から帰福して、県立美術館で行われている比叡山と天台の美術展をみた。これは先月名古屋に行った時に見たものだが、内容はかなりかえられているようだ。同じのが札幌、仙台、東京、京都でも行われたという。朝日新聞の主催。遠くは七世紀から主として十二、三世紀に及ぶ仏教美術がわれわれの目の前にこうして展示されるということは有難いことだ。私は仏像の顔の表現を注意して見るのだが、それぞれに特徴があって面白い。人間の老若男女や俗世にある苦楽を全部代弁したような表現でありながら、それぞれが又違うのである。絵であれ彫刻であれ、作者の心理を通し、時代、社会が代弁されているように思えるのである。千手観音の手は四〇本ほど左右に分かれてあり、それぞれ違う物を握っている。人々はこれによって万能を夢みたのではなかろうか。「神は万能」という考えがあるから、仏教でも同じだろうと思う。又、十一面観音というのもあった。一つの面の上に多方面が乗せてある。これも全方位を見ている。全方位から見えるということであろうか。まさに「観自在」というのであろう。

十二月要記

次期知事選に向けて、自民、民社、公明の三党の推載する田中健蔵氏が、十二月七日投票の福岡市長選で、桑原候補に相乗りしてすでに走りまわっている。まだ知名度が高くないとのことだが、この二週間の相乗りで、かなりかせいだらしい。ひるがえって当方だが、十二月三日に県民の会代表から組織的な要請をうけはしたものの、県議会乗り切りの必要もあって、余分の論議の種をまかないためには、議会終了後、さらには、来年度予算政府陳情後がよいとの意見が出ている。個人、団体の支持者側からは早く出馬表明をいう声が次第に強まりつつある。個人的、組織的要請文が郵送されてくるし、組織集会があつて出席するたびに、同じく要請がある。田中氏が、しゃしゃり出るような形でしかも上から下へのしめつけのような形で立候補表明に出たのをみながら、こちらは全く逆に、支持者が待ちこがれる状況を作りながら表明をした方がよいだろうということになった。だが年を越してはまずいとか、いや越しても平気だという声も逆にあっている。大衆レベルからいうと、年を越さない方がいいらしい。声明を出してしまうと、公務として大衆の前に出に

くくなる。出そうという団体が少くなるということもあって、その種集会を「利用」するとなると遅くてよい。逆に声明を出さないと、県民の会あたりで資金集めの名目が得られないので運動は行き詰りになるとさえいわれている。そう考えるとやっぱり対政府予算陳情の直後あたりがギリギリになってしまう。だがこれはひとにまかせよう。

12月1日(月)

まとまりのない自民党県政界だが

東京会館での企業立地推進委員会のあとの懇談会に出席していた住友建設の斎藤武幸会長は私に、「自民党はばらばらだ」といって話していた。三原朝雄氏がいたらまとまっていたかも知れないが、彼はやめてしまった。そして合意も得ぬまま突如朝彦(息)氏が出て来た。これもおかしい。山崎拓は中曽根に近いことをいいことにして「出すぎている」。遠藤政雄氏は「人気がない」。だから今の福岡県の自民党にはまとまりがないというのである。私は相槌をうっていた。これは今さらいいうまでもないことだが、他党が弱すぎるので県議でも自民が多すぎ、そのことがまとまりをなくす因子になっている。もちろん彼らはまとまりのない結束はもっている。党派根性はある意味では一番強いともいえるだろう。本能的な党派根性である。これを失わぬところに立派さがある。こんどの知事選では山崎拓とその一派が前に出てきている。この前の知事選では山崎は一步退いていて、亀井の失脚には拍手を送った。今回はそれが逆になっている。遠藤氏らは山崎の推す田中健蔵にはむしろ冷淡である。平素誰がどの派に属すのか注意していないのでくわしくは知らない。が、東京で先日田中の「励ます会」発起人の一人であった斎藤氏も、まとまりのなさを歎いているようだ。

12月2日(火)

独居老人への給食活動をする犀川町の婦人

犀川町の校区婦人会との対話のつどいに出席した。手づくりの弁当を用意して歓迎してくれた。山村過疎地というべきこの町に、こうしてやってきたのははじめてだ。この弁当は毎月一日と十五日の二度、犀川校区の婦人たちが、この十年間、独居老人に配給してきたのを試食してみてくださいという意味がこめられていた。弁当箱の朱塗り器具は「地域福祉振興基金」からの助成金で購入したものという。今日もその、矢野常務が同席していた。月に二度のこの弁当はほぼ二食分ある。だから朝早くから料理をはじめ、中食時に給付できるようにし、夕食分にもなるように配慮されているらしい。配給をうける老人はその日のくるのを首を長くして待っているという。渡辺さんという会長さんが給食事業を指導してきたらしいが、生活改善運動の一環として当地区では結婚式を二十年も、その一二〇〇組ものカップルにつき料理など準備してきているとの実績をもち、独居老人への給食もそうした生活改善運動の一環になっている福祉運動であるようだ。県下のすみずみをかき分け

てみると、このような立派な運動がいろいろ展開されているのだが、こうした事例は一度まとめてみたいと思っている。

12月3日（水）

県民の会からの再出馬要請をうける。

午後五時都ホテルで県民の会幹事会から次期知事選再出馬の正式要請をうけた。予め、どう応答するかを岩崎氏らと打合せたのだが、社党林幹事長をもふくめ、十二月二十七日頃、中央予算陳情がすんで後、正月前という時期がいいのではないかということになり、今日の県民の会要請に対しては、マスコミもいることだし、即答を避けようということになった。千数百枚もの組織要請を目の前におかれたし、幹事一人一人が推挙の弁をのべるという熱意を見せつけながら、深謝しつつも、しばらく時間を貸してほしいとは実際いづらいことではあった。あとでどこかのマスコミ社が追っかけてきて、県民代表ということで行動せねばならぬことがまだ残っていると応答の中でいったのは「公務」があるという意味なのかということで、その通りだと答えておいた。知事としての行動と候補としての行動を分けて対応していきたいが、予算陳情などは候補としての偏見をうけない方がよいだろうと考えられる。十二月議会で野党が意思表示をめぐり意地悪い質問をするそうだが、その余地を残しつつ、質問は軽くないなってしまう答弁をするがよいと今は思っている。

12月4日（木）

筑豊三土木事務所を激励にまわる

筑豊三土木事務所をかけ足でまわって職員達を激励した。柳川土木事務所汚職（宮崎は一週間前に懲戒免とした）をめぐり、土木関係の職員の意気銷沈ぶりが甚だしいといわれる。他方、筑豊では三土木事務所とも職員が管理職と一体となって汚職追放に立ち上がったという状況がでてきた。これはまたとないチャンスだということで、今日午前中の日程をとってまわったのである。私が激励のあいさつをしたあと、所長及び職員代表が決意を述べるという形で三事務所とも事を運んだのであった。自分は清く正しいといっても微塵でもスキがあれば全体が悪い印象を与えるのだから、微塵も隙を与えてはいけないと私はいった。平素県政の第一線で活躍している労をねぎらうこと勿論であるし、政府の補正予算により年末までに一そう仕事が加重されてきそうだから、体に気をつけて、やり遂げ、いい正月を迎えられるようにということをつけ加えておいた。ともあれ、筑豊では「労使一体」となって汚職根絶を誓うに至ったわけで、この雰囲気の変わりように注目しなければいけないだろう。私は、激励し、逆にまた激励されもした。三時間足らずのかけ抜け現地視察になったわけだ。

12月5日(金)

地方事情説明ご進講

十一時、皇居正殿梅の間で地方事情御説明の会があった。出席したのは青森、秋田、茨城、三重、福岡の五県知事だが陪席は中曽根総理、葉梨自治大臣、渡辺自治政務、花岡自治両次官であった。皇太子も同席された。又富田宮内庁長官、徳川侍従長も陪席であった。青森県は交通なかでも空港、新幹線、高速道の重要性を説き、秋田県は高齢者福祉施策の展開を、茨城県は筑波科学博の成功とその跡地、余波の効果的活用状況について、三重県は日本古代史研究の一つの鍵となる斎宮跡調査について述べた。青森では北海道との間のトンネルを国鉄が利用することになる二年後に博覧会をやるといっていた。福岡県は水資源の開発と緑の保護について述べた。筑後川導水や遠賀川河口堰について、五三年の福岡大濁水事件後の対応として進められた水資源開発の効果、節水思想の定着、今後の水資源開発の必要性について言及した。一般的に福岡のテーマの選び方はよかったとの印象があったようだ。青森のテーマは政府陳情みたいにみえた。秋田の高齢化問題は対応のしかたが一般的すぎて特徴がみつきにくかった。三重のは問題が特殊すぎる。この種のご進講は平素どの程度行われているのか全貌は知らない。

12月6日(土)

南部筑後での支持ムードを感じる。

今日は柳川、八女、大川と、南部筑後の主要点を三つ走りまわった。柳川は土木事務所で職員に汚職防止の訓示をし、筑豊の場合と同様に、所長から誓いの答辞があって、いわば儀式に終わったが、八女では人権集会の講師で五〇分間も人権について講演することになった。何故こういう時に私が講師なのかとは思いますが、仕掛けがあったのではないかと推察する。六〇〇人ぐらい来ていた。そのあと、地区県民の会の懇話会があったが、郡市からかなりの青年が来ており、矢部村の林業青年の発言が残った。水源の森基金とはいって自分達には何の恩恵もなく、あれは山林所有者の懐に入ってしまったのだとの反論には昨日の陛下へのご進講にとり立てて話題にしたあとだけに驚きを禁じえなかった。水源の森基金の流れをつぶさに追ってみることさえ必要であるようだ。私が柳川土木級かという、矢部の青年はマルコスみたいですよと切り返してきたのが印象的であった。大川は共産党系の組合ということだが建設労組の組合まつりに呼ばれ、私が激励された。こうしてみると南筑後にはかなりな支持ムードがあることが感じとれる。この三年半、筑後にはよく足を運んだものだ。

12月7日(日)

健康の自覚

日曜日の休みとはいえ、出馬要請のための高教組グループの来訪がつづいた。又夕方は福

岡市長選挙の投票に行った。それでも机辺整理に時間をさくことができ、いい休みだったといえる。近頃健康状態についての自覚の程だが、まずは上々といえる。一時両手指の関節がどこも痛みをもっていたが、今は左中指と右小指ぐらいなもの。それもぐっと痛みが小さい。いけないのが左上小臼歯、これは全くがたがたに動き空洞化していて、いつポロリといくか知れない。その他の歯も、全部が全部不健全といわなければならぬほど、根がしっかりせず、ゆすると動く。つまり全体があといつまでつづくかわからない状態である。通便は一時悪かったが、今はまずまず、順調な方だろう。足の水虫状況はこの頃完治している。気になるのが下半身あちこちの痒みである。何とはなく、どこも痒みが、常にある。医者に見せるまでもないと思いき問題にしていらない。心配なのは睡眠。安定剤は済生会内科でもらって指示された一錠でなく、毎夜半錠づつ常用して床に就く。それよりもっと問題なのは就寝後、三～四時間して毎夜必ず小便のため目が覚めて起きることだ。やっぱり年は争えないらしい。

12月8日（月）

福岡子ども劇場の役員たちとの対話の中から

朝のうち福岡子ども劇場の幹部たち七〇人との対話のつどいがあった。場所は西福岡合同庁舎二階の会議場。非行の時代への親たちの対応とっていいだろう。主観的には子どもの自主性を伸ばすとか、文化的感覚を身につけるとか、いろいろ自覚ある人が参加する動機には違いがあり、大義名分が違っていい。が以前の「家族」、「地域」が崩壊している現在、子ども劇場のような運動が、新段階の環境を作ろうとしているのだと客観的にいえると思うのである。子どもの環境としての「家庭」も「地域」も「学校」も大人が勝手に変形させてしまっている。親のための家庭、子供のことを考えない地域、学校になってしまっている。かくてはならじということをやっているのが子ども劇場であろう。私の場合、思いかえしてみると、家庭はともかく、地域や学校は子どもを育てるのによい環境にあったと思う。餓鬼大将や村の青年たちが自然に、今の子ども劇場のやろうとしていることをやってくれていたように思う。家庭にはよしあしは別としてスキンシップがあった。文化性には程遠かっただろうが、村の先輩達がよく遊びを教えてくれた。正月、節句、とんど、盆、夏祭り、秋祭りなどがとりわけそうした場を与えてくれたと思う。

12月9日（火）

日本の経済侵略に心配がつってくる

昨日は太平洋戦争がはじまった真珠湾攻撃の日であることを忘れていたが、何かの新聞でちらっとみて思い出した。真珠湾を忘れるなというのがアメリカの合言葉となったわけだが、アメリカもスキを見せたと考えられるふしがあるらしい。いずれにせよ、時代は四〇年以上も降って、今は様変わりである。日本は今第二の経済大国になったが、再び「侵略」

のまっさい中であるといえよう。武力によるのではないが、経済面での「侵略」で、ドルをかせぎ、円高不況の直撃の返礼として外国への資本の輸出、海外への企業立地が盛んで、国内経済の空洞化は敢えて辞さないということになっている。近頃は資料を見るのがないので、実態は詳細につかみえてないが、海外への企業進出はすさまじいといわれる。これで、現地で大事件が起きた時にどうなるのだろうか心配する。まさか出兵とはならないだろうが、国内に深刻な影響となつてはねかえってくるに違いない。保守政党の支配が永くつづきすぎ、資本の力が巨大になりすぎている。そして国内の行政水準が、教育を例にとればわかるように、福祉領域も同じだが、他国に比べ低いままに推移している。農民もこれからが大変だ減反で。

12月10日(水)

十二月議会代表質問終る

昨日今日、県議会の代表質問があった。質問者はみんな次期統一地方選挙を意識している。とくに知事質問では私の再出馬に攻めの質問をあげている。昨日の自民の中村明彦、今日の公明の北原守がそうだ。汚職続発だ、公約は少しも守っていない、県勢は衰退するにまかせている、リーダーシップがない、先見の明がない等々、いいたい放題である。あんまりひとの悪口をいうもんじゃないと思うが、質問する者の立場に立てば、悪口もやむをえないし、控え目というわけにはいかないであろう。私からみれば、品が落ちるとしかいいようがないが、自分が一枚上と思っているのだと思うとあわれにすら感じられる。私もほんとうは負けてはいないし、譲るつもりもないので、この種の非難は堂々と受けて立ち、自分の業績なり考えを堂々と相手に投げ返して答えてみたつもりである。あと三日、一般質問がつづくが、一般質問では代表質問以上に悪態をつく者が出てくるであろう。それは今から覚悟している。どっちに転んでも大したことになるまいから頑張るしかない。公明党は田中支持にまわったことを気にしている様子だ。北原の質問が間接的に物語っている。

12月11日(木)

吉永允俊のウソと罵言演説

今日一般質問の第一日目。いろいろあった中で公明党の吉永允俊の質問は全く以て頭にくるものであった。昨日の同じ公明の北原の質問をむしかえしたまではまだしも、それに上塗りして、ウソまでいってそのウソの上に私に対する罵言を積み上げた。十一月四日の記者会見をとりあげ私が汚職発生に怒りをおぼえるとのみ言って、県民には陳謝しなかった、その陳謝しなかったことにこそ怒りをおぼえると吉永はいう。そして、陳謝せず怒りのみを覚えるのは汚職をひとつのようみにて、自分の責任を感じない証拠だ、その知事の姿勢こそ問題ではないかと吉永はいう。私は本会議冒頭にも県民におわびするといったが、

この場でも重ねておわびするといいい、降壇した。すぐうしろの席の富永が、県民におわびする知事コメントになっている（十一月四日の分）と指摘して私に吉永の誤りを指摘してくれた。あとで広報の長崎にマスコミ方面に吉永のウソつきを知らせておいてくれとたのんだら長崎は当時の新聞スクラップをもってきてくれ、新聞には「知事県民におわび」との見出しまでつけて記者会見の記事のあることを知らせてくれた。吉永はウソをとうとうと並べその上に罵言を積み上げたわけ。こんな下等な県議が数の多数をたのんで横行している。

12月12日（金）

自民党審議ストップをかけてみた

公明党はさすがに議事のかきまぜはできない立場にあるが、今日、自民の橋詰和元がその役を買って出た。午後の一般質問の二人目（予定は新宮松比古だったが、役者交代をしてまで）、あと二人の予定を消化しないまま審議はストップ自然散会になってしまったのである。橋詰はいつものように、半分は罵倒するような質問、半分はみずから混乱したような質問をし、最後は昨、一昨日公明の吉永、北原と同じ「自公民の自分の利益追求」という私の発言にくいさがつて、いくら答弁をくりかえしても、放さぬという態度に出て、シナリオを知っていた篠田議長が休憩を宣し、ストップになった次第であった。十一時すぎ一般質問二日目の始まる直前林県議が、このシナリオのあることを私に告げてくれた。自民党はむしろ新宮松比古の質問で知事に汚職責任追及をし、その時に審議ストップにもって行こうと計画したらしいが、新宮がしぶったためか汚職問題ではストップにならないとみたためか、役者が橋詰に、材料が「利益追求」問題にとすり代えられたわけである。田中健蔵事務所への賜をせねばと思ったのであろう。ひょっとすると篠田栄太郎の稚策なのかも知れない。

12月13日（土）

知事選準備が動き出している

もう周囲は選挙準備一色だ。県民の会も前回の事務所があった駅裏の八仙閣のもう少し向うに、数日前から事務所の準備に入り、藤江君も正式に手伝いに出勤している。事務所開きは二十七日ということだ。今日は前回NHKにつづき、読売新聞社が私の写真撮影、フクニチが三〇分間三年半を顧みでの取材に来た。共産党の候補が数人、新年用ということで私と一しょの写真をとっていった。それから、県民の会が那の津荘を使って私の揮毫しているポーズを撮影するという要請にこたえた。二時間ほどかかっただろうか。私に和服、袴、白足袋をつけさせ、太筆で「県民とともに」と書くところを撮影したわけ。その他のポーズも加えると何枚とったか知れない。それらすべて笑顔を作ってみせるのだから、汗が出る。もうすでに同様な求めに応じてきたのだが、今日のが一番大変だった。夜帰って

からいろいろ考えたのだが、自分よりも、ひと様がすでにかなり動きはじめていて、後にひけない状況に進んでしまっている。綱干の和代に電話して、年明けに頃を見て手伝いに来てくれるようたのんだ。みゆきが表面に立てないので場合によれば代理もしてもらわねばなるまい。役に立つならということで内諾してくれた。

12月14日(日)

演説のこと

社会党の土井たか子新委員長が小倉に来て、厚生年金会館での、松本洋一候補をはげます北九州女性の集いで演説し、このあと私も松本氏につづいて二六〇〇人の会衆の前であいさつした。土井新委員長になって以来、世論調査では社会党の支持率が四ポイントほど上昇したといわれているが、土井さんの今日の演説は委員長の風格を備えて来たと思う。声に張りがある。私もそれに影響されてか、今日はかなり大きな声でめりはりをつけて話したわけだが、政治家というものは少しぐらいはったりがあっても、大きな声でめりはりをつけてしっかりしているとの印象を聴衆に与えるようにしなければならないものだ。それに、聴衆をちゃんと意識して、聴衆をもち上げるような内容を心得ていなくてはなるまい。経験話や具体例をあげる必要もあるし、ユーモアが挿入されると更によい。ユーモアは取ってつけたようなものでなくとも、その場でうまく思い付くものであればよい。先日のアメリカ大統領候補をしたことのある JL ジャクソン氏のスピーチなど、実にユーモアを心得たものだった(黒人差別反対の闘士)。今日の土井さんは私により教訓を残してくれたと思っている。

12月15日(月)

無理がまかり通る

ストップしていた一般質問が午後四時すぎ、私の発言取消しということで、やっと動きだし、残りのうち五人が質問をおりたので、六時前に本会議は一般質問を予定どおり今日終了することになった。そのかわり、記者会見での発言を議会で取消すとはどういうことかということで記者たちが怒り出した。尤もなことである。筋違いをやれという自民党は、これで自分達だけ悪者にならず、知事に議場で恥をかかせ、議場の外では記者団に面子が立たないようにしようとするたくらんだわけである。果たして戦術どおりの効果がでるかどうかは知らないが、見えすいた芝居だということもできるだろう。私が不本意ながらそうしたということを新聞に書かれると、次の議場で、不本意であるのに虚偽の発言をしたということなのかと、後に突込まれるので、不本意であったというなということでも事務側が心配することしきりであった。何回でも陳謝とか発言取消しをするので、いや気をもつ議員もいる。これまた当然だが、政治が力で事を進めようとする限り、無理が通って道理が引込むということになるわけだ。このようなことに、私も馴れっことになった感があり、別に

苦しめないが、よくないことではある。

12月16日（火）

水の心配

東京ゆき。各省陳情の中で、水資源のことがあった。福岡導水の貯留池中津大堰、赤石川ダム、五カ山ダムがそれである。福岡導水では筑後川からの導水のうちから余ったものを平素から貯えておく調整池を筑紫野市に建設しようというもの。五カ山ダムはこれも福岡都市圏のための渇水対策ダムで那珂川町と佐賀県の境に建設し、平素は使わず貯えておこうというもの。現在中部地方、近畿地方は水不足が深刻化し、建設省にはそのための渇水対策本部ができていた。きくところによると、姫路地方も渇水状況らしく、飾磨の発電所では水がなくて発電できなくなっているともいわれる。十二月五日に宮中で天皇陛下に地方事情を説明したとき、福岡県は水事情という適切なテーマを選んでよかったと多くの人がいっている。近頃は何故か、地球全体に異変がおき、洪水や渇水が局部的におこっているといわれる。万一にそなえる必要のあることを水資源公団では力説していた。人間が自分の環境は自分で守るという知恵はもっているのだから、常軌を逸しないように力めるべきであろう。今日の水資源に関する陳情はそれなりの意義はあったと思っている。

12月17日（水）

パヨン氏の招聘

済生会の井上常務が来訪し、先日三光園の懇親会時に私が土屋呂武院長に話していたパヨン・シュティクル前駐日タイ国大使に対する知事招聘状については、早目に実行に移してくれと頼んで来た。土屋氏は夫妻の旅費ぐらいは自分の方でもつから、というのである。私は早速佐々木君に検討するように伝え、佐々木君は国際交流課に連絡したらしい。この件は以前、中楯か誰かから、私に、パヨンの招聘希望があるということが伝えられ、私の頭の中に長らく眠っていて、先日の済生会と県との役員の懇親会の際、私が土屋氏にポロリと言ったのであった。パヨンは学生の時土屋氏の父の世話でそこに（東中洲の土屋外科）に寄宿しており、私もパヨン氏の学友ということで二度ほど、二階にあった彼の部屋を訪ねたことがあったわけである。その頃呂武さんはどこにいたのかよく知らない。又なぜパヨン氏が土屋宅に寄宿するようになったのかも、呂武さんは説明していたが、私は聞き落してしまっている。いずれにせよ、パヨン氏の来日が実現するとよい。佐々木君は二月の議会のあいまをぬってできないだろうかといっていた。この話は国際交流課の方で詰めて、まずは招聘状を発送して先方からの返事を待つことから始めねばならない。

12月18日（木）

知事の自己処分をめぐって（一）

昨夜中に副知事らが電話で議長らに根まわししていた知事の自己処分の件が西日本の朝刊にもう出ていたのと、十二時に記者会見して広報したことにつき午後の土木常任委員会の知事保留質問は少々荒れた。知事保留でぎゅうぎゅういわせてやろうとしていたのに先手を打たれた形になってしまったので野党の諸君の虫がおさまらないというわけだ。水戸、牛島、北原の三人、それに委員長の三木がそれである。横田進太も西原も、われわれには電話連絡もなかったとふんまんをぶっつけた。知事はカッコいいことをした、そして自分達の質問の矢をかわしたというので、他の側面から、連絡の仕方が悪いだの、まだ全貌のわかってない段階での自己処分だがもっと判明すればどう処理するのかその他等々、いやがらせ質問に終始した。攻め手を失ったので荒れ狂ったとあってよかった。私はこうしたやり取りで長時間「被告席」に坐らされたが、別段心理的苦痛はなかった。周りはいんどかっただろうというが、それが無いのが何よりであった。自分が悪いことをしてないという気持が心のどこかにあるから、やり方が悪いといわれても、それが苦になることはないわけだ。しかし委員会の諸君も年末多忙で長時間かけてやる気もなかったようだ。

12月19日(金)

知事の自己処分をめぐって(二)

今日の県議会は午後の総務常任委の知事保留に出席するだけであった。これは予想どおり昨日の土木常任委と同じく、保留質問をかわして知事の自己処分を早めに発表したのは何故かという点に質問は集中した。主たる質問者は中島茂嗣だった。井本氏が委員長で、この組み合わせで質問もおだやかに終始した。昨日はトゲトゲしかった。藤田が副委員長で、彼の質問では処分発表に政治的意図が感じられるというのだ。二十二日に合同審査会があるのに、それまで待たずに方針を出したのは常任委での質問封じではないかということもあり、全体として昨日同様、先を越されたうっぷんが集中したというしかない質問であった。もちろん質問して何か解決するとか前進するというものではない。問いただしてみるだけだし、うっぷん晴らしでしかない。過ぐる代表質問、一般質問では、知事は自己処分をどう考えているのかと二、三の者が出したし、知事保留でもそこに焦点をあて、今会期の山場を作ろうとしていたことは確かだった。だから、こちらから知事の自己処分を申出ようとして条例提出を考え発表したのだ。筋はこちらも通している。山場など考えないですなおに受けたらどうだといいたいのである。

12月20日(土)

『ニュー福岡元年』発刊

出版社「ぎょうせい」が約束どおり今日「ニュー福岡元年」を仕上げてもってきてくれた。休んでいる拙宅へ秘書室から早速一冊届けてくれた。小冊子ながらやっとの思いである。八丁君、安達君が主として手伝ってくれたわけである。七月一ぱい休んでしまったので、

約束していたのに、もう書かないととばかり思っていたのに、と八丁君はいった。八月末のことである。私は皆さんに約束していたので是非書きたいと思って八月と九月にできるだけ筆を運んだ。二人は手伝う気持になってくれた。はじめ前回同様第一書林にたのむつもりでいたらしいが、「ぎょうせい」の方が割安にしてくれるらしいということで、八丁君は第一書林をあきらめたのである。九月の十六日に原稿を渡してやっぱり三カ月はかかった。この頃は印刷の技術も発達しているからもっと早くできるはずと思うのに、そうはいかないらしい。三〇〇〇部しか頼むまい、商業ペースならそのくらいだろうといっていたのだが、第一刷は四〇〇〇にしたらしい。六〇〇〇はいけるのではないかという声もある。私はこのことに口をはさまないでおこうと思っている。出版記念パーティもひとにまかせるしかない。

12月21日（日）

二つの反省

午後二時から黒田荘で県政懇話会に出席した。八丁君が、用意したメモに従って、次期知事選での県民の会サイドの公約の大筋を説明、種々討議した。討議が進むなかで、「二つの誓い八つの約束」に代わる「二つの反省、八つの決意」なる言葉がとび出し、こんどはこれでいこうということになった。八つの決意は八丁君のメモの項目だが、二つの反省はこの討議の中から出てきたもので、その第一は新しい都市農村づくりと相互交流、第二は県行政の効果点検というのがその内容であった。これまでの農政や地域おこしに反省を加え、二十一世紀の社会的文化的生活様式の創造を提唱し、県がそれに必要な行政上の仲介促進者になろうというのがその第一。又、県行政の流れ、予算の流れをもっと点検し見直すシステム作り、行政の自戒の態度を明らかにするというのがその第二である。その中では水源の森基金その他各種の補助金の効用が見直され、汚職も予防できようというのである。「反省」というキャッチフレーズは謙虚さを表わすので、こうしたことを主張した選挙は以前のどの地方にもなかったことであり新鮮味があるというのである。来年の一月五日に集ってこれらを更に具体的に討議しようということになった。

12月22日（月）

日本の米作の再検討のときが来た

水田農業確立対策というのが今政府が打出しているポスト三期の柱である。外国からの圧力が強まる環境の中で米作の減反政策はさらに前進させねばならぬということで減反強化の割当てが農業団体におろされてきている。農業団体もやむなしとの空気はもっているものの、それと引きかえに、農業予算の増額を強く要望していて、今日農協五団体役員が、要請書をもって来庁した。日本の米価はアメリカの十倍もするという。くわしくは知らないが、大変な価格差になっているらしい。円高が一そう問題を深刻化したのである。農業団

体も、いつまでも自己主張を通すわけにはいかないことを知って、この米の問題に対応するには、生産性の引上げを主軸に、転作の推進など、自力で立向わねばならぬ段階に来たというようになっている。が、さてそれをどうやって実際化するかという点になると、途方にくれるというのが実態だろう。先日の学者グループの県政懇談会の際、大屋君が、兼業とか専業とかいう言葉にこだわらないで、日本の農村生活のあり方そのものを再検討する時に来ているといったのが改めて思い出される。

12月23日（火）

自民党の自己苦悶

会期予定の最終日になって、今回もとうとう徹夜議会になった。そうならないと納められないというのが自民党のメンツのようだ。全く政争の具としての議会運営が多数党の横車でまかり通っているということだ。今回は、汚職に対する知事の自己処分の提案が一方的だとか、遅すぎるとか、どの部分に対する処分なのか（まだ出て来たら処分を追加するのか）とか、そしてそれを知事追及していく場をどう設定するかをめぐる県議会の自己苦悶、それが徹夜審議という空転状況を生むのである。多数でありながら野党であり、野党は攻めねばならぬとの使命感がありありと見える。今回はとうとう全員特別委員会で知事質問するという異例の手段を選ぶことになったが、「知事追及」も新聞にも書けないような屁理屈を並べ立てることになってしまう。お粗末というしかないし、その役者になる者も、人生の中でつじつまの合わせぬことをし、ほんとうに納得できそうにない経歴を積むことになるのだが、私からみると哀れというしかないと思う。もう少し人間らしい反省ができないものだろうか。

12月24日（水）

運用昇短ストップのあと始末

十月分の運用昇短がストップして以来、今年一ぱいで何らかの解決策を見出すとの方向で地公労が副知事レベルで話合っていたのに、両者の歩み寄りがつかず、一月分についても目途がたたないまま、越年しそうだという。このままでは知事不信につながり、大事なときに、組合が動かない状況になってきたので、知事が何か解決策をサジェストすべきではなかろうか、と県議の白石巍氏から私への文章申入れが手渡された。当局側は昇短するには特昇、特昇には試験をという方針を示しており、組合側は試験は絶対反対というので折合いがつかないのだという情報は少し前にきいたことはあるが、その後年内の詰めについて話はどう進んだのであろうか。職員長の話でも組合とくに教育両組が勤評につながる不適格条項に強い抵抗があるという。それでいて、福岡県職員の賃金が全国的にラスパイレス指数でみても四〇位を下まわるので何とかせよとの要望が強烈にあって、昇短ストップをもとにかえせと主張している。長谷川喜博の監査請求に対し、一月上旬には答を出すし

かないというのが監査委側の立場である。正常化信頼感こそが望ましい。

12月25日（木）

整備新幹線問題にどう回答が出るか

一時半から赤坂プリンスホテルで整備新幹線の総決起大会があった。自民党の選挙公約でもあるので後にひけないのに、今の政府予算編成の中では見送られていて、トップの最終判断にまつしかないらしい。それがわかるのが三十日である。大蔵は採算を理由に反対の立場。要望県や自民党の大筋は「政治」であって採算ではないといい、大会参加者もおおよそその気分で盛り上っている。九州新幹線は鹿児島ルート長崎ルートの関係五県が詰めかけた。青森、北海道、それに北陸新幹線沿線各県で、五階のロイヤルホールは超満員であった。採算を度外視しても新幹線によって沿線の各県の経済浮揚がはかれるというのが共通の認識である。青森や北陸についてはたしかにそれがいえそうだが、北海道や九州については、私は疑問が残る。建設費の負担は莫大だろうが、それを使ってどこへ行こうというのであろうか。在来線がよけい圧迫されるだけではないだろうか。大蔵が反対している理由の方が通りやすいと思う。最終的にどうなるか。自民党の圧力に中曽根首相が屈するかどうか。どの線から着手することになるか。今後数日にかかっている。

12月26日（金）

斎藤武幸さんの話

朝八時半すぎ、東京福岡県人会の会長、斎藤武幸さんが私を訪ねてきて東京事務所の応接室で会った。昨日東京事務所長が彼の事務所に行って私の本を寄贈してくれたことへの見返りであろう。が、斎藤氏は田中健蔵氏のことを話題にした。【133字略】もちろんうわさばなしで同じようなのが二、三あるといわれている。こんな話はもちろん表に出る話ではないが、千里をゆくように噂はとびまわる。ある場合には尾ひれまでつく。斎藤氏は同じ話を伊藤所長にもしているらしい。ひろげてはならぬといいながらひろがっていく。政治の世界に出てこないなら、この程度の話はひろがらないのではないかと思う。恐ろしい世界だ。

12月27日（土）

出馬表明の会 社一小野明 共一堀井

午後一時ごろ福岡空港に着き、県庁で部長たちに御用納めの言葉をのべ、「ニュー福岡元年」をプレゼントした。二時から国際センターで、県民の会主催の集いがあり、私の次期知事選出馬表明の要請と決意表明の儀式が行われた。県民の会幹事が十人壇上に上って左右に演席をはさむように坐った。顧問具島先生、代表幹事内田一郎氏ほか学者文化人社共両党委員長（内田茂雄、土井仙吉、高木董子、牛島春子、西井龍生、石村善治ら）で、六人の

県民代表が出馬要請スピーチ、壇上の幹事らと私が確認書のサイン交換ののち、私が決意表明スピーチをするという順序。私は入退場いずれも石川君の先導で八千人の人達にエールを送られ、握手をできるだけしながら、会場中央を歩いていった。話す言葉の中ではできるだけ感動、感謝、決意を率直に表明するフィーリング豊かな、エモーションを大切にした言葉を選び、声も平素より大き目に、歯切れよくすべく努力した。あとで、話がうまくなったとほめてくれる人もいた。岩崎隆次郎氏が県民の会の政策をかんとんに紹介した。その中で「みゆき夫人」がこの場にきている、彼女の分も皆さんで働いてくれといってくれた。

12月28日（日）

若者の気持はわからない

ゆうべ東京は雪だった。ひる頃羽田に着いたら車の上に三センチ雪をのせているのが目立った。空気は冷たく、夕方一彦のうちにいくのにコートをもって来ておればよかったのと思った。一彦夫妻と麗衣の三人で追浜まで迎えに来てくれ、車ではじめてのことであった。一彦が運転したのもはじめてみた。二人の孫はそれぞれ大きくなっているし、通知表を見せてもらったが、成績はいい。これなら満足できる。部活動その他も積極的のようだし、子育てはうまくいっているといえそうだ。久美が中学校一年、レイが小学校五年生である。直美はハワイに行くといっていた。みゆきが旅費を出してやっているらしい。これら若い者のものの考え方、行動様式は私にはさっぱりわからない。いい世の中に生まれたものだと思ったものだが、よすぎるのか、のびたウドンのように思えてならない。自分で世帯をもつようになるならしまりも出るだろう、人を思う心も出るだろう、とは思もの、今は勝手そのもの。電話してみたが直美はいなかった。美可にきいてみると、久美やレイにも直美と似たところがあるという。直美が久美をどう思っているか知らない。年齢が違うほどにみんなバラバラなのだ。

12月29日（月）

北京ゆきにケチをつけようとしている

来年一月七日から三日間北京に、福岡からの定期便が開通する御礼のため出張する話になっていて、私のほか県議会の日中議連の各党四人が同行する内容になっていたのだが、篠田栄太郎が議長としてこれは認めるわけにはいかないといっていると。議員は私費に変更せざるをえないのではなかろうか——森山の話である。篠田は根っからの中国嫌いで快く思わぬことはわかるが、議員の出張を職権で拒否したとなると、この件は将来に禍根を残すことになるだろう。出張予定者の中から遠慮する人が出るかも知れないし、出張する人に私費分をカンパする問題も生じ、二月議会で知事出張の要否について、つついてくるとの予想も生ずる。この最後の予想がいわば一番いやらしい問題になるかも知れない。ただ、当

方にも言い分はあるのでマスコミがどれほどさわぐかである。どうさわぐかである。篠田の肩をもつRKBがどう問題を提起するかでもある。今それを予断できないが、小西平太郎、岩崎隆次郎などこの出張を仕組んだ側に一半の責任があるといえるかも知れない。

12月30日（火）

多川博さん、石橋幹一郎さんの人間的蓄積

今年が多忙であったし、来年四月の選挙のこともあって、年末のあいさつまわりは今日かんたん化したものとどめた。創価学会の吉橋・北風、商工会議所の多川、それに特養老人ホームの松尾、折尾の住吉それだけ。大塚氏は上京したままだし、あと若干は林出納長と中村秘書室長がまわってくれたらしい。私がまわった分で本人在宅は多川さんだけであった。去年は茶室を建設中といていたが、今年は出来上ったのを見せてもらった。やっぱり京都からも資材をとりよせたらしい。立派な本式のもので、客を呼ばないと遊ばせることになって、勿体ないと思う。表ですといていた。大徳寺の住職の揮毫も額にしてあった。われわれとても及びもつかない生活環境である。オシメというかんたんな商品に技術が一流で、世界に雄飛する企業を指導した卓見に敬意を表するわけだが、財を積み、茶室を作るには、そこまでに至る人間的蓄積も必要である。先日上京のとき石橋幹一郎氏を訪ねたが、絵の話をどんどん出してわれわれは感心して聞いたものだ。

12月31日（水）

展望は明るくない

色紙書きで一日が暮れた。扁額の揮毫をすべきだったが今日は気乗りがしなかった。正月を迎えるのに掃除は必要だがおおよそは終わっているようなので、特別私の分野はなかった。書斎の整理はいくらでも残っているのだが、今日はそれもする気にはならなかった。新聞では来年度予算ではじめて防衛費がGNPの1%を突破することになった点を取りあげて問題にしている。永い間の1%枠が遂に突破されたのだ。中曾根内閣の一特徴をあらわしている。アメリカの要請に甘いというに尽きる。福祉、教育など強いニーズがあるのに、それには冷淡である。財界には資本があり余って行き場がない。「増税なき財政再建」という土光流臨調が今なお買かれ大衆的負担（売上税の導入）は増すばかりである。この調子では近い将来何か大きなことが起こりそうに思えてならない。日本農業の将来もますますけわしくなっている。今年がドン詰りでなければいいが……。

年末所感

今年も昨年につづいて、出版を果たすことができた。選挙の制約もあって12月中にしなないといけないといわれ、12月20日に出来上った本を見るまでひやひやのものであった。ニュー福岡元年という書名にしたが、本の実物を見た目にはニューが小さいので、「福岡元年」の

形容のように見える。「ニュー福岡」と読めるように仕組んでほしかった。ともあれ、前回出版後1年半を経過した。毎年1冊となるとやはり無理がある。とくに今年は県道路公社汚職で近藤副知事辞任劇が起こり、七月には帯状疱疹で1ヵ月入院するという異常があったため、執筆計画が大幅に狂い、断念せざるをえないかと一時思ったことがある。しかし退院後、やっぱり出版すべきだと決意した。そのことについて私が発言すると、手伝う位置にいた八丁君が断念したものと思いでいたのにといったものだ。ともかく出版に努力した秋の日々だったのである。私は、知事たるもの、すべからず出版して自己の胸中を県民に、活字の形で報告すべきだと思う。新聞に書かれ、談話を発表し、随想を時に書く。しかしこれらはすべて断片にすぎず、客観性に欠けるところがある。著書ならば、全貌がつかむことができる。そういう意味で県民への報告書である。このことを改めて年末の思いとして記録しておく。

補遺

一月十六日。夕食はふくおか会館に直美を呼んで共にした。正月に帰省した時フグ料理を食べさせてもらおうと思っていたのにマージャンばかりしていて、というから、この夕食にはフグ刺しを別注して食わせた。私の手をみてシミができてるねというから、両手とも甲部分にできている、年を示すのだといっておいた。でも年の割には元気そうじゃないのという。糖尿についてもきかれたので、コントロールでとくに自覚する症状はないとっておいた。多忙なのがいい薬と彼女はいう。大学にいたら、近頃はひまをもて余すのではなかろうかという。——そのような会話——

一月二十二日。地方行政連絡会議とか対話行政ということで、この数日は全くめまぐるしい地方まわりだが、県の基本姿勢を説明するチャンスがあり、またあとで一ぱいということで雑談を交わすことができ、それがなくてはできなかった出先機関の職員や住民との交流が可能になり、感触としては、信頼関係が深まっていると思われる。やる方としてはかなりハードなスケジュールなので、いい加減にしておいてくれといたいのだが、「革新」知事への先入観が払拭できるだけでもいいと思う。第三期革新といった意味が裏付けされていきつつある。

一月二十八日。今年になって特に、地方まわりが多く、選挙時の支持母体であった団体の人達に会うチャンスが、種々工夫して作られるようになったが、県民のこの種の人達は機会到来というような気持できわめて熱心に歓迎してくれる。自分たちが作った知事なんだといわんばかりに歓迎してくれる。これまでそうでなかった分野の県民に合うように努めていたこともあって、この分野の人達は、いわば待望していたのであろう。京築地方の人達はとくに表情にそれをよくあらわすと思える。地区労の人々によくお世話になったものだ。

四月一七日。東京に来ていて福岡のニュースをきかされるのは気分のいいものではないの

に、県庁から電話がかかってくる。道路公社の汚職で逮捕されるのが拡がっており、今日は古賀という総務担当課長にひろがったようだ。天神中央公園地下駐車場の起工式の経費を受注者側に支払わせ、その上サヤかせぎをしたのだ。五〇万円。どうしてそういうことをせねばならぬのか、気持がわからない。それを、また知事が出てマスコミの諸君にどうして弁解することを急ぐために、日程をくり上げて帰福せねばならぬのか理解に苦しむ。

七月十九日。上の文書以来三ヵ月。とうとう近藤副知事は昨日辞任届受理となった。新聞テレビは、奥田の腹心、又は右手がもぎ取られ大痛手。次は本人への直接攻撃必至と報道している。自民県議幹事長浜中は、不信任案までいこうと、テレビでいっていた。彼等は知事の道義的政治的責任をとうとういっているが、私には何のことかわからない。三つある。一つは古賀の自殺だが、あれは一ヵ月前の臨時県議会が、百条委を作る目的で招集され（十六日）たので、それを苦にして自殺したと彼の兄が私にいった。だったら殺したのは議会招集の要請をした自民党野党だろう。第二に、腹心の部下近藤が辞任した責任というが、それは私が最後まで慰留につとめたことでわかるように、これ又議会野党の「解任要求決議」（十七日）であって、野党に責任がありこそすれ私の責任ではない。第三の宮内送検だが、この収賄はどうも事実らしいので、責任云々といわれても筋はあろう。しかし監督責任の問題であって、それを取って道義的責任とか政治的責任というには、もっとくわしい比較論がなされねばならない。過去の類似ケースについてよくしらべてみたいが、これは野党が今日いうようなものでなく、行政側が自らできるはずのものである。「知事責任」ということを軽々しくいいたがる野党、何でもそれらしいにおいがするとピクッと反応する野党の心のいやしさが、気にさわってならない。八月下旬あたりに、又も臨時議会招集を要求して、知事の「道義的政治的責任」を追及し、答弁のいかんでは辞任要求決議又は不信任案も辞さない、浜中その他もいっているが、当方は快くそうした決議を受けたいと思う。これ以上退却する考えは少しもない。答弁はやんわり言うが、中味は一步も引かぬつもりである。マスコミのいう「暑い夏」が展開しそうだ。

十二月三十一日

今年の出版では前の具島岩元両氏へのお願いと一味ちがった味を出したいと思い、念頭に浮んだのが多川さん、三井さんの二人だったが、多川さんは商工会議所の副会頭だから三井さんよりも立場が困難だろうということで遠慮して三井さんということにした次第である。中村室長あたりに直接行ってもらったが、三井さんへのルートは県評の坂本隆幸、全金の田中委員長のルートでOKをとってもらった。広報室の安達君がその仕事を進めてくれたのである。原案は樺島課長が書いてそれにサインをもらったということになる。ともあれこの発想はよかったし成功した。今回の出版をよりユニークなものにしたといえる。技術立県を唱導し、それを国際化の推進とともに「ニュー福岡」の土台にしたのだから、三井ハイテックの名を借りることができたということは誠にラッキーであった。今後、県政がこの線で進めうるかどうか、これからがむしろ正念場であって言うだけでは何にもな

らんぞという不安が残ることを、今、どうすることもできない。

【「ソバあれこれ」（福岡そば組合『そばの花』第5号、昭和61年6月号）のコピー貼付】